大正四年二月廿五日印刷
大正四年二月廿八日發行

有朋堂文庫（非賣品）
八笑人・和合人・七偏人

不許複製

編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理
印刷者　東京市本所區番場町四番地　平井登
印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社分工場
發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店

（岡山製本）

ホン實に恐れ入山感ぷく茶釜かネ。親孝行とは有がてへ、陰德きめう。小生は七大人の外ではげすが、ネヘモシ源兵衛の大人、御同前に是迄御突合もしてゐるもんでげすから、親孝行の仲間入を仕やうぢやァ御座へせんか」源「左樣〳〵家主かう〳〵のなァ」喜次「何にしても斯う氣が揃ふとは嬉しい事だ。年忘なり遊固なりに、目出度一盃遣らかしやせう」と、酒肴を多く取寄せ、喜次郎、茶目吉、虚呂松、下太郎、跂助、野良七、飛八の外に源兵衛、大愚をまじへ、その日は此處に飲暮し、夜更けて各〻歸りけるが、其翌日より今までの懶墮ものとは打つてかはり、朝はとく起き夜はおそく寐、家業を身にしみ親に孝、友に誠を盡しければ、德孤ならずの教に差はず、源兵衛大愚も是にかぶれ、陰德あれば陽報に、榮久しき妙竹林話、七偏人の人々は、目出度春をぞ迎へける。テン〳〵テン〳〵テレンコテン、イヤ御退屈で御座いッ。

妙竹林話七偏人終

萬一わるい虫でも出やうかとの、案じがかうじてお宿をする、地藏菩薩の百萬遍、鬼子母神様のお草履取、七ッ八ッの頃からして、手習讀物十露盤の、稽古に行けと追出しても、表へ出るといたづらや、喧嘩の後に氣を揉せ、著物や帶のかぎ裂が、止んだと思ふと稽古所這入、何程張つても相談の、つかぬ地色をもどかしがり、一寸と一度が病附で、船ぢや浮雲ない、ホイ駕籠の、四本の足でお女郎買」飛「エヽもう止して呉んねへ。親父の臍をゑぐり取つたり、慈母の臑をかじり欠いた事まで言はれると、哀しく成つてこてへられねへ。僉は兩親があるから、孝行をしやうといふけれど、自己ア喜次さんの言ふ通り、慈母や親父の世話に成つたのは、江戸中一ぱいでも過かねへから、その恩をけへしてへと思つても、慈母や親父も死、死んでしまつて、親といふものは一、一人もないから、他のものが浦山しくつて、こゝ耐へられねへ。自己一人なゝな何の因果で、親に親に、おゝゝゝヲヽイヲイ〳〵ヲヽイヲイ」喜次「是ささう泣かずとて宜いぢやアねへか」飛「かゝゝゝ哀しくつて、親が戀しくつて親、親、ヲヽイヲイ〳〵ヲヽイヲイ〳〵」此時格子をぐわらり明け、ずつと入り來る家主源兵衛「コレ〳〵家主は此處に居る、泣くな〳〵、飛坊泣くな」と作卽の洒落に、喜次郎始め思はず笑ひを催す折から、「ヲホン」と門で咳ばらひ、大愚が續いて上り來り、「噺は表でみな聞いたも、紋切形の言語でけすが、御連中のおほしめし、ヲ

へたが、餘程うまく案じたネ、其仕法は、踵の皮を削りとつて曲物へ入れ、その中へ虱の太夫敦盛をおひこみ、上から切をかけ蓋をして、火鉢の引出へしまつて置くと、人肌ほどに溫まるから、踵の皮を餌食にして、冠せた切が衣類のかはり、女郎に嫌れた人が有つたら、いつ何時でもお出でなさい、虱の生洲は拙者新製ッ」豉「どんな陰德かと思やァ、ヘン呆れけへらァ」喜次「併しみんなが賴しい了簡に成つた。自己も氣の付きやうが遲いけれど、此節に成つてつく〴〵思ふに、人の親に成るほど割の惡いものはねへ。三歲四歲に成るまでは、取譯女親の丹精が大變で、子供が腹へ孕ると、から半病人に成つてしまひ、五月からは猶の事、夫も毒だて是も毒だて、甘いものは些も喰れず、珍しいものが有つても似るからといつて見もせず、荒く歩行くな手を伸すな、辷つて轉ぶと大變だの、心遣の其うちに、ひよつこり其處へ產出すと、橫にはなれず物は喰れず、椅子で眠つて湯のやうな粥で命をつなぎながら、もう徐々と赤子の世話、枕直の濟むのも待たず、負ひ抱へて臺所働、土用のうちの暑い日も、乳よ甘よで取付かれ、團扇遣も容易に出來ず、雪の降る夜の寒サにも、小便よ糞に起されて、溫まる間も泣立てられ、やつと騙して愛らしく成れば、胎毒疱瘡に疾む子供より、母親の世話がいやます大病人、我身の勞のいとひもなく、夜の目も寐ずに仕上げると、手の放されぬよち〳〵歩行、怪我をさせまい、若

押すからお前がだん〳〵摺出しねへ、左様すりやァ痛かァねへ。ゑんホイ新造だホイお尻がホイ」茶め「是さ痛へといつたら、ァ、いて、、、、」野ら「痛くつたつて何だつて、此處にやァ石が出ばつて居て、餘ぽど骨が折れる所だ、我慢をしねへ。ァ、ウ、ンもうちつとだ、ソレ〆た。ァゑんホイゑん坂ホイゑん」茶め「これ何様するのだ、手が折れてしまふは。ァ、いた、、、、此野郎ァ、いた、、、」野ら「チヨツそんなら堪忍して遣れか」茶め「堪忍して遣れかも押が強へ」野ら「押がつゑへから、車が坂を上つたのだァ」下太「坂を上つたらもう宜からう」野ら「どうして〳〵、夫から竈を荷いで遣つたが」茶め「否だ〳〵もう〳〵聞かねへ」野ら「ヘン悪魔下道め、人の陰徳のさまたげをして」下太「陰徳といやァ、自己も餘程の陰徳をしたぜ。然も今朝のことだが、背中がむづ〳〵痒いから、偖こそ奴ばらござんなれと、先物干へ飛出し、光り輝く朝日を身におひ、あか裸にて繻袢を見ると、隠元豆を見たやうな虱が背筋に五六疋、押潰してと思つたが、一ノ谷の合戰に、熊谷の次郎直實が、無官の太夫敦盛を組伏せたのとおんなしことで、忽地こゝろに哀を催し、平山の武者所も有らざれば、命をたすけ參らせんと」虚ろ「其様な事を言つてゐると長くつて往かねへわナ」下太「イヤサ命を助けて遣らうと思つたけれど、其儘おけば體で痒し、他所へうつせば人が困る、と言つて放飼にすれば直様往生、ハテ何様したらと臨

んだりと先掃除をし、水を上げて待つて居ると、知らねへ親父が出かけて來て、自己を横目できよろきよろ見ながら、お花を上て拜むから、ハテ間違つたかと思ふ途端に、後方のはうで屁の音がブイとするから、首を伸し隣の墓場をのぞいて見ると、祖母が掃除をして居るから、周章てて其處へ往きやしたが、何樣かんがへて見ても、手前の家の墓場なんぞは、覺えて居る方が善さゝうだョ」下太「夫でも宜い事をした。自己ァまだ墓場どころか、寺の名も知らねへから、家へ歸つて聞いて置かうョ」野ら「此方ァ皆と違つて、陰德の方から先へ押ぱじめたが、陰德といふものは滅法界と骨の折れるものだせ」喜次「フムウはてネ」野ら「聞きねへ、此間湯島へ用があつて、明神坂の下まで往くと、米を二十俵ばかり積んだ車をおし上て居る、ところがなか〳〵上らねへのョ。夫から爰らが陰德だと思つて、手傳つて押して遣つたが、かけ聲の美音なのにやァ車力も驚いたのサ。何故といふのに、車力てきは骨が折れるもんだから、只ウヽンウヽンといふ計りだが、此方はゑんホイゑんさかホイ其處高ホイ。イヤ噺ばかりぢやァ可笑しくねへ、ヲイ茶目さん、お前の手を横の方へ突張つて貸して吳んねへ」茶め「かうしてか」野ら「よし〳〵有がてへ。ヱ此茶目さんの手が車の横木だぜ」ト、茶め吉の二の腕と握拳をしつかり摑み、肱のところへ腰をあて、「ゑんホイゑんさ坂ホイ其處高ホイ」茶め「アヽ痛へ〳〵。コレ何をひどい事をすんだイ」野ら「自己が

クツ〳〵と笑ひ出し、自己が放つたんだと思ふもんだから、じろ〳〵面ばかり見やアがるのさ。何と耐へられめへぢやアねへか。其内女連は横町へまがつたから、祖母さんに、後生だと思つて屁を放るのは堪忍してくんなせへ、往來のものが自己だと思ふから、否でならねへと言つたら、跳坊は馬鹿な子ぢやアないか、後生を願ふ年寄は、みんな放屁をするものだ、放屁は數珠の大きい玉とおんなし事で、南無あみだぶつ〳〵と十遍となへては、放屁を一ツブイと鳴し、南無あみだぶつ〳〵と百遍となへては、放屁を一ツブイと鳴すのは、お念佛の數取なり、又一ツには木魚の音をさせる替り、祇園精舍の鐘のこゑは諸行無常と響くなりと言ふことを、御法談で聞いて來たが、自己の放屁も祇園豆腐の精進物で、諸所無じやうと響くのだから、何にも悪いことはない。ヤレ有がたい南無あみだ南無阿彌だ。ブイ。ホイ是はまだ數取には早かつたと言つて、濟した顔をして居るのだから、何と手が付けられめへぢやアねへか。左様かうするうち、お寺の前へ來ると、自己がお花を買て往くあひだに、お墓の掃除をして置けといふから、チツト承知と阿伽桶へ水を汲み込み、卵塔場へ往きはいつたが、幼稚のうち參つたッきりだから、何が手前の家の墓所だか忘れてしまつて、からつきし迷子同然サ。然ければ婆アさんの來るのを待つて居るのも口惜いだと思ひ、其邊いらを見て歩行と、茶釜數屋といふ自己の家の家名を付た石塔があるから、〆こ

は何様だらう。夫から竊々飯を喰ひ、手拭をもつてずつと朝湯、とは往かねへが自分ばかり其積りさ。けれども折角早起をして、悦ばせやうと思つたのが、遲起に成つて仕舞つたから、腹癒にその晩、慈母を蕎麥屋へ誘れて往つたところが、慈母は貝柱蕎麥を一盃半でげんなりサ。此方は夜食一食で、朝飯と晝飯を喰はねへもんだから、洗湯へはいつて歸つて來ると、忽地腹はへつこりサ。然から先熱盛にして十三盃と遣らかしたが、疝氣に障るとつまらねへと思つて、直に天麩羅とお太鼓を直し、こいつを又十三盃と遣らかし、此度はうどんの花巻と出かけやうと思ふと、慈母に呵嘖れたから、夫でお仕舞さ。すると後で食滯でもしやアしめヱかと、大きに苦勞にしたさうだが、朝起をしやうと思へば夕起になり、悦ばせやうと爲ると氣をいためさせ、何瀬はじまりッから肝を潰させるやうな、孝行になる事は出來ねへやァな」䟽「かう理につんで來る噺に成つたら、自己も本心を現さうか。近頃何となく辛抱心が出て來たから、此十八日に祖母を連れてお寺參と出かけたのヨ。爲ると年寄だもんだから、外へ出りやァ奢るといふのを聞かずに、午時飯のお菜に煮た芋をせしめ込んだのが、夫が貶れてきたと見えて、歩行きながらブィと一ッ屁を放ると、竝んで歩行いて居た女連中が、じろり〳〵自己を見るから、否でならねへけれど、濟した顔をして往くと、また一ッブィと放つたので、新造や年増が一時にクッ

郎サ。だけれど氣に留めて居るといふものは強いもので、いつもの寐坊が度々眼が覺めるから、もう明方といふ積りで、徐々起きかけ、茶釜の下を焚きつけて、先湯をわかし茶をこしらへ、飯もついでにと思つたが、焚いたことがねへので遠慮をして居るうち、何處かの鐘が聞えるから、かんぢやうをして見ると、七ツといふのだから、チヨツまだ早過ぎたか、今から寐るでも有るめへと、火鉢の縁によりかゝり、空然かんとして居て見たが、何分にもしやうがねへので、儘よもう一寐入遣らかせと、折角たゝんだ夜具を廣げて、横に成つたと思ひなせへ、天窓の上でカアカアと、烏が鳴いてとほるから、今度ばかりは上加減と思つて、直さま飛起きると、家内殘らず其處に居るので、ハテとろ〳〵と遣つた間に、飯も何樣やら濟んだやうす、成程僉が早起だと、心の内で我を折りながら、縁頬へ出て見ると、太陽さまが西の方から昇りかゝつて居るので愕り、是は大變何樣した事と、往なりまづ靑くなり、倩あたりの容子を見るに、宵から度々眼を覺したので、ついとろ〳〵と眠つたと思つて居たとろ〳〵が、とろ〳〵〳〵のとろ〳〵、又とろ〳〵の大とろ〳〵、しんにふかけてとろ〳〵〳〵、法衣を著せてとろ〳〵〳〵、滅法界にとろ〳〵とろ、家中一ぱいとろ〳〵〳〵、何のこたァねへ牛の小便のとろ〳〵を見たやうに、恐敷長いとろとろで、明の烏だと思つたのが、塒へかへる夕烏、朝日のかげかと怪んだのが、夕日の居殘と

せれば宜かつた」一杢「下戸のいがみ合だと、肴をあらす所だけれどなア」野ら「まアサ雜ぜずに聞かッし」一下太「自己も此節は孝行をしやうと思ふ氣が、鳩尾のとこまで込みあげて來て居るけれど、誰やらの狂歌に、

あらためて孝を盡すも不孝なり大事の父母の肝やつぶさん

といふのがあるから、じり〳〵段々に遣らかす積りだ。何のこたアねへ菜や大根の香物とおんなじ格式で、あらつたり鹽を拂たり、押を置いたりして拵へあげるのだ」虚ろ「そりやア下太さんの言ふのに違へねへ。自己の了簡かたも其處だから、行をあらためるにやア、第一朝寐をよして、早起にならなけりやア正眞でねへとおもひ、此間の事だが、明日の朝こそ一はながけに起きて呉れべゑト、まだ暮れきらねへのに寐込んでしまひ、夢か何かを見てゐると、ゴヲンと響く鐘の音に、たちまち睡を覺されたから、此處だと思つて起きて見ると、親父や慈母が火鉢の傍にすわつて居るから、ハテ殘念な、今朝こそと思つたに、矢張こつちが遲れたかと、しほしほ楊枝ばこを持出すと、親父が額へ九の字を出し、今時分齒をみがく愚鈍があるものかと、大小言だから、不測なことをいふものだと、能々聞いたら、まだ誰も寐ねへので、今なつた鐘が、石町の四ツだとは、何と馬鹿げたはなしさネ。其處で仕方がねへから、僉と一所にまた寐の五

つけると、親父がだん〳〵首をすつこめ、ヱ、此野郎なにをする、木槌なんぞで叩かれて耐るものかといふから、自己が、なに木槌で叩くものか、此處のところで遣らかしたのだと、蠑螺の角を出して見せたら、イヤ滅法界なことをしやアがると大呵られサ。しかし其筈でも有らうかヱ、親父の腦天が岩石たゝきを見たやうに、凸凹だらけに成つてしまつたのヨ。然れども此方はそしらぬ顔で、ヱ親父さん、悴が孝行をはじめたので、大分うれしいと見えますネ、その證據には、お頭上が悦ぶだらけに成つて來ましたと言つたら、愚鈍めがと苦笑をして居たから、宜いぢやアねへか。夫から猶トコ〳〵遣つて居るうち、按摩も少し秋の空と來て、かはつた事をしやうと思ひ、ヱ親父さんちつと足力といふのを、遣らかして上げやうかと言つたら、親父が、手でさへ天窓へ叩き毀しが來たかと思ふ樣だのに、足で踏みこくられて耐るものかと、以ての外の不承知、仕方がねへから、握りこぶしで拍子をとり、朝顔日記の宿屋の段といふのを、例の美音か何かでうなり付けて聞せたら、殊の外御意にかなひ、直にあとがまが葉唄どゝ一、ひき續いて音色が、成駒屋に播磨屋のかけ合、不破に名古屋の鞘當サ。そりやア出たやうに遣つて聞せたが、嘘だと思ふなら、此處で一ばんやつて見せやうか」親「ナンノ嘘だとも何とも思やアしねへ。お前の上手なのは僉が知つて居るから」飛「全體役者よりやア猫のいがみ合の聲色を、遣つて聞

當分はその事に凝り固まつて遣つて見たが、是迄連中うちで一人も手を出さねへ、親孝行や陰德といふのをはじめて見たら何樣だらう、此奴もなか〳〵樂らしいぜ」虚ろ「こりやァ奇妙だ、自己も底へ氣がついたから、噺の蓋を明けて見やうと思つて居たのだ」茶め「成程氣のよるときにやァ寄るものだ。自己ァ五六日先から、もう親孝行をはじめて居て、既に夕も按摩といふので、大苦みを遣つたのサ。といふのは外でもねへ、親父が一盃きげんで炬燵へつゝぶし、茂林寺のお諸化さんをきめて居るから、ヲイ親父さん、天窓をちつと叩いて上げやうと言つて、背中へとツつくと、親父が大悦か何かで、出額すけをむつくりと持上げたから、打かうと思つて、藥鑵の上を撫つて見ると、橋の欄干に付いてゐる擬寶珠か何かを、撫でるやうな手障だから、これでも毛が生えて居るかと、爪の先でちよい〳〵と摘んだら、親父が不意をくらつたもんだから、身振をしながら、アヽ痛てて、ヱヽ月代をむしつて何樣するのだイ愚鈍がと、言れて此方も恟りしたのョ。然から兀げて居ると思つたつて、なか〳〵油斷はなりやァしねへ」飛「夫で市がさかえたのか」茶め「まァさ聞きねへ、親父の天窓といふのが、御影石のやうに固いのだから、只叩いちやァとても利くめへといふ勘で、握拳をこしらへると、榮螺の角のやうなものが出來るだらう、彼角のやうなところで、力一ぱいに百會の上のところを、コツ〳〵〳〵と打し

妙竹林話 七偏人 五編巻之下

節季候のはやしには、千代よろづ代の竹をならし、搗引餅の揚づきには、太平腹鼓の響きを知る、師走のするの世話しきも、彼七人の能樂ものは、親父の臑や慈母の、臍のめぐみの厚小袖、氣樂をこゝに掃だめの、能樂亭の火鉢を取巻き、又は炬燵へ寐ころびて、相もかはらぬ下洒落の舌戰、喜「此秋百怪談をした時ぎりで、連中残らず落ちあつたのは、今日がはじめてだらう」茶め「戸棚の中から現はれ出でた、小麥の粉の化ものには、手ひどく驚えさせられたつけなア」下太「彼時天窓をたゝかれたので、大略二三寸ほど、丈がひくゝ成つてしまつたア」野「年わすれといふ表題を付けて、何か一趣向較計うぢやアねへか」馬「鳥鍋に酒が三升、ころ／＼とした婦人の一めへもなア」飛「自己アさつぱりとしたものが喰ひてへ、先刻燒芋を三十八ほんとたくし込んだら、胸が燒けてこてへられねへから」喜次「ちと流行遅れな思付で、皆の氣に入らねへかは知らねへが、女郎を買つたり藝者をあげたり、踊り淨瑠璃の稽古所あるき、花が咲いたわ月がいゝわト、其方へ出かけ此方へ泊り、若旦那よし來た落しはなし、何でもてんと面白しと、先

ば私ちやア歸りやすぜ」喜次「使の者の了簡違で、お氣の毒なことを致しやした。しかし萬一此男が佛に成切つたやうなら、其時にやアお頼み申しやす」石や「ヘン馬鹿々々しい理窟だア」と、挨拶もせず歸り往く。大愚はとくより氣の付きたれど、驚かされたる腹愈に、猶騒がせてやらんと思ひ、其儘にして居たりしが、醫者と石屋の間違に、腹をよぢらす可笑しさを、やつと耐へて此時に、はや辛抱が出來なくなり、「クツ〳〵ぷッ」と吹出すト、一同「ヒエ、」と悑りし、思はず體を引いたりしが、喜次「ヤ大愚先生の目をまはしたのは虚だ〳〵」茶め「ア、ありがてへ、今の石屋さんがすつかり利いた」虚ろ「サア〳〵起給へ〳〵」野ら「戸棚の化物と、座敷の化物と和睦の仲人は、ノヲ飛さん」飛「大師戻の二人々々」喜次「そんなら直に一盃遣らう」と、是より新に酒肴を取寄せ、家主の源兵衛をも招き、先に驚かしたる侘言などして、果は中よく打圓居、大酒宴とぞなりにける。

アまた急に石塔を誂へてへとお言ひなすつたから、其積で居りやした」喜「イヱ此通りで御座いますから、見てお貰ひ申して、お薬を戴きたい積り、石塔を拵るやうに成りましては、一同落亡でも致さなくつては成りません」ト、言ふを後方に聞いて居る野良七と飛八は、顔を見合せ居たりしが、野ら「チイ〳〵喜次さん、何を取違るのだ」喜次「何故〳〵」野ら「何故と言つたつて、何様して其男に薬がもられるものかナ」喜次「薬を盛る事の出來ねへお醫者さまといふが、何處の國に有るものか」野ら「イヤサ、醫者なら薬を盛るは當然だが、石屋を呼んで薬を盛せやうといふのは、無理ぢやアねへか」喜次「醫者でなくツて誰が薬を盛る」野ら「チヨツ譯らねへ。醫者ならいゝが、此親方は石塔を拵へたり、地藏樣を刻んだりする石屋の棟梁さんだといふことよ」喜次「石屋さんだト」野ら「お前が石屋を呼んで來いと、言つたのぢやアねへか」喜次「馬鹿なことをいふ、目をまはした人の有るのに、石屋さんを頼んで何樣なるものか」野ら「夫でも大愚先生が目を廻して死んだから、いしやを呼んで來いといふので、自己ア石塔を誂らへるのかと思ツたア」飛「自己も餘り手廻が宜過ぎるとは思つたが、不斷ぬけめのねへ喜次さんの爲ることだから、何か一趣向有るのと推察して居た」ト太「石屋さんでもいゝから、一寸脈を見ていたゞかうぢやアねへか」處ろ「とても被入ッしつたらんだからのヲ」石屋を小し顔を脹らし、間違へなら

具を取かたづけ、待つ間もあらず歸りきたる野良七飛八は門口より、「どうだめつぼうと早かつたらう」と、いひつょわらぢを足袋のまゝ、其處へ脱捨て上りながら、野ら「大師河原から歸りの儘だからいくぢはねへ。サア〳〵お前さん此方へお上んなせへ」ト、目くら縞の股引に角字を染めた半天を著たる男を伴へば、肩に掛けたる手拭をとつて手でこき握みながら、男「モシ眞平御免ねヱ。お急ぎだといふから、仕事をして居る形でめへりやした」ト言へば、喜次郎きよろ〳〵しながら、「チイ野良さん、此先生にお願申したのか」野ら「さうさ〳〵」飛「明日の朝往かうと言つたのを、無理に引ぱつて來たのだ」喜次「夫は〳〵夜分と申し、御苦勞さまで御座いました」茶め「何は兎もあれ早く見て戴いたらよからう」喜次「チイ虚呂さん、お茶の支度をして呉んな」ト言ひながら、角字の半天を著たる男の前へ手をつき、「左樣なら貴君、此方へいらしつて下さいまし」と、聞いて彼方は不怪な顏、男「何かお誂なら此處で」喜次「しかし連れて參ると申しては、大事で御座いますから」男「寸法でも取るので御座へやすか」喜次「夫はお流儀によつて、いろ〳〵で御座いませうが、何卒まア御覽なすつて下さいまし」と、踏ぞり反つて倒れて居る大愚の側へ誘れてゆき、喜次「もの驚をして氣絶したので御座いますが、もう餘程に成りますから、其積で御診察を願ひます」男「ヘヱ、夫ぢやァ此御方の像を刻むので御座へやすか。私ちや

ねへナ」茶め「大急きで無くッちやァ往ねへぜ」飛「死人になつたのを置いて、悠々として居る奴が有るものか」野ら「草臥足だけれど仕方がねへ、大森で女に惚れられた報と諦めやう。ノウ飛さん」飛「さうさ〳〵、お前が年増で自己が新造にノヲ」喜次「そんなことを言つてゐるとおそく成るわス」野ら「夫ぢやァ飛さん、往つて來やう」と、二人は表へ出行きたり。喜次郎は燭臺をもつて座敷の方へ這入りながら、「餘り取違たので、今まで氣が付かずに居たが、化物の拵をとつて、素人に成つて仕舞ねへと、飛公や野良公のやうに、お醫者さまが來て肝をつぶすといかねへぜ」虚ろ「ほんに左樣ス。狼狽ひ過ぎるもんだから、下太さんのやうに、天窓を叩かれる事が出來に及ぶのだ」喜「化物付がいゝから、惜しいもんだけれど仕方がねへ、生れ付いた通りの好男子に成つて仕舞はう」下太「大愚大人ばかりは、白いまゝで置いてもよからう」喜「戸棚から出たお化が、生きけへらねへ日にやァ騒動が大イぜ」茶め「車前の葉を冠せても生きけへるだらうと思ふやうだ」虚ろ「サ左樣には違へあるめへけれど、隨分麻坊な男だからノ」喜「睡るのと眼眩したのと一ッに成るものかナ」虚ろ「ハァ少しやァ違ふかネ」喜「全體百物語をして、おどかさうといふのは悪い趣向だッた」喜「しかし氣を失はうとも思はなんだからノ」と、五人は丁得氣にかゝれば、漸々と著物を著かへ、顏の付物迄立てた墨繪の具など洗ひおとして、變化の道

するに途方をうしなひ、わづかばかりの沓ぬぎの、土間をどたばた這廻り、果は腰さへ利かずなり、二人諸共平張つたり。喜次郎は是を見て、「ヤ飛さんに野良さんぢやアねへか」野ら「ウフ、フ、、」飛「フヘ、、、、」茶め吉はわざと少し身ぶりをしながら、「天窓から鹽を付けてかぢつて仕まふぞヲ」野ら「ウフ、ウフウフ、、、」飛「フヘ、、、、」喜次「これサ自己たちだヨ」虚ろ「こんな形をして居るから恐れるのだア」呟「こはい事アねへ、百物語の茶番をしたのだから」下太「自己ばかりやア宜い面の皮な、手ひどく天窓をたゝかれたア」と、冠りし紙袋を取り、瘤に成つたる所へ唾を塗りつけ摩つて居る。野良七と飛八はこれを見て漸々落付き、野ら「お前たちも悪い洒落をするものぢやアねへか」飛「自己ア眞正に肝を潰したア。夫だから膝ががく〳〵して、震へがちつとも止りやアしねへ」喜次「二人が悸りしたのも無理はねへ、餘り甘く化け過ぎたので、大愚さんが目を眩して死んで仕舞つたア。夫だから下太さんに、醫者へ往つて貰はうといふところで、お前達に天窓をコツキリ叩かれたのだ。尤も形が形だから、醫者でも肝をつぶすと悪い、野良さんか飛さんの内で、一ッ走往つて來て呉んねへな」飛「座敷に眞白に成つて倒れて居るのが大愚先生なのか」喜次「さうさ〳〵」野ら「何にしても死んで仕舞つちやア大變だから、早く醫者を呼んで來やう」喜次「左様して呉れりやア有がてへ」野ら「飛さんも一所に歩行び

化物は、格子の内へ入りたる故、野ら七は立止り、「ヒエヽ恂りさせやァがつた」飛八も散眼しながら、「ノ眞正だらう」野ら「格子の外に隱れて居て、化物めが出やうといふ所を、思ひ切つて打なぐつて見やうぢやァねへか」飛「何だか氣味が惡いがやつ付けやうか」野ら「音のしねへやうに徐と歩きねへョ」と、二人は拔足入口の羽目にひつたり身をすりよせ、一人は木刀一人は竹杖、がくつく膝をやつと踏みしめ、出でなば打たんと振上げて、待つとも知らぬ下太郎が、怖つく胸を撫下し、下太「たゞでさへ戸棚の中の白柬埔塞で、おじけの付いて居る所を、驚かされて耐るものか。何處の野良だイ。ろくな串戲はしやァがらねへ」と、何か喃喃吶々いひながら、格子の口から、菓子袋を冠りし天窓を突出して、表の容子を窺ふ所を、飛八と野良七は、震々ぐわくぐわく震へながら、彼木刀と竹杖で、きよろ〳〵見廻す下太郎が、天窓をコツリ、ピツシヤリと、兩方よりして腦節の、あたりを擲せば下太郎は、「キヤアツ」と聲たて提灯を投り出して、その儘に爨の上へ逃上がる。野良七と飛八は、かの化者の弱きを見て、少し勢ひ付きければ、野ら「此野干めらァ」飛「此狸めらツ」と杖木刀で叩きたて、格子のうちへ追かけ込む時、座敷に有りける喜次郎等は、此物音に驚いて、何事にやと燭臺さげ、三ツ目入道、一ツ目小僧、青鬼、外道のそのまゝで、入口へ立出づれば、野良七飛八これを見て、「アツ」と言ひつゝ天窓をかゝへ、逃げんと

言ふものの油斷はならねへ」歧「チョッ太肝を拔さしやァがつた」虚呂「此方の趣向を知つて居て、返討に仕やうと思つたのだらう」下太「何にしても寢込んで仕舞ふとは、悠長なことぢやァねへか」喜次「氣樂なことを言ひなさんな、氣絕して居るのだァ」茶「ヘン目をまはして宜けりやァ此方でまはさァ」歧「向うだつて目をまはして、割に合はねへといふ譯でも無からう。兎も角も此方には、化けたのが五人居るのだものヲ」喜次郎は大愚が傍へ往つて見て、喜次「サア〳〵事だ、目をまはしたに相違ねへ」茶め「其替り源兵衛さんが居なくなつたぜ」下太「此くれへに趣向をして、僉に返討をくはせながら、目を廻すとは何事だらう」茶且「目を廻した振をして居るのかも知れねへ」茶且「何樣して〳〵冷てへ〳〵」喜次「モウ〳〵薄荷ゐんでは懲りたから、誰か醫者樣を呼んて來て下ッし。何にしても大事だァ」虚呂「打捨つておいても生きさうなもんだ」歧「氣樂なことを言ひなさんな」下太「自己が醫者へ駈付けやう、生してしまはねへと大變だァ」と、急ぎ周章て提灯つけ、履物履くさへそこ〳〵に飛出す門口、表には飛八と野良七が、是を見るより、「キャアッ」と言つて逃ぐるも道理、下太郎は彼木兎の拵へ故、天窓には紙袋、眼へ饅頭の皮をはり、羽根で織りたる紙布さへ著たり。下太郎も思ひよらざることなれば二人の聲に、「ヒヱ丶」と驚き格子の中に逃込んだり。野良七と飛八は、四五間ばかり駈出したりしが、木兎の

犬の方が強いやうだのウ」飛「左様は思ふけれど、萬一班犬よりつよいのが有るめへとも言はれねへ」野ら「チョッ左様がたく／＼と震へて哭んなさんな、氣に成つていかねへ」飛「お前も膝から腰の所が、ひよこ／＼として來たぢやアねへか」野ら「自己なア武者ぶるへといふンだア」飛「アレ／＼家の中で何か音がするやうだ」野ら「彼樣いふときに大愚でも來ると、騙して先へ入れて、瀬踏をさせるけれどなア」ト、二人は格子の側へよつたり亦逃出したり、有漏々々と評議に果しはなかりけり。却說能樂亭の家の内には、戸棚の中より現はれ出でたる大愚が異形な有樣に、僉おどろきて平たりと、言句もなしに腰を抜せば、大愚もあたりの變化を見て、忽地倒れて正氣をうしなふ。されば五人は眼ばかり光らせ、壁へ尻の吸附くごとく、立たんとしてはばつたりばつたり、尻もち付いて居たりしが、喜次郎は戸棚の變化が、ふんぞりかへりし其まゝにて、身動きさへなさゞれば、恐るゝうちに少し訝り、首を伸してこはく／＼も、倒れし變化を覗いて見ると、冠りて居たる干瓢は、早晩壁へずれ落ちて、たゞ一面に眞白な野郎天窓に成つて居るゆゑ、喜次「ヲ、ヲイ／＼庶々庶呂さん、茶々茶めさん」ト、言ひつゝ顋でかなたを指せば、二人は何の應答も出來ねど、恐々しながら變化を見るに、一人は殊更天窓の際、燭臺さへ傍に在れば、猿め「ヤ是やア大愚さんだぜ」喜次「ナ何、大愚先生だと」ト聞くより皆々腰がたち、下太「とゝとは

たぞ」と、言ひつゝ耳をそばだてて、「ノ、そら何様も魔ものッ臭からう」野ら「成るほど些をかしいやうだ」ト、二足三足跡へ戻り、「まア待て〳〵」と、懐中より守袋を採出し、鉢巻をしたその上から、天窓へくる〳〵縛りつけ、唾で眉毛を無性に濡せば、飛八もまた守袋を取出し、是も天窓へ縛付け、唾で眉毛を濡しにかゝれど、口中はから〳〵干いて居るゆゑ、飛「こりやアいかねへ。ヲイ野良さん、アノ亀井戸でうる臥龍梅の梅干を、二十四文が所一度に口へは頬ばれめへか」野ら「ヱヽサ夫どころの噺かヱ」飛「だけれど眉毛へ唾を付けてへが、口が乾いて仕方がねへから、梅干の噺をしたら、舌の裏のとこから唾が湧いて来るだらうと思つてヨ」野ら「何サ呪咀だから付ける眞似をして置きやアいゝやアな」飛「仕方がねへ、水ッ鼻でも塗付けておかう」野ら「何にしてももう一人、助太刀があるといゝけれどなア」飛「はじめに太膽を抜れたせへか、腰の居りが悪くつていかねへ」野ら「たかが野干か狸の所爲だから恐れる事アねへ。何にしても遣付つけやう」と、天窓へ縛つた守袋を撫でて見ながら、門口の格子へ首をつきこみ、中の容子を窺ひたりしが、また抜足してあとへもどり、野良「こりやア何でも飛さんが、化物のやうすを知つて居るから、先へ這入つて貰はう」飛「とんだ事をいふ。自己アお前ばかり中へ入れて、此處に待つて居る積りのだ」野ら「お前のいふとほり、何様かんがへても、野干や狸よりやア裏の班

やァきよ狐やたよ狸は裏の斑狗よりやァ弱いなア」野ら「此方人らの遊所を、篠田の森や茂林寺に押領されたといはれちやァ外聞がわりい。夫に喜次さんや連中うちを化して居めへものでもねへから、一ばん追拂つて異れべゑ。お前も屁腰な事を言はねへで、自己と一所に歩行びなせへ」飛「自己だつて野干や狸と氣が付きやァ恐れるものか、何故といふに、狐や狸は裏の斑犬より弱し、斑犬は自己より弱いものヲ」野ら「然し小敵と見て侮るべからずだ。何か其處へらに手頃の鐵の棒でもありさうなものだが、暗くッて分らねへ」と、きよろり〳〵尋ねまはし、「ヲツトよし〳〵」と、他家の戸口に建てかけたる竹の杖を持來り、野ら「サア〳〵お前、此鐵の棒をもちなせへ、自己はお差料の木刀で澤山だ」飛「長屋の行事に左樣言つて、食に加勢をして貰うぢやァねへか」野ら「まだ其樣な弱いことをいふよ、自己一人でも退治して見せる」飛「今日はお前は滅法と強く成つたのヲ」野ら「ヘン是しきの事。サア〳〵來なせへ、狐めらに際限屁をひらせて異れるから」ト、先に立つてあとへ戻り、喜次郎が門邊に來り、野ら「うぬら何樣するか見やアがれ」と、手拭取出し鉢卷し、片肌ぬいて手の平へ唾をはきかけ、木刀提げ格子のそとから内を覗けば、飛八はあとにつき、同じく手拭で鉢卷しめ腕まくりして、胡麻竹の杖で地平をたたきたて、後へ二足前へ一足、腰をぶる〳〵震はしながら、「サア來い、此度は此方も強く成つ

けられねば、只腰ばかり前の方へ、ひよこり〳〵遣つて居る故、野ら「何様したんだ、ヱ何様したんだよう。腰ばかりひよこ〳〵やつて居ちやア、譯がわからねへ」飛「化、ば」野ら「化が何様したといふのだ」飛「化、ばゝ、ばゝ」野ら「ばばゝと言ひながら腰をひよこ〳〵。フヽム喜次さんが婆アさんと、色事でもして居たのか」飛八は天窓をふり、「ばゝ、ばゝけ」野ら「イヤ待ちなよ、顋を外したのか」飛「ばゝ、化物〳〵」野ら「ヒヱヽ化物だと」飛「化物」野ら「串戲をいひなさんな」飛「ほゝゝゝゝ本正だ」ト、惣身をぐわた〳〵震はし胸を撫しやうと撫でながら、飛「アヽ恐怖かゝつた」野ら「茶目公や下太しうの驚かしにかゝつたのだらう、馬鹿〳〵しい」飛「おゝ驚かかしどゝ所の、さ騒ぎかヱ。天窓へちや〳〵茶臺を見たやうなものを、かゝゝゝゝ冠つて居る一ッ目小僧、牛房の切口を見たやうな眼の玉の三ッ眼入道、夫から何だか種々居て、戸棚の前には天窓から肩から胸から眞ッ白な化物が倒れて居るゝのを、他かの化ものが喰うとしてるゝる容子だつたゝゝゝゝ。カチ〳〵〳〵〳〵」野ら「カチ〳〵〳〵〳〵といふのは、齒がなるのか、何にも其様に震へなくつても、いゝぢやアねへかナ」飛「なゝ何にしてもはゝゝゝゝ早く逃げやう」野ら「へッてへげへに弱がんねへ。お前の見たのが驚かされたので無くッて、眞正にした所が、高で野干か狸の化けたのだア、恐れることが有るものか」飛「そゝそ左様言はれて見り

野ら「人の飯櫃から眼火なんぞを出しやァがつてなァ」一飛「しかし眼火を出しただけの僥倖はある、ノ見さつせへ、格子を開ッ放して往つたから、先城中の景勢を窺はう」と、拔足しながら能樂亭の格子の内へ徐と這入り、草鞋をはいた其儘に、膝の先で這上れば、奥には何か連中が立はたらひて居る容子に、偖こそ奴等は集り居れりと、點頭ながら次の間の、障子へ指で穴を明け、覗けばうちには燭臺へ、大蠟燭をとぼしたて、事あり氣なる其容子に、「ハテ何事をもくろみし」と、障子の穴を嘗めひろげ、なほすり寄つて是を見れば、こは麼什いかに座敷には、一ツ目小僧、三ツ目入道、木兎、青鬼、下道の變化、また天窓から體まで、たゞ眞白なる化物が、何やら冠つて戸棚の前に、倒れて居るさへ在りければ、「ア、ッ」とばかりに仰天し、迯出さんと身を悶けど、腰のつがひががつくりと、寛んで些も立たれねば、べたりべたりと尻餅つき、眼はかり散眼々々させたりしが、やう/\の事にて居ざり出し、格子の外へ出るより早く、野良七が手を捕へて、無二無三に引摺りながら、物をもいはず斷出す故、野良「エヽ是何をするんだ、左樣逆にひつぱられちやァ、是サ浮雲といつたら。エヽア、戲狂ちやァいかねへ。エヽア、」一飛八は片手で野良七をひつぱり、片手で喜次郎が家を指さししながら、「化、化、ば、ば」と言つたッきり、口をもぐ/\眼を光らせ、突きあたつたり爪づいたり、足はすくみ息は切れ、氣のせく程に

妙竹林話 七偏人 五編巻之中

野良七と飛八は、大師河原の戻足にて、喜次郎が能楽亭へおしこみ、連中の者に、今日川崎へ往きたるを、羨してやらんものをと、既に喜次郎が家の前まで来りたれど、猶門口に佇みて評議して居るその折から、格子をあけて駈出す家主の源兵衛に、突飛されて額合によろめきながら、雙方が額を押へて立すくみ、野「ヱヽ何奴だか手ひどい事をしやァがる」飛「よもや連中のうちぢやァあるめヱ」野「額と額がコキンぐわァんといふ間に、何處かへ迯げて往つてしまつたから、何な奴だか譯らねへ」飛「眼から火が出たァ」野「自己の眼からも火が飛出したァ」飛「全體眼から火が出たときにやァ、詞を詰めて眼火が出たといふと、天窓が飯櫃か何かのやうで面白いぢやァねへか」野「眼火といふが有るものか、飯櫃の中のはめしだは。ひとしでは文字が違つて居らァ」飛「ヱ聞なよ、夫でもノ、米を火で煮て拵るのだから、米と火とを一ッによせて、めひといふ名を付けたつていゝぢやァねへか」野「何さま左様して見れば、夫へおつ付けて喰ふから、味噌汁といふのかも知れねへ」飛「何にしても今の野郎は、忌々しい無憐氣をしやァがる」

アイタヽヽヽ」飛「アヽイタヽヽヽヽ」源兵衛は見向もせず、路次の中へぞかけ込みける。

たりしちやア可怪くねへ。エヽ待ちなヨ、アヽと彼樣だから、待て〳〵」野ら「エヽなら待ちなよで、彼樣だからなら待て〳〵といふてにはに成るのか」飛「左樣ぢやアねへけれど、一趣向つけやうと思ふから待ちなヨ、彼樣だから待て〳〵と言つたのヨ」野ら「フムウ左樣かは千住の先だらう」野ら「チツト妙」飛「エヽ悔りしたア」野ら「金を拾つたと言はうぢやアねへか」飛「奢れと言はれると詰るめへ、だから女に惚れられた積りにした方が宜らう」野ら「違へねへ」飛「お前が二十五六の年增で、自己が十七八の新造に思付かれたと言はう」野ら「だけれど、自己の方が新造好のする風だからノ」飛「イヤサその事を言ひづくにすりやア、飛八さまなどには一天四海皆歸妙法、おしなべてべた惚だア」野ら「南無妙出額頬ふくれんげ經ツ」飛「サア〳〵相談の付ねへ中に、力彌さんのお屋敷へ來て仕舞つたぜ」野ら「何にしても二人ながら女に惚れられて、大森の駿河屋で、飽と御馳走に成つたうへで、此土產なんぞもみんな貰つて來たのだといはう」飛「さうよ、明日か明後日は、その女の家へ往くつもりにして來た、なども宜いぢやアねへか」ト、二人はうか〳〵喜次郎の家の前まで來りければ、猶門口に徨みて、ひそ〳〵趣向をして居る折柄、內より格子を瓦落裡引明け、飛出したる源兵衛が、何心なく嚔して居る、野良七が後方より、卻含にかゝつて突當れば、野良七前へつんのめり、向ひあひたる飛八が、額へ額をコツキリ打つけ、野ら「ア

ふけれど、生憎ともててばかり居るから、お恥しいことだけれど、女に嫌れるといふ味をまだ知らねへのサ」野ち「往來のものに聞れると、大師樣の罰でも當つて來たかと思はれるワス」飛「何故々々」野ち「何故、ヘン何故もおしがつゐよ」飛「夫ならば何故と釜とは何方が押がつゐよと思ふ」野ち「何故の方は味噌汁が強くつて、釜の方は飯がつよいのサ」飛「イヤ飯といやア高輪に居た牛は強かつたなア」野ち「ほんに牛で思ひ出したが、連中能樂亭に集つて居るたらうなア」飛「待ちなヨ、何樣いふ譯で牛と言はれて、連中を思ひ出したのだ」野ち「別に古事來歴はねへけれど、僉ののろ〳〵して居る所が牛のやうだからヨ」飛「違へねへ、何時だつけ餘所で馬の噺が始まると、お前のことを思ひ出したつけ」野ち「此野郎め」飛「エ、草臥れて居るから、ふざけるなと言つたら」野ち「そんなら了簡してやらうが、連中は喜次さんの家に集つて居るに違へあるめへなア」飛「そりやアもう何か出來ねへ相談でも、付けて居るに違へねへのサ」野ち「自己とお前とあれほど僉を誘引つたのに、何奴も此奴も不信心な奴ら可りだから、言ひぐさばかり言つて居て、參詣に往かねへのは宜いが、雨が降出したといふもんだから、夫見た事か後生が惡いからだとか、天文を知らねへからだとか、澤をいはれるに違へねへが、何かうめへ趣向なして、自己達も一所に往けば宜かつたと、羨せて遣りてへもんだ」飛「何さま信心をしたり、愚鈍にされ

へワ」䟽「薄荷圓といふのを早く出して飲せねへのか、何を可笑な眞似をするのだ」と、言ひつゝ其處に倒れたる、大愚が足を思はず踏つけ、䟽「チヤ何だ、誰の足だ」と後をふりむき脇へ寄り、「誰か此處に寐てるるの、エヽ踏ぞりけへつて誰だ〳〵」と言はれて此方の虛呂松も、「ホンに何奴か臥つて居る」と、二人は側へ立寄りて、大愚が其處に倒れたる、顏を明りに覗き込むと、小麥の粉名と干瓢にて、只さへ異形に見えたる面が、氣絶なしたる折柄に、齒を喰しばり眼を見はりて、二人を白眼むがごとくなれば、虛呂松も䟽助も、一眼見るより、キヤアット聲たて、一度に後方へ筋斗る拍子に、折よく䟽助の手先で、倒れし源兵衞が腰のあたりを突きこくると、源兵衞忽地正氣付き、「ウヽン」と言ひつゝ起きかへり、何かうろ〳〵見まはしたりしが、周章てふためき立上り、倒つ轉びつ一生懸命、表の方へ迯出したり。

○こゝにまた野良七と飛八は、今朝まだきより二人して、川崎宿の海手なる、大師河原の厄除大師へ、參詣なさんと出行きしが、秋の日脚の短きに、雨さへ折々降出でければ、道の行くても敢果どらず、此時漸く歸り來り、一盃機嫌の高聲に、野ら「アヽ草臥れた〳〵」飛「自己ア足よりか口の方が草臥れた」野ら「遠道へ出て雨に降られたのと、遊に往つて女に嫌れたのとは何方が宜いだらう」飛「何方が宜いか自己にやア分らねへ。夫だから遊に往つて、一度嫌れて見てへと思

今源兵衛の倒れたる聲に恂り仰天し、兩手を伸し隔紙を一生懸命押へて居るとも知らざれば、喜次郎は眞赤に成つて推しても引いても少しも明ざる隔紙に、喜次「茶目さん下太さん、手傳つて引ぱつて呉んねへ、何だか支へて些も開ねへ」茶め「ヲツト承知だ、ソラ引張れ」下太「待て〳〵一所に遣らかすから」ト、三人一度に隔紙の、緣へ手をかけ引開くれば、大愚も顔をしかめたり齒をくひしばつたり、一生懸命兩の手足で押ゆれど、力つかれて瓦落々々と、ひき開けられたる隔紙の、内よりぬつと面を出す。大愚はさきに丼鉢を倒して、冠りし小麥の粉に、天窓や顔は勿論の、肩から胸は眞白にて、髮の上には喜次郎がしまひ置きたる干瓢の束にしたるを打冠れば、其容世にいふ白粉地藏へ拂子を著せたる如くなりしが、表のものの足元を潜りて、彼方へ迯出さんと、戸棚の中より飛出す。大愚がさまを見るよりも、喜次郎、茶目吉、下太郎が、一度にキヤアツと腰を拔き、そのまゝ其處へ平伏れば、大愚も外なる三人が、一ツ目小僧、外道の變化、また木兎の化物に、成りたる顔を見るよりも、同じくキヤアツと顚倒、四人の者の聲に驚き、此方に有漏つく虚呂松跂助、「何だ〳〵」ト言ひながら、戸棚の側へ往つて見れば、喜次郎、茶目吉下太郎が、どつさり其處へ尻餅つき、口を何やらうごめかし、眼ばかり散眼々々光らせて、無上に向うへ指さしする故、虚ろ「何だのウ不景氣な眼付をして、其樣な身振は虫が好かね

さつさと生して仕舞はねへと、連中のこらず掛り合だア」跂「チョッ世話のやけた、何の眼なんぞをまはさずとも宜ひに、氣の弱いにも方圖があらア」喜次「何様したら生るだらう」下太「燒酎を吹かけたらば宜ひだらう」茶め「草臥れた足ぢやァ有るめへし。开して亡者を生酔にしたら、何を始めるか知れやァしねへ」下太「夫よりか灸をすゑたら氣が付くだらう」ト、三ツ目入道、一ツ目子僧、木兎、青鬼、外道の化物、小夜着袖なし赤合羽を着たるまゝにて立騒ぐ。虚呂松は勝手より茶碗へ水を汲來り、虚呂「是さ〳〵僉が其様に狼狽へなさんな。此奴を面へ吹かけりやア、正氣に成るには違へねへ」ト、言ひつゝ立寄り顔を見て、恂りしながら後じさり、虚呂「ヤア〳〵こりやァ源兵衛の家主さんだ家守さんだ」喜次「ナニ源兵衛の家主さんだ」茶め「違へねへ家守さんだワ」下太「何様して此處に居たのだらう」茶め「大愚の身代りに立つたのかも知れねへ」下太「次信が義經の身代に立つたやうになア」喜次「何にしても大騷動を引ずり出したワ」下太「何か氣付になるもの、イヤ待てよ、火鉢の引出に赤膏藥と卽功紙が有つたぢやァねへか」虚呂「たもとつ垢なら何程もあるぜ」喜次「ヲツトよし〳〵、薄荷圓が戸棚にあるぞ」と、大蠟燭をとぼしたる儘に、戸棚の入口へ燭臺を持行きて、隔紙あけんと引手を持ち、ぐわたり〳〵引張つても、ぎつちり支へて明かぬも道理、戸棚のうちには彼大愚が、

思つたら、矢張お家にお在だつたか。幷してお客でも來やアしまいし、燭臺イヤ蠟燭などには及ぶめへ」といへど、此方も例の卒忽者、向うの言端は耳へ這入らず、早く變化の姿を見せんと見振をしても、ちつとづつ踊つて見ても氣が付かず。源「時に喜次さん、今夜上つたのは外でもねへ、他所で催の茶番の世話役を恃まれたのだから、是非々々お前さんに御苦勞をかけなけりやア成らねへ譯サ」と、言ふをも構はず茶目吉が、明りの先へ顏つき出し、四邊へひよく大聲にて、「もをヲ、もをヲ」と牛の鳴く眞似をしながら天窓をふり、ぺろり〳〵と舌を出せば、源兵衛此時これを見て、「キヤアッ」と言ひさま兩手を伸べ、一生懸命茶目吉が胸のところを突きのめせば、不意を打れて茶目吉は、茶臺も茶碗も投り出し、仰向さまに筋斗、障子のところへ轉るゆゑ、障子は外れて瓦隨々々々々、彼方此方へ倒れると、後邊にぬつきり衝立ちたる三ツ目入道、青鬼、みよづく、外道の變化も飛んだり跳ねたり、身ぶりをしながら白眼れば、然らでも元の一ツ目に、腰の節ががつくりと、寛んで動けぬ源兵衛なれば、再び「キヤアッ」と聲たてて、其處へばつたり顚倒りかへり、忽地生氣をうしなつたり。喜次郎は是を見て、狼狽おわてて側へかけより、「サア〳〵事が始まつた」茶「イヤア〳〵大變だ、顚倒つて眼をまはした」喜「エヽエ譯らねへ、眼をまはしたから顚倒つたのだワ」茶「論はんどころの噺かへ、

鬼と、化物拵出來そろへば、茶め「サア〳〵一ツ目小僧が出かけるから、僉も續いて出て來なせへ」ト、眞鍮の燭臺へ百目がけの蠟燭ともし、湯飲へ少し汲みたるぬる茶を茶臺へ乘せて、燭臺と茶臺を兩の手に捧げ先へ歩行けば、四人は後方について緣頰より徐と座敷の方を覗くと、障子に明りがさして居る故、茶め喜次「ヲヤ」と顏見合せて尻ごみ爲し、互に耳へ口をよせ」茶め「何樣して明りを付けたらう」喜次「誠に何樣も不測だなア」茶め「そして明りを付けゐるくれへぢやア、座敷にじつとしては居ねへ譯だ」下太「ホンニ妙だ」喜次「向うにも一趣向あるのぢやアねへか」茶め「有るのかも知れねへヨ」虚「何は兎もあれ是までにしたものだ、構はず出かけて見なせへナ」茶め「出かけるは出かけるが、正眞の化物が自己達より先へ顯はれて居るのぢやアねへかと思ふから、些と氣障なところが有らアな」喜次「まさか左樣した理屈もあるめへ」下太「ぐぢ〳〵して居て氣どられると往けねへぜ」虚呂「思ひきつて遣つて見ねへナ」茶め「何さま構はず出かけて見やう」ト、足を爪立てちよこ〳〵と緣の板間を歩行きながら、障子の棧へ足を引掛け、さらりと明けて座敷へ這入り、彼燭臺を突出し、大愚と心得源兵衞が居り込んだる鼻の先へ、藪から棒に茶臺を差つけ、茶め「お客さんお茶をあアがれ」と言ひながら、舌をぺろりと出して見すれど、此家主の源兵衞は、卒忽しきが持まへなれば一向に氣が付かず、源「ヲヤ〳〵お留守かと

夫々の仕度に餘念はなきをりから、裏口の戸を引あけて、「御主人御家に御在かな」と言ひつゝずつと上り來るは、彼家主の源兵衛にて、「イヤ是は眞暗、留守だと見える。併しもう些と先刻まで噺聲がして居たが」ト、提灯出して四邊を見まはし、「ハテナ茶碗や烟草盆、ヲット烟管煙草入も此處にありと。ハヽア例の意地きたなが、蕎麥か何かを喰ひに往つたのだナ。なんぼ取られるものがねへからと言つて、戸締を爲ずに出歩行きをするとは、餘り盗賊を踏みつけにした仕方と言ふもの。ドレ〳〵歸つて來るまで番をして居て遣らう。萬一何かの喰殘りでも、土産に持つて來るかも知れねへ。ヤレ〳〵誠に世話のやけた蓮葉店子で困りきる」と、提灯の灯を行燈へうつさうとして苦い顔、「是は何樣だ、此まア油の高いのに、此樣な太い燈心を六筋入れて置くといふ身上知らずが、何處の國に有るものか。第一火の用心も悪いワ」ト、小言たら〳〵行燈を燈して、自己が持ちたりし提灯の燈をフッと吹消し、出口の上の鴨居へかけ、煙草盆を引出し、一人烟草を薫らせ居る。戸棚のうちには彼大愚が息をころして縮り居ると、誰やら知らねど座敷へ來り、行燈ともすその容子に、少し心は落付くものから、猪真次郎ら五人のものの聲は少しも爲さゞるゆゑ、若や變化の出來りて、人に油断を爲せるのかと、思へば恐怖さ彌まさり、身を震はして窺ひ居る。此時彼方の小座敷には、一ッ目小僧三ッ目入道、水兒、外道、青

と探りまはし、「何にしても此處へ彼樣して這込んだのが天のお助、まことに奇妙な隱家だ」と、戸棚の中へすつぽりと、這入つて固く身を縮めながら、ぴつしやり隔紙立てきり、息をころして居たりしが、今にも何やら手を出して、摑みもされる心地する故、猶も我身を隱さんと、其處ら四邊を搔探れば、紐のやうなる柔きものが、束ねて下げて有るゆゑ、何やら知らねど外して取り、天窓の上から徐と冠り、息をころして蹲踞居る。とは知らずして、小座敷には喜次郎はじめ四人のものが、豫て拵へ置きたりし野菜持遊、夫々の道具立にて身を拵へ、茶め「何樣だく、隨ぶん甘く化けたらう」喜次「宜いく、立派な一ツ目子僧が出來た」盧呂「さア青鬼の衣裳も著いたゾ」下太「大きな聲をしちやア聞えらイ」茶め「燭臺といふのは何處へ往つた。茶臺が無くッちやア茶が出せねへ」岐「自己の三ツ目入道と、下太さんの木兎と喜次さんの」喜次「ヲツト自己の下道なら、もう差支なく出來て居るのだ」茶め「何にしても大愚めエ、何をして居るか、座敷へ往つて覗いて來やう」下太「覗いたつて眞暗闇だものヲ見えるものか」茶め「目で覗いたらば見えめへが、鼻で覗いて嗅ぐのだヮ」下太「容子を嗅がねへと言つたつて、隅の方に縮つて居るに違へねへ」喜次「何にしても早く爲なくッちやア往ねへ」岐下太「ヲツトよし最出來たゾ」茶め「イヨ妙らいく、霜げた木兎丸だしだ」喜次「岐公の三ツ目入道も化榮がして面白い」ト、五人は打寄り

に應答の無きのみか、自己が聲さへ何となく、四邊へ響きて今までとは、異なるやうに聞ゆれば、「エヽ不景氣な、何だらう」と、肩の所から身震し、「何にしても此樣な不氣味な家に長居は無用、早く表へ出てへものだ」ト、いひつゝまたも這出す、「天窓の先にて何やらん、おし倒せばぽつかりト、天窓へ冠さるものある故、ハッと思ふと魂魄も、消入るごとく成りけるが、何時まで過つても夫なりゆゑ、縮んだなりに震へ〳〵、天窓へ手を遣り探つて見ると、何やら粉名を入れ置きたる、器をすつぽりかぶりしなれば、現心に監へ居ると、飜れし粉名が途中を舞ひ、息の拍子に鼻へ吸込み、「ハックシヤウゑゝエ、ハックシヤウ」と草芽にすこし正氣が付き、また徐々と這ひ出す、天窓をぐわつたり向うへ打付け、「ヒエヽ」と後へ引く拍子に、上でぐわつたり髷ぶしを、打れてまたも仰天し、其儘其處に天窓をすゑ、茫然として監へたりしが、頓て恐怖恐怖手を出し、其處らを徐と探つて見れば、是傍の押入にて這込みながら中段と、小棚のあひだへ天窓を突込み、天窓の先で小棚なる、丼鉢を引くるかへし、鉢の中なる何やらの粉な、天窓からあびたるなれば、やうやく少し落付いて、「イヤ次の間だと思つて這出したら、此處は戸棚の中だ。道理で聲が可怪しくひゞく。幷してこの粉名は何だらう。ハヽア先刻揚物を喰せたから、其揚物を拵へた小麥の粉名だナ。ヲヤ〳〵天窓から襟から、五體中が粉名だらけだア」

か寂莫として化物くさいぢやァ御ぜへやせんか」といへど返辭をするものなければ、いよ〳〵うそ氣味惡くなり、少し監へまた尻ごみ、壁の方へ首を出し、耳を左右へそばだてゝ、「モシ茶め大人、ヱ茶め大人と言つたら茶め大人」と、呼びかけて見また監へ、「是は近頃大人氣ねへ。ヱモシ〳〵」と言ひながら、膝の先にて徐々這出し、たしか此處らに居つてゐると、思ふあたりを探つて見れど、手先に障る物も無ければ、「チヤ誰も居ねへ、ハテナ今まで此處に居たものが」ト、疑起ればおこるほど、猶々底氣味惡くなり、すこし震へし聲音にて、「是さ喜次郎大人、わるき串戲はよし給へ、魂魄を冷すのは壽命の毒だ。これサ應答をなし給へ。ヱモシ〳〵」と言ひながら、其處らを無上に探りまはれど、只森々としづまりて、人の影勢の有らざれば、今まで此所に居たものが、何樣して僉無くなつたかと、いよ〳〵怪む心より、惣身の毛穴が一度にたち、只ぞく〳〵と肩先より、水をさゝるゝ如くなれば、はやくこの場を逃出さんと、氣は急れても先ほどより、這ずりまはりし暗闇に、何方が何樣だか圖方をうしなひ、其處らをやたらに撫でまはし、探りまはした指先へ、ざらりと障るは唐紙の、引手の穴ゆゐほつと息、そのまゝ直におしあけて、顏を突出し其方此方を、見れど矢張黑暗に、齒の根も合ぬ震へ聲にて、「モシ喜次郎大人、惡いしやらくを爲給ふな、胸がしく〳〵痛んで參つた。これさ〳〵」と呼んで見ても、更

妙竹林話 七偏人 五編巻之上

青柳橋なる能樂亭には、相も變らず茶目吉、虚呂松、下太郎、跂助打寄りて、主人喜次郎をそそなかし、袂涼しき秋の日の、雨さへ折々ふり出でて、人の心の淋しきより、思ひ付いたる百物語に、大愚を驚して遣らんものをと、既にその事始りけるが、一番二番と順々に、はや怪談すみければ、一すぢ殘る燈火を、大愚が番にあたりける故、大愚は心濟まねども、澁々搢出し行燈の前にすわりて、何やらん言はんとなしても趣向は付かず、困り果てたるそのうちに、五人の者はみな竊々、座敷を拔けて行くとも知らず、大愚は頓ていつもの癖「オホン」と咳をする拍手に、忽地あかりを吹消せば、ハッとは爲れど詮方なく、そのまゝ其處に身を縮め、目ばかりぱちく〳〵させながら、居つて居ると生憎に、遠寺の鐘もの凄く、霜にすがるゝ蟲の聲さへいと淋し氣に聞ゆれば、生れ付いての臆病もの、だん〳〵氣味がわるくなり、萬一其處らの隅のはうから、青い首でも出やうかと、思ふト忽地襟元より、ぞつとするほど恐怖なり、喜次郎はじめ五人のものも、元の席に居ると思ひ、大愚は頻に尻ごみしながら、「エ喜次郎大人、モシ喜次郎大人、何だ

敍

瀧亭大人が八笑人は、八人の連をあげ、また和合人は、六人の笑容を集へ、滑稽洒落の妙をはき、人を笑はし腹の皮をよぢらしし、其筆先の浦山しさに、八人と六人の中をとり、七人の懶墮ものを引出して、七偏人といふ名を付け、出放題なる戯言をものし、寶集堂の主人をおだて、お先眞暗厚面皮一部の本となしてもて、書屋の肩を重らすものから、八笑人や和合人の玉や金の其中へ、瓦に齊しき七偏人、嗚呼我ながら押强しと、案じたより産が安く、少しは貸せると梓元の、辭を力におつかな悧り、段々後を書次いて、何樣やらかうやら第五編、先此本は是限の、大尾と迄に漕付けたれば、吻と大きな息をつき、干からき乾魚を喰つたやうに、額の汗を拭きながら、此敍書をする事しかり。

梅亭金鵞

まらぬ濃茶こはい、ト、煙草入の紐の色を見せ、ハ筒々天々じつ〳〵めんてん、イヤ筒々めん天、眞々めんてんヤ、どつこい上紺、どつこい上紺、ト、座敷中ぐる〳〵廻り、はしをりをおろし頬被りをとつて其處へすわり、此處まで逃げればもう大丈夫、ヤレヤレ氣味の惡い事と、吻と一息いたしますると、細ヲい鴈首をずウいと伸して吸口を明き、何やらをぱくり〳〵呑みまする化物が御座います故、恐怖もの見たさに、彼化物を見屆けやうと致しますと、辛い煙をふウつと吹かけられますと、納戸の明りも、忽地一すぢ消えました」ト、三すぢ殘りし燈心を、一穗引いて次へ讓れば、虚呂松それに入れかはり、「エヘン偖私は古ウい長アい恐怖アいおはなしを申し上げます。天竺から此樣な古ふんどしが下り」ト、ふんどしのたれを引出し見せ、長崎から強飯が參りました」ト言ひながら明りを一すぢ滅すついでに、後に殘りし燈心を油の中へずり込せ、薄暗くして引込めば、否々ながら大愚が替りて、何か言はんとしたれども、長崎から來た強飯の先をこされて、むづ〳〵爲るうち、明りは次第に暗くなる。此時こなたの五人のものは、一人無くなり二人へり、彼方の小子舍へ拔行きて、各變化の身拵、するとはさらに氣の付かぬ、大愚は暗き行燈と、白眼くらして在りけるが、何か言はんと反身になり、「ヲホン」と例の咳拂に、思はず明りを吹消す折から、遠寺の鐘ボヲン引、天井を斷ける鼠の音グワタ〳〵〳〵。

全體こんく\と鳴ますれば、狐で無くつてはならないと存じて、僞物屋とまうす化物屋敷の方を狩出して見ましたなら、其貍の財布は、古い合羽の化けたので御座いました」と言ひつゝ是も燈心を一穗へらして後へさがれば、跂助續いて其處へ立出で、「僭わたくしは第四番のお鬮に當りましたが、段々と皆樣がたの恐怖おはなしを承り、誠に肝たましひを冷しますることに御座います。イエサ、吾儕も氣味の惡いめに逢ひましたが、夫は彼樣で御座います」ト、手拭を取出し坊主かぶりにして、褄をぢんく\端折にし、懷中より煙管筒を取出し、「此筒ははん天鷲絨と見せて、眞は綿天で御座いますが、染は上紺だと申します。ト、いひながら諸國行脚の旅僧といふ身にて筒を持ち、八筒々綿天じつく\めんてん、筒々めんてん眞々めん天、ヤどつこいく\上紺々々、ヤレく\草臥れた。ト、たちどまり、此處は何處だ、ハヽア棧とめ皮だな、ト、さんとめ皮のたばこ入を見せ、是はく\、かんせい縫な事で、糸々さみしい。そして日が暮れたと見えて、棧留がはまつくらだ。ト、皮の色を見せ、まてく\、向うに一點あかりが見える、ト、緒〆の珊瑚珠をすかして見、さらば彼處で一宿いたさう。ト、また筒をとりいだし、八筒々めん天、眞々めんてん、イヤつよく\綿天、じつく\めんてん、ヤ上紺上紺、どつこいく\、ヤレく\來たぞく\。ヤ何だ其處にある白いものは、エヽ氣味の惡い、こりやア骨だ。ト、象牙の根つけを出して見せ、ヲヤく\此處にも何かある、アヽア是りや脚だはの。ト、煙草入の金物の裏座へ出てゐるいかの先を見せ、此方の紺には骨があり、此方の裏座に脚があり、濃茶た

ものが御座いますから、この夜更に何物で有らうと存じて、徐と容子を見ますると、暗の事ゆゑ模様はしかと譯りませんが」ト、茶碗の模様を見せ、甘い湯ウだア引と申すものは、砂糖の湯で御座いましたが、目も見えぬ砂糖の湯を、あんぐりと口をあいて一飲にいたす化物が御座いますから、ハテ恐敷こと、彼は何の變化で有らうかと、段々穿鑿いたしましたら、砂糖の湯を飲みましたい、淨瑠璃天狗とまうす天狗ださうで御座います」ト、言ひつゝ手を伸べ行燈の明りを一筋消して戻れば、また居ざり出す下太郎が、「只今茶目吉さまが、砂糖の湯をのんだ淨瑠璃天狗のおはなし、偖々恐怖ことで御座います。夫に付私もサ、身の毛もよだち、足も縮身て歩行れません程な、怖敷めに逢ひました事が御座います。勿論女のことに付きまして、筑前の博多から」ト、帶へ指さしして、色も美しへ參り、此處は何といふ地名だと承りましたら、太宰府だと申しました」ト、ふところから財布を取出し見せ、して見れば是が聞及んだ、下財布かと浦の方を見ますと、ト、さいふの裏を出し、錢の浪もしづかに櫻の花なども見え、ト、額ぎんを見せ、亦山吹の花も御座います。ト、二朱金をだす、折から彼方より蒟蒻のやうな形でくだ〳〵致し、細く長い尻尾の下りましたものが、ちやら〳〵〳〵と駈出しまして、ト、財布の隅を持ち中の錢をならしながら紐を尾のやうにして引ずりまはし、此樣に跂けまはりますから、肝を潰して見ましたら、御覽の通り小紋も縞もない無地で御座いました。ト、財布の切を見せ、所が此サ、無地の貍の鳴く聲を聞きますると、紺々紺々と申します、ト、切の染を見せ、

たから、是が石塔で、そのサ、ヘン〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵せき十の蔭から、

ト云ひながらをかしな身振でたちあがり、

上るり「ありし廓の其儘に奥州がたち姿、「恨も戀ものこりねの、もしや心のかはりやせんと、思ううたがひ晴さんための誓紙をば、何故に煙となし給ふ恨めしや。中略「あさい心と白糸の染てくやしきなれ衣、ありしながらの一ツまへ、小褄そろへてひどけなく。

ト踊り歩きてそこへ坐り、「彼樣な化物が現れ出でましたから、偖こそ幽靈ヲ、恐怖やと、一ツちゞみに成りましたが、跡で能々思ひますれば、何ほせき十の蔭から出ましても、唄をうたひ踊を踊りましたから、幽靈では無くつて遊藝で御座いました」ト、六すぢのうちの燎心を、一節ひきて席へさがれば、茶目吉二番に居ざり出し、茶目「只今御亭主のお噺を承り、さて〳〵恐敷ことと、實に魂を寒からしめましたが、イエサ江湖上には恐怖いことのあるもので、私が目のあたり見ましたこと故、茶碗と書留めて置きましたが、ト袂より砂糖のはいりし茶碗をとりだし、所はたしか樂燒へんで、しかも朝貌の ト茶碗のなりを見せ、花もなくなり糸底淋しい ト茶碗のうちを出し、秋の末ツかた、しかも此樣に雨の降る夜で御座います、ト鐵瓶の湯を茶碗へついで見せ、また茶碗のふちを叩きながら、はるか彼方よりもの哀な聲を致して、茶碗〳〵〳〵茶碗々々茶碗々々と鉦をたゝきながら、甘い湯ウだア引甘い湯ウだァ引、茶碗々々甘いイ湯ウだァ引と、念佛を申してる

ン〳〵〳〵テレンコテン」茶目「どれ〳〵自己がお膳をすゑよう」と、片隅にある行燈を座敷の眞中へ持出し、油皿へ燈心を人數だけに六穗入れ、燈したてれば茶目吉が、「さア〳〵僉居つたり」と、一番二番の順をたて、六人ずらりと傍の障子の側に居ならべば、喜次郎ずつと摺出し、燈火の下に座をすゑて、高慢らしく頭を下げ、喜次「エヘン偖今ばんは連中うち野良七飛八の兩人、あやにく他出致しまして缺席ゆゑ、何やら不足のやうに思はれますれど、僥倖大愚大人の御來臨にて、急催の百怪談を企て、私は第一番とまうすお鬮に當りまして御座いますから、わんぐりと耳まで裂けた口あけに、大な眼の玉の恐怖いお噺を申し上げますから、ケタ〳〵とお笑なく、おん聞の程を希ひ上げます樣に御座います。偖ある時の事で御座いましたが」ト、言ひながら少し考へ、「はてナ是は不思議、どうして齒から血が出たらう」ト、思入ありて、「ほんに夫々、此齒から血の出たので思ひ出しましたが、先頃この血齒の」ト、言ひながら、齒の血を鼻へぬるまねをして、「赤鼻から目白の」ト、白目をだして見せ、「方へ參らうと存じて、何處やらの原を」ト、むねをひろげ腹を出して見せ、「通ります時分には、夜もしん〳〵と更けわたりました」ト、あたまのふけを掻くまねをなし、「すると傍に此やうなる流れ灌所がございますから、」ト、前をはだけふんどしのたれを廣げて見せ、「エヽ不氣味なと存じますと、何所をどう歩行いてか、荒寺の亂塔場は入つて居りましたが」ト、言ひながら、「ヘン〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵」と、せきをするまねをして、「彼樣に咳が十出まし

鼓「ナニ十二本いるものか、六本々々」茶目「ウヽム左樣よなア、十二本あつちア手妻でも僞るやうだ」大「イヤ風の惡い無盡でげすナ」喜次「ソラ／＼、六ツの鐘がぼヲンと鳴らア、今が大魔が時といふのだ」鼓「サア／＼鬮をこしらへた、御神じん／＼」下太「夫ぢやア行燈の皿へ燈心を六穗入れ、明りを付けて置いて、一番を引いた者が一番に噺をして明りを一筋消し、二番三番と段々順に行くのだらう」虚ろ「エヽしつこい、先刻あれほど噺」ト言ふを、喜次郎側から袖をひく故、虚呂松それと心付き、虚ろ「噺ッ鼻血がまた出たア」大「兎角洒落けでのぼせるでげすからナ」鼓「サア／＼引いたり、鬮を引いたり」喜次「大愚先生お前さんから」大「然らばお先へ引くでげすと申すと、義理の固い鼠が鏡餅へかゝつた樣でげすナ」ト、是より六人が鬮をひき、豫て謀みて置きたることゆゑ、何樣やら彼樣やら紛敷行つて、第六番を大愚にさづけ、彼擢りかへた鬮を取出し、喜次「イヨウ是は難澁、第一番の皮きりだ」茶目「自己のは二番だい」下太「第三番の幸吉で、兎角女難が多いといふのだ」鼓「此方は四ばん」虚ろ「自己は五人目」と各鬮の順が極れば、大愚は少し塞いだ顏にて、大「下僕が打どめへ回ッては、些失禮でげすから、座頭かぶに喜次郎大人か」茶目「ナニ／＼其りやア矢張おひはぎの時の例に習つて」鼓「大愚先生にかぎる／＼」と、寄つてたかつて押すくめ、虚ろ「然らばいよ／＼六怪撰が、百怪談のはじまりさやう」下太「チ

瓜や牛房のなア、夜食の道具だてになア」ト、是より酒のあひ〳〵に一人々々抜けて行き、一ツ目子僧木兎と、皆夫々に支度出來れば、秋の日いとゞ短くして、入相近くぞ成りにける。下太郎は折を見合せ、下太「ア丶醉つた〳〵、この醉つた威勢で、何か一趣向遣付けてへもんだ」歧「芥子づけの茄子ぢやア耐らなく醉りがいゝ」太「下僕も大酩酊、亂醉におよんで、恐れ入り山のヲホン霜のもみぢば、眞赤にならの八重櫻、池田いたみのお酒の香が、京九重に匂ひぬるかなッ、なんと妙ではげへせんか」茶目「ほんに匂ひぬるかなと言やア、夕然る家で、百怪談といふのを遣付けた左樣だが、中々おもしろかつたとヨ」下太「そりやア妙だ、此處でも今から遣らうぢやアねへか」歧「宜からう〳〵」喜次「大騷な事なら御免だぜ」虚呂「何のサ此くれへ竊りした事はねへ、噺をしては行燈の明りを一穂づつ消すのだものヲ」太「是は下僕も遣つて見たいネ」茶目「そら〳〵大愚先生も遣りたいと仰被から、初めろ〳〵」下太「面ふろい〳〵」歧「夫ぢやア酒のはうを、無官の大夫おつ盛として、飯を喰ふが谷の次郎直實々々」ト、是より六人車座に飯櫃のまはりを取巻きしが、程なく食事も果てける故、人々に立ちてあとを片付け、行燈を取出し、燈火をつけるものあれば、雨戸を操出すものありて、暫時混雑成しけるが、僉々やうやく落付きて、虚呂「サア是で安心だ」茶目「一二の鬮を拵へ樣」下太「六本あれば宜いだらう」茶目「十二本」

て寐言にでも」茶目「モウ〜〜いゝよ〜〜、もの言へば唇さむし秋の風だ、何でも口數が多いと襤褸が出るから、酒々酒にするがいゝ。ノウ喜次さん、今朝お前が湯に往つて、その歸りに内田から採つて來た正宗が一升サ。夫から先刻跂公がこゝへ來がけに四方から一升サ」へた「ア、アもの言へば唇さむし秋の風ツ、あぶない〜〜茶目公あぶない、人は言はねど我いふなか」茶目「ア、ムウ、酒々酒だ。近江がつもりぢやアねへ始めよう〜〜」虚呂「酒々世話しない、もう瓶子ツと待つがいゝはサ」下太「酒々しいとは盗賊上戸の事だア。まア猪口くりとお燗を見やうツ」跂「酒やア〜〜お猪口の來るのを待つかア〜〜」と言ふとき、下太郎猪口をまはせば、跂「占たア、かぶりとヲぐい呑だア橙かア、次の方へ讓り葉かア」と、虚呂松が前へ盃させば、虚呂「酒エ野暮から手でそツと差せば、無理な遊の花ねだり。アヽ、グウイグウイトかう一口に飲んで仕舞ツて、へイ大愚先生」ト盃回れば反身になり、大「ヲホン酒々ツ、ウムウ酒エヽエ酒に車を押すごとく、油斷をすると後へ戻るぞと、亦虚呂さんへお戻しだ」虚呂「酒のはうへ往かす酒さまに戻つて來るとは、酒の世からの能々深い因緣だらうサ」喜次「何の因緣か知らねへが、酒の下じやれは御免だ〜〜。自己の所へ來やうといふ盃が、後の方へ蜻蛉返をして仕舞つたア」茶目「人々に酒の側に計へばり付いて居ねへで、一件の支度に取懸るが宜いぜ」虚呂「夫が宜い。一件のお飯の胡

なァ、足袋といふ足へはく履物が、古く成つて汚れたから、濁りを付けてばきものと言ふのだが、汚れなければ履物サ、夫が汚れたからばき物よ、其處でその汚れた履物を繕つて貰ふから、ばき物拵へと言ふのだ」と、何やら事を紛らさんと、其處に有りたる燗陶器を、採るより早く振つて見て、「コウ〳〵しどい、自己たちを買物に出して、もう明店にしやァがつた」此時下太郎は買物の品を包みたる風呂敷を袖に隠し、竊と勝手へ仕舞ひ來り、下太「サア〳〵一盃遣らかさう」喜次「この酒は飲めねへ〳〵、夕お燗をした殘りだから」跂「喜次さんも自己もノ、それ足袋五先生も足袋屋の五兵衛さんと、夕飲んだツきり寢こんでしまつたのだから」下太「ナニ足袋屋の五兵衛」茶目「ソレ〳〵今お前が左樣いつた足袋五先生サ。ノそれアノ苔町ノ」下太「苔町の足袋五は分ツて居るけれど」茶目「足袋五がわかつて居るならば、夕ツから僉が寐込んで仕舞つたのも、足袋五同然の理屈だから、譯りさうなものぢやァねへか」ト、頻に可怪しな目付をする故、何やら知れねど下太郎が、解せたる振にて少し點頭、下太「フンウ左樣か。足袋五が來て、夕ツから飲倒れに寢こんで仕舞つたのか。其樣ならさうと先刻自己たちを買物に出すとき、左樣いへば宜かつた、紫金錠でも取つて來て遣つたものヲ」喜次「自己も跂公も夕ツから寐込んで、今目がさめたのに、先刻お前達が買物に出るのを、何樣して知つて居るものか」下太「夫でもせめ

騒しい。石町の大愚先生といふ大人が御來臨だッ」長「其して此處の三人は夕ツから寐入込んで、今日が覺めたところだからナ、ソレ左樣思つて靜にしろい」虚呂「ヘン人を遣に出して置いて、其樣へな勿體ねへことをいふと、牛房の切口で目を拵へた三目入道や、茶臺を冠つた罌粟坊主の一ツ目子僧に食はしてしまふぞ」下太「其して石町の大愚先生が御來臨だ、ヘン偏生が聞いて呆らア。あの鈍間は何時に來るといふことは心得て」ト言ひながら、障子をあけて入らんと爲るに、大愚が反身で濟してゐるゆゑ、下太郎ぎつちり行詰り、下太「ア、アヱ、ヱ茶ツ、ちや、茶目公、こけ町のたたヱ、た足袋五先生が何居るものか。アノそれ神、神田の苔町の足袋屋の五兵衛さんの足袋五先生サ、あんな鈍間はねへ、此間も自己が股引を誂へたら」虚呂「何をくだらねへ事を言つて、這入口を塞いで居るンだ、さつさと内へ這入ねへか。手まはしなして化物拵をして置ねへと、大愚が來てからでは間にあはねへワサ」下太「違へねへ、足袋五々々々足袋五が來ては間に合はねへ。ネヘモシ石町の大愚先生、お前さんもアノ苔町の足袋屋の五兵衛を御ぞんじて御座へやせう」大「苔町といふのは町名からして不案内サ、たゞし桶町の竹屋の四兵衛なら知己サネ」下太「ハテネ向では能存じて居りやすぜ」虚呂松も此時に大愚が聲を聞いてうろたへ、虚呂「たア、アノ足袋五が來てからぢやア、ばき物拵が間にあふめへ。アノばき物といふ

サ」と言ふに、大愚は首をかしげ、「ハテネ茶目大人も」岐「さやうさ」大「是はいぶかしい。エモシ茶目大人、先刻髪ゆひ床でお約束」トいはれて夫と氣の付く茶目吉、「左樣々々、かみゆひ床でお目に掛つた時、アノお前さんが後刻能樂亭がりへまかり出やすと被仰つたので、其の手筈の百ものがア、アヽアヽ、エヽしどい蚤だ、アヽ今日はめつきり雨が降るせへかして、十五日で御座いますナ。エヽエ何でも殘暑は秋に限ります、勿論この春なぞは」喜次「コウ〳〵お前、僉を寐こかして、髮を結ひに往つて知らぬ顏とは、ずるい〳〵」茶目「左樣さ〳〵、そして大愚先生にお目にかゝつて、後刻此方へお出の在るやうに、お約束をしたのだ。夫だから先刻僉に、エヽみんなに、アヽみんな左樣いはうと思つたけれど、寐入つて居るからよしたンだア」喜次「何にしても滅法に寐入込んで居たから」岐「自己も夕ッから些も知らずサ」大「果報は寐てまてといふところへ、大愚山人などといふ阿房が舞込んぢやア、近頃お氣もじ、エヘン些お氣の毒でげすナ。アハヽヽヽヽ」折から虛呂松下太郎は、買物調へ歸りきたり、格子を瓦落裡ひきあけて、入るや入らぬに大聲あげ、虛呂「サア〳〵化物を買込んで來たから、もう石町のもゝんぢいが出て來ても大丈夫だ」下太「喜次さん、下道の面は張子のにしたぜ。开して靑鬼の顋にやア奇妙といふ胡瓜が在つたイ。何でも一ツ目子僧の蛇の」喜次「エヘン、エヘン」茶め「何だ〳〵誰だ、何處の奴だ騷

妙竹林話 七偏人 四編巻之下

偖も喜次郎跂助は、茶目吉が早速の工風に、三人とも夕より酔倒れたる其まゝに、寐入りて居たりと大愚にいふ故、喜次郎と跂助も寐入りし眞似して在りけるが、思ひよらざる騒より、二人は周章起上るに、茶目吉は可怪しさを、やう〳〵腹へ落付けて、茶め「何様だ〳〵四十年の夢がさめたか」跂「しどい事をする、意地に成つて明いてゐた口へ」茶め「ほんにお前は夢の上が悪いから、兎角寐てゐて意地に成つたり何かするのヲ」喜次「堪忍〳〵々々。どうも寐入つて居てした事だから仕方がねへ」跂「寐言をいつたのなら、何様な失禮な事だつて當然だから、咎めるところは無へけれど」茶め「宜いわサ、愚痴ッぽい。何瀬みんなが夕ッからの酔倒だものヲ、何をするか知れやアしねへ」喜次郎は此時はじめて、大愚を見付けた振をして、「是は〳〵大愚先生、いつの間にやら能うこそお出で」跂助も泪をふき〳〵、「是は〳〵大愚先生、ア、胸の中が、まだくわつくわと焼ける様で御座います」大「それは〳〵。しかし下僕が此處へあがり、鰻魚で御睡眠の夢を裂き、何ともお氣もじ恐れ熬山椒カネ」喜次「夕ッから三人で此處へぐつすり寝こんだ成

ツ」と言ひつゝ起上る拍手に、茄子はつる〳〵と咽喉へはいりて鵜飲にし、跂「アヽホツホチウスウ〳〵ホヲウ〳〵」茶め「ハヽア此奴は妙だ、アハヽヽヽア。それ跂公涎が、アヽ夫々喜次さんの顔の上へ」トいふ時、跂助ぬる〳〵と、寐入つた振の喜次郎が、額の上へ涎をたらせば、喜次郎も耐りかね、「アヽアこの愚鈍アわ」と飛起きる。跂助はなほ、「ホウ〳〵」といきを向うへ吹きながら、泪をほろ〳〵飜して居る。喜次郎は是れを見て、喜次「どうしたンだい汚らしい」ト、額の涎を袖にて拭けば、跂助も泪を拭き、「何様したも押が強へ、串戯にも程があらア」ト、二人の者が爭ふを、傍に見て居る大愚と茶目吉、こたへ兼ねたる可笑しさに、思はず腹をぞ抱へける。

けるか知らん。チヤ〳〵喜次さんも下太公も白川夜船だ。アツア、」と無理無體に欠をしなが
ら、「ドレ〳〵口でも嗽がうか」と、障子をあけて表を見遣り、茶め「イヤ是は大愚大人、追はぎ
以來で御座いました。大分早朝に、イヤもう夕ッから飲續けでぐつすり寐込み、何か出放題に寐
言をいつた樣子だが、些も知らずサ。さア〳〵此方らへ」大「道理こそ分らざる倫言と思つたが、
莊周が夢に盧生が寐言とはありがたい。兎も角も一服いたゞき山としやせう」ト上り來り、「イ
ヨウ何さまなア、喜次郎大人も跛助大人も、大分よくお寐込でげス」茶め「イヤもう大鼾サ」と言
れて跛助仰向になり口を明いて、「グウ〳〵ゴウ〳〵シユウ〳〵」茶め「アレ彼通りで御座いま
す」大「イヤ彼樣に口を明いて寐た顏といふものは、破家げに見えるものでげんす」ト、聞いて
跛助意地になり、なほあんごりと口を明き、「グウ〳〵ゴウ〳〵」此時喜次郎が額の上へ、蠅がと
まりてむづ〳〵する故、顏などしかめて追つて見ても、鼻の近所や目の緣を飛廻りて動かねば、
寐がへりをする振をして、手を礑りと向ふへやると、膳の上の丼へ指の先がひつかゝり、脇の
方へ刎飛すと、丼に入れ置いたる芥子漬の茄子が飛散り、跛助が意地になり開きたる口へほつ
たり這入れば、跛助は何ならんと、ゴヲ、〳〵言ひながら、舌にて探つて見やうとすると、甚に
も利きたる芥子なれば、鼻から天窓へ一たんに、辛さがツンと突きぬく故、跛助は肝を潰し、「ア

て咳ばらひ、「オホン大人御在庵かナ、石町の變物でげす」ト聞いて裡なる三人は、虚呂松と下へ太郎が大愚の眞似をすると意得、喜次「ヱ石町の愚鈍人そのまゝぢやアねへか」茶め「おつう音聲を遣やアがつたつて、左樣うまく往くものかッ」大愚は少し聲を張上げ、「大人いかゞ御在庵かナ」跂「出ないヨ」大「出ないとの辻占なら御在庵と見えるッ」茶め「鬼の顋にする胡瓜と三目入道の眼玉にする牛房は、臺所の方へ廻して遣らッし」大「イヤ八百屋では御座せん。鬼の按摩みそか入道などとは情ない、石町にすむ大愚なるものでげんす。御在庵なら漫に推參」と言ひかけて格子を瓦落裡と引開ければ、茶め「アヽ這入ちやアいかねへ」大「でげすかな、何ぞお差合」喜次「石町のもゝんぢいが來たら、茶うけの餌食に燒麩の付やきでも喰せると、オホン是は名菓、アメリカは製しが別でげんすなどといふから、序に三ッ四ッかけて來て下ッし」大「ハテ下僕が町内には、鰻魚を商ふ店はあるでげんすが、山鯨を賣る店は見當らなんだ。幵して金魚とひとしく山鯨も燒麩なる物を食しますかな」跂「まだ彼樣なことを言つて居やァがらア」と、障子の穴から覗いて見て、跂「ヤ、正物だ〳〵」喜次「ヱ眞正か」と是も覗いて天窓をかき、「ヲヤ〳〵〳〵こいつは大しくじりだ」茶め「僉が寐言のふりにするから、早く其處等へ寐轉びねへ、自己がうまくまじくなをう」と二人を寐かし、茶目吉は今目がさめたといふ振で、「アツアヽ引もう夜が明

出し、お茶を上れと出す茶碗に、大愚はわアッと驚いて、床の間にある脇差を採らうとすると、何時の間にか下太公の木兎が、掛物の下に蹲踞んで、置物の化物と成つて居る故、こりや耐らぬと逃出して、障子を瓦落裡ひきあける、向うにぬつくと立ちはだかつた跂公の三ツ目入道、南無三寶と引繰返せば、彼方の隅から虚呂公の青鬼が現れ出るので、こけつ轉びつ表の方へ逃出して、履物をはかうとする途端に、喜次さんの赤合羽が、ハイお迎と言ひながら、外道の面で出かけて見なせへ、腰を抜すに相違なしだア」跂「奇妙々々奇々妙々。早く支度に採りかゝらう」虚ろ「自己ア買物をして來べい」喜次「手遊屋と八百屋へ行けば調ふだらう」茶め「虚呂さん顔の分もだぜ」虚ろ「チツト承知」下太「自己も一所に往くべい」跂「夜食の支度はどうするつもりだ」喜次「些ア仕込をして置いたから夫で宜いとするサ」虚ろ「そんなら下太公往つて來やう」と、二人は表へ出でて行く。跡に喜次郎、茶目吉、跂助は、戸棚はひちやう引あけて、膳皿小鉢を取出し、酒の燗など付けながら、喜次「百怪談もいゝが、長崎から強飯が來たぢやア可笑しくねへから、人人に一趣向づつ在るとしやうぢやアねへか」茶め「いかさま其事だ」跂「自己ア先から左様思つて居るンだ」喜次「お燗が出來たぜ」茶め「一日小僧からおつ始めやう」ト、是より三人は酒を飲み、何か相談して居る折から、表へのつそりかゝる大愚が、格子のそとから裡を覗ひ、反身に成つ

辨慶縞の小夜著を著こんで、のつし〳〵と現はれ出でた有樣は、實に化物の座頭株と見えやうが」下太「牛房の切口ぢやア、目で無くつて尻の穴が額に有るかと思ふだらう」下太「左樣さ、ぢたいの口も尻の穴の樣に見えるからなア」喜次「エヽ其處で下太公、惡口よりやアお前の化方は」下太「自己の化けやうか、アヽ自己の化樣は、天窓へ菓子袋をかぶり耳の所を尖らせて、饅頭の餡をとり、皮の眞中へ穴をあけ、見える樣に拵へ、目の上へ張付けて、其饅頭を目と見せ、喜次さんの持つて居る羽根で織つた紙布を著こみ、木兎の化物に成る積りだが、どうだ〳〵」茶め「こりやア請けた、生のもの〳〵」虚ろ「口の尖と人の行末、何處で役にたつことが有るか知れねへものだなア」跂「サア〳〵喜次さん、お前の趣向を聞かう〳〵」喜次「自己は化下手な上に化けこぢれて仕舞つて、何分にも甘い思付が出來ねへから、外道の面を冠り、古ツ手拭で頰ツかぶりをして、赤合羽を著こみ、手遊の箱提灯をもち、下僕の化物に成つて、へイお迎ひで御座います、とか何とか言つて出かけるとしやうサ」茶め「有がてへ、能くも惡くもそろつた〳〵」下太「大愚の唐人めが氣味をわる〳〵、六本目の燈心の明りを消すと、四邊は忽地しんの暗、折しも雨はそぼ降り出で、遠寺の鐘の鏗々と、もの凄まじく聞ゆる時、一陣の風さつとおろして欄間のあひだ、何となく撥と明く見えるを相圖に、茶目公の一ツ目子僧が、百目がけの蠟燭を點して、ちよろ〳〵持

飯と取りかへた柿の實を採るとつて、かち〳〵山の土船で見物して居て、下足を八文とられたとヨ」彌「フヽムウ其時だ、築地に火事が無くつて、萩畑で野猪が寐ぼけたら、芋虫が灸をする樣として、阿彌陀さまの背中へ線香の灰をおとしたもんだから、番太郎で拍子木をたゝく樣になつたのは」虚ろ「何でも犬がもう〳〵と斷いたから、是は烏鳴の惡いことだと思ふと、銚子の濱で束埔塞がとれたといふ評判。夫を思ふと地獄の沙汰も金次第で、何も日輪さまが東から西へ繩わたりをして見せやうといつて、世界〳〵を土間に仕切つたといふ譯ぢやァ有るめへし、彌次喜太八が階子を買つたのを怒つて、曾我五郎十郎が義太夫をならふにも及ぶめへサ。夫とも僉が奢るといふなら、了簡をしねへといふ譯でも有るめへ」喜次「其樣な詰らねへことを言つて居るうち、大愚が出かけて來て、較計が取違てしまつても知らねへぜ」茶め「そのサ、大愚が取違ると、どぢやう汁と間違たつて、辨慶の力にやァ及ふめへと思うけれど」下女「五月蠅々々」陸「然らば某の化方を披露におよばう。エヘン先天窓を淺黃の手拭でぐる〳〵と包んで、坊主といふのに成つてサ」茶め「夫ぢやァ自己のと突くやうだぜ」陸「はてサ無言で聞いて居さつしナ。アヽ其處で牛房を輪切にして、切口を額の眞中へ張りつけ、その上の方へ燒蕃椒を横にくつ付け、牛房の切口を眼、燒蕃椒を眉毛と見せて、三ツ目入道と變がはり、喜次さんの例の大

やア眞正だ。自己なんざア嚴然と趣向が付いて居るから、大人氣ねへことは言やアしねへ」再次「フムウ夫は近頃お早いお手際だ」虚ろ「其くせ趣向は澤山だ。先化け方は、此白い顔を惜しいもんだとは思ふけれど、其處が趣向と諦めて、綠青といふやつで眞青に塗つて仕舞ひ、胡瓜のなるたけ疣々のある所を削いで取り、眉毛と口の兩脇と顋のまはりへ緊り張付け、大きな烏芋の尻を切つて捨て、取手の尖を角にして額の兩方へ生かし、著付が柹染の筒袍か何かで、青鬼のいで立といふのは、何と凄い拵だらうが」下太「鬼になるなら著付なしの丸裸身がよささうなもんだ」虚ろ「はだかもいゝけれど、虎の皮の犢鼻褌といふのに違却するからノ」下太「三毛猫を腰の所へ縛り付けて置いたらば、虎の皮のふんどしと見えさうなものだ」虚ろ「左樣しても宜いけれど、犢鼻褌がごろにやアごなんのと啼出したら可怪しなものだらう」下太「ナニサ啼いたつて犢鼻褌だとは思ふめへ、ふんどしに居る虱が啼いたのだと思ふだらう」虚ろ「虱に啼くといふのが有るものか」下太「けれども、鬼の虱だから、鳴かねへとも言はれめへ。既に刀劍鍛治の名に、鬼の虱鳴やすといふのが有るぢやアねへか」下太「そりやア波平行安といふのだア」虚ろ「ハヽア少しの間違だ。全體先の辻番で教へ樣が惡いからサ」茶め「道理で虎は雪隱へ逃込んだのを、和藤内は大門をはいつて、仲の町の方へ追蒐けて往つたつけ」下太「夫をサ、猿が花さき老父の握

て、張付けた蛇の目の傘を眼と見せて、一ツ目子僧と身を變化、肩あげや腰あげのある著もので、胸高に〆た朱いはぎの有る帶から、守袋をぶらりと下げ、片手には燭臺片手には盆の上へ茶碗を乘せて、ちよろ〱ちよろと持出し、モシお客さんお茶をあアがアれと言ひながら、舌をべろりと出して見せれば、大愚はキヤアツと言ひながら筋斗るに違はあるめへ」跋「甘味甘味、こいつア妙ちき」喜次「如才はあるめへが、ちよろ〱ちよろの時は、爪先で歩行ねへといかねへぜ。都て變化は爪立て、歩行くがいゝと、梅壽の菊五郎が左樣いつた」茶め「ヘン化物道のことならお心添にやア及ばねへ、此間も古い煙管の雁首を、ヤツカラカンの鮹と化し、丸くすぼんと穴の明いた古犢鼻褌を屑屋にはらつて、海老の天麩羅するめの揚げたて、チツト其時だ、するめだと思つて、青蕃椒の揚げたのを喰ひこんで、辛さ〱監へ出しても涎が出らア」跋「ハヽア。イヤお前が青蕃椒を喰つて涎をたらすところの御面は、お十二銅ぐらゐのお初穂なら、駈付けて往つても拜みたかつた。先その顔を物に嘗へて言はうなら、張子のお達磨さんへ雨漏のかゝつたところを、家の中病氣が踏みつぶしたといふ血色だつたらう。何と芥子坊主よりは、青蕃椒を喰ひながら出たはうが、人好のする變化が出來やうと思ふぜ」茶め「ヘン趣向の付かねへ奴と、情合の出來ねへのに限つて、人の趣向ばかり雙べやアがらア」建ゐ「夫り

出すを相圖に、天井乃至縁の下から、思ひ〳〵に現れ出でようといふ段取サ」喜次「何さま左様すれば夫もいゝが、併各々に變物の思付が」𧾷「ヲツト有馬の水天宮といふところから思付いて、天狗に成らうといふのだが何樣だらう」虚ろ「ウヽツその鼻でか」茶め「天狗といふものは、鼻の高いことに極つて居るところへ、飛切世間無類といふ低いのが現はれたら、天狗の變りものので變狗だと思ふだらう」𧾷「チョツ人の付けた趣向といふと、直に怪知を付けやアがらア」虚ろ「面不相當なことを監げへちやァ、側のものばかり怨んで居やァがらア」𧾷「ナニ面不相たう、へン自己の面に相當した化物といふが有るものか、但し面に相當したことが爲せたければ、業平の朝臣とか、光氏の君とかいふ役を當てるがいゝわサ」下太「ドレ其顔でか」茶「エヽイ不景氣な人の面を覗くなイ」茶め「ヲツト妙らい、うめへ趣向を監へつけたぞ。エヘンと、先彼樣に咳ばらひをして置いて、モシ喜次郎はんへ、吾儕が燭臺を持つて出やんすから、まァ左樣思つてお呉んなんしと、藪から棒に言つたつて、愚痴蒙昧なる逆賊どもには釋るめへが、抑自己の化方といふのは、空色の手拭で天窓の髮をくるりと包み、まづ坊さんに成つて置き、その坊さんの天窓の上へ、黑塗の茶臺を冠り罌粟坊主に拵へこみ、手遊の蛇の目の傘の柄をとり、鼻と額の間へ張付けるのだ。もつとも傘の紙の程よき所へ穴をあけ、其處から眼の見えるやうにし

此處にまア五人居るとしてサ」虚ろ「居るとしなくッたつて五人だアな」茶め「ヱヽイ五月蠅五月蠅。アヽ其處で五人の中へ大愚を雜ると六人になるから、六本圖を拵へ、六本ながら六番といふ記を書いて置き、また別に一番二番と書いた圖をこしらへ、夫を隱して銘々に持つて居て、本圖を引いてしまふと、隱して持つて居る圖と摺かへ、自己は一番だ自己は二番だと言つて出すと、大愚ばかりは取替へねへから、六番で打留になるといふ手妻はうめへ理屈だらうが、實に當時の智惠しや、ヲホン知らねへ事が有るなら、些聞きに來さつツしッ」喜次「フムウ成程さういふ理屈にして、大愚を打留へ廻せばいゝ。だが眞暗に成つて居る所へ、化物になつて出たつて、此方の姿が見えなくッちやア詰るめへが、其處には趣向のあることだらう」茶め「眞暗な所へ、無言で言かけちやア分かるめへけれど、ハイ此方の隅へまかり出でましたは、番丁皿屋敷似の幽靈で、次にまかり出でましたは鬼で御座い、噓だと思ふなら手を出して天窓を探つて御らうじろ、薩芋で拵へた角が額に有るで御座いト、一々名のるといふ」下太「ヱヽイ默つて居ろイ」茶め「アヽ痛た、此野郎人の面を突飛したな」喜次「これサまた騷ぐよ」虚ろ「其處で下太公何樣いふ工夫が有るのだ」下太「まづ各々に了簡どほりの變化になつてサ、その變化の內から一番安ッぽさうに化けたものが、燭臺へ百目かけの蠟燭をとぼして、ちよろ〳〵と座敷の眞中へ持

ア丶夫から」跂「明りを付ける燈心が百筋といふのは、百怪談のお定りだが、百筋にして、もし眞正に化物が現れ出でた日はや、大騷動だから、燈心百筋といふ所を」茶め「先には行燈を百筋だつけ」跂「チヨツ默つてゐろイ」と白眼みつけ、「ア丶其處で百筋といふ行燈を、其座の人數だけに減じるのだ」虚ろ「夫ぢやァ五人人が居りやァ、行燈を五ツ出さうといふのだらう」跂「エヽイ行燈ではねへ、行燈の油皿の中へ入れる燈心を、人數だけにするといふのだワ」虚ろ「自分が雜こぜに噺して置いちやア、紊れて居やァがらア。第一行燈といふからして釋らねへワ」跂「何故行燈が釋らねへ」虚ろ「左樣出て來るなら伺ひませうだが、行燈の燈とは何樣な燈だ」喜次「亦はじめるヨ」下太「もう〳〵雜ずに聞きツこだ」喜次「其處で」跂「燈心を人數だけとして置いて、その燈心の數だけ鬮を拵へ、その鬮へ一二を書いて、一を引いたものは、一番に化物ばなしをして、一筋の明りを消し、二を引いたものは、二番に化物ばなしをして亦明りを一筋消すと、如斯順に消していき、仕舞の番に當つたもので殘らず消し、眞暗にしやうといふのサ」喜次「フムウ眞暗にして」跂「而して後に自己たちが、忽然と異形な妖魔に身を變じ、大愚先生を驚かしめやうといふお茶番だが何樣だ〳〵」下太「こいつア隨分面くれへ、遣付けべゑ〳〵」喜次「しかし大愚先生を仕舞へまはす段どりにしなくつちやァ可笑しく有るめへ」茶め「其樣ならば彼樣するがいゝよ。

つた犬の糞のかたはらを、跣で歩行くとかいふ様な事を言やア宜いのか」跣「成程はなせねへもんがアだぞ。コレ能聞けヨ」虚ろ「應よく聞かう」跣「只今氣味の悪い談話と言つたのはナ、魘敷恐怖い噺をすることだワ」虚ろ「氣味の悪いのいの字は、いろはのいの字を書くのか、らむうゐのゐの字を書くのか、又魘敷とは出の悪い漬菜の類か、恐怖いとは親父ばかり存る子供の言辭か」下太「チヨツ宜い加減にしねへのかイ、騷々しくツて成らねへツ」虚ろ「夫でも能く聞けヨといふから能く聞くのだア」茶め「宜いサいよサ」下太「ノウ喜次さん、跣公の思付にしちやア、百談話といふのは近來の大出來だから、大愚の唐人が來たら、引つらめへて押ばじめるとしやうではねへか」跣「ナニ跣公の思付にしちやア、ヘンちやアとは何の事だ、ちやアが氣にくはねへワ」茶め「ちやアでは氣にくはねへのは尤だ、三六のでも宜いから酒にして貰はツし」下太「また口を出すヨ」虚ろ「ちやアでは御免だが、酒ならば自己も口を出さう」喜次「百怪談も宜いけれど、魘敷はなしをして、明りを一筋づつ消すばかりぢやア詰らねへが、何れ其處にやア」跣「趣向は十ぶん有馬山、否といふかは知らねへが、先掻つまんで言はうなら、大愚が例の臆病から思付いた百怪談で」茶め「喜次さんや飛公だつて、餘り氣丈夫といふでも有るめへ」跣「しかし今度は自己といふ、強者が味方に付いて居るから」喜次「よしサ〳〵お前はきついヨ。

妙竹林話 七偏人 四編巻之中

然る程に能樂亭には、茶目吉、虚呂松、下太郎、跂助、四人の者ども打集ひ、主人の喜次郎諸共に、相も變らぬ偶談の、果は何やら一趣向と、思ひ付いたる下太郎が、進めに跂助膝をよせ、「コウ〳〵聞かツし、ゑらい趣向を思ひ付いたから」茶め「横町の兩替屋へはいる盜賊なら御免だぜ」跂「まアサ聞かツしナ。ヱ下太公、この秋雨の極森閑と淋しいとこから思ひ付たのだが、大愚が來たら晩まで引留めて置き、百談話といふのを押ぱじめ、驚かして遣らうといふ狂言だ。其處で其百談話と云ふのは、燈心の中へ行燈をずらりツと百筋入れて置いて、人々に氣味の悪い談話をしては、其行燈を一筋づつちよい〳〵と消して仕舞はうといふのだ」茶め「成程おもしろい趣向だ。しかし燈心の中へ行燈を百筋入れやうといふのは、餘程の傳授ものだらう」跂「何故々々、燈心の中へ行燈」ト言ひかけて少し監へ、「チヨツ聞下手めヱ、つまらねへ所で言辭咎をしやアがらア」跂「いゝから言辭とまけと言ひねへ」虚ろ「まアサ咎なら祟とさして置いて、其處で氣味の悪い噺といふなア、湯屋の流で赤膏藥を踏みつけたとか、雨に打たれて消けかゝ

いふと青物盡の自慢を言やァがるからいゝ」戯ろ「厄拂のか」茶め「先刻逢つたら後刻能樂亭許へまか出やすから、尊兄にも些と音信給へなどと言やァがつたから、急度今に出かけて來るぜ」下太「何をか一趣向計較んで、追剝の敵をとつてやらうぢやァねへか」喜次「手前が賴んで定九郎にして置いて、敵をとるもねへもんだ」跌「違へねへ」茶め「此野郎も當人で在りながら、餘所餘所しい」下太「イヤサ當人は當人だけれど、自己ッちのするのは兄弟喧嘩で、大愚は赤の他人だアな」戯ろ「大愚ならば馬鹿の他人だらう」跌「ばかの田螺をいつて貰ひてへ」下太「何にしても仕返の工夫が在りさうなものだ」喜次「また仕返といふよ、押の強へ」戯ろ「あるぞ〳〵」下太「何樣いふ工夫だ」戯呂「工夫ぢやァねへ、蠅帳の中に唐饅頭がサ」折から表で、「チホン」茶め「そから來たぞ」

すなッ」─盧ろ「同じ欠をしながらも、噫々しん氣臭いとて達摩氣を出すなとか何とか云へばいゝのに、働きのねへ」─喜次「自己ならつばな摘むとて笊氣を出すなト言ふけれど」─茶め「ホンニ達摩氣エヽ笊氣ぢやァねへ、惡氣といやァ横町の兩替屋へ這入つた、盜賊は甘くやらかしたぜ、先斯ういふ鹽梅しきに」─ト袂から手拭出してくるりと冠り、尻を端折ツて立上り、「テチツテチヽチンチン」─と言ひながら、無言狂言の身ぶりにて、其處等近所を搔さぐり、段々蠅帳の傍へ行き、蠅帳の戸へ手をかけて、「フヽム是こそ兼て覺えの寶藏、ありがてへ忝ねへ」と言ひながら、開きを明けて手を突込み、菓子皿に殘つて居た唐饅頭を引つかみ、二ツ三ツ一どきに、口の中へ頬ばれば、喜次「エヽ此盜賊は眞正の噺かと思やァ、とんだ事をしやァがらァ」─茶め「饅頭もむがいが自己の趣向も甘いだらう」─盧ろ「夫よりか新道の質屋へ這入つた盜賊の方が」─喜次「モウ〳〵盜賊の噺をする奴にや科料を出させるぞ」─跂「下太公が追剝のお茶番此かた、連中の人氣が惡くなつて困りきらァ」─ト言ふ時、障子を瓦落裡とひきあけ、下太「ヘン下太公がもねへもんだ、手前の音頭とりでやつたくせに」─喜次「麥湯の婦人も追剝さわぎで、何樣やら斯樣やら蹴散かして仕舞つたなァ」─茶め「しかし彼時にやァ大愚大人もなか〳〵妙だつたぜ」─喜次「都路の行くほどはか何かで、强氣と人をおびやかしやァがつた、忌々しい」─跂「彼からいよ〳〵天狗に成つて、何ぞと

に成つてでげすから」下太「夫がいよ〳〵眞正なら、憚ながら一寸はいけん」飛「お月様の方へ向つて捲ねへと、手暗がりに成つて拜不見だらう」喜次「何にしても一寸お見せなせへ、無くちやア大變だ」大「然らば御高覽に預りやせうか」ト著物の裾を引捲れば、喜次郎は覗きこみ、喜次「成程何さま犢鼻褌のうちは、明店に成つて居るやうだが、脇の方から大分大きな尻ッ尾が如縋り顔を出して居やすが、萬一夫では御座へやせんか」ト云はれ、大愚は懐中から徐と手をやり、股ぐらを探りちらして苦笑ひ、大「イヤ是は本棹の方は探られやしたが、ヲホン掛替の方が殘つて有りやした」ト、是にて一同笑と成り、いざ歸らんといふ折から、明六の鐘ボヲン、鷄の聲トッケコウコウ引。

東西々々、さて是までは第三編の趣向の居のこり、是から先が四編の幕明、その爲口上ちよつくりさやう。

○

光陰は矢竹に戰ぐ風さへも、いつしか秋の聲寂びて、昨日には似ぬ涼しさに、破れ障子も世に舉げられし、火桶もほしき雨の日の、徒然なるを慰めかね、青柳橋の新道なる、能樂亭に打まとふは、相も變らぬ茶目吉、燒呂松、跛助は大口あいて欠をしながら、「噫あゝつまらないとて惡氣を出

ちに廻らす所へ、下太公が辷つて轉んで、自己の天窓へゴツキリと、凸凹頭のさい槌を、打付けられたが運の盡、はつと思ふと其儘に」趾「腰のつがひが緩んだのか」飛「何の人ヲ、緩むといふが有るものか」趾「夫なら早く立たッしな」飛「抜けて仕舞つたのだものヲ立たれるものか」茶め「チヨツ厄介なことを云やアがるぜ。ドレ〳〵自己が立たして遣らう」と、手を捕へて引立つれば、飛八はやう〳〵と顔をしかめて立上る」虚呂「ドレ歩行けるか歩行いて見な」下太「歩行は上手、轉ぶは自己の名でお下太やお下手」趾助も手を叩き、「こゝまでお出で甘酒しんじよ」茶め「其くれへ歩行が出來りやア、彌次兵衛さんの御厄介に成らずとも濟むさうだ」飛「坊はお白湯ちやんと抱子ちて往きたい」虚呂「イヤはや穢い面つきで、其樣に腰が伸びねへのか」喜次「大愚先生は何處へ往つた」大「ヲホン是に在菴」野良「イヨウ大愚先生も可笑な腰ッ付をして、开して何を散眼々々さがして居給ふのだ」大「彼親爺めにもぎられものを致してげすから」野良「ナニ把られものを被成つたヱ」大「イヱサ悴めを、ヲホン把りとられてげすから、其處へらに轉り落ちては居りやせんか」下太「ヱ悴とは得手を把られたのかネ」大「でげす得手を無くしました」喜次「馬鹿なことを云つたものだ、竹の子か何かぢやア有るめへし、引コ抜けてたまるものか」大「イヤサ大人しかの給へども、眞以て」ト股へ手を入れ探つて見て、大「犢鼻褌のうちは空蟬の、殼風呂敷

著て居るものは、ソラ夏もお小袖といふので、お茶番だといふのは察しるがいゝぢやアねへか」と云はれて親爺も納得するに、喜次郎は苦笑ひ、喜次「串戯も程があらア、愚鈍らしい。丌して大愚先生は、ふかしたてのかしう玉といふ風に、ぽつぽと煙を出して居るぢやアねへか」下太「その筈サ、裸でさへ凌ぎかねるといふ暑さに、お綿入を召しての細打だものヲ」喜次「いやはや呆れてものが云はれねへ」のら「忌々しい不洒落をしやアがつて、自己ア地が濡事やつし方だから、此様なことは蟲が好かねへワ」茶め「喜次さんはじめ是程のよわ蟲、夜入道ぢやアなからうと思つて居た」下太「お麥嬢もお白湯ばうも、自己の仕打が凄い程に甘へのだから、嘸恐怖かつたらう、可愛さうに」虚呂「チイ飛公、はやく帶でも〆さつしナ。居小便たれをしたといふ尻ツ付で、何故地平に居込んで居るのだ」飛「夫でも何様も立つ事が出來ねへものヲ」下太「腰抜ぢやア有るめへし、立たれねへといふことが有るものか」飛「ナニ腰抜ぢやア有るめへし、ヘンおるめへしも押がつゑよ」喜次「夫ぢやア眞正に腰が抜けたのか」野良「何の面白くもねへ、腰の抜けるといふお茶番があるものか。飛公が氣の強いので、無智短才の奴ばらに、少しく不覺をとつたのだものヲ」飛「丌りやア了得に強勇の自己だから、帶もやり衣物も脱いでやつて仕舞ひ、十分油斷をさせて置いて、一人も殘さず丹波の國の荒熊同前に、生捕つて仕舞うといふ謀計な、帷幕のう

早く持つて來い」太「アヽいたヽヽヽ、下太さん早く助けて呉れ。跂さん是は情ない。アヽいたヽヽヽヽアヽいたよ」と、苦紛れに豆賣の、鬢の邊へむしやぶり付き、兀た天窗へ喰付けば、豆賣老火は歯を喰ひしめ、眞赤に成つて顔をしかめ、泪をほろ〳〵飜しながら、「いたいぞ〳〵、アヽこれ、自己らが天窗を喰欠いて、月代までも追剝がうといふ存心だな。アヽいたヽたヽヽコレ野郎」と、二人のものは死身になり、摑合たる大聲に、下太郎と跂助は、世間へ知れては悪しからんと、思へば中へ立入りて、下太「老公コレサ、まア此手てを放しねへ。自己達は洒落の追剝だから」と、止めんとする出合頭、老父と大愚は組合ひながら、滄浪〳〵々傻償けて下太郎が、體にどつさり打付かれば、却含に彼方へおし飛され、宵に蒔きたる打水の、溜に足を辷らして、仰向さまにどつさりと、轉べば生憎飛八が、衣物を脱いて蹲踞ひたる天窗と天窗がゴツキリと、當るに飛八仰天し、「ヒヤウ、アツたヽヽヽ」下太「アヽいたヽヽヽ」茶目吉、盧呂松、跂助は、老父をやう〳〵引放し、大愚をわきへおしやれば、喜次郎も此時に、追剝の者どもは、下太郎と跂助が仕返なりといふを氣が付き、共に親爺を止れど、老父はなか〳〵承知せぬ故、跂「コヲ爺やア、眞正の追剝でねへといふ證據は、コレ此通りだ」と大愚が天窗に冠りたる鬘をほつかり探つて見せ、「此樣な馬鹿げたとん間な面で、何樣して荒事が出來るものか。丼して

耳へは這入らず、只ぐわた〳〵と震ひながら、帶引ときて其處へおき、衣服も徐々脱ぎかける。後方に蹲踞みし豆賣の、老父は元よりきかぬ氣故、さいぜんよりして隙あらば摑付かんず勢にて、身構なすとは夢知らぬ、大愚はいよ〳〵興に入り、今一言辭と考へて、幼稚時に習ひたる手本の讀を思ひ出し、したり顏にて咳拂ひ、「ヲホンあゝら目出たいな、ヲホン目出たいな、目出度今宵の追剝に、五十三次宿々の、名寄で最一ッ威張ましよ。都路の行くほどは、五十路あまりに三ッの宿、時えて咲くや江戸の花、浪しづかなる品川や、やがて越えくる川崎の、軒端雙ぶる加奈川は、早程ヶ谷に程もなく」と、刀の柄へ手を掛けて、足八文字に蹈開き、首を振立て振まはし、眞赤に成つて云ひたてる、隙を付けこむ豆賣の、老父はつつと走り寄り、物をも云はず手を伸べて、大愚が胸を突飛せば、大愚は愕り仰天し、「ヒヤウ何する」と蹣跚ところを、大愚が股へ手を突込み、陰囊探へて締めんとするに、彌愕り狼狽て、「ア、下太さん、ア、これ何をする、ア、これ」ぢゝ「山猫村の佐五十が、追剝の大將を生捕つたぞ」大「エ、この老父、ア、下太さん、エ、陰囊」ぢゝ「何の是、陰囊も下太だまも入んねへぞ」ト、何樣やら彼樣やら股へ手をいれ、陰囊と間違へて、ぶらりと下りし陰莖を鰻魚摑に引握り、犢鼻褌ぐるみ捻上げられ、大愚は顏を顰めながら、「ア、いた、、、、エ、人殺しイ、ア、人殺しイ」ぢゝ「サア大將を生取つた、繩さア

し、命は泥鰌おたすけと、合せ鱵の手の平で、念牟豆魚串して鰻魚たうへ、裸に成つて衣服を鱶、古かね買に鰤こかし、酒屋へはこぶ錢龜や、お女郎買の金干烏賊だア」ト、身ぶりで白眼ば大愚も圖に乘り、端折りし裙をゆり直し、刀の柄へ手をかけて、何か云はんとしたれ共、根が不器用な生れゆゑ、口をむぐ〳〵爲るばかりで、一言半句も出でざりしが、不斗思ひ出し越年の、晩に聞きたる青物盡、是僥倖と咳拂ひ、「ヲホンあゝら目出度な、ヲホン目出たいな、目出たき今宵の追剝に、青物盡で威張りましよ。ヲホン一夜明くれば元日で、門には松茸しめ菜、山葵、羽子薯蕷と、ヲホンあね山椒、二日はおたから蓮柚めに、三ッ葉蒲團を敷かさ葱、ヲホン二ツ竝べた眞桑瓜、旦那は柬埔塞の大あたまへ、彼蓴菜のぬらめきを、胡桃々々と付蕪、御新造さまは混布卷の、オホン帶を解く手の早蕨に、海蘿の紙を揉大根、そろ〳〵根芋や人參に、サア新牛房しね生姜と、既にあや款冬その折から、惡魔外道は蕃椒、ちん鳳れん艸おつ蓼て、鳥芋とこから冬瓜の、白粉つけた顏を出し、何を茄子といふ所を、八百屋の小僧が掻いつかみ、茗荷たけとは思へども、大薩摩芋でころり〳〵と、おん厄拂つて、ヲホン置いて往けサヱヽ」と、又も天窓を振まはし、ぎつくり白眼む可笑さに、下太郎、跂助、茶目吉等は、吹出す口を手で押へ、暫時はものをも云得ざり。喜次郎、飛八、野良七は、肝魂魄も身に添ねば、何を聞いても

蓑虫と、あきら蜓蛉に孑孑の浮しづみ、蟻はねばつたころりとしたる芋虫が、胡蝶の夢を見たとおもひ、蛬のきり〳〵と、身ぐるみ蠅で其處へ螻サー」と云へば、彼方の茶目吉が、「鵜の眞似をする烏の素野郎、水鳥はくらはねへで、麥湯の處女の頬白鳥や、內またぐらの遥羅の毛をむ白さぎ、ちん〳〵鴨のうまひ噺に鸚鵡とは、七面鳥にもおとつたる、御堂の鳶ひるてんの、木兎面ては鴛鴦が强へは。コレ自己の樣ないゝ顏鳥で、程や愛相も行々子の、錢まはりさへかなりやでも、四十雀の大年增、じうしまつの新造ツ子が、平色鳥といふ譯でもねへ。サア杜宇のてつぺん掛けて、家鴨のねらふ踵の先まで、鴻を思ふ夜の鶴、妻こふ雉子の嘯面せずと、後の雁が先になつたら、かうがい取らしよと、衣服も帶も鵺て、其處らへ一所に乙鳥、憤鼻褌までも、鷄のとつて鶚はまる裸、鳳凰寒いと雀納涼」ト、少し反身でせりふめかせば、廬呂松も卻舍にかゝり、「沙魚彼鐘はもう鯆みつ、月さへ干鯛に大鯔を、めぐりて好魚は山の鰆、鯨もせぬ、鰯の烹付の鹽辛か、あんぼんたんの置いて來野郞、せうさい河豚ほど面を脹らし、黑鯛になることそ僥倖、何瀬出雲の蟹鯖には、見はなされたる四文やの、鯡で女は見むきたとへ鰹と思つても、藥罐の章魚で手は出せめへ、鰈うきよと諦めて、鮪のさし身にされねへうち、鎌倉海老の腰を折り、平目に成つて謝つて、金魚もぎんぼも鮟鱇の、袋の中から鱈け出

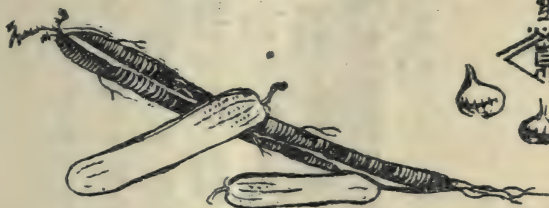
盛ろ「しかし女は格別の情をもつて発して遣るが、男はきり〳〵脱やアがれ」ト、持つたる棒を振ちらし、地平を礮と打叩けば、前に立ちたる下太郎も跋助もまた棒振廻し、兩人「くぢ〳〵せずとサア脱げイ」と、是も地平を叩きまはせば、飛八、喜次郎、野良七は、ぴしやり〳〵といふ度に、悔り〳〵と飛上り、飛「エヽ脱ぎます〳〵」喜次「此樣なことだらうと思つたから立止つたに、お前が力身で、チヨツつまらねへ」野良「ヱ飛公、自己のは何とか云譯をして吳んねへナ。裸に成つて追剝樣に差上げても宜ひけれど、お前も知つて居る通り、弟の衣物を持逃同然にして借りてきたのだから」下太「應サ、弟のきものを著逃にしても、見榮がしてへのなら、衣物はとるめへ。其かはりたつた一ツの命を貰はうかイ」跋「何せ自己ッちに見込れちやア、猫に追はれた座敷の小鼠、たとへ鼹鼠の術が有つて、地犬の中へもぐり駒うが、雷獸の性を兎けて貂の上へかけあが龍が、引虎めへて皮をばがはぞうさアぬへワ。狐の皮の獺財布から、狸の股の金銀を、猪の十六文も殘さず煙にむせたる貉と思つて、鼬の際斯屁諸共に、麒麟きり駄してしまゐよ」跋「棒組のいふ通り、此街蟷螂へ軒端の蜘の網をはつて、俟つとも虱玉子湯を、蚤すぎて來た油虫の、我から火に入る夏虫めら、螢の尻のあかるいうち、つく〴〵惜しいと啼かずとも、衣脱の蟬のはだか虫、くそ溜桶の蛆々せずと、さる轡虫かけられて、聲さへ出されぬ

帯をしめ、朱鞘の刀脇差を前の方へ出して差し、五分月代の鬘を冠り、定九郎が五段目の茶番の形をその儘に、額と鼻のまはりから、玉のやうに出る汗を襦袢の袖で拭きながら、否味に氣取つて飛八らが來かゝる向うへ立ちふさがり、「ヲホンおゝおい、おゝおい老父どの、後の宿から仕けて來た」ト云へば、側から下太郎が、「コレサ〳〵」と小聲で云へど、大愚はそれを耳へも入れず、「縞の財布に五拾兩、その金此方へ貸して下せへ」ト頭を三ツ四ツ振まはして、懐中から手を突出せば、先に立つたる飛八は、噫とばかりに仰天し、一言半句の辭も出でず。喜次郎と野良七は只ぐわた〳〵と震へながら、後方のはうに立ちすくむを、見るより下太郎跂助は、面を包みし手拭から、眼ばかり散眼〳〵光らせかけ、持つたる棒を大地へ突立て、大愚が傍に立はだかり、可笑さ吞込む作聲にて、「コレサ親方、うま〳〵鴨が掛つたのに、忠臣藏のせりふめかした洒落どころぢやア有りやすめへぜ」跂「左樣とも〳〵。サア親方まんまと押へた此奴らを、自己ッちの手で料理うか、但は朱鞘の新身のためし」大愚「チヨツ不景氣な、アレ向に寐て居る白犬が」下太「ハテ宜うごんす、四邊の事にお構ひなく」大「犬もなかざア打れめへに、益ねへ聲をして吠えるッ」此時虚呂松、茶目吉は、いつか喜次郎、飛八等が後方まへはりて道を塞ぎ、割鐘聲へふしを付け、茶「彼樣逃道を取切れば、蟻の這出る所もねへ、命が欲しくば衣物を脱げ」

へ」飛「此方は道の都合にやァ及ばねへが、唰と云つて飛出した時、向うの奴等が逃げるのに段どりが有るだらうと思つてサ」野良「向うの奴等が逃げる道の都合まで監へずとも宜いぢやァねへか」枝豆賣の老父は後方から聲かけ、「何を立止つて評議のヲして居るだァ、夜が明けるに往かつしやんねへか」喜次「サァ飛公、お前の勢で先へさつさと往きねへナ」飛「ヘン孔子のたまはく、箱根から此方へ野暮と化物があつておたまりが有るものかッ」野良「野暮と化物は無からうけれど、追剝や盜賊は幾箇も有るから氣味が惡いのだァ」飛「エヽイ不景氣な、何ぞと云ふと味方の勢のくじける樣なことを云やァがらァ」喜次「サァ〱飛公の後方へ付いて皆が歩行びねへ」ぼく「何だか誠に恐怖いねへ」さゆ「吾儕ァがた〱振へるワ」野良「飛公が先立だから、何か出たら飛公を置去にして逃げやうと思やァ、此方人らは捕る氣遣は有るめへサ」飛「氣の引けるやうな事を云ふなといふに、忌々しい」喜次「何にしても彼樣して居た分にやァ果てしが付かねへ」野良「サァ〱飛公歩行ばつし」と、女へ見榮に强がりたる口故、先へ立たせられ、喜次郎と野良七は、麥湯の處女お麥お白湯枝豆賣の老父を連れて、後に付き氣味を惡々行きかゝる。軒の下には待ちまうけし下太郎、跂助、虚呂松、茶目吉、大愚に夫と知らすれば、大愚はヲホンと點頭いて、裸で居てさへ堪られぬ暑サをものの數ともせず、黒羽二重の厚小袖に、萌黄博多の

妙竹林話 七偏人 四編巻之上

再說下太郎、跂助は、虚呂松、茶目吉、大愚らを、自己が味方に引付けて、喜次郎、野良七、飛八が、麥湯の女お麥お白湯の見世を仕舞ひて、我家へ歸るを送る其道に待伏なして、思ふまゝ打驚かして遣らんものをと、更けては淋しき片側町の、月影屆かぬ軒下に顏を包み姿をかへ、俟構へしとは露知らぬ喜次郎、飛八、野良七は、兩個の者の察しに違はず、麥湯の女を送らんとて、枝豆賣の老父をも、連れて此處まで來かゝりしが、喜次郎早くも軒下に、大愚が有漏つく姿を見出し、怪み恐怖れて立止るを、飛八は力身かへり、「コウ僉が自己の後方へくつ付いて來なせへ。ヘン恐怖と思やア恐怖し、亦恐怖無へと思つても、少しやア恐怖けれど、荒木又右衛門や宮本無三四なんぞは」野良「お前は強いよう、強いからさつさと先へ歩行びねへ」喜次「コレサ飛公、後方へ付いて來いといふから、僉が後方のはうへ廻つて居るのに、何を監へ身振をして居るんだ。ぐん〳〵と歩行ばツしな」飛「今粲然と現れた奴等が、いよ〳〵以てくせ者なら、ちいツと仕置が手荒いから、道の都合を監へて居るのョ」喜次「仕置を爲るのに道の都合にも及ぶめ

敍

徒然なるまゝに日ぐらし硯にむかひて、七偏人の四編の序文、ハテ何とした物だやらと、思案に出子を廻らせど、下手の考休むの喩、竹の林に名を得しは、中華にては七賢人、我朝にては竹取の翁が娘赫奕姫、彼虚つきの彌次郎は、竹の放屁の音にひゞき、竹になりたや七九竹、心の竹は小唄の一節、姿は見えぬ竹簾、竹の子笠に面をかくし、竹鑓さげしは竹智光秀、小田の蛙の音にきく、鶯はやき梅亭ぬしと、名乗りて見れば竹馬の友垣、されども腹の布袋竹に、およばぬ余は青皮の、むけぬ愚才の竹奴、矢竹ごころにはやれども、弓とはならぬ寒竹の、筠燈臺をかゝげつゝ、木に竹を次ぐ百物語、例の滑稽妙竹林話、竹に八千代の寶物に、廻らぬ筆の今年竹、燈心でほる根なし言を、竹の柱にもたれつゝ、東叡山下の竹窓に述ぶる。

岳亭信春

「幽靈でも見えたと言ふのか」喜次「なアに幽公ぢやアねへが、アレ彼處の軒下から黒粧束で長い刀をさした奴が一寸出て、此方人等の容子を窺ひ、直に引込んだからョ」野良「正眞か、エドレドレ彼處の軒下か。ャ何か居るぜ、チャ居るぜ〳〵」飛「ヘン案事なさんな湯屋の煙だア。コウ大造な事を云ふんぢやアねへけれど、二本差した奴が恐怖くつて、燒豆腐が喰れるものかッ。サア自己の後へ付いて僉が歩行びなせへ」ぢゝい「そんだ事を言つたつて、主も震へて居んでねへか」飛「ヘンよして呉んな、江戸ッ子だア」と口には言へど大の臆病、足は進まず見えたりけり。

麥お白湯と打連立ち、豉豆賣の親父さへ、來かゝる道の無多口に、　野良「豉助や下太は何樣したらう」飛「大方此方人らの仕事だといふ事を監繰つて、　茶目吉や虚呂松の所へ意趣げへしの相談にでも往つたらう。　喜次「お麥さん、其樣に先に往くと犬が吠えるぜ」麥「オヤ否だ、氣味の惡い」さゆ「もう七ツだらうねへ」ト言ふ時、遙に鐘の聲ボヂン。軒の下には豉助が大愚の尻を衝突いて、「いよぜ〱」大「まアづ待給へ、犬めが頭を持上げたから」下太「其樣な事を言つて居ちやア、通り過ぎらアな」大「然らば出ませうかナ。オホン何か追剝も致し付けぬと、場うてが致すて」トむづ〱爲るを、豉助に腰へ手を掛け押出され、據なく往來へ出かゝりたりしが亦戻り、大「其處らに蛇目の傘といふのが在りやしたツけ」下太「傘を何にするのだらう」大「是は近頃尊大人の勑諚とも思ひ侍らずス。定九郎の役を勤めて蛇目の傘を持ねへと言ふのは、神武此方ないづなほたへサネ」茶目「往かねぜ往かねへぜ」下太「定九郎の役を爲るのならだが、追剝の親分を遣るのだから、天氣の宜いのに傘を差して出ちやア往かねへわナ」大「然の給へども、御曹子牛若丸などは」豉「何でも宜いから早く出かけなくツちやア往かねへ。アレ僉立止つて仕舞つたア。此時喜次郎は先にたつて歩行きたりしが、今軒下から押出されし大愚が姿をちらりと見て、忽ま其處へ立止り、喜次「まア僉が待ちねへ、何だか可怪しな事が在るから」野良「何故〱」飛

折から、四這に這つて歩行くと吼止むと言ふことは、甲斐の信玄公の教」と言ふ時犬は猛ッてワン〳〵と天窓を目懸掛付きかゝるに、大愚は仰天、「ヒヤアあア下太郎さん助けなせへ」ト震へ上れば、下太郎棒を振上げて、「畜生めらア」ト彼犬を打に懸れば、犬は猶吠付く聲で軒下に寐て居し犬も皆起出で、八方よりして吠えかゝるに、茶目「エヽ忌々しい奴等だ」虚呂「追ッ拂つて呉れべエ」下太「腕ッ節を見せて遣らうか」喜次「自己が此方のはうの畜生めらを、あょりやアぢんぢん、あょりやアぢん〳〵」犬は彌吠かゝれば、茶目吉、虚呂松、下太郎も、おなじく棒を振上げて、地平をひしや〳〵叩きながら、「あょりやアぢん〳〵、あょりやアぢん〳〵」大愚は犬の逃るを見て、嬉しさうに躍上り「オホンあょりやアぢん〳〵ッ、あょりやアぢん〳〵ッ」折から彼方の鼻唄を、下太郎早く聞付けて、「ヤア彼聲は飛八だぜ」茶目「ホンニ夫に違へねへ」喜次「アレ〳〵喜次さんの聲もすらア」大愚は猶も跂上り、「オホンあょりやアぢん〳〵ッ」虚呂「お頭何を其様にはねるのだ」大「ヤレ〳〵今夜は炎暑でげすナ」喜次「何にしても大愚さん、追剝の親方が拔衣紋に成つて居ちやア恐怖が薄い」大「其處らに懸念し給ふな、諸事下僕が胸三寸ッ」下太「今のあょりやアぢん〳〵で跂ねて居るお手際ぢやア、何をさしても大丈夫だ」茶目「もう些ト片ッ隅へ寄つて居やう」虚呂「夫がいゝ」と其處なる家の軒下に待つとも知らぬ喜次郎は、飛八野良七諸共に、お

びに腰ツ骨が、アツタヽヽヽヽ」飛「まだ灰が鼻の穴へハツハツクシヤウ」一同「ワツハヽヽヽハ」爰に亦跋助と下太郎は、虚呂松、茶目吉、大愚といふ、三人の味方出來ければ、喜次郎、飛八、野良七等を打驚かして腹いせせんと、梅の本の容子を探るに、案の如く喜次郎等は麥湯の見世の仕舞ふを待ち、お麥お白湯が我宿へ、歸るを送るといふを聞き、跋助、下太郎、虚呂松、茶目吉、四人の者は手拭で顔をくるりと押包み、尻引からげ腕捲り、手毎に持ちたる棒の折、大愚は一人五分月代の鬘を冠り、黒羽二重の小袖著込んで挾帶、長き朱鞘の大小も、流石に暑き水無月、額に玉の汗をかき、大「オホン深更に及び、別して暑氣が甚しく成つた樣でげすナ」下太「綿の入つた物を著ると、時候が蒸して來ると言ふのは妙な譯さネ」跋「兎も角も土用のうちに、綿入を著て居る位な我慢が無くつちやア、追剝の親方株にやアなれめへサ」茶目「此道を通るに違へはは有るめへなア」虚呂「連中と知りながらも強らしく見えるうちが宜いぢやアねへか」跋「其はずだ、土用の裡に綿入を著込んで居る人さへ有るのだものヲ」茶目「何にしても今夜は月と言ふ面明が有るから宜い」虚呂「ヤア畜生めが頭を持上げやアがつて吠える存じよりぢやアねへかの」ト言ふうち、大愚の足もとに寐て居し犬が、ワン〳〵と大愚の裾へ齧付けば、大愚は愕り、「ヒヤアあアヱヽ」下太「大愚先生何故地平を這つて歩行くのだ」大「オホン斯く犬どもに吠へられた

容子いかゞと見て居たりしに、今腰掛がぱッたりと反ねる拍子に、腰掛の端に乗せたる煙草盆を上の方へ反飛し、火入は落ちて飛八が天窓へ冠れば、飛八は、「アッ プァッ ブブル〳〵ブウ」野良七は周章痛さを忍へ、顔をしかめて起きんとすれど、雑巾桶へすつぽりと却含んで入いつた尻なれば、身を揉むばかりで抜けぬ故、野良「アッタアイタ丶、丶、エ丶誰か來て起して呉れエ。アッタ丶丶丶アッタ丶丶丶尻へ何かが喰付いた。アッアッタ丶丶丶」飛八は天窓へ冠りし火入をとり、「灰が目と口へ、アップブッフッ、ハックシヤウハッハアックシヤウ、プッフ」おふ「何だ是主が顔は、ヤア〳〵雪降の化地藏ちうもんだ」野良「アッアイタ丶、丶、飛公早く起して呉んねへ」飛「エ丶夫所か、アップブップハックシヤウハッハックシヤウ」此内お婆は野良七が手首を持て引起せば、野良七顔を皺めながら、「ヲヤ〳〵尻がぴつしよりだ」婆「何處もお怪我は成さいませんか」野良「イヤ〳〵お怪我は致さぬが、桶頬が有つたので尻がすつぽり入いつたのだ」此時喜次郎は手拭にて飛八が天窓をはたきながら、「イヤハヤつまらへ面に成つたゾ。エ丶眼を明いては往かねへワ。物を高く買つたのを買冠といふが、お前のは灰かぶりだ。淺間の山の焼けた時にやア、此樣な亡者が幾箇も出たといふ事だ」野良「今の野郎は何處へ往つた」喜次「床机を立つと直に種なし蕃椒だ」飛「どうせ此樣な事だらうと思つた」野良「歩行くたん

シ彼様申しちやア失禮だが、お前さんは宜い御肉合で御座へやすねへ」男「左様でもねへが力は隨分有りやすのサ」野良「角力なんぞはお強からう」男「素人なら五人や十人は一時に蒐つて來ても負ねへ積りサ」野良「まア眞平御免なせへ」と床机の端へ腰を掛け、「私も相撲は些ア取りやすが、稻川に鐵ヶ嶽、秋津島に鬼ヶ嶽なんぞは強いものサネ」男「ハヽア芝居でするのかネ」野良「芝居で役者がしてさへ彼位だから、眞正の相撲だッたらト思ひ遣られやす。何でも相撲は腰に力が無くッちやァ往かねへと言ふが、お前さんなんぞも腰に力が有りやせうネ」男「私なんぞは大概な物なら尻の下へ押かつて腰へ力をウンと入れると、ミリ〱と潰れて仕舞ひやすのサ」野良「サテ夫は強氣なものだ。何でも尻の力が肝心サ。ソレ三尺相撲といふのが有りやすぜ、お前さんが最些向の端へぐつと寄り、私が此方の端にぐつと寄り、此位間を明けて置いて私が腰へ力を入れてお前さんの手を引張ると、お前さんも腰へ力を入れて私の手を引張る、私も腰へ力を入れる、ソレお前さんも腰へ力を入れる、私もウンと腰へ力を入れる、お前さんもウンと腰へ力を入れる、私も腰へイヤウンと力を入れる」と言ふ時、向うの男がひよいと立つト、床机はばつたり反上り、野良七平たり尻餅を突くと、生憎下に在る雜巾桶へ尻を突込み、野良「アツアツアイタヽヽヽ」此時彼方の床机には、喜次郎飛八尻をつッ突き袖を引張り、野良七が

野良「何の彼のと呼付けちやア、顔を見たがる屋鋪さのう」喜次「飛公、何を其樣に臨へて居るンだ」飛「まアさ無言つて、アレ彼處の小せへ腰掛に、腰を掛けて居る奴の噺を聞きねへ。大造もねへ事を言やアがるから」喜次野良「ドレ〳〵」と耳を澄して聞いて居ると、一人小き腰掛に腰打掛けて居る男が、團扇遣も荒々しく、「コウお白湯ばう、自己の力ッ瘤を見な、ソラ小せへ蒟蒻程有るだらう。是だから此間も餘所へ往くと、然るところのお孃さんが、島田へ掛けた金糸の大根七五三を見た樣なのを外して、二の腕を縛つたから、自己がウンと力を入れると、力ッ瘤が脹れる御舍で、縛つた金糸が弗りと切れたと言ふのは、何樣だえらからう。夫だから枕ッ引すりやア枕を摑潰す、棒押をすりやア棒を捻切つて仕舞ふのだ。何でも今の世の中は、力も無くつちやア女が惚れねへとは、可笑しな理屈に成るものさ」喜次「成程大造な事を言やアがるのヲ」飛「ノツレあれだから自己が聞いて居たのだアな」野良「彼野郎を一番尻餅を付せて呉れべゑか」喜次「何樣して其樣な事が出來るものか」野良「處が見なせへ、彼腰掛は片端へばかり腰を掛ければ、ほんと上へ反ねるやつだから譯はねへ。自己が一番遣つて見せやう」飛「是は近頃拜見ごとだ。併お前の手際では」野良「まアサ無言つて見て居ねへ」と、煙草入を振下げて、彼處の床机へ出掛けて行き、「チット此處の火入に火が有つた。旦那一ぷく付けさして呉んなせへ」と煙草を吸付け、「モ

物見をして來やう」下太「奴等が屯のその場所は」虚ろ「梅の本と聞いたから、茶目さんと二人で、後追蒐けて出て來たが、何か趣向が有りさうなと、此處へ這入つて相談を付ける折から、敗軍して前なる床机へ遁込む兩所に、いよ〳〵夫と推察して」跂「愚痴馬鹿御曹子愚頭の木武者成とも思つて居るお前が物見をして呉れりやア、誠に安心股くゞりだ」下太「併し島屋を極めて裏切をしちやア往けねへぜ」虚ろ「其樣な二心の有るものに、何で此通り女が惚れるものか」茶め「何樣でも宜いから早く往つて、向うの容子を見て來ねへな」虚ろ「其樣なら一寸往つて來べいか」跂「いやアおイ」虚ろ「チヽチリ、チヽチリ」

◉案下再說喜次郎、野良七、飛八は、枝豆賣の親父を雇ひ、跂助と下太郎を思ふ儘に苦しませ、追走らして笑壺に入り、喜次「何と飛公、甘く往つたぢやアねへか」飛「眞に自己ア腹の皮をよぢらかしたぜ」野良「跂助と下太公は何處へ遁げて往きやアがつたらう」飛「左樣よなア」ぢゝ「何でもはア谷底か樹森の生茂つたところへ逃込んだんべえ」喜次「いよ〳〵野猪にして仕舞うぜ」野良「爺さんなか〳〵甘く遣つた」ぢゝ「大造な事言ふんでねへけれど、糞桶なら自己一時に三荷づつは荷ぐといふ肩だて、夕暮の番人なんぞは麥飯の茶漬とも思ひましねへ」喜次「何にしても餘り笑つたので、咽喉が乾いて來た。お麥さん一寸一杯づつ何でも宜いから持つて來て呉んねへ」

た所ぢやァ下僕を除けると、中五分の鬘の似合ふ顔といふのが有りますめへ」下太「ホンニ私らや跂公が中五分を冠つちやァ、頓間に成つて可笑しくねへ。ノウ跂公、左様ぢやァねへか」跂「違へねへ、此方人等が五分月代に成ると、地體の面が甘みばしつて居るのだから移りが悪りい。大「彼様いふ所へ出交したが下僕の運の盡だ、一味連判へ加はりお味方を致しやせう」下太「お前さんが荷擔人して下さりやァ、鬼に鐵棒赤飯に胡麻鹽だ」跂「大愚さんが助太刀だから、敵なとるにやァ違へねへが、相手は喜次郎、飛八、野良七、夫からお麥にお白湯と女兵を合して總軍勢五人餘騎だのに、此方が大愚さんに自己とお前ぢやァ、些人數が不足だのう」ト言ふ時、後方の薄暗き床机に腰を掛けたりし二人の男が聲をかけ、由井の茶め雪、虚呂木亦右衛門が敵打の助太刀しやう」と言ひつゝ立出る虚呂松茶目吉、見るより下太郎手を打つて、「難有々々。したが何様して自己達の此處に居るのを嗅付けた」跂「自己と下太公が情合の出來やうと言ふ所を、猜れて邪魔を爲れた一條を」茶め「お前達の來ねへ中から、後方の床机に掛けて居て、委細の容子は皆聞いた」虚ろ「敵とねらふ祐經が、落行くさきは駿州佐良」大「ア、イタ、、、、」虚ろ「イヤ是はお前さんの足を踏んだか、私の下駄は樫齒だから、別して恐れいつたッけ」大「誠にひりひり痛み入つた御挨拶ッ」茶め「いよ／＼敵を打つ氣なら、敵の陣所へ忍を入れて」虚ろ「自己が

も有りやすめへ」下太「豆賣の老翁といやア何か意趣げへしが」鼓「イヤ有る〳〵、甘へことを監げへた」下太「弁りやア難有へ、どういふ趣向だ」鼓「何でも喜次さんを引張つて、野良七と飛八めが、例の通り見世をしまふまで居て、お麥ばうとお白湯ばうを送つて行くに違へねへから、その送つて行く途中に俟伏をして居て、追剝といふ趣向で驚かして遣らうといふのだが、左様するにはぜひ大愚さんに加勢をお賴み申さなけりやア成らねへ、と云ふ譯は、定九郎の著付さ、ノウへ下太公、大愚さんが此苦みばしつた顔へ、中五分の鬘で黑羽二重の紋付、萌黄博多の帶、朱鞘の大小を、しかも落差か何かで往來に立はだかり、サア野郎ども、身ぐるみ脫いで置いて往け、と云ふと、自己とお前が著物の裾を尻ッきりくるりと端折り、手拭を東埔塞かぶりに顋の下で引結び、鈴が森の雲助といふ見えで、ヲウ親方の仰の通り、此街道の夜よなか、女を連れて通らうとは、餘り押の强へ奴等だ、著物はおろか犢鼻褌まで、振つて置いて往きやアがれと、棒ッ切で地平か何かを叩き廻して見なせへ、喜次さん始め大の臆病、震へ上るは必定だが、何と大愚さん、助太刀をしてお吳んなさることは出來ますめへか」下太「大愚さんは見かけて恃まれた事なら、五分でも引かねへと言ふのが誓願なのだものヲねへ」大「ヲホン夫は下僕が追剝の親方に成りやア、此間ッから定九郎で苦んで居りやすから、隨分すごく遣つてお目に掛けやす。夫に見渡し

なもんだ」下太「全く自己とお前が惚れられたのを猜んで、悪さを計較みやァがつたのだ」「出來かゝつた情合を、共々探持ちて呉れやうとはしねへで、邪魔をしやァがらうといふ存寄なら、のう下太公」下太「左様さく\、此方も其氣で附合ふのサ」大「イヤ兎角婦人どもに思ひ染められると、端の五月蠅といふには困り桐梧サ。だから惚れられねへと宜いけれど、瓦の中に玉がありやァ、誰の眼にも玉を欲しいと思ふのは當然、實に婦人てふものが浮世に無くば、人に憎まれる事も有るめへと、嘆息爲るのは毎度だから、身につまされて思遣り梅、なにごともたゞ憂ぐひすの娑婆世界サネ」下太「其りやァ宜いが大愚先生、大分大きな包みを持つて、好男には些不似合な譯ぢやァねへか」大「所が供に持せると家へ知れると云ふので、自身力量を費すのも、矢張通が身を喰ふといふ本文通りサネ」路「ハヽァ夫ぢやァ彼の方へ仕送るのに、此差支へといふ一條で」大「是はしたり、仕送られて暮す身を、仕送ると見られちやァ情ねへネ。有樣は今日梅の本の鶯齋子がところで、茶番の下淩が有りやした。尤も忠臣藏といふ題で、下僕が五段目といふ鬮さネ、其處で定九郎を遣ると云ふやつだから、其定九郎の著付が此包の内に不殘有るといふ一件さ」下太「夫ぢやァ突張つて居るなァ朱鞘の大小だネ」大「全體定九郎と野猪を早變りに遣ると、大愚先生にやァ打つて付さネ」路「併豆賣の翁が居ちやァ、野猪も餘りヤンヤで

狐や狸殿との御鑑定無理ならず、一ッ穴の貉州と言ふのに誑かされ給ひたるものなればス」と、聞いて悒り下太郎跂助後方を見れば、石町の大愚が床机に腰を掛け、扇遣をして居る故、下太「イヤア是は大愚先生」跂「何様してお前さんは、一ッ穴の貍といふ事を」大「其處は天知る地知る人知るの戒恐るべしス。下僕が今彼處の麥湯店の畔を過ると、傍なる床机に喜次郎大人、飛八大人、野良七大人の高噺、折から小便を催す故、其處なる溜桶へ龍頭を臨ませ、龍の水を落しながら、聞くとは知るや白毛の老父、夕暮と馬の物を押止めた鹽梅、なんとして美味かんべゑト言ふと、喜次郎大人が、豆と玉子を六百で賣つたといふ事を幾箇に言ふから、仕舞には自己達に恃れたのを白狀しやァしめへかと、大きに氣を揉んだといふことから、芋畑だの野猪だのと云ふ噺まで、大概聞きやして、此處へ來て腰を掛けると、兩大人の談話、さては計り餘所の見る目も痛はしさに、喜次州は豆賣の爺とは一ッ穴の貍てふ事を告げまうすのも、下僕が寸志、オホン〳〵」と咳拂ひ、遣ふ扇の風よりも息鼻荒く噺すを聞き、跂「イヤ忌々しい奴等だなァ」下太「道理でくつ〳〵笑つて居やァがると思つた」跂「しかし宜い氣味がある、彼親爺めが紙へ包んで金を呉れたが、大方連中から出したのだらう。買喰でもして遣るべい」と袂から取出し、「ヤア是りやァ金ぢやァねへ」下太「何だ大黑さまが付いて居るのか」跂「何にしても意趣げへしが有りさう

妙竹林話 七偏人 三編巻之下

再說跂助下太郎は、思付いたる門附に、一番ヤンヤと謂ける氣の、當が外れて横合から、田舍親爺に呼込まれ、調子狂へば唄ならで、出る冷汗にたまりかね、三味線抱へて遁出すと、續いて逃げる跂助も、共に群集を押分けて、やう／＼少し遠除く故、下太郎吻と息をつき、「アヽ忌々しい、大汗に成つたア」跂「此處へ這入つて一息やらう」ト、麥湯の床机へ腰をかければ、娘が持て來る櫻湯を、駈付三杯飮みほして、下太「つまらねへ田舍老夫に出ッ交すものぢやアねへか」跂「些と甘へ事が有らうとすると、直に魔がさすと言ふなア、世の中の當然だから仕方はねへが、聞えねへのは此方の連中だ」下太「左様よ、自己とお前が苦しむのを見て、クツ／＼笑つて居やアがつた。夫に彼親爺めへ、夕暮と我物と櫻〻の三ツは唄ふ事は成らねへ、豆といふ字の恩が有と言やアがつたぜ」跂「左様よなア、希有に此方の唄物を知つて居やアがるぢやアねへか」下太「狐や狸は人の心を能く知るといふが、今思やア親爺の耳は押立つた樣におつに長かつたぜ」跂「して見りやア彼爺は野狐か古狸の化けたのかも知れねへわい」ト、腕組したる後方から、「オホン

さァらひと言ふのが宜かんべい」下太「いかねへぜ〳〵」跂「ヱ旦那夕暮に詠め見倦かぬといふのを一番唄ひやせう」飛「そチら出たぞ〳〵其夕暮さア相成んねへゾ。夕暮ちうと我物と思へば大かし馬のものちうと、櫻ゑゝ櫻山花花水仙枇杷の花ちう、此三ッさア唄う事は相成んねへ。自己意地の悪いことを言ふだけれど、玉子と豆さア六百で賣りこんだちう大恩が有るがぢやから、夕暮も成んなけりや我物も成んねへぞ」ト、豆賣親爺につらまつて、困る下太郎跂助を、脇に見て居る喜次郎、飛八、野良七の三人は、袖を引張り膝をつッ突き、喜次「何様だ〳〵、自己の方寸はえらいもんだらう」飛「なか〳〵甘く廻つたのう」喜次「アレ〳〵玉子と豆を六百で賣つたといふ事を亦言やアがつたぜ」喜次「ヱヽ自己があれほど言聞して置いたのに。チヨッ彼またあんな事を言やアがる」飛「ナニ芋畑で猪の番と麥畑で雁の番をさしちやア、自己功名手柄のう著したもんだアに、夕暮ちうと我ものちうの番に雇れて損ねたと言れちやア、玉子と豆のう賣つた六百文の恩といふ字に濟ねへぞだとよ。ヱヽいけねへ〳〵段々化を著しさうだイ」喜次「こいつア宜い、下太と跂助が逃出したイ」飛「イヤアあれ〳〵向うの屋代見世へ突掛りやアがつた」野良「チヤ〳〵親爺が追蒐けるは」喜次「こいつア妙だ」野良「妙だ〳〵、あれヤア下太めが轉んだは、面白へ面白へ」と三人は笑壺に入りにけり。

も、エさうでねへ三四十二の門附めら、此處へ寄つてくれさつせへ」ト、聞いてびつくり跂助は下太郎が袖を引張り、「ヲイ〳〵己等達の事を野猪だといつて呼びやアがつたぜ」下太「其中にやア喜次さんが聲を掛けるだらう。構はず向うへ往くがいゝ」新「是や呼るのに何故こんがぢや、一ばん唄つてくれさつせへ。門附ちゆツたら門附やイ」跂「いかねへぜ〳〵」下太「なぜ喜次さんは呼んで呉れねへのだなア」跂「ヤア今どなつた奴が履物をはいたぜ」と言ふ中、おやぢは駈來り、下太郎と跂助が著物の袖を緊り採へ、新「主らに此金をやるべゑから、何でも唄つて呉れさつせへ」と、喜次郎より請取りたる金を跂助に渡し、無理無體に床机の傍へ引いてきて、「義太夫でも新内とやらでも、常本でも富盤津でも、一ばん唄つて呉れさつせへ。お前らがお陰で十日べゑ前から賣殘つてゐる豆と玉子のウ、六百文で賣拂つたちうもんだアから」跂「私らのは哥澤節といつて、端唄を唄へやすのでございます」新「そんだら祭文を唄たがよかんべゑ、せへもんだら新屋の孫十兄ィでせへ唄ふから、主等に唄へねへちう事は無かんべゑ。夫ともはア祭文も唄へねへちう事なら、笠松峠の鬼神のお松か、春は花咲く青山邊よ、鈴木主水といふ武士がちう、瞽女の坊節でも唄つたが宜からう」下太「エモシ旦那、我ち等の遣るのは端唄といふので、一寸々々とした小意氣な短へ事計り唄ふので御座へやす」新「そんだらばハア親爺除獵アを遣るが

だと見えて、此間の晩お麥めが腹が痛へと言つたから、自己が腹が痛くは吉野へござれと遣らかしたら、ヲヤ〳〵跂さんは古風な事がお好だと見える、古風な事の好なお人は急度律儀で實がありますヨと言やアがつたが、夫から些づつ趣いて來たやうだ」下太「何にしても徐々手拭を冠らうぢやアねへか」跂「違へねへ。もう本舞臺へ間近く成つた」ト、是より二人は手拭冠り、下太郎は三味線の調子をテン〳〵と合せながら、下太「此位で宜からうの」跂「大道で遣るなア些高へ方が宜い」下太「餘り高くしてカンの所が出ねへと往ねへ」跂「我身ながら小意氣な聲だよなア」下太「此處いらからおッ始めやうぢやアねへか」ト、推を強くも下太郎が三筋の糸へ撥を打付け、チンチリンツ、チリンツ、テレツテ、トツチン、チンツテ、トチチリツシヤンと彈きながら行く。彼方なる麥湯の見世には、とくよりして待構へたる喜次郎が、「野良公飛公、あの三味線が开らしいぜ」野良「違へねへ、あれだ〳〵」飛「調子が合はねへと見えて、ヲヤ〳〵妙な音がする」喜次「ヲイ爺さんソレ其處へ三味線を彈いて來たのが开だから、先刻の事をヨ」爺「安心して居さつせへちゆッたら」此中下太郎跂助は梅の本の前へ來かゝり、見ると傍の腰掛に喜次郎初皆居る故、下太郎此處ぞと反身に成り、チンチリチ、チリンチ、テンツテ、トツチン、チンツテ、トチチツチヤンと、態と床机の傍へより通りかゝるを、豆賣の親父はこゝぞと大聲で、こりや猪ど

いがぢや」ト謐く折から、五ツの鐘ゴオン引。
爰に亦跂助と下太郎は、喜次郎飛八野良七の三人に別れ、夫々に支度調へ家を立出で、跂「下太公お前撥を忘れちやァ往ねへぜ」下太「撥は忘れねへけれど、三味線には恐れる。彼處の近所へ往くまでお前持つて呉れねへか」跂「夜だものヲ構ふものかな」下太「儘よ引荷げか」跂「チツト侯つて呉んな、此處等に藥種屋が有つたツけ、聲出藥を買はうといふのだ」下太「今飲んだつて今驗もしねへ」跂「尤も生姜湯を立付けて三杯とやらかしたから、大分咽喉の鹽梅が宜い樣だ。一番唄つて見やうか」下太「夕暮と我物とたつた二ツで請けやうと言ふのだから強氣ぢやァねへか」跂「お褒めを惚させるのは宜いが、餘り手強くむら〳〵とさせたら、直に女房に成らうなんのと言やァしめへか」下太「お白湯坊め自己の顏を見ねへ振で、ちよいと見るといふ目付が可愛くつて成らねへ。コウ惚るといふ物は妙なもので、此方が飲みかけた麥湯を一寸置くと、何時の間にか其器を取つてぐいと飲みながら、ヲ甘いと舌打を爲る。その舌打のチヨツと遣つた奴が耳へ付いて、家へ歸つても寐そびれると言ふのは何樣だらう」跂「何にしても喜次さんだの飛八だの野良だのと言ふのは、腹の内で嘸悋氣がやけるだらうよ」下太「兎も角も連中うちで、女に手ひどく惚られたといふのはお前と自己計りだらう」跂「女といふものは少しの所で思付く物

門附を從弟か兄弟のやうにでも思つて居やァがらァ」飛「アレ〳〵とう〳〵寐て仕舞ァがつた」喜次「チイ〳〵爺さん、寢て仕舞ちやァいけねへと言ふ事よなァ」爺「やれ分解ねへ自己猪のう番に」喜次「これサ爺さん、猪の番を爲るのと、一所にしちやァ違ふだらうぢやァねへか」爺「ハァ違ふかね、夫ぢやァ自己監へ損ねへた。何でも猪が四四で十六、門附が三味線のう持つて來るで、其三味線の三筋の糸の三と、猫の皮の四乳の四とを掛合して、三四十二と成るから、四四の十六と三四十二だら、大けへ變りもねへと思つたぢや」野良「何でも宜いから起きて居て呉れねへぢや往かねへ」爺「折角一寐入爲べえと思つたに、何でもハァ儘に成ねへ浮世だァ」ト、むずり〳〵起上れば、飛「ヤァ爺さん、お前の髷節へ枕にした下駄が引掛ッて居るぜ」爺「道理で天窓がげへに重いと思つた」飛「ヱヽ、夫りやァ自己の下駄ぢやァねへか」爺「何だか此處に脱いで有つたがぢや」ト、手を上げて髷に掛りし下駄を採り、「是大けへ匂ひがする、ヱヽ臭い履物ぢや」飛「臭へ筈だ、自己が犬の糞を踏だのだものヲ」爺「何の事だァ小穢へ」飛「ヱヽ是何故投つて仕舞ふんだイ」喜次「爺さんと懸けて旅の泊り、心は臭枕といふのは何様だらう」野良「自己は先には爺さんの家を、轉りと寐たやかと思つたが、矢張天窓臭だノ」飛「天窓臭の鼻を撮みち何様聖天町の方だらう」親爺は大口を開いて欠をしながら、「野猪めらァ何をして居るだァか、げへに遲

前が百で死ねば、自己は九十三で死なうと言ふのだから、そのおめへの死んで行く年を聞いて置きてへのだ。なぜならば、七年先へ死んで七年先へ生れてゐると、自己が二十三に成る時おめへが十六に成るから、ちやうど七ツめで相性といひ年頃と云ひ、五分でも拔目のねへ墮落ができやうといふのだ。夫においらは成駒屋と坂彥と成田屋で茹雜ぜた樣な男に生れ、お前は大和屋と音羽屋と紀國屋で搔まはしたといふ樣な女に生れて出るから、二人並んだ姿と言ふのは、梅に柳か櫻に桃か、牡丹芍藥あやめに杜若」と言ひながら枝豆をとつて喰はうとして、「コウ〳〵自己のお麥さんをくどいて居るうち、不殘殼にしてしまつたぜ」野良「此世ではからに成つても、今度の世にはお前にくはれるとよ」ばく「飛さん夫では後世は、一おまへさんと情合になりますから、其時のてつけとも結納とも思つて、一ふくつけておくんなはいな」きゆ「私きやァ生れかはつて、恍惚のきよてに成りますから、其時の請賃の前借に、玉子を思入喰べますヨ」喜次「开りやァ能いがぢよいめヱ、アレ〳〵下駄を枕にして寐はじめやァがる。ヲイ〳〵爺さん、起きて居なくつちやァいけねへぜ」おい「芋の畑へ猪の番に往きやしても、そべり込んで居ると、猪めらがだれも居ねへと思つて出てくるだア。そんだからおれ臥りこんで居ると、門附めらも誰も居ねへと思つて出てくるだア」野良「ウヽツ」飛「しよと鳥追なら一所にしてもいゝけれど、野猪と

いよ」野良「枝豆と瀹玉子の有るうちは、何とでも言ひなせへ。隨分六百丈の所は請けて居て遣るから」飛「オイ〳〵お麥さん、玉子と豆の大番振舞が始まつたから、お白湯さんを誘れて些ト下司張に來ねへナ」麥「ヲヤ難有う。お白湯さん」さゆ「聞えましたよヲ」麥「早い耳だねへ」さゆ「玉子といふ聲がしちやア、我慢が出來ないのだからネ」喜次「サア〳〵思入遣らかしねへ」麥「私やア枝豆が大好」飛「自己も勢分を竹けて、八百投でも推始めやうか」麥「ヲホヽヽヽ」さゆ「女は鷄卵を喰ても何にも役には立ちませんねへ」野良「役に立たねへ事はねへ、澤山喰へば隨分腹は強つて來らア」飛「時にお麥さん、些改めてお前に恃みが有る、ト言ふなア外でもねへ、情合に成つて貰ひてへのだと聞いたら、お前が私には勘平さんといふ間夫があるトいふだらうが、其勘平さんといふまぶの邪魔にはならねへのだ。なぜならば、今すぐぢやァねへ、此次の世にいろに成つて呉れといふのだ。尤も今すぐに成つて呉れりやァ夫程な事はねへのだが、子の日の小松と來て、曳く手數多のお麥さんだから、たとへこがれて死ぬからと言つたつて、諾と言はねへのはこつちも承知だ。ヱお麥さん、死んで生れ變るこんどの世から、かあい相だからいろになつて遣らうと承知してくれても宜いだらう。若し承知して呉れるなら、此世から都合をして置かねへけりやァ成らねへ、と言ふのは、お前が八十で死ねば、自己は七十三で死に、お

曲のはうは些アやつた事があるか」爺「音曲だらでかいもんだ、聲が美ゑからネ。隣村の源右衛門が麥畑へ下りた鴈のヲ追ふとて、イヤこりやア鴈どもヲ何故來たホウと言うて呼るのは、五町四方しか響かんぢやが、自己追に出て、イヤこりや鴈どもヲ何故來たホウと言つて呼ると、八町四方響くから、道樂寺さまのお林に眠つて居る木兎ども迄が驚くこつちやが」喜次「そいつア強勢な聲だ。時に爺さん枝豆と瀹玉子は、不殘で何程ばかりあるのだ」爺「六百計りも有りますべゑ」喜次「夫ぢやアそいつを不殘買つて遣るから、今夜は商賣を是ツきりとして、自己に雇れて吳れぬへか、ト言つて六ケ敷ことを賴むのぢやアねへ、今に此處へ男連の門附が來るから、其門附をお前が呼込んで」ト、爺の耳へ口を寄せ、何か頻りに私語いて、懷中から金を出し、紙へ包みて親爺に渡せば、親爺は無上に點頭いて、「ハ、、、ハア自己此樣な道化た事のヲ大好だで、味よく對談を遣つて見せやすべゑ」喜次「夫ぢやア爺さん、お前は其方の腰掛へ往つて離れて居ねへぢやアいかねへ」爺「門附めらが來たら、相圖のヲ賴みますぞへ」喜次「飲込んで居るよ」飛「姨捨山へ投りこんで、狸の餌食にでも仕て仕舞ふと言ふ樣な爺を引摺込んで、彼が方寸を廻したのか」野良「彼樣な半可通な半醉爺に、門附を呼込したつて詰るめへが」喜次「半可通の半醉だから、此方の誂向なのだ。まア默つて自己の爲る事を見て置いて、後の手本にするが

を付けて居るのだァ」麥「ヲヤ〳〵旦那、夫ぢやァ私の方は、何程思つても無多なので有ますネ」喜次「イヤ〳〵お前の名の所にも自己の名が書いて有つたから、兩人とも情人に採持つて下さる思召かも知れねへ」飛「ヲツトお前の名は其後字消で塗つて仕舞つて、自己の名を其上へお書きなすつたから、お麥さんは自己の墮落に違へねへ」と、何か三人は麥湯の女に戯遊つてゐる。そのうちに後から追々くる客に、おばくとおさゆは亦よその床机へ行つてしまふゆゑ、野良「時にきじさん、跂助と下太州のこねへうち、早く方寸の謀計を廻らして置けばいゝ」喜次「今廻らさうと思つてゐるさいちうだ」飛「所を未だ廻らねへうちに、門附どのがでかけて來ると言ふのが落ぢやァねへか」ト喈る床机の傍へ、笊をかゝへて莞爾々々しながら、六十計りのおやぢがきたり、「旦那ァ、瀹玉子と枝豆のヲ買つて呉れさつしやイ。おれお愛相に盆踊のヲ躍るべゑから」喜次「爺公、おめへでへぶ御機嫌だの」爺「今そこな酒屋でやたとやらを肴に、一合ぶつくりけへしたら、圖無く浮れて來たがぢや」喜次「お前若ヱうちに些ァ道樂をしたことァあるか」爺「おれから見えても色師の天井といふだッたからネ。先男が好いに聲がいゝ、程が宜いだから、隣村の女子ども迄が惚れこんだといふ物だ」飛「さうだらうヨ。今でせへ目尻がさがッて、鼻が素人ごしらへのおそなへといふ鹽梅なんざァ、なか〳〵うまみの有る顏だ」喜次「どうだ爺さん、音

慢が出來ねへから、日の暮れるのを俟ちかねて、二人を引張つて來たのだアね」麥「ヲヤ〳〵左樣で御座いますか、能くまアお連れまうして來て下すつたねへ」さゆ「私きやア實ありだと思つたら、夫ぢやア旦那が引張つて來て下すつたのだヨ、憎らしい」飛「アツタヽヽ、ヽ、エ、手ひどい措り樣をする、朧掛つた根太の天窓を、アヽいてへ〳〵」と云ふうち、お麥は煙草を吸付け、「旦那一ぷく召上れ」と、喜次郎が前へ出せば、喜次「難有々々。併此煙草を此處でむざ〳〵飲むなア惜しいもんだ」麥「アヽレ憎らしい旦那だヨ」野良「アイタヽヽ、ヽ、エヽ何故大人しくして居るものヲ措るんだイ」麥「ヲヤ麁相、此旦那かと思つて」野良「此達摩かと思つて、此方の達摩を措められて堪るものか。夫とも思入が有つて、間違へた振で氣を引いて見たのなら、堪忍して遣らう」此時お白湯は盆の上へ茶碗を竝べて持來り、櫻のお湯に致しましたヨ」ト銘々の前へ出せば、野良「茶碗を採る振をして、手を握つて見やうと思ふが、何と握り返して吳れる事は出來めへか」さゆ「オホヽヽヽ、握り返しますとも」野良「ますともだけが覺束ねへノ」喜次「覺付いてたまるものか、お白湯さんには自己といふ情合が有るのだものヲ。尤も其情人といふ事は、お白湯さんもまだ知るめへけれど、去年の十月出雲の大社で、自己とお白湯さんといふ割振に緣結の臺帳へ記してあるのを見て來たのだ。夫だから今日は他人でも明日は墮落に成るに違へねへと、極り

は一興ぢやァねへか」飛「併夫ぢやァ請込が不約束に成るから、さうで無く往きてへもんだ」野良「そんなら丸ツきり餘所の見世へ上つてゐて、やつらが梅の本のまへを彼地へ往つたり此方へ往つたり、まご／＼まご／＼する所を見て、樂んで居やうぢやァねへか」飛「夫でも矢張此方のぶまにならァな」野良「後で梅の本と間違へて、ツイよその見世へ這入りこんで、待つて居たといやァ宜ぢやァねへか」喜次「兩人をくるしましめるといふお茶番は、自己の方寸に有るから、まァどうするか默つて見て居さつし」野良「喜次さんの方寸も餘り當には成らねへからノ」飛「何にしても賑敷事だなァ」喜次「此處の見世ぢやァねへか、行燈に梅の本と書いて有るぜ」野良「急けば早き古郷の、二の口村にぞ著きにけりだ」飛「イヤ今晩は、お麥さまにお白湯さま、能いお天氣でおめでたうございッ」野良「年增と新造の標致と程が大評判に付、岡惚の我々までかたみを廣く思うでござい」と言ひながら、梅の本と誌したる麥湯の見世へ這入りこみ、傍の床机に腰を掛ければ、晝喜次郎が能樂亭の前を通りし年增と新造が其處へ來て、麥「野良さん飛さん、先程は」きゆ「晩に往くと被仰つたけれど、よもやと思つたら能く被爲入て下すつたねへ、眞正に實有りだヨ」喜次「先刻お麥さんといふお名だといふお前さんと、お白湯さんと云ふお名だといふお前さんと、自己の家の前を通御が有つたのを、一眼見るより何となくお愛敬しく成つて、何分我

妙竹林話 七偏人 三編巻之中

日は暮れたれど此頃の暑さに、結句日中より往來賑ふ往還を、喜次郎、野良七、飛八の懶惰男打連れだち、いつも機嫌のたかばなし。野良「のウ飛公、跂助と下太州は、梅の本の女てれつにやア、よつぽど熱坊になつてゐるなア」飛「だから門附の趣向か何かで、思附かれ様といふ存寄のだアな」喜次「跂助もなか〳〵甘へ聲だし、下太もおつりきに三味ずるけれど、何にしても其數凡そ第三ツと言ふのぢやァ仕様がねへなア」野良「兩人ともおいうちに打合して在るから、數は無くつてもヤンヤとうける氣でゐるんだアな。ところを一番面白可笑く苦しまして、樂むなどといふし法が有りさうな物ぢやァねへか」飛「左様さなア」野良「かうしたら何様だらう、是からすぐに梅の本へ酒肴を持込み、一獻きこし召ながら、お麥とお白湯に思入綢繆、きつきやと言はせて居るところへ、跂助と下太州が大めかしで、チヽリ、テツヽン、トツヽル、チンなどと彈いて來ても、一向聞付けねへ振で構ひ付けずに置かうといふのだ。すると奴等が氣を揉んで、比羅金様へ這入つた賊盗を見た樣に、何度も〳〵此方人の床机の前へきて、まごつくと言ふの

深に冠つて顔を隱しノ、銚子縮の單物、本古久織のお美帶に、桐の厚齒の下駄か何かで、極淺さりと拵込み、チンチリンチ、チリンチ、テン、ツテ、トツチン、チンチテ、トチヽリ、ツシヤン、ト三味ずりながら通掛ると、お前達が大分小意氣な門附だ、一番呼んで遣らせて見樣と言つて、二人を呼込み、誰でも知つて居るものを唄はせなくツちやア、下手か上手か分らねへから、といふ風で、極つたものよりやア端唄を遣つて呉んねへ、夫も夕暮なんぞが宜らうと言つて、望んで貰ふのだ。夫から夕暮を唄つて仕舞ふと、我物をもう一番と追蒐のお好で、また我物を唄ふところが、例の美音名節で、惚々するやうに遣かすもんだから、彼年增と新造がうつとりする程水性に成り、思はず流す涎の滑りで、地平の砂へ跂さんが、身に染々と戀しいなどと、我を忘れて書くところを、ほんに遣る瀬がないわいなと唄ひ納め、小意氣に冠つた手拭を採つて除け、此愛敬で莞爾と笑ひながらお麥さん、茶釜へ胼でも入らなんだかと、言ひつゝずつと這入つて見なせへ、人目が無けりやア默で抱付くのは知れて居らア」下太「お前に年增が抱付くうちにやア、自己はお白湯ばうに頰端か何かを喰付かれて居るといふのは、能い手廻ぢやアねへか」野良「其樣な事を言つて居て、眞正に茶釜でも割れたらば、妙な物が出來るだらう」と言ふ時、勝手の流しにて手桶の箍が反ねたのかパチン、水の翻れる音サア、引。

に似かりやア、まんざら損も往くめへが」飛「呆れけへらア、鈍痴氣めへ」畦「其處で晩に僉が彼奴のところへ往つて呉れると極ッたら、下太しうと二人で、連中に恃みが有る、といふなア外ではねへ、例の嗜の隱藝をあらはして、彌惚さして仕舞うといふ段取だ」下太「全體太棹でぐつと澁く往きてへのだが、未だ儀太の方は不飲込だから、矢張流行の哥澤節で出かけやうといふのだ」畦「そこで自己が例の美音で唄ひ付けると、下太公が三味ずつて門附といふ趣向だが、下太公の三味線では撥あたりはいゝが、何分手が廻らなくつて調子が合ねへから中だけれど、そこは自己が聲と唄ひ廻しで、紛却して仕舞ふ積りだ」下太「足下が調子をとつ外すのと、相の手を待たねへのは、三味線で繕はうと思つて居るのに、唄ひまはしで紛却すもねへもんだ」飛「其妙なのが二人で門附に出て、石でも打付けられてへといふ心願なのか」畦「人の善事を妬嫉む奴等にやア噺は出來ねへ。エ喜次さん、お前の知つて居る通り、下太公が彈いておいらが唄はうといふなア、凡そ端唄多しといへども、我ものと思へば輕し傘の雪といふのと、夕暮に眺め見倦かぬ隅田川といふのと、櫻ヱヽさくら山茶花水仙といふのと、三つしりやア無へから、連中へ恃むのは此處の一件だ。先お前達が梅の本の床机に腰を懸けて居て、彼年増や新造が嬉しがる樣に、自己や下太公の噂なんぞをして戯遊つて居る所へ、自己と下太公が、頬覗か何かの手拭を眞

が故意と上かと言つて聞いたもんだから、向うが口を合せて、伊勢だと答へたのだァ。すると果して、跂公と下太公とばかに仕始めたので、とう〳〵〆木に掛けられて仕舞つたのだ」下太「忌々しい目に逢しやァがつた。毛穴が一々ひり〳〵すらァ」野良「夫でも顔の風の變つた所を、麥湯の二女に見せたから怨みは有るめへ」跂「ヱ喜次さん、晩に一所に歩行ねへナ」喜次「彼やァ梅の本といふ行燈の出てるのか」野良「左樣さ〳〵、そして年增の名がお麥で、新造の名がお白湯といふのだ」飛「なか〳〵面白い代物サ」喜次「夫ぢやァ晩に行つて見やうか」下太「所が年增のお麥めは自己に九分九厘來つて居て、新造のお白湯は九分九厘九毛、今紙一重といふ所で出來るのだから、迷はして置かずに、ぜひ拵へて仕舞ひてへと思ふのだ。ノウ跂さん」跂「眞に新造は下太公に氣が有るのサ。其處で年增の方は、自己に十分油が乘つて居るといふ證據は、熬つたいよと言ひながら措められた痣が、是見ねへな」ト二の腕を捲り、「ヲット此方では無かつた、此方の手よ。ノ、ソラ、紫式部の筆の綾といふところが、薄すり殘つて居るだらう。是だものヲ、耐へられねへのも無理は有るめへ」下太「夫にノ、新造めが、男が美くつて程の宜ひものは急度水性だが、おまはんは男もよし、程も能くつて實が有るのだから、賴母敷のだよといやァがつたァな」飛「ァアいたよ、ヱヽ、何故人の背中を叩はすんだィ」下太「二ッや三ッ叩かれたつて、自己の樣な好男子

やア猶たまるめへ。ドレ〳〵」と後へ廻り脇の下を探れば、下太「エヽ此奴らア、アヽイタヽヽヽヽタヽ。エヽアヽ首から格子が抜けねへのぢやアねへ、髷ッぷしへ何か引かゝ、アヽイタヽヽヽヽエヽ此奴らア」飛「ヲヤ蹴飛すな」跂「横の方から探るがいゝ」下太「アヽ御免だアヽタヽヽヽ」喜次「ヤア〳〵此奴ア妙だ。打釘へ髷ッぷしが引かゝつてゐるのだ」野良「ヲヤ〳〵可愛さうに茹章魚同然だ」喜次「ドレ〳〵自己が探つて遣らう。もつと首を上の方へ、こいつア丈夫に引掛つた」下太「アヽイタヽヽヽ」喜次「エヽ弱蟲な、我慢をしろい」下太「夫だつて是で首は有ッたけ長くしたのだ、丈伸までして居るンだものヲ」飛「ヲット宜いものが有つた」喜次「鍬をもつて來てどうする積りのだ」飛「これで髷ッ節をちよつきり切つてしまつたら宜からう」下太「エヽ圖方もねへことをいやアがる」跂「どうせ今日は用なしだらうから、最ちつと左樣して詠めて居るサ」喜次「ソレ探れたは」下太「ヤレ〳〵手ひどい羅生門だ。しかしお陰でねが緩んだ」野良「ホンニ生付の通りに眼尻が下つた」下太「流石は無雙の自己だから、涕も溢さず辛抱したが、彼髪結の外道めが、いぢに成つて引詰めやアがつたので、天窓を〆木に懸けて〆て居られた樣だつたア」跂「してみりやア一九の書いたのも嘘ぢやアねへのう」喜次「全體人を馬鹿にしすぎるから、あなんめに逢ふのだアな。眞を明せば先刻の髪結は、本郷四丁目の萬床の正吉といふのだが、自己

かしやせう」としま「きつとでございますョ」しんぞ「下太さんは大層丈がお高う御座いますねへ。开しておくびが長いから恰好のよいこと」としま「夜お目にかゝると、此様におたかいやうにやァ見えないねへ」野良「何にしても這入んねへな、一盃遣付けるとしやうぢやァねへか」としま「有がたう御座いまずが、ちつと急ぎますから」しんぞ「左様なら晩ほどはお待ちまうして居りますョ」野良「穴ッぱいりをしちやァいかねへぜ」下太郎はよこめにて、「二人揃つてあるいちやァ眞に二千兩だ」飛「自己ァぐつとかい上げて、一萬兩といふ入札にしやう」としま「チホヽヽ、左様なら」しんぞ「其様なにおしやかし被成と、晩にひどいめにあはせますョ」と、二人はこゝを往過ぎる。喜次「なか〳〵おつな代物だ」飛「年増も新造も、大元氣よ」野良「晩に一所に出陣するサ」喜次「自己が往つたら僉の鼻が明くだらうと思つて遠慮してゐるのだ」飛「ところが年増の方は、ずつと自己にのつて居るといふ奴だからノ」と、話しながら此方へ來れど、下太郎は猶窓の外へ首を出して見てゐる容子に、喜「其様に殘り惜いのか」下太「ヱ」飛「もう諦めて此方へ來さつし」下太「ヱ」野良「イヤァ下太公の天窓が格子へ支へて引込まねへのだ」喜次「徳利へ指をつんこんで抜けねへ時、うしろから搩ると、ハッと思ふ拍子で抜けるといふから、下太公も後から搩つたら、天窓がすほんと抜けるだらう」下太「ヱヽ其様な事をされたてまるものか」飛「夫でも首が抜けねへぢ

遣らつせへ」ト、無理無體に引立てれば、下太「アイタヽ、ヽ、ヽヱ何をひどい事をしやアがるのだィ」飛「何故横目で人を見るんだ。首は傾らねへのか」下太「大聲をすると鬢へ響くから靜にしろィ」飛「ヲヤ〳〵お座頭を見たやうだ。ソレ〳〵煙草盆へ蹴爪突くは。何で此樣な天窓に結やアがつたのだなア」と窓の所へ連れてゆき、飛「サア野良さんのお閨樣を連れて來たぜ」と言ふ時、下太郎も窓の格子から首を出し、「此處は私きの家なんだから、些お這入んなはいなねへ」ト言はれて、女は顏見合せ、少し猶豫居たりしが、新造「ヲヤ下太さんで御座いますか」としま「ホンニ下太さんだよ」新造「晩には急度おいで被成ヨ」としま「他へいらツしやると聞きませんよ」下太「亦恍惚を請させやうといふ了簡か、何樣も成らねへぞ」としま「ヲヤ逆にじだヨ」しんぞ「眞正にお往なさいヨ。八ツに成つても七ツに成つても待つて居りますから」下太「ト言つて隨落の邪魔をされて、少熬なんぞぢやア恐れるぜ」喜次「ヘンおたのしみな世かいだなア」ト、手をのばして下太郎の尻の傍をチックリ措めれば、下太「アイタヽ、タヽ」と身を反す拍子に、窓の上に在る輪七五三をかけた折釘へ、髷が緊り引かゝり、ぶら下げられた如くに成る故、たゞさへいたき鬢の毛がいよ〳〵ぐつと引釣つて、耐へかぬれど例の見えばう、首伸のばし足爪立て、いたさを忍んで髷ぶしを引掛けたなり、そしらぬかほ。下太「晩には枝豆と茹玉子の惣仕舞とやら

や、下太さんは何處へ往つた」跂「其處に居るのが見えねへのか」野良「ヱどれ〳〵」と下太郎を見て、「ヤお前何様した。ヲヤ〳〵其顔は百眼の通人といふ眼に成つたぢやアねへか」飛「ウウツ其髷は何といふのだ。自己アお前ぢやアねへと思つた。ヲヤ〳〵天窓の毛の穴が一本々々に盛上つて居らア。何故此様に引詰めて結つたのだ。夫とも茶番の趣向でも有るといふのか」下太「氣樂な事を言ひなさんなイ」飛「ヲヤ否に熬やアがるぢやアねへか」野良「下太公は疳が起つたのだらう、眼付を見ねへな」飛「何にしても通り過ちやア詰らねへ。ヲイ喜次さん、下太公が首ッ丈といふ麥湯の姉さんどのが向うから來たから、一寸見なせへ」、と窓へ駈往き、格子の間から首を出し、「早く〳〵」と呼立てるに、喜次郎もどれ〳〵と立出でて、「フウム、なか〳〵美しい代物だ。ヲイ下太公、早く來て其引詰めたところを見せて遣つし」下太「其様な甘口で謀される様な、自己だと思つて居るのか」野良「否に疑りやアがるぜ」飛「天窓の皮を引つゝたので、根性へ斜が出たのかも知れねへ」此時表を通りかゝつた年増女と新造が、野良七と飛八を見て、とし増「ヲヤ野良さん、此處が貴君のお家なので御座いますか」しんぞ「飛八さん昨晩は御馳走」野良「些とおよりな、此處は自己の妾宅だから」飛「野良さんの圍女といふのをお知己にするから」ト言ひながら、彼方に一人居つてゐる下太郎が手を探つて、「早く往つて顔を見せて

勝して置かう」かみゆひ「こりや大分端毛が長うなつたさかい、髷の方へ融通して結うて置きまするぞへ」と、下太郎が天窓の髷を後の方へぐつと引出して結ひ仕舞ふト、髪結は鬢盥を直に引下げ、「旦那さん左様なら」と忙がしさうに出でて行く。喜次郎は下太郎の顔を見て、「ヲヤ〳〵お前の顔は何樣したのだ」跂「ホンニのう、开して其髷は何のことだ。ヤア〳〵天窓へ内藤東埔塞を見たやうに、竪に幾筋も皺積が出來たぜ」喜次「其はずだア、毛穴が一本々々に持上つて居るのだものヲ。开して、ヲヤ〳〵泣辨慶を見たやうな眉毛をして、眼はもう夫つきり明ねへのか」下太「何にしても晴々とした。マア一ぷく遣らかさう」と、首を居ゑて火鉢の側へ來り、何か搔さぐつてゐたりしが、「ヲイ跂さん、此處らに自己の烟管と烟草入が在るだらう、とつてくんねへ」跂「いけ懶墮な男ぢやアねへか、自分でとらッしな」下太「探らうと思ふけれど見ッからねへものを」跂「直膝の脇にあらア。开して何故首をすゑて向うばかり向いてゐるのだイ」下太「下の方が見られる位なら、お前にとつて呉れろと言つて頼みやアしねへは」喜次「エ、それ茶を注いで置いた湯飲をひつくりけへしやアがつたは。何で下も見られねへ程、髪の根を引詰めさしたンだイ」跂「引詰めさしたんぢやアねへ、化詰だの何のと言つて悪れ口をきいたもんだから、引詰められたのだア」此時表の格子が明き狼狽て入り來る野良七飛八、「ヲイ〳〵喜次さんヤ跂公

のあるえらい大きな藥罐の直を付けたがな」下太「フウム、青柳橋を廻る髪結の天窓に似て居る藥罐が出て居ると言つたが、大方夫だらう」喜次「何だかべらぼうと舌戰あつて居るのヲ」髪「下太公の天窓の上へ、親方の天窓が重つて居ると、まるで銅の瓢箪といふ鹽梅に見えるから宜いぢやァねへか」かみゆひ「兀げた天窓の青うなり、凸凹も見えんやうに成る傳授が有るがな。その傳授は、稗を買うて來て粘へ雜ぜ、その稗粒を天窓の赤う成つたところへ平たりと塗付け、水を打つては乾かんやうにして置くと、頂天の熱氣で一晩も過たぬうちに、其稗粒が蒼う芽をふくので、月代よりは何程か綺麗になる事ちやが」下太「チツト化結さん、其様な根揃ぢやァいかねへ、もつとぐつと引詰めて呉んな」かみゆひ「私えらう詰める事は不得手ぢやでなァ」ト、何かぐづ〳〵して居る故、下太郎は圖に乘つて、「膝栗毛の喜多八ぢやァねへが、上方仕込は根を詰めて結得ねへから困る。もつと思ひ切つてぐつと遣つて見なせへ。何でも自己の樣な客には、結人の方から廿八文は出しても宜いのだ。根をつめて結ふことを教へて貰ふのだものヲ」かみゆひ「是りやもうお前はんの言はしやる事が本間ぢやわいの」ト言ひながら、下太郎が髮の根を力一ぱい引詰めれば、天窓の皮へ四ッ五ッひだが出來、眉毛も眼も釣し上つて仕舞ふゆゑ、下太郎ははつと思へど、今更寛めてとも言はれねば、下太「まだ少し緩いやうだけれど、この位なら不

髭は赤いはうが多いから、伸して椶櫚箒屋へ卸したら宜らう」かみゆひ「彼様いふお髭を長うしたらとッと埒明かん。私の知つとる人がなア、丁度此方の様なお顔でなア、椶櫚の毛のやうな髭を長う伸してぢやつたが、子供等が蜻蛉をしばるとて、其人の顔をなア、馬の尻と見違へ、赤い髭を尻尾ぢやと思うて、引抜いては逃げて往きよるので、蜻蛉の居る時分、おもてへ往ぬると、えらい災難をきるからとて、家にばかり居てぢやッた」下太「馬の尻だなぞとおつう當付けるノ」かみゆひ「ヲット動くと切りますぞへ」下太「切らなくつても、切られるよりやア痛へから澤山だア。エ跂さん、自己の知つて居る男がノ、此髪結公と柬埔塞ニッといふ醃梅に似て居る顔よ、其奴が堀の内さまへ參つた時、四ッ谷の街道を牡丹餅を買つて喰ひながら歩行いて居ると、向うから來た馬糞浚が、竹の先へ附けた鮑ッ貝を、牡丹餅を撮んで口へ入れやうといふ拍子に、顋のところへぐいと突付けたから、何をしやァがる鈍痴氣めエといふと、馬糞浚が肝を潰し、コリャ何樣ぢや、馬の尻の穴から糞が出るのかと思つたら、人間が牡丹餅を喰つて居るのか。物を言つたから口だと思ふが、默つて居ては何樣しても尻の穴としか見えぬと言つたさうだ」かみゆひ「サア頭上を濡さんせ」下太「ヲット承知、そら來た」ト、天窓を濡して突付ければ、髪結は下太郎が月代を揉みながら、「イヤ此方さんのお頭を見たで思ひだした、先頃柳原で一面に凸凹

髪結から見りやァ、髪結といふのぢやァねへ、化結といふので、お前なんぞの遣ふのは髪剃ぢやァねへ、化剃といふのだ。空然して喜次様の化毛でも剃落すといけねへぜ」喜次「宜いよう騒雑しい。ノウ親方、いろのできねへ奴といふと、口がわるくつて成らねへものだ」跂「ヱ下太公、今お前の左様いつた膝栗毛にある喜多八が、古市で髪を引つめられたと言ふ一件は、眞に彼だツたらうか」下太「何の彼様な事が有るもんか。自己なんぞも引結つた髪が好だから、思入固く結つて貰ふ方が、せい〳〵して能い心持だ」喜次「左様でもねへ、悪く引結められると、天窓へ何かかじり付いて居るやうで、耐へられねへもんだ」下太「所が天窓を持つて提下げられる様なのが能いのだ」跂「夫でもお前の髪は隨分寛く束ねてあるぜ」下太「是だから何様も氣に入らねへのよ」と、二人が噺して居るうちに、喜次郎は髪を結上げ、「ヤレ〳〵大きに御苦勞だッた」と、立上りて後方を振向き、「何様だ下太さん、お前も結つて貰はねへか」下太「左様さ結つてもいゝよ。何様だ化結さん、ぐつと引結めて遣つて貰へてへが、引結める事を知つて居るかネ」かみゆひ「お江戸なれんでなァ宜うは結れんが、遣つて見ませうかいな」下太「其様なら一番束ねて見て呉んねへ」ト、喜次郎が立つたる跡へ居り込み、銅盥の水にて顔を濡せば、髪結は後へまはり〳〵「是りやえらいよいお髭ぢやなァ」下太「宜いといふのでもねへが、只女惚のする髭サ」跂「下太公の

妙竹林話 七偏人 三編巻之上

偖も七人の能楽者どもは、春の朝の酒機嫌、妙義参の初茶番、天神橋の一趣向、ヤンヤと言せる計較の、手はずが瓦落裡くひちがひ、遣損ねしも一興と、用意の船に打乗りて、堅川通を漕戻りしが、其後はさせる事もなく、昨日に今日と打過ぎて、暑さ彌増す夏の日も、水無月半端に成りにけり。偖も彼青柳橋なる能楽亭には、主人の喜次郎縁先に髪を結せて居る側に、寐ころんで居る下太郎跂助、喜次郎は髪結に鬢のところを澁せながら、「剃公お前は上方だの」かみゆひ「左様でござります」喜次「上は何の邊だ」かみゆひ「伊勢でござり升」下太「伊勢ならば膝栗毛の喜多八が、古市で髪を結せたなアお前ぢやアねへか」かみゆひ「膝栗毛の喜多八さんぢやつたやら、何ぢややらえらい旅人ぢやで、とッと分らんがナ」跂「おめへの前で左様言つたら腹を立つだらうが、伊勢あたりは髪のいひやうが、何様も下手だ。アヽとエヽ夫々古い落噺に、蝮蛇といふ名は何様して付けたのだらうと聞いたら、彼は蝮といふものが蛇だから、蝮蛇と付けたのだと言つたら、偖々蛇れば蛇るものだト言つたといふ噺が有るが、何でも上方の髪結は、江戸の

七偏人三編敍

怎麽妙竹林話の腹稿と云つぱ、人心不同七偏人、劉伯倫に似た酒風漢あれば、阮籍の如く醉放人を白眼もあり。阮咸に似て犢鼻褌を竹竿に掛けて、七夕祭をなす如き白漢あれば、王戎の如く日輪と白眼競する倥侗あり。嵆康に似て酒計飲んで無言なるあれば、向秀の如き寐好あり。又山濤に似た多辯あり。性愚あり性直ありて、計較に興あれば、言語に絶倒ある、其筆頭の機關は、覗いて知れぬ江湖上の、滑稽洒落の中道を探り、人情世態を細末に穿ち、猪蹐もおくれぬ當時の流行、世界の魁作者の旭、大庾萬株の梅亭主人、其名は四方に隱れなく、匂は筑紫の邊地迄も、風に薫りて飛楳の、とんだ評判よしと聞き、書肆は次編を矢の催促、金鷲子は弓の張臂なして、當りを覘ふ得手の楽、玆に三編稿脫りて、未序文のなきを倖僥、僕も雜魚の大魚交、鰐陽魚の齒怒端背な、人竝らしくも述ぶるに南。

春霞楼の北窓に筆を染めて

鶴亭秀賀識

ずり起し、橋の上には立廻が、早始りしと聞くよりも、二人は寝耳に水調子の、合ふもあはぬも足踏の、相圖も更にいらばこそ、周章てゝそこの三味線とり、ベンベコジャンジャラベンベコと、滅多やたらに彈きたてる所へ、喜次郎茶め吉は鼻を撮んで迯來り、船の中へ飛んで入る。此時調市下太郎も、有漏々々此處へ來かゝりて、此有樣を見るよりも、同じく船へ入らんとして、橋から斷來る虚呂松に、思はずばつたり突當り、下太「これはなんだ、ヲヽ臭へ、糞だ〳〵、ヲヽくせへ」虚ろ「私きも誠に臭い〳〵」と、二人も船へ飛乘れば、待構へたる船頭は、すこしもすかさず立上り、舫を拔いて船棹を、グッと突張るその拍子に、船はゆら〳〵中流へゆらめき出づれば、飛八野ら七此處を專途と撥打付け、ジャンジャラジャンジャン〳〵、スチャラカチャン〳〵。飛「ヲヽ臭へ」野ら「ヲヽ臭へ」三味せんジャンジャンジャ、ジャン〳〵。喜次「ヲヽ臭へ」唄「吹よ糞風あがれよ簾アれ」三味せんジャンジャンジャン〳〵、一同「ヲヽくせへ」唄「中の小唄アの顔見たアや」三味せんジャンジヤ、ジャン〳〵、スチャラカ、チャン〳〵と、天神川を押下り、竪川通へ漕戻りぬ。

體ねへ、天秤棒で相應だ。覺悟をしろ」と打つてかゝるに、喜次郎は困りきつたる顏しながらも、詮方なければ不勝々々、襟にさしたる如意を取り、トヾおしらひて立廻る。然る程にまた虚呂松は、糞取桶に突當り、むざんや半身黄に染みて、その臭きこと夥しけれど、喧嘩の相人につらまりては、何樣なる目に逢ふも知れずと、鬘は摑みとられても、幸ひ袂にのこりし頭巾を冠りながら逃來れば、往來の人は是を見て、「ソレ糞女だ、ヤレ糞だ、ヲヽ臭やヱヽヱくせへ」ト、かなた此方へよけて通せば、天神橋の橋際迄、眞暗さんばう駈けて來ると、折よく試合の最中ゆゑ、甘いとこだと舌打しながら、彼糞だらけな形をして、遠慮もゑしやくも有らばこそ、戯る「まア待つて下さんせ」ト、二人が中へ割入るに、その臭さ五臟をとほせば、喜次郎も茶め吉も、ウンとばかりに反かへり、「こりや何樣したのだ其形は、ヱヽヱ臭へ、ヲヽ臭や、寄付かれてはたまらぬ」と、天秤棒を投出し、茶め吉あわてて逃出せば、喜次郎もまた逃出すゆゑ、そりやこそ喧嘩が此地へ來た、ヤレ糞女につらまるな」と、橋の四邊の混雜は、宛然鼎の沸くがごとし。是より先に跣助は、棧橋を下りたちて、船の中へ飛乘り見るに、起きて居るは船頭ばかり、野良八も飛八も、容子を見に出し喜次郎が、歸りの遲きを待ちかねてや、踏ぞりかへつて大鼻息、前後も知らず寢入つて居るに、コレは何樣だと搖ぶれど、叩けどさらに性體なきを、無理無體に引

しとは夢しらず、猶虚呂松茶め吉の二人をたづね、有漏々々として此方へ來たる橋の半ばで、茶め吉が袖する程に行違ひても、群集といひ、向うにばかり氣を入れて、心付かずに往かんとする、紙布の袂を藪から棒に、腕を伸してしつかりつらまへ、「ヤア迯げるとて迯がさうか」ト引止めれば悔りし、振向き見ると茶め吉ゆゑ、苦りきつたる顏をして、喜次「チヨツ出し拔に何樣したものだ、後見は居ねへのか。まだ狂歌も讀まねへうちに、何で其樣に取違るンだイ」茶め「出拔だらうが取違やうが、もう彼樣なつちやア武士の意地、譬へ狂歌は讀まねへでも、讀みさうな面だから、未前を察してとらへた袂、成らば手柄に採つて見ろ。ナヽヽなんと、ヤイ坊主」ト少し氣取つて仕かければ、通りかゝりの老若男女、アレ喧嘩よと立騷ぎ、右へ左へ駈走るに、喜次郎も今は是非なく、「コハ理不盡なるお武士、何科あつてとゞむるぞ、きり〳〵放して通し給へ」ト、紙布の袂をとらへし手を、ちよつと拂つて突戾せば、茶め吉後へたぢ〳〵と、よろける足を踏しめて、「ヤアちよこざいな賣僧の腕立、觀念しろ」と手を伸し、背中の木刀拔かんとして、先に芋九郎が家に轉びし時、木太刀は縛せし幅沙と共に、彼處の玄關へ置きざりて迯來りしを思ひ出し、ハツと狼狽へあたりを見ると、橋の上に荷をひそげし、蜜柑商人の天秤棒が建てかけ有れば、周章てて駈寄引滚ひて持來り、茶め「汝等が樣なひよつとこ坊主は、木太刀などでは勿

さがす頃は、人も追々出盛りて、よき汐時とぞ成りにける。爰にまた茶め吉は、支度せんとて迯込みたる寺の、地内を立出でて、後見跂助と諸共に、ひたすら道を急ぎつゝ、豫て相談きめ置きたる、待合茶屋へ至らんと、法恩寺橋どほりを眞直に、天神橋の橋でまへまで來り、彼方を見ると喜次郎は、彼歌修行のこしらへにて、向河岸を散眼々々しながらあるいて居る故、茶め「ヤ、アレアレ喜次さんが歩行いて居るぜ」跂「ドレ〳〵。フウン何さま兩方の脚であるいてゐるワ」茶め「隨分請けることしらへだなア。見なせへ、觀音經の一手や自我偈の構へやう位は、心得て居さうぢやアねへか」跂「夫りやア宜いが、何樣か此地の方へ足の先がむいて來たぜ」茶め「シテ見ると調度橋の上でぶッつかる見當だが、直におつ始める了簡ぢやアねへかナア」跂「チヨッ待給へ」ト橋の下を覗いて見、「イヤアしめ〳〵、船も來て居るワ。しかし虛呂松が何樣であらうか」と、橋の袂の小高きところへ駈行き、川緣どほりを伸上り見ると、割下水の方より、彼革色の頭巾をかぶりて、虛呂松らしき者が駈けて來るゆゑ、茶め「イヤウ見える〳〵。何でも直におつはじめる手筈にして有るに違へねへ。お前は早く船へ往つて、その趣を通じなせへ」跂「ヲツトよしよし」茶め「トヽヽヽトンが切かけだぜ」跂「案事なさんな、承知だヨ」と、例の早卒同志が二人で計のみこんで、跂助は棧橋を下り、茶め吉は身構しながら橋の上へ行向ふ。喜次郎はかゝるべ

立ち、「なんの愚鈍踏潰すぞ」ト、大手を廣げて虚呂松が天窓をいきなり引摑み、捻倒さんと力を入れ、引けば鬘はぽつかり脱け、力まけして仰向に、でんぐりかへるト生憎に、浚ひ上げたる小溝泥の、中へばつたり轉り込み、體は半端埋まるを、見るより虚ろ松突立上り、「けはひ化粧や振の袖、女々しくつくるは世を忍ぶ、假の姿と知らざるか。べゝゝゝべイノべつかつかう」ト、尻を叩いて一散に、迯出す先の横町から、荷ひて出づる糞桶に、出合頭突かゝるト、桶は搖れてドンブラコと、飜れる糞を虚呂松は、半身あびて向うへよろけ、鼻を撮んで立すくみ、虚ろ「アゝッヱ、ゝ、ヲゝ臭へヲゝヲくせへ」往來の人、「ヲゝくせへ、ヲゝヲ臭へ」虚ろ「ヘックシヤウ。ヲゝ臭へ、ヲゝヲ臭へ」

案下再説、船に殘りし喜次郎、飛八、野良七の三人は、建川通を漕上り、天神川へ横ぎりて、程よき岸へ船着けさせ、豫て落合ふ約束の、茶屋へ上つて待ちかまへ、何時まで立つても虚呂松も又茶め吉も出て來ぬは、もしや突かけ天神の、社の方へ行きたるかと、思へば萬事不安にて、心にかゝる事のみ故、三人は相談つけ、此處にて彼是氣を揉むより、天神橋の橋下にて、待つこそ宜けれと決着なし、再び船に乘移り、猶川上へ漕ぎのぼつて、天神橋の下に着けさせ、喜次郎は虚ろ松茶め吉らが樣子を見て來んと、野ら七飛八を船にのこし、一人陸に上りて、其地此地尋ね

誠に逆上せていけないので有りますは」ト、元より大の自惚ゆゑ、剰出にて面を見せ、十分請ける氣に成りて、冠りし頭巾を一寸取れば、大丸髷の根のとこへ、切こて〳〵と捻り付け、其方此方へ笄さし、牛の樣なる襟元から、鼻の先まで眞白に、塗る白粉のむらはげせし、顔突出して鬢の毛を、搔上げながら、「ヲヽ熱や」ト大愚が體へしなだれかゝれば、往來の人は是を見て、笑ふも有れば囃すも有るに、大愚も今はたまりかね、大愚「ヲ、アレ、ちよつと見たまへ、アレ〳〵、是は奇てれつなものだ、何であらう、アレ〳〵」と、言はれて、虚ろ松立止り、「何か珍らしい物でも有りまふのかヱ」と、彼方を向く時、後から來かゝるでつくり肥滿た男の陰へ、ちよいと隱れて横町へ、大愚はこそ〳〵迯込むを、虚呂松は氣が付かず、「マア惡らしい、何にも有りもしない物を。顔を見せるが否だといつて、人に彼地をつん向かせてサ。夫ほど私が否ならば、程よく作れて來ぬがよい。往來なかでも眞晝でも、惚れたに加減がなりませう。此方の殿御」と言ひながら、側へ來かゝる太つた男を、大愚と間違へ身をよせて、腰のあたりへかぢり付けば、太つた男は肝を潰し、「コ、この氣違めヱ何をする」と、握りツ拳を振上げて、横ツ小鬢を突飛され、虚呂松は仰天し、「何樣するのだ」と振返る所をコツキリ又打れ、虚ろ「アヽいたゝゝゝいてへぞ〳〵、べらんめへ〳〵、何で自己を打つたのだ」ト、やつ氣と成つて絡りかゝれば、太つた男は彌腹

給へ、今日は大人もお懇意の蘭英齋大人が、狩野家の妙筆を揮つて、押上邊から請地村のわたりを、眞景にかいて遣るからといふ約を結び、先生は波暁子椿亭子などいふ俳天狗と共に、面の白いのを兩三人しき從へ、臥龍の園ちうへ頓より鳳駕がきしつて居るといふのだから、拙も遲參に及んでは、其罪また輕からずス。モシ大人、といふ譯だから、失敬は大容におん見なしとして、お先へ御免を蒙り、羽織も恐れ入谷の鬼子母神に對するやつかネ。何は兎もあれ寛りッとおしけり。オホンオホン」と迯出す、大愚の袂をしつかりつらまへ、虚呂「何だらうネヘ、オホンオホンと其樣な、黄色い事をお言ひなはらずに、一所に往つてお呉んなはいヨウ。何ぼ私がどた福だとて、天の岩戸の御扉を、開けば同じ女子のはし、お雜煮ばしや鐵火ばし、せめては天神ばし迄も、お供をさして下さんせ」ト、否がるところへ付込んで、惡しつッこくもた付きかゝれば、大愚は殆どあぐねし樣にて、「チョッ是は何樣だ、大人とも思ひ侍らねへ、惡敷ふざけはよし給へ。アヽいたゝゝゝ、また措り給ふか、何樣もならねへゾ。アレ〳〵段々に人が集ふ、よし給へと言へば止したまへナ」と、困り果てたるその樣子。虚呂松は船の中にて、飲みたる酒が次第に廻るのみならず、女の頭巾をすつぽりと、冠つて顏を包みしかば、天窓はふら〳〵目はちよろ〳〵、機嫌上戸の癖として、しきりに一人で面白がり、虚呂「私やァお酒を給べたせへか、

私は戀の手負獅子、見すてられゝば猪のしゝや、祭の先の獅子頭、餘所のはやしも恥かしゝ、エヽ悔しゝや憎らしゝ、腹立しゝ」と言ひながら、手當り次第措りまはせば、大愚は彌惘り驚き、「エヽアレサ、あゝいたゝ、エヽアヽ」と飛除き〳〵不思議さうに、頭巾のうちを覗きても、何樣も見知らぬ女なれば、大愚「僕が俳名をお呼びのからにやア、知らねへお人ぢやァ有りやすめへが、何分思ひ出せやせん」と、あつけに取られしその風情、虚呂松はづに乗つて、「おとぼけ被成にも程があるンでありますヨウ」と、大愚が顔を媚目でじイッと見入れながら、「アノヲタまでも今朝までも、枕ならべて一所に寐て、其方を向けの此方を向けの、いとしらしいの可愛の、肌目こまかだの餅肌だのト、恥かしがるを撫ツ摩りツ、人をさん〴〵嬲つて置いて、誰だか知らぬの何の彼の、其樣なそのよな言譯を、小さい時からなまなかに、手ならひまでも一ツ所、何やら雙紙へ書いたのを、其方に見せて問うたらば、戀といふ字と言うたのを、結び始の殿御ぢやと、思うて居るにその樣な」ト、大愚が體へかぢりつけば、大愚はエヽと震へあがり、冷汗をかきながら、頭巾の中を能々見て、大愚「エ、何の事だ、面白からねへ。何人かと思ひ詰すれば虚呂松大人、チヨツ悪しき洒落をし給ふものかな。アレ〳〵人が集ひてじろ〳〵見るはス。何らの御催か知らねへが、その美姿では眞に詫入る、是ばツかりは閉口つた。夫にネモシ、聞

早後見は來さうなものと、折々後をふりかへり、見れどもいまだ下太郎もまた跂助も見えざれば、無多口をきく相人もなく、一人歩行の淋しさに、葭簀張の茶屋へ這入り、後見の者を待ちあはす心にて、何かわるふざけなどしてるるト、表の方を彼見えばうな石町の大愚が、相も變らぬ大めかしの、ヲホン〳〵で行くを見附け、あわてて茶屋を駈出し、虚ろ「モシへ、アノ大愚はん、大愚はんツたらじれつたい、お待ちなはいよう、大愚はん」ト呼びかけられて大愚は振向き、見れば見なれぬ大女が、頭巾に顔をすつぽり包めば、誰とも當りの付かざる故、不怪さうに監へて、大愚「アノ僕に聲をかけ給ひたるは、貴孃でありやすかネ」虚ろ「ハイサ、私なのでありますヨ」ト、何か否味な腰つきして、いきなりずつと側へより、大愚のからだへもたれかゝれば、大愚は周章てちよつと飛除き、肝を潰した顔をして、上目でじろ〳〵見る可笑サ。虚ろ「何だらうねへ、迯げたり何かして大概ぢやア有りませんか。そして初卯には是非誘ふからト、約束して置きながら出し拔いてサ。夫だから大方餘所のお樂でも連れてお出のに違あるまいと、思へばくやしい獅子文球の獅子、トツピキピイの角兵衛獅子で、逆さに立つて歩いても、私のやうな一文獅子では、御意に入らぬは知れてるるが、人の女獅子をスボンとぬいて、彼樣して出てお出なはつたかと思ふと、なんぼお前はんが雄獅子でも、起請の詞がくるひ獅子と、思へばほんに腹の立つ、

にもう據ねへぜつにかゝつて上つたのだ」跂「チョッ夫だから一人でひやかしに來なさんなといふのだ。足下が上ッたら仕方がねへ、おいらだつて格子の先のすぐ歸りといふ譯にやアいかねへ。お前の遊君にさう言つて、座敷ばかりでも宜いから、面の白いのを一人よんで呉んなせへ」茶め「エヽイ人の氣も知らねへで、むだ口所か。コウ〳〵其處らに誰も見えねへなら、お前はその草鞋と大小を持つて迯げてくんな、自己ア此處にやア居たゝまれねへ」と言ふより早く飛出せば、跂助も何處となく底氣味わるく成つて來て、四邊散眼々々草鞋と大小を引浚ひ、一生懸命迯出す。茶め吉はこけつまろびつ四五丁程走り、寺の地内へ駈込む故、跂助もまたつゞいて駈込み、跂「ヲヽせつねへ」茶め「自己もヲヽせつねへ。夫は宜いが追蒐けて來やアしめへかなア」跂「ナンノ誰が來るものか」茶め「それぢやア此處で仕度をしやう」と、草鞋をはき大小を差しなどして、ホット一息つくなるべし。

爰にまた虛呂松は、女の姿の衣裳さへ帶さへ花美な形ふりに、抜衣紋のござれ腰、小褄をたかく撮みあげ、赤き蹴出をひらつかせ、引ずり歩く駒下駄の、音さへコロ〳〵ガラ〳〵と、香味づくめな身振ゆゑ、頭巾はふかく冠りても、往來の人の目に付くにや、何かひそ〳〵耳こすり、私語きあうて往くあれば、笑ひを含みて通るもある故、彌からだに品をつけ、透逦と歩行きながら、

兩人は、虚呂松と茶め吉を見うしなひ其行方を知らざれば、下太郎は虚呂松を尋ね、跂助は茶め吉が後をしたうて、所々方々搜しても見付らねば、猶あちこちと尋ね歩行きて法恩寺橋通へ出來り、龜戸の方より來る人に、武者修行體の者を見かけざるやと問ふに、その武者修行の人は、今劍術の稽古道具をかつぎたる人が七八人にて、彼處の冠木門のうちへ連込みたりと聞き、「イヤアそいつア臭い噺だ」と教りし門へ往き、そつと中を覗いて見るト、果して玄關のかたはらの土間に、茶め吉が差したる朱鞘の大小が、草鞋と一所にかためてある故、さてこそト心に點頭、人の居ぬのを幸にこは〴〵門のうちへ這入り、玄關へ行きて見るに、茶め吉は衝立の蔭に茶烟草盆などひかへ、けゞんな顔してかしこまり居るゆゑ、跂助は式臺へ手を突き首のべいだし小な聲にて、「チイ宮本先生、チイ〳〵武藏先生といつたら、チイ〳〵」とよばれて、茶め「へヽヽへイ〳〵」跂「此處だヨ」茶め「へイ〳〵」跂「ヱヽイ奥の方を見て拜ばかりして居やアがるは。コ此處だヨヲ」茶め「へヽへイ、ヤなんだ跂公か、アヽア有がてへ〳〵」と、溜息しながら、「自己アもう大變なめに逢つたぜ」と、四邊きよろ〳〵拔足をして式臺へ下り來り、「チだれも居ねへのか」跂「足下はなんで此樣なところへ這入りこんでるるンだ」茶め「ヘンなんで所の騷ぎかへ、這入らねへといつて見なせへ、直に打殺して生肝でも抜きさうな見脈だから、誠

お上りなされては失禮で御座らう」茶め「へ、、、、、へイ〳〵、ア、ア何樣も誠になれませぬこと故、何事も取違まして、へイ〳〵」と兩刀をとつて、草鞋と一所に土間へ置き、喜め「此土御失禮がござつたら、もそつと小な聲でお願ひまうします。其樣にいかめ敷お叱り被成ト、肝へこたへて成りません。へイ〳〵」と震へ〳〵式臺へ上りながら、劒術者の家にては這入口の兩方に待伏して、不意に組付くなどいふ事を兼て聞きかぢりゐる故、若や左樣いふ事でもありはせぬかト、きよと〳〵しながら敷居へ足を蹈かけ、玄關へ上らんとするト、脊中に脊負ひたる幅紗包へくゝりし木太刀の先が鴨居へ突懸り、後の方へよろけ、ハット思ふその拍子に、式臺の中段を足蹈はづしてどた〳〵どつたり、眞仰向に轉り落ち、さては上から手を出して拋られたろかと肝を潰し、「ア、いた、、、、、エ、悪いお冗談を。ア、いた、、、、ナンノ此樣なことと知つたら、此役は虚呂松にでもさせたものヲ。ア、いたい〳〵、脾腹の筋がアッた、、、」と小言たら〳〵起にかゝれど、脊中に縛せし木刀が支へて五體は自由にならず、㑭り〳〵して居るを、クツリ〳〵笑ひながら團吾は手を採り引起せば、茶め吉顏をしかめながら立上り、「是は先生、ア、いた、、、痛いお世話に相なります」トいふ時、隣の下屋敷でズドンと放す大筒に、エ、と㑭り茶め吉は亦尻餅をへつたり突き、「ア、いた、、、」〇案下再說下太郎鼓助の

妙竹林話 七偏人 二編卷之下

再說茶め吉は七八人の武士に、前後左右を打圍まれ、息さへ支へて出來ぬ心地に、是非も菜の葉へ振鹽の、しほ〳〵として龜戸の方へ一二町行くト、ある冠木門のうちへ無理むたいに引込まれ、茶め「ヘイ〳〵ヘイ〳〵、私儀は些お先をお急ぎでございますから」圓吾「イヱ〳〵左樣な御斟酌なく、まづ〳〵あれヱ」茶め「何サお急ぎなさるのは私」芋九「サア〳〵是へお上り下され」茶め「ヘイ〳〵」權藏「去來お通りなされ」茶め「ヘイ〳〵」談次「お上りなされぬか」茶め「ヘイ〳〵ア、是は情ない。跂助や下太公は何樣したらうなア」圓吾「ナニ跂助で下太公とは、身共へのお當こすりで御座るか、譬へ跂助で下太公にいたせ、師匠此四郎より免許皆傳の拙者」茶め「イヱイヱ跂助下太公と申したは私の友達のこと」芋九「何は兎もあれ、あれへお上りめされ」茶め「ヘイヘイア、ア、左樣なら御免」雋「ヤアなンぜ草鞋サアお脱なさンねへで、玄關へおふみ込なしやれる」茶め「ヘ、、、ヱヘイ〳〵御免下さい。ヘイ〳〵ヘイ〳〵」と周章てふためき、草鞋をぬぎそこへ置き恐怖びつくり、また式臺へ上りかけると、雋「コレ〳〵、お刀サア差したる儘にて

理屈談次、以來お心安う」茶め「へイ〳〵へイ」「身共は居目頭武六、かう後御懇意に」茶め「へイ」「在下は稚足權藏」ト、ひとり〳〵に名乘りかけられ、茶め吉はたゞへイ〳〵と言ひながら、尻ごみのみして一句も出でず。園吾「御修行人を芋九郎どのの道場へおつれ申して、一本づつお手合を願はうではござらねか」芋九「いかにも夫が宜敷御座らう。しからば宮四殿、拙者宅はつい此先、去來御案内を致すでござらう」ト、すゝめ立てられ、茶め吉は醉さへ醒めて茫然たり。

に御随身で、何方の御弟子でござる」茶め「へイ〳〵師匠は清元延光と名びろめを致しましたやうに御座りますが、チト取急ぎますから」園吾「延光殿は何お流義をお遣ひなさるゝ」僕「たしか神免二刀流だと仰しられましたナ」茶め「へイ〳〵神免二刀流の三味線を、少々かぢりちらしまする様にござりまするが、チトお先を急ぎますから」園吾「お流儀は三絃を御用ひがあるとか、フンいかさまナアル、孔明琴を弾じて魏の勢を走らせ、張良簫を吹いて楚の軍を散ず。固きなかに柔きをとらるゝ流法、感じ入つて御座る」茶め「へイ〳〵チトお急ぎでございますから」園吾「イヤ〳〵決して急ぎはつかまつらぬ」茶め「へイ〳〵」僕「これは僥倖、アレ〳〵皆様がお出なさりまして御ざる」トいふうち彼方より巌乗作の武士七八人打揃ひ、いづれも馬乗袴をはき、三尺有餘の長刀を横たへ、面小手臑當を肩にかけ、大手を振つて大道せましと出來りしが、園吾を見て、是は〳〵土手燒先生、いづれへおん出、今日は売鮓此四郎どののお稽古はじめ故、かしこへ参らうと存ずるところ」園吾「よき折から各方にお目にかゝつた。是なる御修行人は神免二刀流の先生、清元のぶみつ殿の御門弟、六三本宮四藤原の茶め吉とおほせらるゝ無雙の劍家、ちよつと知己になられて宜敷ござらう」「夫は〳〵御高名はいまだ承りませぬが始めて御意えます。拙者は西勝蟲芋九郎とまうすもの、自今お見知り置かれて」茶め「へイ〳〵へイ」「拙者は不

御修行人々々々々〳〵」と呼留められて、恟としながら聞かぬふりにて往かんとするを、僕はしつかり袂を摑へ、「お待ちなしへやし、拙者主人がお目に懸りたいとつてお呼りまうすでナア」茶め「馬鹿なことを言ひなせへ、其様に安ッぽくお目にかゝられてたまるものか。袂を放しなせへと言つたら放しねへヨウ」僕「御所望の通り、主人が試合サア願へてへと申しやせうから、お待ちなさろト言うたりやお待ちなさろ」茶め「こりやァ情ねへ、モウ〳〵凶な奴につらまつたナア」と、口小言を言ひながら、跡の方を見かへると、雲つくばかりの鉢鬢奴が、二王立につゝ立つて、武士「是は〳〵御修行人、はじめて御意得る。身どもは摩伽槃若破羅密多流の元祖摺麥切一八門人士手燒團吾と申す者、其もとには何御流儀を御修行なされ、誰どのの御門弟で御姓名は何と仰せられる」ト問ひかけられて、茶め吉は、「エヘ、、、、ヘイ〳〵あの私は茶め吉と申し上げまするが、ヘイ〳〵天神橋御近邊に連中が待つて居つて、チトお急ぎなさいますから、ヘイ〳〵お不躾にはござりますれど、マヅ〳〵お先へ御免をさし上げたう、ヘイ〳〵存じまする様に存じ上げます。ヘイ〳〵」僕「最前は御名姓を六三本宮四とおよしられたでは御座ンねへか」茶め「ヘイ〳〵お左様さまの通り、六三本宮四藤原の茶め吉と申し上げます」團吾「ハ、ア夫では茶め吉と申すは御實名で御座るナ」茶め「ヘイ〳〵全く戒名に相違ございません」團吾「何お流儀

鞍馬流、音羽屋流、大和屋流、成駒屋流、高島屋流、乃至竹本鶴賀流、常磐津富本淸本流、都都一とつちり端唄流、跡ひき流にくだ巻流、甘いもの流、立喰流、ちよぼくれちよんがれちやらまか流、とこまかしてよい所流など、かく諸流の先生達と手合せ試合をいたしたれど、神免二刀流の薬法をふるひ、立合ふ時はむべ山風の嵐をもつて、奈良の都の八重櫻を吹きなびかすが如くにて、更に歯に立つものをおぼえず。あはれ骨のある劒術者もあらばと、腕をさすりて今日もまだきより立出でたれど、稽古場らしきものさへ見かけず。餘りの本意なさに初卯の日と聞き、せめては妙義の社へなと參詣せんとこの所までまゐつたり。その許にも道場らしきもの見あらば、知らし給へ」と言ひながら、北吹く風のさむきをこらえ、腰なる鐵扇拔取つて、ばさり〳〵と打扇ぐ、その形そぶりをじろ〳〵見ながら、僕「夫だらハア申しませうが、拙者主人が殊のほか劒道執心だで、道サア聞くふりをして、御樣子ノウお尋ね申して參れと申しつけられましたでナア」茶め「エヽエ何のこつた、其樣ならお前の旦那が劒術が好で、自己の樣子を聞いて來いと言つたのか。ナンノをかしろくもねへ惡い洒落だ。そしてお前も些たア遣うンだらう」ト、少しうそ氣味わるく成るゆゑ、「ヲヤさつぱり忘れた。喜次さんが待つてゐるだらう。早く往かう、馬鹿なつらな」と、足をはやめて逃支度する後から、「イヤモシちよつと御意得たい。

股引のまたの穴より振ひいだし、すぐ水の印を結んで湯風呂の羽目を打くだき、白倉一家の奴等をころし、暫時浮世をしのばんと、身を山伏の姿にかへ、安高の關を打越えて、栗生、篠塚、畑、亙利の四天王もろともに、大江山なる千じやうが嶽へ押寄せ、酒呑童子をとりひしぎ、富士淺間の神を拜し、彼人穴を立出でて狩場の暗の闇紛れ、敵祐恒が陣所をたづね、はからずも九紋龍史進に出合ひ、姉宮城野は白柄の長刀、在下は鎖鎌の奥義をきはめ、名を辨慶とあらためて、五條の橋に寐てゐる所を、勝すか保六に足をふまれ、はつと思ひて目をさますと、後方に立たる八百屋のお七、不義はお家の法度と思へど、軍師孔明がすゝめにまかせ、鷺坂番内等を打こらし、彼が古鄕なる山崎村の與市兵衛が方へ至るに、折しも後醍醐天皇は笠置の山へ籠らせられ、楠正成にもまゐれよとの詔、とるものもとりあへず遊君阿古屋をひきいだし、色にはなまじ連は邪魔、ひとり先がけ高名せんと、鐵さい棒を脇ばさみ、御所の總門押破り、梁山泊の麓なる二の口村にぞ著きにける」僕「なる程ハア仰山なお稽古でござりますなア」茶め「いやもう難行修行に衆生濟度して學んだだけあつて、牛馬唐犬はもとより、歌舞妓十八番の武藝はこと〴〵く祕肉を極め、かつ陰陽和合の法に通じ、春三夏六の道理をあきらめずといふなし。在下當地にまかり下りて、先一刀流、眞影流、柳剛流、むねん流、眞ぎやう刀流、明知流、柳生流、まつた

が谷の前後左右に、雲霞のごとく凡そ六人ほどの天狗ばらが、列をたゞしてずらりと居並ぶと言ふので、尤もそれが中の頭だちたる大天狗が在下を見ると、ずいと立つて何方へか往かんとする故、在下早くそばへより、ヤア逃ぐるとて逃さうかと、紙布の袂をしつかり取ると、その手を拂いて突きもどしたが、流石は天狗の糞力に、天晴無雙の在下も、二足三足たぢ〳〵とよろめきたりしが、しつかと踏みしめ、ヤアちよこざいな賣僧の腕立、觀念しろと言ひながら、背中にしよひたる木刀のしんばり棒を拔取つて打つてかゝると、彼方にも如意の孫の手右手に持ち、かつし〳〵と請止めるト、こゝからが笠原と宮本の鍋蓋のたてに成つて、打込む請ける卜、ヽヽヽトンと身をしさり、しんばり棒を肩にとり、暗がり峠の土となれといふ見えでウンとりきんだが、此ウンは在下がちと能くなかつたさうだけれど、夫に構はずまた打込むところを、はつと請止めて下を拂ふ上を拂ふ、たぢ〳〵たぢとよろめきながら、天狗どもに身の輕いところを見せて遣らうと思つて、トヲンとぎばを突くト、その業があまりにすばらしいので、我身ながら少し慢身の心が生ずるかト思ふと、忽地襟の中に燒餅といふものが飛込むと、脊中はさながら火を脊負ひたるごとく、一身燃るにひとしき故、かねて聞く天狗道には一日に五たび大焦熱の苦みを請るト、されば在下もすでに魔道へ落たるかト、心づくより脊中をくどる燒餅を

れたる下部に何かひそ〳〵私語くと、下部はすこし足をはやめ、茶め吉に追付いて腰折りかゞめ、僕「モシなア、些ものべゑお聞き申したうござりやす。龜井戸の天神さめへ參るには、此道さア往きやして宜うござりやせうか」ト聞かれて、茶め吉は打合點き、往來のものにも聞えよがしに、一調子はり上げ、すこし綺語めかして、茶め「在下もいまだ當地は不案內なれど、軍法劍者の妖術をもつて飛行自在に往來する。モシ龜井戸へ往きたくば後にしたがひ來られヨ」僕「そんだらハア貴君さまも、お江戶のお方では御座らねへのかネ」茶め「いかにも左樣、もと在下は因州鳥取の浪人平井權ぱ、デヽでは御座らぬ、肥後の國熊毛の產ぶつ六三本宮四と申すもの」僕「夫では兵法サア御修行にお出なされたのでござりやすか」ト問れて茶め吉、この男の樣子を見るに、何も知りさうもなき山出し故、能きものを生捕つたりと心によろこび、「ヘン其許の愚案の通り、在下母の胎內にある稚きころより劍法をこのみ、始めて桃園に義をむすんで、はやく黃巾の賊を平らげんと、彥山權現に祈願をこめ、一日千人の力をさづかり、故鄕毛谷村にかへらんと、下邳圯橋を通りしに、はからずも黃石公に出であひ、皆づる姬が手引をもつて、六韜三略虎の卷の兵書を探り、引かへして鞍馬山に馳上り、また僧正が谷へ往きたるが、こゝに面白い話があるて」僕「へ、エ御大層な事でござりまするなア」茶め「マア聞きなせへ。その僧正

つた。ドレ〳〵人糞か犬糞か。ヲヤ〳〵正蒲色だから先は人糞の方だ」下太「ナンノ人糞なら側に紙がおちてゐるはス」跂「右へも左へも捻れてゐるねへが、人にしろ犬にしろ餘程出來のいゝきく座だと見えるナア」下太「そりやア宜いが此足を何樣しよう」跂「章魚ならば一本ぐらゐ切つて捨てゝもいゝけれどなア」下太「アヽ段々に臭くなる、エヽエ、ゲッゲヱイ」跂「イヤおれも胸が惡く成つて來た。早くそこの上場で洗ひなせへな」下太「女難は勿論盜難劍難、もろ〳〵の災難をのがさしめ給へと祈つて置くのだが、糞難ばかりは氣が付かなんだので、此樣なめに逢つただ」ト川の端の段を立下り、下太郎足をあらひながら、下太「跂公足下もあらはつせへな、只見てゐることはあるめへス」跂「自己ア糞を踏みもしねへに」下太「踏ねへとつて、そこが突合といふものだはス」跂「馬鹿アいひねへナ」下太「突合のわりいことをするト彼樣だぞ」跂「エヽイよさねへかイ。羽織へ染でもつけて見ろ、身上だア」ト、二人は暫時川の端に押問答をしてゐるうち、虚呂松は割下水通、茶め吉は法恩寺橋通の方に至るに、人の目に付く出立故、往來の男女何者ならんと袖ひきあうて是を見るに、茶め吉は例のうぬぼれに十分請けたりと心嬉しく、いそ〳〵しながら濟しかへッて步行き行く。後の方から來かゝりたる武士、天窓はひつゝめの大奴、朱鞘の長大小を貫木差に横たへ、大縞の馬乘袴をはき、ゆき短き紋付の著物を著したるが、召連

やア此通を往きまふワ」茶め「身共は是より本海道を、サヽ家來ども參りなをらウ」下太「ごたいさうな事を吠えやァがるぜ。そして見なせへアノ威張つて歩くことワ」彌「こつちの柬埔寨もあのざまハイ」下太「そりやア宜ゝが、足下はどつちの柬埔寨へ著く積りのだ」彌「ちよつと思へば武者だけれど、頭巾をかぶつて居るから、まだしも虛ろ松の方だらうか」下太「何にしても二人が貧乏ツくじだ。アレ〳〵見なせへ虛ろ松の野郎めへ、あんなに高く褄をとつて、赤い蹴出なんぞをぴら〳〵ぴらつかせて、アヽ御免〳〵、おいらア身の毛がよだつ程否になつて來た」彌「夫だつて仕方がねへはサ。ヤなんだ茶め吉のすこたん、アレあれだ、犬を蹴飛して追かけられやアがつた。エヽイあの形はイ、實にこてへられねへ奴等だゾ」下太「どうも外にあきらめの付け樣がねへから、拳を打つてまけた方が女、勝つた方が武者に付くとしようぢやアねへか」彌「負けた方がいゝのか勝つたはうが宜いのか」下太「ナニサ宜ゝ惡いに構はず左樣きめねへと、果しが譯らねへからサ」彌「少々馬鹿ぐるが仕方がねへ。本拳か狐か」下太「チト流行には後れたりだが、藤八で參るべイ」彌「藤八なら蟷螂が斧だ。さア來い」下太「イヤ、ヨイ〳〵〳〵ハア是はあいこ、ドンと出しな」彌「ハツト最初お下げなさい」下太「ひよこりと藤八つゞいてちよいと。アツヽこりやア終ねへ」彌「何だ〳〵」下太「糞を踏んだイ」彌「アヽ臭へ〳〵。おらア糞船が來たのかと思

らゐな重みがあるぜ、何様したのだ」茶め「是は鐵でこしらへたので鐵扇と申し、此方の様に武ばつたる武士は皆所持いたすは」喜次「何だかべらぼうと手厚く工んで來たなア」茶め「我ながらも是ほど凛々しくならうとは思はなんだ。コリヤ船人、船を動かすまい。浪をたてると美姿がうねく〳〵になつて宜しからぬは」野ら「アノ馬鹿を見なせへ、首をふつたり捻つたりして水鏡だは」下太「アヽそれを取ると坊主になるぞ」茶め「だまれ〳〵。アツア平常がいきごとに作つてゐるので、兎角にはけが横ツちよへ曲つてならぬ」喜次「ヲイ船頭さん、後見どもを追ひ上げたら、早く船を出して呉んな、何時までもかたが付かねへから」虚ろ「アレサ待つてお呉んなはいよヲ。エヽモじれつてへ。夫ぢやテ後刻きつとざいますヨウ」喜次郎は船の中から首を出し、喜次「夫ぢやア後見しつかり恃んだぜ」下太、野ら「ヲツト承知」野ら「後にしつかり請けようぜ」下太「何れ一旦落合つた上」喜次「例の茶屋だぜ」茶め「よし〳〵」トいふうち船はだん〳〵に間遠くぞなりにけり。茶め吉は武者修行、虚呂松は女のすがたの異なる形も酒ゆゑか、事とも思はぬ盲目蛇、茶め「ノウお虚呂さん、足下は女形、こつちは武道立役といふのだから、暫時もおツつるんで歩行くといふ譯には往くめへ」虚ろ「ホンニねへ、そしてお前さんのやうな野夫ヲなお武家方と一所に歩行くと、圍者かなんぞの様に思はれて、外聞が悪いので有りますから、私き

と、憎らしいねへ」飛五「アヽいたヽヽヽヽ、エヽイ何で人を措るんだい」戯る「ヲヤ何様したら宜からうネへ、野良さんの尻だと思つたら、お前はんのが此様なとこまで出廣がつてゐるのかへ。いかな事でもまア、轆轤首なお尻ぢやア有りませんかネへ」喜次「サア〳〵女形の方は、頭巾をかぶつたら岡へ上つて仕舞ひなせへ。ソヲレ帶を搖り直したり。アヽ世話がやけてならねへぞ。其處でこのお武家さまだが」茶め「身共か、身どもなら草鞋をはいて居るは」喜次「紫の帽紗へ木太刀をくゝつたやつを忘れめへヨ」茶め「アイヤお氣遣めさるな。先刻よりか脊負つて居まうす」下太「まア棧橋まで出なせへ。大小は自己が採つてやるから」茶め「アツア小穢い小性でござるナア」野ら「エヽイ言ひぐさをいはねへで、さつさと上らねへノかい」茶め「身共も彼様なむさくろしい奴等の中に居やうより、速に上陸いたさうと存ずるが、ひどりがきれて動かれまうさぬ」飛「サア大丈夫だから上んなせへ」下太「ソラ大小だ」茶め「ヲヽトよし」喜次「エヽイそつちへ差しては右だは」茶め「アツア弘法にも筆のあやまりツ。彼様して左捻りに貫木差か」野ら「左ねぢりの大小なら、柄や鞘に瓜の種がまじつては居ねへか」戯「ヤレ〳〵穢い糞さむらひだぞ」茶め「ナニ慮外をまうすと、手は見せぬぞ」ト腰をさぐり、「ヲツト仕舞つツたり。コウ飛公そこの隅に扇があるから採つて下ッし」飛「此扇子か、ナンダこりやア澤庵のおしにしてもいゝく

段付をしたらば、何程ぐらゐの相場だらう」眩「釋迦牟尼佛にふませれば、無量劫といふ入札で程もかぎりもわからねへのだ」虚ろ「ナンノお前はん方は譯も知らないで、安ッぽくお言ひなはるけれど、人は美面より床上手、そりやアもう可愛がつて〳〵、手前になら命を撮みとられても惜しくはねへ、ホンニ殿御の命とりだと言つてお呉んなはるお人があるんで有りますヨ引」茶め「だまれ〳〵コリヤ船頭、かやうな鼻持のならぬ女郎が居つては、神免二刀流の武藝のけがれぢや。身共はこゝより上船いたす。かしこの岸に船よせさふらへ。ナニ同船の方々、御緣つきずば重ねて逢はう。アッア蒼海原のしん〳〵たるよい天氣は、とう〳〵たる初春の詠めぢやヨなア」下太「兩人ともチト取逆上せてゐる樣子だが、是でもいざ鎌倉といふ時、じたばたと跂ねまはる役に立たうか」飛「役に立たうが居らうが、そこに構はず蓋に構はず、餘り岡へ上りたがるから、其處らの河岸から追放して見やうぢやアねへか」喜次「だが虚呂公、お前は天窓が鬘だから、なんぼ女ぶりを見せたくつても、むき出しぢやア歩行けめへぜ」虚ろ「私きも左樣思ふから頭巾を持つて來たンでありますヨ。だがネ、染が葡萄鼠だといゝのだが、革色だから誠に氣に入らないので有りますノサ」野ら「だけれど鳶色でねへから宜い、鳶色だト面の染と一ッだから、前だか後だか向わからずで、後見がまご〳〵するは」虚ろ「アレまア野良さんの口の悪いこ

妙竹林話 七偏人 二編巻之中

斯ていよ〳〵初卯の日と成りければ、亀戸の里なる妙義の社へ參詣せんと、彼七人の連中は兼ねて工みし茶番の趣向に、衣裳小道具とりとゝのへ、喜次郎は歌修行の僧、茶め吉は武者修行の武士、虚呂松は年增女のこしらへ、又跂助、野良七、飛八、下太郎の四人は唄人、彈人、後見と役割をきめ、河岸の柳屋よりして小氣轉の利きたる若者をやとひ、船押出し兩國川を橫ぎりて、竪川通りを漕上るに、例の龜子れんぢう用意の酒を飲みはじめ、醉のまはるに隨つて、また一倍の勢つき、茶め「此すつきりとして凛々しい拵を、船の積込にして置くのは、土中の玉で惜しいもんだ。早く婦人どもに見せて、眼の保養がさせて遣りてへから、自己ア上がして岡を行くぜ」虚呂「ホンニ私きも歩行く方がいゝのだヨ。全體船は血の道にさはつて、寸白にわるいのだから嫌ひサ。モシ船頭はん、誠にお氣の毒なのでありますけれど、其處らの棧橋へちよつツ著けておくんなはいな。アノ後生になるンで行りますから」飛八「ウヽ、ツどうだエ、去年の夏大山へ往つた時、斯くのごときの飯盛に出ツかはした事があつたつけ。此まア氣障味へ直

れ、其處で一ばん屁を放つてくれ、アヽ」𧘱「アハヽヽアきてれつ奇の字だ。茶め公立引があるなら、さうするト餅責屁ぜめはいとはねどトいふ洒落が出るから」茶め「コヽ此奴らア夫どころか」喜次「ヤレ〳〵哀に踏付けたなア」下太「お陰で皹の割目がうまつたらう」野ら「足袋を脱がなけりやア、此難はなかつたに、足袋とは〳〵のほ、よほ〳〵燒餅また踏むわいイな」茶め「チヨツ此樣に尻へひつついて仕舞つた。アヽいたよ。毛がみり〳〵いふは」ト、一人もぢ〳〵尻へ付いた餅をへがしながら、股引の前のとこから振ひ出せば、飛「ソリヤこそ御安產だは」喜次「ヤレ〳〵お目出たい〳〵」と、連中一同の大笑となり、夫より稽古もあらましすみて、猶當日の評定に、各餘念はなかりけり。

ずみに、火鉢にかけたる網のふちをはね飛せば、焼きかけたる切餅はばらりト四方へ飛散つて、茶め吉が襟の中へぽつたり這入れば、茶め「アヽツヽ、アヽツヽヽ」トあわて跂起き、「アヽ餅のなかへ襟がアヽツヽヽヽヽ」喜次「コレサ何をふざけるのだ」茶め「エヽふざける所か、アヽツヽツヽヽ」と首を前へ突出すと、焼餅はずる〳〵ト下の方へ落ちるゆゑ、「アヽツアヽツヽ」下太「ナニ餅の中へ襟がはいつた。ドレ〳〵」茶め「アヽツヽ背中だ〳〵」下太「是かこれか」と著物の上から押へ付ければ、茶め「アヽツヽアヽア上から押れてたまるものか」下太「ヲット承知、隠家さへ當りが付けば、著物の上から餅飯を取捕へ、かういふあんべゑに引張ると、餅と體の皮の間が透くから、カチ〳〵山の難はのがれる」ト云ひながら、餅と間違へてふんどしの結び玉を股引ぐるみグツト引くと、餅は帯の間をくゞつて尻の所へまたずる〳〵。茶め「アヽツヽ、コリヤ何様する。尻が餅へはついたは。アヽツヽアヽ」ト飛上る拍子に、疊に落ちてゐる餅をぐつしやり踏付けて、「アヽツ、アヽツヽヽ」ト足を上げてふるつても、踵へぴつたりくつ付いて放れぬ故、ちん〳〵もぐらではねて居る足元へ、後方の方から飛八が、焼いた餅をちよいと一ツ投り出し、知らぬ顔をしてゐるト、茶め吉はまた踏付け、「アヽツヽアヽ」トうしろへどつさり尻を突くと、股引の間へ落込んだ餅を尻にて平潰し、「アヽヽヽアツこりやア此奴等ア、アヽツア

しつかり取る、エヽサヽ無言て取つちやアいかねへといふに、何だァな可怪目附をして」茶め「ゲヱッゲヱ、アヽお前が餘り急込むもんだから、餅を鵜飲にしてしまつた。アヽくるしい。ソラよしか、迯ぐるとて迯がさうかと袂を摑む」喜次「其手を採つて突戻す」茶め「たぢ〳〵〳〵と三足さがつて、イヤどつこいと踏止める」喜次「ヨ引シ、そこで背中の木太刀を取つて打込む」茶め「ヤ、カウカ」喜次「アヽいたヽヽヽエヽ此柬埔塞ア、何故人の天窓を打つンだい」茶め「ハヽアお蔭で額のお出子が凹んだらう」喜次「夫やア宜いが、孫の手をどこかへなくした」下太「お前腰にさして居るぢやアねへか」喜次「違へねへ。ソラ打込む、かう請ける。くるりと廻つて」茶め「ドツコイ、トヽヽヽヽヤウン」喜次「コレサ其様にギックリにらんぢやア狂言になつていかねへ、何でも正眞と見せなけりやア可笑しくねへのだ」茶め「夫でも成駒屋が、こゝのところでウヽンと一番幅をきかせたから」野ら「チヨッ何ぞといふ成駒だの音羽屋だのと、わりい了簡の奴ぢやアねへか」茶め「なぜわりいのだ、男といひ仕打といひ」喜次「いよサ〳〵。ソラ斯ういく、カウ、カウ、はア」茶め「こゝの所でトヲンとぎばを突いて、一番身の輕い所を見せて遣りてへ」喜次「其様なら前のところを斯うやつて、ソラ、ソコ、ソコ、はア、イヤドッコイ、はア、そらそこでぎばだ」茶め「チット承知」ト、兩足前へ投出し、尻へにドッサリ居りながら、片手を疊へ突くは

本武藏相勤めまする役人、色師の茶め吉、尤も當人役不足にはござりますれど、連中一同の頼に付きもだしがたく」飛「エヽエ横ちやく者めが、此役を取らうと思つて、わざとすねやアがつたのだナ」茶め「ヘン智慧のねへ奴等をだますのは、女に惚れられるよりざうさもねへは。サアサア喜次さん、稽古に取りかゝらう」喜次「ハヽアおつう遣くつて皆を出拔いたナ。時に女形といふのだが、こいつア諍ひのねへ樣に鬮にしやう、何でも長いのを取つたのが、お山をやるのだぜ」ト喜次郎が鬮をこしらへ差出せば、てんでに下洒落を云ひながら是を引くに、虚呂松長いのに當りければ、跂助、野良七、飛八、下太郎の五人のものは不性々々に、唄人、三味線、また後見と役割をきめ、喜次「サア〳〵すつぱり揃つた。そろ〳〵稽古に取りかゝらう」茶め「ヲットト承知之助」ト立ちながら飛八が燒いてゐる切餅を、ちよいと一ッ撮んで頰ばり、「アヽうめへうめへ。そりやア宜いが喜次さん、何か持たずはいけめへ。ヲット妙、サア此しんばり棒だ。お前は何をもつ」喜次「自己は孫の手だ」下太「マア待たッし。此處らを些かたづけやう」虚め「アヽ能く喰ひちらかしたなア、丸で安達が原だぜ」野ら「貴樣も餠にばかりかゝつて居ねへで、此處らの物を運ばつし」ト、皿どんぶりを勝手の方へ押しかたけ、跂「サア〳〵舞臺が出來た」茶め「おりがてへ〳〵」喜次「自己が狂歌をよむ、お前が聞きとがめて、迯るとて迯さうかト、自己の袂を

面白い〳〵」跂「役割を極めずはなるめへが、武者修行といふのはさしづめ跂助様と來るだらう」野ら「どうして〳〵左樣はいかねへ」虚ろ「そりやァ野ら公の云ふ通り、自己といふ好男子がるるから、他の者は迚もお間だ」茶め「ヘン何奴も此奴もおいらの趣向へは肩を入れねへで、主人にばかりおべつかやァがらァ、賴母しくもねへ」虚ろ「おつう否ンだことを云ふけれど、其處のは勞痎筋、成田屋筋なんのといふので筋立がよろしくねへから、僉が用ひねへのだは」茶め「いゝといふ事ヨ。ナンノ僉は何樣な事でもしなせへ、自己は御免だ」飛「コレサ其樣な事を云つちやァ納りが付かねへはス」茶め「納りが付いてもつかねへでも、自己ァ否だといふことサ」喜次「夫ぢやァ斯うしよう、お前の仕組んだ狂言を取らねへかはり、武者修行と云ふまうけ役をやるがいゝ、彼なら隨分請けるぜ」茶め「左樣するとまた僉が種々なことをいふから、矢張よしにしやせう」喜次「何の誰がなんといふものか。ノウ虚ろ公」虚ろ「そりやァ下太しうだつて跂公だつて、不承知はあるめへス」野ら「全體武者修行の役は、茶め公一本槍だものヲ、誰が何といふものか」喜次「三階一同の見立だから、其意に隨ふがいゝぢやァねへか」茶め「其樣な事を云つたつて、いざといふと面のざんさうが出たり何かして」喜次「自己が請合ふよう」茶め「いよ〳〵か」喜次「いよ〳〵だヨウ」茶め「先斯念を推して置いて、ヘヱンウフン東西々々、〳〵偖此度妙義まうで茶番武者修行宮

で貴殿の事を申さん、古人の狂歌の浮びしまゝに、思はず知らず詠ぜしのみ、そこ放して通し給へトいふと、比興なり臆したり、人に雑言いひかけて、迯ぐるとて逃さうやト、云ひつゝあとへ引かへす、その手をとつて突放せば、二足三足たぢ〳〵と、よろける足を踏しめて、ヤア小ざかしい賣僧の腕だて、觀念しろと云ひながら、背中の木刀拔取つて、眞向微塵と打つてかかるを、襟にさしたる如意を持ち、右手にカツシと請けとめる、トいふ此處からが武藏と笠原の鍋蓋のたてでいかうといふのだ」野ら「フムウなか〳〵をかしろさうだはへ」喜次「其處で二人が宜加減にごたつき、左右へぱつと身を開く所へ、例の女形が、マア〳〵待つてお二人さんト、聲かけながら駒下駄で、ト丶丶トンと足踏しながら中へわりこみ、そのトンと踏止めた足踏を相圖に、兼ねて橋下へ著けておく船のなかで、ヨヲ引イ、ヤ、チヤン〳〵〳〵と三味ずるを切かけに、三人は、お前女でおいせさん、ト三國拳になり、めつちや踊と變じて、船のなかへ所作りこむト、直に三味線は佃と替り、吹けよ川風あげろよ簾、チヤンチヤ、チヤン〳〵スチヤニカ、チヤン〳〵で、竪川通りへ漕戻さうといふ趣向だが、どうだ〳〵」下太「いつもの不手際にしては出かした〳〵」野ら「出かした出かしたでは可笑ろくねへ、喜次さんは天窓が大きいから、でこしたく〳〵と云ひてへ」飛「妙義參詣の人は繭玉をかつぐ、自己達は參詣の人をかつがうといふのか。

坂東秋香の役廻りだ」飛「自己も遊ばせて置かねへ了簡と見えるハヱ」下太「又出るヨ、ひつこめひつこめ」喜次「尤もこの女形は船宿の内儀さんといふ拵でも、町藝者といふ作でも、そこは當人の好みに應ずるサ」下太「そこばかりでなく、蓋も應じて仕舞ふがいゝ。いき事ならみんな此方の地にあるのだから」野ち「地に有らうが天にあらうが、火吹達磨やひよつとこの身代に立たうといふ面色では、かゝり合はねへ事だはス」下太「何のかゝりあはねへといふが有るものか、自己の大和屋に似て居るといふのは、喜次さんも知つてるから、此役をこしらへたのだ」喜次「ヨシサ〳〵、氣を慥に以て居さつシ。ヱヽヱ其處で武者修行どのは、法恩寺をまつすぐに龜井戸の方へ來る、また自己は例の歌修行で、龜井戸から法恩寺の方へ行き、天神橋の上でばつたり行合ふといふ手筈にして、行違ひながら自己が武者修行どのをじろ〳〵見て、

劍術のこむ手薙手はならひても十文字さへ書けぬかなしさ

といふ古人の狂歌を口ずさむと、武者修行の男が聞きとがめて、ツカ〳〵と立戻り、今吟じたる狂歌は、全く拙者をあざける一言、そのまゝにやは通さうかト、紙布の袂をしつかり取り」飛「イヤしつかり取るのはよすがいゝ。若綻でも切らすと、損料ばかりでは濟まねへから」下太「シイツシ」飛「だまれ〳〵」喜次「されども此方はぐつと落付き」「コレハ近頃迷惑千萬、いか

夫が宜い、いつそ一思に聞いて仕舞はう」喜次「一思にでも二輕いにでも勝手に聞け。先自己の筋といふのは、一人が諸國武者修行の學びといふので、黒羽重の紋付、無地博多の小袴、紫ちりめんの上帯に、强物作の兩刀武者草鞋といふ著付で、天窓が中五分の草たばねサ。其處で紫の幅紗包に、木太刀を一本くゝり付けて、脇の下から肩の所へはすッかけに引背負つて、胸でぐつとひん結ぶといふ奴だから、丸で成駒屋の宮本武藏と云ふ拵だ」下太「フムウ宜か〳〵、さしづめ自己の役まはりだ」跂「馬鹿なことをいふ、飛八さまを除けてお前なぞに出來るものか。第一武道立役といふ相形でねへはス。先眼尻が引ずり下ッて、鼻筋が内へも通らず外へも通らず、路次の蜘蛛の巣と來て、兩方へひつぱれて居るといふのだから、畫にかいた三ッ目入道で、大丈六をかいて居るのだはス」「ヱ、吠えるな〳〵シイッシ。ウフン偖自己の形が鼠木綿に鼠の頭巾、鼠の帯を前のところでお寺結といふやつに捻込んで、鼠の脚袢ぢんぐ〳〵ばしより、勿論鼠の紙布を著て、首には鼠の頭陀袋をかけ、如意とかいふ物代を襟へ挾むといふのだから、男の宜い女惚のする宗祇芭蕉と云ふ拵、尤も歌修行の行脚と見せる積りのだ」跂「如意をさして行脚と見せるよりは、撞木を持て槃若と見せる方が能く似合ふぜ」喜次「ヱ、ヱ默らッせへ默らッせへ」喜次「ノホン、其處で今一人の人形は、ぐつと仇ッぽい中年增といふのだから、古人

しねへ奴に限つて、色氣々々〳〵と色氣がりやァがるは」下太「そこで數年來のはうの方はついたが、是からまた、只の年來の本讀が始まるのか」野ら「ヤレモ〳〵情ない御事だが、僉は夫をきく了簡か」飛「然ればサノウ、數年來で手ごりをしたから」虚ろ「夫に今餅飯が焼けるからノ」喜次「ヲヤ、フン何か焦るやうな匂ひがするぜ。ア、フン〳〵」虚ろ「酒あれども肴なしならいゝが、酒なくつて肴なしに成つたから、餅飯を焼つてきこしめさうといふのだが、不器ッちやうに大きな網で、土俵のそとへ二三寸はみ出すから、邪魔に楢の木、椋ろんじ、山椒味噌でもあればよいといふのだ」喜次「イヤハヤさもしいにも程があるワ、何様すりやァ左様にくらひてへのだ」飛「とはいへ餅なら自己も喰ひてへ。何故といふに、是から喜次さんの本讀を聞くのだが、どうせろくな趣向はねへから、請けてゐる間が何よりのお仕置だけれど、そこが餅食つた報と明めて仕舞ふはス」茶め「お前はでく〳〵と肥滿てゐるから、餅くつたむく犬だらう」鼓「夫も間ぬけに馬鹿げの斑色でおいで遊ばすはス」飛「此野郎不屈なことをいふナ」ト、鼓助が胸ぐらを取つて押附ければ」鼓「ヱヽモじやれるト、木虱がくつ付くは。シイッシ」下太「アヽアそこで嚙合ふと毛が落ちてならねへ、彼地へ行けあつちへ行け」野ら「イヤハヤわんだかきやんてつもねへことを云ふ奴等だぞ」虚ろ「サァ〳〵喜次さん、ちい〳〵どもに構はねへで、本讀をはじめねへか」下太「夫がいゝ

處で自己たちの形のこしらへは、釣士が海の中で履く脚搨といふ物より、もう一際丈の高い足駄を履きこみ、その上から大夜著を著て、身の丈八九尺ぐらゐに見える樣にし、子供が持遊にする張ぬきの大天窓を被つて待ちかけて居るト、彼散しにおびやかされて、數萬人の見物がえいたうくで押かけて來るところを、心得たりと大釜の茶を茶碗へ汲み、一人々々に持つていで、「則吾妻の森の大茶番で御座いますトいふ落だが、何樣だく」飛「ウヽツ」茶め「何故人の面を覗くんだい」唖「始始は其樣ことだらうト思つた」虚ろ「夫だから敷の字のついたのなら云ひなさんなトいふのだ」茶め「高足駄の上へ大夜著を著込んで、丈を一丈にもこしらへ、茶の番人をしてゐるから、大茶番だと云ふのが道理に協はねへのか」野ら「すつかり落ちてゐるヨ。始りから見れば、ぐつと趣向が惡いから」喜次「第序から三立目あたりまではなかく𢌞したが、肝心の大詰が吾妻の森の大茶番では、ヤンヤと云はねへやうだ」茶め「喜次さんまでが其樣なわからねへ事を云ふはス」下太「ハヽア涙ぐんで否に怨みつぼくにらめやアがるぜ」茶め「アツア呉子胥しんで呉國ほろび、范蠡さつて越國衰ふ、是程のことを監へても用ひられねへ日にやア卞和が玉だ。孔子の聖なるも時にあはずス」喜次「イヤサ足下の趣向だつて、捨てたのぢやアねへが、ト云つて拾はうといふにやア、ちつくりト色氣が無くツちやアいかねへ」茶め「ヘン出來も

アがらねへ」跂「ヘンごた付くの付かねへのト、大層なことを云つたつて、足の甲でコレ彼樣して歩行く事は、誰にも出來めへ。ソラ、は、よい。ト丶丶丶どつこい」茶め「ナンノ夫しきな事アお茶の子だ。自己なンざア、ソレ右の足も、アレ左の足も、みんな首へひつかけて仕舞つて、尻でばかりゐざるのだ。ソレ〳〵、は、どつこいソレ〳〵」野ら「そんなら彼樣して逆さまに成つて、手で歩行くことは出來めへ」ト、云ひながら、疊へ兩手を突き、足をひよいト上の方へ跂上げると、卻含すぎて仰向にばッたり向へひつくりかへり、火鉢の角へ踵を打付け、「アヽツタヽヽタア丶痛へ〳〵」喜次「此べらぼうめ、何をしやァがるのだ」野ら「蟹もしねへがアヽいてへ。鮎鯛、烏賊くつて鯒へられねへ鱈、[illegible]とおもつて、ひき鰧魚て呉んねへ」喜次「チョッ此樣なとんちきに構はねへで、サア〳〵茶め公、其後はどうだ〳〵」茶め「偖も此方人らは散しを蒔いて、ぞんぶんに往來の人をたぶらかし、ヨシと思ふ時分場所を切拔け、兼て船公に妙見下へ船をまはさせて置きノ、其船へ乘つて直に吾妻の森へ乘りきり、神主てきに談じこんで、お湯花に遣ふ大釜を借りこみ」喜次「茶番に遣ふと云つちやァ、お湯花の道具は貸すめへぜ」茶め「まアサ聞きねへ、そのお湯花の大釜を程よき所へ居ゑて、吹きこぼれる程湯を沸し、五六匁の茶を二三斤もさらけこみ、まづ煮花をこしらへるのだ」虚ろ「ハテネ」飛「へヽヱ」喜次「シイツシ」茶め「其

積りのだイ」跂「それだつて酒も此通りなら」ト徳利をさかさまにして尻をポン／＼と叩き、「屠蘇のお銚子もれこしきだは」ト振りちらかし、「其處でハア詮方がないから、屠蘇の袋へしみこんだ味淋を、チユツパ／＼吸ひまはしにせるつもりのだ」喜次「チヨツ誠にしやうのねへ猿どもだぞ。モウ／＼茶番の筋道が付く迄は、飲せも食せもしねへから左様思ひねへ」下太「ヘン左様思はなくつても、鍋や皿は喰れねへから、左様思ふのも同前だア」喜次「ア、レ臺所の戸棚をぐわた／＼やつて居やァがる、エ、エ何奴だイ」権助の聲色にて。虚ろ「餅ノヲ焼いておつ喰うベイと、さがしごとをせるだに、何を呼るのだア、噪々しい」茶め「打捨つて置きねへ、どうせ仕方のねへ奴等だから」喜次「いよ／＼、勝手にしやァがれ。ア、ア其處で、此方人らも拾ふ積りで蒔いてあるくのか」茶め「左様ス／＼。夫を見ると往來の人達が、われも／＼と皆拾ひに來るはス。すると其地此地に落ちてゐるといふもんだから、是は不思議、ハテ何であらうト取上げて、串を抜きひらいて見る、ト例の散しだらう」喜次「フム、、ナル。左様來る日にやア、拾ひてで土手を埋るから、本所はさて置きこつち兩國までも、時の間に廣まるだらう」野ら「夫にもう左様なるト火消も手を引いて、見物してゐるからノ」跂「しかし川を飛んで來られた日にやア、茶番どころの咄しではあるめへ」喜次「エ、イ邂逅口をたゝくとろくな事アごた付きや

今夕吾妻の森において、七偏連中打より、一世一代の大茶番興行仕候間、御勝手次第御入來御見物可被下候以上。

妙竹林の
七　人　男

正月五日

大江戸御町中さま

ト書いた散しを三ッに折つて串へはさみ、妙義さまから出るお札といふ鹽梅にこしらへて持つて居て、田のふち枯草の中へ、落して歩行うといふのだ」喜次「なる程拾ふふりをしてだノ」茶め「さうス。其處で自己たちがアレ〳〵、彼處らへも降つたかして、彼男が拾つてゐるから、何樣なものだか往つて見やうと駈出して往き、ホンニ大層落ちてゐる、チヤ〳〵なんだ初卯のお札の樣なものだ、ソレ其處にもあるワ、アレあつちにも落ちてゐると云ひながら、此方人等も拾ふふりで、袂や懷中に隱して持つてゐて、やたら無上に蒔いて歩行うといふのだ」喜次「フムウ美味美味」飛「此方でも骨湯の湯骨か。美味々々」喜次「チヨツ道理でしづかにして居ると思つたら、寄つてたかつて骨をしやぶつてゐやァがる。そして銚子の中から屠蘇の袋を引出して、何樣する

ごろまで戻り立止つて、自己が田甫の方の空を詠め、不思議さうな顔をして、イヤアアレ〳〵何だか降つて來る、ヲヤ〳〵田樂を見たやうなものだ。ソレ〳〵トいふと、喜次さんも同じく空を見ながら、ホンニ何だか降つて來た、ヤア〳〵彌次郎兵衛ぢやアねへか。アレ〳〵彼處へも落ちた、ソレ〳〵むかうへも降るはト、頻に二人が不思議がつて騒ぎたてるトいふので、往來のものも何が降るのかと思ひ、立どまつて空を見るは必定ス」　岐「夫にお前の顔は鼻の穴まで空をうかゞつて居るから、猶々人が正眞にするワ」　喜次「おつりきだ〳〵。シテ夫からの獻立は」

茶め「虚呂松先生ト岐大將は、自己達のゐるとこから、一町そこら隔れてゐて、同じく空を詠め、アレ〳〵何か降つて來るワをきめて、往來の人をたぶらかすサ。夫からまた二町ばかりへだてて、下太の君と飛將軍が、その傳をやらかすトいふもんだから、土手ぢうの人が皆仰いて空を見るやうになるはサ」　喜次「フム、なか〳〵たくらんだナ」　飛「奇てれつだ〳〵」　茶め「其處で野良大人は一人、かねてより川向うの土手の上にまはつて居て、其方へかけ歩行き、こつちへ駈歩き、何か拾ふ身ぶりをしながら、

すこたん、素股、すぼける、すかし屁サ」茶め「イヤサ、すかし屁だか階子屁だか、本讀を嗅ねへで譯るものか。ヱヘンウフン、先」下太「ヲットその先といふのは、美味くねへといふ發語のことばか」茶め「ヱヽ手前も出るか、だまれ〳〵。ノホン偖」のち「アハヽァ先でなけなしの鼻ッぱしらを捻ぢられたもんだから、偖といふ初聲を發したは」喜次「しづかに〳〵、本讀のすむまでは當人の外口を聞きッこなしだ」茶め「夫がいゝそれがいゝ。アヽ其處で當日は此處の河岸から一葉浮べるとして、大道具小道具鳴物類一切積込み、朝まだきより棹さして、御道筋は竪川通の天神橋から御上船で、妙義の社は申すに及ばず、天滿大自在天印の端籬に額つき、茶番長久滑稽はんじやう、幷に女難除の祈をあげ、かへりまうしの悅に何處ぞでちよつぴりきこしめし」下太「ヱヽヱ何のこつた、其樣なむだ口を叩かねへで、はやく本讀にかゝらねへと、嗅でやらねへぞ」茶め「アッア譯らねへちい〳〵だぞ。料理を出せばとつて、膳立からしなけりやァならず、一寸した文章を書くにも、枕言葉といふがあるワサ」跂「イヽサ〳〵足下のすかし屁の臭いのは、屋守さんも御存じだは」喜次「アヽ、シッシ、夫から其處で何樣いふ筋になるのだ」茶め「いよいよ人の出盛つて來る汐さきを見定め」下太「沙魚か鱆でも釣るやうだノ」茶め「夫から沙魚をヱヽじれつてへ、はたから口を出すので、釣込れてならねへ、だまれ〳〵。其處で押上の通りを中

妙竹林話 七偏人 二編巻之上

三人で三分なくなす智慧を出しとは、川柳者流の穿ちの妙句、實に若いどし打寄れば、寢いり貉も狼ものも、面白狸の腹鼓にそゝなかされて、磯端から船で往かうかお駕籠にしやうか、夫ともずつと氣を替へて、二十四日は愛宕山、月の八日は茅場丁、大師河原、堀の内、緣日あるき信心參り、あるは淨瑠璃茶番のくはだて、見世物芝居の見物に、とんだ二さいの散財を、ヲツト來なせと吞みこんで、前後構はぬ無分別も、其座の餘興といふべき也。然れば七人の懶惰者も醉のまはるに隨つて、彌道化の枝葉をそへ、今年の春の初催、惠方がてらの初卯まうで、往かずんばあるべからずと、連中ずつと乘氣に成り、思ひついたる茶番の趣向に、喜次郎鼻をうごめかし、「偖自己が年來監へて置いた茶番の筋といふは」茶め「ヲツト待つたり、此方にはその年來の天窓へ、數の字をとまらせて、數年來仕組んでおいた趣向といふのがあるから、平の年來は次へまはして、位のついた年來から先へ本讀にかゝらう」虚ろ「しかし數といふ冠り付なら、申上げてもお取用ひにはなるめへ。都てすの字の付いたものに、ろくなのはねへ、

も猫糞で、筆に頭顱を掻くのごとし。

清江舎秋水誌

妙竹林話 七偏人二編序

似て非なり桐に鶏竹に猫と、例の善悪なき誹諷の、狂句に洒落た口號に、聊か因める竹林、ハア、豹脚を相手に醉語を巻く、七賢人に似て非なる、妙竹林話の七變人、數も七色唐がらし、胡麻粉、芥子粉、山椒粉、甘いと辛いを舂交ぜて、爰に著述せし金鵞子の、滑稽笑話を一回開けば、堅面老爺の固藏も、思はず腮の掛鑰を脱して、御臍に茶を沸し、怒氣顔の癖窟野郎も、フヽヽフツト吹出して、笑ふ門松福は内、鬼討豆で無事息才、笑の内病發表して、即座に平快良劑奇藥は、又と世界に人の穴、妙に穿つてござへヤス、ト僕も側から褒賞し、愚文ながらも三番叟、トツパヒヤロと鴉飛、東天江と告渡る、時を夜明の宮神樂、初卯參詣の戻り路、一寸一幕立茶ばん、立廻りさへ太鼓橋の、音にかよひたる天神橋、人は巳に挑みあふ、下にははやし連中が、音曲入の一趣向、鳴響くまで御贔屓の、船が中ると聴くさへも、幸先よしと似て非なる、敘らしきものを有りッ丈、智慧をふるく

ホ

は年來監へておいたから、眞にどつト請ける積りのだ。マア彼様いふ趣向ヨ、一寸聞きねへ。

イ紙數がみんなに成つたか、嗚呼惜しいけれども仕方がねへナアー

といふ所を、大愚にさゝへられ酒戰なかばで終つたのだが、斯う見えても重詰ばかりぢやァねへ、いざと言へば持出す積りで、肴の用意はして有るのだと、戸棚の中より二種三種のものを取出し、是は吸物是は鍋と直にしかける肴の後釜、酒宴ます〳〵盛にして、いつ果つべきとも見えざりけり。跂「時に明後日は初卯といふのだから、連中一同で押出しちやァどうだらう」のら「宜かるべしよかるべしダ」茶め「亦婦人どもに惚れられやうといふのか」虚ろ「ヲツト自己といふ好男子が往くから左樣はいかねへ」下太「エヽイ亦凸凹どもがいがみ合ふのか」飛「陸から押さうか船で往かうか」のら「陸にもせよ船にもあれ、七偏人とも言はるべきものが、只往くといふ法は有るめへ」はれ「なんの只往くものか、人々に何程でも面工をするが宜ひワサ」のら「エ、イ釋らねへ、只は往かれめへといふのは、何か趣向をせざァ成るめへトいふ事だワ」はれ「侘びて行けば吸筒、華美にやれば藝者を召連れるのサ」のら「夫はサ、通例の人のする事だワ。左樣でなく何かサ面白趣向が、ヲツト思ひだした、アノ池の端の和次さんの連中を見た樣なことを遣りてへのだ」茶め「人を荷うといふのか」下太「荷ぐのなら、ホイ駕籠の連中だらう」「エヽイ無言つてるろイ」飛「茶番といふやつで往くのか」のら「左樣サ、その茶番サ」喜次「夫なら極面白い筋があるぜ」はれ「何のお前の知慧でろくなことが出來るものか」喜次「左樣いふけれど、是ばかり

著が一枚御不足の様に思はれますが、若や飛しでもなさりは致しませぬか」はね「イヱサあれも飛さうトぞんじた所が、据まはしが損じましたれば、漸く二朱ト六百しか用だたぬト申します」茶め「夫はけしからぬ下直なこと、私の目利では百疋一朱がものは有ると思はれます」下た「左様にむごい事をまうすなら、いつそのこと屑は御座いにお賣りはらひの方が嵩がのぼりませう」飛八「時に跂助どの、彼等はけしからぬ失禮を申すやつらでござる。もはや口をおきゝなさるナ」はね「左様〳〵、夫が宜しく御座る。イヤナニ喜次郎どの、先刻鳥花やへ申付け、山海の珍味を差上置いたる筈、定めて參つて御座らうナ」喜次「如何にも先刻參りたれど、是なる四人の者共がことごとく喰ひしめ、入物ばかりは殘し置きましたる様に御座ります」飛「ヱ正眞か」はね「いけねへぜいけねへぜ。しどい事をしやアがつた」ト立にかゝれば喜次郎が、「ト云つて驚したる迄のこと。サア〳〵意地きたなしが、執念のかゝつた廣蓋を出したり出したり」廣ふ「ヲツト承知だ」茶め「運べナア引八イ里は馬アでも越すがナアヱヽ引はツはやつこりやどつこい重いぞ〳〵」下太「ヱヽイそれ傾げて持つと翻れるは」のち「鍋は冷えたから火鉢へ掛けることとしやう」ト、是より七人打圓居飲むほどに喰ふほどに、跂介飛八が持ちきたりし二樽は、たちまち枕をならべて板の間の隅にころげ、廣蓋の上には入物ばかり空然たり。喜次「既に先刻この亂軍に成らう

廣蓋を持出でんとするその折柄、表の方にて大聲上げ、「御上酒のお入イ引。ドン〳〵オヒウ、テン〳〵〳〵テレック〳〵テン〳〵〳〵」と言ひながら跂助が、片手には壹升樽、片手は突袖しながら威張りかへつて這入來る。此時裏口よりも障子引明け、「御上酒のおいりイ引。ドン〳〵オヒウ、テン〳〵〳〵テレック〳〵テン〳〵〳〵」ト言ひながら飛八が、片手には壹升樽、片手は突袖しながら、何か體をぎくしやくとしやッちこ張せて入來る樣子、趣向ありげに見えければ、喜次郎はじめ四人の者、顔見合せてためらひ居るうち、跂助と飛八は、猶すヒウテン〳〵〳〵ト言ひながら、持ちたる酒樽を其處へさし置き、はね「偖上使なれば上座御めんト申すところなれど、上酒の儀に御座りますれば、上へはのぼらす則ち是に居著きまする樣に御座ります」飛八「跂助は上酒々々と申しますれど、私のは上酒では御座りません、誠にお麁酒玉のしるしまでに差上げます」喜次「是は有難うぞんじます。左樣して何かいかめし氣な御容子なれど、御口上は夫でお仕舞に御座りまするか」跂飛「左樣で御座います。もはや皆に相成りました」虚ろ「御持參の樽のなかは、全くの御酒で御座りますか」飛八「左樣で御座ります。只今四方の見世にて、一樽に付一朱を一ッ差出し、上端ぐるみ三十二文、つりを取つて買求めましたれば、酒かとぞんじまする樣に御座ります」のち「シテその一朱は何樣して面工をなさいましたか、今日はお下

ばらしいめに合して遣らうトぞんじた所が、ツイお前さんの足をつらまへて引張りやした。全體お前さんの足は大相なお毛がお生えなすつて御在なさる、彼御樣子では柬埔寨などをいくらめしあがつても、お氣づかひは御座いません。何卒失禮のところは眞平御免なすつて、下さる樣にいたしたう御座ります」源兵衛「イヱサ、御挨拶では痛みいる。必竟私が惡いところへ足を出して居たので能くなかつた、出る足人にひかるゝのたとへ。サア〱お構ひなく雪隱へおはいんなすつてお在なさい。左樣なら喜次さん、お講釋が有るのだト思つて大きにお邪魔をした。何方も澤山お咄しなさい」ト言ひつゝ表へ出でて行く。茶め「べらぼうに氣の宜ひ家主てきだのウ」喜次「アヽ見えてもなか〱の通人サ」茶め「道理で足にいかいこと毛が生えて居たッけ」下太「夫は宜いが、彼處の隅にある廣蓋の肴は何樣したのだ」虚ろ「違へねへ、自己も先刻ッから左樣おもつて居たが、出すものならさつさと出して仕舞へばいゝ、冷く成るぜ」喜次「出すものだかひつこます物だか、自己にも譯らねへのだ」のら「モウ野郎どもは出て來さうなものだなア、何をしてゐやアがるか。人のぐびを咽々させやアがる。いつその事お施主に構はず、鍋妙喰ふれんげきやう、中の汁がだゞぶだぶ〱と、お經をあげて仕舞はうぢやアねへか」下太「左樣サ、こいつア上げて仕舞ふはうが宜ひ、夫でねへと五人の亡者がうかび兼ねる」ト、言ひつゝ立つて

其事をはなして居たところ」一虚ろ「すると茶め吉がお前さんのお家へ參つて、堪忍して下さらねへ日には大變だト申すト、此下太郎が」一下太「左樣々々、嘘をいへば、八百本のあやまり證文を靑柳橋の朝嵐にひるがへし、貧の鍬形はおろか家の前の瘦犬をかげまに賣つても、自己が中へはいつて倍禮つてやるからト、すゝめて居たところで御座います」源兵衞「ハヽア夫ではお講釋ではなくつて、仲人にはいらうといふ御相談かヱ。何樣いふ理窟か知らないが、町内うちのことならば、及ばずながら私も口をそへて上げませうか」喜次「ナニサ貴君へ倍禮につれて參らうトいふので御座います」源兵衞「フムウお長屋の行事は、今月はお前さんか、ヤレ〳〵御苦勞千ばんナ」喜次「ナニサ長屋うちのことでは御座いません、先刻湯の中でおまへさんに失禮をいたしたのは、今亦人違でお前さんを驚かした男で御座いますから、その人物を倍禮に」源兵衞「ハヽア成程。イヤ夫ならば別段御挨拶にはおよばない。風呂ぢうでは何本もある足だものう、生憎つらまつたのが此方の不調法、時にとつての不仕合と申すものだ」一ト、此源兵衞もお心よしと見えて、何事も氣に留めぬ樣子を、茶め吉は雪隱の中にて窺ひすまし、六ケ敷こともあるまじと高をくくり、頓てのそ〳〵出來り、源兵衞が前にもじ〳〵とかしこまり、「是はお家主樣、先達は洗湯で御失禮つかまつりました。ナニサアノ、彫物だらけな野郎が、餘りりきみやァがるから、すン

八か跂助のことを欺つて、源兵衛さんといふならんと思へば、少しも構はず、彼源兵衛が敷居をまたぎは入らんとするそのとたんに、「ワァッ」ト言ひつゝ妙な手をして飛出づれば、源兵衛は不意を打れて肝を潰し、「エヽ冗談を」と後へさがる。その顔を見て茶め吉も仰天し、突出したる手を上げたり下げたり亦振まはしたり、ワアヽアヽアヽわあゝあゝんあゝんのわあゝわんわん／＼きやん／＼きやん」ト犬の吠える眞似をしながら、緣頰へかけ出し、亦も雪隱へ逃込んだり。源兵衛は是を見てあつけにとられ、空然として立つて居る。四人の者は吹出すばかりの可笑しサを、しつかり奥齒で嚙みしめて、しばらくグッグと言つて居たるが、喜次郎は漸く笑を飲込んで、「イヤ是は恐れいつた。今の男がお前さんとは知らず、跂助といふ朋友だト思つて、とんだ麁相を、御免なすつて下せへ」ト言ふを聞いて源兵衛は苦笑「ハヽア夫ではその跂助さんの爲には、私が次信で、君のお馬の矢表へ駒をかけ居立ちふさがりかネ」 賊ろ「是は茶め吉が、なんぼ平氣でも少々のり經であつたらう」 喜次「何かとんだ壇の浦で、お氣の毒さまで御座います」 源兵衛「それは宜いが、お講釋がはじまつて居た御樣子故、私もお聞申さうと思つて上つたのだから、サアお構ひなくお遣んなすつて下せへ」 喜次「アハヽア、イヱ講釋とお聞きなさるのは御尤だが、全く左樣では御ぜへやせん。アノ茶め吉を、お前さんのお宅へ倍臣につれて出樣と存じて、

頭の兜を猪首に著なし、困せ丸と號けたる難澁代の太刀を横へ、借金の利足高の羽に剝ぎたる言延三年竹の征矢を、無理のごとく負做し、借用證文の加印五人張の强弓を、欲の皮の鷲摑みに握り、家の前の瘦犬鹿毛へぼんくら置いてのそりと打乘り、噓八百人の貧卒を前後左右に引したがへ、七偏人第二編引續き賣出しと書きたる大旗を、靑柳橋の朝嵐に翩翻とひるがへし、案內は知つたる路次の細道、敷連ねたる溝板を、勇みにいさんで踏轟かし、大手の門の格子先、雨だれ落の堀際まで、ひし〳〵と推寄せたり」ト、却舍にかゝる高調子、側にありたる年玉の、萬歲扇をひろひ取り、火鉢のふちを敲立てる折から、表が瓦落裡ト明く故、喜次「サア〳〵お肴のお客様がおいでなすつた」茶め「お肴のお客様たア誰だ〳〵」のち「飛八か跂助のうちサ」茶め「左樣か、そんなら一ばん驚かして遣るべゑ」ト、言ひつゝ立つて這入口の、障子の蔭にかくれて居るとは知らず、風呂の中にて茶め吉に引たふされし家主の源兵衞、此表をとほりかゝり、下太郎が扇をもつて敲き立てしやべくるを聞き、講談がはじまりたると思ひ、大の講釋好ゆゑ案內もなく上り來り、「イヤ御免なさい」ト障子をあける顏を見て、喜次郞はじめ皆々、飛八か跂助とは思ひの外、茶め吉がことならんと察し、はつとして、喜次「コレハ源兵衞さん、サア〳〵此方へ」ト言ひながら、蔭に隱れてねらつてゐる茶め吉に目まぜをもつて知らすれど、茶め吉は飛

かりだものを」下た「楯籠つたとつて穢ねへやイ」茶め「チョツやかまし百成野郎だぞ」ト、不承無承に手を洗ひ此方へ來れば、喜次「ハヽアとう〳〵城からでかけたノ」鹿ろ「夫りやア宜が茶め公、おめへの引摺倒した男は此處の長屋の家主様だとョ。下太公と二人で詫言をいつて濟しては來たけれど、お前も無言つて居ちやア能くねへ、喜次さんに連れて往つて貰つてあやまつて來なせへ」喜次「エナニ、夫ぢやアあの源兵衛さんの足をやらかしたのか」鹿ろ「左様サ、その源兵衛さんといふのサ。少しの事で辨慶さんだト强いけれどのウ」喜次「夫ぢやアなんぼ彼人が氣が宜いとつて打捨つちやア置けねへ。そして此處に遊んで居るから、猶の事一刻も早いが宜い。サア一所に往つて遣るから歩行びなせへ」茶め「何様してとんだつまらねへ事を言つたものだ」喜次「何故々々」茶め「夫だといつて敵の城地へ踏込んで、萬一和議の破れた日にやア、帷幕のうちから伏勢が起つたり、城門の外に落し穴が有つたりして見なせへ、阿修羅王へ獅子奮じんの冠を著せ、惡鬼羅刹へ三面六臂の鬼神をしんにふに掛けたつて、敵は大勢味方は一人、賴むお前は二心、といふのだものチ、防禦の便術があるめへぢやアねへかナ」のら「ナニサ〳〵、敵城へ踏んで、事破るゝに及んだら、豫ては腰に用意の山八煙草の煙をあけるが宜い、夫を相圖に味方の貧勢、貧おどしの鎧を取つて肩になげかけ、貧の鐵力火の車の前立もの打つたるくる獅子

と言つたら屁ツ放を打出さうトいふ了簡だらう」 下太「違へねへ、屁け田屁ツ頼が屁ん目山か、屁田屁ぶ長の屁ん能寺氣どりで居るのか。ドレ〳〵一寸屁臭見舞に往つて來やう」ト雪隱の所へ往き、へた「チイ茶め、將軍和睦が調つたから城を出なせへ。此せまい所へ糞のごとく鎖籠つて居たら、劍戟を置くすきがへしも無くつて、嘸不自由だらう」ト開きのさるへ手を懸けて引張れば、内よりしつかり推へて居る故、下太「コレサ何故其樣な事をして居るのだ、城門を開きねへトいへば」 茶め「何樣して此處を出られるものか。然してお前達も朋友甲斐のねへ、其樣なことを言つて自己をおびき出し、相手方へ渡さうと言つたつて左樣はいかねへ」 下太「其樣な裏切をするものか、和睦が調つたから開城しろといふのだ」 茶め「眞正に調はせて呉れたか」 へた「兎も角も大手の木戸を御明け候へ」 茶め「エヽ夫だから此處をはなすことは出來ねへトいふのだ」へた「ハヽアべらぼうにおびえやアがつた。其樣に出たく無けりやァ何時までも這入つて居さつし」 茶め「ト言れるト亦出城を仕たくなるやつョ」ト言ひながら、雪隱の戸を明けて顔を出し、 茶め「ばア」 下太「エヽ此野郎、ばアもねへもんだ。人に散々骨を折らせやァがつて」 茶め「自己ア追蒐けて來るだらうト思つて、實に氣をもよちがさ、彼樣安々と濟うとは白はりの」ト言ひながら座敷の方へ往かんとする故、 下た「手を洗はねへのかイ」 茶め「夫だつて只楯籠つたば

樣な甘口な事ぢやア押付くめへ」喜次「凶な事がはじまつたのう」のら「楯籠つたとこが悪いから、蕃椒でいぶすといふ譯にもいかずサ」喜次「雪隱を住居にしたとこを見ると何でも葛西街道の狐に違へねへゼ」のら「左樣サ〳〵、半田の稻荷の眷屬かも知れねへ」喜次「何故履物を懐へ入れたのだらう」のら「ナニサ畜生にも吝嗇のが有るといふから、人にでも履れるトいけねへと思つてだらうサ」ト、二人は少し不氣味になり竊々評議して居る所へ、下太郎と虚呂松が急ぎ足にて歸り來り、虚ろ「ヲヤ茶め吉はまだ歸つて來ねへか」のら「歸つてこねへ所の騷ぎぢやアねへ。これに捕付かれての」ト、額の處へ手を遣て、狐の眞似をして見せれば、エヽト悔り、虚ろ「ナニれこが付いたと」下太「何か眞面目になつて謀るぜ」喜次「ウムにやサ眞正だヨ」へた「夫だつて今湯の中で」ト是より彼喧嘩の次第をくはしく噺し、「トいふ譯で相手にあぶなく捕らうといふ所を逃出して來たのだものヲ」と咄すを聞いて喜次郎が、フムと言ひつゝ手を拍き、「左樣か、夫でよめた。相手が追かけて來るかト思つて、見つからねへ樣に履物を懐へ入れて、雪隱へ逃込みやアがつたのだ」のら「左樣サ、大方横町の斑犬に出交したのだらう」下た「アヽレ矢張狐だト思つて居やアがらア」のら「フムウ狐ぢアねへのか、して見ると狸か貉の仕業だらう」へた「譯らざアいゝよう、忌々しい」虚ろ「茶め吉の野郎めへ、雪隱へ楯籠つて、いざ

付いた狐が犬に追れたのだらう」のら「何にしても此儘ぢやァ譯らねへから、一ばん素引いて見よう。チイ茶め公お前は何様かしたのか。茶め公といへば是サ茶め公、何故返辭をしねへのだ」ト言はれて茶め吉は、雪隱の中よりちひさな聲にて力をいれ、茶め「エヽイ其様な大きな聲で自己が名を呼ぶなイ、追蒐けて來た奴等が立聞をして居めへものでもねへは。アヽ何にしても息が切れて、咽喉が乾付くやうだ。茶でも湯でも浪々と、大きなもので一盃持つて來てくだツし」喜次「アレ彼様な事をいやァがる」のら「エヽイ愚鈍な、雪隱のなかへ湯茶をはこぶ奴があるものかイ」と、言ふを聞いて、喜次郎は野良七が袖を引き目で知らせ、喜次「夫でも鱅か鰯のやうなものなら、雪隱へ持つていつて遣つても宜いぢやァねへか」のら「左様サ〱。チイ茶め公、鼠の天麩羅か油揚の極上ものぢやァ何様だ」茶め「エヽイじれつてへ、お前たちやァ狐にでも化されたのか、雪隱の中で咽喉のかわいたのに、其様なものが何になるのだ」ト言はれて二人は顔見合せ、また〱少し小聲になり、「アレ彼方で自己達のことを化されたんぢやァねへかト言やァがる、成程狐といふものは、早く人の氣をとるものだ」喜次「何にしても茶を呉れの湯を呉れのト、飲みたがる所を見ると醉醒の狐だらう」のら「左様サ、若後引の狐なら、モウ五合と來るとこだ」喜次「袖の梅か紫金錠でも飲まねへかと言つて見ようか」のら「何様して〱其

燒肴で少々不間にも添へるつもりだト言つたら、お前が成程野良七も粋の酢のものだ、ぬたには置けねへと言つて、潮やたらに譽めるだらう」喜次「なんのまはりもしねへ口取で、言譯をした し者だけ、かへつて味噌汁をつけるのだ」のら「チヤ大平なことをいふの」喜次「エ、サしつツこい、何の道當人の知れるまでは町内のかゝり合だから、そつくり此方へ入れて置かツし」のら「ヘン洒落に負けたくやしんぼうに、權柄で用向を言付けやアがる」ト、彼廣蓋の酒の肴を座敷の方へ持込んだり。此時表の格子戸がぐわらりひつしやり、どたばたとするかと思ふと、茶め吉が息もせい／＼邊敷けんまくにて、履物摑み駈上り、茶め「おいらをヲおつかけてク來る者が有るかも知れねへが、モもしキ來たらシ知らねへト言つて呉ねへヨ」ト言捨てゝあわてゝふためき、二階へ往きしが、直ばた／＼と下り來り、茶め「ニ二階の戸とだなはイ一ぱいでカ隱れる事が出來ねへ」ト、四邊きよろ／＼見廻して、一人何やら點頭つ、手に持ちたりし駒下駄を懷へ押へしこみ、周章て雪隱へ駈込だり。喜次郎と野良七は此有樣を茫然とあつけにとられて見て居たりしが、少し聲を低くして、喜次「何樣したのだらう。」のら「何でも唯事ではねへト思はれるぜ」ト、言ふを聞いて、野良七も小聲になり、のら「左樣ス、目の逆ずつた臘梅から帶の結び樣を見ると、野狐でも付いたのぢやアねへか知らんテ」喜次「何樣それだ夫に違へねへ、察するところその捕

妙竹林話　七偏人　初編卷之下

再説喜次郎が家なる能樂亭には、茶め吉、下太郎、虚呂松の三人が沐浴するとて出で往けば、嵐の吹きし後のごとく寂蓼とする其折から、裏口の戸を瓦落裡と明け、「へイ鳥花屋で御ざいます。只今にお客さまが被爲入と被仰いました」ト、言ひつゝ突出す廣蓋の酒の肴に、喜次郎は首を傾げ、「ハテナ誰だらう」のち「跂助か飛八のうちさ、先刻其樣な事を言つて居たから」喜次「彼奴等にしてはチト氣張名古屋ぢやア代の都合が出來たト見えるノ」のち「やアとこせといふ玄關つきで、懐の都合がよヲんやなト成ると、奴等の口が直におごつて來て、彼りや否々此りやいやいやと言つたら、この燗でもせへと臺所の隅へ追やつて置くがいゝ」喜次「其處でもつて來たものはなんだ、刺身に烹魚。シテ鍋は」と蓋をとり、「白魚に生海苔、貝のはしらに萠し三ッ葉も、些代脈の調合めくノ」のち「ドレ〳〵代脈の調合を一ッくはせて見な」ト鍋の中へ指を突込み、「アヽツヽヲヽヲウ熱かつた」喜次「コレサ何樣したものだ。そして汁もののなかへ手を突込むやつが有るものか」のち「左樣いふけれど、刺身に烹肴鍋ばかりぢやア淋しいから、指の先を

人を搔除け突除けて風呂の中より飛出し、逃出でんとする柘榴口、此物音に驚いて何事にやと表より這入つて來たる下太郎が、天窓へ天窓をグワント打付け、雙方後にどつさり尻餅。へた「アヽいたよよよよよ」茶め「アヽいたよよよよよ」へた「目から火が出た」茶め「鼻から出ないで仕合」へた「エヽ洒落所か龜の尾を」茶め「自己も矢張龜の尾を」へた「互にどつさり腰折が一首浮んだ、式子内親王の地ぐり〳〵、

龜の尾よ腫れなばはれね流しにて打ちしこの湯ぞ今は忌しき」

んで居るト、暫時して又彼男が這入つて來り、茶め吉が居るを知るを知らずや、立發胯つて胸の四邊を洗ひながら、側に竝んで這入つて居る五十計りの男に對ひ、「モシ源兵衞さん、世の中にやァ終ねへ愚鈍が有りやすネへ。風呂の中へ手放で這入ると言つて、足を辷らしやァがつて湯の中へのめずり込み、私が天窗から題無あびせやァがつたから、はたき飛して獅子ッ鼻ト言つたら、ブツ〳〵脹れて居やァがつたが、獅子ッ鼻所か穴が竝んでホント明けてるといふ計り、糞桶の紐通しにやァ劣るのだァ。其くせ口のへらねへことを言やァがるから、捻り潰して遣らうかと思ひやしたのサ」源「ほんにノウ、お前の力で捻られては堪るめへアハヽヽヽヽ」大男「しかし彼樣な野郎でも、豆腐の壳や小豆の糧で育つたのぢやァ有りやすめへ。矢張飯は十人竝に喰やァがるだらう。勿體ねへぢやァ御座へせんか」ト、頻に謗つて咄して居るを、後の方に聞いてゐた茶め吉が、餘りの事の悔しさに引摺倒して遣らんと思へど、根が大の臆病もの故、やつきと成つても恐怖が一ぱい、ガタ〳〵震へながら徐々と手を伸し、彼大男の脚と思ひ竝んで噺を聞いて居る隣の老父の足首を緊と捕へて、一生懸命力に任せてウント引けば、思ひもかけぬ不意を打たれ、アット言つて彼老父が杂り風呂へ顚倒るを見るより、四邊の人々は何樣した事と立騒ぐ。茶め吉は呆れかへり、あつけに取られて居たりしが、「コリヤ間違つた大變」と、

來、へた「茶め公感心々々、眞に前代未聞の珍藝だ。へんたらこの仕打から杂と中へ落ちて、其方へ突飛され此方へ突飛され、一番の打留に羽目へコッキリ天窓を打付けた所なんざア働いたもんだ。芝居でするト彼コッきりが幕切の拍子木だらう」虚ろ「後生恐るべし、人は見掛に寄らねへものサ。盗むなと言つたのは尤だ、自己ア彼位の離れ術ぢやアあるめへト思つた」茶め「エエイゲラ〳〵人の愁を見て面白さうに、自己が樂にして居やアがる。お前たちやア不實の上なしだ。加勢をして呉れ樣とはしねへで、同じ樣に遠くから手を伸して毛を引張つたり、尻を突衝いたりしやアがるのだものヲ」虚ろ「夫だつて楠でも孔明でも氣の付かねへ程なことを監へるお前だから、脇からは屁腰な樣に見えても、何樣言ふ謀略があるか心底が譯らねへから、空然口は出せめへぢアねへか」茶め「夫りやア自己だものヲ、慮がなくつて何樣するものか。彼野郎に泡を吹せる樣な仕返をするのは方寸の内に有るのだ」虚ろ「夫見ねへ亦前代未聞の工夫をしだしたらう。智者は智者だヨ」へた「だけれど藥箱を持たねへから、天窓を羽目へ打付けた時なんぞに不自由だ」茶め「ヘン其樣見くびつたことを言つて、後で悔りしなさんな。織田信長なんぞも始は空馬鹿を遣つて居たぜ」ト、言ひつゝ脇を一寸見ると、突飛したる彫物だらけの大男が、何時の間にか風呂を出て水船の方へ來る故、茶め吉は周章てて風呂の中へ駈込み、隅の方へ縮

へ轉り込み、「アヽッフ、ブク〳〵、アヽアヽ、ガフ〳〵、ブク、アヽッ」ともがきまはる其手先が、傍に這入つて居る人の睾丸へさはると其儘緊りと捕る故、先の男は顔を皺め、「アヽッアア痛た、此愚鈍め何をする」と、漸々湯から首を出し、立上らんとする横ッ小鬢を、力まかせに突飛され、亦杀りと向へ倒れ、隅の方に都々一を唄つて居たる人の天窓へ否といふ程湯をあびせれば、物をも言はず彼男が兩手を出し突戻すに、奥の方の板羽目へグワンと言ふほど天窓を打付け、「アヽいたゝゝゝゝ、此奴等ア何をひどいことを仕やアがる」ト眼をむき出せば、都都一を唄つて居たる彼男、「ナニ糞でも食へ、糞取めヱ。何だイ人の天窓から湯をあびせやアがつて、ぐづ〳〵言しやアがると、獅子ッ鼻を捻り切つて、眼鏡屋の看板にするぞ」ト言ひつゝずつと立上る。茶め吉も勃然となり、「ナニ自己が鼻が獅子ッ鼻だと」ト言ひながら先の男を一寸見ると、薄暗ければ能くは知れねど、腕から胸へ眞黑に見ゆるは慥に彫物にて、角力取とも言ふべき程な大男故、ぎよつとして後の方へ尻込しながら、「ナンノ獅子ッ鼻だつて鼻は鼻だ。手前の鼻が高いつゝて其樣に誇るこたアねへ。是でも隨分匂はすらア」ト何かグヅ〳〵いひながら餘所の人の蔭の方からこそ〳〵と迯上り、流しの隅に何くはぬ顔して洗つて居る。下太郎と虚呂松は頻にクッ〳〵笑ひながら、續いて後から上つて

をしつかりと組み、十本の指を皆脇の下へ仕舞つて置いて、少しも手を出さずに足でばかり湯の中へ這入るといふ妙藝を工夫したのだ」へた「ウヽツ、アハヽア夫で先刻ッから米をつく樣な腰ッつきをして居るのか。成程此處までは楠も孔明も氣が付くめへ。其位なことを工夫をしだしたら、人に賊まれ樣と思つて氣の揉めるのは尤だ。お前の慈母が道祖神樣へ御願をかけ、その夜馬と鹿が跂ねて居る夢を見てから、足下を孕んだと言つて咄したが、申し子といふものは諍はれねへもんで、果してこの位な事を監へだした」虚ろ「ハヽア其處で中段へ足を乘せて、ちよいちよいと跂て見て居るのか」茶め「へン知恵のねへ奴等が寄つてたかつて妬め〱。其代り跡で仕て見たく成つて、眞似をすると承知しねへぞ」虚ろ「併是は拜見事で、何樣して此中へ手放しで這入うと言ふのは中々六ケ敷。チツトヽ浮雲なし。又へんたらこか米も其位に搗くと、餘程の上白に成るだらう。イヨどつこい〱此度は大分宜さゝうだ」「ヨヲ引イ〱チンチリチンチリ、評判ぢや〱」ト、下太郎虚呂松が雜ッかへすを、耳にも懸けず茶め吉は一人眞に成つて腕組なし、中段まで上りたれど、竝より深き風呂箱故、なか〱這入り兼ねたるを、亦種種に渾身をやつて、漸々に上の板を跨ぎ中の段へ足を踏みかけ、しめた〱と言ひながら外の段の足を上げて這入らんとするその拍子に、中の段の足が辷つて、叅らこと横ざまに風呂の中

積りで這入ると仕よう。イヨ眞ツ風呂御湯う免。ア、なか〳〵こいつア湯みる〳〵」虚ろ「ドレ成程よく沸す、御まんさい湯とは、やたらに馬鹿氣て焚きんます」へた「夫やア宜いが茶め吉は何處に居るか、大分神妙だノ」虚ろ「彼方の隅に居る樣だ。ヲイ茶め公、些五色の遠吠でもはじめねへか」茶め「自己が語り出すト、女湯に長湯のものが出來て氣の毒だから、夫よりやア矢張お前が木魚の聲色でも始めさつせへ」ト、中段へ片足かけ變な身振をして居るゆゑ、へた「なんだ茶め公何樣かしたのか。腕組をして米を搗く樣な眞似をして居るぢやねへか」茶め「燕雀なんぞ大鵬の心を知らんサ。彼樣いふ形をして居るのが其方なんぞに譯るものか。是は自己が工夫をして思付いた事が有るから、やつて見てゐるのだ」虚ろ「足下の工夫ならどうせろくな事ぢやアあるめへ」茶め「ヘン漢の相丞、忠武侯、諸葛孔明、南朝の廷尉楠河内判官正成といへども、未だ心の付かざる處、和漢未發前代未聞の珍藝だ。眞に妙な所へ氣が付いたト、我ながら感激に堪へて居るのだ」へた「何だか前文を聞いたとこぢやア餘程の事らしいが、本文は小便の泡程にも往きやアしめへ」虚ろ「その腕組をして米を搗く樣な眞似をして居るのが、楠も孔明も氣の付かねへ前代未聞の珍藝と言ふのか」茶め「其樣に氣が揉めるなら言つて聞かせよう。だが必ず後日に至つて自己が監へたなぞと、人の工夫を盜むめへヨ。エヘン先彼樣そくに立つて兩の腕

風呂の中は賑しく都々一など唄つて居れど、人は纔に五六人、思ひの外にすいて居る故、三人は手足をしめしながら、虚ろ「がうてき／＼、お客が少くつて湯がたつぷりだ」へた「成程虚呂印は何處も彼處も眞黒だナア」虚ろ「彼處が白ければお公家さまだア」へた「串戯ちやアねへ三世相を出して見な。お前は前世に佛の奉加帳を書く墨を三升盗んで、出來も仕ねへ艶文を書いた報によつて、今生へ眞黒に生れて來ると書いて有るに違へねへ。眞にお前のは體といふのぢやアねへ、黒だといふのだ。湯へ這入るよりやア海の中へ這入つて、珊瑚樹を見附たら宜からう」虚ろ「是が否味のねへ十寸男色と申すのだは。何でも物は黒くなくつていけるものか。先神に大黒天佛に黒本尊、歌人には大作の黒主、智者には黒う源の義經、黒丸子は腹の痛みを治し、黒塀は盗賊の難をふせぐ、物の上手を黒人と言ひ、通り者を黒う人と稱す。黒のお羽織に黒革をどし、浄るり「頭巾まぶかに身をかため、通ひなれたる朱雀のの、露ふみしたくじゆんそくは」トへた「ひん／＼犬わん猫にやアちうアツヽ。こいつアすてきに沸いて居て、脚はなか／＼入れられねへぜ」「體が冷えて居るから湯みて熱い様に思ふのだト、言つたばかりぢやア文盲なやからには譯るめへが、湯みるといふのは湯が體へしみるといふを縮めた言葉で、酒がしみれば酒みる、茶なれば茶みるサ。都て彼様いふ處が詞のはたらきといふものだ」へた「宜いサ夫ぢやア其

著を如何ぞと、二階の口より見て居たる二人も頓て下り來り、へた「何樣だ野良公、新製の羊羹は美味かつたか」のら「道理で天井が騷々しいと思つたら、何匹も居たのだナ」茶め「そりやァ宜いが喜次さん大變があるぜ」喜次「ナ何が大變だ」茶め「ヘン何が處かイどしんツィの一件だ」喜次「何樣したと」茶め「イヤサ下太がどしんと尻餅を搗くと、虛呂松がツィと小便をしたといふことヨ。だがその小便は大概嘗めて仕舞つたから宜いけれど、もう一度疊の淸洗をせざアなるめへ」喜次「眞正か」茶め「論より證據だ、二階へ上つて疊の濡れて居る所を嗅いで見な」喜次「困らせるやつらだなァ。ドレ〳〵」ト二階へ上る。其時に虛呂松も厠より出來り、流石に捨ても置かれぬ故水など汲みて持上り、寄つてたかつて漸々掃除をして仕舞ふと、茶め「自己ァ湯に往つて來るぜ。小便を嘗めた唾を吐かけられた面の皮の洗濯をして來ねへぢやァ、何分にも氣が濟まねへ」虛ろ「自己も往つて淸めて來べヱ」へた「自己も夫ぢやァ一所に可往」と手拭下げて三人が、「喜次さん一寸洗湯へ往つて浴びて來るぜ」喜次「二階の疊も連れて往つて洗つて遣つて吳れぬへか」虛ろ「イヤ〳〵ありやァ矢張あとへ殘して疊わけにするがいゝ」へ「左樣すると」うた「疊こそ今は仇なれ、見染めてそめて逢うた其ときやつい轉び寐の」へた「ヱヽイ氣障な身振をしやアがる」と、是より三人打連れて程近き浴室へ往き、衣服を脱捨てその儘に柘榴口へ駈込むと、

小便をこぼれし酒と思ひしは德利看ざる不調法なり

斯る二階の大騷を知るや知らずや、下座敷の彼三人は漸く落著き、香煎は七色蕃椒、羊羹は鮪の切身と性が解れば、今更に知つた風して對へたる大愚も流石間の惡ければ、物に假託け早々に暇を告げて歸り行くを、見るより二階の虛呂松は階子段を駈下りて、急ぎ厠へ往かんとするを、野良七は捕へて胸ぐらを緊と取り、のら「人に鮪を喰はせたのは此野郎の仕業だらう、サア何樣するか看やアがれ」ト搖りまはせば虛呂松が、「コレサそんねへな事をすると、小便が出るからよしねへといふに。エヽモ息さへ徐とついて居るのだアナ」のら「其樣な甘口な言譯で放すものか。サア何故人に彼樣なものを飮ましやアがつた」虛ろ「エヽ搖つちやアいかねへ。アレサ出るから止しなといふのだ。そして自己が知つたことぢやアねへ、ノウ喜次さん」喜次「眞正に宜しくねへ洒落をしやアがる。大愚だから宜いけれど、あれが外の者でみねへ、何樣に氣の毒だか知れやアしねへ」のら「夫りやア違へねへ。なんにしても以來の見せしめ、此儘ぢやア腹が癒えねへ。サア何樣だあやまつたか」虛ろ「コレサアイタヽヽヽ。エヽこの野郎ふざけるな。アヽアヽア力を入れると猶たまらねへ。あやまつた〳〵」と身振しながら靑く成る故、のら「チヨツ仕方がねへ了簡して遣らう」ト突飛されて、虛呂松は周章て厠へかけ込んだり。この間

に口をして置いたのだけれど、匐匍に成つて居る脊中の上へ、あの大きな尻をヅンと乘せられたもんだから、思はず知らずツイと出たのだが、まだしも眼の玉が出なくつて仕合だつたノウ。へた「下太公何樣だ、このせつの小便は胃の臟に熱があると見えて、すこし濁つて居るから、不斷の樣な呑口には往くめへが、宜けりやァもう一合お燗を付けようか」茶め「濁つて赤い小便なら味淋だと思ひさうなものだが、夫を酒だと思ふのは、矢張釀ばかり飲みつけて居るせいだらう」へた「チヨツ彼方も此方も人の胸の悪いのだと思つて、平氣な面をして居やァがる」茶め「何樣して平氣な顔をして居られるものか、先刻ッから眼を細くしたり口を大きく明いたり、種々な顔をして笑つて居るのだ」へた「彼樣なるからは百年めだ。仕方がねへ、下へ往つて口を濯いで來よう」ト階子の段を下りにかゝるを、虛呂松がつらまへて、虛ろ「コレサ辛抱がひのねへ、下へ往かれるくらゐなら、先刻ッから忰にもぎれる樣な苦しみをさせては置かねへは」へた「夫だつて何樣して口を此まゝで置かれるものか」茶め「此まゝで置かれずば、お結びにでもして置いたら宜からう」虛ろ「しめた〳〵宜い者がある」ト、喜次郎が机の上より筆洗の鉢を持來り、虛ろ「妙だ妙だ、入れたばかりのしかも若水」「ドレ〳〵、成程こいつァ天のお助だ」と、彼筆洗を持ち窓を明けて首を出し、頻にグヅ〳〵口洗をしながら、

様したら宜からう」ト困りきつたる顔をして監へ居れば、茶め吉が、「何だ小穢へ顔をして、實正に小便をやらかしたのか」虚ろ「ツイと出たから、まアやらかした様なものサ」へた「やらかした様なものなら、衣類のつまが濡れて居なけりやアならねへ筈だが、何とも無へぢやアねへか」虚ろ「其處は御法辨なもので、衣類はまくれて居たから濡しやアしねへが、犢鼻褌は、ヲツトこいつも彼様いふ事と蟲が知つたか、今日はしめては居なんだつけ」へた「へン其様なつじ褄の合はねへ申口といふが有るものか。コレ此處にある德利の酒を、いつの間にか此様に疊へこぼして置いて、小便などと僞つたつて、此下太郎さまが欺かれる様な甘口なものと思ふか。一升四百の小便なら、彼様して掃除をしてやるは、勿體ない」ト言ひながら、虚呂松のした小便が疊にすこし溜つて居るを、酒と思へば平氣にて口を當ててチユツト吸ひ、へた「アツア丶ツ、ペツペツピヨツ〱、こりやア實正の小便だ。ア丶臭へゲヱツ、ゲ、ゲヱツゲヱ丶たまらねへ。ゲヱ丶ツ、ゲ、ヱ丶誰か早く嗽の水を持つて來てくれ。ア丶ゲヱツゲ、ペツ〱ピヨツ〱」茶め「ヱ丶イ穢へ。何故人の顔へ唾をするンだイ」へた「顔へ唾どころか、口のなかへ小便をする奴さへあるは」茶め「何處の國に人の小便へ、口をたれこむやつが有るものか」へた「夫だつて自己が小便へ」茶め「手前が好きこのんで小便へ口をしたのぢアねへか」虚ろ「イヤサ小便へ隨分丈夫

様した事と喜次郎が譯を知らねば、有漏々々するを、寐匍匐ひて先刻から二階の口より看て居る三人、グウッグッとこみあげる笑を、外へもらさじと眞赤になつて堪へて居しが、今野良七がゲッ／＼と苦しむを見て、下太郎は我をわすれて飛んで起き、「妙だ／＼、コイツァ妙だ」ト、抜足しながら踊り跂ねるを、「ヱヽイ其様にドン／＼やつて、下へ聞えるといかねえワ」ト、腰のあたりを茶め吉に突飛されて、跟蹌々々とよろけかゝりて、虚呂松が匍匐ひたる脊中の上へ大きな五體で尻餅をどつさりと突くと、虚呂松は先の程より堪へて居た小便なれば、我知らず押れし却含にツイと出る故、頭をしかめて身をふるはせ、「アヽア大變だ、アヽ早くどかねへと止らねへ。アヽ小便が出る」といへば、「アレサ串戯ぢやアねへ。アヽアヽ苦しい／＼」と言ふを聞いて、下太郎はわざと尻へ力をいれ、へた「しかしいきな年増にでも彼様いふあんべえに遣られたら、まんざら悪くもあるめえが」ト、上からぐい／＼推付ければ、虚ろ「アヽア小便が出るといふに意地の悪い。アレ出るといへば、ヱヽ此野郎どうするか見やアがれ」と、一生懸命起上る。この勢に下太郎は後の方へ跂飛され、先刻下からはこび上げたる膳の所へ顚倒かへると猪口も徳利もころがり出す。虚呂松は屁腰をして、「アヽア、アヽ」ト身振しながら、「ヱヽいま／＼しい意地まがり野郎、こんなに小便をたれさしやアがつて、串談も時による。何

これは熱いお湯だ」ト、彼湯の茶碗を下へ置き、大愚は挾んで貰ひたる羊羹をもてあまし、指の先にて推潰したり丸めたりして居たりしが、兎角に生嗅き匂がすれば、何心なく其手を嗅ぎ、顔をしかめてわきを向き、「ウヽツ、アヽヽゲエイゲツ」ト身振すれど、野良七は氣が付かず、「ドレドレまう飲みごろに冷めたらう」ト茶碗をとり、「成程これが新製の香煎か」ト言ひながら、茶碗を鼻へ押附けフン〳〵と嗅ぎ、野良「ハツ、ヘエツクシヤウ、えゝ畜生、あぶなく膝へ翻すとこだ。何だかめつぱふ香ばしい。こいつア見體といひ匂と言ひ、まるで七色蕃椒といふ鹽梅だ」ト、やがて一口にぐいと飲み、野良「アヽアヽツ、ホウ是は辛い〳〵。ホウ辛いスウ〳〵、フウフウ。アヽひどい物を飲ませやアはつた。フウ〳〵ヲヽ〳〵辛い〳〵。早く口直しにその羊羹を喰せてくれ」と、甘味で口の辛いのを治す氣なれば、野色七が菓子皿にある羊羹を三切四切一所に摘み、口の中へへしこんで、あぐりと喰るとぐんにやりと血生臭きに、「アヽツこりやアなんだ。アヽアヽ〳〵變な物をアヽゲエツゲエイツゲエイ、アヽこてへられねへ物をゲエツ喰せやアがつた。アヽゲエツゲエイ」と言ひながら緣頰へかけいだし、嚙散したる餡の身を吐出すを見て、先刻より胸の悪きをこらへて居た大愚も、堪らず顔をしかめ、大「ゲエツ、ゲエヽ、アアこれはゲツ、ゲエイ」野良「ゲエツゲツ」ト鬼灯ほどな涙をこぼし、この兩人が苦しむを、何

妙竹林話七偏人　初編巻之中

此時下の座敷には、主人の喜次郎大愚にむかひ、喜次「時に先生香煎湯をもう一ッ献じませうか。そして羊羹は如何、御意にいつたら、御遠慮なすつてはいけません。サア〳〵何卒めしあがつて」ト二切ばかり挾んで出され、「イエ〳〵夫へさし置かれて、自由にちやうだい」喜次「夫でも折角挾みましたから」ト無理に強ひられ、よんどころなく手の平へ請取り、「ナニサ彼様の珍物を、心なくむしやり〳〵と下司ばるやからも有りやすが、得手左様いふ白痴にかぎつて、一ッ三匁する初茄子より、一山三文の茄子のはうが美味などと、とんだたはことを言ひやす。實に玉も瓦も辨へなく遣られた日にや、新製だの初物だのト、骨を折るがものは御座いやせんのサ」喜次「アノ野良公、是は新製の香煎だといふから、大愚先生にあげたのだが、お前も一碗やつて見ねへか」ト茶碗取出し湯を注いで、彼香煎を振まぶり、サアと出せば、野良七が、「チットお茶臺でちやうだい。イエこれは〳〵、左様なお見苦しいお手では恐れいります。ナニサお羊羹は自由に大き左様な所を撰つていたゞきます。必ず〳〵澤山おかまひ被成つて下さいまし。イヤ

龍宮城の煉羊羹をあんぐりと喰つて、ゲエッゲとは有難山。こんなことと知つたら、牡丹餅だと言つて馬糞もちつと持つて來れば宜かつた」虛ろ「イヤウ何さま彼奴ゐ飲ませられさうな景色に成つた。アレ喜次さんが火鉢の引出から茶碗を出すは」へた「其癖喜次さんは自分ぢやア飲まねへから、氣が付いてゐるのかしらん」茶め「彼人は一盃やるト、通例あの通り飲も喰ひもしねへが、とてものことに喰せば宜いと思つてゐるのだ」虛ろ「そりやア宜いが、餘り笑つたので小便がしたく成つてきた」へた「エヽもう些だ堪へてゐろイ」虛ろ「何樣も仕方がねへ我慢をすべエ」茶め「是サ聲が高い、シイッシ」虛ろ「鮒と鯰とどちやうが安い、シイッシ」へた「すてきに古い、シイッシ」ト譯らぬことを言ひながら、彼三人は野良七が容子いかゞと窺ひ居る。

へこだはり、煉とも付かず蒸とも付かず變な味ゆゑ、これは異だと顏をしかめ、頰ぺたを脹してむぐ〳〵やれど、吐出す譯にもいかねば、飲込まんとするに、グッ〳〵と咽喉のみ鳴つて下へおりぬを、思ひきつてグッと飲むと、いよ〳〵變に生臭ければ、ゲッ〳〵ト突戻すを、眼を白黒して亦飲めど、胸のわろさに堪へられねば、飲みかけ置きたる香煎湯をあわてて取つて、一口にがぶりと飲むと、先とは違ひ底の方にこて〳〵とをどみて有りし蕃椒の種が一度に口にはいれば、アッと言つて反返り、あきたる口の唇をひつくりかへし尖らせて、ホウ〳〵スウスウハア〳〵フウ〳〵と、息を外へ吹いて居る内、涎はだら〳〵顋へつたはり、鼻の上には汗をかき、額口より湯氣をたて、眞赤になつて居るところへ、野良七といふ能樂連中、「ハイ色師の問屋で御座い。御慶申します」ト言ひながら、委細かまはず上り來り、「ホイ是は大愚先生、大分よいお色で御座います。喜次さん連中はまだ來ねへか」喜次「左樣ス來たとも來ねへともどつち付かず」のら「ハテ跂介や飛八は自己より先の筈だが」ト首をまげて監へ居る。此時二階の三人は先刻よりの可笑さを堪へかねては、フッ〳〵と吹出す口を押へたり押へられたり、足揩して面白がつて居るところへ、亦野良七が來りし故、下太郎は天窓をたゝき、へた「コウ〳〵、妙だ妙だ。夕の寶珠の玉の意趣がけへせる。アレ今に見な、あの野郎も七色香煎湯をぐいと飲みの、

湯を一口ちよいと飲み、何だか可笑な顔をして口を少し尖がらせ、スウ〳〵ホウ〳〵と息をそとへ吹いて居る。喜次郎は氣が付かねど、二階に看て居る三人は、ふき出すばかりの可笑しさをじつとこらへて竊々聲、虚ろ「香煎より七色蕃椒の方が、利がよろしう御座いませう」茶め「シイッ」へた「臺所へ往つて銅壺のふたをお舐めなすつたら、早く辛みがとれませう」虚ろ「それは山椒で御座いますッ」へた「山椒も中に這入つてをりますット」茶め「すこしでなくつて、山椒はいつて居たから、スウ〳〵のホウ〳〵で御座いませう」虚ろ「シイッシイ」ト三人は袖をひつぱり膝を突き、かたづを飲んで見て居るト、喜次郎は大愚が前へ菓子皿押遣り、喜次「この羊羹も新製だといふから、一ッあがつて御覽なせへ。併し食物本草とも云はれるくらゐな大愚先生だから、この菓子もモウお口に觸れたで御座いませう」と言はれて、例の知つたふり、たい「この赤煉で御座へやすか。ナニサ是は然るとこでまだ賣出さねへのだが、先大人のお風味を願ふと言つて出しやしたから喰つて見たが、「なか〳〵妙に喰はせるので、其後も一兩度取寄せて、人にも振舞ひやしたのサ。此香煎も能くお手に入りやした。僕さへ他所で一寸飲んで見たまでの事で、お恥もじながらまだ出所だに定かならねへのに、流石は大人だ、妙に何かがお早く集る」ト言ひながら、彼菓子鉢の羊羹を一切とつて口へ入れ、ぐしやりと嚙むと生臭き匂がぷんと胸

意もあるから、いざと言やァ直に鍋燒の七色蕃椒を振掛けるといふだんどりだ」虚「道理で羊羹の折が大きかつたと思つた」茶め「ヲヤ一寸下を見な」虚ろ「ナゼ〳〵。ホンニ喜次さんが、例の香煎の筒と羊羹の折をかつぎ出したぜ」へた「ドレ〳〵。イヤアこいつァ面ふろい。何樣するか見じて居よう」と、二階の口から三人は知れない樣に覗いて居ると、下では主人の喜次郎が、「夫は夕はお樂、例のおかくし藝の面白づくしで、さぞおもて被成つた事で御座いませう」たい「其處はなんといつても、無駄な孔方をなげうつて置きやしただけ、葉唄はござれ踊はよしと、まんざら野夫がられもしねへ積りさ」喜次「時にお茶を入れようといふ所だが、僥倖新製の香煎だといふのを今もらひやしたから、湯を一ッ上げませう。其處でまたこの羊羹も、此度はじめて出來たのだといふ觸込で到來しやしたが、切つて看ませう」ト折の葢を明けて見て、喜次「成程おつな色に出來てゐる、寄物には能くこんなのが有ります」ト言ひながら、臺所より庖丁を持來り、六七分ぐらゐな厚みにすかり〳〵と切並べ、菓子鉢へのせて其處へだし、鐵瓶の湯を茶碗へつぎ、彼香煎を振蒔いて、喜次「ホイ是は些多すぎた。私は風を引いて居て匂も何にもわかりませんが、宜いか悪いか一ッ上つて御覽なさい」ト茶臺へ乘せて差出せば、たい「イヤ玉手を勞しておそれいつた。之はこれは、ナニサたいがいな煎茶よりは、かへつて香煎のはうが宜うげんス」トいひながら、彼

で、流石の我慢も鼻を折り、眞に大人は食物本草だ、太刀打は出來ねへといつて驚きやしたが、其まゝでは何分にも腹が癒えねへと見えて、いつの間にか竂朋町から、お竹にお梅お松などといふ金毛九尾の白面を生捕つて來て、書畫も開きもそつちのけ、直に亂盃の大騒といふ世界に變じ、てんと面白しで漏たけることを知らず、時に鷄鳴曉をうながすに驚いて、とう〳〵猿江へ一宿の、今歸りがけて御庵前をよぎりやすから、大人の御起居いかゞ在らせられるやト、一寸窺ひ奉る」など、漢語まじりの釋らぬことを頻にならべ立てるうち、二階では彼三人が殘りの酒をのみながら、虚ろ「ヲホン、大人德利は如何おはします、したんで見てもさへずやさへずかネ」茶め「ポタリ〳〵でも有るくらゐなら、此樣に力をおとしはしねへワ」虚ろ「エ、仕方がねへ、重詰の煮豆でも食ひこめ、アツアこいつァ梅干だ」へた「エ、穢へ、なぜその豆の中へ吐すのだイ」へた「ヲツト一番誤つた。とてもの次でにかきまはして仕舞はうか」へた「とんだものが舞込んだので、自己の思付を題無にして仕舞やアがつた」虚ろ「何か趣向があつたのか」へた「新製の羊羹香煎と表題して差出した土産は、實は羊羹でも香煎でもねへ」茶め「シテ本名をあかす時は」へた「鮪の正身の梅かんとでも言ひさうな所を、羊羹の折の中へすつぽりときめこませ、亦香煎の筒のなかへは、七色番椒の大辛といふのを詰めかへて來たのだ。其處でない〳〵葱の用

「誠でもあるめへ屁ましめだらう」へた「ヲヤそりやア宜いが、自己わすれた事をした」と、周章てて立つて入口の玄關めきたるところへ行き、風呂敷包を持來り、その中より羊羹の折と香煎の竹筒を取出し、へた「先刻來た時一寸あすこへ置いてさつぱりと失念、是はこのたび新製の羊羹と香煎、わざとお年玉のしるし」ト、喜次郎が前へさし置く時、表の方にて咳拂ヲホン、「如何御在庵であらせられるかネ」虚ろ「サア〳〵事だ。誰だ〳〵、石町のもよんじいか」茶め「御空庵だといはうか」喜次「ナニサ春はじめてだから左樣も出來ねへ。お前たちやア此皿ッ小鉢を持つて二階へ上つて仕舞ひねへ」虚ろ「ヲツト承知」へた「きはどい所で下卑るなイ」茶め「芋を一ッひようばつたは、熱ふつて口がひかれねへ」虚ろ「エヽヱさもしい事をする奴だ」ト、人々に其處を取かたづけ二階へ上れば、喜次郎は立出でて、「コレハ大愚大人、サア〳〵此方へ」たい「然らば御免」とずつと通り、たい「今日は御年賀に出たのでは御座いやせん、大人の鳳駕がきしらなくつては、初を兼ねて、應柳庵と源氏庵の評の年籠を開卷するから、昨日書畫の書座がしまつて來ねへト、波曉子のおだてにそゝなかされ、我にもあらでふら〳〵と芦光が猿江の別宅へ往きやした。すると彼人が相變らず才子ぶつて、座附の菓子から酒の肴、都て穴ぐり穿つて奇絕妙と、めづらしがらせる積りで出した奴を、是は何屋彼は何處と一々星をさしたの

樽わりのところ此する一文もらひの薦ッかぶりと成下り、道樂寺を呻つても口過は出來ると申します」喜次「エヽこの野郎、いんぎのわりい事を言やアがる」茶め「アヽソレ帆立貝へ袖が引かかるは」虚ろ「ソラ芋が灰の中へ身を投げた」へた「焼豆腐もつゞいて飛込むは」茶め「牛房々々と沈んだら、引摺りあげて人參を飲ませるがいゝ」虚ろ「ヤレ〳〵田作で御目出度かつた」ト、灰のなかへ落ちた芋をはさみあげる。へた「いやはや誠におせちない地口ばかり出來るゾ」喜次「時に自己は毎度左樣思ふが、正月の重詰と五節句の煮物、それに袴著髮置の祝サ、あいつァ何樣な立派な人達でも、長い飴を二袋か三袋だか、是ばかりは古風のすたらずに居るところが難有へぢやアねへか」虚ろ「一體おせちといふものは、茶め吉を見る樣な意地穢しを誠の爲に」茶め「誠ぢやアあるめへ、おせちだからお煮染の爲だらう」喜次「ハヽア何か虚呂松のお說があると見えるネ」へた「そいつもお說ぢやアあるめへおせちだらう」喜次「エヽイしやべるなイ」虚ろ「さておせちの煮ものの品は、田作に焼豆腐、芋、牛房、人參といふのが世間通例だ。そこで田作は元鰥だから、魚の中で一ばん下だ。亦焼豆腐は中にすがたつて居るだらう。さて芋と牛房で腹を膨らし、田作の下々、焼豆腐のなかのすうと屁を放れて、人參の樣に赤い顏をするなといふお煮染だは」喜次「アヽア穢いお煮染だ」虚ろ「イヤサお煮染ではない誠だといふことヨ」虚ろ

是は不思議、アレこの通り飲んでも〳〵盡きません。して見ると私のきゝでは、泉川が瀧水だらうと存じます」茶め「しからば身共も鑑定にとりかゝらう。ナル、何さま上物だ。モウ一ぱい注いでくんな。チツトよし、ソラ亦お酌だ、奇妙々々。此度は手酌でやらう。ア、ちりますへ」へた「コレサ一人でそんねへに何様するつもりのだ」茶め「ハテ是で七獻頂戴いたしましたが、一盃ごとにみな美味御座いましたから、先七ツ梅かと存じますが、皆様はまた私を猩々のやうだと被仰いませう」虚ろ「イヤもう誠にお割合のよい御鑑定で、殘心に堪へました」喜次「僉さまの御鑑定、是にてとつくりきゝ酒仕りまして御座います。偖今日彼樣に御集會ともしら梅で、一人つ九年酒といたして居りました故、誠に泡盛をくひまして、何様紫蘇酒にも燒酎にも寡ぐらしは手もまはらず。然りながら玉綠の御らい鱗ゆゑ何がなト存じ、戸棚を明けて三ツ鱗のところ、幸ひと彼方のすみ田川に到來の一瓶、お肴はなくとも元よりみなうちわ同前の中汲、たゞ濁りのないところを御馳走とおぼしめし、足元も養老酒となる迄めしあがり、是は江戸一と御保命酒にあづからば、私のみか孫古味淋の酢へまでも、難有鹽醬油にぞんじ奉ります」茶め「イヨ〳〵白ざけばなれの致した御挨拶、甘露酒に堪へましたぞ」虚ろ「樒柑酒があつて十分の御口上ぶり、なか〳〵灑は置きませんツ」へた「呑口のまはり鹽梅、徳利と聽聞いたし、

物を帆立貝であつたやつか。イヤその中の芋で、寶珠の玉の咄を思ひだした」喜次「芋を見て思ひ出すのなら、寶珠の玉でなくつて放屁の玉だらう」へた「偖今の初夢の咄の後だが」へた「サァその放屁の玉、イヤサ放屁ぢやァねへ寶珠の玉だト思つたのは、目を明いて見ると野良七めが仕業で、自己の天窓へのしかゝり、岩のやうな拳固を二ッこしらへて、兩の小鬢をぐり〱やりながら、サァ起きねへか朝寐をするも方圖がある、是ほど強くやざう極めても、根ッから葉ッぱり痛がらねへのは、鐵槌あたまか石天窓か、どうだ〱と眞赤になつて押して居られた痛さくやしさ」盧ろ「さぞ穢へ面をしたらうなァ」茶め「こいつァ百ぐらゐ出しても見たかつた」喜次「フム、其處で野良七がお前の天窓をぐり〱の遣り迯か」へた「夫だからョ。その敵をとりてへと思ふのだ。その敵より自己の敵は何樣した。早く一盃めぐり逢せて呉ねへか」茶め「彌めぐり逢つたら、助太刀は自己一人でもちきらう」喜次「サァ〱出來た、下太しう一盃やらかしねへ」へた「そりやァ有難へヲットよし〱」喜次「よくなくつて、大晦日にやう〱の思ひで取寄したのだ」へた「ドレ〱成程、こりやァがうてきだ。ア、何樣もしみて〱五臓六腑をたち切られる樣な心持だ。して見るとこの御酒は劍菱か正宗といふ鑑定で御座います」ト盧呂松へさせば、盧ろ「ドレ〱成程よい御酒だ」ト、注いだる酒を飲むまねのみして、何時までも飲みほさず。

の緒〆にてもあらざれば、此時とろ〳〵と眠りつくかと思ひなせへ」虚ろ「亦思ふのか」喜次「東西」へた「忽然として三社祭の善玉惡玉のごとき寶珠の玉が二ッ雲のなかから、自己が仰向に寐てゐる天窓の上へ、ドロン〳〵で舞下つたと思ひなせへ」茶め「イヤさう〳〵思つては、肩が張つて立ちきれねへから、此度は抱くこととしよう」喜次「東西々々」へた「すると一ッの玉は左の小鬢、また一ッの玉は右の小鬢へ來て、ひつたりくつゝいたと」虚ろ「思ひなせへか」へた「東西」茶め「やァ此度は手前で東西をいやァがる」へた「彼兩の小鬢へくつゝいた玉が、肉をゑぐつてくり〳〵めりこんで行くその痛さ、一生懸命こらへて居たがもうたまらず、アットいつて眼を醒したと思ひなせへ」喜次「鬱陶敷思はせるぜ」虚ろ「東西」茶め「南北」虚ろ「氣拔氣の毒、庇のえ、茶のと、愚痴のえ、ぐづのと、我呑、餓のど、むりのえ、無智のと、則ちこれは下太が身の上の十干で御座いッ」へた「エヘン、さし替りまして十二支をまうし上げます。先くつゝてはごろ〳〵子、物事のろくつて丑ぐらゐ、ものゝ早きこと虎、はねたる所は卯、わけもわからずはらを辰、呑みたいが病の巳、前のものはお定りの午、はなを垂らして紙をつひやす未、所作事すべて申、よくばつて何でも酉、うちには片時戌、借錢で首がまはらな亥といふのだ。チャ此奴等ァ何をくらふのだ。ヘン何時の間にかお燗を付けたナ。其處でお肴は重詰におせちの煮

が來ていかねへは。そしてその面は何様したんだ。烟にむせた貉の様に、目ばかりしよぼ〳〵やつて、實に重忠さまの御知行所と來て、ぢゝむ郡を一ゑんに領して居るのだぜ」へ太「イヤこりやア面黒い。人のざんさうを岩永どころか、自分が御面色が惡七兵衛で、おまけに少々はねきよと來て居るくせに」茶め「イヤモシ些おことばの榛澤六郎だけれど、左様兩方が根をほり底を堀川御所で、惡口雜言をいふ君阿古屋なら、琴責どころか打捨つて置いても梵論が出て、今までせつかく宜い事をしたのも、みな此方とらの威をかりてする狐だと思はれたらばつまるめへが」へ太「ナンノ亦茶めきなぞが横合から口を出して、水責火責のくるしみを請けようと思つて」喜次「コレサおめへたちの唾が、霧のやうに家中をまつてあるくは。些しづかにしさつしナ」へ太「今虚呂松が自己の目をしよぼ〳〵して居るといつたが、其筈だといふ譯は、夕の寶船の一件だ。今年こそ宜い初夢を見ようとおもつて、無上に早寢をしたところが、サアその宜夢宜夢がみんな天窓へこみ上げたと見えて、五ツの鐘がなり四ツがなり」茶め「九ツがなり八ツがなり」虚呂「七ツがなり六ツが」へ太「たうとう天道様の昇るまで寢そびれて、まんぢりともしねへと思ひなせへ」茶め「チツト待ちな。アノ宜い夢を見ようと思つてト言つたのは、お前が思つたので、此度の思ひなせへは此方でおもふのか」喜次「東西」へ太「エヘン、然れども眼の玉水晶

江の小藤太、あすこのせりふを此様つけて、此處の身振をあゝやつてト、一人監へ居るところへ、同氣求むる茶芽吉虚呂松、裏口よりしてのつそりト案内もなく入來り、茶め「イヤお目出たう御座いッ」虚ろ「イヤお目出十一御座いッ」茶め「ヲヤ何様した、なぜそんねへに塞いでるのだ」虚ろ「頣をふところへ仕舞ひこんで、頰ッ端へお手てを突かい棒の、老木の松といふ身は宜いが、その肘が火鉢の緣をちよいと外れると、毛の生えてる藥灌と、茶の沸いてる土瓶と鉢合をするぜ」茶め「なにか二人が來る早々、藥鑵ましい事をいふ樣だけれど、その肘がはづれて土瓶とそつちに倒れるひにやア、まて火鉢はねへ。居眠なら晩に寢てからの仕事として、春は春らしく些陽氣にやんねへナ」喜次「ヘン元日や晴れて雀のものがたりサ。無智短才のやからは、一夜明けるか明けねへに、陽氣がつて居ようけれど、まだ初春の內は、上べを陰にして腹へ陽を蓄へこむ時節だ。自己なんぞの爲ることは、天地の氣候と同體して往くところが妙といふのだ」茶め「上が陰で中が陽なら、ざつと陰症の傷寒だから、熱がうきそびれると氣がたちれるぜ」トいふ時、またも入來るなまけ仲間の下太郞が、明けし障子の間から首ばかりつき出し、へた「彌〻浮かねへけりやア、家鷄を戶板へ乘せてながすが宜からう」喜次「何だか譯も知らねへで、來ると直にさしで口だア」虚ろ「エヽイ氣の利かねへ、早く這入つてあとを〆めねへと、風

妙竹林話 七偏人

東都　梅亭金鵞編次

初編　巻之上

呉竹の代の人竝に松たてゝ破れ障子を春は來にけり。

實にや千秋萬々歳、まつちやらこのゐいやつと、春立ちかへる朝には、軒端賑はふ七五三餝、夕は鬼の提灯を、もつた小僧の長松が、親の名で來る年の禮、太々神樂、猿まはし、三絃ならして鳥追が、まゐる恵方の繭玉や、一トごに二タご三な四ッて、遣羽子するやら手鞠唄、紙鳶のうなりも自然、長閑をさそふ往來の、表通りは五月蠅と、すこし避けたる見識も、江湖上は風の柳橋、陬人の子の律義より、老子荘子の新道こそ、住居よけれといふ氣にて、亀事茶にした家造りも、有徳の人の若隠居、あそぶを日々の商賣にて、他に事なき能樂人、女房があつては俗ばると、おつなところへ風流がり、寡ぐらしの喜次郎が、火鉢のふちへよりかゝり、今年の茶番の初狂言、不動明王を工藤左衛門に見立て、制吒迦童子を八幡の三郎、矜羯羅童子を近

七偏人連中一どう
ちよつと御目見え

進じ
名酒拾樽
偏人連より
流見物様方へ

のし
蒸籠十荷
偏人連より
鉄ちやや的へ

妙竹林話 七偏人初編序

唐山晉の七賢人は、豹脚の多き所とも、しるや知らずや醉蕩け、竹の林に洒落竭して、阮咸などは三線の、元祖と呼ばれし蠢蠅、夫すら今に名は遺る。とかく浮世はをかしみの、笑ふ門には七福や、春の始の寶船、七種の粥には命を延し、天神七代北斗の七掌、七堂伽藍に七觀音、始皇の七馬鳳の七德、いづれも七の數をもて、愛たきものと世にしらる。夫からおもひつくゐの上、こゝに彰す七偏人は、全部合せて七編揃、七むづかしきことをば言はず、作者が得意の滑稽笑譚、看る人ごとにふきだすとは、富貴を出すの詞にかよひて、當り外さぬ妙案新奇、販元大喜の喜の字をば、俗に㐂の賀と、いはふも矢張七の數、この戯書を鐫るときは、七珍萬寶集る前兆、六十餘州の看官、みな御覧じて可笑いと、御評判の高わらひを、被るならば忽に、一夜の東風南枝にわたりて、ひと花ひらく梅亭の、名は高砂の松が枝に、巣をくふ田鶴も久かたの、雲井はるかに羽を翀して、聲も八千代の壽や、盡きせぬ春の初わらひ、社中舉つて金鵞さん、おめでたう厶り升としかいふ。

丁巳青陽　　松亭迂叟題

しても、此天窓を乗せて往きたくなつた。體が一つに天窓が二人前だから餘程せつねへ」矢場「道理で飯でも酒でも二人前づつやらかすと思つた」土場「ナニ喰ふばかりならいゝが、海口ことまで二人前だから寔におそれる」茶見「まだ〳〵夫より困る事は、只さへ厚い面の皮のうへへ、又一重冠つたから、なほ〳〵厚かましくなつたにやア實に閉口だ」和次「道理で今駕屋がへいかうへいかうト言つていたつけ」張吉「ヘン人の事をいふ奴等が、相應に口は達者だア。徳久利野郎めへ」トむだ口たら〳〵歩む程に、市場も過ぎ、鶴見橋も洒落渡りて、やがて生麥の建場に到りて、此處にてしばらく休みける。

是より神奈川泊の滑稽、且金澤江の島鎌倉を見物のをかしみまで、作者の智恵袋を逆さにふるつて、第五編三冊に著し、名所古跡はいふに及ばず、見物の道順まで、巨細に書載せて、をかしき中より自ら勸懲の一助となせば、看官の幼童等よろしく愛翫を願ふといふ。

滑稽和合人 終

つけなさるなら、早くなさらないと消えますヨ」和次「コウあんなに信切に御仰から、早く吸付けねへかな。ぐづ〳〵爲た男だ」ト、兩方からせめられて、是非なく遠くから吸付けて早々に迯げて來る。和次「土場公、拔駈の爲ばへがあつてよかつたの」土場「チヨツお前の出した智惠に碌な事アありやア爲ねへ。思出しても胸がわりいやア」張吉「瘡は口から受けたのは拔ねへといふぜ」土場「ヱヽ最う言つて吳れるなゲヱヽ〳〵」ト、船端へ顏を出して川の水にて嗽をする時、其側へ犬の死骸が流れて來る。茶見「ソラ土場公、鼻の先へ犬の土左衞門がソレ」土場「ヱヽこいつは堪らねへゲヱヽ〳〵、ペツ〳〵〳〵」ト、此さわぎのうちに船は向の岸につく。和次「コウ今の女は土場公に些と氣があるやうだつたぜ、新田屋か萬年屋へ連れて行けばいゝ」張吉「違へねへ、那女の呑んだ跡は、うみと涎で猪口がぬら〳〵するだらう」土場「ヱヽ最う拜むから言つて吳んなさんな、いまだに胸がむか〳〵すらア。是ぢやア萬年屋も素通り〳〵」矢場「弱い男だ。併し此身たちも大森でつめ込んだので、まだねつから腹が透かねへ」和次「夫ぢやア此處は歸りにまはして、づつと本宿の方へぶらつかう」ト、言ふときかたはらより、かごや「モシ臺まで安く御相談はなりますまいか」和次「いらねへいらねへ」かごや「歸りだから酒代で參りませう」張吉「コウ駕屋さん、天窓ばかり いくらで乘せる」かごや「へヽヽヽ、ぢやアねへ、半分直なら乘せるだらう」楊次「駕屋さん構つて居ると方圖がねへどうせ、滿足に乘る氣遣はねへから、無駄だ〳〵」張吉「此身ア實に百や二百出

イアリヤン〱〱」楊次「ソラ張公天窓をおさへねへと落つこちらア」張吉「ヲイ〱當分お前の方へ首を食客に置いて呉れる事は出來めへか」楊次「イヤいくら此節の相場が安いとつて、そんな大天窓がひとり殖ゑられちやア立きれねへ、マア他さまを御相談だ」ト、此うち程なく船場にいたり、みな〱渡し舟に飛び乘る、和次「コウ鳥渡見な、アレ舳先の方に後を向いて腰を掛けて居る年増の、ソレ藍微塵の衣物を着て居る」矢場「ムウ餘程婀娜ツぽい後ツつきだ」土場「待ちねへ、此身が此方を向かせて見せやう」楊次「何樣して向かせる」土場「紙をもんで背中へ放付けらア」楊次「ヘン生いやらしい其面で、そんな事をして見ろ、狂氣としか見えやア爲ねへ」和次「ドレおいらが一智恵出して見せやう。アレ見な那年増が莨を呑んで居るだらう」ト、半分聞くより土場六うろたへて、喜世留に莨をつぎ人の中を押分けてかの女の側へ行き、つお貸しなせへ」ト、女の背中を喜世留にてちよいと叩けば、女「ハイ」ト、言ひながら、喜世留をくわへた儘こちらを向く顏を見れば、鼻を掛けて片顏が腫物だらけにうみたゞれ、口の端までくされたる樣子二目とも見られぬ顏色に、土場六けぎよつとして、土場「ワア」ト、言ひつゝ、二足ばかりさがりしが、流石に氣の毒なれば、土場「ホイ今船がぐらついたので、莨をついだのを何處か振落して仕舞つた」ト、是をしほに逃げんとするを、和次郎はこなたより見てかしさをこらへて居たりしが、猶もこまらせてやらんと思ひ、和次「ヲイ土場公、莨がなかアサア遣るから、一服吸ひつけて來ねへ。折角那女中さんが貸して遣らうと言ひなさらアな」ト、言ひつゝ役人を脇差のさきへ突きかけてやれば、土場六はにがひ顏を爲ながら、土場「エヽ情ねへ、那きたねへ口で吞んだ莨が吸ひつけられるものか」茶見「ナニきたねへ」土場「エヽ大きな聲をするなイ」ト、言へどもかの女は病氣にてよほど耳が遠きと見えて、女「サアお

餘程惜しさうに見えたぜ」張吉「エヽ然う言つて仕舞つちやァ何にもならねへヤイ」和次「ハヽァ解つた、夫ぢやァ張公が例のひやかしが餘りひつこいので、かづらを押付けられたのだな」茶見「其通り／＼。此身が居なからうもんなら、既の事で福助の天窓ばかり、十四五も買はせられる所サ」矢場「イヤハヤ大笑な野郎だ。天地開闢以來福助のかづらの押賣をされたものは、世の中廣しといへども、凡そ張吉壹人にとゞまるだらう」土場「そんな間抜を爲て置いて、利口らしく茶番師の腹が知れるものかッ。ヘン茶瓶敷が聞いて呆れらァ」張吉「コウてんぐ／＼に、友達が何ぞ落目な事をすると嬉しがつて、あのよろこぶ顔はよ、見たくでもねへ。寔に賴母しい心意氣だァ」楊次「コレサそんなに顔の色まで替へて腹を立つ事ァねへハサ。みんなも然うだ、可愛さうにそんなに口々騒々敷言はねへでもいゝ事だァ。此身ァ張公の間抜をするのは常の事だと思つて居るから、さつぱり驚かねへやァ。何の珍しくもねへ」張吉「エヽ夫ぢやァ猶わりいのだイ」楊次「ホイ又御意を損つた」みな／＼「アハヽヽヽハヽヽヽヽ」（ト、咄のうちに、蒲田村町屋村も過ぎて六郷の川端へ近づく。）矢場「コウ大層早く來たぢやァねへか」茶見「早過ぎるなら跡へ歸らうか」矢場「歸るとも往くとも勝手に爲ねへ。お前の足の世話まではやかねへから」土場「コウ／＼いゝ加減に海口ッせへ、口を叩いて居るうちに船が出て仕舞はァ。此處で一船おくれると大層な違へだセ」和次「サア／＼駈ろ／＼」張吉「ヤア

ヘ」張吉「夫でも鳥渡覗いて行う。ア、木の葉の黄ばんだ鹽梅、又ひとしほの詠めだ。早速一首はべらう。

いつの間に青葉衣を脱捨ててもみぢに替ゆる梅の木娘

張吉「ヘン狂歌ならマアこんな物だらう」土場「何れ似寄の品には相違あるめへ。時にお前の天窓に冠つて居るのは、そりやア何樣爲たのだ」張吉「福助のかづらサ」土場「そりやア知つてるが、何の爲に買つたのだヨ」張吉「ヘンお前たちに茶番師の腹が知れてたまるものか。ノウ茶見公」茶見「マアそんなやうなものサ」土場「をかしな返事だの」張吉「をかしかア笑ふがいゝやア。今に見ねへ、是がどんな茶番種になるか知れやア爲ねへ。ノウ茶見公」ト、自分が間抜をして買つた事をぬりかくさんと、頻に茶見藏に相槌を打たせんと氣をもむ故、茶見藏をかしく、茶見「然うヨ、十四五の鬘を押付けられた時は、餘程苦しさうだつけ」張吉「那親父がノウ、全體此身か十賣るなら一分に買つて遣らうと言つたら、賣ればいゝのに、強情な親父サ」茶見「フンお前あの時、此身が口を利いて遣らねへと、理詰にあふところぢやアねへか」張吉「然うヨ、お前が居ねへと、一分のものなら二分出しても言ひがかつた意地づくだから、十より少くは買はねへ積りだつたけれども、お前の言葉に對して」茶見「先の親父が了簡して呉れたから、漸あやまつて十四五も押付けられたのを、一ツ買つて勘忍して貰つたのだつけノウ。那時出した八十は

らず、揚次「コウ茶見公、まだ此酒が怪しいのか、つまらねへ手合だ」土場「ナニ茶見公だつて最う怪みも爲めへけれども、お前が其酒をちび〳〵呑んで居るから疑はしいやァな、念晴に呑むのなら、一息にグット呑んで見せねへ」揚次「そりやァ何の造作もねへ事だ」ト、かの薄荷のはいりし酒をグイと呑んできもをつぶし、揚次「ヒヤァ〳〵大變々々、是やァ何を入へたのだ、口も咽もヒリ〳〵すらァ」土場「何を入れたか此身が知るものか、人が怪しがる酒を自慢らしく飲んで置いて、其尻を人の所へ持つて來たと言つて、誰が知つてるものか」揚次「イヤ何でもこりやァ土場印の所爲に違へねへ、わりい戲事ダア。アヽ咽も口もピリ〳〵ほてらァ。いめへましい」土場「ナニ此身が何樣するものか、知らねへ〳〵」揚次「イヽヤ何と言つてもお前の顏色にあらはれて居らァ、嘘だと思ふなら舌を出して見せな。ソラ〳〵黃色いからお前に違へねへ」土場「べらぼうめへ、屁を爲やァ仕めへし」和次「イヽサ〳〵、こりやァ兩方がわりいのだから、此喧嘩は預り〳〵」揚次「チョツ業腹な、腹いせに歌でもこじつけべヱ。

　ひどい目に大森ながら飯ならで酒の手盛を喰ひし苦しさ

ト出たらめの一興に、みな〳〵大笑となり、是よりそこ〳〵に仕度も濟みて此家を立出で、梅屋敷の前に至ると、茶見「コウ春だと一ぷく建てる所だけれども」矢場「秋だから素通りか、違へね

出さア。夫ぢやア矢場先生一盃毒見をして呉んねへ。夫でねへと茶見公達の疑を晴らす事が出來ねへから」 ト、言へども同じく尻ごみをして、 矢場「イヤ／＼此身も酒は十分だ、モウ／＼呑めねへ／＼」 楊次「イヤハヤどれもこれも咄のならねへ下手酒だ。チヨツ詮方がねへ、此身が一盃呑んで見せべヱ」 ト、言ひつゝ猪口に八分目ばかり酒をつぎ、態々わきの方を向き、人に見えぬやうに呑みほして、 楊次「サア茶見公やつて見ねへ、モウ此身が呑んだから疑はあるめへ」 茶見「イヤまだ滅多にやア飲まれねへ。お前がほんたうに飲めばだけれども、脇の方を向いて人に見えねへやうに、トやつた鹽梅、まだ／＼どうも怪しい／＼」 ト、いよ／＼疑はしく思ふにぞ、楊次はひとり笑壺に入りて、 楊次「イヤモウ解らねへも程があらア、何樣して飲んだからとつて、呑む味はおんなじ事だア。夫とも那でまだ疑はしくば、最う一盃飲んで見せやう」 ト、言ひつゝ今度も猪口に八分目ほど酌いで呑む時、ちよいと顔へ袖を當てゝのむ。

張吉「アレ又氣障な事を爲たぞ」 茶見「何でも酒にいはくがあるに違へねへ」 ト、言へばいふほどいよ／＼面白く、 楊次「まだ合點がいかざア、最う一盃飲んで見せようか。アヽ面倒な、今度は茶碗でやらかすべヱ」

ト言ひつゝ、茶漬茶碗になみ／＼と酌ぎ、出したばかりで手もつかぬ肴をむしや／＼やらかしては、酒を飲む時ばかり、例の袖を顔へ當て呑む故、側に居る土場六が大方は夫と推察して、兼て何ぞの用に立てんと、鼻紙袋に貯へ置きたる富山製の薄荷圓を半貝ばかり掌へあけ、今楊次郎が呑みかけて下に置きし茶碗の中へ、氣のつかぬやうにそつと入れしを、楊次郎は少しも知

ぜ」茶見「ホンニサ、旅へ出てからは友達より外にたよりはねへのに、實にわりい酒落だぜ」ト二個は一圖に戯事をされたりと思ふ様子故、和次郎等は爲損じの功名にて、思はずも落をとり、をかしさを堪へて互に袖を引き、瞬目してしめし合せながら、和次「ナニ戯事が爲てあるものか、ノウ土場公」土場「然うサ、お前方が來るだらうと思つて取り寄せた肴ヨ、なんにも入れもどうも爲やァ爲ねへ。マァ何しろ其大きいのでやつて見な、一口呑んだら、ノウ矢場公」矢場「夫こそ頰ツぺたどころか、鼻も眼も口も落こちる程辛かァねへ、うめへ筈だ」ト此隙に楊次郎はそつと立つて勝手にいたり、何か手につかみし振りをして、元の座に立戻り、わざと人に知れるやうに燗德利の口へ入れる眞似をするを、茶見藏見咎め、茶見「ヲイ楊公、おつな手つきをするの」楊次「ナニお燗がさめやァ爲ねへかと、鳥渡さはつて見たノサ。何様だみんなが白眼合つて居ねへで、さつさつと呑んで仕舞へばいゝ、日は短へぜ」張吉「なんだか怪しい事だらけだ。誰ぞ毒見を爲ねへうちは、此政岡は承知されねへ」楊次「ヘンひどく疑つたものだ。夫ぢやァ和次さん、お前ひとつ呑んで、茶見公や張キの念ばらしをすればいゝ」ト、言はれ、和次郎も矢場のそぶりをうたがはしく思ひ居ることゆゑ、和次「おいらァ今までお前達の知つてる通り、此茶碗でやらかしたから、モウ酒は一するも呑れねへ」楊次「そんなら土場公、一盃やんねへ」ト、是もおなじく怪しく思へば、土場「何様して、此身ァ釜屋の酒がまだ醒めねへところへ、此處でやらかしたから醉を引上げて、アヽ頭痛がしてせつねへ」楊次「てんぐ〳〵に弱い音を

滑稽
和合人 四編巻之下

恪てまた和次郎、矢場七等の四人は、處女に十分思ひつかれる積りにて、お袋諸侶引張り込み、はじめ茶見藏等に氣を揉せて遣らんと伎倆し越向も打忘れ、銚子の替りを出せ出さぬにて、しばらく押問答をして、漸く酒肴を出すやうになりしところ、小僧が迎に來りしにて、親子は早々に暇を告げ、留めても聞かず立歸る其跡へ、誂の酒肴をいろ〳〵持ちかけられ、虻も取らず蜂も取らぬ場合となり、四人は顔ばかり白眼合つて、しよげかへつて居るところへ、張吉、茶見藏の二人表から内を覗込み、茶見「ヤア此處だ〳〵、ひどく尋ねさせやアがつた」張吉「アレ皆がぬく〳〵と呑んでけつからア」ト、言ひつゝ二人は奥座敷にいたり、椽側へ腰を掛けながら、張吉「ヲヤ何だか氣のねへ顔色を爲て居るの、其癖大層御馳走が出て、そしてまだねつから手もつかねへ樣子だが、是にやア何ぞ譯のありさうな」茶見「違へねへ。此いじきたな連中が、なか〳〵取寄せた肴に、手もつけねへで見て居る筈はねへが、待ちなヨ、何ぞ趣向の爲てある事かも知れねへゼ」張「なる程酒や肴の中に唐がらしでも切込んであるか、何にしろ油斷はならねへ。コウ和次さん、道中へ出ちやア戯事はわりい

膽を潰させやァがつた、いめへましい」

な物を十の廿のと買つてどうするものだ」茶見「夫でも十壹分で」張吉「コレサありやア皆ひやかしだヨ」茶見「そんなら今のは皆ほらを吹いたのだな」張吉「然う〳〵」茶見「全體はしみつたれな男だの」張吉「其通り違へなし」茶見「アハヽヽヽ意氣地のねへ野郎だ。時に爺さん、今聞きなさるとほり、此男は意氣地なしのしみつたれで」張吉「コウそんなに竝べ立てねへでもいゝやアな」茶見「マアだまつて居さつし。其處で今言ふ通り意氣地なしのしみつたれだから、口では十買ふと言つても、なか〳〵一つも買ふ野郎じやアねへから、爺さん、お前も腹は立つだらうけれども、了簡して呉んなせへ。其替りに夫だけあるかづらのうち、一ツは此男に買はせるから、エよしか、此身が口をきくから了簡し爲なせへ」ト、茶見誠の挨拶にておやぢもふしやう〳〵になつとくする故、張吉もせひなく財布より八十文出してかづらをひとつ買ひ、此家をたち出づるとて、

張吉とりあへず、

福助で肱を張子の親父めにへこまされたる事ぞくやしき

張吉「こんな苦しい時でも、歌人のたしなみは違つたものだらう」茶見「ヘンまだ負惜みを言つて居らア。時に和次さん達やア、まだ小便をして居るだらうか」張吉「痳病やみの牛でも、最う爲て仕舞ふ時分だ。こりやアてつきり先へ通りぬけたに違へねへ」茶見「遠くは行くまい、跡追ツかけて」張吉「たしかに此道ヲヽ然うだ」ト、かの福助のかづらを冠つて身振をする時、向から來る馬士にばつたり行きあたる。馬士「ハイ馬だ」張吉「エヽ

しても買つて遣らア」ト、言ふときかの小娘は脇の見世より福助のかづらを十四五かゝへて來るをおやぢ請取り、「サア是だけ取寄せました、まだお入用なら取寄せてあげませう」ト言はれ、素より買ふ氣はなけれど、一ッ切りないと聞いて、頻にひやかせしに、思の外十四五のかづらをつきつけられ、張吉はぎよつとして、張吉「コウ爺さん、歸りに買ふ」おやぢ「イヤお前さん、十より少くちやア買はぬと被仰たから、仲間を尋ねて取寄せましたのだから、お買ひなすつて被下やし」張吉「ナニサ買はねへとは言はねへ、今買つても邪魔だから、歸りに買ふと言ふのだアな」おやぢ「イヤ〳〵お前さん、馬につけても買つて行くと被仰たではないか。何なら馬も雇うてあげやせう」張吉「夫にしても歸りに爲やう」おやぢ「そんなら其積りで殘して置きますから、お手附を下さいまし」張吉「どうして手附なんぞが置れるものか。そして殘して置かずとも、相手があるなら賣つてもいゝサ」おやぢ「モシ夫ぢやアお前は人の賣物をあすびなさるのだネ」張吉「ナニ〳〵遊びやア爲やせん」おやぢ「そんなら買つてお呉んなせへ」張吉「ハテ邪魔になるから歸りに買ふと言つたらいゝぢやアねへか」おやぢ「夫ならよいから、手附をお呉なせへ」張吉「情ねへ、かづらぐらゐに手附を出してたまるものか。さう言つても強性な親父だ。コウ茶見公、だまつて居ずと何とか言つて呉んねへな」茶見「お前入るなら十でも十五でも買ふがいゝはな。邪魔なら此身が半分は持つて遣らう」張吉「エヽお前までが何だな、こん

御ゆるりと」むすめ「たんとお樂みなさいまし。ヲホヽヽヽ」ト、是をいゝしほにしてそこ／＼に立出づる。和次「コレサ今ちつきだァ子、口を濡させずにお歸し申しちやァ氣がかりだ。モシ／＼アレサ。エヽ、ホイ最う行つて仕舞やァがつた。頓めへ」ト、さすがの四人も少ししらける。斯てまた茶見藏、張吉の二人は、和次郎等が小便を爲て居るうち、麥わら細工の見世へ這入込んで、茶見「コウ爺さん、その上に釣下げてある唐人笛はいくらだ」おやぢ「ハイ大いのが六拾四文、其次が四十でござります」張吉「コウあすこにある大きな天窓はありやァ何だ」おやぢ「福助のかづらでござります」張吉「ドレ見せな。ムウなる程額が大層に出ておつりきな面だ」おやぢ「お土産にお召なされまし」張吉「爺さんこりやァ一ツ切りか」おやぢ「ハイあいにく一つに致しました」張吉「イヤそりやァいけねへ、せめて拾人前もあると、直段はいくら高くつても買つて遣るけれども」おやぢ「其處に棕梠の毛でこしらへたかづらが御座りますが、夫ではお間に合ひませんか」張吉「どうして／＼、此身の町内の者ァ、みんな頼朝さまの子孫で、天窓が大きいから、なか／＼當前のかづらぢやァ合やァ爲ねへ。惜しい事だ、たんとありさへすりやァ廿でも三十でも、何なら馬に一駄も買つて行きてへものだが」ト、此時おやぢは小娘を呼びて、何かさゝやくと、小娘は駈出して行く。張吉は夫とも心づかず、張吉「どうも此福助のかづらは思ひつきでいゝよ。こりやァ十もあればいくらだよ」おやぢ「ハイ一つが八十づつ致します」張吉「フウ安い物だ、此身ァ十ありやァ壹分出

のなら上げますが、先程二銚子のお約束で、其跡はさつぱり切らしましてございます」和次「コレサ先刻言つたのは違つて居るヨ」女「夫でも貴公酒亂だと被仰ましたのに、御酒をあげまして、どのやうな騒動になりませうも知れませんから、何卒是ばかりは」矢場「イヤサ、先刻此身が言つたのは皆啌だから、早く燗を爲て來て呉な。そしてお前たちも見ても知れさうな者ぢやァねへか、こんな美しい女中だアな。ナニ酒亂をしてたまるものか」ト言はれて女はやう〜なつとくして、女「夫ではあげましても氣遣はございませんか」土場「大丈夫だから早く爲て呉ねへ」女「お肴はどの様な物にいたしませう」楊次「何でもいゝから、内にありツたけもつて來ねへ」女「ハイ〜」ト立つてゆく。此押合のうち親子は何故とも知らねば氣の毒さうにもじ〜して居るところへ、十三四の小僧かけ來り、小僧「アノウ旦那様は此先ィの茶屋にお在なすつて、早くお内儀さんにお出なさるやうに、然う言つて來いと被仰ました」母「ヲヤ然うか、夫ぢやァ直に參らうヨ。左様なら誰殿さまも有難う」和次「アレサ、マアいゝぢやァ御座いやせんか、今直にお燗が。コウ楊公鳥渡催促をして」母「イヱ思召は有難うございますが、待つて居ると申すのに、又あんまり遲なはりましては」楊次「ナニサ、お手間はとらせやせん。コウ〜嬢へ〜、酒ばかりでも早く早く」母「イヱ〜決して御遠慮申すのではございません。サァお前、仕度がよくばお暇乞をして」むすめ「ア丶又あんまり長く居つたらお爺さんがチエ」母「ヲ丶然うとも〜、左様なら皆さん、

り憚りだが、折あしく持合せやしたから、鳥渡お餞別の爲にあげやせう」土場「エヽ何を海口るのだイ、みんな違つて居らア」母「ヲホヽヽヽ有難うございますが、私やア只今申す通り、親父が待つて居らうと存じますから」和次「ナニサお爺さんのお在なさる所が知れたら長松どんがお迎に來やすだらう。夫まで爰で一つおあがんなせへ」ト、むりに引きとめられ、母「夫ぢやア折角あんなに被仰から、ちよいといたゞいて行かうかノウ」むすめ「アヽ然うおしな、萬一お爺さんが先へ歸ッてお仕舞なら、和次さん達と御同道に歸るハネ」母「ヲヤ此孃も氣樂な事ばかり言ふヨ、何樣してお前の樣な遲足が、御同道に歩かれるものか」和次「ナニ〳〵遲くなりやア駕もあるし、夫でなくても此野郎なんざア、隨分お馬になれと言やア嬉しがつてなりやす」母「ヲホヽヽ、左樣なら貴公いたゞきますヨ」土場「ハイお酌を」ト銚子をとつて見ながら、土場「ヲヤこりやア空だ、そつちの燗徳久利だらう」楊次「ヲイ」ト燗徳久利を取つて酌ぐに、是もおなじく酒がポタ〳〵。楊次「ホイ是れもいけねへ。ヲイ〳〵孃へ〳〵、鳥渡〳〵」女「ハイ〳〵只今御膳をあげます」楊次「ナニ飯より先へ酒をもつとつけて、そして何ぞ呑めさうな肴を出して呉んな」女「お肴はあげますが、御酒はお氣の毒さまでございますが、只今あげました切で、あいにく跡は切らしました」楊次「エヽ何を言ふのだな、持つて來なと言つたら、早く燗をつけて來ねへ」ト目顔で知らすれども、一向に悟らず、ひとすぢに酒亂の連が來しと思へば、女「イエございます

お袋と娘だ。の、ソレ楊公、お前も知つて居るだらう」楊次「然う〳〵、此身も見た娘だと思つた。アレ此方を見て笑つて居るから、那に違へねへ。何卒して呼びてへものだ」矢場「手を叩いて見な、來るかも知れねへ」土場「ヘン緋鯉や龜の子ぢやアあるめへし」和次「楊公烏渡行つて連れて來ればいゝ」楊次「ヱ何だか間がわりいやうだ」和次「ナンノ構ふものか、アヽ見えても那のお袋は驗氣者だから、隨分來かねやア爲ねへ」楊次「夫ぢやア呼んで來やうか。ホイこいつア草履がねへ、草鞋で歩行くと斯ういふとき不自由だ。チヨツまゝよ素足とやらかせ、戀をする身は詮方がねへ」ト、足をつま立てて走り行き、程なく親子を引ぱつて來る。和次「是はお嬶さん、妙な所でお目に懸りやした。孃さんを御同道に。ハヽア大師樣だネ」母「ハイ久しくお參りを致しませんから、今朝のお天氣を見かけて、俄に思ひ立ちました」和次「そいつは奇妙だ。私共もやつぱり夫サ。そしてお前方お二個ばかり、外にお連はなしかネ」母「イヽヱ親父も同道でございましたが、今あすこで麥わら細工を見て居るうちに、何處か見えなくなりましたから、急度此邊に休んで居ませうと思つて、長松を見に遣つて居るうち、爰の前に立つて居ました。存じがけず貴公方のお目に懸りました」楊次「マア〳〵何にしろ此方へおあがんなせへ。コウ矢場公、其處にあるお猪口をよく澄して、ひとつ進げて呉んねへ」矢場「ヲツトきたり。モシお前さん、お初にお目に懸りまして、あんま

う」土場「いよ〳〵。こりやア矢場公の一生の智恵の出しをさめだらう」和次「なる程酒亂とはうまく思ひついた、あゝ言つて置けば、爰でも出す氣遣はねへ」楊次「其處で此身たちが呑んで仕舞ふ時分に丁度來る、此方が出拔で呑んで居るから、些と急腹で駈付三盃とか何とか名乘かけて、ト酌いで見ると、銚子の口から酒がぽた〳〵〳〵ト猪口に半分ばかりあるので、いよ〳〵心持をわるくして、むやみと手を叩ひて、女が來る、酒を持つて來い、ハイ御酒は只今ので切らしましたツ。うまい〳〵、嘸腹を立つだらう」ト、言ふとき、勝手より酒肴を持來り。女「ヘイお待遠さまで、只今御膳を」ト、言ひながら立つて行く。和次「サア〳〵來ねへうちに早くやらかさう」土場「やつて見な、燗は極上だ」和次「ヲツトヨシ〳〵。隨分まんざらでねへ酒だ。肴は何だ、ハヽア梅びしほにやたら漬、こつちが茄子の辛子漬か、丸で漬物屋の重箱だア」矢場「コウ言草は跡にして」和次「早く猪口をまはせだらう。ソラやんな」矢場「ヲトヽヽヽアヽうめへ」楊次「先刻の水とはどうだ」矢場「エヽモウ言つて吳れるな、思ひ出しても胸くそがわりいやア」ト、此の話の内にだん〳〵盃のやりとりありと知るべし。其時表の方に年の頃四十近き女、十六七の處女を連れたるが、此家の前に立止り、きよろ〳〵奥座敷を覗き込むを、土場六見付けて、土場「コウ烏渡見な、すてきな婦女がひらつくぜ。そして此身の方を、アレ〳〵じろじろ見て居らア」和次「ムウホンニありやア何でも見たやうな、ヲヽ見た筈だ、竝木の福父の

土場「ヘン大層な事をぬかしやァがらァ。今度不間を遣るときかねへぞ」矢場「ヨシ〳〵、此身が承知したと言つたら」和次「間違はない事はあるめへ」楊次「マア〳〵何はともあれ腹はきた山だし、其處等へ押上らう」矢場「シッ音高し、靜に〳〵。ソリヤあちらを向いて居るうちに、早く通りぬけたり」ト、言ひつゝ四人はそこ〳〵に茶見藏等がうしろを走り抜け、そこより一町ほど先の料理見世へはいると、女「いらつしやいまし、奥が明いて居ります」矢場「跡から連が來るから、表から見える所に爲てへものだ」女「夫では突當の六疊がよろしうございます」ト、此うち四人は庭づたひに奥の座敷にいたる。女「お仕度でもなさいますか」楊次「矢場公、いゝやうに言ひ付けねへ」矢場「コウ孃さん、仕度は六人前だが、其前に肴は何でもいゝから、上酒を二銚子ばかり大急ぎで持て來て呉んな。其處でまだ言つて置く事がありやす、今跡から二個連が來るが、二個ながらひどい酒亂で、酒を吞せたらあばれて爲樣がねへから、夫で此身達も其人の來ねへ前に、隱れて吞むのだから、其氣で早くして呉んな。夫とも若し此身たちが吞んで居るところへ、其人が來て酒を出せと言つたら、構ふ事はねへから、お氣の毒でございますが、御酒は只今あげました切で、跡はあいにく切らしましたと言つて呉んな。然うさへ言やァ此身たちが付いて居るから、いゝ樣に言つて食ばかり喰せるから」女「ハイ〳〵かしこまりました」楊次「香々でもいいから、酒を早くゞヨ」女「ハイ引」ト、言ひながら立つて行く。矢場「何樣だ、此身の智惠はおそれ入つたものだら

滑稽和合人　四編巻之中

偖も和次郎等の六人は、むだ口のうちに鈴が森も通り過ぎて、大森にさしかゝると、楊次「コウいくら秋の日が短いとつて、あんまり歩き過ぎるゼ。些と道草もよからう」矢場「道くさもいゝが、夫より此處でちよいと、だてのひしほと初夢漬で、一ぱい茶づつて行くなぞはどうだらう。夜前ッからさつぱり食氣なしだ」矢場「然ういふ病人は肥立の遲いものヨ」和次「夫にやア酒と燒酎を一ぱい半入れて二杯に煎じ、殖して呑むとよかつたつけ。そりやアさうと茶見公と張キが何處か見えなくなつたぜ」楊「ナニ今此身達があすこで小便を爲て居るうちに、先へそろ〳〵行くやうだつけが、アヽアレ〳〵向ふの麥藁細工の店へ這入り込んで居らア」土場「そうッと行つておどかして遣らうか」和次「イヤ夫より那奴等の知らねへやうに、先へ通り拔けて、そこらで一盃やらかして居る所へ、那奴等が來る、其處で何樣とか趣向を爲て置いて、氣を揉せて遣る爲やうがありさうな物だが」矢場「ある〳〵、いゝ事があらア」和次「イヤモウお前のいゝ事は當にならねへ」矢場「ナニ〳〵今度こそ大丈夫だ。マア先へ行つた上で、おいらのちゑをあらはさう」

矢場「あんまり口やしい。此身もこじつけべエ。

呑みたいとおもひ付きしもことわりや見ちがひ水も酒の名なればト斯く打興じ行く程に、果は大笑とぞなりにける。

んだ酒だ。ハヽア燒酎かな」ト言ひながら一口呑みしが、びつくりして吐出し、矢場「ヒヤ〳〵こりやア水だ〳〵」旅人「ハア水は知れた事ぢやがなア」矢場「お前等もあんまり馬鹿々々しい、狐にでも化されやア爲めへし、徳利の中へ水を入れて、何の眞似だらう」旅人「何の眞似でもありやせんわいな、旅するからぢや。咽が乾きますは、ソレ其時建場へ休んで茶を呑んで見なされ、安うても三文の茶代置かにやなりませんは、其處でわしが思ひついて、いつもこないな徳利へ水を入れて旅爲ますが、えら恰好やなア。お前も咽が乾いてなら、なんぼ喫らんしても大事おません。なくなりや其處等の井戸で、お銚子替り爲ますわいな。何樣ぢやな、今ひとつお酌爲ましよか」矢場「イヤモウ決してお辭義は致しません、が聞いて呆れらア。とんだ目に合せられた」ト、ぶつくさ小言をいふにぞ、四五間跡よりあゆみ來る和次郎ら五人は、先刻よりをかしさを忍びて居たりしが、こらへかねて大勢一度に笑出すゆゑ、彼の二人の上方者はびつくりしてそこ〳〵にはづして行く。矢場「ヘンとんだ御馳走になつたア、いめへましい。お饒に莨入まで空にして行きやアがつた」茶見「いつでもお前のする事は、大詰になると、はかる〳〵と思ひの外サ。ノウ土場公」土場「違へねへ。何樣だ矢場公、水はうまかつたか」矢場「フンたま〳〵此身が爲損じがあつたとつて、そんねへに皆していじめるなイ」和次「イヽサ〳〵何時でも首尾よくしくじらねへ事はないから。所で一首うかんだやつサ。

御馳走と思ひの外に呑む水はとつくりと見ぬ麁相なるべし

かり買居るが、壹斤でたしか六匁とかいふたわいな。そしてこないな刻のわるい香のある莨ちやおまへんがなア。併し只呑むにや是でもだんないなア、序に今一服御馳走になろかいな」矢場「イヤハヤ惡口を言ひながら、よく召あがるは。時に先刻から見て居りやア、お前所アとんだいゝものを提げて居なさるネ」旅人「ハヽ此徳利かな、こりや何とえゝ思ひつきであらうなア」矢場「どうも餘程奇妙だねへ」旅人「お前がたはこないな物の御用意はおまへんか」矢場「何様して旅へ出るに、徳利を提げることまで氣がつくものかネ」旅人「然うぢやあろ、こりや私が餘程考へた事ぢやがなア」矢場「なる程大概なものには思ひつかれねへネ。扨はお前も靈寶道は御好物と見えやすネ」人「待ちなされ、靈寶道とは何處の海道ぢやなア」矢場「ハテ靈寶道とは左といふ事だはネ」旅人「左とは何ぢやな」矢場「エヽじれッてへ、酒の事サ」旅人「ハア酒かな、酒なりや飯より好ぢやがなア。あるなりや些振舞いんか」矢場「ナニ私やア用意はねへが、其徳利のを一盃お合は出來やすめへかネ」旅「是かな、こりやいとやくたいぢやがなア」矢場「やくたいでも惡口でも構ひやせん、一盃お呉んなせへ。先刻から咽がグビ〳〵鳴て居やさア」旅「ハテ咽が乾いてかいな。丁度えゝわいな、サア呑まんせ。ドリヤお酌してあぎよかいな」矢場「イヤそりやア有難へ。ヤ是はお酌をはゞかり。ヲツトありやす〳〵」ト、茶碗に一ツなみ〳〵とつがせ、矢場「こりやヤ大さう澄

服御馳走になろかいな。さきからとゝ煙草にかつれて居ましたわいな」矢場「お前の煙草もしめりやしたかネ」旅人「ナニ私がのはしめりやせんがな」矢場「夫に何故先刻からかつゐて居なさるのだヱ」旅人「それぢやてゝ、こないに莨入に封印してあるさかい、呑れまへんぢや」矢場「ハヽア何ぞ願掛でもあつてかネ」旅人「イヤそぢやないがな、わしや生れついて莨がえらい好で、どえらう呑居りましたが、よう思うて見りや、是程費な物はないわいな。先飯なら腹がはり、酒なら醉でもするが、莨呑んだてゝ腹の足になりもせず、醉うた日にやいとやくたいぢやさかい、其處で朝三服晝三服夜さり三服と極めて、其間にやひよつと忘れて呑んぢやならんさかい、こないに封印して置きますぢや。是なりや壹斤の莨が粉まですくうて呑みや、壹年半は丈夫にあるがなア。其替に合間に人の莨貰らうて呑む事は、何服でも構やせんわいな。ドレ今一服御馳走になろかいな」矢場「サア呑みなせへ。こりやア尾張町の内田で賣るろ印といふ莨サ、通人は皆今ぢやア此莨だヨ」旅人「ハヽア彼方でも玉くづれ賣りますかいな」矢場「ヱヽ情ねへ、此莨を玉くづれの氣で呑まれてたまるものか」旅人「かいなこしてこりや何文ほど壹斤が偽ますなア」矢場「斯うと、五匁で十六文だから、壹斤ではヱヽヱヽ」旅人「アハヽヽヽヽこりやお前やくたいやなア、内田のろ印五匁買偽なさるかいな、わしや店の旦那がえら莨好で、いつも其ろ印ば

前さんくわへ煙管を爲て居なさるから、火が付いて居ると思ひやしたに、態々打つて下すつちやアお氣の毒だ」旅「何のいな、私實はえらひ莨好ぢやさかいな、いつも日に半斤ぐらひは呑みますぢや、そぢやてゝ毎日そないに莨呑んで見なされ、果は莨で身代つぶすやうな事にでもなつた時にや、あんまりあほらしいに依て、其處でこないに空煙管くはへて歩行きよりますがな。おつなもので、空ぢやと思うても、口に煙管が入つとると思や、氣は心なもので、煙草はなうても濟むがなア」矢場「アハヽヽヽこいつア大出來だ。時にお前がたア上方だネ」旅「ハア能う當ててやなア、わしどもは兩個ながら大阪でぢや」乙矢場「然うだらう、何でも大阪とにらみやした。私も店の用で度々那地へも行きやしたが、肝の潰れたいゝ所だネ。定めてお前がたも大阪ぢやア、三條通りとか四條通りとかいふものかネ」旅「イヤ大阪にはそないな町は聞きまへん、私どもが内は長町ぢやがな」矢場「ハヽア大阪の長町かネ、夫ぢやア三勝の内の御近所だらう。半七の縁切時分は嘸おやかましかつたらうネ」旅「ハヽヽヽこりや出來ました。お江戸のお方の口合は、とゝ早うて妙やなア。時に火が打付きました、煙草あがりんか」矢場「イヤこりやア態々有難う、どうだお前も呑みなさらねへか」旅「ハア左樣なら一服。イヤ私が莨はしめりくさつて、とゝ火付がわるいさかい、貴公一服振舞いんか」矢場「サア〱遠慮なしに呑みなせへ」今一人の旅人「わしも一

きれると言つて居らァ」ト、此時四五間先を歩みゆく二人の旅人、一人は五合徳利をさげて行く、今一人は茶碗を持ちたるがとき〴〵彼徳利よりついで呑みながら歩むを見て、楊次「コウ鳥渡那を見ねへ、花見にでも出たやうに、徳久利を提て呑みながら道中を爲て居やァがらァ。餘程氣樂な手合だ」張吉「何とあの酒を此方へまきあげる詮方はあるめへか」矢場「此身にさせりやァ呑んで見せらァ」土場「矢場公の手際ぢやァ、些とむづかしさうだ」矢場「フン手なみも見ねへうちに、あんまり安くするなィ。其替り皆が一盃づつだぜ」和次「ヨシ〳〵一盃でも半分でも、呑める事ならやつて見ねへだが、何だかおぼつかねへものだ」矢場「コウ初からそんなにけちをつけなさんな。其處で此身が首尾よく一盃呑むまでは、お前達も洒落やむだッ口はならねへぜ」茶見「しやれまでならだまつて居やう」張吉「しやれでもあんまり長い事では我慢がされねへぜ」土場「しやれとは〳〵辛坊がひのねへ」楊次「しやれこれ言ふうちに、徳久利が空になるだらう。早くすればいゝ」茶見「しやれッてへ男だ」張吉「あんまりあわてて、しやれッて轉ばねへやうにするがいゝやァ。しやれやれ世話のやけた事だ」楊次「あんまり洒落ッたら口がすくなつたァ」茶見「しやればサ、此身も舌がしやれ〳〵するやうだ」和次「イヤハヤ皆の洒落盡おしやれ入つたものだ」矢場「おしやれが入ッた最う出めへ。ドウ一番辨才をふるつて見せやう」ト、云ひつゝ矢場七は小足に走りて、かの旅人の邊にあゆみ寄りにこ〳〵ものにて、矢場「モシ親方、ちよと火を一ツお賴み申しやす」旅人「煙草の火かな、いんま打付けてあぎよわいな」矢場「お

仕度して此家女どもをたち出ると「是は誰殿さまも毎度有がたうございます。左様なら御機嫌よう」ト定まりのせじを耳にもかけず、爰を出てあゆみながら、土場「コウ時にみんなが何所へ行く積りで居るのだ」和次「今夜は神奈川泊サ」土場「神奈川泊は知つてるが、其先やア」茶見「後架の踏板はずすが大事」土場「へン人並らしく雀が囀ら。アヽ遍鵲なんぞ大黄の心を知らんや。アヽ此身たちの目から見ちやア將棊の戯れだ。時に神奈川から先はどつちへまごつくつもりだ」矢場「何でも路銀と足の續くだけ歩くがいゝやア」張吉「マアさしづめ金澤から鎌倉を見物して、江の島へまはつて」楊次「イヽ〳〵、それからずつと伊豆の湯治から富士へ參つて」和次「序に伊勢參宮から大和めぐり、京大阪と見物して」茶見「讃岐の金比羅から四國を廻つて」張吉「其序に猿となつて、長崎から阿蘭陀へ渡つて唐天竺と見物して」矢場「ヱヽ最う大概に海口ッせへ、氣逆上がすらア」楊次「氣逆上もする筈だ、猿となつたから」矢場「いゝヨ、解つて居るヨ、やッかましい」楊次「やかましかア」茶見「藥鑵を冠れか。ナニ冠らずとも、矢場公の天窓は大概藥鑵になつて居らア」ト、此押合ひのうちに宿川さめづも通り過ぎて、鈴が森の繩手にかゝる後より、十二三のこじき坊主、「ハア七ツ八ツ山御殿山、御殿山から鬼が出る、鬼ぢやないもの人ぢやもの、人の言ふ事啌ぢやもの、錢遣る旦那はいゝぢやもの」張吉「ヱヽうるせへ、つくな〳〵」こじき「つかねば旦那が呉れぬもの、貰はにや腮がひるぢやもの」張吉「ソレ六人で四文遣るは。アヽ高いものだ」茶見「あれだけ海口つて四文ぢやア、さきで元直が

矢場「ソレ酌ぐは」楊次「ヲットある〳〵」ト ひと口呑んで顔をしかめ、楊次「コウこいつは大さう燗が通り町だ、些とそつちの銚子の酒をうめの平内とやつて臭んねへ」和次「ヘンひどくこじつけるぜ。そして通町と粂の平内とはとんだ方角違だァ」楊次「フンそねめ〳〵。お前達が一粒八文づつもするやうな玉の汗をたらして、三年三月考へたとつて、こんないゝ洒落が出てたまるものかァ。アヽ我ながら地者に生れついたと見える」土場「道理でお前時々褌へうみをつけるとおもつた」楊次「何故々々」土場「夫でも痔者だといふからョ。全躰痔にやァ、尻をひやすのが一番わりいと言ふぜ」楊次「エヽ、何を言ふのだィ、此身の言つた地者とは其事ぢやァねへは、地口に達者な者の事をいふのだィ。どうも無宿なものに咄をすると、是にこまるぞ」和次「コウ楊公、無宿とは何のことだ」楊次「知れた事サ、字を知らねへ者」和次「チイ〳〵夫が間違つて居らア、字を書得ねへ者なら無筆だは。お前のやうに無宿と言ッちやァ、宿なしの事にあたるは」土場「いゝ氣味々々。手前が何も知らねへ癖に、人の事を無宿」和次「ヲットお前のも間違つた、無筆ぢやァねへ無宿だァ。ホイ又此身のも違つたか、こりやァみんな和睦々々」茶見「サア〳〵和睦がとゝのつたら、大概に爰を切上げて、そろ〳〵出かけるはどうだらう」矢場「よからう〳〵。どうせ川崎へ行きやァ、萬年屋の前は素通もされねへから、些と腹に空地をこしらへて置かねへと困らァ」ト宮々をこし〳〵に

か青ッぽいとか言やァ丁度相應だァ」矢場七「コウ〳〵土場公、顔色の評議なら、お前も隨分悪い方なら三十二相揃つた面だから、あんまり海口つて明るみへ恥を持出さねへやうに爲るがいゝやァ。夫より今言つた事は何樣する。和次さんは氣なしか」和次「此身ァ大承知サ」矢場「夫ぢァ張キも承知だと、其處で茶見公や楊公は氣なしか」茶見「此身ァ大ありよ」楊次「此身も」土場「ヘンてん〴〵に酒と言ふと早速御承知だ」矢場「夫ぢやァお前は不承知か」土場「ヱナニおいらも御多分にはもれねへハサ」楊次「御多分にもれても飲みてへだらう」ト言ふうち、程なく觀音前にいたる。和次「サアサァ此所へおみこしを居ゑやう〳〵」茶見「釜屋の方が見晴しがいゝぜ」矢場「よし〳〵」ト是より六人は釜屋の奥座敷にいたり、酒肴とり寄せ皆々車座にて、茶見「サァ〳〵やらかさう〳〵。和次さん年役にはじめねへ」張吉「夫ぢやァ此身ァ若役に、此茶碗ではじめやう」矢場「ヱヽそんなにあわてるなイ、口が逃げて行きやァ爲めへし、行義のわりい」張吉「どうも酒の顔を見ちやァ、腹のむしが承知爲ねへ。土場公鳥渡酌いで呉んねへ。ヲトヽヽヽァヽいゝ色だ、アヽうめへ」ト此うち盃のやりとりありと知るべし。和次「コウどれも〳〵みんな龜の子どもだぜ、夜前夜明に呑んで今朝船で、とろりやつたかやらねへに、最う酒に飢渇て居らァ」楊次「道理で時々甲羅を干しに出かけると思つた。トキニ些とお猪口の御不用なのはあるまいか」茶見「ヤレ〳〵世話しねへ奴等だぞ。ソレ遣るは、いたゞけ」楊次「チイ〳〵誰ぞ酌ねへか」

滑稽和合人 四編巻之上

江戸 爲永春水作

世の中を何の糸瓜と思へどもぶらりとしては暮らされもせず

此心と歌はありながら、いつも鯰で瓢箪を押へたやうなぬらくら仲間、其名は既に御存知の、和次郎、矢場七、土場六、茶見藏、張吉、楊次郎、の六人、品川の宿はづれにてしばらく休み、例のをかしみいろ〳〵ありて、其所を立出づると、矢場七「コウ和次さん、今日はまだ一度もお神酒があがらねへから、神慮面白からずだ。ちよいと此邊で氣をつけて往くなぞは何樣だらう。あんまり不承知を言ひさうな顏も見えねへ」張吉「其事々々。あんまり白ツぽい顏ぢやア、思ふ樣に洒落も地口も出やア爲ねへ」土場六「ヲウ白ツぽいとは」張吉「白ツぽいとは白ツぽい事よ。解らずば言つて聞かせやう。ソレ酒を呑めば目の淵がほんのりと櫻色になるはサ、所を呑めねへなら顏が白ツぽいと言つたが悪いか」土場「わりい〳〵。此連中をざつとでなく、随分丁寧に見渡した所が、此身なら知らず、其外の面に白ツぽいなんぞとは、些と自慢が過るぜ。マア黒ツぽいと

滑稽和合人四編序

能く人と交り遊ぶ者を、老子は和光同塵といひ、當時は洒落て合鏡といふ。嚮に瀧亭の親玉和合人のをかしみを綴りて、看官をしてお臍を動かせしも、和合のよいから思ひつき吐と笑つた其跡を、身にたくらぶれば、勸懲の端にもなさん作者の工夫、これは妙だと落が來て、頗る珍書と行はれしに、今三編の旅立にて、筆をとゞめて三四年、此儘置くは本意なしと、文溪堂に望まれて、跡を著氣は些推が強過るとは思ひながら、☉の顔の赤恥をさらす積で、四編目の先序文から言譯を、那和次郎等の六個に、作者を加へて七口が、天窓をさげて願ふといふ。

狂訓亭の机上に居眠ながら

爲永春水戯述

甲辰立穐

跋

拙父鯉丈が綴りたる、笑談にもまぎれ當りのありとはいへど、歳々さい〳〵皆あい似たる事のみゆゑ、幸延引チト同じからざる趣向もあらまほしと、ツイこざか敷口出に、ヲットと承知と早がてん、机にかゝりて幾日はたてど、筆の立つたる樣子もなく、いつか鼾をかくばかり。板元からは數度催促、見るに忍びず僕が、鼻へこよりを丑のとし、彫おこしたる和合人、まだ三編もまはらぬに、煙草休の長遊を、親父にかはつてあやまつて申す。

天保十二辛丑の夏

童戯人の又甚六

全亭寛壽　述

○下の巻にいたり、ちよつと小旅の趣向をと、板元のお誂、元來木に竹を繼ぐはもちまへながら、一冊にてはつゞめかね、據なく追加差出し申候。尤草稿残らず出來あれば、今後は相違なく引つゞき出板仕候間、相かはらず御求め御笑覽のほど、伏して希ひたてまつり候。

鯉丈

矢場「ハイまだ黒檀伽羅沉香白檀など、御入用はござりませんか」茶「アイ〳〵、入用ならまたさう言つてやりやせう」和次「ヘン連が手ひどい目に逢ふのを嬉しがつて、地口種にしやアがる、頼母敷ねへ友達だ。今に見やアがれ、この敵は打つて見せるぞ」楊次「ハヽヽヽ、何もさうしんねつに、恨みッぽく思ふ事はねへ、手前の勝手で犬の上へ登つたり、下に居ろといふのに立つたり、どうも仕方がねへはサ」和次「それといふも、脇差をかくしたり何かするから悪いのだ」矢場「隠すものか、落したから拾つてやつたのだ。禮こそいふべき筋だ」和次「エヽ拾ッたら直によこせば、二度目の尻餅はつかねへは」楊次「何をくだらねへ事をごたつくのだ、それより今杖はらひで名歌が出來た」土場「ハア斯うもあらうか、中通りの引込だナ」楊次「ヘンそんな安いのぢアねへは。

のべ棹でしたん〳〵とせいされてみな兩側へ古近江こそする

ヘン立上つたものだらう」張「何だ〳〵、わからねへ〳〵」茶見「また立上つて、突倒されねへがいいぜ」楊次「のべ棹に古近江サ、製スサ、兩革サ、こいらに點の打人があるものか」和次「さうだらう、どこでも點にはなりさうもねへ。ハヽヽヽ。これはどつちの贔屓でもねへが、悪い〳〵」

是より南品川も通過ぎ、とある茶店にしばらく休みぬ。

は」ト、くだらぬ押合のうち、新宿も通りぬけ、橋むかふへ行けば、向ふより十二三才の小僧しの竹を持ち二人兩がはへわかれ犬などぶちながら、小供「したアン／＼」往來の人々みな／＼軒下へしやがむ。小供「したアン／＼」和次「サア／＼下にゐろだ。旅へ出るとこれに恐れるぞ」ト、あるはたごやの軒下へ一同つくばり、矢場七はひろひし脇差を背中へたてに隠し置きしゆゑ、しやがむ時襟へ柄がしら出てければ、和次郎見付け嬉しさのまゝ我を忘れて、和次「此泥棒め」ト、立つてとりにかゝる所へ、乘物來かゝり、駕わきの侍かけ來りて、侍「下に居らう」ト、つき倒され、尻もちをつきびつくりして、和次「ヘイ御免な」ト、そのまゝしやがむ。侍はにらみ付けて行き過る。張「ハヽヽヽおめへ去年搗かねへせへか、今日はつゞけて尻もちをつくノ」和次「それといふも、此野郎め」ト、矢場七を押へてこずきまはす。矢場「アヽあやまつた／＼。アヽ鍔で背中が痛へ。あやまつた／＼」ト、脇差を襟から出して渡す。この旅籠屋の若い者、若「ハヽヽヽあなた方、下においでがおいやなら、チト上へおあがりなさいませんか。お氣にいりますやうなのを出しませう。ヘヽヽヽ」和次「アイおかたじけ。また歸りに下に居るとも、上に居るとも、お世話になりやせう」トいひすて出かける。和次「エヽ忌々しいアノ侍めエ、ひどく突倒しやァがつたから、今度は龜の尾の骨をいためた」ア土場「是もおいらが拾ふほどでもねへノ」和次「いゝヨ、獨身者がふんどしを洗ふやうに、餘りひやかして呉れるナ」茶「コウそれは扨おき、道中のしたん／＼は、大抵たがやさんのやうな小僧だノウ」張「それだから今のやうに、唐木目にあふのだ」茶「それでもチヨイと古渡だから仕合、あたまを花櫚とはりとばされても、紅木に粗相とあやまらにやアならねへ」張「其時は、エヽ江の島唐桑へ柘木の旅ゆゑ、ツイ心がせきましてとやるがよからう」

和次「なんぼおれが落目になつたとつて、ソウ皆して犬の肩をもつて呉れる事はねへ。斯うして一日でも旅へ踏出しては、互に骨をひろひ合ふ氣で居るに、扨はあの畜生に寢返だナ。よしよし、あの犬と骨を拾ひ合はッし。ヘン丸でお孤だア。ア、腰の骨をひどく痛めた。忌々しい」
土場「いつそ腰の骨をこぼせば、おいらも隨分ひろう氣だが、いためた計りではどうも」和次「エヱ大概にひやかせヱ。これなんぼ俺が氣がよくッてもナ」ト成駒屋の氣どりにて、「コレ伊達に刀はさゝぬわへ」ト腰をさぐり、和次「ヤア大變々々」楊次「どうした／＼」和次「脇差がねへ」楊次「エそりやア大變。ハハア今の騷動で」矢場「何おめへ内からさしては來ねへぜ」和次「馬鹿アいはつし。さうしようう拔がするものか」矢場「フム、しようらうは殘つて、脇ざし計りぬけたのだナ」張「これサ、無陀ッロ所ぢやアねへ、早く戻つて見て來ねへナ」楊次「今歸ッたとつて、何あるものか」張「イヤ外の品でねへから、隨分無い事はないヨ」土場「ねへ事はねへときまれば、歸るもむだだナ」矢場「是冗談ではねへ、和次さん行つて見て來なヨ」ト、いふ顏を見て、和次「うんにや、モウ歸るめへ」矢場「ナゼ／＼」和次「ヘン友切丸の盜賊はモウ知れた」矢場「コウ／＼いやに落つく／＼。實におらア知らねへぜ」張「さうヨ、おいらも」和次「ヘンいくらまじめな面をしても、みんな小鼻をひこつかせて、心の臟と脾の臟の日間合で、笑つてるのが、重忠の眼には見える

だ〳〵」ト手まねをすれば。「ヱ駕々」ト捨ぜりふにてはなれる。和次「アヽ道中も灸所々々で駕のいひわけが難義だノウ」張「それだが駕に乗りさうな人に見てくれるのが、いまだ愚運につきざる所だ。有難いと思ひねへ」和次「それもさうだ、歸つて禮を言つて來やうか」張「何それにも及ぶめへ」ト新しゆくにさしかゝり、和次「サア是から暫くなまめいた所だから、きよろ〳〵兩がはを見て、けつまづくめへぜ、外聞がわりいヨ。アヽさういつても好物な品だから、見ずには居ゐゝめへから、往に海がはを見て、歸りに山手を見るとしさつし」楊次「アイ〳〵御深切ありがたう。アヽそれ〳〵犬が」ト教へる間に、寢てゐる犬の上へ踏みかければ、犬は驚き飛びおきる途端に、和次郎は眞あふのけに倒れ、小尻をつけば脇差を向ふへなげだし、腰を強くうちけれど、兩側の旅籠屋にて、ヤレあぶないと笑ひながら見て居る故、うろたへて飛びおきる。犬「キヤン〳〵〳〵」ト逃て行く。和次郎は砂をはたきながらいやな顔色にてにが笑をしながら、和次「チヨツいめへましい。氣のきかねへ畜生だ」トさう〳〵早足に行き過ぐれど、一同をかしさたまりかね、立止りて笑ひゐる。和次郎は六七軒も行きてふりかへり、和次「何をして居るのだナ、早く來ねへか。をかしくもねへ」ト面をふくらせたるを見れば、猶々をかしく、腹をかゝへてやう〳〵來り、楊次「コウおめへ、今氣のきかねへ畜生だといつて、憤つた樣子だが、犬よりはお前がよつぽど氣はきかなんだ」和次「それだとつて晝日中、大道の眞中に寢てゐやがる事アねへ。馬鹿々々しい」張「ハヽヽヽ大道の眞中ととがめるも、犬の事だからこつちが無理、晝日中といへば、猶々すまねへ譯だぜ」矢場「さうヨ。おめへは馬鹿々々しい畜生だといふが、犬の方では、りこう〳〵敷ねへ人間だといつて、横腹をなめて居るだらう。可愛さうに、ひどく踏付けた」

張「素人にはわかるめへ、黒スの寝言のやうだから」矢場「チイ〳〵見ねへ。こつちやァいゝ所で上つたぜ。爰まで來ると、アノ通りはだしで、鴈木まで歩行わたりは恐れるぢやアねへか」楊次「さうサ。しかし爰へ來るに、汐時を考へずに、うか〳〵乗りつけるが不覺だ。チヤンヤめエ、如才がねへて。道理でおつな所であがつたと思つた。（チヤンヤとは、いせ傳の古き船頭のことなり。）これで一ばんやつつけた。

こぬ汐をまつ尾の浦か乗合の八ッ山下で皆こまりつゝ

（海手のよし簀張の茶屋女往來を見かけ、家並出て口々に、）女「お休みなさい、お這入りなさい。モアシお茶あがつてお出でなさい。お休みナ〳〵」土場「アヽやかましい〳〵、氣のぼせがするは」茶見「さうヨ。しかし慣れたといひながらよく舌かまはるノウ」張「かなありやが外郎を賣るやうだ」矢場「ちげへねへ。斯うわめき立てられては、どの家へも這入りにくくなるやうだ」茶見「呼込むのか、はやし立つて送り出すのかわからねへ」（トいふ所へ駕屋、）駕「旦那がた、川端まで召して下いまし」和次「アイマアよう御座いやす」駕「ぐつと安目で參りやせう。御相談なすつて、二三挺めして下いやし。安ウく」和次「何々〳〵乗るくれへなら、口はきかせねへ」駕「さうでも御座りませうが、わたくし共も歸りをあてに參りやすから、戻りの直で、エモシ御相談は出來やすめへか」和次「イヤ〳〵實にいらねへヨ。無陀

楊次「あんまり痛へ／＼といはツしやんな、アノ先へ行く女連が、大層笑つて行つたぜ、外聞がわりい」矢場「さうか、忌々しい。しばらく目のくらんだうち、通り過ぎたのだナ。アヽいゝ後つきだ。是はあとから來るのより、又よささうだ。惜しい事をした」和次「早くあとから追付いて、そろ／＼付いて行つて見さつし、ひよつとアノ女が乞食芝居でもはじめて、今足下のやうに振向く所へ、チヨイと顔をぶつ付けやうならうまいぜ」張「ムヽそしてぬからぬ面で、ハイ顔といふがいゝ」楊次「イヤ／＼向ふへ押のおもたましを取られやうも知れねへ」矢場「エヽなんとでもぬかせ、忌々しい。ヤ是見な、額へよつぽど瘤が出來た」和次「ハヽヽヽこまつたもんだ、その顔色へ一本角が生えては、酒呑童子の足をもむより外、役割はつかねへぜ」茶見「チイ／＼そりやアいゝが」矢場「何いゝ事があるものか」茶見「ウンニヤヨ、向から立派に二本揃つた角が來るが、成程うすのろい物だノ」張「それだから、呪事には丑の時参をするは」和次「ムヽンこじ付けるは／＼。しかしこゝで名歌がうかんだ、一番やつ付けやう、

　向ふからのろり／＼とくるまうしうしほ引いたる高輪の濱

サ。ヘンなんとどうだ。歌は斯くありたきものだ」茶見「ヘン自身番で、飛車取王手をねらふやうに、かく有りたきもいゝ。是は角成りたきといふ地口だが、素人にはチト解しがたからう」

歸と言つたが、韋駄天がおはなしを賣るやうに、何もさう急ぐ譯もねへぢやァねへか。それとも跡で案じる者でもあるか」楊次「ヘン出た日にやァ、孔雀の玉子ぢやァねへが、めつたに歸ッた事がねへから、そこはよく馴れてるらァ」茶見「ちげへねへ。ひよつと歸りはしめへかと思つて、案じるかも知れねへ」和次「サァそれぢやァ是からずいと神奈川へのして、久しぶりで七百文づつ、おごらうといふ洒落はどうだ」土場「イヤ奇妙々々。張公どうだ」張「ヤ面黒しく。大黒屋か羽澤か」和次「大黒屋がよからう」矢場「ヤきてれつく。そんなら晩に、落付く所は神奈川宿」土場「必ずぬかるな」矢場「心得ました」土場「行け」矢場「ハッ」ト、うしろを向ひて見えする途端に、あとより來る駕の棒ばなにて頭をこつちり。矢場「ァタヽヽヽ」駕屋もびつくり、駕「ァヽ引あぶねへ。大道中でわるい洒落だァ」トぶつくこごとを云ひながら行き過ぎる。矢場「痛へぞく。いめへましい畜生だ。ぶつ付けて置いて、小言をぬかしやァがる」和次「ァハヽヽヽ、全體こつちが惡いのだ、出拔に乞食芝居が始まらうとは、駕屋も思ひきやだ」楊次「さうサ。わるくごたつくと、駕屋に思ひきやましをとられる所だ」矢場「しやれ所ぢやァねへ、本たうに痛へ痛へ」張「だれもうそとは思ふめへ、隨分いゝ音がした」矢場「エヽ」トうろたへわきへよる。張「イヽ女が來たといふ事ョ。ひどくおびえるぜ」矢場「さうか、モウくうしろと聞いちやァ恐しい、おぢけが付ききつた。ムヽ成程、此後はありがてへ。アヽいゝ女だ。アヽ天窓がいてへ」

ましく不精なやつだナァ。ヲイ茶見公買つて來てくだツし」茶見「賤の男がもてあそぶわらぐつとやらを、どうしてまろに目きゝが出來やう」和次「ハヽヽヽ賤の男だとつて、わらぢを持遊びにするやつが有ものか。べらぼうめヱ。チョッ、どいつも〳〵火がたかぶつて、屁の役にもたゝねへ。ヲイ姉さんはゞかりだが、おめへ向で草鞋を一足買て來てくんなせへ」矢場「ナゼ一足だ、皆も跣足では歩行めへ」和次「そつちはてん〴〵で、どうでもするがいゝ。皆の履くのを己が口をすぼめる事もねへ。おらァ一足だけ禮をいふ氣だ」女「ヲホヽヽヽあなたは誠に凡帳面でございますネへ。マァ兎も角もとつて參じませう」ト、向へ行き、わらぢをもち來る。例のむだ口〳〵にわらぢを履き支度も出來ければ、張「サァ大概しやべッたら出かけやうぜ、足より口が先へくたびれらァ」女「ヲホヽヽヽあなた方のやうに、御道中なさつたら、さぞおもしろい事でござりませうネへ」矢場「わたしやァ夕わらぢと脚半を、黒燒にして呑で來たから、しやべッてころぶ氣遣はねへが、どうも口豆には困りやす」和次「サア〳〵出かけやう〳〵、挨拶すると限りがねへ」ト、茶代を置き、「アイ大きにお世話になりやした」矢場「それだからお茶でもあがッたのだ」張「エヽやかましいわへ」矢場「ヲイ姉さん、其藥鑵をちよつと貸してくんな、此人にかぶせるから」張「此馬鹿にはかまはねへ、行かう〳〵」女「ヲホヽヽヽ、へイようお休み遊しました。どうぞお歸りにまた」ト、すてぜりふにて立出て、是より海邊をたどりながら、「さて國を出る時は、愚慢除に日

やせう」愚「なるほど是は妙だ」和次「サアさう役割がきまれば、だれぞ一足先へ、すは町河岸の伊世傳へ行つて、屋根を一ぱい拵へさせて置くがいゝ、朝ならひに高輪まで御乗船だ」土場「ヤ奇妙〳〵。殘物をいれて、呑みながら高輪まで」和次「イヤあきれた食ひ拔だ。此長夜を呑明して、まだ不足た恐しい。おらア蒲團へくるまつて、一寝入やる氣だ」楊次「こつちもその仲間だ」樂「アヽア今百五十年若くんば、やわか後を見せべきか。エヽ殘念〳〵。サア愚慢さん、わたしが家へ御遷座として、一寝入やりやせう」ト、隠居がさばきにて、愚慢をひき出して行く。これより間ひ〳〵にしたく調ひ、伊せ傳より舟にて高輪までの紀行は、筆をみじかく切りあげて、ぶんまはしにて道具かはれば、高輪日の出の景色にて、舟よりあがり、とあるよし簀張の茶店へよる。茶や女「どなた様もお早うございます」ト、ありふれた通り茶たばこぼんを出す。和次「アイ」ト、とりながら、「モウ何時だ子」女「ハイまだ五ッ前でござりませう」張「ヘン婦人が來ると、時を聞くといふも、手のねへ客だナ」和次「道中師はこれが肝心だは。時次第で、休方歩行方があるは」張「何のこれしきの道に、道中師も火打石もいるものか、御大相ナ」和次「ヘンそんな奴が晩方には、人さきへ青くなるものだ」矢場「そりやァいゝが、まだ草履ではいけねへから、草鞋とせずばなるめへ。この天氣では、後には麻裏でいゝ」和次「さう〳〵。ヲイ土場公、むかふの内に草鞋が見えるが、よささうなのを見てくだッし。此目きゝは此方少しもわからねへ」土場「ヘンたま〳〵雪踏をはくと、けつまづく癖に、おめへ毎日履きつけたやうなのを見て來ねへナ」和次「いめへ

でわたしは連判にはぶかれた、日帰りもいゝが、乗ッこなしで叶はねへ〳〵」張「ヤこりやアいゝ思付だ、おもしろい〳〵。愚慢さんはどうで御座いやす」愚「わたしやアモウ足と押とは大ちがひ、遠足と來ては少しも出來やせん。この一件ばかりはお斷だ」張「エヽ引残念な事だねへ」矢場「むやみにお出でなさいナ」樂「イヤ不斷の洒落と違つて、腕づくと足づく計りは、無理はきかねへテ。勿論御免をかうむつて乗もしやうが、皆が歩行くに、駕を取巻れて行くのも、名倉へでも行くやうで、どつともしないものだテ」和次「成程それもさうさ子。しかし此顔で揃つて行つたら、さぞいゝ保養だらう」ト、口にはいへど、實は愚慢をはぶきたく、内々隠居に目まぜに知らせる故、隠居もさるもののみこんで、樂「それに愚慢さんの合羽や著付が、此儘すぐに出かけるといふ事にもいくめへから、一先拙宅までも引取つて、ちやんと淸めて、元の色事師とせずばなるめへ」愚「左樣〳〵。今時分宿まで歸つて、出なほすといふもおつくうなり、どうも残念ながら、參られやすめへ」楊次「左樣サ。一體ゆうべから呑明して、そのまゝ風斗罷り出るといふが、能樂人の專一とする所だから、出なほすといふ譯ぢやア、をかしくねへ子」和次「皆はどうだ」茶見「どうぞ行きてへ子」張「わたしやア厄年なり、全體このころに催さうと思つて居た所だ」愚「何サ〳〵、わたしらに構はず出かけるサ〳〵」樂「左樣〳〵。とても日歸なぞといふ荒事は、澤村の家にはない藝だ。ノウ愚慢さん、和事師はあした終日碁とし

滑稽和合人 三編巻之下

秋の夜の長しといへど、月にうかるゝ風雅人、口を夜につなぐ能樂者、遊人には明安く、鷄と烏に心づき、張亘「チヤ〳〵モウ夜が明けるぜ」茶見「アヽ引なるほど秋の夜はどうだ長いか短いか」茶見「エアヽ丁度いゝかげんだ」楊次「口のへらねへ、あぶなく短かさうだから、氣を付けたのだ。チヤ〳〵外はあかるくなつた樣だぜ」ト、口をあけて見て、「イヤ上天氣〳〵々々。結構な月夜になつたぜ」矢場「それぢやア、今のは浮れ烏だらう」樂「なんにしても夜明に間はあるめエ。アヽ隨分達者に呑んだチ」和次「時に少しむほんの氣が差起つたが、一味する氣はなしか」土場「チツト承知だ、むほん大好物、すぐに血判だ」矢場「コウ乘ツ早イ奴アねへ。ハヽヽ、」和次「どうも樂右衛門さんは、とても連判にはのれない事だが、愚慢さんもどうだらうか」ト、隱居へ目くばせなして、樂「ハテナ餘程の大望かチ」和次「何、さしたる事でもねへが、今ツからモウ寐るもくやしく、又この人足が、朝六ツ前に斯うそろつて日の明く事は、まづ元祿以來ない事だから、これから思付で大師河原日歸り、すこしも乘ツこなしといふ、思付はどうだらう、足だめしに」樂「ハヽア道理

奇妙、名燗だ。サア誰ぞにやアろ」悬「おいらにくウンな」土場「ヤツて御覧じろ、誠に名燗だ。これであたまが少し役にたつて來た、妙なもんだ」茶見「ナゼ〳〵」土場「名燗成就片鬢毛ねへだ」みな〳〵「アハヽヽヽヽ、アヽ悪い〳〵」トいづれも心とけ合うて、是より例のこじつけ地口の、わたりぜりふを肴にて、長き夜すがら呑み明しぬ。

所へお出でなさつた。是もまづかるい災難だ」和次「斯う計では譯はわかりません、マア〱手足でも洗つて、わたしが浴衣でも着替へなさるがいゝ。土場公も矢場公も、内へはいらッし」兩人「アイ」ト計りにて、いつものおしやべりも、思ひもよらぬ不時のさわぎに、差當る挨拶もなく、途方にくれてだんまりなり。是より皆々内へ入り、それ〴〵に介抱し、三人ともに浴衣を着かへ、まづ例の酒となり、一同に口をそろへ、宵よりトン〱の始末をくはしく噺し、引糸の仕掛、ヅウフラなど、樂屋道具まで見せければ、愚慢もやう〱納得し、愚「扨さう承ればまことに間違だらけ、矢場さん土場さんへ對しては、甚だお氣の毒だが、實に其時は氣が遠くなつて、此儘ずッと行きつくかと思ひやした。しかしお互に怪我がなくッて仕合だ。ネエ土場さん」土場「左樣サ、お前さんは怪我がなくッて仕合だが、けがなくッて困るのはわたしだ」和次「馬鹿〱しい、怪我がなくッて困る奴が有るものか」土場「さう言ひなさんな、おいらは是見なせへ、片ツ小鬢毛がねへでこまる」和次「ドレ〱、こいつァ大笑だ。なるほど餘程うすくなつた。ハヽァ毛がねへといふ地口か。ハヽヽヽヽ」愚「ヲヤ〱ほんに、これはお氣の毒な。わたしも其時は夢中だから、勘忍しなせへ」和次「何サ〱、此二人の身替を、おめへさんが勸めたから、此位の罰は當りまいだ」土場「さう事がわかれば一盃めしあがらう」ト手酌で一ぱいグイと呑み、「アヽ奇妙

る洒落もほどがある」ト立上りさま突飛す。不意をうたれて土場六は、眞あふのけに突倒され、是も同じく泥まぶれ、何かは知らず起上らんとする所へ、愚慢ははやくも飛びつきて、愚「何の意趣があつて此樣に、ひどい目にあはせるのだ」ト泣聲になつてしかみつく。此騷に矢場七も、欠つけ見れば愚慢故、どうして爰にと思ひしが、まづさし當り兩人を引分けんと、矢場「ヲヤ愚慢さん、マア爰をはなしなせへ」トいへば、猶々せきあがり、愚「なんだ、放せもすさまじい。ム、大勢しくんで此始末だナ。そう〱いじめられて居るものか」ト、日頃の遺恨も思ひ出し、無念の涙一時に、狂氣のごとく兩人の、片小鬢づつ鷲づかみ、金剛力にて引倒し、兩人もせんかたなく、同じく愚慢を引倒し、組んづほぐれつ泥仕合、茶見藏楊次も呆れはて、愚慢が擬勢に氣おくれし、出かねて其儘小隱れて、心ならずもひかへ居る。内には皆々おどろきつゝ、一同に欠出し、漸三人を引分け、和次「マア〱愚慢さん、お腹立は尤至極だが、是には段々わけの有る事で、全くお前さんにいたづらをした譯では決してござりやせん。マア〱何にしろ此體では咄も出來やせん、内へ這入つてくはしくお咄申しやせう。勇の言草のやうだが、まことの間違でございやす。チヘ樂右衞門さん」樂「左樣々々、すでにさつきお前のやうな目に逢ひやした。ハヽヽヽ」楊次「ねらいが外れては、それ矢がとんだ門違ひへ立つ晩だ」張「ほんにわるい

エ小雨だァ、濡れろ〳〵」和次「チイ茶見公は、掃除口のくひ違ひの垣の間へ手桶を置いて、急かずによくねらひつめて、首を見當に突つかけるがいゝぜ。そこで目のくらんだ所へ、火をハット吹出せば、花火とはいふまい。ハヽヽヽ。チイ二人ながら落付いてやらッし、急くととんまをやるぜ」茶見「どうして〳〵、親の敵より大切だ。ヘンうまくやつて見せやう」トそれ〳〵に手くばりして、殘りの人は内にいり、雨戸をしめてひつそりとひそみかへつて音もなし。斯くとも知らずうか〳〵と、何心なく來かゝる人は、二編に聞いた風流人、地内をまはるはけついで、能樂仲間の頭取にて、いつも賑はう快遊亭、寂寞として人音なければ、例の留守にや音信見んと、考へながらの抜足を、待ちまうけたるくらまぎれ、例のそこつになりかたちも、見とめもやらず人かげを、當の敵ござんなれと、力まかせに水鐵砲、突出す途端に楊次郎、時分は爰ぞと火をうつせば、一度にハット吹出し、愚慢が裾へまつはれば、ワア引ト一聲そのまゝに、氣も魂もつり上り、ペッたりこけて目をまぢ〳〵、グッともスウとも聲も出ず、そら腰ぬけてどろまぶれ。それとも知らず土場六矢場七、引けども〳〵手ごたへなければ、仕掛の工合をなほさんと、そろり〳〵と忍び來る。愚慢はしばし茫然たりしが、漸々少し人心つき、あたりを見ればさし足抜足、息をころして忍びよる、土場六を見るよりも、扨はいつものわるいたづらも、あまり手ひどき仕方ぞと、くわつとせきあげ、愚慢「コレわ

妙だ」和次「ム、いゝ事がある。そろ〳〵樣子を見に來た所を、袖垣の蔭から水鐵砲でぶつかぶせるがいゝ。そしてまだいゝ事がある、此間庭へ出て呑んだ時、蚊いぶしにした花火が殘つて有つた筈だ、その火鉢の下の引出を見てくんな、六七本あるだらう」楊次「チット有つた〳〵」和次「それを植込と石燈籠の蔭から、ハット欠出させるがいゝ。火水で責めてくれう」茶見「それだ〳〵、こいつァ出拔だから、驚くにちげへねへ」張「そして石燈籠へ紙を張つて目鼻を書いて、此樂右衛門さんのめりやすをしんに入れて、兩方へ付けて置かうか」和次「イヤ〳〵あんまり細工過ぎると却つて驚くめへ。そして手間どつては居られねへ」茶見「ちげへねへ、面をねらッて水鐵砲を突懸けて、足元からハット火が付いたら、だしぬけだから驚くにちげへねへ。それで澤山だ。サァ〳〵早く手くばりをしやう」ト、皆々惣がかりにて支度とゝのひ、茶見「サアおれが水鐵砲をつとめやう」楊次「おれが花火だ〳〵」和次「ヲイ花火はいゝが、如才もありさうだが、茅の方を向へむけて、火入へ入れゝば向へかけ出すぜ。茅の方をつかめへて居ては、たゞ火をふき出す計で、先へ欠出さねへではをかしくねへぜ。そして一本二本づつ火が付てはいけねへから、火入へ火を澤山入て置て、一所に火入へ入さへすればいゝぜ。鹽梅ものだヨ」楊次「チット承知々々。石燈籠のかげへ火入を置て、向ふの植込の中へしのばふ。傘はさせめへノ」和次「どうして〳〵、少しでも形は見せられねへ」楊次「エ

ありやすめへか」茶兒「モシ隱居さん、實は今までおめへさんを狸だと思ひきつて居りやしたが」樂「ハヽア道理でおまへ方の調子が、いつものやうではないと思ひましたヨ。出拔にぶちのめされないで仕合、唐がらしいぶしぐらるは、安いものだ。ハヽヽヽ」和次「イヤほんに危い事でござりました。思へばく忌々しい奴等だ、どうしてくりやう」トヽ此うち以前の通りしきりに、トンく。「和次郎さまやく」張「エヽいけ騒々しい畜生めらだ。手桶に水を一ぱい持つて行つて、だしぬけにぶッかぶせやうか」楊次「ヘン犬がトンくとしたやうだ」和次「イヤく手桶をさげてそばへ行けば是非氣がつく、だしぬけにはいかねへく」茶兒「そんなら長竿でひッぱたかう」和次「あんまり手ひどい事をして、怪我でもさせては惡い」張「何々、ちつと位は怪我をさせてもいゝ。あんまりくやしい」樂「ハヽヽヽ是は尤だ。しかし斯たゝかれてはたまらない。何にしろアノ竹の先の茄子を拔いて來なせへ。騒々しくてならねへ。しかし竹は其まゝ立つて置きなせへ。やつぱりトンく叩くと思つて、しきりに糸を引いて居るうちがべらぼうでいゝ」楊次「成程それがいゝく。いくら引いてもたあいがないから、爰へ工合を直しに來るだらう、所を待伏をして、ぶつ〆るがいゝよ」張「それがいゝく。仕掛をすつぱりして置いて、あいつらを取寄せて、おびやかすが

で物をいふのだ。そこで戸のそばに聞へても、實は遠くで呼ぶのだから、すぐに明けても形は見えねへ筈だ」ト、考へて手燭をつけて、そつと戸をあけ表へいで、庭中を見まはり、かのトン／＼を見つけ小聲にて、樂「ヲイ／＼和次さん、茶見さん、皆がちよつと來て御覧じろ」「ハイ」ト、いへどそこ氣味わるく、手間どる内和次郎ばかりそつとのぞけば、隱居はかの仕かけを手燭にて見せ、樂「ソレ是でトン／＼、そりや糸がこの通り、アレ向ふの日あはいに引込んで」ト、いはれてやう／＼心づき、和次「ヲイ／＼皆がそつと來て、狸の正體を見さつし。ヱヽ引いま／＼しいいたづらをしやアがる、どいつだらう」ト、いはれて皆々こは／＼のぞき見て、茶見「ハヽアそれが、トン／＼か」楊次「イヤ業腹な。マアどいつだらう」樂「ハヽヽヽそれで狸の正體矢場七先生に相違なし」和次「成程、こんないたづらをする奴は矢場か土場にかぎる」樂「イヤまだたしかな證據は、さつき矢場さんが、私等がうちへ、ヅウフラを借りに來やしたから、何にするかと思つたら、扨はこの茶番だ。ハヽヽヽ」和次「イヤ驚かしやアがつた、忌々しい奴等だ。どうしてくりやう」茶見「前長屋に居るだらうから、ひツつかめへて來て、ひどい目に合せてやらうぢやアねへか」張「さうよ、あんまりくやしい。サア楊公あゆばつし」和次「イヤ／＼ひツつかめへて、こゞとを云つてもをかしくねへ。ハテナどうかして遣りてへもんだ」樂「ハヽヽヽ是は大わらひだ。成程矢場さん計じやアあるめへ、向の先生が合棒だらう。しかし此降るのに久しい間、外に糸を引いて居るも大儀な役だ。ハヽヽヽ」和次「うぬらが勝手だか

し見れば、次の間より臺所はまつくらにいぶりて、顔もむけられず。楊次「ヤア〱たまらねへ〱。ヲヽせつねへ〱。ヲヤ〱へツついの下でどんと燃えて居るは。たまらねへ〱」茶見藏はあとよりおひ行き、茶見「ヲイ〱楊公、もうすこし眞棒さつし、今に正體をあらはすにちげへねへ。どうせこつちも少しは苦まねへぢやァならねへ」楊次「なんだ足下がくべたのか。ヘックショ。何にしろ是ぢやァ苦しくッてたちきれねへ」和次郎聞きつけて、和次「なんだ、茶見公がくべたのか。イヤ馬鹿々々しい。外の狸を内でいぶしたとつて、何になるものか」茶見「ヘン外なものか、内に居るからいぶすのよ」和次「なんだ内にゐる。ドレどこに」茶見「ソレおめへの直そばにヨ」和次「ヱヽ引」ト、ふるへあがり立つてきよろ〱見まはし、「どこに〱」隱居も同じくぶきみ故、和次郎と一所に立つて見まはし、隱「茶見さん、どこに〱」茶見「ヘンいけしやァ〱と、どこにもねへもんだ」ト、取りしめもなきごたつきのうちも外にては兩人思ふまゝに驚かせ、はては何やらすさまじき音ひゞきしてわや〱いふ聲を聞けば、誰やらよせん來つて混雜するやうす故、いよ〱ゑつぼに入り、暫くやめて居たりしが、雨戸をしめて内へいり、よほど程へしゆゑまたそろ〱と始める。「和次郎さんや〱」トン〱〱〱。ト、いんきよもびつくり驚き、「ヱヽ引をかしな聲だ。びつくりした」和次「又うせ居つた。樂右衞門さん、さつきから此通りサ。そこであんまり腹がたつから、トン〱叩く、すぐにぐわらりと明けて、正體を見あらはさうと、手ぐすね引いてゐた所へ、折惡しくお前さんがお出なさつたから、そこで出しぬけに戸を明けました譯さ」ト、話のうちにもひつきりなく、「和次郎さまや〱」トン〱〱〱。此聲を樂右衞門は聞きすまして、樂「ハヽァ狸の正體が、たいていわかり〱。アノ聲は、ヅウフラ

が、先一盃」ト、隠居へさす。樂「左様ならまづいたゞけ。ア、いゝおかんだ」トのみ、ぐつ「サア楊さん一ツ」楊次「ハイ」ト、不氣味に猪口をとり、かつちりやつて呑むまねをして和次郎へさす。和次「なんだ楊公、なぜ呑まねへのだ」楊次「どうも今夜は、なぜか酒の落付が悪い」和次「なんの、今まで湯のみでグイ〳〵ひつかけて。イヤしかし隠居さん、今夜は皆が調子が狂ふ譯が有りやす、お前さんをおどろかしたもその譯サ」ト、宵よりトン〳〵の話を小聲にてはなす。此うち茶見蔵も座敷へきたる。和次「トいふ譯だが、なんでも狐狸のわざだらうネ」樂「さればサ」ト、いひかけて隠居へんな顔色をして。樂「ハアクショ〳〵」又楊次郎も、楊次「ハアクショ、ア、何だかをかしな臭、ハアクショ〳〵」ト、是につゞいて和次郎も茶見蔵も惣一座のこらずくしやみにて話とぎれる。和次「イヤ是はたまらぬ、何の臭だらうネ」張「なんだか内中がいぶるやうだぜ」和次「さうよ。ハアクショ。これ〳〵火鉢へ何かくばつて居る、チヽいぶるは〳〵。ハアクショ〳〵」ト、火箸にてはさみあげて見て、樂「ヤア〳〵、道理でくるしいと思つた。ハアクショ〳〵。どうしてまた、ハアクショ。唐がらしが」茶見「ヘンちつとせつなからう。ヘツクショ」和次「何だせつなからう、コレ茶見公足下がくべたのか」茶見「なに私でもねへが、人間には神がついて居るから神のわざだ。ヘン畜生の分際で人間にむかつて」和次「なんだか氣狂じみた事をいふぜ。マア何にしろその唐がらしをはさみ出して、流へ行つて、水をぶつかけるがいゝ。アアたまらねへ〳〵。ハクショ〳〵。楊公〳〵、はやく〳〵」ト、あせるゆへ、楊次郎は火鉢の中をさがし土瓶休の瓦へ唐がらしの火のついたるを乗せ、臺所へ持出

は澤山でも、隱居さんに一つあげるはナ」張「ヲイ承知々々」又小聲にて楊次「お肴は油揚がよからう」楊次「ヘン狐ぢやアあるめへし」張「さうさノ、きやつは何が好きだらう」茶見「さればサ、狐にあぶらげだから、狸には蒟蒻か」張「なるほどそんなもんだらう。そして狸のこんにやくといふと、地口都合もいゝ」和次「これサ、何をてん〴〵にぐづ〴〵云つて居るのだ、爰へ來さつしな。わからねへ人足だナア」茶「ヘンこつちはわかりきつてゐるから油斷しねへのだア」張「さうよ。和次さんはモウすつぱり氣をうばはれて仕廻つた」楊次「こまつたもんだ。マアどうしやう」和次「ヲイ〳〵、まづ爰へ來さつしといふに、ナゼさうだなア。ハヽア聞えた、隱居さん、おまへさんを餘りおどろかせ申したから、氣の毒がつて、ハヽヽヽ」與「何サ〳〵、それでは惡い、わたしもおつな出合がしらへ來かゝつたと見える。イヤしかし何か催でも有つた所かヱ」和次「イヤわけは大ありサ。是サみんなが爰へ來て、宵からの手つゞきを咄さつしナ」茶見「どうもならねへ、やつぱり隱居さんの氣でゐるはサ。あいつが僞たわざをばか〳〵しく、あすこではなされるものか。氣のきかねへ」茶見「さうよ。しかしこゝに計り居ては果しがねへ、かまう事はねへあすこへ行かつし。おれは少し用意をして今に行くから」張「ムヽ行くべヱ。楊公、和次さんのそばへ坐らツし」ト、やう〳〵兩人は座敷へ來る。和次「モシお肴はこの通りたべあらし、本より何もございやせん

だしつぽの先が見えるぜ」和次「何だと尻ッぽが見える、何のしつぽが」張「何たゞの人に見えるものか。ヘンづぶだ、餘程こうしやだ。ナア楊公」楊次「さうよ、早いから妙だ」和次「何だナ此てゐゐは、變な事計いふぜ。マア皆が爰へ來て手つだつて、洗つてあげさつしな」楊次「ナンノ洗ふより、いつもの通りなめてとればいゝ」張「ヘンちげへねへ。洗ふよりなめろだ」（などと皆々いたつて不興の挨拶ゆゑ、和次郎は一圓わからず、一トしほ氣の毒いやまし、介抱する。三人はひそ〳〵ばなし、）楊次「和次さんはよく側に居るノウ。手をつかめへたり、着物をしぼつたり。どうも氣丈だ、しつかりしたもんだ」茶見「それは知らぬが佛だ。知つて見ねへ、アノ臆病ッたかりが、どうして手をつけえるものか。ヘン着物の氣でしぼるが、みんな尻ッぽや毛だぜ」張「なるほどさうだらうノウ。着物をぐいと引摑んで、毛をひッこぬけばいゝ。アノ合羽は何だらう」茶見「あした見ねへ、きつと酒菰か、糸だてだァ」楊次「ムヽさうだらう。何にしても和次さんに、そつと知らせてへもんだ」茶見「おれもさつきからさう思ふが、ちつとも側を離れねへからしかたがねへ」（トいふをり樂右衛門はやう〳〵泥をおとし、手水などつかひ、）和次「モシ〳〵こつちへお出なせエ。ヤレヤレ大騒であつた。しかしマア〳〵お怪我がなくつて重疊だ」樂「アイ〳〵、大きに御厄介になりました」（ト、座敷へくれば、三人はついと立つて臺所の出口まで行き、一同たつて見とれてゐる。）和次「是サ此てゐゝは何だらう、をかしなしうちぶりをするぜ。どうしたのだ。張公お燗でも直してくだッしな」張「ア、酒もモウ澤山だ」和次「そつち

が、先この通り泥だらけだ。水をすこしおくんなせヱ」和次「ハイ〱。ヲイ茶見公流しへ行つて、水をもつて來てくだつし。マア〱爰へ腰をおかけなせへ、そして合羽をとりやせう。是は此まゝ衣紋竹へ懸けておいて、干してからもむ事だ」樂「それもいゝが、是はマアどういふ場所へ來かゝつた理屈だネ」和次「イヤこれにはちつとわけのある事で、マア〱跡でおはなし申しやせう」ト、しきりに氣の毒のおもひ入れ。茶見藏は手をけを取りにいきながら、楊次郎が袖をひき目くばせすれば、楊次郎は臺所へいつしよに行きて、茶見「何と畜生め、早くやるぢやアねへか」楊次「それだが年寄だけ氣の毒だノウ」茶見「何が氣の毒だ。これ、あれを隱居さんだと思ふか」楊次「ナゼ〱」茶見「狸だヨ」楊次「ヱ、」ト、ふるえ上り、「化けたのかへ」茶見「早く化けるぢやアねへか」楊次「おめへ化けた所を見たか」茶見「そこを見せるやうな事をするものか。是は古いやつだぜ」ト、さゝやき手間どるゆゑ座敷にて、和次「ヲイ茶見公どうしたのだ、水をはやく持つて來ねへか」茶見「ヲイ〱今々。コレ楊公其氣でしつかりとして居なヨ」楊次「合點だ〱。畜生めどうしてくりやう。ヲイ〱、和次さんにも張キにも呑込ませて置くがいゝぜ」茶見「承知だ〱」ト、手桶をさげて座敷をとほり縁側へ持來り、茶見「サア水々」和次「ヲイ來た〱。サア鉢前へ手をお出しなせへ、水をかけてあげませう」ト、介抱するうち、茶見藏は張吉が袖を引き、茶見「ヲイ楊公がなにか咄があると言つたツけ、一寸臺所へ行つて見な」張「ヲイ何だ知らん」ト、これも氣の毒におもひ、手持なき折なれば、さいはひ臺所へ行けば、楊次郎が耳うちにて大に驚きふるへあがりぶる〱しながらりきみかへつて座敷へかへる。張「ヘンうしろからま

をあらはして、立つて居たといふ咄が有るぜ。それだから魔のものでも、不意をくらッてはたまらねへから、其あんべヱに、呼ぶ、たよく、ぐわらりと明けたら、正體をあらはすだらう」張吉「ム、よからう〳〵。四人だから氣が丈夫だナァ」楊次「幾人居たとつて魔の物にはかなうめへ」和次「そこがだしぬけだから氣づけへねへ。なんの根が畜生だハナ」張吉「ム、やッつけべヱ〳〵。マァてん〴〵に大きいもので、一二盃づつやんナ。此茶碗はいよかく〳〵。ヱ、うるさく叩きやァがるナァ」茶「チイ〳〵だんまり〳〵、靜に〳〵」ト、是よりてん〴〵に湯呑にてひつかけ〳〵、酒を力にそろ〳〵障子をあけ、椽端へ出て、入口の通ひ戸へ和次郎は手をかけ、一同無言にて互に目顔に仕形して、息をころしてゐる。楊次郎は何か驚きし聲にて、楊次「ヱ、何だ、しゆろ箒か。ア、引ゑりッ首がむづ〳〵といつたから、びつくりした。何をするのだ、こんな時節に洒落はわりい」茶見「何サ洒落所ぢやアねへ。今ぐわらりと明けるは、ハイ狸でござりますとぬかす所を、すぐに是で突倒す積りだ」和次「ム、よし〳〵。だんまり〳〵」ト、皆々いきを殺してひそみかへつて待つとも知らず、場六がむかふの隱居樂右衛門、何ごころなく入り來り、土「さて雨中のお見舞」ト、戸へ手をかけると、待ちまうけたる和次郎は一しやうけんめい力を入れてぐわらりと明けながら、四人一どに、「だれだヱ」ト、大音にいへば、思ひかけざる樂右衛門は、「ワア　引」ト、驚き飛びあがり、下駄をふみかへし背ぬぎをふみはづしこけるはづみに、傘を雨戸へ打ちつけ、すさまじき音にて倒れしが、おきあがらんとする頭の上へ、しゆろばうきをによいと突きだせば、又びつくり尻もちをつき、雙方あきれて無言なりしが、稍あつて起上り、樂「イヤ和次さん、これはマァどうした事だネ」と、いはれてこちらもやう〳〵心づき、和次「ヲヤ樂右衛門さんかへ、ヤレ〳〵御あぶない。どこぞ痛みましたらう。マァ〳〵」樂「ハイ〳〵、イヤ格別どこもぶちは致しませぬ

かぶじやれをするのかと思つたが、外へ迯出す間もなし、足音もしねへのは、どうも不思議だ」和次「さうよ。すべて魔物の呼ぶ時、誰だといつてもその答は出來ねへといふ事だが」楊次「さうサ。成程呼ぶ計だ」張吉「マアちつと靜にして居て見な」トン〳〵。「和次さまや〳〵」茶見「和次さまやとはすかねへ呼びやうだノウ。そしてどうも異變な聲がらだ。人間の音でねへやうだ」茶見「さうサ、しツこしがなくて、いやに腹へひゞく聲だノウ」トン〳〵〳〵。「和次郎さんや〳〵」和次「誰だエ。いめへましい」トン〳〵〳〵。「和次郎さまや〳〵」楊次「それだからこんなうそ淋しい晩には、あやしい噺はしなさんなと言つたのだ。陰氣に凝つてくると、是非魔がさすもんだ」茶見「さうサ。おれもさう思つたけれど、張公がかまはねへ〳〵と云つて、とう〳〵魔をさゝせたのだ」ト、いづれも小聲にてくだらぬ押しあひのうち始終、トン〳〵〳〵。「和次郎さまや〳〵」ト呼べども、もはや返詞もせず、一所に顔を寄せてひそ〳〵さゝやく計り也。張吉「おれも斯うすぐに魔もさすめへと思つたからツイ」和次「ヲイヲイ、考へて見ればたかが狐か狸のわざだから、格別おそろしい事もあるめへ。大の男が四人揃つて居て、びく〳〵する事はねへ。ソレ斯ういふ咄があるぜ、此樣に毎晩〳〵戸をたゝくから、或晩に、たゝく時分、内から戸へ手をかけて待つてゐると、例の通りトン〳〵たゝく、直にぐわらりと開けて、誰だといふと、外でびツくり泡をくらつて、ヘエ狸でござりますと、正體

張吉「何だと、いやァはやとは何の事だ」茶見「なんでもいゝ、あとでわかるからだまつて聞きねへ、

いやァはや思ひがけないとびつくり一ツ目ならで幽靈下がねへ

和次「アハヽヽヽ。いやァはやとは苦しい〳〵」茶見「それでもびッくり驚いて、あきれた氣色が、初五文字にこもつて居るから妙だ」雨戸を、トいふ折 トン〳〵。「和次郎さん〳〵」和次「エヽ本たうにびッくりした」楊次「おれもよ。だれだか聞きなれねへ聲だが。ハイどなたエ」又トントン〳〵〳〵。「和次郎さんや、和次郎さんや」茶見「アヽ否な聲だ。どなただかおはへんなさい」又トン〳〵〳〵〳〵。「和次郎さんや〳〵」茶見「エヽ氣障な聲だ」ト、立つて障子をあけ、椽がはへ出て戸をあけて、「ハイどなた、チヤだれも居ねへ」和次「居ねへか」茶見「さうヨ。こいつアをかしい」和次「ナニをかしくねへ、やんちきだ」張吉「マアメてこつちへ來さつし」茶見「チイ」ト、戸を〆てうちへはいる。トン〳〵〳〵。「和次郎さんや〳〵〳〵」和次「エヽ古風な洒落だ。あけて這入なせへ。面白くもねへ」小聲にて。張吉「マアそうッと椽がはへ出て、戸のそばで聞いて見ねへ」楊次「チイ」ト、立つて椽側へ出る。トン〳〵〳〵。「和次さんや〳〵」張吉「明けて見さつし」楊次「だれぞ來ねへナ、二人で見やう」張吉「何だナ、氣のよわい。構ふ事はねへ、ぐつと明けさつし」ト、立つてぐわらりとあけて見ても、人かげもなし。庭中をよく〳〵見まはしても人氣なければ、いよ〳〵不氣味になり、張吉「和次さん、誰

滑稽和合人 三編巻之中

扨も彼四人の臆病者は、酒氣に乘じて怪談地口の云がかりをまとめんと、和次「サア〳〵張公とおれはすんだから、楊公も茶見的も、是非一地口づつやらッし、場行がわりい」楊次「ム丶承知だ承知だ。サア〳〵出來た、執筆をたのむ〳〵」張吉「チイ何と〳〵」楊次「エ丶、

なりひさご夜目遠目とてろく〳〵に見定めもやらず見こし入道

は、どうだ〳〵」和次「ハテろく〳〵に見定めぬといふ事だナ、三句目で地ぐつたのはめづらしい〳〵」楊次「そして見とめもせずに先を見こしたといふ意がこもつて」和次「イ丶サ〳〵訓讀にはおよばねへ、わかつて居るヨ〳〵。サア茶見公どうだ、こじつかねへか。ヘン先達の日見の愚慢がやうだぜ」張吉「さうヨ、日見愚慢せずと、さつくりとやらつしナ」茶見「ア丶やかましい。其地口も其節半分は濟んだ〳〵。マアもうちつとだまつて居てくんな、もう少しでまとまる所だ。おいらのは百人首の丸地ぐりだから、ちとおつくうだテ。燒芋でも丸はちと煙つてへのだ」張吉「燒芋で煙ッてへとは、隨分句が付いてるろノ」茶見「〆た〳〵。先斯うだ、いやアはやサ」

「なるほどつむじのつん屈つた人足だぞ。てんぐ〳〵に臆病ッたかりのくせに、こんな晩にはよせばいゝに」楊次「さうヨ、怪談ばなしは、手もなく百物語をするやうなものだノ」張吉「なんのそんなけちな事をいふ事はねへ、何もなぐさみだ、やつつけべヱ〳〵。先斯うだ、

いつとても雨に替りはなけれども秋雨わかきゆゑにこはがる

は、どうだ」和次「アハヽヽヽ、あきらめわるきといふ事か、ハヽヽヽ、あんまりこじ付けだ。そして、ゆゑにこはがるとはいやな句調だナア」トいふとき、天井にて例の鼠グワラグワラ〳〵〳〵ドン〳〵〳〵。楊次「ヱヽ、びつくりした。おそろしい鼠だのう」茶見「鼠ではあるめへ、大層な音だ。鼬か猫だらう」和次「何にしてもひどい響だ、おれもびつくりした。アヽうすッくらい明りだ、燈心を入れやう」楊次「いよ〳〵百物語めいて來た。何とモウ今夜は怪談預りとしやうぢやアねへか」張吉「なに〳〵思ひ立つた事だから、一地口づつやりッこ〳〵」ト言ひがかり故、口にはいへど、いづれも心はうそ淋しく、しきりに酒を呑みかはし、酒氣をちからに遊び居る。

サ」茶見「ム、おもしれへ〳〵。やつつけて見やう、出來さうだ」揚次「是が出來ねへやつがある
ものか。先サ、ちよいと遠足なんぞの時、口づいてさへ居ると、退屈しなくつていゝぜ」茶見「ち
げへねへ〳〵。早速仲間入だ。しかし今日のやうなしよぼ〳〵降る日なぞは陰氣でわりい、マ
ア酒にしやう。どうも秋の夕暮だ、うそ淋しくてならねへ。成ほど柳だの、そほ〳〵雨なんぞは、
どうも幽靈づきのいゝもんだノウ」張吉「陰氣だと言ひながら、いやな事計りいふぜ、おもしろ
くもねへ。サア〳〵一盃やらう、燗はどうだ」茶見「隨分あつい、やつて見な」張吉「ム、奇妙〳〵。
アヽ引いゝ心もちだ。是に乘じて一地口やつつけた。あすは又腹がだぶ〳〵いふならんサ、是
はかん妙法蓮げきやう、は、どうだ〳〵」和次「ム、わるくツても早いが賞翫だ、妙々。おれはま
た幽靈で一ツはべつた。エヽ、

　幽靈にあしき女のすくなきは死靈のぞみの物とこそ知る

サ」揚次「ム、いゝ〳〵。コウ呑みながらもうちつと地ぐらうぢやアねへか」張吉「ム、茶見公も
新加入の口びらきにやつつけさつしナ」茶見「よからうが、たゞでさへ陰氣な晩だから、考へご
とをしちやア、陰氣で酒になるめへぜ」張吉「何サ、よそ目にこそ陰氣に見えるが、樂と思へば
やつぱり面白い。何、とてもの事に、今夜の淋しいを景物に、怪談地口をやつつけべエ」茶見

に見とれてよんだ地口が、エヽ何ヨ。

半道はわけて景色も吉原や富士の正面十八丁ほど

サ、ソレ題にも季にもかまはず、浮んだ地口をこじつけるのよ」茶見「成程こいつァ利いた風でなくツて、此方連がいつても似合さうだナ。フウまだ外にも有るだらうノ」和次「有るどころかいくらも有るが、エヽ、

土窯のやうにつぶれし頼母子はおそれ入谷のけちむじんなり

茶見「ムヽいよ〳〵」和次「まづよそ事は置いて、今こゝでやつつけたのを聞せやう。歌はよむといふが、是はやつつけるといふ法だぜ」茶見「ヨシ〳〵、張公もやつつけたか」張吉「ヘン大人だア」和次「張公のは斯うヨ、

鳥の毛をよせて作りし采配は羽根がはたきといふべかりける

ヨ。楊公のが、

褒美とて年に二日の貰ひ湯は湯や奉公の恵なりける

茶見「ハヽヽヽ親孝行とはちつと受けにくい」和次「おれが名歌が、

きり〴〵す買ひしついでの物まうで虫にひかれて淺草寺かも

それはさて置き、まづ腹中の人玉がさびしがる、一盃氣をつけやう。チヤく燗ちろりがつめてへ。チヨツ先つめたくも一盃やつて、扨しかうして後に一風呂あツためやう。是サお前達はなんだ、安弔の帳つけのやうに、指のまたへ筆を挾んで、陰氣な顔色をして。どうりで燗のぬるくなつたも知らねへ、どうしたのだ。ハヽア何かいやらしくはべるか、すべるかするつもりだナ」和次「ムヽよくあてた。茶見公足下もちつとは風流がかつた事も心がけさつし、からッ口計りわる達者で、あんまり駄下主でならねへ」茶見「ヘン昔は歌の一句もすれば、色事のなかだちにもなり」和次「是サお詞の中だが、駄下主とはその事だ。歌に一句といふがあるものか、歌は一首サ。發句が一句といふものだ」茶「歌が一朱なら、發句は二ひや句でいゝわけだ。おらア又歌でも發句でも、考へて居る顔色を見ると、歌の顔發句の顔とわからねへで、みんな苦勞らしいから、そこで苦ときめて置くのよ。ヘン色事の中だちにでもなる事なら、詠むめへもんでもねへが、何にしろおらが商賣體には不用な品だ」和次「うんにやヨ、足下のいふのは和歌といふので、アヽ又馬鹿といふ地口が出さうだが、それは法度としてヨ、男女の中をどうかするといふが、それとはからりと譯が違ふのだ。たゞいつもいふ無陀ツ口を、字數を三十一字にいふ計り。まづちよつとした思付がかうだ、おらが心安い人が伊勢へ參つた時、吉原で富士の景色

惜しい地口だ。さてしんねつに降るぢやァねへか」和次「どうしたく、今日は出仕がおそかつたナ。へばり付いてござる顔世殿もなし、何をまごついて居たのだ」張吉「何サ、奥山中を呑み倒して歩いたのだらう。コレ今歳は鹽が高いから、無陀鹽をふらせねへやうにするがいゝ。かわいさうに」楊次「ちげへねへ。何が面白いか何をはなすのだか、火鉢を間へはさんで、まぢりまぢりと盗人猫が土龍をねらふやうに、氣を長々とはりつけるが、何はともあれ、見た目がこけこけとして、見ッともねへ。おれが異見だから、どうぞ止めさつし」茶見「ヘン人の一寸よりわが身の一尺だ。昨日なぞは奥の方で終日お見かけ申したが、餘りみつともよくもなかつたぜ」楊次「一尺昨日奥山でか、ヘンおいらなんぞは熟談のうへの女廻りをするのだから、こりやァどうも仕方がねへ、おれが顔を出さねへと、ふさいで外の客を麁末にするから、爰でよん所なく一ツぺん通りは顔を見せてやるのだ。おいらが行かねへと女がふさぐ、足下がゆくと見世を塞ぐといふもんだから、コレ天地の相違だ」茶見「イヽサく、尤もだヨく。まづ口のはたの泡をとりこまつし。アヽよくしやべるぞ」和次「成程是は、どつちへも團扇はあげられねへ、人の見ッともねへのを度々見るからは、我も度々行くからの事だ。おいらなぞは仕合に、其見苦しい體をたびく見ねへ」張吉「十五まで見ねへと、一生見ねへといふ事だ」茶見「ヘンとんだ人玉だ。

宜うな、奇妙々々。吹矢の筒の様なものだらう。いよ〳〵、なるほど人は見くびれねへものだ、一生に一二度は智恵の出る事もあると見える」矢場「エヽ憎まれ口計りきかずと、それで本讀がをさまつたら、はやく仕掛やうぢやアねへか。モウとうに五ツを打たぜ」土場「ハア十五か、まだ十五にはなるめへ」矢場「また何かわからねへ事をいひだしたぜ」土場「それでもとうに五ツを打てば、十五だらう」矢場「エヽいよ加減にしねへナ、悪ひつッこい」土場「ハヽヽヽさア〳〵取かゝらう〳〵。足下の思ひつきだから、ヅウフラとやらは借りて來さつし、其内トントンの仕掛をこしらへて置くから」矢場「チット呑みこんだ、一寸行て來るから、早く拵へて置きなよ」土場「ヲイ〳〵承知々々。相手さへねへと、仕事がはかがいく」（ト相談けつちやくして、矢場七は出てゆく。跡にて土場六はトントンの支度をする。）夫はさて置き、彼楊次郎張吉は、はや朝飯にて和次郎方へ集り、例の酒錢に秋雨の日も憂しとも覺えず、酒も飽まで事足りて、此頃人よりちよつと聞いたる、地口歌を例の早分點なま利の出たらめに字數を揃へ、終日はべりちらして遊び居る所へ、これも初編より御馴染の茶見藏は、奥山中の矢場茶見世などへめぐりて、止快遊亭へ心ざし、枝折戸あけてずつと這入れば、いつも替らぬ水魚の呑友、得たりやおうと押上らんとして、二番の飛石をふみはづし、茶見「ホイ是はしたり、ツイ二の字を二ケ所付けた。また足駄わるく言ふだらう。アヽ外でいふには

ぞ。わりい虫があるぜ」土場「ハアめんどうはどんな匂がする」矢場「ヱ、マア車力のちつと水くさいやうなあんばいで。ヱヽ引アヽ引モウじれツたくなつた。いゝ加減にごたつかうぢやアねへか。モウ〳〵七面倒な事をいひッこなしで、何と、とてもの事に、だまつてとん〳〵叩くより、名を呼んだら猶おどろくだらう」土場「それだとつて、戸を打きながら遠くで呼んでは變だらう」矢場「所がやつぱり戸のそばで呼ぶのよ」土場「ハアそれじやア縁の下にでもかくれて居てか」矢場「其くれへなら、戸も手で打く方がいゝはサ。そんな甘口な事ぢやアねへ」土場「甘口でなくば　からッ口計りか」矢場「何サ是も法が有るからヨ。傳授事だぜ」土場「ヘン大層を言ふヨ」矢場「大層でもなんでもサ、戸のそばで、ヲイ和次さん〳〵と呼ぶサ、ぐわらりと明けて見ると人が居ずサ、〆て這入る、また和次さん〳〵サ。それ足下にはわかるめへ、おれが傳授すれば直わかる。是則ち傳だらう、傳授とは則ちつたへうけると書くはサ」土場「ヘンきはどい所で敵討をいつて居らア。おれよりそつちが七面倒をいはア」矢場「ナニ七めんどうは、お前が先へいふから、おれは少しおそし堂だ」土場「アヽおもしろくもねへ事をごたつかずと、どうして呼ぶのだ、早くいはつせへナ。こじれつてへ」土場「ハヽヽヽそんならすぐに傳授をしやう。先達向ふの隱居の所で見た、ヅウフラとかいふものよ、唐で遠くの人を呼ぶ道具」土場「ヲット皆まで

差込んでおき、その麻糸を長く引いて、遠くでグイ〳〵と引くと、茄子どのが戸へトン〳〵と當る」矢場「法事では茄子も殿づけにされるの」土場「どうして呼捨にはされねへ。其音が丁度手で叩くやうだ。そこで戸を明ける、糸をゆるめる、〆て引込むと又糸を引く。ソレトン〳〵サ。是はおどろくだらうぜ」矢場「ムヽ、こいつアよからう、早く仕掛にかゝらう。まづ竹と茄子だナ入用は」土場「それも昨日垣根へ差竹をさせた殘りが有りサ。明日のお汁の實の茄子も有りサ」矢場「そりやア妙だ。しかしその仕掛なら、竹の巾や長さは、大體いゝかげんで宜さゝうなものだ、ナゼ其樣に寸法がむづかしいのだ」土場「さうだけれど、すべて諸道具類、また諸藝の道具でも、どうでもよからうと思ふ物に、きつと寸法の定が有るから、まして法ごとなぞは、寸法を定めねへと、信仰がうすいやうだから、今急にきめたのヨ。勿論その家の床の高さによつて、長くも短くもするが、そこは燒餅大變、見計ひでいゝのサ」矢場「ナニまた耳ざはりな事をいふが、燒餅なんだと」土場「燒餅大へんサ」矢場「そりやア何の事だ」土場「おれはどうも一寸した言葉にも規矩をたてていふから、たゞの人にはチト解しがたい事があるて。まづ軍學その外、きつとした事には、臨機應變といふけれど、たかで此方づれの慰事に用ひるには、燒餅大へんでいゝはサ。りんきおうへんは餘り大ぎやうだから」矢場「チヨツ、お前もめんどツくさい事ばかりいふ

ムちげへねへ。それではさし當ッてそつちに入用もなくば、一寸時借に借て置かうか」矢場「アヽ、まづゆるりと遣つて、いつでも都合のいゝ時返すがいゝ」土場「それはサ、先借るとして、今のトン〳〵はわかるめヱ。おれが傳を受ければ直にわかる、是則ち傳授だらうぢやァねへか。傳授とは則ちつたへうけると書くはサ」矢場「フン引」大相なおどし付け様だ。わづかのうちに則ちが二ッ出た。アヽ下手らしい卜者だ。へン傳授するから百匹出せか。いや〳〵トン〳〵打くばかり、あまりどつとも致さぬ、まづ見合せませう。トン〳〵戸を打き七色で四文だ。百匹は高イ〳〵」土場「だれが百匹出せといつた。七色で四文が言ひてへ故に、縁語に直段をいつたのだナ。扨々おつくうな地口だ」矢場「どうだらう、後世には殘るめへか」土場「へン夫もサ、後世へも殘さうならサ、トントン戸をぐわらりサ、びくりとこわいがヱヽ、ヱヽ引」矢場「殘暑の戸か」土場「アヽわりい〳〵。是は和睦せう〳〵」矢場「そりやァいゝとして、そのトン〳〵とはどうするのだ、七面倒な事をいはずに、早くいひねへナ。どうもお前の咄は、金魚の糞のやうに、馬鹿長く引ずるからじれつてへ」土場「ムヽ、サア〳〵咄さう〳〵。しかしちよつとお燈明をあげやう、咄が見えねへ」（ト、燈明行燈などつけ、）扨斯うだ。まづ青竹を巾八分五厘に割て、長サ三尺二寸一分に切り、後先を尖らせ、茄子の大きいやつを片々へしつかり差し、竹の眞中へ麻糸を結付ておき、それを先の戸口、片かけのくらい所へ

ねへ、むだッ口をたゝかつしやんな」矢場「おらア口はたゝきはしねへ」土場「へンおらア酔やアしねへといふ生酔と同類だナ。ほんにちつと無陀ッ口を控へさつし、工風をする邪摩にならア。イヤ口をたゝくで思ひついた、子供の時のいたづらを思出したが、アノ、トン〳〵はどうだらう」矢場「トン〳〵とは何だ」土場「斯うよ、表の戸をしきりにトン〳〵叩くから、ハイどなたと明けて見ると誰も居ずサ。内へはいつて戸を〆ると、又トン〳〵といく度か同じ事だから、是は狐か狸のしわざと思ふだらう」矢場「思ひもしやうが、さううまく體が隠されやうか」土場「へンそこがサ、傳授事だテ」矢場「ハヽヽヽ、戸をトン〳〵叩くに、傳授も品川もいるめへぢやアねへか」土場「たゝく計はわけはねへが、トン〳〵打くサ、明けて見るサ、人がいぬといふ法だから、随分不思議でねへ事もねへぜ。そりやア御無禮ながら、足下が一升の飯を一度に喰つて、一心不亂一所懸命になつて、一年考へても、傳授がなくッてわかる事ではねへ。それをおれが」矢場「ヲイヲイお詞の中だが、まだ一生の智恵をふるひといふ、おしい一字か殘つてゐるぜ」土場「そりやア一の字を盡すのなら、一ッ二ッぐらゐるか、百も二百もあるが」矢場「そんなら外には何といふ一が有る」土場「エ外にか、エヽ引一別以來、一騎當千、一筆啓上、一富士二鷹、アヽ引どうも噺の都合には合はねへナ」矢場「それ見ねへ、一生の智恵ぐらゐるな、都合の合ふのがあるものか」土場「ム

の兄貴は、寺島の何といふ百姓だ」矢場「ヘンお前もちつと世の中へ、氣を循環させねへ。あんまり無茶だ」土場「ナゼ〳〵」矢場「ナゼといつて、怪談の藝で寺島といへば、何といふ百姓だとは、あまりなさけねへ聞きやうだ。梅幸の事ヨ。エヽくやしい」土場「ナニ梅幸の事だと、それでも足下の兄だといふから、わからねへのだ」矢場「それは言葉の花といふもので、どういふ事か己が事を、他人の猿似とやらで、似てゐる〳〵と言はれるもんだから、ツイ兄貴々々といふ氣になるのだ」土場「アヽそれは至極わりい氣になつた、今のうち氣をとり直さねへと、瀧の川へでも連れていかにやアならねへ」矢場「さういふ譯なら、もうちつと燗をあつくしやう。コウ獨樂だの差だのと不足をいゝ〳〵、隨分相應に醉つたの」土場「さうよ、手前遣には隨分澤山な機嫌に成つた」矢場「コウ丁度いゝあんべヱに日が暮れるが、そうツと庭口から忍び込んで、石燈籠のかげから、燒酎火を焚いたらどうだらう」土場「さうさノ。しかし見付けたら驚くだらうが、雨は降るすどしいから、雨戸をしめて內で歌でも考へてゐると、見付けねへからつまらねへぜ」矢場「そんなら少し笛を氣どつて、ヒイウヽヽヽとやつて、うすドロを入れてはどうだらう。戸を明けて見るだらう」土場「馬鹿々々しい、芝居がかりでやつたとつて、何おどろくものか。そんな甘口でいかねへ」矢場「夫もさうサ、とかくおれが工夫は寺島風に」土場「エヽおもしろくも

にしやう。差で呑むのもやつぱり獨樂にはましぐらゐなものだノウ」土場「さうサ三人だと、ぐつと酒になるが、どうもさし酒ひやうばん、ホイついもらした。差では何か世話しねへやうだ」矢場「さうよ。なんと此勢に乘じて、快遊亭へ押掛けやうか」土場「ムヽよからう。誰かしら來て居るにちげへねへ。此頃はまた地口歌と名付けて、相馬內裡のお公家樣のやうに、しきりに考へてるやうすだ。何だが樂首へ地口はやり唄、あくたいおんあほきやでも何でも、出たらめにさらひ込んで、三十一字にこじ付けて、をかしがつて居る」矢場「さうよ〱。揚公も張キも、しきりに凝りきつて、おいらにも勸めるヨ」土場「ヘン和次さんめヱ、自ら淸貧王と號して點者ヨ、をかしいぢやアねへか。しかし淨瑠璃なんぞも、あんなのが近年きつい流行だ。交物をすぐり拔いて見ると、流儀の節はちいッと計りしかねへといふ世の中だから、ごもく歌もよからうヨ」矢場「そりやアいゝが、今から行つて交ッけへさうじやアねへか」土場「ム、待ちなヨ、たゞ行つて交ッけへすもあんまり智惠がねへ。なんぞお茶番をして行きてへもんだが」矢場「ムムまづ集つて居た所が、今いつた顏だらうが、しきりに秋雨とかなんとかいふ題で、考へてゐるから、此うそ淋しいしよぼ〱雨を道具に遣つて、臆病者をおびやかそうではねへか」矢場「待ちなよ、怪談ならおらが寺島の兄貴が家の藝だから、おれがなんぞ工風して見やう」土場「足下

みでやらッし」矢場「なんだからすみ、雲丹、濱名納豆か。ヘン妙なものばかり餌食にするのう、献残屋の鼠の樣だ」土場「おらアもう美食に熟んでゐるから、淡泊なものがどうもいゝ」矢場「ヘンあんまり淡泊がいゝ〳〵といつて、甘口に育てると、しじう親の首へ繩を付けるやうになるぜ」土場「何だわんぱくの積りか」矢場「何ぬけヨ」土場「何にしても惡い〳〵」矢場「そんなら一ツ重ねやう」土場「エヽ是サ、酌いでやるはナ。アヽ成程下主は〳〵だぞ、手酌で呑むといふがどこの國にあるものか」矢場「ヘンたツた今、こゝの國に有つたぢやアねへか」土場「そりやアどうも獨樂は仕方がねへはサ」矢場「ハア獨樂では手酌でやるから、地獄では呵責が有るのか」土場「コレあんまり地口も數物ばかり竝べつけると、見世付がわるくなるぜ。おらが樣に一ツ地ぐつても、後世に殘るやうなことを心がけて言はつし。アヽ耳うるせへ」矢場「ハアお前のは後世に殘るか、ハテ後世なもの。ホイ又出た、どうもむか〳〵と向つて來るととまらねへ。チヨツ酒でおし付けやう、一ツついで吳んナ」土場「これささつきから猪口を持切だ、ちつとこつちへも渡さつしな」矢場「ヲツトきた、サア渡さう。成程獨呑はいふにや及ぶだが、又差酒賞伴も、ヲイこいらは後世には殘るめへが、差酒はチト耳なれたれど、賞伴で地口がぐつと新しくなるぜ。噺の中だが」土場「噺も中だが地口も中だ」矢場「ハアまだ納まらねへかノ。そんならまづ噺の方

滑稽和合人 三編卷之上

秋來ぬと目にはさやかに見えねども、風の音にも盆節季にも、すこしもさわがぬ能樂仲間、母のへそくり親父のすね、かぢりて暮す氣樂者、頃しも秋の中旬過、雨しん〳〵と降る夕暮、いとゞわびしき獨身者、かの土場六が門口から、矢場七「どうだ〳〵、しきりに降るぢやアねへか」

トいひながら傘をすぼめると、ちりけもとへ雨だれがホッチリ、

「ヲヽ、つめてへ」

ト、首をちゞめてかけあがり、

「おや〳〵なんだ獨樂か。アヽ淋しい〳〵」

土場「さつきから誰ぞ來るか〳〵と思つて居ても、今日にかぎつて、どいつも機嫌きゝに出ねへから、和次さんのとこへでも行かうかと思つたが、あんまりじめ〳〵降るので、陰氣になつて、動くもいやになつたから、チト勢を付けやうと思つて、獨のみしづかとやる所ヨ。丁度いゝ、サア一ぱいやつて下ッし。まことに一人で呑んでは、百藥の長かと思ふやうだ」矢場「ちけへねへ。ドレたすけの爲に呑んではやらうが、今めかしき申事なれど、餘り何もねへノ。蠅帳になんぞ食べあらしはねへか」

ト、猪口を下に置きあけて見て、

蓋物は大層ならんでゐるが、是は何を入れるために置くのだ。是は蠅いらずではねへ、菜いらずか」土場「よくやかましい事をいふぞ。マア此からす

やうど丑のとし、くらがりの恥をおかるみへ、亦のろ〳〵と牽出すになん。

天保十二辛丑の孟夏　瀧亭鯉丈述

自序

僕先年綴りたる中本類、後編を引ずる事、金魚の屎もどかしからず、牛の小便をみぢかしとすれど、けつして屎ずきしの屎落付にあらず。いふもさらなる二本棒、三本足らぬ戯作者と、思へば猿が人眞似に、ひッかき散す恥かしさと、筆を置く事五六年、書肆もあきれて催促なし。時に不思議や當春は、文溪堂が年始の出たち、是はあきれが御禮かと、いへば全く左にあらず、近邊までのはけついで、一別以來まづよい春、扨和合人の後編をと、數度せがんでも埒明かず、うち捨ておけば方圖がなし、そつちは作が半しやうばいでも、こつちは書屋が鐘ばゐ、辨慶さへも叡山までと、引ずり廻るも程がある、まして貴樣の微力には、チトひき摺が長すぎやうと、無陀口交りの御催促、說付けられて思ふやう、むまれ付いたる童戯人、今噓利口を遣ひなば、蛙が立つて向が見えず、猫毘を剌つて鷄目となり、強き名ゐらむも仕舞には、やつぱり猫で置くがよいと、茶飲話が心の悟り、今年はち

ト、せがまれて泣出しさうな顔にて、愚「モシどういたしたか、しきりに腹痛がいたして」ト、顔色變じ、もだえる樣子、霍亂でもせしかと皆々少しおくれたる折ふし、夏日のならひ、出しぬけに、グワラ〳〵〳〵ゴロ〳〵〳〵ト、遠雷のひゞきに、六人ともだいの雷ぎらひゆゑ、一やうに顔色青菜にしを〳〵と、愚慢をくるしませし罪など思ひまはし、急に氣がおれて、楊次「愚慢さん、おあんばいが惡くば、モウ爰へお出なさい」愚「ヘイ左樣なら御免をこうむつて、降り出しませんうち、わたくしはお先へ」ト、いとまごひもそこ〳〵に、大汗ながしかへり行く。跡にみな〳〵顔見合せ、遠雷に肝をひしがれ、しばらくは興さめしが、さしてつよくもならぬ樣子に、また〳〵例の大酒となり、なつましくその日は呑くらしぬ。

なしサ」張吉「左様サ、場行がくづれては悪い。そして今までのやうな、ふざけたの計では詠草面がわりい。和歌でも詩でもようございます。どうぞお願ひ」愚「イヱサ今日はどういたしたか、其和歌も詩も、チト」茶見「和歌詩がわるくば、あやまる事はなりませんぜ」愚「それに頭痛がいたして」ト、しきりに汗をふき、足をつまだてまた片足づつあげ、つむりを押へ、汗は瀧のごとく、顔色は見る間に赤黒く變じ、眼ばかりぴか／＼してゐる。和次「モシ私もチトお相伴に、それへ参つて詠めませう」ト、物干へあがる。和次「是はなるほど座敷と違つて、吹さらして寒い／＼。アヽよく日がさえましたナ。しかし筑波の方から夕立雲をだいぶ上げますが、ゴロ／＼はチト恐れますナ。しかし、雲をり／＼人をたすける、日見の宴とやら、少々日に雲のかゝつたも、又一氣色でござります」愚「左様々々。雲でも雨傘でも、チト欲しうござります」和次「ハヽヽヽ、御尤で。ハヽヽヽ。ヘイ私は御免を蒙つてお先へこじつけませう。ヲイ三孝さん」三孝「ハイ／＼」和次「おのれから、飛んで日見いる夏虫の、こまり／＼て身をこがすらん」皆々どつと笑へど、愚慢は一向わからず、和次「ヘイ愚慢さんお先へ」ト下りる、もはやたまりかね、半死半生の體にて、愚「ヱヽ引日見の宴」矢場「そりや出ました／＼」和次「だまつてだまつて」三孝「ヘイ日見の宴」愚「ヱヽ引十五夜ではなく、ヱヽ引十五晝なりけり。ヘイまつこれで御免をこうむりやせう」土場「モシ／＼暫くそれに／＼。ぶし付ながら、まだ歌になりません。もう少しだく／＼。ヱヽ引日見の宴、十五夜ではなく十五晝、なりけり。それから跡は」

す。サア執筆々々」三孝「ヘイ〳〵サア」茶見「エヽ、萬物を照らさせ給ふありがたさ、あふぎてもなほ、あつき日の影。サア替りだ〳〵」張吉「サア四番は」楊次「ハイ自ら」茶見「早く物干へ出さつし。みづからでも、ぢき湯になるゼ」ト、入りかはり、楊次「ヘイすぐに申しませう」張吉「どうでも跡へまはると苦しみが薄いゼ」楊次「ヘイ。倫言にたとへし汗もかくやらん」三孝「ヘイよろしう」楊次「日見〳〵たればしん〳〵と出る」茶見「なんだか連ぞくしねへようだノ」和次「なんでもいゝ〳〵。サア五番々々」土場「ヘイ私」ト入りかはる、張吉「イヤ御亭主様々、何と〳〵」土場「ヘイ申上げます。日見の宴、秋の最中の月ならで、三こ、日中の神職を聞く」和次「ハヽヽヽ、三五夜中か、地口のつめ歌だネ。ハヽヽヽ。サア六ばん〳〵」愚慢はさいぜんより變な顔色して居たりしが、愚「ヘイ六番、私ではござりますが、チト」張吉「ヤア〳〵愚慢大人、サア是が今日の秀逸だ」矢場「イヨ〳〵待つて居ましたゾ〳〵」愚「イヱ私はサ。此歌がチト」土場「なんの〳〵、もう出來て居りませう。サアサア先あれへお上りなさい」ト、口々にいひすくめられ、よん所なく物干へあがる。わざと聞えるように、和次「矢場公おいらたちのいふのは、地口か落首かわからねへのだが、是がほんの和歌といふのだゼ、しづかにして聞かつし」など口に噂しながら、をかしさをかくし、愚慢がくるしむを肴にさへつおさへつ呑んでゐる。愚慢は何かにまぎらさんと苦しさをつゝみ、愚「モシ酒の席に歌でもありやすめへ。こりやア和睦として、一盃いたゞきてへネ。ハヽヽヽ」矢場「どうして〳〵、是までにして、そんなひやかし

づつ上りまして、歌の出來るまでは下りることを禁じまして、外の者はそれを眺めて、爰で御酒をいたゞきませう」三孝「なるほどこれは面白い御趣向、しかし斯様申す三孝なんぞは」和次「足下はゆるすから執筆をつとめさつし。そこで、一二三の鬮をこしらへませう」ト、鬮をこしらへ皆々ひく。矢場「是はなりたけ跡へまはりたいものだ」茶見「丈夫な無盡さ子。ハヽヽヽ」張亭「サア〳〵一ばん。イヤ大變々々」矢場「サア〳〵物干へお上りなさい」張亭「ハイ〳〵是はや、難澁な事、すこしお待下され、チト冷汗をふきまして。ヲヽ寒い〳〵、此まアふきはらしへ出る事か」ト、物干へ出れば、しきたる蒲は火の如く焼きつけたる所へ、素足にて立ち照り付けられる。しばらくあつて、張亭「サア〳〵早く書いたり〳〵」三孝「何と〳〵」張亭「まことある、友に呼れし日見の宴、エヽモウたまらん〳〵」三孝「へイ、モウたまらんか子」張亭「何サさうではねへヨ。エヽ引、あつき恵みに、あふぞくるし、イヤ〳〵嬉しきだ〳〵」和次「ハヽヽハヽ、出來た〳〵。さて二番は」矢場「へイわたくし」ト、入りかはり、是もしばらくあつて、矢場「面影を、くろうするのも色なれや」三孝「へイ夫から」矢場「日見ゆゑならば何いとはまじ。ヤレ〳〵嬉しや〳〵、足の裏が、エヽ、つめたくて、焼けるようだ。サア三番々々」茶見「へイ畏りました」矢場「かしこまつてはならねへ、立つのだヨ」茶見「ハイ〳〵」ト、また入りかはり、なるほど是はさむい〳〵。歯の根が合はねへ〳〵」揚次「サア何と〳〵」茶見「まださうは參じません。御催促なくと、こちらが急ぎま

どなたにお目に」和次「この愚慢さんにョ」三孝「へイまだ間違まして、お目通りをいたしません。不調法もの、何卒ごひいきを」土場「チャ〳〵愚慢さんまだ始めてかへ」愚「エヽ左樣サ」張亖「ハアヽそれぢやァさつきお遇ひなさつたのは、どこの三孝だ子」愚「エヽなるほど、どの三孝であつたかサ」矢場「湯屋の三公か子」張亖「それでも櫻川三孝とおつしやつたが」愚「左樣サ。イヤはじめての時梅川で近付になりやしたから、梅川かしらん」茶見「ハヽヽヽ、梅川三孝大權現なら、木母寺で塚築に、おなんなすつたらう」みな〳〵「ハヽヽヽハヽヽヽヽ」愚まんもせん方なく、愚「ハヽヽハヽヽヽヽヽ」ト、まぎらせて笑へども、座に首尾わるく、ひよんな所へわりこみ、グウの音も出ぬを、こきみよく、最初は連中同士打の催しなれど、愚慢のとび入につき、誰いひ合せねど、みな〳〵愚慢にばかりかゝる也。三孝はいまだ愚慢が手なみを知らねば、一人しよげて居るを氣の毒に思ひまぜかへす。三孝「此お猪口は堺論がはじまりさうだから、ひろひませう。此頃はよほど呑めて參じました。へイ愚慢さん、おそれながら獻じませう」愚「アイ〳〵」ト、無精にぐびぐび呑み汗ばかりふいてゐる。和次「時に御兩人、今日のお催、お餝付と申し御料理、お取持、一々感心いたします。所で月の宴には何れ腰折の一首もいたします事なれば、日見にも出たらめを詠じて備へましては、いかゞで御座りませう」ト、これも愚慢をくるしませんと皆々へ目くばせにて知らせる。土場「ヤ是は一向に心付きましなんだ。幸愚慢樣はおいでなり、左樣なら一首づつお願ひ申します」張亖「是はおもしろい事。しかし斯ういたしませう、物干へあがりまして、日をながめて吟じませう」楊次「さやう〳〵、順を定めて、一人

御信心の御招待にあづかりまして、忝う存じます」土場「大きに御苦労さま、左様ならわざと座付を」三孝「ハヽ、承知いたしました」ト扶より鈴を出し、ガラ〳〵〳〵、「エヘン、袴も蚊屋もかりとゞまります、ひめもす借りて着〳〵の、ゆかたをもつて、猶よろづの借先を、借りつたへにつたへ、借集めにあつめ給ひ、日向の橘の、小島が先より一散に、行けばほどなく筑紫路や、豊後かあいや丸、はだかで道中が、なりやこそ今まで、ふりたてて一ッきこしめせと申ウ」グワラ〳〵〳〵。和次「ハヽヽヽ、是は馬鹿とみの祓、感心〳〵。サア一ッお上りなさい。さて寒いことネ」三孝「左様でござります、鈴を持ちます手がこゞえます。ハヽヽヽ。へイいたゞきませう」張吉「こゝへ来て火鉢へお當り、そこへ上げようか」三孝「イヱ〳〵それへお置きなさいまし」ト、最初より皆々あつさをこらへ、ない〳〵汗をぬぐひ、またはうつかり扇をつかひ、ハッと心づきやめるなど、色々あるべし。矢場「三孝さん間違つてさつぱりお目にかゝらねへが、だいぶ流行のおうはさ」三孝「へイ〳〵有難う。此通り汗が、エイヤ冷汗が流行いたします。アツハヽヽ。イヤまた、お出入場も少のうござります故、太頭のせり賣に、外を呼んで歩かうと存じますテ」茶見「ハア何といつてヱ」三孝「へヱ三孝常住ふるめへの世話やきと申して。ハヽヽヽ」茶見「ハヽヽヽ」和次「イヤ大層枕をならべた程でもねへ、ハヽヽヽ。時に愚慢さんに、さつき御目に懸つたさうだが、外の手ゑゝはどうしたヱ」ト此こと三孝には一向わからず、三孝「エ、

「御祝儀申します」ト、いふこゑを聞きつけ、土場「ハテナ、外にお客は」ト、不思議におもへど、四人は愚慢がきたりしと推量し、張吉「御亭主さん、いづれ年始の事ゆゑ、お客來のかさなります時節、先樣さへ御遠慮なくば、矢張此お席で御一所にいたゞきませう」土場「ヘイ／＼。楊公どなたか見て來さつし」ト、楊次郎は下へ行き見れば、愚慢ゆゑ、驚きながらも同じ趣向ゆゑ、さてはいひ合せし事と推量し、揚次「ヤこれは／＼お早々と有難うござります。イヤ只今ちやうどお心やすいお方がおいでで、二階は御酒最中。サア／＼直に二階へ／＼」愚「ハヽア左樣なら眞平御免下さりまし」ト、例の不遠慮、しんしやくもなく二階へ上る。土場「イヤア是は愚慢大人、丁度よい所へ／＼」ト、土場六初め年始の挨拶一同にすみ、屠蘇などあら／＼すみて亂酒となる。愚「モシ時に何かおもしろいお備物」土場「ヘイ今日は手前方では、日見の宴と號しまして、世間のお方は、八月十五夜に月見はいたしますが、月は一晩ぐらゐお休があつても、閏晦日と存じますれば、さして事もかけませんが、日に一日御休息があつては、大變でござります。それゆゑ例年日見をいたして、報恩の拜禮を仕ります」愚「ヘエヽそれはなアる」ト、愚慢はこざかしき大馬鹿にて、當時の風俗言葉遣ひ、また諸藝なにによらずちよい／＼と横ぐはへ早がてんにて、實はむちやくちやの利いた風なれば、このやうなるさしかゝりたる思ひ付事などには、たゞまじり／＼として、うけこたへも思ひ付もすこしも出來ぬなり。折から下へ賴み置きたる人上り口より顏を出し、「ヘイおあつらへのお酌人が參じました」土場「さうか。サア／＼直にこつちへ／＼」和次「ハヽアそれはいろいろお手當、御叮嚀な」土場「いたつて麁相な品、しかし酒宴は兎角相酌では、はつしませぬもの故、ハヽヽヽ」ト、いふうち、櫻川三孝は烏帽子ひたゝれ神職のこしらへにてずいと上り座に着き、三孝「これは／＼皆樣ようこそ。エヽ今日は

重詰らしいものを取合せて買ひにやらう」ト、今日小使に頼みおきし人にいひつけ、買に出し、楊次郎は火鉢へどつさり火を入れ二階へ持上り、楊次「これは御退屈で、何か無人ゆゑ甚だ不手まはりなこと」張吉「イヤ〳〵決しておかまい下さりますナ」楊次「ハイ〳〵二階は格別冷えます。サアちとお當りなさいまし」和次「これは〳〵、イヤモウ此節は火が何よりの御馳走、サア張吉さん、みんなも爰へ來てあたらツし。イヤモウ楊次郎さん、此節の寒氣で疝癪がおこりまして、まことに困ります。甚だ失禮眞平御免」ト、ふところより温石をいだし、火鉢へ入れるゆゑ、楊次郎もぎよつとし、餘程手あつく仕組みし事と内々おどろき、楊次「ヘイわざつとお盃をあげませう」ト、下へおりる。土場「ヲイどうした〳〵、アノ、クワツ〳〵とおこつた火鉢は、チトおそれだらう」楊次「ところが聞きねへ、取巻いて寒さうにあたりながら、和次さんは、あの火で温石を燒いて懐へ入れたぜ」土場「エ、イヤ強情に仕込んで來たなア。どうもふいを喰ツたから、返打になりさうであぶねへ」ト、いふうち、使の人かへれば、さう〳〵銚子へ屠蘇を入れうろたへ銚子盃持上る。楊次郎も重詰を拵へ二階へ上る。土場「まづわざとお屠蘇を獻じまして、すぐに燗酒をさしあげませう」ト、いづれも盃をしめに、さかづき事すみて、土場「さて是より熱燗にいたして、日を詠めてたべませう」和次「イヤ日見のお備物、お飾附、感心いたします」土場「イヱ何かゆき届きませぬ事ばかり。アツハヽヽヽ。左樣なら、お心やすだてに、猪口にいたしませう。ヘイお燗を見ましてまづこれは、御先客へ」和次「これは〳〵仰にしたがひまして、張吉さまお先へ」張吉「ヘイ〳〵」何かしかつぺらしくとれより例の大酒となる所へ、下にて、

玉「土場「これは〳〵お早々とありがたう。イヤ丁度和次郎さまもお出だから、態と御一所にお屠蘇を上げたい」張吉「ハテそれは丁度よい折、ちよつと一服いたゞいて參らうか」ト、張吉もあがれば、土場「イヤ茶見藏どん御苦勞。和次郎さんとこの矢場公も御一所に居るから、こつちへ上らッし〳〵」茶見「へイ左樣なら御免下さいまし」ト草鞋をとき、手拭にて足をはたき座敷へとほる。和次「偖先刻は御手紙のおもむき、日見の御宴とやら、おまねき下さりまして、有がたい仕合。なるほど提灯を借りた禮は申しますれど、日月に禮を申す人はござりませぬが、是は折々拜して、お禮を申してもよからうと存じて、夫ゆゑとりあへませず初日の心得にて、箇樣年始の支度であがりました。ハヽヽヽハ。偖兎角ひえます事でござりますナ」土場「左樣でござります。ヱヽ先二階へお席をまうけ置きましたゆゑ、どうぞ皆樣二階へお通りくださいまし」和次「ハヽしからば仰にしたがひまして、サア張吉さま、茶見藏どん、矢場七、御免をかうむつて、お二階へ參りませう」ト互に挨拶はざつとして、みな〳〵二階へあがり見れば、かねてこしらへ飾りおきし備物をくはしく見て座につく。下にては、楊次「ヲイ〳〵こつちよりたくみは深いようだぜ」土場「さうよ、先何にしろこつちも單物ぢやアならねへ」ト、單衣より小袖をいだし楊次にも着せ、おのれも小袖布子羽織など着かへ、土場「楊公々々、その七輪の火をみんな大火鉢へ入れて持つていかつし。又その上でなんぞ思付があらう。早く〳〵」楊次「ヲツト承知だ〳〵。あのこしれへの請には、まづ屠蘇だらう」土場「ムヽそれと、煮染屋で

「エヽまアそんなものさ。たゞ此暑いのに、寒さうな顔色をして、むかふの土場六がとこへ押込んで、まごつかせようといふばかり、外に落はなしサ」愚「ムヽこりやア妙だ。アヽいゝ裃で。ム、不思議だ、矢場さんの形、アヽどうもいへねへ。いづれも年始の御趣向、イヤどうも感心だ」ト、おのれが不首尾をくるめん しきりに珍しさうにほめる。矢場「愚慢さん、おまへさんも形をこせへて、お付合なさらねへか。をかしくッてようございやすゼ」あまりつらがにくさに何ぞ苦し ませてやらんと皆々すゝめる。愚「有がたう、たゞ厚著さへすれば、外に景物も何も思付はいりませんネ」和次「さやうサ」愚「左様ならお後から參りやせう」和次「どうせ私等も禮者のつもりだから、別々に行きやすから、支度を拵へて、跡からお出でなさい」ト、和次郎矢場七一組さきへいで、土場六がくゞり戸をあけ、和次「ヘイ御免なさい」ト、すいとはいり、此こしらへを見て、和次郎は上へ上る。矢場七は上り口に腰をかけてゐる。土場楊次も、さては先にも趣向ありと思ひ、きふに胸に思案をしながら挨拶をする。和次「さて明けましては、結構な春でございます」土場「これは〳〵お早々とありがたう。あなた様にも御機嫌よう御越年なさつて、お目出たう」和次「ヘイ〳〵、ヲイ矢場七、その御年玉を」ト、受取りてしやんとなほし、「これはわざと年始の印までに」土場「これは〳〵相變らずお年玉、幾久しく受納いたします。これは頭御太儀、こつちへ上んなせへ」和次「なるほど外様ちやアなし、御免をかうむつて、爰へ來て一服のまッし」矢場「アイ〳〵左様なら、まつぴら御免ねへ」ト、矢場七も座敷へとはる。又おもてにて、張吉「御祝儀申します」ト、くゞりをあけはいる。張吉「まづ結構な春でござります。ヘイわざとおとし

思はぬ難もいゝ。ハアそこで今日のお茶は御延引かネ。フン仲町のだれにお逢ひなさつたとヱ」愚「ヱ、何サ、傳ぱ里八」和次「里八はとうに深川には居ませんぜ」愚「ヱヽ左樣〳〵。ヱヽトそれに櫻川善孝三孝」和次「善孝は久しく病氣で、昨日見舞に行きやしたら、隨分本復はしたが、まだまだちよつとも外へは出られないと言ひやしたケツが」愚「ハア善孝はお近づきかね、ハアそれは。イヤいゝやつさネ。ハアそれはどうして急によくなつたか。ヱヽそれに龜八助次」和次「モシ龜八は四月死にやしたぜ」愚「ヱヽ」（トこれには少しごまかし兼て）「ヤレ〳〵それは可愛さうに、まだ若へのに、どうして死」茶見「ナニおめへ、六十の餘で、久しく老耄したやうで居やした。それがまたどうして今日廣小路でお逢なさつたか不思議だ。一人なら幽靈とも思ふが、其つらが幽靈と一所に歩行きもしやすめへ。ハヽヽヽ」愚「成ほど。ハテナ、なんでも龜八だとおもつたが、夫ぢやア人ちげへか知らん」和次「それでも行きちげへぢやアなし、菊千で酒を呑んで、祝儀までお遣んなされて、ちよいと見たぐらゐな事ではなし」矢場「左樣サ、それにうききの龜八なんぞといふ、思付をいつたぢやアございませんか」愚「さやう〳〵、申しやしたテ。それぢやア浮氣のヱヽ里八かしらん。どうも私アそゝッかしくッてならねへ。ハヽヽヽヽ。時に樂右衛門さんいかゞで、まだろく〳〵御挨拶もせずに、ハヽヽヽ。ます〳〵お碁かネ。イヤ皆さんおもしれへお拵へ。ハヽア茶番かネ」和次

まうといふ所、形のこせへが異形だから、表があるけやせん。そこで尊宅をあらして、著替へようといふ了簡で參じましたが、どうぞ少々お座敷を拜借」樂「ヤアそれは何よりもつて安う候。まづ奥の座敷へおも／＼とお通り候へ。ハヽヽヽ。サア／＼こゝはし近、さういふ事ではなるたけ向ふへひゞかぬが專一らしい。サア／＼御遠慮なく、ずつと奥へ／＼」和次「それはありがたい。左樣なら仰にしたがひ、サア矢場公、張公、その挾筥を疊をすらねへように奥へ」ト風呂敷づつみを兩人にてつり、奥の間へ通りて四人は思ひ／＼に著替るなりを見て、この隠居もうかれもの故、大きによろこび、とかづきの所をあちこちしやべり歩き、今またこゝへ來り、また助言などして、皆々支度出來上りし所へ、さいぜんの愚慢は和次郎方を不首尾に出て、まだこりずまに地内のちの釜日へ行くといひまぎらせし故、こゝにて逢うてはさすがに面目なく、ハツとしばらくしらけしが、例の鐵面皮ゆゑ奥を覗き、愚「さてけしからん大暑、いかゞお暮しなさる」トずいとあがる。ハツと顔見合せる。みな／＼折あしゝと、愚慢もさいぜん師匠ハヽヽ」トをかしくもなきに笑ひてまぎらし、「さてあれから直に師匠の方をこゝろざして參ると、廣小路で仲町の」ト指を折りながら、助次龜八サ、エヽ櫻川善孝、エ里八傳ぱ三孝といふ面にぴたりと逢ひやした。イヤ是はお久しぶり、あまり私どもの方をお見限りだのなんのと、いやみたつぷりで、サアいゝ所でお目にかゝつたうききの龜八、うどんげの花、今日は是非お供しにやアならねへと言つて、何といつてもきかねへから、よん所なく菊千で一盃のませて、ずツと惣渡でやう／＼和睦サ。賤はた帶ぢやアねへが、思はぬ難に大磯のサ」また始つたと思へど、あまり構ぐはへの學問がにくさに、心世話しき中にも、和次「ハヽヽヽ賤はた帶に

上げますから、其儘こなた樣へお置なすつて下さりまし」ト いち〳〵品を改めかへり行く。すれ違うて矢場七は品を取りそろへ背負ひ來り、和次「どうだ〳〵、手の平へ書付けた通り品はそろッたか。ヤア〳〵ふかし立の野郎のやうに、天窓から湯氣が立つは」矢場「アヽア暑い〳〵。いめへましい、おれ一人くそ骨が折れるは」茶見「ヘン眞人間なら、一度ですむ事を、毛の不足なのは仕方のねへもんだ」張吉「なんだ買物を手の平へかき付けて行つたのか、智慧のねへ、ハヽヽヽ。ひよつと其字が消えずば、墓所の土で洗うがいゝさうだゼ」矢場「エヽやかましいわへ。人の事より足下の支度はどうだ。よくば出かけようぢやアねへか」和次「出かけるはいゝが、爰から著替へて、中見世の通は歩けめへぢやアねへか」張吉「さうさの。ムヽいゝ事がある、土場公の向の能吉さんの隱居、ソレ樂右衛門さんの所をかりて著替へよう」和次「ムヽ是は妙だ。張公も歳に一二度づつは、ちよつぴりした智慧を出すからをかしい」張吉「ヘン智慧は總身へ滿ちて、智慧ほとりで熱が出てならねへ」矢場「ヘン差身にはならねへ方だノ」和次「サア〳〵無陀ツ口をたゝかずと、此挾箱へはへるだけ押込んで、あとは風呂敷へ包んで出かけよう〳〵」ト入用の品を著到し、荷ごしらへ出來ければ、地内の人をたのみ取りもたせ、跡のしまりなど氣をつけ、四人はやう〳〵立出て、矢場七が住居のむかふ樂右衛門が宅へいたり、張吉「御免なさい、此間は」和次「さて暑い事で」樂右衛門「ヤア引、是は〳〵一騎當千のつはものお揃で」和次「イヤ早速ながら今日お向ふの土場六が所へ呼れやしたから、一趣向して押込

か。その手を食ふものか、いけ甘口ナ」張吉「それがヨ、すこし譯有ッての事ヨ。後でゆるりと咄すから、マア爰をはなしなよ」母「インニヤ放すめへ。聞いた所が跡の祭ではつまらねへ。手前歸るがいやなら此包をよこして何處へでも行け」張吉「これが無くつては行つてもむだだヨ」母「それ見ろ、其手を食ふものか」ト互にいらだち、心せくまゝ事の筋わかりかね、しばらく風呂敷づつみを引きあつて爭ふにぞ、名にしおふ中見世通りの事なれば、參詣の群集立ちかさなり、中にもさし出たる人、老人と若いもの、包を引合ふゆゑ、見物「何だ／＼泥棒か。ヤふてへ奴だ」トいひさま、二三人にて張吉をぶちのめさんとするを、母はうろたへ押とめ、母「モシ／＼泥棒ではござりませんヨ。それ見ろ、べらぼうな野郎だ。まアサ、何にしろ内へ歩べといふに」見物「ハアべらぼうださうだ」張吉「これサおツかア、まア外聞がわりい。爰を放しなヨ」ト押合のうち、あまりひまどるゆゑ、和次郎かたには支度そろひ、皆々待ちかねて、茶見藏むかひに出てしが、人立あるに不圖のぞき見れば、張吉ゆゑおどろき、人立をわけて中へはいり、茶見「おツかアまアどうした譯だヱ」母「いんにサ、聞いておくんなせへ、ふてへ奴でござります。是、この通り親父どのの品を盗み出しまして」トいふに茶見藏推量し、茶見「アヽア聞えた／＼。おツかアお前がさう思ふは尤もだがノ、實は今日さる所に、ちよいとした茶番ような事があつて、マア／＼何にしろ、和次さんの所へ一所に行つてごらうじると、さつぱりと譯がわかる事だ。張吉さんお前早くさうすればよかつたに。サアサア爰ぢやア外聞がわるい。マア一所にお出なせへ」トやう／＼兩人を和次郎が方へつれ行けば、和次郎も驚きながら、始終のわけを母にはなし、自分のしたく、その品か諸色を見せければやう／＼納得して、母「和次さん此品物は、お前さんにお預け申します。明きましたら女子をとりに

滑稽 和合人 二編追加下卷

借また張吉は、和次郎が方を出て、むかふ地内のことなれば、早々わが家へかへり、何かそは〳〵二階へ上り、そろ〳〵と簞笥の引出しをあけ、親父の袴、羽織、脇差、衣類、下げ物まで、こつそりと風呂敷へつゝみ、母の便所へ行きたる間をうかゞひ、そつとぬけ出て、和次郎が方さしていそぎ來る。あとにて張吉がそぶり、何かそは〳〵するに心をつけ居たりしゆゑ、すぐに二階へ上り見るに、たんすの引出しあけかけてあり、さてはといろ〳〵改め見るに、上を下ととりちらし、ことに不足の品々あるゆゑ、さう〳〵下りて下女に聞けば、風呂敷づつみを持出でしと聞きてびつくり、遠くは行かせ、はきものもはく間あそしと表へかけ出て、中見世の通りをあちこち見れば、雷神門の方へ行くうしろ姿を見ると、其儘一散に追付き、物をも云はずうしろより、風呂敷包へ取りつき、母「このどろぼうめ、うぬは〳〵」張吉はびっくりして、張吉「エ、何だなおッかア。びつくりさせた」母「何びつくり、へンわれより俺がびッくりしたは。うぬふてへ奴だ。コレ年中おれに尻を拭はせて居ながら、まだあき足らねへで、親父どのの物まで。コレさうもおれに苦勞がさせてへか。マアいつの間にそんな太い根生になつたのだ」ト大汗になり涙ぐみて、「サア先内へあゆべ」張吉「馬鹿をいひねへな、何盗み出すものか。わりい了簡だ。今日はノ、和次さんや矢場公なんぞと、よそに祝事があつて、よばれて行くから、それで袴や脇差がいるから、ちよいと借るのだ。夕方には返すヨ」母「エ、引いけどしをとつたものを、あんまり馬鹿にするな。六月の土用のうちに、小袖や袷袴で歩行くやつが日本にあるものか」張吉「何サ年始だヨ」母「エ、六月年始に出るべらぼうが何處の國にあるもの

生洲地口では、帳面はきへねへ。こいつァ愚慢に烝をかけたのだ。ハヽヽヽ」茶見「これサ、人もさう左前になつては、たて直るもんぢやァねへから、マァ人のいふ通り、早く借りて來さつし」矢場「アッァ、すること爲す事、いつかのはしほど食ひ違ふといふ、矢場七が身のなりゆき、御兩所御推量下されい」和次「これいつかのはしとは、何の事だ」茶見「大方先達の茶番に、いたゞいた事だらう。いつかの恥といふから」和次「ナニあの位な事を恥と思ふ根生か、こんねへにつけつけ言はれても、いけしやァ〳〵だ」矢場「ヘン泉水へ小便をたれはしめへし、池しやァ〳〵もねへもんだ」茶見「コウ口のへらねへ奴アねへ」矢場「此節の相場ではちつと口もへらしたからうが、生れつきで仕方がねへ」和次「これサ、冗談ぢやァねへ、早く行つて來ねへか、モウ九ツ半過だ。ア丶世話のやけた」トいふ折ふし、辨天山の鐘ゴヂン。矢場「八ツだなァ」これを拍子に出て行く。

のは、おれほどの者だが、何か行届かねへようで、どこか足らねへようでをかしいノ」場和「アアさうサ、隨分をかしくねへ方ではねへのサ。みじかい半天ばかりで、股引なし。しやがむと黄色イ越中褌といふこしれへ、ずるぶん巾のきゝさうな形だ」矢場「ハア、なるほど、道理でをかしいと思つた。ツイ股引に氣がつかなんだ、どうも寒い氣にならねへで困る。チヨツまた借りに行くのか。イヤ和次さん、お前の用心股引があるだらう」茶見「ヲツトそれは五種香屋さんが履きます。アヽなるほど寸志はねへ、五分もすかねへ男だ。感心〳〵。素足に革頭巾で、やつて見さつし、ヘン夜打の畵に、そんなのがあるもんだ。五分所ぢやアねへ、丸ですかねへ形だ」和次「ハヽヽヽ、是は何といはれても返す詞はあるめへ。あんまり氣がきかねへで、可愛さうだ。コレよく敎へてやるから手の平へかきつけで、行つて來さつし。股引腹がけヨ、長半天、三尺帶、白足袋に麻裏の草履よ。手を出さつし書付けてやらう。はやく揃へて來さつし。氣もきかねへ癖に早呑込で、人の差圖をきかねへから、いつでも差掛つてまご〳〵するのだ。ざまア、ムヽウ面がいゝ」矢場「チヨツ、とんだ役をとつて、おれ一人のろまのようだ」茶見「のろまのようもいゝ。のろまが聞いたらどんねへに腹を立つだらう」矢場「いゝヨ、てへげへにいぢめさつし。是がほんの魴鮄にも歩鯛の誤だ」和次「どうして〳〵、そんな取つて置きの、

知だらうナ」矢場「ヘンそこらは朝飯前の仕事だア。矢場七さんに對して差圖がましいこはと、チトおはゞかりだらう。ヘン五分でもすいた所があるものか、尻の穴のすいたのが悔しいと思つてゐるのだ」和次「ハヽア尻の穴が透いてるるから、ツイおはゞかりも出るのだナ」矢場「エヽ引きたねへ事ばかり言ふノウ。ヤレ襟先へ犬の屎をふん付るノ、尻の穴だのト、思ひつきをいへばとつて、ちつと氣を付けていひねへ、あんまり下主でならねへ」和次「モシお詞の中だが、犬の屎なぞと」和次「なるほど〳〵尻の穴はそつちで、犬の屎はこちらなら、此路次へ毎日垂れてありますのは、貴公の業でござるな。ハヽアよもや〳〵と思つて居つたが、なるほど人は見かけによるものでござるナ」矢場「チョツ、からかつて居ると限がねへ。それ革頭巾ヨ」和次「何だ、革頭巾をなんにする」矢場「エ、革羽織革頭巾サ。ヘン梅に鶯、ねぎにまぐろ、あたりめへだア」茶見「ハヽヽヽ、歳禮の供が、革頭巾をかぶつたのは見た事がねへノ。それともなんぞ書物に有る事かしらん」矢場「附もねへ時、革羽織革頭巾と云ふ拵があるテ。ヤ待ちなヨ、アヽあやまり〳〵、ツイ市へ行くのと間違つた。チョツ、どうもおれがのは品が多いから、酔つてならねへ。まづ一番著付けて見よう」ト、半天をかされ、ゆかたをぬぎて、はだか身へ半天を著、帯をしながら、矢場「どうもならねへ事といふも

ふ、コレ臨氣應變の謀事、大將の器に備る人は、みな斯ういふものだ」茶見「ム、大しやうな事をいふぜ。先が武者なやつだからいゝが、利久なものなら、雜兵と思ふ」和次「そこが臨氣おうへん、そんな下知の穴のせまいのぢやァねへ」矢場「サア〳〵又こじ付ごつこが始つた。斯うまたこじつけ意地のはつた奴もねへもんだ。モウ和睦々々。〳〵催がおそくなる〳〵」和次「ハヽヽヽ、こればかりは矢場公が尤だ。どうもこじ付も何盡となると、ツイ夢で角力を取るやうに、負けたら風をひきさうで、やめられなくなるヨ。サア〳〵モウ九ツよッぽど過ぎだらう。アヽとんだ獸につらされて、大にひまどつた。そこで矢場公、諸色がそろつたか、ちよつと見よう」矢場「チツトそれ、ヤヅ小買物は、三本入櫛形の臺附サ。それ海苔が一帖、海苔入に長のし、水引ト」和次「ムヽン御叮嚀だナ。どれ〳〵熨斗づつみを拵へよう。海苔へはこの熨斗の先を一寸かすつて、張熨斗々々。そこで公のこしれへが見てへ」矢場「ヘン形に寸志はねへ」背負ひかト、最前へりしが、愚慢に見せじと。押入へ入れ置きし風呂敷包を出し、「それ切立の半天が五枚サ」茶見「半天に切立もをかしい。褌ぢやアあるめへし」和次「ヘヱヽ一番けこまれたナ」矢場「ヘン其くれへな事はかまはねへ。ソレ、スイヒヨウよ。羽織を見ねへ、ソレ頭取革で、此たつぷりした事を」和次「ムヽ奇妙々々。しかし足下が著たら襟先へ犬の屎を踏付けねへようにしさつし」茶見「紐は結んで、ト首へひッかけるは承

しい日で、たいてい六齋なら、一六とか、二七とか」愚「エヽさやう〳〵。一六でございやす」和次「それなら今日は五の日だから、お釜日ではございますまい」愚「エヽそれでも今日に違はございませんが、それでは五六かしらん」茶見「同じ五六でも巾のよいのでは、二人寐にはお樂でございます」和次「これサ。まぜつけへさずと早く湯をたぎらせねへか」愚「イヤありがたいが、實に今日は、チト外にも用事もありますから、今日の所はひらにお預けだ」和次「ハアまた永日かネ。ハヽヽヽ、アヽそれは殘念ナ。いつも内輪でばかり致しますから、どうも氣があらたまりません。幸よい所へお出でと存じたに、エヽかへす〴〵も殘念ナ」愚「イエいづれ近日出まして、ゆる〳〵いたゞきやせう」ト、愚慢は早々かへり行く。あとに三人顔合せ一度に、「ブウ 引」ト、吹出し、小聲にて、「一ツ〆よう」ト、指の先にて、「シャン〳〵〳〵〳〵」茶見「あれが金毛窮し鐵面の、エヽ氣ちげへといふのだらう」和次「馬鹿と知りつゝ、あんまり人をこけにするから、ツイ憎くなるヨ」矢場「ぜんてへ今日一所に連れて行つて、おもいれ苦しませればよかつた。何ぞこつちの苦しい時には、あいつを差出して、楯にしたらをかしくつて宜かつたらうに。エヽ惜い事をした」和次「それもさうだが、敵地へ踏込んでからはいゝが、今こつちで謀計最中には邪魔になるから逐出したが、なんと下戸に酒を強ひ、日蓮宗に念佛をすゝめたりせずに、先の好くといふ言葉について、其人を退けるとい

ら、味な氣になつて來た。ノゥ茶見公、お心安いから、遠慮する事もねへ。今からはじめて愚慢さんのお手前もひとつ願うではねへか」茶見「是はようございやしよう。矢場公も丁度いゝ所へ來た」和次「さうョ。マア茶見公風爐へざつと炭をして、釜を掛けさつし。早いがいゝ〳〵」茶見「ヲット合點だ。しかし今からわかしては埒が明くめへから、湯屋へ行つて、下風呂を一手桶もらつて來ようか」矢場「何サさううろたへる事はねへ。六ツ一杯の汐だから、しづかにさつし。婆アさまはおれが呼んで來よう」愚「それは面白うごぜへしようが、アヽあいにく今日は師匠の釜日で、是非參らねばなりませんから、何れまた此頃にゆるりと參つて、一服いたゞきやしよう。殘念ながら今日はまづ」ト、煙管をしまひ烟草入をさげる。矢場「モシ折角こつちの亭主も、御馳走に一ぱん茶の湯をやらかさうと申しやすから、マアもう少しお遊なさいナ」愚「ヤ、思召はありがてへが、今申す通り師匠の釜日で」矢場「へヱ、茶の師匠と申すものは、夏でもかまびが出來ますかネ。わたくしなぞは冬向は胯火をいたすので、兩方の股へべツたりと出來ますが」愚「イヱそのかま火とは違ひます。釜をかけて、茶の湯をするのを、釜日と申しやす」和次「さうサ、矢場公もあんまり知らない過ぎるナ。へヱ先生のお釜日にどうぞ私も出たい物だが、何の日でござりますネ」愚「へヱ、まづ、ヱヽたいてい寅の日、ヱヽ午の日、ヱヽ」和次「ハテネ、是はめづら

達に茶の湯天狗もありやすから、見たり聞いたりすこしは筋もわきまへて居やすが、今おはなしの小便所とおつしやるのは、芥穴でござりやせう。其箸はごみでもあれば、挾んで其穴へ入れるのでございやすが、それではそれへ小便をなさつたか」愚「エ、左様サ」和次「イヤそれは大變な茶人だ、ハ、、、、。そしてその青竹の箸でおはさみなさつたか」愚「エヽ」茶見「青竹で挾んでは、お地頭さまへ上げる松茸のやうに成つたらう。ハヽヽヽ」和次「イヤ塵穴へ小便をされては、亭主大難儀」愚「へエ左様かネ。何にしろあやしい穴だネ」和次「怪しいとつて、怪しくないとつて、塵穴を御存じない程では、ぶし付けながら茶の方は、お見かけ程ではございません子。ハヽヽヽ」茶見「左様サ、塵の穴へ小便がまはれば、マヅロのかけた土瓶のやうな茶だらう。ハヽヽヽ」（ト、大笑ひの所へ、矢場七は諸色をとゝのへずいとはいり、）矢場「サア〳〵歳玉も何ものこらず揃つた。ヲヤ愚慢さんお珍しいよく、アヽア暑い〳〵、あんまり日向をかけ歩行いて目がくらんだ」愚「ヤア矢場七さん、偖しばらく。イヤ追々通者の參會となりやす、ハヽヽヽ。時に何か御趣向の體、毎度御繁多な事、茶番か子。ヤそれは」（ト、また矢場七にかゝる故、偏のことなど聞くとすぐに御同伴などと出かけるしろものなれば、早くおひ出さんと矢場七に目くばせにて知らせる。矢場七もかねて承知のこまりもの故、だんまりて居る。）和次「モシ愚慢さん、ありようは、わたしらも此頃茶に凝つて居ますが、とてもお前さんなんぞのお相手が出來るほどでもないから、ひかへて居りましたが、斯う顏がそろつた

愚「さやう〳〵銘書がサ。斯う半遊齋と書く方がサ。よつぽどいゝネ」和次「そして半の字ではござりやせん。羊遊齋サ」愚「なアる〳〵、やういうさい。半の字より棒が一本多い。羊かんのやうの字だッけ。そゝッかしくッていゝ。ハヽヽヽ」ト、まぎらせど、さすがに首尾ふとゝのひ故、茶はどうやら知りさうもなき樣子と見て、糸治のまぎらせに、付もなきにまた茶の咄に直す。「モシちつと涼しくなつたら、茶をおはじめなせへ。ぶし付けながらちつと茶がねへと、どうも物がぞんぜへに引なるものだ。茶といふやつは、すべて手ぎれへと手ぎれへと心掛けるから、マヅ尾籠な事だが小便所なんぞも、ひさしの下の打の隅なんぞへ、ちよいと小く穴を明けてサ、その中へ青葉を二三枚入れて、其縁へ青竹の箸を一ぜん立てかけて置きやすぜ。こいらが茶の氣がねへとまご付きやすヨ」茶見「なるほど小便所に箸はチトわからねへネ」愚「そこがサ、茶人は手ぎれいな所だテ。ソレ平地に明いてある穴だから、どんなやりぱなしな奴でも、立つて居ては出來やせん。ソレ一寸しやがんで、そりや小な穴だから、見當をちげへると外へしかけるし、指で押へては、今茶の湯をしようといふ手だから、そりやそこで、青竹の箸ではさんで、シヤア引サ。ソレ小便所まで其位に行届くから、座敷のうへに於てをや。何でもかいくねへ所まで、手がとゞかせてあるから、客に行つては、茶付合にこしたることなしサ」トあまり人を馬鹿にしたたはことを受けかねて、和次「モシお咄だが、わたしも茶こそろくに知りやせんが、友

半へ、凡そ人の十二三人も押込んでサ、おまけに爐へどんとぶちこんだ炭がどつと起つたもんだから、イヤあび焦熱も斯くやらんサ。大汗になりやしたぜ」和次「へヱ、夏は風爐でござりやせんか」愚「ヱヽ、そりやァ流儀〳〵で風爐もつかひやすが、今日は爐サ」和次「へヱそして其樣におしかけ客があるものかネ」愚「そりやァ先も其道執心で來るもんだから、幾人でもよろこんで呑ませるのサ。アヽしかしこつちは呑むばかりだからいゝが、亭主は大役サネ。それほどの人に行渡るように、何が圍爐裏の緣へ茶碗の六ッ七ッもならべて置いて、片ッ端から茶を調合して、湯をついでは茶筌でかきたて、モシあれは御案内でもあらうが、泡の立つた所が賞翫でごぜへすから、手間がとれやす。そこであつちでも替り、こつちでも替りと、イヤ氣の毒なくれへサ。そして今日の面はどれも達者に呑むやつらだから、大方茶の二斤も呑みやしたらう」ト、うぬばかり笑へど、あまりばかしき話故、いつもの事と知りながらも兩人しやくに障り、殊に矢場七張吉來らば出かけんと思ふ故、ろく〳〵挨拶もせぬ也。「イヤお煙草入をチトはいけん。ハヽアいゝ玉だ」和次「ナニ鯉丈がこせへた象牙の色付、いたつておはもじい品サ。そして先の龍桂がやうにはいきやせん」ほんの珊瑚珠なんどわざとびらかしていふ。愚「ハテネ、ハヽアなアる、こりやァ妙だ。どう見ても疑物と見える。お根附は香箱、都鳥、アヽよく蒔いた。モシ無上に粂治〳〵と粂治がりやすが、半遊齋もようございやすねへ」和次「ヱヽ何やつぱりそれは粂治サ。銘書はみなさう書きやす」

織、唐巻鞘、村松拵の一刀にて紙入を押へ、馬皮金皮の胴亂へ、江戸珊瑚珠にて八分玉の緒〆を、薄羽織の下よりほのかに赤つかせ、其外矢立錢入下合の類、腰のまはりは干見世の日除のごとくうるさくならべ下げ、網代笠を手にもち、名護屋出の唐扇をつかひながら、愚慢「さて大暑でごつす。ハアおるすか」茶見「へイどな」ト、いひながらのぞき、小聲にて、「サア〳〵とんだ獸が來た。大變大變」和次「誰だ〳〵」茶見「ぼんくらまへの似白よ」和次「イヤそれは恐れる」茶見「どうしよう」茶見「どうなるものか。こつちへ上げさつしな」ト、顔を出し、「これは愚慢さん、よういらッしやつた。先こちらへ」愚「イヤ御庵居かナ。それは、一寸一服」と、つい上り、「これは何かおとりこみ」茶見「アイヤずんどさよいな内證事、おかまひなくと先々これへ」愚「ム、いよわへ。しからば勘平殿御免くだされ。ハヽヽヽ、どうもならねへ、主が主だから、眼のよる所へ」茶見「茶見が寄るか」愚「いよわへ〳〵、イヤ六段目の見立はありがてへ。しかしぢきに勘平と聞くやつも聞くやつだらう。是だから通者のつき合は早くツていよ」ト、知れきつた勘平のせりふを受けたるを、ことのほかみそけ也。和次「ホンニおめづらしい愚慢さん。なんと思つて地内へみくるまが向きやした」愚「イヤサ今日は向島へ茶に呼れやして」これはうそなり、すべてはいかい書畫會、そのほか風流なる事すこしもわきまへず、相手をあまく見れば大名題ばかりをならべおどしかけ、つけ〳〵はぢしめられても一向心づかず、よほどたらぬ利いた風なり。「モシ茶は夏のもんぢやァごぜへせんぜ」「それに又押かけの客が四五人もふえたもんだから、アノせまい四疊

んではいくめへノ」 楊次「どうして〳〵。手紙をもつて行つて、返事を聞くが精一杯の仕事だ」土場「そうだらうよ。しかし芋はきやつに燒いて貰ふがいゝ。これは本役だ。ハヽヽヽ」 楊次「おれが買物や、三考が所へ行くから、おめへ餝附の道具なんぞを見つくろつて置きねへ」 土場「ムム物干へ蒲でも敷いたり何か、勝手を知つたように片附けよう」 楊次「それ〳〵。そんなら行つて來よう」ト、出かける。 土場「ヲイ〳〵肴は廣小路の菊千か筋屋がいゝぜ。どうも手ぎれいで、氣取がいゝ。そして第一御納戸が心安くつていゝ」 楊次「ヲヤ〳〵いたつて卑劣な事を宣ふヨ」何かわからぬこわいろにて、「コレ其樣なさもしい事を誰がをしへました。コレこの乳母はナ」 土場「なんだ氣ちげへじみた。コレ無陀ツ口より、買物を間違へぬように、はやく行つて來さつし」 楊次「コレ買物を間違るなどと、此楊次郎に向ツて過言であらう。今一言いうて見よ。舌の根切ツて散蓮華に」 土場「これサどうしたのだ。冗談ぢやアねへ。玉子は家鴨と矮雞」 楊次「ハアテ、ようごぜへさア」ト、楊次はやうやう出てて行く。あとには土場六物干へ蒲をしき、三方花たて机など、其外器物さま〳〵工風をこらし居る。是はさておき和次郎かたにても、矢場七、茶見識をやうやう支度を借集めに出してやり、跡にて兩人は挾箱など借り、そのほか衣類脇差など取揃へ、またも小道具持物まで工風をこらし、相談最中、「御主人いかゞ」と入來るは、歳の頃二十二三才の男、名は愚慢、形は白襦袢に越後上布の帷子、出所不正の御納戸博多の帶、黒かん紗の羽

で燒かう」楊次「それ〳〵玉子は、日に備へる方は、家鴨の大きいやつにして、酒の肴にするやつは、ちやぼの極小いのがいゝぜ」土場「さう〳〵。偖また酒宴といふもんだから、酌人を一箱呼ばずばなるめへが、こいつも實は廣小路をよんではをかしくねへから、神道者をたのんでサ、三絃で獨々逸といふ所を、鈴を振つて高間が原はどうだらう」楊次「こいつは飛違つて思ひよらねへ事だから、おどろくだらう。おもしれへ〳〵」土場「しかしほんたうの神職では承知して來ては呉れめへか」楊次「さうさノ、ムヽいゝ事がありやす。諏訪町の白い妙見樣の形をかりて、櫻川の三考を呼んで、あいつに著せて、出たらめを言はせよう。頓智がいゝからごまかすにちげへねへ。そして酒になつてから、三考ぢやァをかしみがあつていゝぜ」土場「奇妙々々。サァ夫で餝付はきまつたから、はやく買物をそろへよう。食類は四五品、廣小路へいひ付ければすぐに間に合ふ。たゞし座附の吸物は、汁團子氣取で、スイトンといふやつ、アノうどんの粉のつみいれ、もみ大根のかはりに、小菜か何かの青みといふ味噌吸物」楊次「ムヽ、アヽしかし酒はのめねへナ」土場「それはどうせ六月、日に照付けさせるが御馳走だから、喰物だといつて氣に叶ッたうめへ物は食はせずと、先も承知だ。とても安穩では歸さねへ了簡だ。そりやァいゝが早く買物をそろへて餝り付けよう。おれか一ッ走り行つて買集めよう。さつきの神さんを頼

滑稽 和合人 二編追加上巻

扨土場六方にては、今朝楊次郎來りて、兩人とも夕部氣の腹直し、迎酒より風と思ひつき、四人名當の廻狀にて、日見の催といひやりけれど、例の麁忽者の事なれば、さして深き工風もなく、月見の返に、日見と思ひ付きしばかりの事ゆゑ、手紙の返事を聞いてより、急案に思ひ付く、土場「楊公月はわかつてゐるが、日に備物はなんだらう。薄でもあるめへ」楊次「さうよ薄に天道といふもをかしい。ムヽ榊がいゝ〳〵」土場「ちげへねへ〳〵。それ〳〵そこでまた、團子だが、こいつもなんぞ有りさうな物だノ」楊次「ムヽあんころ餅か雷おこしか、いや〳〵さうでもねへな」楊次「月に團子だから、日には酒といく所だが、是は何れ神酒はありうちだから、つまらずと、ハテナいつそ類ぬけに玉子はどうだらう」楊次「ムヽおもしれへ〳〵。事は替るが見た目がいゝ、杉形につんでと、栗柿の類は西瓜眞桑瓜なんぞでよし。芋枝豆はどうせう」土場「芋はありやす。燒芋がいゝ。こいらは日見らしいぜ」楊次「豆は大阪いりだ〳〵」土場「よし〳〵それで、大ていよからう。しかし燒芋は、今はちつとむづかしいナ。ムヽ薩摩芋を買つてこつち

しばゐ町に芝居なく、ふきや町に吹矢なし。金貸に遊金なく、作者の腹に狂言なし。一番でかす才覺なければ、壺中の天地を掌握する所存もなし。つら〱流行のかはるを思へば、立役が女形をつとめ、色事師が敵役を兼る世の中、今は俳優が作者にて、作者は則ち書役なり。御好次第の繼はぎ物、時代違は元よりいとはず、和漢の治亂故事來歴、讀んだ事なければ知るはずもなし。無學文盲猥雜鄙俗、今更いふもおろかなり。日覆の月舞臺の地に落ちて再び照さず、時なる哉と歎ぜし折から、入來るは書肆文溪堂の主人なり。一小冊を懐にして、速に序せよといふは、和合人二編の追加、御存じの瀧亭鯉丈子が例の滑稽よく腮を解き、當時の人情を盡せり。燈下に一誦して蛇足をそふ。

花笠魯介叙

しい」矢場「ナゼ〳〵」茶見「天にじよくはいらねへは」矢場「いらねへ事があるものか。天には日しよく、月しよく」茶見「ソレ、しよくだは。じよくではあるめへ」矢場「アツア、和學をしねへから、假名がわからねへ。日ツと止めるから、しよくと淸んでいふ、天ンとはねるから、じよくと濁るのサ」茶見「ハア はねれば濁るものかの。日照年の泉水のようなものだノ。それでも神職、顔色、艶色、みんな上がはねてゐるが、淸んでいふのはどうだ」矢場公さしつまりずつと立つて、矢場「そんなら此通り、足の甲で歩いて見さつし」和次「是サもういゝ加減にして、行つて來ねへか。アヽどれも〳〵骨を折らせるぞ。おらが家は安針町のはきだめのようだ」矢場「ナゼ〳〵」和次「コウ又はねが集るものぢやアねへ、サア〳〵此位ごた付けば澤山だらう。二人ながら早く行つて來さつし」矢場「ハヽヽヽ、サア張公出かけよう」張吉「よからう〳〵」ト二人はやろやろ出て行く。

是より土場六方にて、日見の催まで草稿殘らず出來いたし候へども、當二編あまり延引に相成り、御見物樣方の思召のほど恐入り、彫出來の分取あへず二册趣意なかばにて差出し申候。引續三編二冊近々賣出し候間、相かはらず御求御高覽奉二願上一候。　文溪堂

まういゝは。なるほど大きな貝の柱がとれたさうだ」矢場「相談をしかけては、餘計な口ばかり多いから、なんでも埒はあかねへ筈だ」茶見「さうよ。今いつた旦那と供のわけはどうすると」和次「そりやアサ、先も承知、ホイ又出た。おれもお心安いから、爰で一所にいたゞかッせへとか言ふはサ。何れ年始といふやつは、裃で挾箱をかついで、供の手を引いて歩行くすぢも有るから、一所に居てもかまはねへはサ」矢場「ムヽそれではいゝなア、茶見公」茶見「よし〳〵。そんならマウお前達は支度にかゝらねへか。まう晝だらうぜ」張吉「ヘン馬尿さらひがねらひを付けやアしめへし。モウひるだらうも可笑しい。コレ夜が明ければひるだは、其様に晝をこはがる事はねへ。花嫁が田の草をとりはしめへし」茶見「サア一盃くらふと尿落付だ。のませねへと動かず、困つたらうずものだゾ」和次「冗談ぢやアねへ。二人ながらモウいつて來ねへか」矢場「チッと行く〳〵。極あついやつを一杯きめて出掛けよう。内に陽氣がうすいと鶴亂が怖い。くわくらんとは、鶴亂れるといふ事で、天じよくで、鶴が黒燒になつてはバラ〳〵と落ちる。それが體へかゝつた時、内に陽氣がうすいと鶴亂だ」和次「足下なんぞにどうして鶴がかゝるものか。あんまり呑過ぎて、家鴨でも踏殺さねへようにするがいゝ。呑足らねへと色々な口功者な事をいふ」茶見「口功者なら、天じよくはよせばいゝ。あんまり聞きぐる

しく毒三だと思つたら、手を付けねへがいゝ」茶見「モシ肴が喰へねへで、小春時は、次兵衛かまはず、豆腐の小半、丁右衛門もねだつて、奴だ〳〵」和次「アハヽヽヽ、イヤあきれて物がいへねへ。あまりりこ〳〵しくねへ奴等だ。斯うしてだまつて見てると、でん〳〵に何事のやうに、目の色を替へて、人のこじつけを聞きながら、胸の内でかんがへて居る面がよつぽどをかしい」矢場「それだつて、元はお前がわりいのだ。おそれ久松とは何事だ。あんまり野暮な言草だから、みんなが骨を折つて消したのだ」張亭「そうよ。それに人の事をいやにさげすんで、りこ〳〵しくねへッ。ヘンそつちが發明のくせに」矢場「まづ此爭は頭取しばらく預り置きまして、年始の形で行くはいゝが、旦那と供と一座でも呑めへ。その座にいたつて、至極下直にとりあつかはれさうで、ぶきみだナ」茶見「ちげへねへ〳〵、いゝ所へ氣がじゆんくわんした」和次「何サそりやア先も承知だから、コレ百も承知と兩方へかけた詞だが才子だらう」茶見「ヘン其くれへな兩用言葉は、おいらア地だ。夜湯へ這入る時は、眞闇御免なさいッ。ちよいと客が來れば、コレお茶ばこぼんを持つて來いヨサ。春先人を誘ふには、チト木母島へお供いたしませうサ。一所に出て先の人が小用をすれば、ヘイわたくしもお小便いたさうッ。また沖釣に出て、大きな東風でもくらッた話をするときは、寔に命神奈川へ上りましたサ」和次「エヽひつこい、

「こちとらが召下ッても、やつぱり品がよく、ピンとして、なんでもすいとして、今人のすく酒だ」茶見「めし下ッてはピンがよく、ひんとする筈だ」張吉「ときに蠅帳をちと改めよう。やれ〳〵ついぞ有ることと、むごくねへの。是はぜんてへ何のための蠅帳だ」矢場「首を突込んで、晝寐でもする道具だらう」張吉「ヤア〳〵見つけた〳〵、なまりぶしが半分」茶見「なまりぶし半分で大層な聲だ。一ッ節でも見つけたやうだ」張吉「ありはあつたが、なまりぢやアねへ、きたいのわりい鰹節だ。何年跡に喰残したのだか」和次「やかましい事をいはずと早くむしつて、醤油をかけさつし」張吉「これがむしれるものか、鐵槌をかしねへ、叩きつぶさう」和次「おなまりを頂きながら、ふざけた事をいはねへもんだ。喰ひつけねへ鰹のなまりを食らつて、人でも喰付かねへがいゝ」張吉「ヘン鰹のなまりもいゝ、なまりたはけた事をいふ」茶見「ムヽン古風な洒落口ナ。そりやアいゝが、あつちでもさぞ今頃は、支度眞最中だらうノ」矢場「さうサ、日見とはまた、をかしな事をつかめへたもんだ。マアどうするのだらう」茶見「さうでもあるめへ、ヤ斯うでもねへと、あんまり考へすぎては、ひよんな思附をするものよ」和次「なんでも月見まけへにいくやつだらうが、此炎天に青天井の酒盛は、チト恐れ久松だノ」矢場「肴も日なたで照り付られては、みな息つくだらう。喰ひナといつても半兵衛せずにはやれねへぜ」張吉「ナニをか

つくうだなア。チヨッどうも仕方がねへ、矢場公支度に出かけよう」矢場「ムヽ出かけるはいいが、チト腹がわりい。最早彼是御脳の刻限だ、一寸一獻きこしめしてへナ」和次「ムヽ今朝山屋の櫻川を取つて置いたが、肴があるめへ」張吉「香のもの〳〵。迚もお盃事をしては居られねへ立場だ〳〵」張吉「山屋ならなぜ隅田川にしねへ」和次「隅田川はいゝはしれた事だが、又この櫻川をやつて見さつし、上ッ方の召上るのだといふ事だが、その筈か品よくピンとして、よつぽど呑める酒だ。此頃は山屋ではぐつと代呂物を改めて、すてきに商に骨を折るから、さういふ所へ付込んで買ふのが酒呑の祕事だ」矢場「がうぜへ櫻川にはまつたのう。愛宕下の生醉のようだ。どんな酒だかやつて見よう。山屋の酒も、千町萬町にひゞくといへど、その酒銚子へ入れてたべて見ざれば、目色もいださん道理、山屋の門に三年三月お立なされても、のまぬ酒に醉たる例がない。コリヤ〳〵若いもの、一ッついでくれ」茶見「ハイアイ」ト茶碗へつぐ 矢場「コリヤ〳〵、銚子から虫が出たようぢやア」茶見「蠅でござい」矢場「コリヤ〳〵あなたでも呑まうとおつしやる」茶見蔵はついてばかり居るゆゑじれつたく手ひやくに茶碗へつぎ藥罐を手にもつて 矢場「コリヤ〳〵あなたへなぜ上げぬ。銚子のかはりか」茶見「白湯でござい」和次「是サ拍子にかゝつてうぬばかり呑んでるは。燗がぬるくとも一ッつがッし。エヽてん〳〵茶碗にしよう」矢場「アヽなるほどいゝ酒だのう」和次「今味が出たか」矢場

へ行つても借りられるはナ。そこに如才があるものか」茶見「如才がなくば、びはえふ湯でも用意するがよからうぜ」和次「まぜつけへしちやア悪いといふに、今やう〳〵案じがついた所だ。成りッたけ思ひつかにやアならねへ時節だ。張公、茶見公はどうするつもりだ」張吉「おいらは袴羽織としよう。茶見公はどうだ」茶見「おれも同じく禮者でもあるめへから、やつぱり棧留の羽織で、五種香供に成らう」矢場「ム、柳行李をつゝんで、首へひつかけたやつか。こいつア可笑しい〳〵」和次「サア禮者が一對づつそろつたから、モウ形の拵ばかりだ。早いがいゝ〳〵」矢場「マヅおれは革羽織半天はらがけ」茶見「そしてソレ手へはめる、スイヒヨウとやらいふものを借りさつし。あいつで挾箱の棒を押へると、よつぽど寒さうに見えるぜ」矢場「そうして見ると、おれが支度が一番おつくうだぜ、皆のは有合ですむから妙だ。ヱヽ引とんだ役割を取つたなア」和次「其かはり押出は一番まうかる役だ。愚痴をいはずと早くさんだんして來さつし」矢場「どうも仕方がねへ。其かはり和次さん、おめへ旦那の事だから、挾箱は工面してくれねへ」和次「よし〳〵、地主樣で借りて置くから、臺付の扇箱を一ッ。張公のは海苔がよからう。夫を序に買つて來さつし」矢場「承知々々」和次「茶見公は布子に袷羽織、股引ですむから、内へ行くにも及ぶめへ」茶見「さうよ、おめへのを借りよう。こいつア丸どり。妙々」張吉「おれと矢場公がお

「何の彼のと日見我慢せずとサ、日見の御爲には、なにか此身を惜むべしだ。むやみに押掛けようぢやアねへか」和次「むやみといつて、先にたくみのあるを知りつゝ、どうも素肌では向へめへ」張吉「そんなら日見どしの鎧を、アヽ我ながらあんまり悪い地口だナ」矢場「汗でびつしよりくさり帷子はどうだらう」和次「エヽ面白くもねへ、てへげへにこじつけさッし。今爰で骨を折つたとつて、敵に對しては屁にもならねへ事だ。馬鹿〳〵しい」茶見「コウ〳〵今のかたびらで思ひついたが、こいつアどうだらう」張吉「そいつア悪さうだナ」茶見「エヽよくけちを付けたがる、マアだまッて聞かッし。まづ先の思附は、日を見ようと號して、物干へ出して照りつけさせて苦ませようといふお茶番だから、こつちは、もう一ばい其上へいつてサ」張吉「大家根へ上らうか」茶見「大家根へのぼ、エヽまぜつけへすから、釣込まれてならねへ。マヅだまつて聞かッし。こつちは初日の出ををがむといふ思入で、歳禮のこしれへで、とても暑い思をするならば、小袖の三四枚も著て、上下や袴で寒さうな顔色で押かけてはどうだらう」和次「ムヽそれだ〳〵、おもしれへ〳〵。おれは裃で行かうか。だれぞ革羽織、挾箱を持たねへか」矢場「こいつア妙だ。おれが供にならう。すつかり大あにいの拵で行くべヱ」和次「大きな革羽織でなければならねへが、どこぞ借りる所があるかノ」矢場「そりやア茶屋町の頭のでも、仲町の頭でも、どこ

見舞といふ物か。それほどのむちや助ではあるめへと思つて居たが、あんまりよく出來た猿だ」茶見「さうヨ。そして暑中に來てきびしいざん暑といふやつが有らうか」張吉「併しそれはたゞお暑うございますといふより、いひぐさが立派でいゝぜ」茶見「いくらいゝぐさが立派でも、土用のうちナゼ殘暑だらう。土用が明て暑いのが殘暑ヨ。殘はのこる、暑はあつい事だは」張吉「ヘン溫はあたゝめ、保はおぎなふ、御髮のつやをよく致すとござります。次につかひますが、京都は五山、朝倉の、ホイまたざんしよだ」和次「いや〳〵いくら消しても消えねへ〳〵。ハヽヽヽ。これほどに、つけ〳〵と恥しめても、いけしやア〳〵だ。此根生だから、何事も覺えられねへ筈だ」張吉「ヘンそねめ〳〵」和次「ハヽヽヽ、斯う句のつかねへのはねへ。何をそねむ所があるか」茶見「さうよ、わからねへ返答だノ」張吉「お前方も精出して、そねみなさるが身のお勤ッ」和次「コレこんな馬鹿にかゝり合て居ずと、日見に行く支度はどうする」矢場「さればサ、何にしろ此炎天に物干で日を見せるといふは、おそろしい思付だ。とても命を惜んでは、此およばれには行けねへぜ」和次「どうするものか、先から仕掛けられたからは是非がねへ、日を見てせざるは勇なしといふ事もあるは」張吉「ちげへねへ〳〵。何も其ように、日見をわるがる事はねへ」矢場「さうよ〳〵、先から果し狀を付られたからは、日見ッたれに內にグヅ〳〵しては居られねへ筋だ」茶見

世間一統の事だは。あきらめの悪い」張吉「みんな斯う暑からうか、實にたちきれねへ。コレ此通りびつしより汗だ」和次「ヘン生きて居るから、汗も出るのサ」張吉「ヘン何をいつても受がわりいナ」張吉「しれた事よ。六月土用のうちに、ヤレ暑いそれ汗が出たのと、珍しさうにいけやかましい。挨拶するも七面倒だ」張吉「ナゼ〳〵、六月土用のうち暑、いといつては悪いか。まじめな附合でも、しよかん見舞に來て、偖きびしい残暑でござりますとか何とかいふは、當前だらうぢやアねへか」和次「ハヽヽヽコレしよかん見舞とは何だ」矢場「しよかんが見舞に來たら、戸前へかかつてもらうがいゝ」和次「マヅしやればしばらく預ツて、ヲイ張公何の事だヨ」張吉「ナゼ、しよかん見舞を知らねへか。アヽ氣の毒なもんだ。ソレ吉原や二丁町の茶屋から、おらが内へ團扇や扇をもつて來るのを知つて居るだらう。あの事ヨ」和次「ハアそつちの内へ、茶屋が何をしに來るか知らねへが、其時へイしよかんのお見舞に參じましたといふか」張吉「上ツ方のように、ソウ立派にあらためてこそ言はねへが、土用が入ると、さうして歩くのを、しよかん見舞といふのヨ」和次「ハヽヽヽあきれたもんぢいだ。コレそれは暑中見舞といふのだは」張吉「さうもいふがしよかんとも言ふぜ」和次「コレよく聞かツし。あついのが暑ヨ、さむいのが寒ヨ。わかつたか。それを一口にあつさ寒さを尋ねるといふ事だは。上ツ方だとつて下つ方だとつて、土用見舞を暑寒

蛸のあるやつだろう。ハヽヽヽヽ」茶見「そりやァいゝが、皆行く氣か。たゞでさへ暑くつてたまらねへに、物干で照りつけられてたまるものか」張吉「それだとつて、先からはたし状をつけられては百年目だ」和次「さうさ、其かはりこつちも素手では行かねへ。ヤア何にしろ内へ行つて思ひつかう」張吉「さうしよう〳〵。サア〳〵出かけやう。アイおせつさんおやかましう」娘「マアよろしう。しかし是から何かおたのしみな事」茶見「ナニ今の手紙の様子では、苦みらしいのサ」娘「ヲホヽヽヽヽ。へい、どなたさまも御機嫌よう」ト和次「アイまた明日おじやまに參りやせう」ト四人連立ち皆戸川を出でて、早々和次郎が宅へ集り、茶見「コウ今の手紙には正九ツ時といふ事だが、モウ九ツだぜ」矢場「何サ九ツといつても、八ツにはなるものだヨ」和次「エヽ面白くもねへ、不吉な事は思付でもいふもんぢやァねへ」張吉「それにしては馬鹿に暑いぢやァねへか。皆はよく生きてゐるのウ」和次「さうサ正月時分から思ふと、よつぽと暑い」張吉「此様子では霜月ごろ小袖が著られようか」矢場「さればサ、霜月でも手拭地一枚であつがつて、ふるへて居るのが定例だノウ」張吉「そんならまづ一服やらかさう。しかし烟草を吞むも火だと思ふと、暑ツくるしいが、なんと水で吞む工風はあるめへか」矢場「のろまが水天宮様をいたゞきはしめへし。面白くもねへ」和次「此男もばか〳〵しく暑がるぜ、うぬばかり夏のように。コレ

場七さま、土場六、楊次郎ト、ハテナ何の用だしらん」ト封を切るを見る 女房「モシ〳〵まだ明けては惡うござりやせう。いよ〳〵お前方の所へ來た狀かネ」和次「ム丶ほんにさうだ。當名は私等にちげへねへ。大きに御苦勞。ヲイ矢場公、こゝへ見せな、何の用だ」矢場「何かまた思ひつきやアがつたと見える」和次「ハア」ト手紙を見て「然れば今九ッ時拙宅物干に於て、日見の宴を相催し、はてな、日見とは何の事だらう」張吉「おほかた月見は誰しもする事だから、ひねつて日見といふ思付だらうぜ」和次「ヲ丶何にしろあぶねへおよばれだ。モシお神さん、歸んなすつたら、かしこまりやしたと言つておくんなせへ。あついに御苦勞でござりやした」女房「ハイ、唯かしこまらッしやれば、用向は辨じやすかネ」茶見「アイ今私等が行くから分りやす」女房「それでもかしこまつたり、ぜうらくんで居ては、斬られやすめへ」和次「いよサ〳〵、ゐざつても行くから案じずに、さう言ひなせへ。ハ丶丶丶」女房「ハイ〳〵、そしたら皆樣およろりと」トかへり行く。茶見「わからなく理窟ッぽい鼻アだぞ」張吉「さうさ。かしこまつては、斬られめへの、立て居ては斬りいゝのと、白井權八が咄をするようだ。氣味のわりい」矢場「ちげへねへ。あいつア何所の燒芋屋だしらん」和次「ナゼ燒芋屋だ」矢場「アノ手の指を見ねへ、十本ながら黃色になつて居るは、人物といひ詞といひ、ヘン爰らが目の付所だは」和次「ム丶此鑑體はおどろいた。亭主のには、拍子木

がたい。和次さん實におめへのお蔭でたすかつた。茶見公も張吉も爰に居ながら、こんな時には屁にもならねへ。どうでも和次大明神さま〱」張吉「ハヽヽヽ。大きなべらぼうだ、まだトッチて居やァがる。和次さんが菓子屋をたのんで、威したといふに、やつぱり難をのがれたように、和次大明神ッ。ハヽヽヽ、よく〱おびえたと見える」トいはれて少し考へ、矢場「ハヽァほんにさうだノ。エヽ引いめへましい」ト和次郎がむなぐちをとり、「イヤ此大明神野郎、コレ〱〱」和次「アハヽハヽ。あやまつた〱〱」矢場「ムンにや誤ッても承知ならねへ〱」茶見「サア〱また強くなつたは〱」矢場「イヤ強くなつたぢやァねへ、わりい洒落だ。アノまた菓子屋の畜生め、眞面に成つて、からみ付きやァがつて、コウおらァ實にうつたぜ。冗談も程のあつたものだ。已來おことわりだ、虫の大毒だ」和次「それだとつて、あんまりうすッぺらな驚きようだ。ちつと考へて見さつし。夕弟が半死半生にされたといふ奴が、今日悠々と商に出もしめへぢやァねへか」矢場「ムヽさうでも有らうが、深くかんげへて見れば、菓子商人に身をやつして、敵を尋ねるといふ筋も、隨分ある事だからノ」娘「ヲヤ〱大層な思ひすごしようで御座いますネエ」ト何をいつても首尾なはらず、皆いちどに大わらひとなり、矢場八はひよんな事をいひ出し、みえにかへつて恥をかき、大へこみの所へ田舎の三十ばかりの女房、女房「ハイ御免なさりやし、此のうちに此お人様は居りますか」ト手がみを出す。矢場七手もちなき時なればすぐに取つて、矢場「ヲヤ、和次郎さん、茶見藏様、張吉さま、矢

滑稽和合人 二編下巻

斯くて和次郎は矢場七にむかひ、和次「偖まづ預つては歸したが、この儘でも置けめへ」矢場「さうす〳〵。まアどういふ法にしよう」和次「どうといつて、まづ湯へでも入らッし」矢場「ム、湯へへエッて」和次「晝飯でも食つてサ」矢場「ム、飯でも喰つて」和次「用がなくば、晝寢でもするがいゝ」矢場「どうして寢られるものか、寢ずといゝから」和次「そんなら起きて居さつし。ム、ン面がいゝよ。ハ、、、、」別段に聲をはりあげ和次「さて皆樣お聞きなさい。唯今の手柄咄は、女中方に思ひつかれようとたくみ、實は夕土手下で、傳坊の先へ立つて、大きにしかられまして、跡へ追ひさげられ、あぶなく溷へはふり込まれはぐりましたといふが實錄だと、自身の白狀でござい。さて次に私も白狀におよびますが、只今までお隣に居りましたら、矢場七がだいぶ手柄話をいたすを聞きまして、あまりお臍が煑花をこしらへますゆゑ、菓子屋に斯う〳〵言つてくれと申付けまして、矢場七の顏色を眞青に變じさせ、御覽に入れましたが、一寸今日のお茶番でござい」ト聞いても矢場七はまだ心づかず、矢場「コウ〳〵和次さん、ほんたうにお茶番か」ト手をあはせ「エヽ引ありがたいあり

らねへ」和次「ハヽヽヽ、いよ〳〵地鐵を顯したナ。菓子屋さん、いづれ私が呑みこんで居るから、お前はまァ歸んなせへ」菓子「ハイ左樣なら、お前さんにお預け申しませうから、宜しくお賴み申します。これはおせつさん、おやかましう。ヘイどなた樣もおゆるりと」ト、菓子屋は早早かへり行く。

も、くやしくはねへぜ。一人で相手を二人まで濠へボン〳〵と、ぶち込むなんぞといふは、きつくッていゝよ。感心だヨ。成田屋ア、高麗屋アといふ役廻だ」矢場「何サそれがみんな空言だヨ。勿論細道で跡へさがれといつて、こめられたのはほんたうヨ。其時實はくやしかつたから、濠へボンとやつたら、いゝ心持だらうと思つたばかりヨ」和次「それでも現在放り込まれたといふ人があるから、ちげへ有るめへ。どうもきついよ。能ある鷹は爪をかくすとやら、そのくらゐ立派にやつて、知らぬ顔でうそだ〳〵と言つて居るから感心だ」矢場「馬鹿アいゝねへな、おらア生れて喧嘩なんぞは大きらひだはナ。それ去年も、生酔に突張ばされて逃げたのを、お前知つて居るぢやアねへか」和「ムヽちげへねへ。尻餅をついて、砂だらけになつて逃げたッけ」矢場「さうよ、龜の尾のほねをついて、ひどくな病んだッケ」和次「ハヽヽヽ、知恵のねへ始末だッけノ」矢場「さうヨ」和次「それにしては、夕はがうぎと強かつたノ」矢場「ヱヽサそれは空言だといふに」矢場「なぜ又やくたいもねへ空言をついたらう」矢場七は小聲になり、矢場「正直な事はノ、おれも若いもんだから、隣近所や、爰のおせつさんにも、チト手づよい所もあるように、おつう思ひつかれようと思つて、ツイみえにつまらねへ事をいひ出した所が、あひにく菓子屋の弟の喧嘩と符合するといふも、不思議ぢやアねへか。斯うなつて見れば、かへつて恥しくつてたま

張吉「それならほんたうか」矢場「ヱヽわりい聞きようだ。今の喧嘩のはなしは、うそだといふことヨ」張吉「ハアそれではやつぱり、空言はつく男だの。油断はならねへわへ」矢場「何サ、喧嘩をしたのは空言で、空言だといふ事はほんたう。ヱヽ引 何だかおれにも分らなくなつた」ト矢場七はひとりトチ〳〵してゐる所へ、是も初編に見えたる和次郎といふ人、外を通るを見つけ、矢場「チイ〳〵和次さん〳〵、いゝ所へ來てくれた。一寸まア早くこよへ」和次「何だかおれはちつと用があつて、人丸堂まで行くから、歸に寄らう」矢場「なになに人丸どころぢやアねへ、ちよつと來てくんなヨ」娼「モシまア一服おあがんなさいまし」ト、茶をくんで出す。和次郎はアイとゝつて腰をかけ、和次「なんだ變な顔をして、どうしたのだ」矢場「イヤサ馬鹿〳〵しい譯よ。マア聞いてくんな」ト、今までの手つゞきをくはしく話し、「トいふ理窟だが、どうかこの譯のわかるように、お頼だ〳〵」ト、まづい顔にてにが笑ひをしていふを聞きて、和次「なんのそのくれへの事を、何もそのやうにトチ〳〵する事があるものか。そして今さら空言だといつたとつて、菓子屋さんも承知もしめへから、相手になるがいゝ」矢場「ムヽ、相手になつてそこでどういふ工風だ」和次「工風といつて外にしようもねへ、先の相手がモシ死んだら」矢場「ムヽ」和次「解死人サ」矢場「だれを」和次「足下がヨ」矢場「ヱヽ、なんの面白くもねへ、おれが解死人に出るくらゐなら、工風もへちまも入るものか」和次「それだとつて、殺した當人さへいやがる解死人を、だれが外になる奴があるものか。イヤ足下は解死人に出て

は、おめへの弟とはちがふヨ、お前にはちつとも似なんだものを」菓子「それはその筈、私のかかアの弟でござります」矢場「おめへのかみさんにも似ては居なんだヨ」菓子「どうして嚊アを御存じだネ」矢場「ヱ、知りはしねへが、マア似さうもねへ顔色だツケ」菓子「何サ何とおつしやつても、今申す通り、同じ所に一晩のうち、幾度その様な事があるものでは御座りません」矢場「さうでも有らうが、世の中は廣いから、似たはなしはあるものさ」菓子「世の中は廣くとも、場所はやつぱり土手下」矢場「ヱ、引、モウどうも仕方がねへ、正直にいふが」菓子「正直にお名乗りなさい」矢場「なにサ、さうではねへ、正直は、今の喧嘩のはなしは皆うそよ」菓子「ハヽヽヽ、そんな子供だましでは濟みません。又たとへ空言にもいたせ、わたくしの方の喧嘩と、寸分相違のない話ゆゑ、どうあつてもおかゝり合はぬけません」矢場「アヽア、おらアもうひよんな事を云ひ出して、まことに困りきるぞ。張公も茶見公も、だまつて聞いてゐる事はねへ、どうかして下ッしナ。たのもしくねへ」茶見「それだとつて、ちつとも知らねへ事だものヲ」張吉「さうサ、ナゼまたそんな空音話を始めたらう」矢場「そつち達が水をむけたもんだからツイ」茶見「何おいらが水をむけるものか、まぜツけへしこそしたけれど」張吉「さうさ、無精に夕〱といつて、とう〱大變を言出したのだ。實に空言か」矢場「さうよ。何おれが空言をいふものか」

でございました」矢場「何、土手下サ」菓子「ヘヱ、孔雀長屋の先」矢場「さうヨ」菓子「畑と土手の間」矢場「さう／＼」菓子「昨晩かネ」矢場「アヽ夕サ」菓子「ヘヱ何時頃で」矢場「アヽ九ッ過だッけ」菓子「ヘヱそれはまづいゝ事を承りました。其溷の下ずみになつたのは、わたくしの弟でござりますが、昨晩友達と二人で吉原へまゐりまして、喧嘩をいたしたと申す事で、其溷の中へ沈みまして、しばらく出られませんで、寔に半死半生、やう／＼往來の駕屋にたすけられまして、駕で宿へかへりましたが、とてもむづかしからうと、醫者も申します。相手は逃す、ほんの犬死かと存じましたら、今のお話では、おめへが相手に相違はございません」トいはれて矢場七はびつくりまつ青になり、矢場「ナニ／＼、お前の弟の相手とは違ふだらう」菓子「それでも、一ッ夜で同じ刻限、おなじ場所、相手が一人に二人で、二人の方がどぶへ投込まれ、一人は迯げて仕まふと、此くらゐ間違のない事はございません。何サ身持のわるい奴でございますから、死にます方が勝手でござりますけれど、さすが實の弟ゆゑ、犬死をさせるも不便でございますが、お前といふ相手の知れますといふも、天道様のお引合せ。ヱヽ引ありがたい／＼」トしきりによろこぶ。茶見藏、張吉、茶屋のむすめも、ひよんな事になりしと顔を見あはせ、さすがのおしやべりも一句も出ず。矢場七はます／＼色を變じて、矢場「コレサ菓子屋さん、なんぼお前がさういつても、おれはその相手ではねへぜ」菓子「それでも今お前の口からおつしやッたからは」矢場「ウンにやおれが言つたの

つて、ぐやしいけれど立どまつて居ると、ずいと通り拔けながら、跡からついて來い、とんちきめと言つて、先へ立つて行きやァがるから、おれもモウどうもこてへられねへから、そつと草履を帶へ挾んで」茶見「ハァ寢起の草履のようにしたの」張喜「マァまぜつ返さずに聞かッし」「それから逃げたか」矢場「何のたゞ逃げるものか。それから尻をぐいと端折つて」張喜「ウヽそこで迯出したか」矢場「マァサ聞かッし。そつと跡から行つて、溷の端を行く野郎を、出しぬけにポンと突飛すと、あの泥溷の眞中へ、イヤ小氣味よく放り込んだらう。さうすると連の野郎が、ヤ此野郎とふりけへつて」茶見「チッと煙草盆があぶねへ。まアちつと待たッし、此呑みかけた茶碗もこつちへ片付けて、フンそこで」矢場「ふりけへりながら俺にかぶりつく所を、ぐいとしやがんで、足をはらふと、おれが天窓をこして先へ放り込んだ奴の上へ、まつさかさまに打ち込んだから、サア下の奴は泥の中へ埋ッて、ちつとも見えずョ。上の野郎も、もがきまはるほど、泥の中へづぶ〳〵踏込むから、上る事は出來ず。イヤいゝ心持で〳〵。サアそれからおもいれ太平樂をならべ立つて、ずつとひつぱづして歸つて來たが、アノ下になつた奴は死なねへければいゝが」トいふ所へ、隣の茶見世に居たくわし賣箱を肩へかけずいとはいり、菓子「ヘイどなたさまも、チトお菓子でもお上りなさりませんか」ト脇のしやうぎへ腰をかけ、「モシ唯今のおはなしは、氣味のよい事でござりますネ。それはどこの溷

つよいのは、夕の下へ付くの」茶見「張公マァだまつて聞かッし。淡島の唄を出そこなつたように、さつきから夕〳〵とばかりいつて居るが、マァどうしたのか、譯がわからねへ」矢場「何サタ土手下で喧嘩を、ふつかけられた咄ョ」張吉「フン吹掛けられた、ヘンおつないひ草を覺えたナ。今歳の冬は目ぐら縞の皮並をはいて、太織縞の抱卷へ、黑天の半襟といふ拵で、手拭を荷やつけへにして歩行ッし」茶見「ムヽ受けた、よし〳〵。そこで其喧嘩はどうした、さぞひどい目にあつたらう」矢場「所がマァ聞かッし、夕、ホイまた出た、しかし夕の事だから、夕といふが悪いか」茶見「だれも何とも言ひもしねへに、どうでも言ふがいゝはナ」張吉「夕でもよんべでもいゝとして、夫からどうしたといふのだ。アヽじれつてヱ」矢場「何サ夕どうかいふ風が吹いて、ツイフラ〳〵とひやかしに行つて九ッを打つて、モウすつぱりひやけたから、ぶら〳〵と歸りがけ、土手下の細道をすた〳〵來ると、先へ二人竝んで、何かのろけを。受けッはづしッ行く奴があるのよ。其跡から來て見たが、あんまり足の遲い奴等でじれつたくなつたから、すこし間を見て、ずいと先へすれ拔けて、さつ〳〵と來ると、跡から、ヤイ野郎待て、韋駄天がおはなしを賣るやうに、あんまり先へ出るなヱ、跡から來い、先へやる事アならねへと言やァがるから、ふりけへッて見ると、大きな野郎が二人ョ。とても喧嘩をしては損だと思

つかふものだゾ。聞いて居るとまことに手に足をにぎるぜ」矢場「なに〳〵、いやしい詞を聞くと、手に足をにぎると、なほるか。妙なまじなひだの。ハヽヽヽ」張吉「ナゼ〳〵、手に足をにぎるがをかしいか。足で手をにぎりはしめへし、ヘン間違が有る物か。世の中一統いふ詞だ」矢場「世の中一統いふ詞は、手に汗をにぎるといふは。それでこそ冷汗が出るといふ筋がわかるだらう」茶見「アハヽヽヽ、ハヽヽヽ、わアイ〳〵ざまを見ろ。人一倍片言をぬかす癖に、いやらしく人の詞とまげを」矢場「チット又ちがつた。敵はおれが取つてやるから、足下はだまツて居さつし」茶見「ハイ〳〵左様なら何分よろしくおたぬき申しやす」矢場「コウそりやアいよが、手に足を握るといへば、夕とんだ喧嘩をしたぜ」（ト、とかく夕べの喧嘩のはなし、手柄のよしをおせつにきかせて、思ひつかれんといふ底だくみ故、話したがるなり。）ぜんてへ和事師の本役ではねへが、どうも先からぶつかけられては仕方がねへ、家にねへ藝でも、名代に乗ツてるからにやアいやとは言はれねへはサ」茶見「何がどうしたといふのか、さつぱりわからねへ」張吉「わからねへ筈ヨ。まづ最初が、よわいといへば、ゆんべといつたぜ」茶見「さうさノ」張吉「今又手に足を握るといへば、夕だらう、何といつても夕と付けるが、こいつア何でも孕句と見えるナ」矢場「いよサ〳〵おれが悪かつた、堪忍さつし」茶見「ハヽヽ、ハ、よわい奴だナ」矢場「それがサ、夕ハつよかつたぜ」張吉「ハア弱いといへば上へ付いて、

張吉「うんにやサどんな半天だよ」茶見「何がヨ」張吉「今のうんてんばんてんの事ヨ」茶見「ヘン、うぬも片言ばかりいふくせに、人の言葉とがめか、利いた風な」ト、いふ所へ、是も初編に見えたる矢場七此茶見世へずいとはいり、矢場「サアサアまた爰へかたまつたナ。奥の方はモウ見廻つて來たのか。ア丶こんのいゝ手會だぞ。おせつさんなんぞも、サゾうるさからうのウ。山姥の告子を見る樣に、むつくり起きると、山めぐりが商賣だ」張吉「成るほどおいらなんぞは、芝居でする樣な山姥の告子でもあらうけれど、茶見公なんぞのは、山めぐりぢやアねへ、山あらしといふけだものだア。それは偖おき、矢場公ちつと聞きてへ事がある。ア丶うんてんばんてんといふ半天を知つてゐるか」矢「なんだ藪から棒に」茶見「何サ聞いて下つし、今迄おれと器量くらべをして、團扇がこつちへ上ツたもんだから、急腹で、すこしノおれが詞のあやまりをつかめへて、何かぐづ〳〵言ふのヨ。よわいぢやアねへか」矢場「ハ丶アさうか。そりやアよわい〳〵ハ丶丶丶。コウ、よわいといへばゆんベナ」張吉「ゆんべとは、どんな屁だ」矢場「エ丶やかましいわへ此べらぼうは、また何だとつて、今日はそんねへに」張吉「そんねへとは、其樣の略語か」矢場「コレさうばん毎とまげられ」張吉「チツト、とまげるとは咎めるの言ひあやまちなるべし」矢場「ヤイ、うるせへわへ」女「チホ丶丶丶ホ、まことに張吉さんは、もの知りだねへ」張吉「いやはや下ツ方といふものは、いやしい詞を

面とならべられては大に役不足だ。おいらだとつて、何も世間にねへといふほど不思議なきりやうでもなし、随分堺町葺屋町邊には、まぎらはしき類面も見えるけれど、張キ等と違つて、物數いはずサ、こうとうでサ、底に情があるもんだから、ソレお前達はじめ、女中方は皆ちよいと一切くつて見たがるさうだが、張キ等が顔色を見ねへ、不斷心安く突合つて居るから、なんとも思はねへが、夜夜中だしぬけにひよいと見ようものなら、氣のよわい化物は、わつと言つてぶちけへるぜ。その面でサ、物かずいつて放蕩でサ、底に瘡毒氣のある男だ。たかでおいらとは裏表、うんてんばんてんだ。ほんによ、たゞ人間に似た獣、マアほめればよく出來た猿サノ。その目かりがきかねへでば、皆戸川のおせつさんでも、あるめへぢやアねへか。ア、口がすつぱくなつた、お茶でも水でも一杯お願へだ」女「大方さうだらうと存じて、モウ汲んで待つて居ました。ハイお湯」茶見「ハヽアぬるまにして湯呑へたつぷり。アツア氣の付いたもんだナ。ありがたいく。成るほど通りものの寄合所になる筈だ。南無俗名おせつ大明神さまくくさま」張「ヘン丸で亂心の體だ。斯うしやべるのを蔭で聞くと、だまつて居るやつはみんな不男の樣だが、偖まづきりやうの評は、しばらく頭取あづかり置きまして、ヲイ茶見公、今いつたうんてんばんてんといふはとこその揃か」茶見「ナニ、ヘン、何かつまらぬ事を申し出したぜ」

行き、ある茶見世の前を通れば、茶屋の娘は聲かけ、女「チキ茶見さん張吉さんおそろひで、マアちよつとお寄りヨ。すぐ通りは法度」茶見「おめへも氣のはやいもんだぜ。どうして爰をすぐ通りがされるものかナ。國を出る時から、お小休は皆戸川と、關札はきまつて居るのだはナ」女「へヱ、早速でござりますネ。門違でお氣の毒だが、マアわざつとお茶を一ツ。まんざら毒も入れませんから、政岡にきかずと、お心置なく。ヲホヽヽヽ。チヤ張吉さん、ナゼそこに立つておいでなさる。それほど先をお急ぎなさるを、むりにおとめ申して、お氣の毒だねヱ」張吉「コウおせつさん、お前いやみばかり言ふけれど、さういふ譯ではねへが、じつに内からのどをかわかせて來て、またお前の所で茶をかわかさうと、思つて來たに違はねへが、こゝへ來ると、ちよいとした事が癪にさはつて、内へはいるが嫌になつたのよ」女「チヤ〱何が癪にさはりましたヱ」張吉「いはねへは罪だからいふが、おめへ今茶見さん張さんおそろひでと、言つたらう」女「左樣さ。それがまたなぜ癪にさはります」張吉「聞かずとてへげへ知れた事だ。茶見藏が面と、おいらが器量を、お揃といはれてたまるものか。あんまりおめへ目がきかねへ」女「ヲホヽヽヽ、ほんに惡いことを申しましたねヱ。堪忍してまア爰へお掛けなさいまし」茶見「コレおせつさん、其一件なら、張キにあやまるは筋違へだらう。器量づくなら、おいらが

滑稽和合人 二編上巻

唯たのめ、しめじが原のさしもぐさと、大慈大悲の誓には、枯れた榎も植添へて、めぐみぞ深き法の庭、地獄の主も婆アさまを、連れて地尻へ樂隱居、過報を待つか寐釋迦堂、立つて欠出す韋駄天堂も、同じ賽錢の山をなし、鐵壁もくだく雷神も、觀音力には門番をつとめ、廿四間に蘭麝の香滿々て、二十間の竈の烟、引連れて賑へり。諸願成就の額は名家の筆をふるひ、いづれあやめとひきぞわづらふ、源三位の手がらには、おそろかんじん胯をくゞり、仁王門の中には、疱瘡まへの子供市をなし、隨身門の外には、矢大臣の集會絕えず。かゝる繁花の靈場も、奥山とよぶ名によるか、今はむかしの事ながら、とんだ茶がまをたぎらせて、客をもてなす古だぬきあれば、鐵漿を落して楊枝見世、牙とがらして人を喰ふ狼あり。左勝手の白歯の矢とり、的はむかうへ掛けなから、四寸の的をねらひよる、矢先もおそれぬ白面九尾、手先の早き手妻れんまん、猿が人眞似物眞似も、みなそれ〴〵の繁昌は、大悲の惠ぞ有りがたき。爰に彼の初編に見えたる能樂仲間 茶見藏 張吉 中形の裕衣、日和足駄がけにて、いつもの通り奥山をぶらつき步

自序

什麽本小冊の端書か耻辱か、わからぬ苧環の糸口をいはゞ、僕元來業の、小刀細工のいとまある日、亦は夜なべの燈皿に、つれて小首をかたむけて、自在にならぬ筆先に、かき立ててみる燈心と、共に短き才をもて、そこはかとなくかい付けし、大俗愚談の小冊類、机上に充つれど見る人なく、むなしく紙魚の巣となるべきを、不思議に蓼食ふ書肆有つて、大人の序文に畫工の力を添へて、やう〳〵櫻木に、乘氣になりし板元が、慾の力をかりそめに、鯉丈と附けしおのが名も、鯉とは讀めどはねかへり、文しろう人のくはせもの、摑料理のあんべへは、こんねへに、こうしねへ、あんねへに、あよしねへと、数へる人もねへイ〳〵〳〵、下主の答言の安うけ合、和合人の二編をと、文溪堂の催促に、臆面もなく奥山の、趣向も淺き淺草地内、毎度かはらぬ麁文の滑稽、唯筆先の豆藏とも見給へかし。

淺草諏訪街河岸の市隱

瀧亭鯉丈誌

のたはれ遊びの滑稽は、後編
につゞり奉レ入ニ御覧一らん。

場公、氣をしつかりさつせへ、ばか〳〵しい。マアこつちへ來て、うがいでもするがいゝ」ト無理に縁側へ連れて出てれば、土場六は小聲にて、土場「なんと謀計は妙だらう」張吉「ナゼ〳〵」土場「ソレ馬の屎の生體は、コレ見ナ」ト金龍山の皮包札紙をそつとみせれば張吉「ハヽア淺草餅か」土場「ムヽきなこ計りの誂ヨ」張吉「イヤこいつは美味くひつかつがれた。いま〳〵しい。ハヽヽヽ」土場「コリヤ聲が高イ」張吉「おもしろし〳〵。イヤそんならおれも、化され人に成ウ。あんまりくやしい」土場「ムヽ爰へ出ると、すぐに又化されたといふ顔でやらつし。サア壹ツ喰ひながら座敷へ歩びねへ」張吉「ヲット妙々。又胸をわるくさせてくれべヱ」ト餅を手にとりとぼけた顔にて座敷へきたり、張吉「なる程土場公の喰つてる餅は不思議にうめへ。道理でしきりに食ふと思ッた」ト又むしや〳〵食へば、今度は皆々見るもいぶせく顔をまげ、興をさまし、あきれて目と目を見合ひて居る。和次郎も楊次も荒増承知してゐれども、わざと胸のわるきこなしにて。楊次「アレ〳〵又一人ばかされ人が出來た。こまつたもんだ。是から段々こつちの身の上だ」お照「妾やアモウ、どうしませう。胸へつきあげて苦しくなりました。土場さん張吉さん、後生だからモウ食べないで下いましョ。ア、ゲヱイ〳〵」トみな〳〵顔をしかめて苦しむを見て、猶々二人は笑壺に入り、土場「それでもあんまりうめへ。モウたつた一ツ喰うべヱ」ト土場六が喰へば、張吉も同じく乘氣になり、張吉「お前達はナゼ食はねへだろう。是程うめへものを」ト座敷に落ちたるも矢張同じ餅と心得、チヤッと取ッてむしや〳〵と食ひかけば、生物の馬ふん故ワッといふて吐き出し大口あいて、「アヽ、アヽ、カイヘンガ〳〵どうせう〳〵」ト狂ひまはり、鹽よ、楊枝齒みがきよと、大さわぎとなり、是より最初矢場七、張吉、茶見藏が入替へ置きし宮戸川を呑むをかしみより、其おどしつだましつ間違のをかしみ、實に和合人のむつましく、春秋

ヲヤ〳〵大相々々。ソレ肴の中へも。エヽきたねへ」張亘「ほんにどうして此様に出たらう。ヤア〳〵ソレ矢場公の袖口にもぶらさがつて居るは。早く縁側へ出て庭へふり落さつし。マアどうしたのだ。じょむせへ男だ」ト縁側へつれ行き土場六が袂を見て「これ〳〵袂の中にどんとめょずが居るぜ」茶見「ドレ〳〵ほんにナア。そして大根のしつぽなんぞもあるが、コレ土場公、をかしな眼ッつきだぜ。氣をしつかりと持たつし。コン〳〵にやられたようだぜ」和次楊次はせつかくたくみし意趣返しの始終、矢場六がとんまよりむだ事となりしかば、とてもの事と、おのれが懐中せし馬の屎の皮包をそつと出し、是も土場六が懐より出したる風情にて、矢場「ヲヤなんだか竹の皮包も持つてるが、なんだ知らん」トわざとひらきながら座敷中へ馬のふんをボタ〳〵落せば、矢場「ヤア〳〵何だ〳〵。馬の屎ではねへか。ヲヽきたねへ大變々々」みな〳〵「ハヽヽヽ、ハヽヽヽ」張亘「コレ土場公、今日はマアどこへ行ッたのだ。どうでも狐にちげへねへようだ。イヤモウ氣のきかねへ行きどまりだゾ」和次「あきれたトンチキだ。アアしかし化されさうな人物だのう」トロ々にわらはれ、土場六ひとりかぶりとなりしかば、今は土場六もやけになり、懐のうちにて金龍山の餅をだし、座敷へちらけし、馬のふんを拾ふふりをして、土場「アヽナゼ餅を此様になげちらして置くのだ。もつてへねへ」トいゝさま、まことの餅をむしやり〳〵と喰へば、藝者をはじめ見るにたまらず、胸わかつかせつきかへし、ゲップ〳〵と大騒となる。矢場「コレ〳〵土場公、大變な事をするは。コレサ〳〵」お照「アレ〳〵、又壹ッお上りだ。エヽモウどうしませうねへ。茶見さん早く取上げ申して下さいましヨ。エヽ引ゲエイ〳〵」茶見「エヽ引、おらアモウ虫歯が走ッて、ものが云事不成。ゲエイ〳〵」張亘「コレサ土

んな事をいつたから、有難山の鳶烏と思つて居た」お照「イヨ〳〵どなた様もおたつしやな事」トいふ所へ醫者をおくりし張吉かへりがかりに此體を見て、ぐつと氣をなをし、張吉「ヤア引、オつナ匂がするから、百助の番頭でも來て居るかと思つたら、道理こそ、廣小路の男ころしか」お照「チヤ〳〵張吉さん、サアこつちらへ〳〵」張吉「時に是は又どう云ふきツかけで、本舞臺がぶん廻しになつたのだ。いよ〳〵氣が替ツてうれしい〳〵。先かけ付十ぱいとやらかそう」お照「ヘイ早速ながら上げます」張吉「チツトきたり、是は一ツ押へようと言ふとこだが、そうするとこつちの虫が押へきれねへ。マヅひんのめ〳〵」ト是からだん〳〵亂酒となり、藝者は上方唄など一トくさり唄ひ、跡は潮來、流行唄、甚九などさま〳〵大さわぎのうち、和次郎は土場六が袖を引き、もはや時分はよしと目くばせすれど、土場六は呑みすごせしうへ藝者にうかれ、夢中になつて踊りさわぎ、たくはへ持ちし狐の尾、其外くさ〳〵のものしだらなく取落せしを、矢場七はちやツとひろひ藝者の顔をちよいと撫づれば、お照「アヽ引。いやだア。チヤ矢場さん、何でございますへ。わたくしやアモウ、びつくりしましたヨ。悪しい。ドレ一寸お見せなさひまし。おやおや何の毛だねへ、氣味のわるい」茶見「アヽそれは狐の尻尾だらう。矢場公どうしてこんな物を持つてる」トいふに、土場六心づき、懐中をたづね見れど何もなし。和次郎、楊次はハツと思ひ、土場六をにらめる。土場六ははやツブ六と改名して舌もまはらず。土場「アヽ其はおれがしつぽだ、こつちへよこさつし」和次「エヽモウいけねへ〳〵。そんなものはモウ打捨ツて仕まはつし。ヘンおへねへトンチキだア」楊次「そうよ何だらう、ざまア見ねへ」ト何か三人ぶつくさすれど外のものへは一向わからず。少ししらけし其時に、藝者はいかゞしたりけん、ワア引、と飛びあがる。お照「アヽモウどうしませう。アレ〳〵」矢場「何だ〳〵、おや〳〵蚯蚓か。

は彼等がわざと知れど、今は事なくをさまりしかば、又かの狐の趣向に腹いせをせんと思ひ居るゆゑ、おなじく知らぬ顔にてゐる所に、口をかけたる藝者のお照、左褄のちよこ〳〵あゆみ、枝折戸あけて飛石づたひ、駒下駄の音聞くよりも、茶見藏は飛んで出て、茶見「ヤア引、是は〳〵夜中と申し早速の御來臨」和次「なんだアノべらぼうは、やつぱり醫者様の氣でゐるそうだ」お照「ヲヤ〳〵茶見さん何でござりますへ。寔におまじめで、ヲホヽヽヽヽヘイ和次郎さん、ヲヤ是はどなたもお揃で、わたくしやア虫が知つたそうで、寔にうろたへまはつて急いで參りました」土場「なんだ又這入り〳〵殺文句で。どうもならねへゾ」和次「もう〳〵ころす事はよして貰ひてへ。今せつかくお醫者がいかした所を、又藝者にころされてたまるものか」此しやれ藝者にはいつかうわからねど、お照「ハヽヽヽそれだからあんまり美しいのも、罪で御座りますねへホヽヽヽ」茶見「ヲヤ〳〵お前お照だと思つたら、おたれだの。サアおたれさん、持合だから一ツ」お照「是はちと、然しわるくないものだ。先いたゞきませうネ。ヘイ是は矢場さんはゞかり様」矢場「コレサ、おめへにも似合はねへ、タヾ戴きませうといふことが有るものか、いたゞきともおつしやらないものヲ」茶見「ヲツト、俺がわるかつた。かんに信濃の善光寺」土場「コレサ女郎衆はよい女郎衆と洒落る所だぜ」お照「ヲヤ〳〵、それでもあなたが、けんじ天王秋の田の、コレサ、あんまり古イしやれは、おそれ入谷の鬼子母神だぜ」土場「そう言ひなさんな、此子が愛へ這入り〳〵ころし文句の、うそを築地の御門跡だから」和次「アハそうか。おらア又此子があ

けへし、歸りに一寸お照がとこへ聲をかけてもらいてへ」男「ハイ〳〵お呼なさりますのか子」和次「さうよ。さうだがさつき呼んだけれど、今いふ通りこつちに大取込が有つて、すぐに箱をけへしてやつたが、モウこつちも片附いたから、明いて居るなら直に來てくれる樣に、よく譯を言つてくんねへ」男「ハイ〳〵、かしこまりました。左樣申しませう。ヘイさやうなら」和次「アイ〳〵、どうぞお頼みだヨ」土場「時に和次さん、こりやアどういふ了簡で此樣に御馳走が有るのだ」茶見「さうよ、何だか不氣味だ。又おれに三本もつて、壹本は跡廻になつて呉れろではねへかしらんの。どうも一口呑むと三口づつも追付けられるで恐れるぞ」和次「さう言はつしやんナ、貴樣の五百掛も、丁度五たび掛捨にしたは」土場「いよサ〳〵、拾や廿や三拾貳文位の事はおれがどうでもして遣るから、そのようなさもしい事は言ひッこなしだヨ」和次「イヤ今日はお祭では有るし、又外に心祝の事があるから、ちよと一杯やらかすつもりだから、決してお心遣なくお上りなさい」茶見「イヤモウ跡腹さへやめません事なら、隨分御馳走になりますで御座りませう」和次「ヘン病させ榮もいたしませぬお腹でござりますから、決してお案じなさりますナ。サア何にしろ一杯やり付けませう。燗はどうだの、ぬるくとも一杯虫を押へよう」ト是よりさへツ押へつ大酒盛となり、さいぜんより矢場七茶見藏は、楊次郎をおどかせし毒をいひ出して、笑ひたけれど、思ひもつかぬ坊主の氣絶、大さわぎとなりしゆゑ、是もおのれが仕わざと思はれんと、さすがに氣の毒におもひ、だんまりにて居る。和次、楊次、土場六は、坊主の氣絶せし

遊戯集會
半醉之姿
意吐新説
流行之詞

知らん顔の半兵衛さんか」 婁念「ハイ左様なら旦那様、明日お目にかゝりませう。ヘイどなた様もおゆるりと、お話しなさりまし」 ト提燈をつけ、平氣にて表へ出て草履をはきながら、「イヤ今日も修行からかへりますと直に佛右衛門様に言付けられまして、諸方觸歩行ましたせへか、はゞかりながら足の裏がだいぶ痛み升。モウ〳〵年を取ッては意氣地はござりません。ハヽヽヽ」 トとぼ〳〵表へ出て行く 土場「をかしくもねへ事をよく笑ふ坊主だ。ヘン足の裏はいたむ筈だア。明日は火ぶくれに成つて歩行れる事ではねへぜ」 楊次「ほんにあんまり平氣でをかしいようだ。どこの國に目を廻したのを知らずに居るといふも、あんまり噺のようなことだ」 矢場「さうよ、是社實錄だけれども、跡で人に話しても、ほんたうにはしねへぜ」 和次「ちげへねへ。しかしこつちには大仕合だ、駕にでも乘せて歸すやうで見ねへ、大さわぎだ。是なりにうつちやッても置かれず、ほんに貧乏神を送り出したようなもんだ。有がてへ〳〵」 ト彼是はなして居るところへ、廣小路の巴正の男、最前和次郎が、あつらへし酒肴をもち來り 男「ヘイ御免下さりまし、イヤモウ申しわけもござりません、大きにおそなはりました。今日はお祭で、御客様が一度に落合ひまして、寔に廻り兼ましたゆゑ、大きにおそなはりました。どうぞ眞平御免なさりまし」 和次「ヲイ〳〵、ほんにさうだッケ、こつちにも大に取込があつた故、さつぱり忘れきつて居たが丁度いゝ所だ。ノウ土場公」 ト土場六に目くばせして、最前のもくろみやつても宜からうと教ゆれば、土場六、楊次郎も承知の趣目かほで知らせる。 和次「ヲイ巴正のわ

大病の心を知らんと、本草にも出て居ります。ア、なげかはしい族の有様、見るも中々けがらはしい。サア參じませう」いしや「ハヽヽヽ、是は又ひとしほ高上いもので御座りますナ。サ然らば皆樣」みな〳〵「ヘイ〳〵大きに御苦勞さま」張吉「ソレ矢場公、お提燈でも付けねへか、氣のきかねへ」いしや「イヤ是は〳〵はゞかり」矢場「ヘイ〳〵夫お供の衆、お提燈」いしや「ハヽヽハ隨分お大事に」ト現に見せたる醫術の妙、鼻高々と歸りゆく。跡はしばらくひつそりと、じゆずのきれたる百萬べんのごとく、講坊主をとりまいて顏見合せて居たりしが、和次「チヤ矢場公、藥はもうよからうぜ」矢場「ほんにはかつて見よう」妻念「旦那さま、私はもうお暇申しませう。是からまだ二三軒廻らねばなりません。ハヽヽヽ。イヤうたゝ寐いたしたせへか、どうもあじな心持で、氣抜がしたようで御座ります」矢場「サア〳〵丁度一盃になつた」ト藥をついで、矢場「チイ坊さん、氣色がわるくは、是を一ツぱい呑みナ」妻念「いゑ〳〵どう致しまして、モウ〳〵御酒は、御免なさいまし。只今佛右衛門樣で大きに食べすごしまして、そこで此方さまへ參ツたとも存ぜず、ふせりましたで御座りますから。ヘヽヽヽ」茶見「なにサ酒ではねへ藥だヨ」妻念「イエイエナニあなた、いつでもいたゞく御酒でござりますものヲ。どうしてお辭儀ではござりません」揚次「コウ和次さん、此坊主はウンと言つたことは、いよ〳〵氣が付かねへぜ」和次「さうよ、此樣子では、モウ藥にもおよぶめへ、歸るならうつちやツて歸へすがいゝ」矢場「ちげへねへ、

く、氣分にもさはらぬぢやテ。最早お案事はござらぬ。そこで是を一帖水壹盃半入、一ぱいに煎じお用ひなされ、生姜は入りません。イヤ左様なら私はお暇申しませう」和次「是はく夜分と申し、殊に早速おいで下さりまして、ありがたう存じます」茶見「イヤモウお影を持ちましてわたくしども迄命拾いたしました。すでの事解死人に出ようと致しました。ハ、、、、」和次「左様ならば。チイだれぞ御薬箱をもつて、御一所に行つてくれねへか」張吉「チット合點だ。今度はおれがお供だ」いしや「是は御苦労で、しかし餘り憚りな事。イヤあやにく僕を使につかはした跡へお迎でござりました故、取敢へずあなたと御同件いたしました。ハ、、、、」矢場「ナニナニ決してお心遣なくお連れなさりまし。なんならすぐにお置きなすつてお遣ひなさりましてもよう御座りますが、アヽしかし迚もお氣にはいりますまいテ」いしや「なアるく。しかし此様な立派な僕を遣ひまするには、主人からいたして氣にいりますまいテ。ハ、、、、」土場「どういたして立派所ではござりません、反歯はよほどそつぱで御座り升が、とてもたゞの僕には使へますまいけれど、黒ぼくの替りに、お庭へでもお使ひなさるがよう御座ります」いしや「ハ、、、、大分おまへの事を色々おつしやるが、是は何か遺恨でも有る事と見えますナ」張吉「エヽ何サ小雀等が、何かチウく申しましても、とんと取あへません。ヘン泓石なんぞ

迎が來て、あぶねへことだッケ。どうだ心持は」妻念「ハヽヽヽ私はハヤ參る事は當りまへでございますが、マダ〳〵年はよつても品川ぐらゐは。ハヽヽヽ」和次「フムヽ、寔に遠通寺樣だ」ト耳のはたへ口をよせ大ごゑにて、「心持はどうだ、なんともねへか」妻念「ハヽヽヽ」和次「イヤわらひ事ではねへ、氣をしつかりともたつせへョ」妻念「ハヽヽ其樣に隱しておつしやらずといゝ事に。ハヽヽとかく旦那は冗談計おつしやる。どうして私に持れませう。夫そこお若衆方に、ぢきに突倒されます」和次「こいツアむてへ平氣なものだ。しかし氣色もわるい樣子はねへゼ」張吉「さうよ、目を廻した事は知らねへ樣子だの」土場「さればサ、あんまり平氣ナもんだが、モシお醫者樣、此分では案事ますす事もござりますまいが。しかし斯ういふ事も有るものでござりますかね」いしや「成程成程、隨分有る事で。一體人には七傷と申すが御座るテ、それは、アヽ喜び過ぐれば心を傷り、怒過ぐれば肝を傷り、憂過れば肺をやぶり、思ひ過れば脾を傷り、アヽ驚過れば肝をやぶり、恐過れば腎を傷り、勞過れば脾を傷るとござりまするが、最初脉ていを見ました所、寸關尺のうち、關の脉が殊の外沈んでござつた故、肝を傷りましたとは見ましたが、足の趺陽の脉がたしかでござつた故、療治いたして見ましたが、案の如く蘇生いたしたテ。さすれば何か風と驚怖いたした事でもござつて、そこで肝をつよく閉ぢましたか、夫を針で開を付けましたゆゑ何事もな

左様かナ。ハヽヽヽ。イヤもう宜しうござります。エヽそこで藥を一帖用ひたい。ア、はゞかりながら藥籠を是へ」和次「へイそれ矢場公」矢場「へイ私かネ」いしや「イヤそこに私の藥籠が、夫をちよつと是へ」土場「へエ引、チイ楊公、何をうつかりしてるのだ。そこにお供の彌九郎どんが、チイお供の衆、一寸旦那が」茶見「へエヽあなたのお供かネ。イヤそれは爰にはおいでなさりませぬ。わたくしがすぐにお供いたして參りましたッケ。へヽヽヽ」いしや「イエサ其藥箱を是へつかはされ、補を一帖進ぜませう」和次「へイ〳〵それお藥箱をよこせとおつしやるは。おれがそこへ片寄せて置いたッケ。アヽ矢場公のうしろに有るは。何をきよろ〳〵するのだナ、不器用ナ」土場「へエヽお藥箱の事かね。へイ左様ならそれへ上げます」ト前へなをせば、すぐに眞田の胴〆を解き、關東じまの上は包紫ちりめんの袷帛紗など、おッくうにひらき、無さうの藥箱の引出しをあけ、びろうどの袋より銀の匕文鍋を出し、なにか小首をかたげ、かんがへながらつゝみがみを廣げ調合するを、みな〳〵打寄り、病人にもかまはず見とれてゐるに、妻念は正氣つきだん〳〵心よくなりしかば、おのれは酒に醉ひたふれうたゝ寐せし心にて、妻念「是ははや旦那様、眞平御免なさいまし。どうして私は爰へふせりましたか」トいふこゑにおどろき、みな〳〵「ソレ坊さんが何かいふは」トみな〳〵心づき、介抱せんとすれば、妻念「どなた様もようお出なさりました。へイ眞平御免なさりまし。旦那さま明日は生得大酒様のお開帳のおつきで、講中不殘高輪迄お迎に出升。どうぞ御苦勞さまながら、朝五ツ時より佛右衛門様までお出來さりますように、どうぞ御不參なく。ハヽヽヽヽ」土場「コレ坊さん、大酒様の迎どこではねへ、今地獄からお前の

てるさん所の若衆、見る通りの譯だから、マア此藥箱は持つて歸ッてくんねへ」男「へイ藥箱をかへ〳〵」和次「ムヽ。エヽ何サ、三絃をヨ」男「ハイ〳〵」と三絃箱を持ちさうかへる。和次「ソレ茶見公、今足下の持つてきた藥の事よ。まごつかつしやんナ」茶見「ナニおれが持つて來た、ムヽ藥箱か」和次「しれた事だは。こぢれつてへ」茶見「何をいふかさつぱりわからねへ。そりやお藥箱」場「アヽ引。痛へぞ、ひどくぶつ付けるは」茶見「チツト堪忍〳〵、しかしそんな天窓はどうでもいゝが、お藥箱さへいためねばいゝ」ト何かとりしまりもなく皆々うろたへゐる。醫者は其時すこしもさわがず、しばらく容體を見て、いしや「成程、中症とも見えず、是は何かフイと、取詰めた樣子と見えますが、隨分脈もたしか、臍下に動もござりますゆゑ、蘇生いたしませう。マヅ針を二三本打つて見ませう」土場「へイ〳〵、どうでもよろしうお賴み申升」茶見「なんとお醫者樣の前でござりますが、是ツきりになりましたとて、私どもの解死人に出ます理屈も有りさうもないもので御座りますが、マアどうで御座りませうネ」いしや「ハア夫ではおまへと口論でもなされての事か」茶見「イエ〳〵どういたしまして、私は」張吉「是サ、此男も今そんナ事をいつたとつてはじまらねへは。マア〳〵ちつとも早く、へイどうぞ針でも藥でも」いしや「ハハ成程々々。しからば」トさつそく針入を出し、二三本うてば、忽ちウヽンとよみがへる。みな〳〵「ヤア〳〵氣がついた〳〵」いしや「どうだ氣がつきましたか〳〵」和次「モシ物をおつしやつても聾で、大抵ナ聲では聞えませぬ」いしや「ハア

じました」矢場「イヤサ、お醫者だらうの」箱持「イエ藝者でござります」張吉「何のこつた。どうしてまた此騒動の中へ藝者が」和次「イヤ〳〵それは、おれが掛けてやつたのだが、ア、今來てもはじまらねへ。おめへ氣の毒だが、はやく歸ツて留めてくんねへ。今爰にちつと取込が出來たから、片付次第又さういつてやらう。マヅ此箱はもつて往つてくんナせへ」張吉「和次さん此箱は置く方がいゝぜ。すぐに調合して貰ふから」和次「いゝヤサお醫者ではねへ、藝者だトいう事ヨ」張吉「藝者さまでも何でも、今急な事だから、ちつとも早く間に合ふ方がよからう。程なくお出でなさるだらうから」和次「是サそれは三絃箱だは。マアしづかにさつし、さうトッチてばかり居てはいけねへ」トいふ所へ、茶見藏は大あせになり醫者をどうだろうして來り、茶見「サア〳〵お醫者樣がござつた。そりや此御箱をそこへとつてくんナ。マヅ足を洗はう。サア宗玄樣お上りなさりまし」張吉「ソレ藝者樣がおいでなさつた、モウ灸もいゝにして置かッし。へイまづ早速ながら、御覧じてくださりまし」いしや「ハイ〳〵、是は皆樣大きに御苦勞デ。時に何かナ、氣絶さしつたお人とやら」矢場「左やうでござります、此坊さんでござりますが」いしや「成程〳〵。ドレ容體を」トいろ〳〵はらなどさぐり見てゐる内、和次「ヲイ土場公、そこの七りんへ、火をおこして置いてくだつし」土場「ヲイ〳〵」和次「茶見公、その三味線箱をこゝへ」茶見「ヲツトそれしよ」和次「エヽ、是は三味線箱だは、こんなものは邪魔だ。ヲイお

になつてはいけねへ、早く艾を出しねへ」ト張吉「チツトそれ〳〵、丁度爰に出てゐる」土場「そして呼びッけへすもいゝぜ、和次さん名は何といふ」和次「名は妻念といふが、呼んだ所がはじまらねへ、達者な時さへやくにたゝねへ、ヅブかな聾だものを」土場「ハア聾か。そんならくすぐつて見ようか」矢場「ヱヽそんな事でいけるものか。マア艾を爰へ出さつし。ソレ跡をみんな此くらゐに丸めて置きナ」楊次「其大サでは、あんまりだらう、堪へられめいゼ」矢場「馬鹿をいゝねへ、あついィ位ならわけはねへ。かまはず大きく丸めねへ。サア土ふまずの眞中がいゝ。張公そつちの足をするゑさつし」張吉「チツト、しかし兩方一所では、あんまりだらう」矢場「ヱヽ引、かまはずするゑさつしといふに」張吉「チイ〳〵。そんならサア〳〵、やらかせ〳〵。此眞中でいゝの」矢場「さうよ。是見ねへ、おれがするゑてる所だ」張吉「ハヽア此坊主めへ、人形足とやらだぜ、足のうらが平らだ。これでは此するゑる所は、土ふみずといふだらう。ふまずなら、へこんで居る筈だ」和次「ヱヽ洒落さつしやんナ、おもしろくもねへ。ソレ線香ヨ。早く火をつけさつし」トみな〳〵夢中になりて大さわぎ、うろたへまはるその中へ、和次郎が口をかけたる藝者の箱持かくとも知らず、箱持「へイ御免なさいまし。只今すぐに參じます、此箱をはゞかりながらそれへ、へヽヽヽ」矢場「ハイ〳〵お醫者樣か」箱持「イヱお照でござります。只今雷門で、お客樣にお目にかゝッて、一寸おはなしを致して居りますから、私は先へ參

のブらだが、どうして爰」矢場「エヽサ、どうしてだか知らねへが、大方此坊主のだらうが、何分死人に口なしで、譯がわからねへ」和次「ヲヤほんに此坊主はどうしたのだ」矢場「エヽ死んで居るといふことよ。こじれつてへ」和次「ヘン美味くいふぜ、モウ其手はくわねへぞ」矢場「コレサお前達は平氣でゐるが、冗談ではねへ、爰へ來て見ナ」土場「ドレ、おや／＼ほんになア、こりやア大變だ。和次さん本たうだョ」和次「さうか、ドレ、ヤア／＼どうしてまア、爰へ來たらう」揚次「そりやア大方歩行いて來たらうけれど、爰へ來てから死んだに違へねへ。お前達は知つてゐるだらう、どういふ譯だ」張吉「サレばサ、おいらも一圓わからねへ」土場「爰に居て知らねへ事があるものか」張吉「居る事はゐたけれど、ちつと譯があつて、ノウ矢場公」矢場「正直はみんな寐て居たうち」揚次「ヲヤ寐たといへば、茶見公はどうした」矢場「いま醫者樣を呼に行つたが、茶見藏が居たのをよく知ッてゐるの」揚次「エ、何知つてゐるといふ譯でもねへが、どうか居たような氣色だからョ」和次「是サそんな事はどうでもいゝとして、マヅ此坊主をどうかせずはなるめへ」土場「さう／＼ちげへねへ。そして和次さん、此樣子では彼の一件は、今夜の事にはいかねへから、なんでも此坊主を生す工面にかゝらう。醫者はモウくる時分かノ」矢場「内ニさへ居れば一所に連れてくる筈だ。マアそれまで炙でもすゑよう」揚次「さうだ／＼、手のび

滑稽 和合人 初編下巻

斯くとも知らず以前の三人、狐の趣向とゝのへて、拔足さし足入來り、そつと枝折戸押開けて、先に立ちたる和次郎を、矢場七見るより、矢場「ヤア和次さん、お前マアどこへ行つて居るのだナ、馬鹿々々しい」和次「ヤアモウ土場公いけねへ〳〵、みんな起きてしまつたは」張吉「どうして〳〵起きる處ではねへ、生そうといふ處だ。マア早く來てくんねへ。ヲヤ土場公、楊公も一所か、有りがてへ〳〵、是でちつと氣が丈夫になつた」矢場「コウ和次さん、お前の留守に大變が出來た。マア此坊主を見ナ、行倒が出來たぜ」土場六は和次郎が袖をそつと引き小聲にて、起きても構ふ事はねへ、仕組んだ通りやるべヱ」楊次「さうよ、なんでも一盃呑みさへすれば、跡は忽然だからいゝ」張吉「是サお前達はナゼそこに立つて居るのだ。早く爰へ來て見てくんねへナ」矢場「さうよ和次さん、是はマアどうしたら宜らう」和次「なんだ此手合はきよろ〳〵して居るぜ、不景氣な。今此三人で、一ツ呑まふと思つて、廣小路へいゝつけて來たから、マア下ニおちつかツし。そして、行燈でもつけて呉れゝばいゝに、鼻の先に出てゐるものウ。此提灯の火をうつすべヱ。ヲヤ是は講中

友達のよしみだア、そのくらゐな事は、ムヽと言つてくれたつて、よささうなもんだ」矢場「是サ、そんな事より、ちつとも早く醫者でも呼んで來て、生かす工面をして見ようではねへか、死にさへしねへければ、解死人も何もいりはしねへハサ」茶見「ちげへねへ〳〵、解死人に計くつたくして、さつぱりそこへ氣がつかなんだが、是でも生きようかの」矢場「さればサ、それが餅は餅屋でなければ知れねへから」茶見「ム、餅屋にしよう、船橋屋なら近へが」矢場「エヽ、うろたへなさんな、馬鹿〳〵しい。マア人のいふことを不殘聞きねへナ、そしてあんまりきよろきよろしなさんな、不景氣な」茶見「ムヽよし〳〵、そこで」矢場「西仲町へ行つて、松井宗元様と聞きねへ、ぢき知れるから。あの人なら大丈夫だ」茶見「ム、合點だ。一所に連れて來よう」張「知つてるか」茶見「知つてる所か、心安いは」矢場「そんならちつとも早く」茶見「呑込んだ〳〵」ト茶見藏は草履もはかずはしり行く。

茶見「平氣でもねへが源氏、ホイ又しかられるだらう。どうも悪い癖だ」張「冗談ではねへ。どうしたら宜らう」茶見「いつその事、そつと歸らうではねへか、爰に居たらかゝり合になるだらう」矢場「とんだ事をいふ、此まゝ迯げて跡であらはれようなら、どんな目に逢ふも知れねへは。何ぼこんな坊主でも、人間一人といふは重い事だ」張「なるほどそうよノ。そして此樣に喰ひ太ツて、格別重さうだ。咎のおもたましは、猶おそれるス」矢場「エヽいゝ加減にむだツ口をたゝかつし、をかしくもねへ。アノ和次さんも和次さんだ、家を明け放して何をして居るだらう、ばかゝしい」茶見「マアなんにしろ起さうではねへか」矢場「起すなら造作はねへが、生すのだからむづかしいは。首尾よく生きねへと、解死人だ。ヘンとんだ羽目へひつかゝるもんだ」張「おめへ解死人に出るのか」矢場「何のおれが出るといふ理窟が有るものか、何でも此三人の內、誰かしら出るのよ」張「エヽそりやア大變だ。然しこちとらが殺しはしめへし、何も解死人に出る理窟もあるめへぢやアねへか」矢場「それはさうだけれど、急度殺さねへといふ證據がねへから、三人へ疑がかゝるのサ」張「そんならいつその事、お前ときめて置きねへな、どうもこちとらは勝手が知れねへから。ナア茶見公」茶見「ムヽそれがいゝよく。マア何でもさうときめて置くがいゝ。ノウ矢場公」矢場「エヽ馬鹿をいひねへ、おらアいやだ」張「何のたのもしくねへ男だ、

しかし艾があるめへ」張「ヲツト、斯くあらんと未然をさつし、一昨日和次さんが、三里を居ゑた時、仕舞つた所を見て置いた。其火鉢の小引出にある筈だ」矢場「有る〱、奇妙。三ツ四ツ一ツ所にしてやつ付けべヱ。これ見な、ふさ〱しいざまをして居やアがる、面のにくい。火をつけたら表へ出てかくれて居ようぜ」ト、それより艾を出し、四ツ五ツ合せ足へのせ、氣絶せしとは心つかねば、皆々をかしさをこらへそつと火をつけ、さう〱表へ欠出し、枝折戸の陰に息をころしてうかゞひゐれど、しばらくあつても目をさます様子もなければ拍子ぬけして、矢場「なんとあきれた寐坊ではねへか、骸へ火がついて、目の覺めねへ奴もねへもんだ」張「さうよ、あんまり不思議な坊主だ。艾を餘りかためたから、立消がしたらう。そつといつて見よう」ト、又そばへ行きよく〱見れど、もぐさは殘らずたちて有るゆゑ、いよ〱不審はれず、張吉は小よりをより鼻の穴へ入れて見れど、たわひなき故、よく〱心をつけて見るに、息はたえてなき故、張吉はふるへ上り、張「ヤア引大變だ〱。ヱヽ引氣味のわりい此手をどうしよう。ヱヽ引〱」茶見「何だ、此男も仰山な」張「仰山ならいゝけれど、坊さんが死でるのだ。ちつとも息もなく冷たくなつてらア」茶見「ヱ、何死んでゐる。空言をつきねへナ」張「うそなものか、爰へ來て見な、ソレ」茶見「ヲヤ、ほんにナア、道理で起きなんだ。サア〱大變だ」矢場「どれ〱、ヱヽ氣味のわりい面をして居るぞ。歯を喰ひしめて」茶見「こりやアマアどうせう。水でも打掛けようか」張「犬がつるみはしめへし、ぶつかける事が有るものか」茶見「そんなら濁りをとつてぶつかけようか。ぜんてへ水には濁のねへ方がいゝ」矢場「是さ、むだッ口所ではねへ、あんまり平氣な手合だ」

ことよ。お前の足を燒いたのは、此坊主がわざだぜ、なぜトいつて見な」矢場「ナゼ」茶見「さう又正直に言はずといゝわサ」矢場「ナゼといへといふから、言つたがわりいか」茶見「いやサ惡い事もねへが、あんまりをかしいぢやアねへか」矢場「をかしくはお釜のまへで杓子をもつて笑はツしナ」茶見「さうよ、いたくはいつ迄も居るとも、但シいたちの屎を三文が買ツて付けるとも、かいくは、ヱヽ引」矢場「からんとうはどうだらう」張「ムヽ、それもいゝが、ヱヽかいゝの德本のヱ」矢場「アヽやかましい。モウいゝぢやアねへか、ひつこいぞ。そこでどういふ譯で、此坊主が足を燒いたと」茶見「まづ附木の燃さしを持つてるので鑑定したが、かういふ理屈だらう。此坊主は折々爰へお非時にくる坊主で、今夜も其氣で來た所が、佛壇に寐て居るもんだから、流石に坊主の事だからぐつト癪にさわつて、麁相したふりで、ちよいと足の毛へ燈明の火をくつ付けたやつだ。さうした處が思の外燒草が多いから、大火になつて、方々で騷出したから、うろたへて、爰へ狸をやつた所が、こいつも一ツぱい喰ツた勢で、グイと寐て仕舞つたと見える。アノ提灯のかけばなしの樣子では、きつとさうだぜ」矢場「ムヽこいつはいゝ鑑定だ。附木をもつて居るに、行燈が出て居るを見ては、火いぢりをしたにちげへねへ。いめへましい坊主だ。どうしてくりよう。餘りよくふさつて居やアがるから、灸でもすゑてくれべヱ」茶見「夫がいゝ〳〵、

見付けなんだ。こいつも悠仁にちげへねへ、寝る氣もなく、ぐつとやつた樣子だ」張「なる程かうして見れば、寝の寄る所へ、エヽ、玉ではねへ、ざまを見な、ふんぞりけへッて、ふさぐ〳〵しい寝像だア」ト提灯の文字を讀んで「木魚講ト、ハヽア觸坊主だナ。爰のうちへ何しにこんなもゝんじゐが來たらう」矢場「何サ、和次さんも醉狂なものだから、いつぱし聲自慢で、エなまアい、だア、あ、アヽぶウヽ、をやると見える」張「ムヽ木魚にお宮參りをさせる樣な形でか」矢場「ちげへねへ。それはいゝが、此坊主を起さうではねへか、先は佛の氣でも、こつちには神だア」茶「さうよ、早く起さつし〳〵。己等ア冷水を二三盃いたゞかねへでは、正氣はつかねへ」矢場「おらア足がひり〳〵していけねへぜ、どうしてマア、足へ火がついたらう、一圓わからねへ」茶見「大方楊公に意趣返をくらつたも知れねへ。三人が三人寝て仕舞ふといふも、あんまり馬鹿げきつた事だ。此坊主もまた同じ樣に、成程寐の寄るとこ」張「チツトもうすんだ〳〵、洒落と鼻ツ紙はかけながしがいゝもんだ」茶見「チヨツ、そんなら此坊主を起さう」ト、棗念をゆり起しながら、「ヲイ〳〵坊さん、ヲイ是さ。是はどふだ、死人の樣だ」矢場「かまう事はねへ、グイ〳〵ゆすぶらッし、いけづるい坊主だ。ヲイ起きねへか〳〵。是見さつし、附木の燃えさしを握ッてゐるぜ」茶見「ハヽアよめた〳〵」矢場「何、坊主の寐て居るのを、讀む事があるものか」茶見「ムンにやヨ、わかつたといふ

るとまだ一枚有るはサ。そうするうちに隣から、ぐいと押戻されたから、すつぱり指をひつぱさんだ。アヽ引痛へ。ヲャ〳〵是見な、爪ぎしを皆ひつぺがしたア」矢場「ムヽそうか。おらア又股迄火だらけになつて飛起きたから、うろたへて飛出さうとすると、そつちから戸をあけてぴつしやり耳を掛けて、首をひつ挾まれたものウ、誠に目がくらんだはサ。それだからくやしいまぎれに押返したから、指をはさんだでは痛かつたらうが、おれも是見さつし、耳が此様に腫れた。アヽ痛へ」張「おらアそんな甘口な事ではねへ、脾腹を踏みつけられて、額を疊でひつこすつたから、實に目がくらんだぜ。そしてマアお前達は押入で寢入ッたのか、ばか〳〵しい」矢場「足下は寢ねへのか」張「ヱおれか、おれはサ、寢ねへ氣だつけが、ツイとろ〳〵」矢場「ヘンやつぱり寢たのだやつさ」張「マア寢た樣ナものだけれど、お前達は上の戸棚で」茶「馬鹿なつらな、上だとつて下だとつて、おもしろくもねへ、愚痴な小言をいふ事はねへ」矢場「それはさうと、和次さんはまだ歸らねへのかしらん。イヤ楊公は大層驚いたツケ、ノウ」茶「それよ、あれ程おどろかす積りではなかつた。和次さんをば驚かせずに、こつちが寢てしまつたからをかしい」張「ヲャ〳〵誰か寢て居るぜ」矢場「ほんになア坊さんだ。こいつは妙だ、アレ提燈を付けばなしにして、不用心な」茶見「なるほど、是ほどの大坊主が寢て居るのを、寢とほけてさつぱり

なものだ、たちまち付いたは。イヤ是はいかぬ附木だ、さつぱり硫黄がない。イヤ〳〵さかさまだ。チヽ此方はよい。アヽ硫黄澤山でいゝ附木だ、ヤレ附いたぞ〳〵。ハアクシヨ。是はしたり又消えた。なんまみ」ト、やう〳〵附木へ火をうつし、勝手覺えし押入の佛壇の方をおしあけ、いつものりん燈へ何心なくうつさんとする時、矢場七は以前の通り、片足鴨居へ踏みかけて、餘念もなき其所へ、妻念持ちし附木の火向臑の毛へチリ〳〵と燃附けば、熊をあざむく毛だらけ男、たちまちもゝまで燒込むにぞ、ワツトおどろき矢場七が、鴨居をはづす片足に、うつかりのぞく妻念が天窓をひつしやり踏付けられ、思ひがけなき不意をうたれ、同じくワア引とぶちかへる、此聲におどろき、茶見藏張吉も目をさまし、「何だ〳〵」ト、飛起きんとしては、天井へつかへ、押入へ寐たる事はきがつかず、ひたすらうろたへる。茶見「こりやァ大變だ」ト、夜具のうへをはひ廻り、やうやう少し心付き、押入の戸へ手をかけてあけるとたんに矢場七が、佛壇から出でんとする首をぴつしやりたて付けられ、矢場「アタヽヽヽ、コリヤアどうするのだ」ト、力まかせに押しかへして飛びおりる戸に、茶見藏は指を三本はさまれて、茶見「アイタヽヽヽ押してはいけねへ〳〵、そつちへ引いてくれねへと、指がきれるは」ト、やう〳〵押しもどす。張吉は下の戸をあけてのそ〳〵這ひ出す胴中へ、上よりづんと飛びおりられ、おしにうたれてつんのめり、何かは知らずうろたへ廻り、張吉「アヽ痛へぞ〳〵、どうするのだ。滅法界な事をする」茶見「滅法界ぢやアねへ、悪い所に居たもんだ。おれもびつくりした」矢場「イヤびつくり所か、むやみな悪戯をしたもんだ、きん玉まで火だらけになつた。是見さつし、向臑から股がひり〳〵するは。誰だか知らねへが、めつぽふけへな事をしたもんだ」茶見「ハアそうか、それでお前が大きな聲をしたのか。己等ア寢耳へキヤツといふ聲が聞えたから、夢中で飛起きようとすると、アノ夜具の上だものを、身動がされねへハサ。くらさはくらし、あそこに寢た事はさつぱり忘れるし、うろたへめへ事か、漸〳〵の事で思ひ出したから、戸を明けて出ようとす

の屎にこまるナ」楊次「馬道へ行つたら有るだらう」和次「名計馬道でも、馬のたんと通る所ではねへ。イヤ〳〵花川戸の通りにはきつと有る、千住街道だから」土場「ちげへねへ〳〵。有る事はあるが、買ふのが」楊次「なんの買ふ事が有るものか」土場「うんにやよ拾ふのが難儀だノ」楊次「そんなら馬の屎はおれが工面するから、外の事は二人で集めねへ。サア〳〵何にしろ早へがいゝ」和次「左樣々々、マア出かけよう。目を覺してはつまらねへ」ト漸々相談決著して、三人、いそぎ出て行く。跡は前後も白川夜舟、掛合軒の其中へ、ポク〳〵來る道心者は、木魚講の繩坊主かな聾の妻念庭口をはいりながら、「ハイ御免なさい。明日は生得大酒樣のお開帳がお著で、講中不殘高輪迄お迎に出ます、どうぞ御不參なく。ホイお留主かな。是はいかな事、明放してどこへお出でなさつた、物騷な。ハヽヽヽ御近所だらう、一服たべてお待申さう。アヤレ〳〵腰がいたいぞ」ト、提燈を鴨居へかけ、「ヤレなんまみ。イヤどつこい」ト、すわり、たばこを呑みながら、うろ〳〵家内中見廻し、妻「ヤレモ〳〵お若いとはいひながら、未佛壇へ御燈も上らぬさうだ。ホイ爰に火打箱が出て居る。ドレ斯うして居るまに、ちよつと上げよう」ト、火打箱をひきよせ、「ハア石はあるが燧が見えぬ。行燈の臺にも見えずと、ハテナ、ハヽアやつぱり此中だ。附木の下にあつたから見えなんだ。ヤレ〳〵此石は丁寧に面が取ッてあるは、火打石計は面取はいかぬものだテ。しかしよく火は出るがナゼつかぬか、火口がだいなし濕ツたさうな。イヤ〳〵まだ葢をとらなんだ。ハヽヽヽなんまみだ。ハヽア正直

跡とはなんだ」土場「ヱヽ犬の足跡よ、ちつとぐれへ間違つてもいゝは。其板行へ鉢前の脇の泥をつけて、縁側へべト〱押しながら、コウ爰へ犬でも上りはしねへか、ヲヽ〱大層な足跡だと、縁側から雪隠の前迄ずらりと押して置き、サア是はおやしいと、今迄喰ッた器物を見ると、ソレ蚯蚓や馬の屎が残ッてゐるから、ぎよつとして、酒も馬の小便だらうと思ふはサ。こつちはそ知らぬ顔で、ナゼこんな穢ねへものを入れて置いた、そしてお前達は、をかしな顔色だが、どうしたのだ、ナゾト不思議さうな面をして見せやす」楊次「ヲツト呑込んだ〱、モウ仕打は方寸にあり。こいつア妙だぜナア楊公」楊次「ムヽいゝ所か、あいつ等が胸をわるくして、ゲツゲツトいふのが早く見てへ。サア早く支度にかゝらう、入用は何と何だッケ」土場「何支度といふ程の事もいらねへ、先廣小路へいつて、ちよつぴり呑めさうな肴を二三種に、藝者はおてるがいゝ、小氣轉がきいて。そこで蕎麥は」和次「蕎麥は、チト遠くとも駒形の松月庵にしよう。今度新製を始めてから、又一しほよくなつた。そして器が立派でいゝ」土場「そんならそうよ、淺草餅はおれが狐の尻尾を借りに行くついでに買ふ。此地内に居る隱居だが、春中胴著に拵へた、皮の尻尾が残ッて有るのを見て置いた」楊「三ツ有るか」土場「何サおれ計ちらりと見せれば澤山だ。お前達にあてがつて、無精にひよい〱出しかけてはいけねへ。そこで蚯蚓は釣針屋に有るが、馬

良い。そりやァ此方も我慢して飲まにやァならねへゼ」揚次「そいつはチト恐れるナ、ナゼ又そんな酒にするのだ」土場「やぼな男ダゾ、馬の小便と思はせるのだは。蕎麥は蚯蚓、餅は馬の屎、居風呂は糞溜といふは、お定りだワナ」和次「さうだが、氣がついたら何も喰ふめへ」土場「それだから、最初は何事もなく呑んでいやす。いゝ時分むけへが來て、藝者も歸して仕舞ひ、其中少しづつ思入有りて、何かあやしげにして、ちらり〳〵と尻尾を見せかけて、トヾいゝ鹽梅に表へちよいちよいとはづして、忽然となくなりやす」揚次「のそ〳〵表へ出ても忽然と思ふだらうか」土場「それはサ、何と思つてもいゝワサ。さうすると、跡がうそ淋しくなるもんだから、あいつ等はどこへ行つたらう、何だかをかしいやうだぜト、ひとり言ひ出さうものなら、サア例の臆病風がたつて來るワ。其時刻を考へて、お前達は、さつきおどされた儘逃出して、おれを呼に來たから、一所に來たといふ面で、怖さうな身をして、「そろ〳〵覗いて見て、ヲヤ茶見公、矢場公、張吉も來て居るぜト、初めて逢つたつもりで、今迄呑んで居た氣色は少しも無へ樣にしらツぱくれて居るのよ。そこでまたおれが手妻は、釣針屋で蚯蚓を買つて、又馬の屎を竹の皮へ包んで所持して居て、そこらをかた付ける形で、蕎麥の蒸籠へ蚯蚓を入れ、金龍山の竹の皮と、彼馬屎と摺替へて置きやす。そこで大根の尻尾でソレ、梅の足跡犬の花といふ板行を拵へて」揚「梅の足

エ此男もひどく堰込むぞ、マアしづかに聞かッせへナ。しかしこれも有つた事だが、此奴等はまだ知らねへから」和次「コレサ足下のいふ事は番ごと枕言葉が長いから、うるせへゾ。マアどうでもいゝから早く筋を言はつしナ」土場「ヲット承知々々。サアそんならかうだ、此三人が狐に成るのだ」楊次「ウヽ面白へ〳〵。それじやア中見世へ行つて面を買ッて來べエ、三ッでいゝか」土場「お前もつまらねへこと計いふぜ、茶番ぢやア有るめへし、狐の面をかぶつたとつて、誰が魘がる物か。そんな薄ッぺらな事ではねへ、マア落付いて聞かッせへナ」楊次「それだとつて、此顔では狐とは見えめへ」和次「さうサノ、人間と思へば變な顔色だが、まさか狐の方へもむかねへノウ」土場「何サ、とても顔をとがらせたり、コン〳〵といつたりする樣なことではいかねへ、只心いきと仕打で、狐と思はせるが山だは」楊次「フウ先狐の氣前は、どういふもんだらう。おらも廣くつきやつたが、どうもまだ狐の心意氣は」土場「是サ、マア己がいふ通りにすればいいから、だまつて聞きねへ。マア斯うだ、狐の尻尾が一ッあれば、それが種だ。そこで廣小路から、誰ぞ小氣轉のきいたやつを一枚連れて來て、三味線でも彈かせて、どんと洒落ながら、折折著物や羽織の裾からちら〳〵尻尾を見せる計りで澤山だ。そして其座の喰物に誂がありやす、先蕎麥サ。チトはぐちが違ふが、金龍山の餅、酒は成丈樽底で色の濃い、樽ッくさいやつが

見えると思ひねへ」和次「ム、又思ふのか」土場「おれもぞつとして、「成程咄には聞いたが、舟幽靈といふものは、無い事ではねへと思つて居ると」和次「フウ其處ではお前も思ツたの」楊次「コレサだまつて聞かッしョ」「フウ、それから」土場「そこで何か、チョキリ〳〵と音がしやす、その度々にピラ〳〵ピラ〳〵火が燃えるから、よく〳〵氣を付けて見ると、聞きねへ、筏を流しながら、烟草の火を打ッのが、川水へピラ〳〵とうつるのよ」楊次「ハア筏士といふものは氣強な物だノウ」土場「ナゼ」楊次「それでも幽靈のそばで煙草を呑んで居るとは豪勢だ」土場「ヱ、わりい聞きようだぞ、其筏で火を打つのを幽靈と思ッたのだは。外に幽靈も化物も有るのではねへはナ」楊次「ム、ウそうか、何のこつた、おもしろくもねへ。つまらねへ噺を、世話しねへ所でしたもんだ」土場「イヤサ實說といふものは、噺して見ると、どつとしねへもんだが」和次「それにしても餘りどつとしねへ過ぎるやうだ」土場「うんにやョ其時サ、あいつ等がほつと息をついて、サア行くべヱと、ずつと立にかゝると、三人ながら腰の骨がゆるんだかして、ちつとも立てず、イヤ其形といふものは、今噺す樣な事ではねへ、見ッともなかつた。其くれへな臆病どもだから、おどかして意趣返をするがいゝぢやアねへか」楊次「ム、マアどうでもいゝから、早く仕ようぢやアねへか。ア、長い話だ」土場「そこで斯ういふ注文だ」楊次「ム、そいつがいゝ」土場「ヱ

らり〱と歸つてくる所が、眞暗で人ッ子に一人逢はねへけれど、食ッたいきほひだからついぞ有る事、兼てたしなまずの隱さねへ藝をあらはして、どなりちらして來た所が、長明寺の前へ來ると、聞きねへ、川の中からピラ〱と火が燃え出したらう。サアそれを見ると皆眞青になつてがた〱」楊次「眞暗な所で青くなつたのがよく知れたノ」和次「是サ、それは知れても知れねへでもいゝぢやアねへか、ばか〱しく長い話だ。いゝかげんにして、こつちの算段をしようぢやアねへか、起きるとつまらねへぜ」土場「ハテサ靜にさつしよ、醉つて寢た日にやア起る氣遣なしだよ」和次「夫だとつて死にはしめへ、醉つた酒なら醒めるだらう、醒めての上の御分別では、間にあはねへはナ」土場「ア、世話しねへ平右衛門だゾ。サアそんから敵打の趣向を打あけて聞せよう」楊次「イヤそうだが、今の川からピラ〱の跡は、もう少しなら話して仕舞ひねへ」和次「何の臆病な癖に、魘敷話といふと、びく〱しながら聞きたがるぜ」土場「しかしおれも話しかけて仕まつては氣がかりだ、もう少しだから話してしまはう。それから其ピラ〱が段々近くなると思ひねへ」和次「ム、おもおう」楊次「コレサまぜッけへしちやア猶長くなるはナ」土場「サアそれを見ると、モウ體がすくんで一足もうごけず、逃出す事も出來ねへから、皆ものも言はねへで、ぶつ居ッて見て居ると、聞きねへ、ピラ〱燃る火の中に、まぼろしのやうに人影が

張吉や矢場七にも話したらう」和次「ムヽ、それぢやアいけねへ」土場「イヤ、妙な案じがあるわへ」楊次「どうだ〳〵」土場「マヅあいつ等は、今日こそお前達をおどしたけれど、三人ながら大の臆病もので、そりやアモウ一寸した事にもびく〳〵する奴等だ。此間斯ういふことが有りやした、四人連でぶら〳〵木母寺へいつた所が、植木屋武藏屋なんぞも、あんまり紋切形だ、といふは世をしのぶ假の名、本來は以前とちがつて、蜆に菜のおしたし計りでは呑みにくし、殊に兩家とも家根船が三四盃、艜なぞもついて居る樣子、此方連のおよぶ所でなしとあきらめて、ずいと門を出て、一町計り心ならずも歩行いた所に、丸屋とかいふ酒店を見當ると、サアグビが咽咽してたまらねへから、ずいと押上ツて、呑んだがなか〳〵おつうして呑ませやす」和次「コウそりやアサゾうまかつたらうが、マアそれは扨置として、どうぞいゝ案じはあるめへか、目を覺してはつまらねへぜ」土場「大丈夫受合、此奴らが斯う醉つて寢込んだ日にやア、手のつけ人さへなければ、自然生に目の覺めるといふ事なし、七日七夜ぐらゐは請合だ。マアそこで聞きねへ。先いゝ頃呑んで切上げようと思つて勘定を聞くと、イヤ間違へぢやアねへかといふ程安いだらう。サアそれにくらひ込んで呑直さうといふがはじまりで、どんとおみこしを居たもんだから、日の暮れるも氣がつかず、五ツ過まで呑んで、漸々切り上げて、それから土手通りをぶ

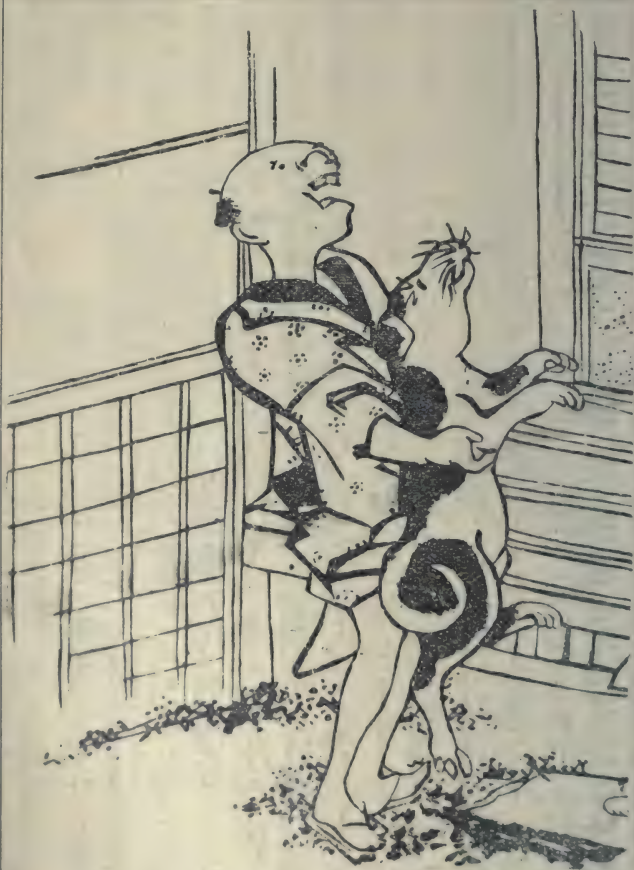
扨も彼三人は仕返の工風さまぐ〵すれども、腹いせになる程の思ひつきもなければ、楊次郎「コウコウ、ちつと穢な細工だが、こいつはどうだらう。矢場七が寐像のわるいので思ひついたが、マヅ味噌を一握左捻にこしらへて、糠味噌のゆるい所を衣に掛けて、アノ股ぐらへそつと當がつて置きやす。そこでこつちは爰で呑始めの、廣小路から白い首を一箱呼寄せて、儘よ三度笠横たにかぶり、ア、コノコナイで、どんと洒落て居やす。其うちにはどんな寐坊でも目が覺めるだらう。そこでぐつと押入から踊出さうとかなんとか思ふうち、どうも股ぐらが氣味がわりいから、そつと手をやつて見やす。所で彼の仕掛がぐんにやりとくるから、ぴつくりするだらう。こつちは知らぬ顔でしきりにうかれて大さわぎ、また折節は藝者に氣障なこだわり方なぞがあつて、キャツ〵といふ聲なんぞをさせたり何かして、浦山しがらせて苦しがらせ樣ぢやアねへか」和次「それだ〵、其事々々。氣にいつた妙々」土場「待ちねへ、そいつアいゝには違へねへが、先達もさる所で其傳をやらかして大笑があつたが、其時茶見藏が居たから、大方

蝎が居たは」和次「誰だ〳〵、茶見藏だナ」揚次「いま〳〵しい奴等だ。イヤ大相くらッたさうで、臭いは〳〵」揚次「鈴の音がしたから、佛壇も見よう」最前にひきかへ、いきはひよく佛壇をあけて見れば、矢場七は窮屈にだん〳〵横になりしと見え、しゆみだんを枕にして、入口の鴨居へ片足ふみかけ、佛器花生ゐはいなど、算を亂せしさまを見て、さすがの三人あまりの思ひがけなさに、顔見合てあきれ居る。揚次「ハヽアこいつが、チヤアン、だな。畜生め、どうぞしてやりてへもんだ。土場公仕樣はあるめへか」和次「ほんにこいつ等アどうしてくりよウなア」揚次「灸をする樣か」和次「イヤ〳〵、そんな甘口ぢやア承知されねへ。ヲヽいゝ事が有る、溫泉土産にもらッたくしやみ藥が有るから、鼻の穴へおもいれ吹込んでやるべヱ」土場「待ちねへ〳〵、それでもをかしくねへ。斯うしべヱ、目へ赤い紙を張附けて置いて、火事だ〳〵といつて起すと、家中眞赤になつたと思つて、うろたへるから可笑しいぜ」和次「ムヽそれもいいが、笑談にも火事なんぞは氣障だ、外になんぞ苦しませようがありさうなもんだ。早くしねへと起るぜ」土場「どうして〳〵、起る氣色はねへ、死人の樣だ。ヱヽ臭いぞ〳〵、押入が酒藏のようだ」是より三人はさま〴〵工風をこらし居る。

前は何ともねへが、おれは」和次「足下もなんともねへぜ」土場「ナゼ〳〵、おれが顔がどうしたのだ。ヘックショ。いめへましい、風をひくさうだ」ト顔を撫て見て、「何か付いたのだ。ザラ〳〵、ヘックショ、すらア。マヅこんな物は邪魔」トいひながら炭取をかたよせんとすれどもうごかねば、「ヲヤ妙だナ」ト少し考へて、力まかせに引きたてれば、蟲の衣ビリ〳〵と破れる故、手燭をつけてよく〳〵見れば、三絃の糸にてしばり有るを見つけ、土場「化物の正體が知れた〳〵」和次「なんだらう狐かノ」土場「狐でも狸でもねへ、猫又のわざだ」和次「ハテノ、猫又とは。ナゼ又知れる」土場「ヘン、猫又、ナゼ又、そりや又、これわい又が、聞いてあきれらア。扨又次の煙草盆を見よう」ト手燭にて、よく〳〵見れば、同じく三絃絲にて結び付け有る故、土場「イヤ、ハヤお前達も、あんまりうすッぺらな、奥行のねへ手合だゾ」和次「ナゼ〳〵」土場「ナゼも釜もいらねへから、此烟草盆や、なにかをよく見ナ。ソヲリヤ、古猫の業だは」和次「ドレ〳〵」トこはごは見て、両人「ヲヤ〳〵三絃の絲でしばつて有るの」土場「ハヽヽヽ是で蝮蛇の正體も知れた」トしばらく考へ、手燭をもつて押入の戸をそつと明て見れば、張吉餘念もなくよだれをたらし、窮窟に倒れ居るを見付け小聲にて、土場「ヲイ〳〵ちよつと來て見な」和次「なんだ〳〵」ト両人おし入を見てびつくり、和次「コリヤアどうしたのだらう」土場「どうする物か、疊へ何かをくッ付けたのは、此奴が業だは」和次「エヽ、引、いめへましい野郎だナア」楊次「ヨウ、己等ア實におどろいたぜ。畜生め、どうしてくりよウ」和次「鼾をかくのは、上の戸棚だぜ」楊次「あけて見べヱ、あんまりくやしい」土場「マアしづかにさつし」ト上の夜具棚をあけて見れば、茶見蔵は夜具の上に腹這になつて、首をたれ、ひらッたくなりて大いびき、土場「そりや蝮

で居た事が有るはサ」土場「ハヽヽヽ、見た樣に言ふからをかしい。そりやァ昔ばなしにある事だ。今時そんなべらぼうな事が有るものか」楊次「そういひなさんな、ちげへねへ事だよ。最初はおれが見付け出したが、マヅ家中の道具が疊へくッついて放れねへはサ。所で家の隅々で、幽かに鈴の音が聞えたり、天井でケラ〱笑聲が聞えたり」土場「お前達もあんまり馬鹿々々しい、そんなに鈴をならしたり、ケラ〱笑ふ蝦蟆が何國にあるものか。大家へ行つて夫を言ふ氣か」和次「さうさ先」土場「さうさ先ちやァねへは、馬鹿々々しい。そんなつまらねへ事が表向へいはれるものか。マア〱内へ歩びねへ、おれがよく見屆けてやらう」ト先へたち、内へはいれば、これに氣を得て跡について、内へこはごは上る。土場「マヅ燈をつけねへ、今時分まで明りをつけねへ家が有るものか。此樣にくらくして置くから、氣味がわりいのだ」和次「大きな聲をしなさんな、目を覺させちやァ大變だ。アレ、あの鼾を聞きな」土場「ムヽさうサ、成程。マア〱何にしろ行燈を出しねへ」和次郎はこは〱あんどん部屋より出し、和次「ヲイ火鉢のそばへ火打箱を置いた筈だ。アヽしかし最うくッ付いた時分ダテ」土場六は手さぐりにて、火打箱より附木を出し、火をうつさんと藥罐をちよいと取つても、うごかぬ故、力を入れてグイと取れば、五徳ぐるみ引立て、餘り重き故土場六も少し不思議に思ひ、まづ明りをつけて樣子を見んと、元の通り藥罐をかける心にて、手をゆるめてはなせば、五徳にてあふりしゆゑ、パッと灰を吹立てれど、くらまぎれにて一向わからず、灰にむせてくしやみをしながら、火箱にて火をかきたて附木へうつし、やう〱行燈をつける顏を見て楊次郎はまたびつくり楊次「ヲヤ和次さん。土場公が顏を見な」和次「ヲヤ〱ほんに天窓も顏も眞ッ白だ。こりやァ不思議、おれが顏を見てくだッし」楊次「お

の、三人壹升の醉十分に廻り、殊にむしいれの内にこもり居る故、おの〳〵寢むけづき、表にて和次郎楊次郎が長評議のうちぐつすり寢入り今は前後もしらず高いびきを、和二郎聞付け又ぎよつとして、和次「楊公、鼾の聲がする樣だが何處だらう」楊次「エヽ、さうサノ。天井だ〳〵」和次「こりやア大變だ。鼾をかくから、蝮蝎にちげへねへ。天井に住ッて居られちやアたまらねへ。マア〳〵靜にさつし、起しては大變だ。コリヤアどうでも大家樣へことわらう。モウ〳〵あぶねへ〳〵、恐しい事だ」楊公「それがいよ〳〵。サア早く歩びねへ」ト兩人ふるへながら外へ出でんとする所へ、土場六といふ友達ずつと來り、土場「誰だ、和次さんか。ヲヤ楊公、何所へ行くのだ」和次「土場公、有がてへ〳〵、よくマア來てくれたナア」土場「何だかをかアしな事をいふぜ。矢場公や張吉は居ねへか」和次「インニ」土場「ハテナ、先程此地内へ這入ッた筈だが。そりやアいよが、お前達は何所へ行く」和次「エ大家樣へ」土場「ヲヤ妙ナ所へ行くノ、何の用だ。そしてお前達は何だか、ひよこすかするやうだが」和次「する樣だが所か大ひよこすかだ。マア大變だらうぢやアねへか、おらが家の天井に蝮蝎が住まつて居るぜ。知らねへとはいひながら、今迄よく何ともなかつたのう。いよ〳〵といふ所を今見定めたから、大家へことわらうといふところヨ」土場「とんだ事をいふぜ。此家込の中に、どうしてうはゞみなんぞが居るものか、ばか〳〵しい。そして形を見たのか」和次「ウンニヤ形は見ねへけれど、天井で鼾をかくから、うはゞみに違ひねへ。隨分古家には有る事だヨ。通力を得ると、鉢植の松にさへ住ん

だ」和次「どうするものか、内へあがらうぢやァねへか」同楊次「そんなら早く上ッて行灯でもつけねへナ」和次「ム、左樣しべヱ、サア歩ッし。たかゞ知れた狐か狸の業だ。イヽハ〱斑コイ〱チヨッ〱。こいつを連れて行けば大丈夫だ。サア這入ウ」トこは〱枝折戸を入り、履ぬぎの前迄行き、うしろをふりかへり、和次「楊公早く來ねへナ。なんの畜生めらに、おどされてつまるものか。ヘンおれが家だゾ」ト楊次郎もそろそろ跡へついて來ながら、楊次「斑や〱。コヽヽチー〱さうだ〱、爰に居てくれ、今に何ぞやるゾ。和次さん上ッて明りをつけねへ。何にしろ暗くッては始末がわりい」和次「ム、上るべヱ。ヘンおれが家だイ」ト履ぬぎの上へあがり、少しかんがへしが、思ひきつたる樣子にて緣がはへ片足踏みかけながら力を入れて、和次「ヤ、コウノ畜生めらァ」トりきめば、犬はおどろき表へにげ出す。楊次「ヱヱなぜ犬を叱るのだナ」和次「ヤアぶち來い〱、てめへの事ではねへ。コイ〱チヨッ〱チヨッ。サアおめへも來ねへかナ」楊次「マア明りを早くつけなといふに」和次「つけるから來なよ」トいふ時辨天山の暮六ツの鐘耳もとにて、ボヲン。和次「ヱヽ引、びつくりした」楊次「おれもヨ。今が大魔が時といふのだナ」和次「ヱヽそんな事をいふもんぢやァねへ。面白くもねへ」トぶつ〱小言をいひながら、勝手覺えし火打箱より、つけ木を取出し火鉢の火をうつさんと、藥罐を取りのけんとしても動かねばびつくりふるへ上り、「ヱヽ引、ちげへねへわへ。畜生めらどうするか見やァがれ。楊公斑をつれて上ッてくんねへ」楊次「コイ〱、チヨッ〱〱爰へ來い〱。上れ〱。ヱヽ弱い畜生だ」ト和次郎は前足を取り、楊次郎はうしろから無理に押上れどもすぐに飛びおり、むしやうに尾をふつて居る。此時彼の三人は、楊次郎を思ひのまゝおどろかせ、迯出せし跡にて大わらひして、猶和次郎が歸りなば又をかしからんと、笑壺に入つてひそみかへり居るに、最前の宮戸川

へ此位だから、内はまつくらだらう」和次「どうするものか。己が家だ、歸らずには居られねへナア」楊次「さうよ。それだから己も歸らうかと思ふのよ」和次「そんな事をいつてくれる事はねへ。サア歩ツし、何の、氣味のわりいと思ふと限がねへ。竹箒も鬼と見えらア。何のかまう事アねへ」トカ身かへつて先へ立つて行く故、楊次郎はひよんなはめにかゝりし顔色にて、心ならずも庭口迄いたり、兩人立止り、和次「サア這入らねへか、何をして居る」楊次「おめへの家だから、おめへ先へ這入んな」和次「それでも何處らまで、ずツと行つていゝか、勝手が知れねへは」楊次「手前の家の勝手が知れねへ事が有るものか。暗くなッたから、己にはなほ知れねへはサ」和次「いつもなら己がくはしいが、今日の事は足下が呑込んで居るではねへか。マアどこらで笑聲がした」楊次郎は小聲になり天井へ指をさし、楊次「あすこいらでケラ〱。ヱ、思出してもぞつとする」トぶる〱ふるへて居る處へ、垣根の間より白猫一疋欠けいだし、縁の下へはいる。楊次「ヲヤ白いものが縁の下へ」トいふうしろへ、又日頃馴れたる斑犬最前より尻尾をふつて、ついて、入れど、前へ計氣をうばはれ、一向しらずに居る故、和次郎がかゝとをペロリとなめれば 和次「ワア引」ト飛びのく聲に驚き楊次郎もキヤアトいゝさま、そら腰をぬいてペツたり尻餅をつく。和次「ヱ、引なんだナ仰山らしい、びつくりさせたア」楊次「何のお前の聲でびつくりしたのだ。ア、龜ノ尾の骨をひどくぶつた。ア、痛へ〱」和次「此畜生も又後にだまアッて居やアがるから、さつぱり知らなんだ。氣のきかねへ」楊次「馬鹿ないひねへ、此上この畜生にものでもいはれてたまる物か。そりやアいゝが、おめへ如何する氣

まはさず見とゞけて居たが」和次「見届けたの何のと、化物屋敷ぢやァ有るめへし」揚次「イヤ有るめへし。ヘン有るめへしどころか、化物屋敷だは」和次「ナゼ〳〵、何様な物が出た」揚次「出はしねへが、マヅ斯うだ。チヨツト置いた疊が、烟管へくツ付いて、疊をちよいと引立てても動かねへ」和次「ナゼ又疊を上げて見たらう」揚次「エヽ、疊ではねへ、煙管がよ。不器用な聞様だ」和次「何だかひどくトツチて居るから、さつぱり譯がわからねへ」揚次「トツチなくツてどうするものか。それにまた、何處ともなしに鈴の音が幽ウかに聞える。天井でケラ〳〵笑聲がするか。そこらに有る諸道具は、不殘疊へくツ付いて、大磐石の如くだから、今におれも疊へくツ付いて、動かれなくなりさうだから、むやみに欠出したのよ」（和次郎も同じくおどつきものゆゑ、へんな顔色になり、）和次「そいつはをかしいナア」揚次「どうしてをかしいものか、をかしくねへ」和次「本たうか」揚次「空言をつくものかナ」和次「ムヽ、口びるまで眞青になつて居るから、洒落でもあるめへ。しかし爰に立つて居てもはじまらねへ、何にしろ行つて見ようではねへか」揚次「エ、ムヽ、おらアモウすつぱり見たから、見ずといゝ。おめへ行つて見ねへ」和次「おれも獨では氣がねへ、一所に行つて下つしナ」揚次「實におらアモウ氣がねへ。今に誰ぞ來るだらうから、もうちツと待ちねへ」和次「それだとつて、爰に立つて居られるものか。モウ眞暗になつた、行つて燈でもつけよう」揚次「表さ

きり。エヽ帰るとしよう。アヽいヽ洒落だがだれも聞人がねへ。しかしあんまりぶッさうだ、今に帰るだらう、一服呑んで居てやらう。モウ暗くなつたのに、行灯も付けねへで、何處へ行つたしらん」ト火鉢のそばへすわり、「アノ唐人が、烟管も烟草入も置いて行つたから、なんでも近所だらう。ヘンおつな煙管」トつまんで見ても動かず。一ッたい此楊の次郎は、殊の外臆病者にて、ひとりつくねん居るさへ不氣味に思ひゐる處に、チヨイと置いて有る煙管うごかれば、びつくりして、しかと見とめもせず、ふるへて手をひつこませ、「チヨッ、何だ、不景氣な、をかァしな内ダゼ。ヘン今時野暮と化物があつて、おたまりが有るものかッ。こりやァどうしたナァ。もう帰りそうなものだ。ばか〳〵しい」トいふ時、天井で鼠ぐわた〳〵〳〵どろ〳〵〳〵〳〵、「エヽ引喫驚させァやがつた。いま〳〵しい、胸がどき〳〵して來た。茶を一盃呑まう」ト薬罐を持つて見てもうごかねば、「ヲヤ、こりやァどうだ。何でもへんちきだ」トおくびやうものの癖とて、あやしと思ふほど見、とめもせず、頻にぞく〳〵として迯支度する心にて、腰元のたばこぼん炭取など取りのけんとすれど、動かねば、いよ〳〵驚き、「イヤ〳〵行かう〳〵、何だかをかしい家だ」ト立ちあがれば、矢場七は佛壇のりんをチヤアン　楊次「ヲヤ」又鈴の音チヤアン。楊次「ヤア」引ト縁がはに欠出す故、押入にては、こらへ〳〵しをかしさをいちどに「クッ〳〵〳〵、フウ引」ト吹きいだせば、猶々おどろき、キヤッといふて飛び下りて、雪駄を手にもち欠出す、出合がしらに路次の口、和次郎に逢へば、和次「楊公どうしたのだ」楊次「ヤア和次さんか。コウ〳〵、おめへの家は大變だぜ」和次郎は明放して出行きし故、同じくびつくりして、和次「何、家が大變だと、マア何様大變だョ」楊次「どうのかうのぢやァねへ。あの家には、住はれねへぜ」和次「なんだナ、氣味のわりい。何にしろ行つて見様」楊次「行くはいゝが、しつかりして行きなよ。己なればこそ目も

だ」矢場「雪隱の草履を、緣側へぶつ付けて置くと、ソレ、ちよいと突掛けて前へ出ると、つんのめるといふ仕掛よ」張「臼と杵は鴨居へ上ツてゐて、玉子は火鉢へ入つて居ればいゝ。ヅブ、蟹と猿の敵討でして居らア。ハヽヽヽ惡いやつらだ」茶見「サア〳〵みんな隱れねへか、おらア此夜具戸棚へ這入るべヱ」張「その下へおれが這入らう」矢場「おれは茶見公の脇へでも這入らう」茶見「どうして爰へは這入れねへ〳〵。行灯部屋にしさつし」茶見「あんまり窮屈でおそれるナア」茶見「そんならこの隣へ這入らッし」矢場「ドレ、ヤア爰は佛壇だ」茶見「佛壇でもかまう事はねへ。何も小道具がねへから、這入られるだろう」矢場「ム、やらかせ〳〵。ハイ佛様御免なさい。イヤどつこいナ」張「それ足音がする樣だ。矢場公早くしねへか」矢場「チツト承知〳〵。ヱヱ引サア大變をやつた、おゐねへ〳〵」茶見「どうした〳〵」下の戸棚にて、張「コリヤアどうする。コレ小便をたれはしねへか。ヱヽ〳〵天窓から、チヽつめてへ」矢場「ハヽヽヽ花生をぶちけへしたのだ。おれも冷てへ。こりやア爰の住居は出來ねへ」張「斯うもられては、おれも爰には居られねへぜ」茶見「いゝは、ちつとのうちだ。辛抱さつしナ」張「チヨツ、しかたがねへ、跡月分をやらねへから、大家へもいはれめへ」茶見「それ、足音が、今度はちげへねへぞ」ト皆々ひそみかへツて居る所へ是も同じく能樂人楊次郎、楊次「先生如何お暮しなされるッ」トずいと上り、「チヤ是はどうだ、人こそ見えねあきれ

そして宮戸川の拔殼へも、玉川をぶちこんで、元の通り封をしておかう、なんぞの種にならうも知れねへ」矢場「ムヽいゝ〳〵、爰の名物だ。蛇ノ目の傘が助六となる。宮戸川がとつくりかへつて水となる。アヨイ〳〵、ハヽヽヽヽ奇妙々々。和次さんが歸ッても、笑ッてはいけねへぜ」茶見「もうちつと仕掛けてへもんだ。イヤあるぞ、此廣島を五德へくつつけよう。マヅ糸の燒けねへ樣に火をいけてト、そこで、かう弦付の處から、五德の天窓へ斯うしばり付けて、ヤアいゝ〳〵。ちつとも動かねへ。炭をつがうと思つて、トやつて見ても、よし〳〵、びつくりするだらう」矢場「炭取もやらかせ。面白へ〳〵」トそれより、腰元廻りの道具不殘臺へしばりつけ置き、張「モウ歸りそうな物だのう」矢場「そうよ、明けッぱなして、成程いう人にはちげへねへ」茶見「しかし斯う仕掛けて置いても、みんなが爰に居てはおどろくめへが、一先陣をひかうではねへか」矢場「ちげへねへ。それだが、煙管や烟草入を取らうとして、びつくりする處を見ねへではをかしくねへぜ」張「ムヽいゝ事が有る。手分をして、押入や行灯部屋に忍んで居よう」茶見「それがいゝ〳〵。そこでははきものを緣の下へかくす事だ。早く〳〵、モウ歸ッて來るだろう」矢場「ヲツトきた〳〵。履ぬぎの向へ斯うつゝこんで、よし〳〵、そこの火鉢の引出に、釘は一本ねへか見てくんな」張「ヲイ一本でいゝか、まだあるぜ」矢場「あらばもう一本くんな」張「ヲイ、それ投げるぞ、何をするの

「やつぱり氣がきかねへのだ。今時宮戸川を知らねへものが有るものか。ちつとおつりきな家には、都鳥とついた樽が一本ねへと、臺所がしまらねへ樣だは。がぶり〳〵呑む計り能ぢやアねへ、ちつと氣をつけるがいゝ。あんまり何も知らねへでなさけねへ事だ」茶見「なんにも知らねへ事が有るものか。隅田川なんぞは、度々呑んで知つてゐらア」矢場「ハヽヽヽそういふべらぼうだ、ありやア觀音樣に引續いて出來た名酒だものヲ。あれを知らねへ位なら、カラ無體のぼくねんじんだア」張「アヽ引よくいがみ合ふ手合だ。サア〳〵燗が出來た、やらかさう。まづ亭主役に、此茶碗ではじめよう」トそれより間も押へも肴もなく、われもわれもと五六盃づつひつかける。矢場「それ又銚子のお替りだ」茶見「ヲツトきたり、やれ〳〵今度は陶のお替りだ。成程一升は夢のごとしだ。あんまりあつけなかつた。サア跡は茶碗に半分づつだぜ」張「しかしいゝ心持になつた。おらァもう澤山だ。アヽいゝ酒だ。是は流行る筈だ。惡醉がしねへ。茶見公、何をするのだ」茶見「今に宿六が歸ると、ちよつト怪談をやつて、おどろかせ樣といふ工だ」張「なんだか疊をだいなしにするぜ、どうするのだ」茶見「今に歸ツて一服といふ處で、烟管が忽然と疊へくツついて、取れねへといふ仕掛よ」張「こいつァおもしれへ。おれも煙草盆を一ツしばりつけよう。おめへなんでしばつた」茶見「此三絃糸の年明が有ツたから、思ひついたのよ。コレ火鉢の引出にいくらも有るは。

たら人間になるだろう」張「アヽ引うるさく洒落たがるゾ、うつたうしい」矢場「ヤアヽヽ強氣ナものを見付けたぞ」張「なんだヽヽ」矢バ「是、封のまゝ宮戸川が一陶、何と歸命頂禮だらう」茶見「どうして歸命頂禮のが今迄有るものか。今日到來のだらう」張「なんだ又洒落か、さつぱりわからねへ」茶見「ヘン本たうの地口をいふと、どうもわからねへからいけねへ、餘所へ行つて耻をかゝねへ樣に、友達のよしみに訓讀して聞せよう。マヅ歸命頂禮といつたのを、昨日到來と聞いたやつだ、そこで昨日貰つたのが、今迄有る家ではねへから、今日到來だらうと洒落たのだは。かう言つたら解るだらう、是でわからねへければ聾だ」「こつちも聾だらうが、そつちも耳が遠いは」茶見「ナゼヽヽ」張「ナゼとつて歸命頂禮といつたのを、昨日到來と聞違へるからよ」矢場「そんな事はどうでもいゝとして、マヅ開封して、一獻きこしめさうぢやアねへか」茶見「やらかせヽヽ。ソレ爰に燗ぢろりが有り、幸燗銅子もわいてゐる。奇妙」卜陶よりあけながら、「アヽいゝ色だナ、どうでも隅田川はいゝぜ」張「べらぼうめへ、淺草で名酒さへ見ると、隅田川だと思ふやつサ、是は宮戸川と申す御酒だは」茶見「何、宮戸川、ヲヤほんにナア、淺草駒形町、内田甚右衛門と、なる程こりやア初めておちかづきになる」矢場「なんだあの内田を知らねへか」茶見「馬鹿アいふ、駒形の内田を知らねへものが有るものか。内田は知つてるが、此酒の事よ」矢場

に、人ッ子が獨居ねへは」茶見「ハァ雪隱か。デモねへさうだ。なれども念の爲改めよう」ト雪隱へ行き、「爰でもねへぜ」張「烟管も煙草入も爰にあるから、遠くへ行きはしめへ」矢場「早く千住と品川へ追手を出すがいゝ」張「イヤ冗談ぢやァねへ。なんぼ取られる物がねへとつて、あんまり見くびつた仕打だノウ」矢場「さうよ、世間に盜人もねへ樣に、胸ッ糞がわりい」茶見「何も、さういきどほる譯もねへが、マァどけへいつたらう」張「今歸るだらう、マヅ一ぷくやらかせ」ト皆々すわり、烟草を呑みながら家中見廻し、張「なるほど造作は、おつりきに拵へたが、なんにもねへ家だノウ。ドレちとげび藏でもしよう」ト鼠不入をさがして、「ヤレ〳〵むごいもんだ。茶漬の香物と、常盤味噌が一タなめ程」張吉は袋戸をあけて、張「イヤ奇妙船橋屋、チト宗體は違ふが」トひとつしてやり、「ヤレ〳〵いつとつたのだか、有平が熟きつてゐらァ。しかしこの、口取といふやつは、氣をとつたやつだよ。壹匁か貳匁取ッて置いて、喜撰の半斤もあらうものなら、お客が幾度も勤るぜ」茶見「ちげへねへ、むしやく〳〵と、染付の唐子の彰れるまで、やる奴はねへノウ。そして座敷数が重ッて、積付の形のわりい時分には、また五分計り下の方へ入れ足し〳〵すると、年中たえ間なしに置けるから妙だ」矢場「へンとんだ鰻屋の醬油だ」茶見「おほ方しやうゆだらうとおもつた」矢場「だらうではまづい。醬油樽と思つたとやらかせばいゝ。どうもまだ洒落の毛が三本たらねへぞ」茶見「洒落の毛が三本ふえ

滑稽 和合人

初編上卷

東都　瀧亭鯉丈編

大盃を武藏野と號けしも、野見盡されぬといふ謎にして、廣々と草深かりしも、推古の君のするな世に、淺草寺といふまぐれ、野には臥すとも宿かるな、彼の一ッ家の其頃は、未もいぶせき八重むぐら、分けつゝこゝに隅田川、醸す諸白もろともに、續いて軒を並木町、今は並木も門松に、昔を見世の賑ひは、大慈大悲哉御代の蔭、居ながら拜む觀音と、駒形が出雲操一節を、聞いて極樂見ては猶、面白さうな土地ぢやと、小幽な寮を借寓居、夜を日に見たる有頂天、快遊亭と鐵釘で、打付書の表札に、手なみも知れた主の和次郎、頃は彌生の中旬過、三社祭禮の夜宮にて、氏子町々子供中、俄師が今其處をと、通り囃子に音を聞き、彼の取〆りなき庭口を、引寄せた儘鈌出す、跡へ入りくる能樂中間、矢場七張 吉茶見藏 張「主人どうだね」茶見「今日は祭だといふのに、大分しんぴようなことだノウ」トずいと上り、矢場「コリヤアどうだ。是程のせまい家

んなんしもべいく〳〵も、物類稱呼で咄で聞く、諸國の方言、國訛を取りがなく、東に居ながらうがつにふしぎの妙案有り。是を閲して後、あぎとを抱へる事半時計り、人眞似をする智恵はなくとも、賞讃の餘にもとづきて獨ともし火をてらし、市川流の荒文句も、是は山王夜みやサト、其賑しき商賣も、一晩夜なべの休を幸、子ノ刻ばかりに筆を採つて出たらめに。

渓　齋　誌

鮮文をしようする文はいと長ければ中略流行盡の文、上略花がつみは朝がほの新形に盛をゆづりしも、新堀の稲荷すたれて小田原の加持水に群集をなす。田家はまはり持なりとも、坊主持にはかたよらず。芝に水天宮あれば、中通りに妙見を安置す、はやる神あり佛あり。新切通より見通の、ギヤマンの燈籠ありなしといへども、籠細工の行拔には及ぶべからず。長崎下の唐人も、悠々看々踊と思へば、手も八挺鉦の曲太皷と看板掛、口は八挺儀太夫節、祇園の藝子に評判をうばはる。小供相撲をとれば、娘木馬を乘る。大阪下と稱するものは、吾妻上のよき見せもの。時世時世を並べて言はゞ、願人坊主の稲荷に似て、跡しさりして並べおくとも、なほあまれりと言ふべきか。いよさの水道に、古きを洗濯すれども亦是生取りましたる熊ならずや。其今樣を胸に疊み、島田まげの油じみたるを藁もて結ぶが如く、古きを以て新しく見するは時の流行なれども、仕立小袖を著拔て見せる、何がし丁の仕入に似て、世の見せ物に書肆がする、奇々妙案の草稿は、頭は滑稽にして腹に勸善あり、尻は後編に讓りて、讀む聲腹筋をよればとて、やがて梓にちりばめぬる、敎道なるは紙上ケ腹、大ふざけなら古丼、貳朱と四六は勘辨を、おりてが小言にあらずとも、燈籠替りの小供狂言、たゞ見たがるのみにはあるべからず。實に作者の工風を思へば、甘口の事にてゆくべきをや。爰をくみ分けて、おく

瀧亭主人が著述の滑稽を
見て流行の形勢を思ふことば

抑滑稽著述の正統は、天竺浪人大和町の翁、株を本町にゆづり、欣求浄土の戯作者となりしより、延壽丹の主人、世界の人情を悟り、癖を集め口取となし、抜俗れて浮世のあなを臍の下にほり、お茶をわかして世の中に腹を抱へさせしも、絶倒を止めて筆をとられず、しばらく病の癒ゆるを待つ而已。膝栗毛の永の道中も歸路をうながして、今年わらぢをぬぎ、足を洗つて、をかしみのあぎとを止めたり。つら〳〵思ふに世の中は、竹田近江のからくりならねど、星霜のつもれば細工も流行の、移ればかはるが時の花、代が替ればかはる程、萬物造化の奇を出す事、お目にとまるの言のみなり。爰に笑を止めしは、莫逆交の情状を盡せし八笑人の冊子は、世に鳴響きし雷神門のほとりなる大人のすさみになん、嗚呼古人蓼太が句に、

　砕けては三千丈や瀧の月

トは心ありげのおもむきならずや。おもひきやいま鯉丈のぬしに符合すべきとは。はんもといはく、こゝより

花暦八笑人終

斯く打興じつゝ船は淺みどりなる柳橋、香やはかくるゝと詠みたる梅川の河岸にぞ著きにける。

そ味くいつたものの、危い藝だつけと言ひやした」呑「夫ぢやア所の若い衆とおもつた奴等も」船友「さん谷吉原人達サ」のろ「あいつらも何ぞと言ひやしたか」船友「十手とか笠亭とかいふ人が、一體瀧亭が八笑人は實に滑稽たつぷりだが、一筆庵がそれを眞似てよく書きやした。をしいかな遠行せられて、板元が上の巻ばかり彫りかけて仕方がねへから、奥山の黒い男に書足をたのんださうさ、元より作者がとんちきだから、前後ふそろひはもつとも事サ」左次「左樣か、何も意趣も遺恨もなささうなものを、なぜこんなめにあはせたらう。是から直に追打に汁こぼしへ乘り込まうか」呑「それもいゝが、先も大勢乘つてゐるから、喧嘩にでもなつちやアをかしくねへから、一先歸りやせう」呑「そりよう聞いては何もゲツクウと戻す程の事もながつた。思へば悔しい、喰ものの意趣はいつまでも忘れるこつちやアねへ。おぼえてけつかれ戯作者ども」眼「あんまり力身なさんな、今流行の作者達がお揃ひで書いた狂言だものを、素人のこちとらが及ばぬ事だ」左次「しかしいめへましいなア、どうも腹の内が何にか當つた樣な心もちだ。一首うかんだ。

戯作者の穴はひとつの古狸書きひろげたるきん玉の春」

につけて居やした」左次「サウカ、あの船は畠山様の御姫様の納涼船だといふ事だが、さうか」船「大違こん〳〵ちきサ」卒「こん〳〵ちきとは狸ではなくつて狐か」船「ヱ狐だかなんだか知りやせんが、暫くすると船を洲へ付けて、別に網船が來て夜網サ」眼「それでも奥女中は居たらう」船「それも大違サ」左次「そして何者が乗つて居たへ」船「友公、何とかいつたつけなア、色の白い丸顔な人が大將よ、ソレ〳〵十返舎ヨ。それに十手とか實體とかいふ人が」船友「爲永とかいふ人も居たつけ。夫に町の人達が大勢女形のかづらをかけて居るもありやした。衣裳をぬいで丸裸でゐた衆もありやした」呑「そしておいら達の事をなんぞと噂でもしたか」船友「爲た所ではござりやせん」アバ「なんと言つたネ」船「左樣サ、お前さん方の前では言ひ憎い」眼「何の遠慮は無沙汰だ、有體に言ひねヱ」出目「とんだ所へ無沙汰が出たノ」船友「丸顔な人がいふにやア、世の中にとんちきも澤山あるもんだ、金玉男の正體が知れた日にやア、そこへ奥女中の拵で出たつて、性が男だから氣が附きさうなもんだト言ひやした」船「爲永さんとやらも、岩藤のせりふまはしに、御先祖杢阿彌樣の御墓の前とはあんまり人もなげの言ひ樣だッけ、鏡山と寺子屋と梅の由兵衛も交つてゐる出たらめの長文句故しどろもどろだつけ、先がよく〳〵とつちて居ればこ

背中をさすつてくんねヱ、ア、せつねへ。そして爰にいつまでも居たら、又所の者にやかましくいはれるだらう。夜前は若竹の船を探したが居なんだが、今あすこにかゝつて居るぜ。船頭をおこして歸らう。阿婆さん呼んで呉んな」アバ「おらア思ひ出すと込上げて、どうも大きな聲なんぞは出ねへ。眼公呼んでくんな」眼「ヲヽイ若竹の船やアイ、若竹やアイ」ト呼びけるゆゑ、漸と目を覺して、船「お歸んなさるのかネ。あゆびを掛けて置きやしたから此方へお出なせヱ」皆々色は青菜のごとく、中には歩行も出來兼て、四這に這ふもあり、四邊に落ちし竹を拾ひ、杖にすがりりて歩行くもあり。鳴物小道具すべて船頭をたのみ運びもらひ、少しも早く漕出して、尻を喰はぬが專一と、船頭二人に貳朱づつはずみ、辛うじて半町ばかり乘り出し、顔を洗ひ嗽をして、やう〳〵人心地はつきたれども、腹合甚だよろしからず、船中ひつそとしてありけるが、阿婆「時に船公、夜前おいら達が所の者にしばられた時、逃込まうと思つて、もやつてあつた所へ行くと船はなし、それゆゑ一人ものこらず繩目の恥、おめへ達やア何所へ行つたのだ」船「ハイわつちが傍に付けてゐた汁こぼしは、神田川の船で、船頭はわつちが友達サ。こつちの船に來て、少しわけがあるから、此船を少との間洲へかけて置いて呉れと賴みやんした。勿論お辭儀もさせるし酒も呑せるから、此汁こぼしの行くまで待つて居ろと言ひやすから、それゆゑ洲

より勞れし八笑人、はや丑みつにも近ければ、一人こけ二人こけ、八人とも正體なく、ごろりごろりと倒れ臥す。寐息を伺ひ所の若物、取散したる杯盤をとり片付け、船の内へ持運び、何か代りにとりちらす、品はそれとも白川夜船、鼾は車をひくが如く、時分はよしと皆々船に乘移り、洲のある方へ漕ぎて行き、夜網を引かせて遊んで居れり。秋の夜のならひにて、はや東の方にたな引く横雲、美人の眼ぶち彷彿と、ほんのり赤くなりければ、烏みつよつ二つ森を放れて、かアかア〱と啼きわたれども、醉ひしれし八笑人は高鼾、淺草寺の鐘の音も五ツをうつころ左次郎目をさまし、あたりを詠めてびつくり驚天、左次「コレ皆が起きねへか、大變だ〱」トゆすり起され、七人諸共大金玉も目を覺し、「こいつア大變々々」と皆々さわぎ立ち、ゲッフウ〱〱、吐逆せぬもの一人もなく、大金玉さへゲロ〱〱、戻す片手に懐の額を探りて莞爾とわらひ、金「モシ旦那樣方、わたくしは足も遲うござりますればお先へ參じます。寔に失禮をいたしまして御座ります。御ゆるり是に」と言ひ捨てて、よろ〱として立歸る。左次「時にいよ〱狸に化された。ゆうべあんなに味かつた」呑「酒樽だと思つたは小便用箍か、ヱヽ穢ない」卒「それこゝらに喰ひ零してあるのは馬の糞だ、此所には蚯蚓が這つてゐる。何樣したらよからう、腹の内が引くりかへるやうだ。又出るぜ、ゲロ〱〱」左次「眼公ちつとおいらの

いてゐるぜ」左次「是りやァ藜よ。こいつァみんな此間の趣向を畠山樣の奥女中が聞いて、おいら達のいゝ男振を見物がてら、すつぱりかつぎに來たのだらう。金公の酌は少しむさいが、酒がいゝに肴がいゝときてゐるから、猪口を離すがをしい」卒「モシ左次さん、先刻から一件で膽がつぶれて仕舞つたから、此八人が洒落といつちやァ一ッも出ねへ、大きに醉もまはつて來たし、ちつと洒落は何樣だらう」出目「ヨカ〳〵、さつき出た女中衆が衣類は、數寄屋に越後、私ちやァ膽がつぶれて、きんちゞみはどうだらう」呑太「長へ前書だナア、ふんどしの脇からすきやきんちゞみは味からう」出目「おめへの川柳とかけて鐚錢ととく、心は惡錢りうだ」呑太「一文で大金を見る御藏前はどうだ」卒「何樣も猪口の回りの遲いにはこまる。チヤ〳〵蚯蚓はもうおつもりか」アバ「金公が爰をせんどと喰ふからョ」左次「こいつァしかし尤サノ」金「何樣いふ譯か御前樣方と御一所に御酒を頂戴いたすとは、寔に冥加至極」卒「冥加至極、極樂の追分といふはこんな所だらう」眼「ナゼ〳〵」卒「苦しみを忘れたり、嬉しさを忘れたりするからョ」出目「サアサ、おいらァ先刻縛られた時にやァ、實に悲しかつた」アバ「出目公は實に泣いたッけノ」出目「わしや泣くまいと思へども、何樣も泪が合點せぬ」卒「今こそ一口出るけれど、先刻は御同前に」呑「そりやァ誰でもョ」斯くて手より手に廻す大杯の事なれば、忽地醉ひて金玉を一番とし、宵

お酌」金「ハイ／＼それにはおよびません、左様ならお先へ」ト垢だらけの手にて、柄杓を持ちてついで呑み、金「コレハ／＼極上酒、ハイ／＼これは有難うござります。左様なら」ト左次郎へさすと、苦い顔をして、せめて盃洗でもと思へども、左次「時に金玉さん、お前の手は苔がはえてゐるが、いつ湯へ這入なすつた」金「ハイ五年此かた湯に這入つた事はござりません。それに隠嚢がかゆいので掻きますから、爪の間はみんな金玉の油でござります」左次「エヽゲツプ、何様もたまらねへ。夫を聞いてまだどうも化されてゐる様な心持だから呑みたくねへ」圖武「呑まねへ時にやア又縄目、どう為たらよからう」左次「しかたがねへ、一杯やれか」ト、グツと呑ほし「こいつアいゝ酒だ。圖武さんさゝう」圖武「ハイ」ト一ツうけ「左次さんが能酒だと言ひなすつたけれど、よもやと思つたら、こんないゝ酒はおらア生れてから今まで呑んだ事アねエ」卒「ほんたうか、早くさしねエ」アバ「夫ぢやア肴もよからう。その油揚を一つやつて見やう。ウメイ／＼、こいつア海老糝薯へ雞卵を入れて、きくらげ、蓮根、牛蒡を交ぜたのを揚げたのだ。何様もうまい／＼」圖武「それぢやアそつちの蚯蚓も喰へるだらう」左次「ドレ／＼、こいつも味いの何のといふどころぢやアねへ、是は吉原の土手の向の裏のやうな所の蕎麦屋で賣る、鯛蕎麦といふのを饂飩で打つのだらう、丸で鯛を喰ふやうだ。うめエ／＼／＼」呑太「ひたし物は何だらう、三葉でなし菜でなし何だらう。山葵がき

有顔に、左次「もし御前達やァ何と思ふか、先刻血の雨が降つて生膽をとられて、此狸さんが出たもんだからいよ〳〵びつくりさ。夫も今見れば此人は、御藏前へ出てゐる大隱嚢よ。左樣して見れば此船の内の人達が、一穴の狸で、一杯喰つたのだらうか」アバ「コウ金玉さん、おめへはどういふ譯でおいらたちを驚かしたのだ」金「ハイ何か存じませんが、昨日の夕方羽織を著たいきなお方が二人お出なさいまして、手前に用があるから、自己達のいふ通りになれとおつしやつて、額を二ツ紙につゝんで下されたゆゑ、一月の拵が一晩にあるといふもの故、何も存じませず參りましたが、私も狸に化されはせぬかと安心いたしませんから、懐の額がもし木の葉にでもなりは致しませんかと、先程より捻つて見ましたが、先々と存じて居ります」呑「皆がそんなに評議計して居て、又船の内からしぶを喰つて縛られてもつまらねヱ」卒「サウ〳〵、しかしおいらが思ふには、此肴がどうも合點がいかぬ、御姫樣の御遊山に、此おさかなは何事だらう。大鉢に冷麥、こいつァ繪に書いてある跡で蚯蚓になりやァしめへか。そつちのひたし物は馬の糞を散して、花鰹をかけたやうに見えるし、大丼の内は飛龍頭の味煮、こいつァキツ公狸印も大好物だと聞いてゐる油揚よ。何樣も喰ひにくいぢやァねへか」圖武「それでも呑んだり喰つたりしねへと又繩目だ。なんとぶしつけだが藏前の親方、毒味をして呉んなな」野呂「わつちが

よろしうございませう」尾「左様ではございますれど、
堪忍のなる堪忍が堪忍かならぬ堪忍するが堪忍
と申す歌もございますれば、彼者どもへ難題を申付けまして、夫が出來いたさずは、御館へ引立て行きませう」つぼね「コレハ〳〵お中老の御發明、なか〳〵此局はあつてないも同前、何様なりと思召次第。シテ難題と申すはナ」尾「左様でございます、用意の御銚子もあり、お肴もある事なれば、此者どもへ大きなる器にて呑せ、手より手にわたし、少しも下に置くときは、館へ引立てませう。幸ひ酌人には、最前出でたるふりちふふぐりの大きなる漢子、是へ〳〵」トありければ、「ハツ」ト出來る以前の狸、大ぎん玉を引ずり〳〵、身にはつゞれを著ながら、「何ぞ御用でございますか」尾「いかにも其方、此八人が酒宴の酌人相手を申付ける。汝が身のきたなきを嫌ひ、とやかく申すものあらば、早速召取り館へ引かん。所の者は、此者どもが酒宴の相濟むまで、出口々々をさしかため、蟻の這ひ出る所もなき様、用心きびしく守つてよからう。お局さまいざ先御船へ」女中「御立あられませう」入交つて奥家老、「コリヤヤイ中老尾上どのが格別の慈悲、只今御酒お肴もくださるほどに、難有頂戴いたせ。尾籠の振舞あるときは、誰かれの用捨はないぞ」此時所の者は出口をまもり、船の中よりは大ひろぶたに丼、大鉢三ッならべ、三ッわりの樽のかゞみをぬき、柄杓をそへてたまはりければ、八人のその内にも、左次は分別

べし。皆のもの左様心得てよからう」所のもの「ハア畏りましてござります」左次「どなたさまか存じませんが、私どもの不調法、所がらも辨へませず、茶番を致しまして御座りまする段、恐入りましてござりまする。何卒お慈悲におゆるしなされて下されまし、皆々御免をお願ひ申しな」アバ「ハイ〳〵寔に恐入りましてござります。どうぞ御免被遊てくだされまし。一體私は茶番は嫌ひでござりますが、皆がよつてたかつて勸めました故、據なくいたしまして御座ります。どうぞ御免遊ばしてくだされまし」吞「ハイあの者が申すは、みんな僞りで御座ります、今日の茶番の作者なり、座頭なり、親方とか、大夫さんとか云はれる身分の者でござります。罪はいつち重いのでござります。顔が正酩、阿波太郎と申すものでござります」卒「もう斯様になりましては是非におよびませんが、先刻出ました狸に喰はれて仕舞ひましたら、今の思ひはござりますまいと存じますれば、寔に悲しうござります」中老尾上あまりに見かね、尾「まうしお局さま、此ものどもを見ますれば、さのみ惡意を工みまする族とも見えませず、今日は姫君様まれの御遊山にもござりますれば、繩目をお許しあそばされては如何でござりませう」つぼね「コレハコレハ尾上どのの御挨拶、しかしながら見ました所が、いづれを見ても山家の猿、お身替になりさうなは一人も見えませぬ。以後の見せしめ矢張御館へ引きまして、お表へさし出しますが

花暦八笑人　五編下之巻

船の中より出でたるは四十三四の奥女中、大川端造ともいふべき御局役、髪はかたはづし御遊山船のしどけなき衣装にて、縞數寄屋のかたびらに、鼠繻珍の金糸にて、立涌を縫はせたる帶、箱狹子の間より銀ぐさりのさがりたる、まだ枯れきらぬ老木の花、見所のある姿にて、今一人は三十位、いはねどしるき中老役、紅入の大縞越後、金銀入のわな天の帶、これも箱狹子を胸の前につき出し、其外御末、御仲居、御はした召連れ、下部二人に提燈もたせ、奥家老の胡麻鹽頭、上布のかたびら黑絽の羽織、鮫鞘の細い短い大小をたばさみ、悠々然と上陸なし、つぼね「今日姫君さま淺草寺御參詣の御歸りがけ、是なる水神の森にて蟲きゝの御遊、しかるに大勢人數をあつめ、深更に及ぶまで狸の囃子となぞらへ、鳴物をならし物さわがしく致したる段、爰を何處と心得候や、當所は我君畠山家の乘船場、殊に御先祖杢阿彌さまの御墓の前、言語に絶えたるうつけのものども。偖また皆の者に繩を打つたるは、當所の者どもなるべし、庄屋方へ引行くはさる事ながら、折よくわれ〳〵居合せたれば、そのまゝ繩付にて請取り、館へ引行く

一什のわからぬゆゑ、つぶやき〳〵乗り出せり。その中に只一艘の汁こぼしのみ、天満ととも
にいまだもやひを解かざりけり。かゝる折から堤の方より、隅田村　洲崎村と印をうつたる提
燈あまたともし連れたる、若い衆大勢押來り、其所よ此所よと八笑人をあなぐりもとめ、かね
て用意の細引にて、一人々々にぐる〳〵巻、庄屋が許へ連れ行かんと、ひしめき騒ぐ折からに、
汁こぼしの船の中より、「暫く〳〵」と聲も艶しき鶯の、初音にひとしき女の聲々。そも此所に
立出づる人々は、何等の方にて在するや、次の巻を見て知るべし。

火、それを合圖に遠音のはやし、あるひは近くも囃子立て、稻村の蔭よりは、呑七が狸のこしらへ、腹鼓を打ち居る樣、寔らしくは見えねども、狸の趣なかく〳〵にをかしく、船中しばし興を催す折から、ふつと消えたる燒酎火、夫をきつかけにて、土手の四人もはしり來れば、稻村ひらけてあまたの蠟燭燈しつらねて其中に、お半を背に長右衛門、衣裝かつらは左計に見にくきほどにもあらねども、いやみたつぷり、下座には鳴物打鳴し、三味線二挺に淸元の、鹽辛聲も何とやら、今まで呑みしほろ醉も、興さへさめてつぶやく折から、いつの程にや見物の、うちより工み拵へけん、松より松に仕懸けたる雨車にてばら〳〵と、降出させたる血の雨の、先に立ちたるお半長右衛門、二人が衣裝かつらまで、眞赤くなしたる其の臭氣、まぐろのわたの腐りたる、夫かあらぬか知らねども、鼻を貫き堪へかぬれば、自然と雨に燈火消え、雲間の月も薄雲に、半かくれて程よき頃ほひ、木蔭をみし〳〵のそり〳〵と、歩み出來る誠の狸、大ぎん玉を引ずり〳〵、のッさ〳〵と出來れば、血の雨にて魂をひしがれ、十方に暮れし八笑人、「そりやこそ寔の狸が出て、我々をとり喰ふぞよ。逃げよ〳〵」といふ程こそあれ、四角八方へ散々に亂れ立ち、乘來し船を探せども、何地へ行きけん行方なく、詮方なくて蘆の中、小溝なんどに這ひかゞみ、かげを隱してためらふ內、見物の船は興をさまし、迹に隔てし事なれば、一伍

それに一寸見に來いとは、天狗ではあるまいし、左樣無造作往かれもしさうもないものと言つたら、イヤ愚僧はもそつと遠い所でござる。シテ何方でござりますと尋ねたら、狸の國象頭山でござると、一ぱいかつがれた」アベ「コイツアいゝ〳〵。わつちやア山谷の湯屋の二階でしやべくつて居ると、側に居た人が、夫は近頃面白い、わしも連中を誘引合せて參らうといつて歸つたが、跡で何所の人だと聞いたら、十返舍一九先生ださうよ。何樣か先生、この茶番の趣向でも盜みはせまいかと案じられる」左次「コイツア餘程の手前勘だ」斯くて此兩三日、八人の面々思ひ〳〵に流言をなし置きけるゆゑ、物見高きは都會のならひ、あるひは屋根船、猪牙三挺、中にも目立らし汁こぼし一艘、天滿に荷足をつれ、森の此方にもやひをすれば、其外岸の杭瀨につなぎ棹にとゞめ、其員凡そ二三十艘、◎も出したき見物なり。今や囃子のはじまるかと、勸進能を見るごとく、面白くないもかねて承知なれども、何をがな名目にて遊ばんものとの風流雄達、碁、將棊、雙六はさらなり、長屋の娘を雇ひ來て、三味線ひかせ、拳酒に現をぬかし、屋根ある船も屋根なきも、中々をかしき遊なり。かゝる賑はふ中なれば、凡の古狸も指をくはえて引込む所を、物におそれぬ八笑人、一人々々に船より上り、呑七、圖武、出目、眼七の四人は土手にて合圖を待ち、左次、安波、卒八、野呂は稻村の蔭にひそみ、時分をうかゞひ燒酎

エヘン〳〵と咳拂をして、左樣サ、私らん近所に居た法印、今は鼠山へ往つて居やんすが、そこの幼稚兒に狸が乘りうつゝて、當八月十五日の夜、向島水神の森において、囃子興行仕り候としやべつたのサ。すると此侍が笑ひ出して、イケ馬鹿々々しいと言ふから、もしあなた左樣おつしやりますが、けれども、池馬鹿々々しいとは、どういふ譯でござります、池なら鯉、鮒、鼈、鰻、鯰、泥鰌なんぞは居ませうが、馬や鹿の居る所ではござりますめへ。又法印の子に狸が乘りうつるめへものでも御座りません。昔から子どもが唄ひます唄に、狸にござる法印さん、といふ急度した證據がござりますといつたら、この侍が、まことに閉口々々といつて歸つたがをかしかつた」の乙「ヲヤ圖武さん味くやつたッけの。おいらア又王子の方へ出かけて、十條で瀧をあびて居る所で、今の噂をはじめると、まじめらしい和尙が裸で涼みながら、夫は愚僧も見物に參らう、もつとも拙僧も分福茶釜と申すを所持致して居るが、そこ許狸にゆかりのお方とあれば、どうぞ其茶釜を拂ひ度いものでござる、何卒狸方へお咄しくださる樣にと、眞顔でいふから、かねて名高い茶釜ゆゑ、こいつア金まうけと思つたゆゑ、もし此度御持參かと聞いたところが、イヤ持つてはまゐらぬが、御覽なされたくは、愚僧と御一處に今晩お出なされといふ故、モシ分福茶釜は上州茂林寺といふ寺にあるといふ事は、誰もよく存じて居る事、

て、獨大師河原へ往きやした、道々湯に入る事およそ十遍、その度々湯屋の二階の菓子代と、あたりめへの湯錢茶代、ならし五十づつ、髪を結つた事五度、水茶屋と見ると休んだ事數知らず、持めへのゐて酒の事は、兩國の四方で紅葉おろしで一よ、親父橋がいもで又一よ、京橋まで辛防して角でさし身にから汁だけ二ツよ、大門で蕎麥で一よ、高輪であなごは少し奢だと思つたから、濱の葭簀張でどぢやう汁で一よ、觀音前に蝦蛄が見えたから、又つい一よ、羽根田へまはつて蛤でまた一よ、飯も喰はずに大師へ參詣ッた時分はもう七ツ半、それから仁田屋へ泊つて、歸りも同斷よ」あば「そいつァ御苦勞だつけ。しかし湯屋の二階水茶屋なんぞは尤だが、今おめへの雙べた一々の所は、いづれも下々の者の這入る所だから、狸の囃子でもといふ風流雄達はよるめエ」圖武「左樣いひなさるけれども、一體流言といふものは、軍中水虎の役で、何所といふ嫌ひなくしやべつて歩行くが專一よ。其中にをかしかつたのは高輪の茶屋で、何所の侍か知らねへが、しかつべらしい帶刀が、腰をかけて居るし、女の大師歸りが五六人ゐるゆゑ、得たりかしこしとしやべりちらして、當月十五日雨天日送りに、向島水神の森に、狸の囃子があると咄を仕出した所が、女連も茶屋の婆さんも、隨分請けやしたが、彼の侍が言ふには、狸のはやしをするといふ事を、誰が云ひ出した事ぢやと尋ねられ、尋常の者なら忽地赤面といふ處を、

たりとは、十一日に歸つて直賣を爲たといふ心持だな」吞「左次さん、ついでに足の筋も見ておくれ」卒「御腰元三篇目には大欠び」左次「細贏彈と見たナ」圖武「何樣もおれにやァ洒落より外は出來ねへ。百や二百は出しても仕方がねへ、先刻から胸がむか〳〵する」出目「せつなかァさすらうか」圖武「左樣さ、どうもソレへど繪圖役人附」出目「役人附しそのみ唐がらし」吞「唐がらしものは音にもきけ」の呂「きけやきけ〳〵此車」出目「車のじやれとは違ふぞよ」左次「ヲツトよし〳〵、もう朝飯は澤山だ」かゝる洒落をいひちらし、隅田川水神の森に著きければ、あば「野呂さんおめへは道具方だから、今の内稻村は程よきところへ居置だ。所の者が來ても、稻村だけ何とも言ふめヱ。今に見物が大勢になると妨げだ」の呂「ヲツト承知〳〵。あわよかいぐり〳〵とゝのめ」左次「時に堤の方から此作道を見物が來た日にやァ、樂屋が見えるから、二所三所繩をはつて置き、此所作場道通るけべらずと書いて置くはどうだらう」あば「是則ち、天の時を量り、地の利を知るといふ、名將の謀だらう。士卒に言付け早速、といつたら又、此間の樣に誰が士卒だとか、何とかいふだらう、仕方がねへ、おれが行かう」ト、竹切を拾ひ繩を張り紙札一をさげて、人留をして立歸り、あば「ときにもう日が暮れたから、見物が來さうなもんだ」圖武「來るとも〳〵、先刻から咄さうと思つて居たが、洒落禁制と歌仙とやらで、鴈々三ツ口跡のが先になつた」左次「ヲツト枕言葉なしに言ひねヱ」圖武「をとゝひ此噂をしやうと思つ

さん、此あひだは皆が大とろんこで、お互に大きな聲も爲たが、今夜は兩國川の魚と水、いつも八笑人といへば、朶洒落計言つてゐる、あんまり風流氣がねへから、今夜は翌の朝まで善悪はともかくも、洒落たもの一洒落、朝飯の五色茶漬、一人前づつと極めやう。船中洒落禁制で、あまり慰みなしにもいけめヱ。狸の代りに狐といふ所だが、それも殺風景だから、膝まはしの歌仙が打つてつけだ。なれども不承知といふ顔もあるから、たゞ四季戀雜去嫌なしに、川柳を三十六句、一字段々同様に、趣を尻どりに竝べつこは何様だらう」卒「そいつァ面白唐草、可樂、夢樂は咄の上手、手水の手ぬぐひ臭くなり」左次「ヲツトいり豆腐で二人前。先それは偖おき、今いつた川柳の立句は、昔から人口に噲炙したる、孝行に賣られ不孝に請出されといふ句に、わつちが脇を卽詠さ。下女も口癖にさうざます」卒「妙々、わつちが第三はやッつけやせう」しばらく考へて、「ふウ縫へるかも針の莚なり」左次「こいつァ妙々。爰でづいと轉じて何樣だね」呑「候盗人と組打し」卒「呑七が覺えのある事だナ」眼「今日は大平の蓋で酒を呑み」左次「何か居候がお呼出しで、青物町の角で大屋さんにもはゞからず呑んだといふ事か」卒「夷講せぬ隱宅も數萬兩」左次「大平の蓋を夷講と見て」呑「こいつァむづが鹿しまの要いし」左次「ソレお一人さま」卒「植木屋の居殘り天ぷ八ッあたり」左次「こいつァわからねへ。ハヽァ藥研堀の角だな。天浮八ッあ

手前々々の楽、代り交代にする茶番だから、附合れねへといふほどの事もあるめへから、そんなに顔を赤め合はずとも、相談づくにするがよからう。先今日は是限にして、おめへの盃を順にまはして、一ツ〆て中直りと爲なせへ。いづれ此茶番は月夜でなくつちやァ可笑しくねへから、八月十五日と極めやせう。雨天日送りで、翌日ッからてん〴〵に、湯屋髪結床水茶屋なんぞへ流言が肝心だ」あば「さう左次さんの様にいはれちやァ、わつちが何か腹を立つて、野暮を言つた様で今更恥かしい譯だ。中直りにちよつぴり、潮と酢の物を私が奢らう」呑「そいつァありがた山の鳶烏、つゝき合つて喰ひあふ中だ、跡は根も葉も骨も残るめヱ」のろ「皆さん一つ〆て」シャン〳〵〳〵〳〵〳〵 左次「そんなら安波さん、翌日書抜を渡しねへ、稽古もいるめへ。十五日の晩がた柳橋の若竹で出合ふとしやう。しかし船は道具の稲村や鳴物があるから、三挺でもいけめヱ、荷足でなくちやァなるめへ。よしか衣裳小切小道具一切呑込んだの、忘れられていけねへのは梅川の肴だぜ。夜が短いから歸りは朝だが、いつでも朝が早いとひもじいめを見るぜ」その内あつちへの肴も来り、いよ〳〵強酒となりて其日もたそがれごろ、やう〳〵おのれ〳〵が宿所にかへり、喧嘩の次第をつぶやく〳〵やら、跡の肴でちぎりを爲しなど、噂たら〳〵そしり合ひけり。程なく八月十五日、今年は残暑はげしき故、暮六つかぎりぼつちほち、寄り集りたる八笑人、柳橋なる若竹にて、かねて雇ひし荷足船、割子竹筒の用意もとゝのひ、時分はよしと漕出せり。卒次「トキニ安波

分らねへと思はれたからは、八人の恥になる事ゆゑのことヨ」あば「左様おめへ達のやうに下手な按摩が肩を揉むやうに、おつうひねられちやア可笑しくねへ。一體今度の茶番はおれが番でおれが作者なり、中二階こそすれ座頭の事だから、親方とか太夫さんとかいつて、妙でござります、いづれよろしくと言ひさうな所を」吾「安波さん、左様手前癇が强くッては仕方がねへが、筋がわからねへから、わからねへと言つたのサ」あば「おめへ左様いふけれども、今まで皆が随分面白い趣向をしたけれど、いつでもやんやと仕舞まで見せた事はなからう。斯ういつちやアをかしいが、わつちが茶番ばつかりは、乍憚始終やんやとやつて見せやう。細工は流々仕上を御覧じろ」眼「左様さ、おめへの番だから、誰だつて役不足を言ふといふ譯はねヱが、よく積つても見ねへ、世間へぱつと向島で、斯ういふ事があるとかなんとか噂をさせて、ぱつとした所で、茶番が放屁の中落ときては、種なし三番叟、かいた恥を外へはやられ申さずだ」あば「がうぎと腐すノ、いよわへよしねへ。筋がわからうがわかるめへが、其所ア安婆さん江戸ッ子だ、時は橋の鯱を横目に白眼んで、澗田上水を産湯につかつた男だ、地鐵が違はア。皆が不承知ならおれ獨りで爲るはヱ。へちむくりめら」左次「コウ安婆さん、是まで年來八笑人に限つては、朶洒落こそ言ひちらせ、ついに一度も喧嘩口論といふ不風流はなしだ。能くつても悪くつても、

あば「そこで稲村の蔭から私がお半の拵で、十六七の美しい娘よ。鬘は羽二重で、紫縮緬松に蔦の裾模様の振袖よ」呑「チット十六七ト美しいとの二所は、犬の糞の無ヱ所へそつと置いておくれ。もし見物が美しくない、疱瘡跡面なきたない男だと思つた日にやア、跡へも先へも参りがたしだ。涼を止めて最明寺雪の段と僞ざアなるめへ」あば「何樣も本讀中交ぜられるには困る、筋を聞いて仕舞な。そこで左次さんがさしづめ長右衛門よ、おいらを背負つて出るノ。眼公の三糸で月の、友桂の川浪をまるで一段、呑公たのみやす」左眼「お賴みなら彈きもする、語りもしやうが、茶番をする所が隅田川で、狸が腹鼓を打つて仕舞ノ、黒幕の内へ引込むと、お半長右衛門とは何の筋だか、何が落になるのか、あんまりわからねへぢやアねへか」あば「イヤおめへ達は兎角、おれが上作を出すと妬むが、呑七が間の拔けた狸を見せて、おいらと左次さんが美しいお半と長右衛門を見せれば、桂川が隅田川でも何にもかまふ事アねヱ、船の見物にドット言はせせヱすりやアいゝぢやアねへか」呑「なんぼ友達づくだといつても、呑七が間の拔けたまで聞けば澤山から駒込、王子板橋、それから先はわすれたが、上州信州善光寺の本尊が、本多義光におんぶした道行だとか何とか言つて、見物が南無阿彌陀佛と褒めるだらう」あば「呑公がうぎに交るの、ヤンヤと言はせへすりやアいゝぢやねへか」眼「やんやと言へば何にも言はねへが、

花暦八笑人　五編中之巻

江戸　輿鳳亭枝成戯作

再説、蓮池亭の佳景といつぱ、不忍辨才天の御社直に向ひ、三伏の暑といへども、池中の芬陀利花涼風をもよほし、六々六藏種類を集へて岸にうかべり。實に仙境といへどもおよび難かりぬべし。爰に昨夜より呑臥れ、巳の時頃に目を覺し、げつぷ〳〵と楊枝をつかひ、半丁の奴豆腐より、百宛の割合に、雁鍋のあなごに移り、五合德利も四ッ五ッ、ごろつちやらと取散し、はや鮮魚屋も來る時分。あば「ときに昨夜もいふ通り、呑七先生は狸の拵で生寫しの面、紋羽の彩色の著附よ、腹を白く見せて、誂の小道具稲村ふたつの間に足をなげ出しの、腹鼓を打つてゐる。何ぼ月夜でも、船からははつきりとは見えめへから、燒酎火で差出しを兼ノ、よしか」卒「別段よくもねへノ」あば「マア聞きねヱ。下座一組は、堤の茶屋の床の下で囃子を遠くきかせ、一組は水神の森の内で近く、此かね合はよろしくサ。彼の燒酎火を消すをキッカケにして、兩方の下座が一所によると、狸は黒幕で稲村の蔭へ入る。ヨシカ」卒「まだ能くもなんともねヱ」

ニおれがそんな尾籠な事をいふものか」吾「こいつは大笑だハヽヽヽヽ」ト、皆々笑ふうち、また酒をのみながらまぜる、あば「本讀を追なくしちやアいけねへぜ」左「ぜんてへ狸の囃子といふなア近頃の時花言葉で、むかしからいふとほり、腹鼓といふがほんとうだ。桶の底を叩くやうな音をさせて、直側で音がするから出て見ると、遠く聞えるから内へ這入ると、また頭の上でたゝく様にきこえるもんだが、近頃は鼓を止して、太鼓になつたうちが洒落て居るぢやアねへか」左「そりやアどうでもいゝから、其後はどうするのだ」がん「その先は菜切庖丁長刀だらう」あば「そこで遠くと近くの囃子が入用だから、桶の底のやうに、大小の鼓計り一所、小太鼓ばかりが一所、三味線入の囃子と、清元連中の浄瑠璃と誂へて置いて、そこで狸が一疋入用だ。連中から頼みてへ。御苦勞ながら狸をやつてつたしやくんだ面だから、さしづめ呑公、見まはした所で外にはねへ。はなづらの尖下つし」出「狸の役當で面不足をいふものは、是ばつかりはあるめへぜ」吾「お互に友達づくの事だから、入用の面なら遠慮なしにつかふがいゝけれども、こんな色の白い目鼻立のいゝ狸ぢやア、見物がうけめへぜ」卒「色の白いのは面白狸といふ事が有るからよからうが、小鼻が横にひらいて、唇が小夜著の袖口といふもんだから、口のとがつた所と、額の出てしやくんだのが肩だ。かなつぼ眼の狸といふがあるものか、猿なら大丈夫だ。アハヽヽヽ」

でも猿若町なんぞぢやア、日暮がたからみんな出たア」がん「そりやア聞いて知つて居らアな」あば「今つからいつの幾日は、向島の洲崎でも水神の森でもいゝから、狸ばやしがあるといふ噂を風聞しておいて、見物をあつめて野田の夜茶番をやらかす思ひつきだが、左次さんどうだらう」左「月夜でなくつちやア面白くねへ」がん「雨天日おくりとやらかさう。野茶番だから降る方がよからう」あば「ナニいゝものか」卒「それでも雨の野茶ばんへはぜを入れて、四文でございといふから」出「あめの中からおたぬが出たヨ、にこ〳〵笑つて飛んで出たヨ」圖武「おたぬがいやなら金玉が出たヨ」がん「狸にはどうも動かねへぜ」あば「たぬき囃子には大太鼓はねへ、小太鼓ばかりで旨く拍子をうつもんだぜ」がん「大大根がなくつちやア、風呂吹にはならねへの」卒「細いのは糠味噌よ。波多菜大根や細根は干大根になるだらう」左「そんな世話はせずともいゝぢやアねへかな」のろ「向島は百姓地だから、些は作物の事も辨へざアなるめへと思つてヨ」あば「マアだまつて聞きねへ」卒「だまつて聞いて居るヨ」あば「そこで何だアな」出「なんだ」あば「なによ」がん「なには甲良に似せて穴を掘るのか」あば「なにの甲より年の功だ。本讀の筋をきいて殆ど肝心してから、外の話をしねへな」卒「年の功よりべつかつかうが似合ふぜ」出「あんま膏を張ると丸で瘡ツかきだ」がん「そして妙な所へ殆どが出たぜ」のろ「頗るの間違へだらう」あば「ナ

誤つたと言はねへけりやァ、雷さまが鳴つても放さねへ、どうだく〳〵といふと、せつないもんだから誤つた御免だといふから、そんなら放してやらうと、睾丸を抓んだ手で背中をぴつしやり叩いて、這入らうと思つて顔を見ると、内の大家さんよ。出目公は奥の方の角に首きり這つて居てぐつ〳〵笑つて居るだらう。大家さんは苦蟲を喰ひつぶした様な顔をして、阿波太郎さん、早朝から御機嫌と見えますと、しかつべらしく言はれて、何分にも面目次第もなく、穴へでも這入りたい様で、御免なさいと誤るもあやまられず、ひと風呂這入ると、どこかどう飛出して歸つた所が、大家めヱ湯から歸りに内へ寄つていふには、外の串戲と違つて金たまなんぞをつかむことは以來しねへがいゝ、モシ息でも止ると大變ができる、我等だから克かつたが、他のものだと喧嘩にでもなる所であつたと、したゝか油を取られた」圖武「きんたまの油を取つたら鐵瓶でも拭込むによからう」卒「きたねへ、その油をどうした」出「太郎殿の犬と、次郎殿の犬と、みんな嘗めて仕舞つたとよ」卒「それからモウきんたまを握る事はやめか」がん「ふところ手をばして居ても、手持不沙汰だらう」卒「なにいつも握るものは、きんたまより上だから、大家さんも構ふめへはサ」あば「そのきんたまが茶番の種だ。今年は向島に狸囃子といふ事があると言つて、夏中すゞみ船が綾瀬の方や三在橋の邊へ、たいそうに船ではやしを聞きに行つたぜ。なん

どうだ、うまからう。其時は讀人しらずと書いておいたがどうだらう」ト、いへば皆あきれて、左次「讀人しらずより待人來らずと書くがいゝ」出「舌ッ足らずの樣な歌だの」のろ「これ謹んできくがいゝ、是が萬葉振といふ古往の口調を借りたのだ」卒「口調かりかや女郎花か」がん「口調ばかにした歌だ」左次「唐人の寐言のやうだから唐歌といふのだらう」出「それでも神妙に讀人しらずといふ内が殊勝だ」左「讀人が知れちやァ恥のかきあげだ」ト、いろ／＼惡洒落にてごた／＼しければ略す。左「しやれの勸化も、額の奉納も、しばらくあとの噺にして、後の條に說解くるを聽きねかしとして、却說、阿波公の隅田川の花屋敷といふ題の茶番は、久しぶりで旨くやりてへもんだが、趣向は付いたか」卒「肝心の咄しだ彼岸前の蛇の樣に、呑んでばかり居ても智惠のねへ理屈だ」出「呑まねへでも智惠の有る氣づかひはなしだ」アバ「今度は己の番は先刻承知だから、モウ名題は出して置いた通りヨ。花屋敷といふ題ばかりぢやァ茶番が仕惡いから、狂言の種にしたわけを聞いて下つし」のろ「聞いてやるべい」出「それよ思へば昔なり、大小鼓入の合方で物語か」卒「まぜつけへしは御免だ」アバ「あつらへの七色唐辛子を賣る樣に、あんまり交つけへされるとひるむぜ。斯ういふわけだ、此間朝湯へ出目公の這入るのを見たから、急いで行つてみると、もう柘榴口へ立つて體をしめしてるるから、著物を棚へほうり上げて、駈けて行つて後から睾丸を確り握つて、サア出目公御免か、

い」卒「親ならいゝが子は出さずともよからう」アバ「めつたに出して雨でも降るとごめんだァ」出「ぜんてへみんな一所にかたまつて居るから案事がつかねへのだ。一人づつ四所に分れて居るがいゝ。そつちの方へあば公ヨ、こつちの方へ出目公、むかうの角へ野呂公、卒八はこゝへ來ねへ。斯う四所へ分れるといゝ洒落が出るぜ」卒「ナゼそんなひちむづかしい事をいふのだ」出「むづかしいことはねへ、下手の考四すみに居たりといふからヨ。長い立關付の洒落だ」卒「なんでもいゝ是が一筆見たかそんな角だ」アバ「でへぶ八文洒落が出かけるぜ」出「そねめ〳〵」のろ「おらァ洒落は地でゐるから、改めて帳へ付けねへでも、後で帳面を見せりやァ出すだけは出すからよからう」卒「それぢやァ洒落は晦日拂だの」出「はらひが滯ると引しやれになるぜ」のろ「ならうことなら五節句でも、二季でもいゝがあきれらア。なんにしろ額へ書く歌は、おれがソレ圖武公、主が棒端で飛鳥山へ花見に行つた時、卒八公と出目公に阿波公と五人連で、大醉にうだつて、歸り道に茶屋の婆ァに道を聞いて、大損をして草臥れたといふ事を詠んだ短歌を書きてヱから、聞いて左次さんなほしてくんねへ。斯うだ、主といふのは圖武公の事だぜ。

　主棒端五人で酒呑で花見歸に茶婆に道よ聞て損して草臥た

様に好ひ酒落ばかりをいふものは錢炭が上るし、下手なてやいは仕合だ。見渡した所で酒落で錢炭を取られるやつは一人もなし。駝酒落仲間は安心なもんだ」出「それぢやァうつかり口をきくと運上かあげ錢が出るのか」卒「人の云つた古いのなら帳面にあるから錢は出さずとよからう、二度取ばつとだ」あば「そんなら、古いしやればかりいふがいゝ、犢鼻褌を腮へはさんで〆たり、帯を貝の口にむすんで、前から後へ廻した時分の、かんに信濃の善光寺」卒「ありがた山の鳶からす」のろ「なんで有馬の人形筆」出「迯げたの中によこ木瓜」がん「まんざら坊主の柿の種」あば「コレサ〳〵もういゝ加減にして置きねへ」出「しやれ仲間で初筆に付けねへぢやァ外聞がわりい。一番に付けてもらはう」左「なんといふ酒落だ」のろ「ヱ、トまちねへ」ト考へてもさしあたつて酒落が出ぬゆゑ、いきんでばかり居る。左次「サアどうだ〳〵」のろ「マアまちねへ今出る所だ」左次「がうぎに結しるな、あとがつけへて居るぜ」のろ「どうもさう世話しなくつちやァ困る、今出る所だ」ト色々みもだえをして考へる。左次「コレサそんなにいきんで、酒落の代りに左ねぢりでも出されちやァ大變だ」卒「まだ出ねへのか」左次「そんなに急ぐなら惣雪隱へでも行つてくんねへ」出「ナニおいら達は雪隱にかゝり合はねへ。しやれの事よ」のろ「ほんに左樣だつけ、あんまり苦しいから」トいふ拍子に、おならを一ツぷうと音がする。卒「せつな屁をひるやつさ、せつな屁時の酒落頼みだ」出「くるしい時に親を出せといふから、屁の親でも出すがい

「ナニちよいとなら五合づつサ」卒「どうして〳〵五合ぢやァ生きちやァ居られねへ」出目「ナゼ」呑「一升の別れになるから」がん「六合かイヤ七合宛と極めておかう。七のかずは目出たい。七福神、七珍萬寶、七人猩々、七賢人、天神七代、地神ちじん、ちよちん〳〵」卒「地神雷」ト、いひながら酒の肴の鰮燒を見て、「鯵、親父か」のろ「これから八笑人を七合神と、質素儉約に極めようぢやアねへか」がん「おそれ入谷の七合神だ」左次「ヲヽさうだつけ。皆顔のそろつた時分頼む事があつたツけ」呑「何だ何だ〳〵」左次「なに膽をつぶす事ぢやアねへが、此茶番連はマア洒落てあすんで暮して居て、わりい地口ばかり言つてるといふは有難い。神の惠だから洒落の氏神樣へ冥加のために」出目「茗荷よりあたじけないから生姜のためにすればいゝ」左次「馬鹿仲間だからみやうがの爲さ。お禮に額を奉納して八人の名をのこしてへと思ふが、昔から古いしやれの氏神は、今のおそれ入谷の鬼子母神樣だから、斯う寄合ふ度帳面をこしらへておいて、洒落一ツに付いて、二十四文、十六文、八文としやれの甲乙を付けておいて、錢をあつめて、額面は歌でも發句でも詩でも語でも、六でも七でもお望み次第書入れ、奉納の寄心をしてへといふ御連中へお頼みサ」あば「勸化なら卒八が一重羽織を著て帳面を以つて歩行けば、打つて付、俗願人まがひなしの人品だ」卒「妙見さまへ銅の燈籠か」のろ「いゝ洒落は二十四文、わるいのが十六文八文ぢやァ、おいら達の

から命に別條はなかつた」あば「下にゐると大雨車軸をながす所だ」ト、いふうちに野呂松裸になり、ひとへ物を抱へて、片方の手に帯と身紙入、煙管煙草入を持つてはしごを上り、のろ「おらアとんだめに逢つたぜ。こゝの内へ來て表を明けてはいると、頭から是みな、びつしより水をあびて單物も何もぐつすらづぶぬれヨ。物干へ出して些とまあ干さう。膽をつぶしたぜ」づぶ「おらア裸で來たから水の見舞に來たのだと思つて、背の立たねへ樣な所をおよいで來たとおもつた」左次「野呂公の來やうがおそいから、そんなめに逢つたのだ」のろ「おらア先陣より後殿をするきよ」出目「しんがりより裸ついでに猪狩でもするがいゝ、物干で」のろ「ちげへねへこれは物干かねきんざんの麓、忍ぶの岡の里に住む野呂松と申すものにて候」ト、能狂言のまねをしながら、をかしなあしつきをして物干へ出ると、引窓の下にがん七りんをあふぎながら上を見て、がん「なんだもろこしだ、唐の方に火事でも見えるのか」これより八人のなまけもの顔がそろひ、思々の口から出次第洒落盡の不禮講、例の大酒盛となる。あるじの左次郎はほどよく酒を呑みよたんぼろにはならず。左次「斯う皆久しぶりで顏がそろつた所はどうも有難へ。高田の茶番以來だぜ」卒「七兵衛のだりむくれで青菜に鹽々陣を引いてからは、斯う落合つた事はなしだ」出目「全體此度は阿波公の番だツけ」あば「それだから油斷なしに案事をしてゐるのヨ」左次「マア茶番もいゝが、斯うこゝへ寄集る呑仲間は、梁山泊なら己アまツ裸宋公明だ」がん「大わんぱくなら九紋龍か魯智深だ」のろ「呑倒れの豪傑、ちよいと寄合つても一升づつも呑むから、八升人といふのだらう」出目

う」がん「北條時折ヨ」出目助卒八道入りながら、卒「庖丁全體今の間に、卽席の喰ふ役はあれや是やは知らなんだ」ト、いへばがん七赤貝をとつて見せ、がん「赤貝なんぞにや克くきくさうだはどうだ」出目「こいつは丁度うまくはまつた。三杯酢か甘煮か」がん「なんでもいゝようま煮くはせるから二階へ往つてゐさつし」出目「道端の槿花は甘煮喰せけりか」あば「それぢやア洒落にやアならねへぜ」卒「しやれにやアならねへとお許が出ねへでも、一杯のむと洒落が胸先へこみ揚げて來るから案じなさんな」あば「しやれねばならぬといふのぢやアねへ、しやれにも地口にも聞えぬといふのヨ」卒「しやれ〱口やかましい奴等だ。出目「聞いてゐるものは耳やかましからう」ト、二階へあがると、最早づぶ六、どん七、左次郎は酒がまはつたやうすにて三人を見て、左次「出仕がおそい〱判官どのだ」圖武「鮒ヱ〱ふな侍をよしにして鯰鍋だぜ、どうだ」呑七「鯰侍ぢやア語路がわりい」あば「鯰のさむらひ助安で、藏を曾我に書替へはどうだらう」くらとは、忠臣藏といふべきをくらとばかりいふは、芝居通のことばにて、此仲間では斯くいへり。左次「新手の三人で助やすトいつて、喰ひたてられてもモウ買はずの三郎だ。股の肴を出すまでヤおつこてへろヱヽ」ト、あさひなの身振をしてりきむ拍子に、盃洗の丼をひつくりかへし水だらけになる。呑「サア〱大變だ〱大水々々。ヲイ雜巾でもなんでも早く〱」づぶ「權現堂と猿が股がきれた〱。助けぶね〱〱」卒「猿が股どつこいまた」出目「これわいまた」呑「よいやまた」ト、皆々手拭雜巾などをとりあつめ水をぬぐひ、あば「それでも大水が床へ上らねへで仕合だつけ」左次「その筈だ、二階に居る

の出目公なんざア冬も夫、爰の横町と同じ事だからヨ」出目「吹拔でゐるといふ落か」どん〳〵といふにも吹拔といへる横町も皆此邊にある地名なり、三人「ハ、、、」あば「うまく悟つたな」卒「うまくさとる筈だ。餅づくしで爰まで來て、出島と白下で喰へめへと思ふから、氷おろしと三盆を遣つて置いた」あば「酒を止めて下戸になつたな」卒「こゝを歩行くうち下戸ヨ」出目「コウ見ねへ杵屋の宅は綺麗で見晴しがいゝナア」こゝの杵屋六翁といへる高名の人ある也。卒「きねやといふけれども、舂くのぢやアねへ引くのだから臼屋といふといい」出目「うさアねへ」あば「嘘はねへといふ氣か」出目「野暮をいふぜ、臼はねへといふ洒落ヨ」あば「それでも挽臼と搗臼の二種あるからヨ」卒「貳朱あるなら穴甚か安達屋。チト廻りだが大和屋へでもお供とやりてへ」この名前は此邊の鰻屋なり。あば「二種とは二色といふ事だア。二色と云つたら文盲な主達ゆゑ、役者の口眞似する事だとおもふだらうが、二品といふのだぜ」卒「扨は變だぜ、二品は蟇一ひよこ三ひよこ〳〵」出目「蛇ぬら〳〵なめくで參りやしよ」あば「サア來たぜ」ト、左次郎の門口へ三人きたり、出目助と卒八かくれて居ろと目くばせをして、あは太郎は格子をのぞきながら、あば「眼公々々〳〵、チイこんな物を持つて來た。こゝを明けて下つしな」ト、聲をかけられ、がん七何か勝手に酒の肴をこしらへてゐたりしが、手をふきながら出て、がん「なにを持つて來たのだ」ト、表の格子をあける。あば「トいつて爰を明けてもらつたのョ。出目公と卒八といふお土産だア、めづらしからう」がん「そんな事だらうと思つた。いめへましい板めへ最中だア」いためへとは料理人をいふ。あば「庖丁は安磨だら

花暦 八笑人 五編巻之上

江戸 一筆菴主人戯編

世の中の義理も糸瓜も瓢箪も、構はでぶらり日を送る、遊情仲間の八笑人、一別以来にて左次郎の、蓮池亭に墨會約束、卒八、阿波太郎、出目助の三人連。あば「コウ出目公、廣小路から橋の側へ斯ぅ曲つて木戸を這ると係けて主と解くぜ」卒「ナゼ〳〵」あば「どん〳〵といふからヨ」出目「だしぬけに何を言ふかとおもつた。鈍々とはそつちの事だァ」卒「ナゼ」出目「なぜの神と並んで幇間計りしてゐるからョ」あば「太神楽の挾箱持ぢやァあるめへし、太鼓を持つ奴があるものか。金持の旦那をおもしろく遊ばせてやる座持といふのだ」卒「疳癪持や疝氣もち、厄介もちの焼餅より些はいゝな」あば「また彌次馬に出るョ。それ〳〵足元の悪いによろけてぬかるみへ尻もちでも搗くと餡ころもちだせ」あば「ころんでも只は起きねへからいゝのサ」卒「主ぢやァあるめへし」出目「ぬしでねへ代りに馬だろう」あば「大福餅の懐の暖いのを相手にしねへけりやァつまらねへ」卒「大福餅といへば、モウ是から寒くなると此處は立ちきれねへぜ」あば「ぬしだ

隅田堤の秋の七草に虫の音なら
ぬ狸はやしを聽月見船の滑稽

世の噂

砧のおとを野狸

あば太郎「コウ左次さん聞かッし、此名題は寶船の歌と同じことで、うへから讀んでも下から讀んでもおなじ事だぜ。マアざつとした事が、おいらたちの案事は名題からして斯う骨を折つて工風するから、埒のあかねへ筈だらう。茶番に廻文の趣向はどうだく\。「きぬたのおとをのたぬきサ、何くわいぶんもたうぶんもいらねへことはねへ、是から脚色の本よみを聞かッし、とうざいく\。

大

小

歳徳　あきの方

正月より

正

初編小笑人の……日をおくり

……年の市……

……句を……

るはなく、なきは數添ふ世の中と、小町の詠みしも年歳似たる花に浮氣、身の老を忘れて謾に禿筆を走らす事しかり。

東都楓川の市隱

一筆菴主人誌

維時丁未年仲冬稿成己酉年新春發兌

史記に滑稽傳有り、素滑稽とは辯捷の人、是を非の若く、非を是の若く、同異を亂す事を言ふ。洒落は物の洒落て澌せし意也。山谷が周茂叔を斥して、人品甚高し。胸中洒落たる事光風霽月の如しと云ひしは、更に物に貪著せず、串戯交に風流に遊ぶを洒落た人とも云ふべきか。舊友瀧亭鯉丈子は、常に滑稽洒落を弄び、世の中を絲瓜の皮と暮し、閑暇の筆すさみには策子を著せり。所謂花暦八笑人、滑稽和合人、大山道中記、箱根草等則是也。克看官の腮を解せ、腹を抱へさせしより、童戯人の稱高く聞えたり。惜いかな居を黄泉に移ししより其遺稿絶えて有る事なし。發客遺憾に堪へず、此頃予に其嗣作を乞へり。從來孤陋にして世の流行を知らず、拙き著作を以て木に竹を接ぐ誹謗を得ば、先板の評判まで貶す基となるべしと、固辭して需に應ぜざりしが、過日瀧亭子に、八笑人の復稿を談柄に聞くよし有りけりと、大概を板元に告げしかば、其儘稿を脱せよと、再應の求默止難く、然ども机上繁多の故を以て筆を採るの遑なく、既に中冬に至り漸く硯を是が爲に發き、一員二員草稿成りしを傭書剞劂を勞して、以て新春發兌の售賈に附す。蒼卒の間疎漏急迫にして校正に給暇なく、他の胡盧とならん事、慙愧に堪へずと雖も、唯其遺意を次ぎ、懐舊の情を述ぶるにあり。白樂天が舊詩卷を感じ十人の酬和九人はなしと吟ぜし憶ありて、あ

テンテレツクツヽテン〳〵と太鼓につれ、圖武六は縫ぐるみの狐にてヒョイと出で、彼案山子をかむり、約束の通り猪の思入れ。うしろは化物めきたる鳴物にて、定九郎とのをかしみの立廻り、こればかりはかなり見物も受けたるやうすゆゑ、兩人もぐつと乗氣になり、圖武六はしきりにはずみて飛びはねれば、うしろで遣ふ焼酎火へ突當り、かむりたる簑へ火うつりて一度にくわつと燃えたてば、「ワッ」トおどろき案山子を捨てんとすれど、縄が手足へからみ、うろつくうち、一重の縫ぐるみへも焼付くにぞ、一生懸命にかなぐり取つて投付くれば、眼七が顔へ打付けられ、胸より腹まで灼傷する。後見囃子もかけ出し、やう〳〵と揉み消せば、眼七おもはず大聲に、眼七「アッヽ、ヽ、ヽ」トいへば、圖武六は早速に、圖武「コヲン」眼七「アッヽ、ツヽ」圖武「コヲン」ト此くるしがりの思付をしほに、左次郎は拍子木、チョン〳〵〳〵ト幕を引く。

相かはらずしくじりけれど、大序より十一段の内、五段目程をかしき幕はなしと、殊の外御意にかなひ御機嫌よろしく、御賞美あつて御酒など下され、あやまちの高名にて、いづれも首尾よく歸宅する。

う斯うなつてはしかたがねへから、早く死んで仕舞ひなせへ」大聲にて、「エヽしぶとい親父め、默つてくたばれ」ト傘でしきりにぶちながら、小聲にて、「早くだアといひなせへよ」質「それでも傘では死ねません。おまへ刀をなぜだしなさらぬ」此時眼七は大きにじれこみ、眼「エヽその刀がねへからのことだ、あんまり氣がきかねへ。なんでもいゝから、ダアと倒れなせへよ。エヽ不器用な」トはずみに質兵衛をしたゝか打てば、質「アイタヽヽ。コレ、なぜそのやうなひどい事をするのだ。みんなそつちで間違へておいて、じれることがあるものか」ト傘へつかみつく。眼七はもてあまし、引たくらんと傘を引合ひながらうしろへむき、眼「チイ早く引ッころばしてくれねへか」トいへば、燒酎火をつかつてゐる卒八はこゝろ得、質兵衛が足を取つて引倒し、やうやうふきかへの案山子を出す。質兵衛はまつ黑になつて腹を立ち、質「コレ年寄をなぜよつてかゝつて手ごめにするのだ」ト卒八にかゝるを、左次郎、アバ太郎、野呂松など取押へ、手込にしてやう／＼消幕にてかくし、うしろへ連行く。床にて、浮るり「あへなく息はたえにける。仕すましたりとくだんの財布、くらがりみよのつかみよみ」眼七「フヽ、五十兩、久しぶりの御對面かたじけない」ト、是より眼七はひとり舞臺、案山子を相手に唐茄子をくはへ、化されの仕打十分にやる。浮るり上略「はねは我身にかゝるとも、しらず立つたるうしろより、いつさんにくる手負猪」

遠慮もなく座敷へ飛上り幕を明けさせ、眼七「ヲヽイ〳〵親父どん」ト出づるにぞ、質兵衛は定九郎が二人出來しかと、けでんしてふりかへれば、樂屋のものはたまりかね、呑七をひつとらへ、有無をいはず下座へ引摺り込む。そのさま二丁町にてトンチキを引出す樣なり。あとは定九郎與一兵衛兩人となり、やう〳〵すこし五段目らしくなる。質兵衛は律義に覺えしゆゑ、仕打はなくとも約束のきつかけ、せりふまでも間違ひなければ、可なりに狂言めきたりしが、いろ〳〵有つて、眼七「エヽむごい料理がいやさに手ぬるういへば付上りのした、こゝなおいぼれ親父め、サアたつて金を出さぬとぬかしやア、コレ二尺八寸」ト腰を見れば、最前水をあびる時井筒のふちへ大小を置き、そのまゝうろたへ出でしゆゑ、大小はなし、今さら丸腰に心づき、ハツト思へどせんかたなく、うしろに付を打つてゐる卒八に、小聲にて、「庭の井筒に大小が有るから、早く取つて來て」トいふも、與一兵衛に出たらめをいひながら、チラ〳〵といふゆゑ聞きとれず。卒八「エ、エ何だと、エ、エ」と一向わかりかねる。眼七はじれこめどせんかたなく、眼「ヤイ親父め、此貳尺貳寸の傘伊達にやアさゝねへ。たつていやだとぬかしやア、此傘でたたき殺すが、おやぢめ返事アドドどうだ」ト、これより眼七は口から出次第、仕打も仕次第になれば、律義に覺えし質兵衛は承知せず。小聲にて、質「モシそれではちがひます。」小聲にて、眼「エヽも

節句の外、につこりともせぬ石部氏まで、一同たまりかね、御前も思はずどつどとわらひ、しばし物音も聞えず。呑七はなほ〳〵取のぼせ、先を見れば與一兵衛が出てゐるゆゑ、猶又ハットどうてんし、今更あとへもはひられねば、下座の口へはいらんとこゝろざし、質兵衛が跡よりさつ〳〵と歩み、すれちがひさまだまつても通られずと、捨ぜりふにいらざる思ひつきをいふ。呑七「親父どの此ぶつさうな街道、アヽ氣丈な事な」トいへば、質兵衛は元より取のぼせてゐるゆゑ、呑七を定九郎とこゝろえ、質「ハイ〳〵年寄の夜道、いたしたくもござりませぬが、いづくのうらでも金程大切なものはござりませぬ」ト覺えたる通りさつ〳〵とせりふをいふ故、呑七すぐにも引込みにくく、何かまご〳〵してゐる。扨又眼七は質兵衛と一處に、最前切幕へ廻りゐたりしが、呑七が行方しれず、しばらく間のぬけたるうち、呑七を尋ねんと、あちこちと見まはるに、不圖庭の井筒を見付け、惣身をぬらして出でんと、まうけ氣をはづし、早々庭に飛下り、大小を拔いて井の端へ置き、傘をひらき置きてつるべを釣上げ、天窓より三四杯さつさつとあびるうちに、彌五郎勘平の出合もなく、勘平は間ぬけに引込みしかば、思ひし程より與一兵衛の出早くなり、はるか舞臺のかたにて、淨るり「一筋道のうしろより」ト呼出す聲におどろき、ハッとうろたへ井戸端にて、眼七「ヲヽイ〳〵」トいひながら、傘をもち水だらけのまゝ

又舞臺にては、チョボ語りもいろ〳〵出たらめの淨瑠璃をかたり、もはやよき時分と、何とやらして千崎彌五郎、チヽチンチン〳〵などと呼出して見ても、すこしも出でず。出目助も何かくだらぬ思ひ付などいろ〳〵仕盡し、せんかたつきて床にて、淨るり「さらば〳〵と勘平は我家をさして歸りゆく」ト、出放題をかたれば、出目助も是さいはひと、何かまご〳〵しながら、花道へはひるゆゑ、床にては、上るり「又も降りくる雨の足、人の足音とぼ〳〵と、道は闇路にまよはねど、子ゆゑのやみにつく杖も、すぐなる心かたおやぢ」トこの淨瑠璃を聞き、質兵衛はこけの一心に、かたく覺えし事なれば、よき程に切幕より出で、だん〳〵舞臺の方へあゆむ。床にても、淨るり「一筋道のうしろから」ト呼出せど又定九郎いでず。又も一同に氣をもみ、左次郎は拍子木にて向うを招きなどしてあせるところへ、切幕の音チヤリヽと明くゆゑ、うれしや定九郎と思ひの外、呑七は若侍にせき立てられ、のそりと出でたる形を見れば、提燈も笠もなく、鉢卷髷ぶしの落ちたるも知らず、ばうぜんと出でたるを、舞臺よりみな〳〵見付け、びつくりして後見囃子も一同氣をあせり、舞臺より手眞似にて、あとへもどれと敎ゆるもあり、又はやくこちらへ來て、樂屋へ入れとまねくもあり。呑七はうつゝのごとく、泥に醉ひたる鮒のごとし。先刻よりの不始末、たれも知つたる五段目の事ゆゑ、御翠簾の内外、諸家中の見物五

のお狂言に付き入りこむやつゆゑ、わざとまぎらはしう出立ち居つたでござる。につくい奴。コリヤかやうな不時も有らうかと、上屋敷よりわれ〳〵詰合ひ居るは。明日は急度吟味いたす」ト、いふ折節、坊主二三人若手の侍打まじりかけ來り、「岩永さま〳〵、この者は只今お舞臺へまかり出でまするところ、延刻いたし殊の外差つかへ、一同迷惑仕ります樣子にて、諸方相尋ね居りますゆゑ、何か不調法の段は追つての御沙汰、唯今差かゝりお舞臺の手筈相違いたしましては、上の御不興の程もいかゞ、まづ〳〵拙者どもへしばらくおあづけ下さりまし」ト口々に詫びければ、重役人も先刻より、呑七がそぶり相違もあるまじくと心はつけど、あまり手ひどく取極めしゆゑ、すぐにも許しにくく、いかゞせんとためらひし折なれば、此詫をさいはひと、左門「フンしからば貴公達へまかせ申すが、以來かやうに御前ちかくへ、徘徊いたさぬやうに心付けさつしやい」ト、是をしほに繩をゆるし、重役人は立つて奧へ詰める。又若手の役人はすべて狂言などにかゝはる能樂人などには、何かしたしみたく、樂屋のぞきをしたがる人物まゝあるものなり。夫より呑七をいろ〳〵介抱し、重役人をさみしなどして種々取なし、若侍「時に最前から貴公が出ぬとて、仲間の衆が殊の外心配の樣子ぢや。まづちつとも早く出さつしやい。早く〳〵」トせき立てられ、呑七はたゞ取のぼせ、夢のやうにて何の思慮もなく、若侍の云ふにまかせ幕をきらせる。扨

く呑七を押へ、はるかの別間へ引摺りゆく。外役人もあつまり、左門「ヤイおのれ何やつなれば

お次まで尾籠の振舞、お座敷うちを土足にて忍びの體、コリヤ今晩のお取込に乗じて、盗賊に

相違ない、不屈なやつ」と、懐中より早繩を出ししばりあげ、手をうつて下役人を呼び、下役「吟

味は追つていたす、まづおひけの相濟むまでは、物しづかにこやつ取にがさぬやうに、大切に

番をさつしやい」下役「へイ〳〵かしこまりました。サアうぬ立居らう」ト引立てる。呑七はい

ひわけせんにも、あまりに思ひがけなき災難、殊に胸をつよくつかれ、そのうへ敷居にて頭を

したゝか打ちけるにぞ、いまだ生氣つかず、只ばうぜんと是まで引摺られ、うつとりとして詞

もいでず。役人のうちより、少しやはらぎたる人秩父繁太夫、繁「岩永殿、チトおひかへなされ。

此者最前より見分いたすところ、甚だ有論の體にはござれども、化粧どもいたし居る體、萬一

今晩の役者どものうちかもはかり難うござる。コリヤ〳〵われは若しや役者に上つたものでは

ないか」ト、この聲にてすこし正氣付き、呑七「へイ〳〵役者でござります」左門「ハヽヽヽイ

ヤ盗人たけ〴〵しいと、此方で役者かと申せば、すぐにその尾について、へイ役者ぢやと申し

をる。コリヤヤイ此方どもいかに在勤もので、芝居事など不勝手ぢやとて、おのれがやうな見

とうもない面の役者が有らうと思はれうか。推量にも知れて有るは。イヤ秩父殿、これは今晩

こはお屋敷だけ極りはよし。扨口上濟めばチョン〳〵〳〵と幕明く。床にて、淨るり「鷹は死しても穗はつまずと、たとへにもれずゆふ月や」ト、だん〳〵置淨瑠璃あつて、「はれ間を爰に松の陰、向うよりくる小提灯、これも昔はゆみ張の、ともし火消さじぬらさじと、合羽の裾に大雨を、しのぎていそぐ夜の道」ト、詞のチョボまで語れど、彌五郎出でざれば、穴をふさがんと、床にては、何かわからぬ出たらめを語れば、出目助もいろ〳〵思入にてつなげど、一向出ぬもことわり、先刻役人の案内にて切幕へ廻る間取を承知しながら、例の早のみこみにて曲り所を違へしゆゑ、行けども〳〵切幕へ出ず、だん〳〵手間取るにつき心はせき、いかゞはせんと取のぼせ、だん〳〵と奥深くゆく程に明座敷ばかりゆゑ、人にたづねんにもせんかたなく茫然と立つたるが、はるか左の方にて、樂屋にて打つ雨の音少しきこゆるを心當に、一間をぐわらりと明くれば、内に繼裃著たる立派の役人三四人詰合ひ居て、呑七を見てびつくり、さすがは〆り役の人と見え、おつ取刀に立上り、物をもいはず呑七が胸のあたりをしたゝかに突けば、呑七はあをのけに二三間なげだされ、次の間の敷居にて、天窓をしたゝかうち、鉢巻とともに髷ぶしはいづくへか飛散り、しばらく氣絶して正體なし。殘りの役人は唯、「シイツ〳〵シイツ」トいふのみ。御前近くと見え、有無をいはず、先に突倒したる役人、岩永左門は手ばや

質「ヒヤア引これは」野呂「コレサ、さうびくり〳〵してはつゞかねへ、是はシャギリといつて、一幕毎にありやすから、しつかりしておいでなせへ」質「へイ〳〵なに〳〵いづれ此くらゐの事はあらうと覺悟はいたして居りますから、さして驚きもいたしませぬが、だしぬけゆゑツイ、ハハヽヽヽ」ト、ちり手水をつかひ、又何かしきりに念じる。神佛の擁護にや質兵衛はやう〳〵ふるひも止りければ、左次「おあんべゑがよくば顏をして上げやう。爰へお出でなさい」ト、紙をもみてぐい〳〵と顏をふかれ、痛さをこらへ、しやんと手をついて居る。左次「ハア是は皺墨を入れるにもおよばずと、あんまりお愛相がねへ、油墨をこせへて前齒を一本書かうか」ト、聞いて質兵衛はびつくり驚き、質「イエ〳〵、どうぞ齒は此儘差置かれてくださいまし、あと〳〵で難澁いたします。勿論與一兵衛の役に、齒がそろひまして相濟みませずは、御前へ向きます節は、ぬけた分で口をひらきませぬやうに心掛ましたら、夜分の事ゆゑ、遠目にはしかとわかりかねませう」などとくだらぬ事をわるくどくいへど、皆々も稽古の内より聞きあきをかしくも思はず、また挨拶もろくろくせぬなり。偖本舞臺には、はや大序始りて、夫より段々追々に相濟み、いよ〳〵五段目となるゆゑ、明手のものは、大道具を錺付け、小道具諸色をもつて舞臺へ廻る。チヨボ語りは床へ上り、左次郎は拍子木を持ち、上草履などはき、樂屋より知らせの木を入れ、すべて黑々とやる。殘る三人は囃子へ廻り、出目助は勘平の拵、いつもの形にて松蔭につくばひゐる。呑七は彌五郎の拵にて向うへまはる。樂屋は其幕毎に連中入替り〳〵、他人無陀人はすこしもまじへず。こ

るへなさりやす」質「へイ、ササ、左様で、ワワ私にも、ナナ、なぜか、シシ、知れ、ま、ません。ゴゴ御酒は、タタたべず、チチ、中氣でも、ゴゴござり、まゝますまいが」卒八「ハ、ヽ、ヽ、ヽこりやアをかしい。どうしなさつたのだらう」左次「ハ、ヽア武者ぶるひだ〱」ト、給仕の人をたのみ、水を一ッぱい貰ひ、左次「モシ質兵衛さん、是を一口おあがんなせへ」質「ハイ〱」ト、手は出せども、ふるへて持つことならぬ故、アバ太郎が持ち添て吞ますれば、夢中にてごつくりのみ、質「ヘヱ、ヽ、ヽ、ココ是は、ミミ、水だ。ナナ、猶、フフふるへる〱」左次「なに〱それでしばらく心を落し付けて、氣をおしづめなせへ。座頭が病氣では幕は明かねへ」ト、皆々打寄り介抱すれば、質兵衛もおのれと心をはげまし、何かしきりに神佛を念じゐる。そのうち三人も化粧にかゝる。呑七「勘平が白いから、おらアちつと薄肉にしべヱ。屋敷だけ彌五郎はおもいれ武張つて拵へやう」アバ「武張るとも欲張るとも勝手にするがいゝ。時に質兵衛さん、お心持はどうだね」質「へイ有難う、大きによろしう、胸の動氣がしづまりましたら、大きにふるひも止りました」左次「ハ、ヽ、ヽ、どうも此様な事におなれなさらんからのぼせやすのさ。なんでもゆうべの惣ざらひの心持で、向うを見ずに平氣でやりさへすれば大丈夫。ゆうべはよく出來やしたぜ。そして今出やうといふ時、手の平へ人といふ字を三ッ書いて、三遍なめて出なさると、人にのまれぬまじなひで御座いやすから、さうなさいやし」質「へイ〱、モウ胸の動氣がしづまりましたら、大きに落付きました」ト、いふ時、はや大序はじまると見え、うしろ座敷は樂屋ゆゑ、耳もとにて、ドロン、ドン〱〱〱ト大おろし、シヤギリを入れる音に又びつくり、

へイこれは皆の者へお手當下し置かれまして、有難い仕合、お時宜なしに頂戴仕ります。しかしながらあなたさまには、何角御多用に入らつしやりませう。どうぞ是へ差おかれまして、おかまひ下さりますな」役人「成程々々、しからば給仕のものを是へ差置きますゆゑ、隨意に澤山參らしやれ。何事にかぎらず手づかへの事がござらば、此者へ申聞けられい。アヽ屋敷の料理は、貴公達の口には合ふまい。ハヽヽヽ」質「イエ〳〵御勿體ない事、結構にいたゞきます」ト、皆々も相應の挨拶あつて、役人は立つて行く。質「アヽ有難い事で、あだやおろそかには戴きません」アバ「質兵衞さんはお孤のやうにいひなさる。ハヽヽヽ」左次「しかしお屋敷方といふものは、大きなもので、チヨイとひとりのお客でも、酒の壹斗四五升も呑む事が有るから、今日なんぞも大層なおもの入りだらうヨ」など暫く雜談のうち、例の大酒となり時をうつしぬ。左次「コレ〳〵、いつものやうに醉つてはならねへぜ、モウ切上げやう〳〵。役の有るものは猶の事だ」ト、又役人來り、いふうち役人「是はいづれも甚だ麁末な儀で、拙上にも殊のうおまち兼ゆゑ、最早初段より始めまするやう仰出されました。御苦勞ながら支度におかゝりくだされ」ト、部屋々々をふれて廻る。卒八「へイ〳〵かしこまりました。サア〳〵みんなが顏でもこせへるがいゝよぜ」トきくと、質兵衞はグワタ〳〵〳〵トふるへ出す。左次「質兵衞さんは爰へお出なせへ、わたしが顏をしてあげやう」質「へヽ、ヘイ〳〵、ドドどうぞ、ヲヲおたのみモモ申します」野呂「モシなぜそんなにおふ

ハそれは格別おもしろい事でござらう」圖武「ムヽンうぬばかり役者の氣でへンつらがいゝ。イヱわたくしは由良の助の役は、たび〳〵勤めましたが、猪は今度が初役で、いつたい私は圖弱いゆゑ、かやうな端役を取りまして」左次「是サ何をくだらねへ事をごたつくのだ。あなたさまもおいそがしい、はやく御案内をねがつて、見分して來さつし。へイ左様ならこのものどもを、お引廻しくださいまし」役人「サア〳〵こちらへござれ」ト、皆々をつれて行く。のこる四人は大道具小道具など帳面に引合せ、鬘衣裳等取調べなとするうち、五人は部屋へかへる。眼七「なる程案内がなくッては知れねへ〳〵」野呂「ハア西の下はよつぽど長いかの」呑「イヤサ長いばかりならいゝが、同じ座敷ばかりあつて、そのうへ二ツ三ツ曲りくねつてよつほど知れにくい」卒八「ハアそれぢやア向うへまはる者は、ずゐぶん手廻をして早めに廻らねへとまごつくぜ」ト、話の中へまかなひの酒肴取持たせ、役人「これは何れもごたいくつで、ヤ麁末ながら上より御酒を下さる間、まづゆるりと參らしやれ」質「へイ〳〵是はまことに冥加至極、おありがたい仕合。はゞかりさまながらお上へよろしうお禮を仰上げられ下さりまし。左様なら皆様お聞のとほり、お上より下しおかるゝ御酒、アヽ有難い事で。エヽ私めは御存じの通り、御酒は一向に御不調法でござりまするが、是は外なりませぬお上のおぼしめし故、お盃に一ツ頂戴仕りませう」ト、盃へなみ〳〵と一ツ受け、ちび〳〵と口をつけ大骨ををつてやう〳〵ほし、質「エヽ是は左次郎様へあげませう」左次「へイ〳〵いたゞきませう。

の外の調器をこしのまはりへうろさく並べ、おのれが役の二幕三幕も前より、あたまは下地になはし、銅盥を取寄せ、糖をつかひ、楽屋者らしき浴衣に、ひらぐけの帯、上草履にまで心をもちひ、襟から胸へばかり白粉をつけ、しとねになはり、鏡とにらめくらをして、長煙管にてそばに居る人に煙草をつけさせなどして、すべて舞臺より楽屋、ゴツコをもに楽み、幕を引ずる事甚ながし。見物の身にとりては、しごく迷惑なるものなり。○偖しばらくあつて継上下の役人きたり、役人「イヤ是はいづれも、今日は大きに御苦勞、上にも殊の外おたのしみで、ハヽヽヽ。時に質兵衛殿、お楽屋からおはしがかりのお幕まで、廻る間數が不勝手では、チト知れ兼ねる間がござる故、ちよつと案内いたして置きませう」質「ヘイ〳〵それははや御念の入りました有難い仕合、さやうなら御無禮ながら、御案内くださりまし。左次郎樣あなたさまと御一處に御見分を」左次「ハイ〳〵、しかしそれは私より、向うへ廻るものが呑込みさへ致せばようござります。出目公眼公呑公と質兵衛さん圖武公と、ちよつとあなたさまにお付申して見て來さつし」みな〳〵「ヘイ〳〵さやうならお世話さまながら御案内くださりまし」圖武「ヘン、なにおいらなんぞは見てくるにもおよぶめへ。どうでもいゝ」眼七「コレサ馬鹿な事、猪がうしろから出ても横から出ても大變だ、ぶしやうな事をいはずと、一處にあゆばつし」役人「ハヽア貴公猪かナ。ハヽヽヽ。ヤそれは一しほ御大儀ナ」呑七「ヘイ是は圖武六と申しまして、年中首がまはりませぬ身分で、毎年大晦日より松の内廿日ごろまでは、獅々をかむりましてしのび歩きます故、殊の外猪なれてをりますに付き、このたび役を申付けました。この段お上へよろしう御披露くださりまし」役人「ハヽヽ

花暦八笑人　四編追加下之巻

偖其日をはじめとして、質兵衛は早朝飯にて辨當を持ち、毎日稽古に來るゆゑ、みな〳〵も大きによわりけれど、日數つもれば少しは形も出來て、あらましはこじ付くやうになり、誂へ置きし諸道具なども取揃ひ、はや當日になりしかば、日雇をたのみ、諸色をもたせ、かねて仕組みしチヨボ語りの太夫を同道し、質兵衛が案內にて、かの御下館へ行きけるに、はや諸出入の町人、追々つどひ來て、皆それ〴〵に休足部屋仰付けられ、八人の麁忽者もいつぱし役者の氣取にて、とある部屋へ入り休息する。アバ「なんと左次さん、たいそう廣い御座敷だのう。まづ草履をぬいでから、凡小壹里も歩行いたやうだが、歸りに道が知れやうか」左次「さうよ、迷子札でも付けてくれればよかつた」質「イヱ〳〵その儀はけしてお案じなさりますな、御用相濟みまして、おいとまさへ出ますれば、お役人樣方へおねがひ申して御案內のお人をくだされば、もとのお口までは出られますに相違はござりません」左次「ハア左樣か、それでは安心だ。ナアアバ公」などと、皆打寄り質兵衛をひやかす。扨また茶番連中のならひにて、おのれ〳〵が贔屓の役者の所持の鏡臺、又は化粧道具、湯呑の類まで、そのとほりに平日こしらへおく故、わづかの事にもかの諸道具をもちあるき、己が部屋とさだめし所へまづ鏡臺をする、そ

れめへと思つて、あらまし大筋を覚えて、詞は出たらめにおやんなせへといふわけサ。ヲイ眼公、足下の了簡で一ばんあしらつて立つて見さつし、おれはしばらく見物だ。七山市十郎たのむ〳〵」

ト、さすがの左次郎ももてあましてぞ居たりける。

たつて物がたいお屋敷さまで御座ります故、すべて申上げる事に、すこしでも間違がござりましては、お役人方までが落度と」左次「なにさ質兵衛さん、それはふだんの御用向の事、狂言といふものは、先樣で御存じの事でも、すこしづつかはつてするのが、却つてお慰になるものでござりやす。まづサ本文の通りなら、チヽイ〳〵親父どの、最前から呼んでゐるに、こなたの耳へははいらぬのかト、やるのだが、それは昔風で、大じまのどてらに丸絎を締めて、山岡頭巾をかぶつた拵の詞、近年は黒羽二重に緋博多の帶、蛇の目の傘といふいきにすごい拵でいきやすから、ソレ詞も今風に、チイおとつさんおとつさんと洒落ていふのサ。何でもつまる處は、定九郎といふ浪人が百姓の親父を殺して、金を取るといふ筋さへ通れば、詞はどう違つてもかまはずにおやんなせへ。アヽ引咽がひつつくやうだ。眼公湯でも水でも一ぱい下つし」質「へイ〳〵かしこまりました。しかしながらかやう申してはいかゞで御座りますが、あなたがたはこのたび、わたくしがお頼み申して、おいで下さりまするわけ、エヽまつた私は、數代永久お出入をいたしまする事ゆゑ、あまりしやれがましい事を申しあげましては、後々身分にも相障ります故、私ばかりはやはり本文の通り、申上げたうござりますて」左次「アヽ引どうもならねへぞ。其はサ、ずるぶん本文の通りでいゝのサ。いゝけれどさうきちやうめんには、覺えら

んとうにたつて見るからよしと。そこで「さらば〳〵と兩方へ、立別れてぞいそぎ行く」サア是から今の、又もふりぐるまだ。眼公、質兵衛さんを呼んでやつて見さつし。ヘン丁度いゝ相手だ」眼七「ヘン何とでもいはつし、どうせ鬮なしにもらつた役だから、天窓はあがらねへ」ト、左次郎が方へ行き、眼七「サア左次さん、ちよつとたつて見やせう。質兵衛さん、たいてい筋は通りやしたかネ」質「ヘイ〳〵、イヤ何かどうも甚だ不調法で。へゝゝゝ」左次「今まで足下の替りを勤めて、よつほどやつた處よ」眼七「ハア、さアそんなら六疊へおいでなせへ。爰からすぐに切幕を出たつもりで、うしろから私が呼びかけて出て行きやすぜ」質「ハイ〳〵」左次「モシその棒を杖にして、今いつた通り、ふくらはぎへ力を入れて、前へかゞんで、ソレ今のやうに斯ういふ身で歩行くだ」質「ハイ〳〵此あんばいかネ」左次「マアさうさ、さつ〳〵とおいでなせへ」眼「ヲヽイ〳〵、おとつさんおとつさん。是サさつきから呼んでゐるに、おめへ耳がとほいの。コレ、このぶつさうな街道を、年寄の夜道、おめへもよつぽど大膽ものだぜ。サ、わしが送つてやりやせう」質「ヘヱ、もしおまへのお詞と、左次郎樣のおつしやつたとは、餘程相違いたして居りますやうでござります。そして私の事を、おとつざんとおつしやつては、定九郎は與一兵衛の忰のやうに思はれませうが、外々なら大抵のまちがひは宜しうござりますが、先刻申しますとほり、い

け、どうも目についてならねへ」出目「チヨツ、マアサ、是をば取入れるがノ、ほんによ、身にしみさつし、おらァ車輪玉だヨ」卒「しやりん玉ならいゝが、しやがん玉ぶら付では、呑公も見る氣になるはずだ」出目「エヽ又やじ馬が出るヨ。サア〳〵爰の長臺詞は、おらァぐつと承知だからいゝとして、呑公ちつとやつて見さつし。エヽと「ぜん非をくいし男泣、ことわりせめてふびんなる。彌五郎も道理とはおもへども、大事をむざと明さじと」サア詞だ」呑七「何サおれもせりふは鵜だから、いち〳〵申上げるにおよばずだが、ちよいと山があるて、エヽ「鄕右衛門殿旅宿の、所書進上申す」ト腰から矢立を出しやす。そこで鼻紙へ書かうとして、矢立の墨がかれたといふこなしあつて、あたりを見まはし、其所へぬいで置いた笠へ、雨水のたまつてある思入、笠をとつて墨壺へ雫を落して、書付をするといふ仕打はよからう」野呂「ちくしやうめ、こまかにおぼくるナ。しかし其時提灯はどうする」呑七「エヽ提灯か」アバ「四拾八文のぶらがいゝ、所書をする時、ト襟へさしやす」圖武「ヘン、柳原で手の筋を見てるやうだノ」出目「それはおれが持つて居てもよし、又以前、出直せ〳〵の時分に、松の枝へかけて置くなんぞもよし、そこに差問はねへが、せりふは實にしようちか、よつぽど長いぜ」呑七「その儀はすこしも案じ給ふな。たかが彌五郎ぐらゐの端役は、朝飯前の仕事だ。どうせ惣ざらひには、ほ

らやましがつてそねみだ。かまはねへ〳〵。極まじめでサアやるべヱ〳〵。「貴殿もけんごで、是はしたり」トきまつたは」出目「ムヽよし〳〵雙方しやがんで、爰にちよほがすこしあつた。ヱヽ引何ヨ、「たえて久しき對面に、主人のお家沒落の、むねにわすれぬ無念の思ひ、たがひにこぶしを握りあふ」ト雙方思入れだ」野呂「フイ惣一ツぱいは折返しだらう」出目「呑公何といつてもかまはつしやんな」呑七「よし〳〵極まじめだ」出目「ヱヽ勘平はさしうつむき、しばし言葉もなかりしが、「ハ、面目もなきわが身の上、古傍輩の貴殿にさへ、顔も得上げぬ此仕合、武士の冥加につきたるか。殿判官公の御供先、お家の大事發りしも、是非に及ばぬ我不運、その場にも有合はさず」コレサ呑公、何をうつかりして居るのだ。おれがせりふのうちだとつて、さう氣抜がして居ていけるものか、腹をいれねへと見とむねへもんだぜ」呑七「コウ〳〵奇妙なものだのう」出目「何がヨ」呑七「きん玉といふものは」出目「何だだしぬけにふざけた事を」呑七「口をきくたンびに、上ッたり下ッたりするのう」出目「ナニ」ト、心づき、おのれがしやがみたる形をのぞき見て、「ヱ、馬鹿々々しい。こつちは脾腹もんで、せりふ廻に骨を折つて、車輪でやるから、ツイ取みだすのだ。コレサ稽古事にかゝつて、さう外へ氣がちるやうな事ではいけねへぜ」呑七「さうでもあらうが、其品をば取込んでもらはねへと、どうも眼ざはりでならねへ。そして上り下りのはたらきがあるだ

んぞはまうけ役でゐながら、身にしみて稽古するがいゝぢやァねへか」二呑「ヘン彌五郎ぐれへ、あんまりまうけ處もねへ。こつちは由良之助でもする氣だァ」出目「そんなら由良之助になるがいゝ、ざうさもねへ事だ、己さへ承知なら出來る事だ。和殿は早野勘平ならずやといへば、左いふ貴殿は大星由良の介、アヽ語路がわりいナ」野呂「その時は、さいふ貴殿は大星由良介サ」眼七「之の字を抜くとがうぎと安ツぽいの。ムヽ力彌がいゝよ〱。左いふ貴殿は大星力彌」卒八「向う通るは醫者ではないか」呑七「湯の尾峠の御孫嫡子」圖武「ハアうんとこどつこい是はいサ」野呂「サア〱身振付のまぜつけへしとなつた。たまらねへ〱」呑七「是サどうもならねへ。もう〱役のねへものはあつちへ行つてくだつし、かうさう〲しくつて何がきまるものか」出目「なんの手前から、湯の尾たうげのおんまごぢやくしなんぞといふから悪い」呑七「それでもあんまりまぜつけへすから、ツイつりこまれるのだ」出目「つりこまれるといふやうな、甘口な事があるものか、やつぱり身にしみねへからの事だ。サア〱皆あつちへ行つてくだつし、邪魔だ〱」卒八「なんだ噺子町に下座帳をもつて來いと、いつたぢやァねへか。コレお江戸のお噺子は、さう自由には追廻されねへぞ」出目「チヨツいま〱しく氣ばかり強くツてならねへ。素ドンチキめらにかまはず、ふたりは車輪玉でやるべェ。なァ呑公」呑七「ウヽ無役どもは、う

がした今打がいゝから、源之でやるぜ」故人澤村宗十郎の事。呑七「ナニ源之でやるぜ。ヘンふいご祭に何かゆがんだやうだ」ナバ「天窓がさいづちで、仕打が源之か。句は付いてるの。しかし呑公には源のは差合だらう」呑七「なぜ〳〵」ナバ「面が殺生石に似てるから」呑「エ、やかましい〳〵。サアその源のでどうするのだ」出目「斯うだ、マヅ一通り紋切形なら、「たじなき詞に顔付を、きつとながめて、和殿は早野勘平ならずや、左云ふ貴殿は千崎彌五郎、是はけんごで、貴殿も御無事で、ムヽ是はしたりー」兩方一處にポント膝をたゝくやつだが、處を源のでやれば」呑七「膝をぶつこはすだらう」出目「ひざアぶつこは、エヽ引まぜつけへすなへ、つりこまれるは。エヽなんだか忘れてしまつたア、エヽ「たじなき詞に顔付を、きつとながめて、和殿は早野勘平ならずや、さいふ貴殿は千崎彌五郎、是はけんごで、貴殿も御無事で」とはいつて見たが、古朋輩にこの姿を見られて、面目ないといふこゝろで、ふりかへつて一足逃げるを、山刀の小尻を押へて、彌五郎ばかり「是はしたり」ト膝をたゝくやつだが、こりやアいゝぜ」呑七「それではおれひとり膝をぶつこはすのか」卒八「ムヽひとりなら油藥は、一貝頭取から渡したらよからう」呑七「イヤおればかりなら鐵槌にしよう、源のでは何分おそれる」出目「コレ呑公なんとまじめにやつてくれねへか。噺子町や猪子なんぞは、役不足でまぜつけへすも仕方がねへが、彌五郎な

大事がる事があるものか」呑七「さう言はつしやんな、出る時顔をかくして、正面へ直つてぐつと見せると、格別ひつたつぜ」卒八「ヘンおもしろくもねへそんな面を、引立つもぶつつわるもいるものか、どうせ引け物だァ。あんまりかくしだてをして、だしぬけにぴよいと見せたら、ヘン氣のよわい化物は先でぶちけへるは」、呑七「サア又面不足がはじまつた。まづそんならさうとしてさア出て來たヨ」出目「よし〳〵サア行合つてすれちがつた。「アイヤ申々、卒爾ながら、火を一ツ御むしん」ト立寄れば」呑七「旅人もちやくと身がまへし、「ムヽ此街道はぶつさうと聞いて合點のひとりたび、見れば飛道具の一口商ひ、得こそはかさじ、出なほせ〳〵」ヲイお囃子、爰で一ツ付がいるぜ。下座帳へつけさつし。出直せ〳〵ハタアリと」アバ「ばか〳〵しい。そればかりな事を帳へつけられるものか」呑七「ヘン貳文が酢をかりるやうだ」アバ「それだといつて、容體ばかりやりたがつて、ヘン芝居ごつこをして遊ぶ氣で居やアがるは、とんちきめ」卒八「コレ付でも鳴物でも、うしろは大丈夫だから、差圖がましい事をいはずと、そつちの稽古を身にしみるがいゝ」呑七「ハイ〳〵。サアそんなら、アヽ」引「何とやらして、エヽまなこをくばれば」サア出目公」出目「ヲイ、「エヽ盗賊とのお目たがひ御もつとも、エヽ引なんとやらして、エヽ鐵砲それへおわたし申す、自身に火を付けおんかしと」サア爰にたつぷり思入ありだ。先年源之

うこのお提灯限ときめて、ぐい〳〵呑んではやく六疊へ行かつし〳〵」呑「ム、それではもう、おちやうちんのお替りとはいかねへの」左次「アヽうるせへ〳〵。コレほんとうにヨ、てへけへにふざけたら稽古にかゝらつし。番毎いたゞくくせにくそ落つきでならねへ」呑「ハイ〳〵もう参じます。サア勘平さん御一處に」出目「サア〳〵行かう〳〵。ヲイ囃子町から二三人下座帳をもつて來さつし、いつもの五段目とは違つてよつぽど誂があるぜ」アバ「ヘンまた御たいそうばかりいふは。サア皆があゆびねへ。どんな事をごたつくか見やう〳〵」ト、みな〳〵六疊の間へ入る。出目助は床の間の前へしやがみ、■扇を笠のかはりにかざし、勘平のおもいれ、出目「サア「はれ間をこゝに松ウのヲヽかアアヽげヱヽ引デヽン〳〵〳〵」と、正面に笠をかざして居て、女どもが顔を見たがる處を、しばらくぢらしていゝかげんぢれつたがらせて、と笠を手にもつて空を見る、女どもは顔を見る」野呂「ムヽ一時にどつと吹出す」卒八「子供は泣出す」呑「猫は迯げだす狆はほえる」出目「そんなふしぎな面があるものか。サア〳〵向うよりくる小提灯だ。呑公々々」呑「ヲイもう一盃呑むのか」出目「じようだんではねへ早くたゝつし」呑「サアおらア半合羽の上へ、坊主合羽深編笠といふ拵だ」卒八「馬鹿なつらな、雨装束に編笠をかぶるといふがあるものか」呑「そんなら竹の子笠の深いやつをかぶらう」出目「なぜ其様にわるひねりな事をしたがるのだ」呑「おれも出から直に顔を見せたくねへて」野呂「なんのそんな面を

いゝが、爰では質兵衛さんの氣かちつてわりいから、六疊へゆかつし」出目「ヲイ〳〵、さア彌五郎どんあゆばつし」呑「ムヽ行かうか。マア先へ行かつし。そつちで、「向うよりくる小提灯、是もむかしは弓張の」テン〳〵ト語り出すと、おれがこゝから出て行つて丁度いゝぜ」出目「なんの面白くもねへ、どうでもいゝ事だ。サアそんなら早く來さつしョ」呑「早く〳〵といふ譯にはいかねへ、マア先へいつて、向うよりくる小提灯」出目「ヱヽわかつて居るは、しつッこい」呑「ハヽヽ實は小提灯のうち大きいもんで、キユウと一盃きめて行かうといふたくみョ」出目「いまいましいいぢッきたなだぞ。さういふ事なら、まづおれが先へ此小提灯で、二三盃。ヲイ卒公ついで下つし」呑「そんなら己もこの提灯へ、たつぷりついで下つし」眼七「ヱヽうるさく呑みたがるぞ。コレ呑ませめへとは言はねへから、する事を了つてゆるりと呑むがいゝぢやァねへか」野呂「さうサ、そして提灯で餅といふ事はきいたが、提灯で酒を呑むやつはねへ」團武「そしてあんまり呑んで無法醉喰ふ小ぢやうちんとなつては、稽古も何も出來はしめへ」左次「サア〳〵又地口盡がはじまつては長い〳〵。いゝかげんに呑んだら」卒八「どうして〳〵いくら喰つても、いゝかげんといふ限はねへから、此小提灯をとり上げるが一番いゝ」ト、茶椀を取上げる。呑「サア提灯を取上げられては、一足もあるけねへ〳〵」アバ「どういへば斯ういふとうるせへ口だ。そんならも

だが」ト、のぞいてみて、「又も降りくる雨の足サ」賀「ヘエヽゐかネ。ハヽアなるほどあたまが有りますな、ハヽヽヽ。私は又ゐの字かと存じました。フン雨の足イ、人のホウ足イ音とぼ／＼とヲ、道イはア、やみぢにイ、まよはフン、まよはねどヲ、子故の闇イにイ、突杖々々もウ、すぐウ、なる心、なる心、かた親／＼かた親父イ、いち筋／＼」野呂「二鷹ア、三茄子ビイ／＼。ハヽヽヽハ」左次「一筋道のうしろからサ」賀「ヘエヽ成程。うしろからア、モシ此ちひさく書きましたのは、なんと讀みますヲ」左次「ドレムヽ是はヲヽイ／＼サ」賀「ヘエヽおよい／＼と申す字かネ」左次「さやうサ片假名サ」賀「ヘエイ」アバ「ぜんたい、およいといふ字なら、大きく書けばいゝネ。小く書いてはすくないといふ字と間違ひますネエ」賀「ヘエ」左次「モシそこらは大概筋さえお前さんのむねに落ちれば、文句はみんな太夫の語る所だから、其詞々といふ處をよく覺えるやうになさいやし」賀「ヘイなるほど文言のうちは、三味線に合せまして少しをどります、マヅ梅鹽で」左次「なにサ與市兵衛が踊つてはたまらねへが、其みぶりはわたしがいゝやうに付けてあげやすから、なんでも詞をよく御覺えなせへ」賀「ヘイ何分にもよからうやうに御指南くださりまし」出目「ヲイ質兵衛さんの本讀のうち、こつちで一寸たつて見やう。五段目ぐらゐと思ふが、考へて見ると有論な處があるやうだ」呑「ちげへねへやつて見やう」左次「やつて見やうは

ださいまし。おぼしめしは有難う存じますが、却つてまいわく致します。へゝゝ」左次「チイ出目公、質兵衛さんは御酒に御不調法で、御まいわくだから上げねへがいゝ。そしてあんまり酔はねへうちに、わざつと本読でもしよう」吞七「ナンノ鐵砲場の一幕ばかり、わかりきつた事だ。すぐにたつて見やう」左次「それもさうだけれど、質兵衛さんに筋を聞かせてへからョ」出目「そんなら與一兵衛の出の處から、自身に本を讀んでごらうじやし、それで筋がわかる。そのうち勘平彌五郎の出合をたつて見よう」左次「ム、それがいゝ〳〵。チイ眼公、そこの本箱に忠臣藏の丸本があるから、ちよつと出して下つし」眼七「アイ」ト、本箱をたづね、「チイ是かネ」左次「エ、これは後藤の鐵砲場だ。そして抜本ではねへ丸本だといふに不器用な」眼七「ア、あやまり〳〵、はやく稽古をしようと思つて、氣がせくからおれほどのものだがツイ、チツト有り〳〵サア」左次「おいきた」ト、とつて鐵砲場を明けて讀んでみる。「エ、合點がてん、石碑成就するまでは、のみにもくはさぬ此からだ、御邊もけんごで、御用金の便を待つぞ。さらば〳〵と兩方へ、立別れてぞいそぎ行く。又も降りくる雨のあし、人の足音とぼ〳〵と、サア是からおまへさんの出だ。爰からとつくり讀んで御覧じろ」質「ハイ〳〵是は〳〵」トいただき、「フン引」ト、懐より、手ごしらへのいため紙にてはりたる眼鏡を出し、「成程。フム又もふりぐるまの、足人の足、音とぼ〳〵」左次「もし一寸お見せなさへ、車といふ文句はねへ筈

花暦 八笑人 四編追加上之巻

斯くて八人は五段目の趣向あらまし定りしかば、例の酒盛となり、たがひに喰つくはれつ、相かはらぬ悪地口、雜談に時をうつしける。然るに彼の勢州屋質兵衛は、ひとり煙艸入の底をはたき、あくびを呑みでたいくつの體。左次郎は氣の毒におもひ、左次「モシ質兵衛さん、一ッあげやせう。マアちつとこちらへおいでなさいまし」質「へイ〳〵、イヤもうおかまひくださりますな。わたくしはトツト御酒は不調法でハヽヽヽ」出目「さやうではござりやせうが、平日は勢州屋の旦那様だが、此度の一件では、同じ役者仲間といふものだから、其様にかたく計りなすつては、稽古が仕悪うござりやす。まア御酒はともかくも一ッ上げやせう」ト、させば、猪口を丁寧におしいたゞきて、質「へイ〳〵、さやうならわざつとお盃ばかりいたゞきませうが、御酒は何分にもごめん下さりまし」ト、迷惑さうに呑むまねをして、懐より塵紙の折りたるを出し、猪口ののみ口をていねいにふき、手に持ちてしばらく座中を見まはし、質「エヽト是はやはりあなたへ御返濟申しませう」目出「へイ私へ御返濟かネ。まづおしづかに、これは御きんとうでござります。かうさへなさると、又いつでも御用達ますハヽヽヽ」ト、ひやかされても一向知らず、質「イエ〳〵私へは、もう御免く

八笑人四編追加自序

什麽此花曆の濫觴は、過ぎつるとし琴通舍の大人、江都名所の花を題として、諸君の玉詠を集め、其秀逸を撰りて出板したる摺本へ、チヨイとおまけの御愛敬、縱はゞ江戸節の會へ雇はれし能呂間人形、それさへ靑はつかはねば、四郎と仕組の池の端の茶番、井戸端の茶碗よりも、あぶなき趣向と思ひの外、今や四編に及ぶまで、看官の御待ちかねとは、盲人の打ちし眼七、思はぬ愛敬ァバ太郎等が幸ひなれど、元來無四度童戲人、いつもながらの鉋屑、木端作者の著述ぶり、こつぱづかしくの地口に通ひ、所謂下手の長咄、御見物の叭を恐れ、待たるゝうちが花曆と、筆を置く事五七年。時に書肆は左にあらず、假令作者はどうなつても、己が竈をうるほさんと、心くつせず御催促、先生ごかしにおだてられ、さらば灰吹から蛇を出して見んと、嗽しながら筆を採る。

于時天保五年甲午正月

金龍山下の市隱

瀧亭鯉丈述

顔をすかし見て、勘平ではねへか。ヲヤおとつさんか、此ぶつさうな道を、どこへ行きなさるのだ、ひよつと定九郎にでもあつたらどうしなさる、あぶねへことだトいふ。そこで旦那がいふには、馬鹿をいへ、與一兵衛ならあぶなからうが、おれは夜質兵衛だから氣遣はないト、爰で夜の質兵衛をおつしやるがよからう」質「成程夫がようござりませう」左次「それから勘平がいふには、モシおとつさん、お目出たいお座敷とは申しながら、此様に怪我人のない五段目も珍しい、祝つて一ツ〆ませうトいふと、最前の狐も出て、シヤン〳〵、ヲシヤ、シヤン〳〵ト、狐拳になる。三人の見えよろしく幕としやせう」アバ「奇妙〳〵。すつぱり筋が立つた」呑「サアそんならすぐに、稽古にかゝりやせう」左次「よからう〳〵。何でも素人狂言は、稽古に遍かずがかゝらにやアいかねへ」のろ「違へねへ、初日と千秋樂が一所だから、きまりはわりいはずだ」ト、是よりすぐに五段目の稽古、幷に當日狂言の滑稽草稿不殘出來いたし候間四編追加引續賣出し申候。相替らず御見捨なく御求御高覽被可下候。

マヅ勘平、彌五郎の出合、立わかれと引込む。又も降りくる雨の足と、チヨボにかゝると、正面の稻村のかげで燒酎火をもやす、そこへ與兵一衞が出る、同じく定九郎も出て、いつもの通りあつて、止財布を引出して、口にくはへると、唐茄子ヨ。與一兵衞は吹けへで、案山子となる。所へテンテレツク、ツ・テン〳〵で猪がでる」出目「ムヽ圖武公だナ。コウいつものやうな歩きつきでは、牛と間違ふから、いせへよくかけださつしョ」圖武「大きにお世話だ、うつちやツておけ」出目「ハヽヽヽヽふさぎきつて居るは」左次「アヽやかましい、からかうな〳〵。エヽそこでト、ムヽいゝ事が有る〳〵、圖武公は縫ぐるみの狐になるだ」圖武「せめて一役は人間を付けてくれても、いゝぢやアねへか」左次「何さ狐が本役だヨ。そこで稻村のかげからヒヨイと出て、たふれてある案山子を、チヨイとかむつて、猪の身振サ。始終定九郎は、化されてゐる思入で、猪とをかしみの立廻りをつけて、二人がおもいれ儲けさつしナ」圖武「有難い〳〵。それですこし息をふつけへした」左次「そこでいゝほどに二人が仕ぬいたら、定九郎はかなはぬ體で逃げこむ。それをきつかけに鐵砲がヅドン。狐もこれに驚いて、案山子をほうり出して、稻村へかくれると、うしろが寐鳥になる、勘平が出て、案山子へさぐり當つて驚く。これもいつもの通り、思入仕打勝手次第サ。好時分に此旦那が、ちやうちんをさげて出て來て、勘平が

アがる。おらァ役不足はいはねへが、役足りをいひてへ。その面で勘平が出来るものか」出目「へン捨置きたまへ〳〵ッ。へン梅幸でいかうか、イヤ坂三津でいかうかしらん」野呂「へン奥州へいかうか、仙臺へいかうかが、聞いてあきれらァ。とんださつま芋だ」左次「そこで爰にまだ、物いひのつかふといふことが有るが、是はおれがお頼だから、定九郎をば鬮なしに貰ひてへ。そのわけは、今度こつちの催は高田の螢狩だらう。そこで此茶番に行くお屋敷も、高田邊だといふ事だから、幸ひ此狂言をふり替へて、眼公にさせると、そりや金主は有るし、ちやうどよからう」卒八「成程そりやァ妙だ。すこし傍題にはなるが。ヱヽ引コレ、六段目だと奇妙だが」眼七「ナゼ〳〵」卒八「高田の螢狩の地口で、高田のおかる買とやらかすは」アバ「アヽわりい〳〵。しかし眼公も鬮なしに貰ふといふから、モウ六段目は六段目だけれど」眼七「アヽ鶴龜鶴龜。しかし此相談さへ承知なら、なんといはれてもかまはねへ〳〵」閑武「そこで與一兵衛早替りといふ筋か」賀「イヱ〳〵尾籠ながら、與一兵衛はわたくしがいたさねば、右夜の質兵衛故」左次「左様々々。與一兵衛は少し此旦那が山が有つてなさる積りだが、マテしばし、殺された人が起きかへつて、ヘイ夜の質兵衛ゆゑ夜質兵衛でござりますといつても、をかしなもんだがム、かうしやせう、そのお屋敷も御祝儀の事だから、人の死なねへ五段目といふ筋にしやせう。

「ハヽヽ」卒八「そねめ〳〵」呑七「ムヽ引いゝ、まけるとそねめ〳〵か。アヽ引手のねへぬしだナ」このうち左次郎は鬮を七本こしらへ。左次「サア〳〵、やかましい事をいはずと、此鬮を引いたり〳〵」圖武「なんの鬮だ〳〵」左次「何でもいゝからだまつて引いた〳〵」アバ「ヘン藪から棒ナ、なんだしらん」ト、みな〳〵鬮を取りてひらく處を、左次「チツト待つたり〳〵、爰で話が有る。扨當六月二十九日、與一兵衛が祥月命日に當つて、さるお屋鋪の奥に茶番がありやす。そこで題が忠臣藏、しかも五段目で、わけ有つて定九郎と與一兵衛は、外にする者が有るから、其外を鬮にしたのだから、鬮次第にして、役不足をいひッこなしだヨ」出目「ハアさうか、さうと知つたら、身にしみて鬮を引けばよかつた」野呂「サア〳〵愚痴をいはずと、おつぴらけ〳〵。ヤアなんだ、うしろト、是はなんだノ」左次「そのうしろ〳〵としたのは、後見や囃へ廻る印よ」野呂「ハアヽさうか、そりやアつらまねへ。ヘン花を取りそこなつたやうだ」左次「ヤ、おいらのも實がねへ、同じくうしろヨ」呑「彌五郎か」アバ「是もうしろ」出目「ヤア〆めた勘平〳〵。妙々」圖武六はひらいて、何か不興な顔にて、圖武「チヨツ、ヘンちゑのねへ」出目「圖武公何だ〳〵」圖武「猪ヨ」野呂「ハヽヽヽ、是は本役だ。奇妙々々」圖武「なんの猪なんぞは、鬮へ入れずともものことだ」出目「五段目に猪がなくつてつまるものか。役不足をいひつこなしといふ、きめだ〳〵」圖武「うぬがいゝ役をとつたと思つて、ひとりでにこ〳〵しや

早く、爰の相談を聞かッし」ト、せき立てられて、やう〳〵氣の毒さうに座敷へ來る。質兵衛は一向何も氣のつかぬ様子ゆゑ安心して、左次「質兵衛さん、是はみんな私の友達でござりますが、年中茶番のやうな事にばかり、身を入れて居る馬鹿どもで御座いやすから、さいはひ今度のお頼に、此手合をつかふのでござりますテ。御近處だから、たいていは皆御存じでも有りませうが」ト、いち〳〵名をいつて引合せる。質「ヘイ〳〵、イヤモウ私は御覧の通り、老母となりまして、とにかく人さまをお見それ申してなりません。ハヽヽヽヽ。何分にも此度の儀は宜しうおたのみ申します」卒「ハイ〳〵、いやモウおつしやる通り、男も年をとりますと、老母になりますので、實に難儀いたし」左次「エヽ引 そんなつまらねへ話より、こつちの相談をよく聞かつし。モシ〳〵質兵衛さん、おまへさんも其様におかたく計りなさつては、かういふ相談は出來やせん。まづゆるりとお樂においでなさつて、お心安くお話なさらぬと、こいつらはみんな、根が下主でございますから、氣をつめてとんと御相談に乗がきやせん」卒八「左様左様、餘りヘイヘイしたしからずと申して、どうも打とけませんで、いつそ氣がつまつて」呑七「なんのいやらしく云やアがるは。いつそ氣のつまるといふ面は、もうちつと歯がひつこんでゐるは」卒八「ナゼそつぱで氣をつめてはわりいか」呑七「わるくもねへが、マア氣の小い人の事をば、うちばだといふから、そのくらゐの外ばなら、マア勞症の氣づかひは有るまい。ハヽ

買「ヘエ、下生のかいないお方なら、全體二階住居はわるうござりますて。おいくつ計のお人か。どうもサ、年を取つてのは、やまぬもので御座りますテ」左次「ハ、、、、イヤモウ血氣さかんなやつらで、どれも〳〵達者にたれやすヨ」ト、ひやかしながら立つて階子の口に來り、左次「チイ〳〵まじめに相談が出來たから早く來さつし。じようだんぢやアねへぜ」ト、いひすて元の所へ歸り居る。野呂「チツト承知〳〵。もはや勅使三度に及んだから、行かずはなるめへ」アバ「サア行くべヱ。何を又もくろんだしらん」ト、みなみな何か捨ぜりふにて煙管煙草入など手にもち、階子を下りながら、アバ「眼公、勢州屋の藥鑵はモウ歸る」ト、いふを眼七ハツトうろたへ、アバ太郎が口へ手をあて、座敷へ指をさす。續いて後向にて下りし、野呂松「ほんによ、あァわからねへ、もよんじいはねへ」圓武六「あれでなければ金は出來ねへは」出目「なんの茶粥計りくらつて」ト、おひ〳〵惡くいひながらおりて來るを、眼七は氣をもみ、以前のとほり座敷へ指をさし、仕形にて敎ふる。左次郎もたまりかね、なにか大聲にくだらぬ話をたて付けてまぎらして居る。皆々も階子の上口に立つて、たがひに顔を見合せ、首をちゞめ又は舌を出し、頭をおさへ暫くだんまりにて、しらけかへつてちゞみ居しが、少し取りなし心にて、出目「しかし粥といふものは藥だとノ」アバ「さうよ、藥鑵で煮たのが格別きくとノ」ト、いふこゝろいきの苦しげなるを、皆々察してたまりかね、一同に、「フウ、、、」ト、吹出す。其場白けてはてしなければ、左次「チイみんなは何をして居るのだ。下生のわるい話をしたとつて、今更はづかしがる事アねへ。早く來さつしナ」卒八「アイ今」左次「今ぢやアねへ、急ぎの用だ。何をぐづ〳〵して居るのだ」アバ「何サ藥鑵を一ッたのまれたから、一寸買つてこようかと思つて」左次「ヱ、モウ何といつても帳面はきえねへは。そんな事よりマア

奥といふもんだから、定九郎と勘平のしてばかりあつて、役割がめんだうだから、勢州屋の旦那が名ざしで、おまへを勘平、わたしを定九郎と、當て來さしつたつもりで」左次「何サそれは螢狩の替りにするなら、勘平でも定九郎でも、足下のしたい役をするに、物いひはねへはサ。おれはどうでもいゝから、マアみんなを早く呼ッし」眼七「ヤそれは妙だ。そんなら私が定九郎」左次「ハアテようござへさア」眼七「有難し〳〵」(ト、いそ〳〵二階の上口へ行き、)「チイ〳〵皆が早くおりて來たり〳〵。二枚竝大急といふ相談が出來た。早く〳〵」圖武「エヽ何だいけさう〴〵しい、ぎやうさんナ」アバ「ホンニいつもがさつな野郎だ。丹前師の集つて居る時は、あんまりものいひを荒々しくしねへもんだ。へン血の道があがらア」野呂「ほんによ、あんまり下主に出來たやつだ。心だてならきりやうなら、ほんに女子のすかねへ眼と、いふやらうだぜ。いま〳〵しい」眼七「じようだんではねへから、わりい地口をついて居ずと、早く來て相談を聞いて見ねへ。おめへ達のぞく〳〵する程うれしがる話だ」出目「へンめづらしさうに、又女のことか。もうどこからの言込でも、暑中卽席戀事相休申候。新入りはお斷りだ」眼七「チヨツいめへましいやつらだ、こじれつてへ。左次さん〳〵どうも二階でたれてばかり居て下りやせん」左次「アヽ世話のやけたやつらだ。そして二階でたれられてたまるものか。ハヽヽヽヽ。質べゑさんごらうじやし、此通りだ。ハヽヽヽ」

ざりますが、ヱヽそこで當日は、いつごろでござります」㒵「ヘイ當日は二十九日でござります」左次「ハア二十九日、ヱヽそりやア妙だ。ちやうど與一兵衛が祥月命日だ。ハヽヽヽ」㒵「ヘヱヽ左樣かナ、フムヽおまいさん方が、命日を御存の程では、そのやうに久しい事ではござりませんナ。ヤレ／＼不思議な緣で、わたくしがその百姓の名代を勤めまするも、因緣事でござりませう。南無阿彌。フム引それでは、自體御懇意でもござりましたかナ」左次「なにサ、さういふわけでは御座りやせんが、マア／＼そんな事はどうでもいゝとして、チイ眼公、マアみんなを呼ツし。役をふつて見よう」眼「時にみんなを呼ばねへうちに、少々內談ありだ。先今度の高田の螢狩は、わたしが座元だが、おめへのいひなさる通り、螢狩に出る人もなし、といつて場所をかへるも卑怯だから、筋をば立てたが、實は酒屋のうちばかりをひつかついだ所がどつと腹にもたりず、殊に居候の身分なれば、斯う金主の有る芝居を、つとめずんば有るべからず。幸ひそのお下屋敷は高田邊といふ事、ネヱ勢州屋の旦那」㒵「左樣々々、雜司谷のわきでござります。イヤ今度は私も一生懸命、數代御高恩を蒙りますお屋鋪樣の事ゆゑ、物入は厭ひませんから、お心置なくお指圖くださりまし」眼七「そこで皆にぱつと相談すると、名にしおふお屋敷の

ましたが、その泥棒におなりなさつては下さりますまいか」左次「エヽそれはお安い御用。定九郎ぐらゐな役は、いくらも仕手は有りやすが、それではお前さんが與一兵衛かネ」貫左「へイ左樣でござります。右夜の質兵衛ゆゑ、少しもぢりまして夜質」左次「エヽ成程〳〵。チヨツ、それでなくとも、何か落はありやせうが。マア〳〵それはさうと、それにしても、定九郎計りではたりやせん、先五段目の役人は、勘平、彌五郎、定九郎、與一兵衛、猪と、五人に、其外後見に囃彼是七八人はいりやすが」貫「へエ、しかし盜賊に百姓がころされますばかり、外に踊がましい事をいたすではなし、はやし方迄にはおよびますまいかと存じますが、それともにも何れ此一儀はおまかせ申しますゆゑ、如何樣にもお差圖次第に、取はからひます了簡で」左次「素人狂言といふやつは、舞臺よりはうしろがしつかりしねへでは、うまくいかねへもので御座いやす。ぶしつけながら、芝居がおきらひだから、くはしいことは御存じねへが、いづれ私等にお任せなされば、まんざら素ドンチキのやうに、見ッともねへ事もしやすめへ。殊に五段目ぐらゐの一幕や二幕は、あんまり仕足らねへ、もうとつと身の有る事をしてへテ」眼七「左樣サ、ぜんてへ茶番に忠臣藏もあんまり古いネエ」左次「イヤサ藏でもいゝが、五段目なんぞはあんまり仕足りねへ」貫「左樣サ、ぜんたいあなた方をお頼み申す程なら、十番目から上でも隨分出來ますのに、

なりまして、傍若美人に懐中へ手を入れて、縞の財布を引出しまして」ト、くだらぬことを長々とならべ立てるゆゑ、眼七はじれこみ、眼「左様々々。それから與一兵衛をころして金を取る、猪がかけ出す、定九郎松の木へ上る、鉄砲ヅドン、定九郎ダア、勘平が出てその金を取つていたゞく。チョン〳〵幕」一貫「さやうさやう。イヤたいてい御存じだネ。ハヽヽ。それでは格別おはなし合が早くつてようござります、どうでも通人づき合ばかりなさるから、なんでも御存じだ。ハヽヽ。それ故にこそ番頭めも、あなたへ參つて皆様のお愚案をおかり申すがよからうと申しました。アッハヽヽ。そこでサ、わたくしの運のよろしいと申す譯は、私方は御存じさまの通り、先祖から勢州屋質兵衛と申します處、此度の狂言は、夕方よりと申すお廻状でござりますゆゑ、先壹番目から五番目の私の番までには、大丈夫四時頃にはなりませうから、右の百姓の役を、わたくしが勤めまして、仕舞に夜の質兵衛ゆゑ、夜質兵衛になりましたと、コウ申上げるがよからうかと、番頭申しますが、是は成程よい思ひつきではござりませぬか」左次「成程隨分ようござりませう」一貫「ところでサ、その泥棒になります者にさしつかへますテ。家内のものは番頭はじめ手代どもなどへ申付けましても、なにぶん主人へ手むかひ致します事ゆゑ、なんぼ茶番狂言にいたせ、迷惑がりまして、辭退いたしますゆゑ、よんどころなくこなたへ參じましたが、なにともはや申兼ね

貫「左様〳〵、その題とやらは、御廻狀に添へて參じましたが、ヱヽ忠臣藏と申す事で、私方へ仰付けられましたは、五番目と申すことでござります故、マヅ支配人と談合致しましたところ、右支配人申しまするには、いつたい忠臣藏五番目と申しまするは、ヱヽ引まづかいつまんでお話し申しますが、さるお屋敷の浪人に、定九郎と申すわるものがござりまして、ヱヽある田舍で淋しい場所を見立てまして、追剝を渡世にいたして居るところ、其近在の百姓に、與一兵衞といふ親父がござりまして、是がサ私の運のよい處で、その親父が金を五十兩と申すもの、おまいさん懷中いたして通りかゝります處を、彼定九郎めが付けて參じまして、年寄の夜道はあぶないから、送つてやらうと、親切らしく申しますが、こいつ油斷のならぬ奴とは思ひましたなれども、其樣に奇特にいふものを、無下に斷りもなりませぬ故、何か浮世話をしながら參ります道、案のぢやう右盜賊の申しますには、貴樣の懷にある五十兩をかしてくれろと申しますけれども、大枚五十金と申すものを、住所も知らぬ往來の人に、貸せぬは知れた事サネ。それでもさすが年寄だけ、そこは方便で、是はけして金ではござりませぬ、娘がくれました反魂丹と、にぎり飯でござりますと、早速にうそをつきますけれども、それ程の盜賊がきつと見とめて、付けて來ましたから、其手はくひませぬ。そこで彼是申しつのりまして、最早亂髮長髮と

思し召の程も、面目次第もござりませぬが、何れあなた方の愚案をおかり申さねば相成りませぬゆゑ、今日わざ〳〵」ト、やはりくだらぬ事をなが〳〵しく言つてゐる故、眼七はじれつたく早合點にて、そばから口を出す。眼「エヽ引、それでは何かアヽ引、イヤそれはぶし付ながら、いくつになつても、あの道ばかりは別なもので、私なんぞも度々こつちの主人の世話にもなりますが」賀「イエサ餘の儀でもござりませぬが、わたくし方數代お出入いたしますさるお屋敷様で、此度御隱居様の賀の、御祝がござりますところ、古いお出入町人共へ、高田の御隱館において、御酒をくださりますとのこと、イヤ有難い事ではござりますが、それにつきまして、まことに難澁な儀が出來いたしましたて。茶番狂言とやらをいたさねばなりませぬ譯に相成りました所が、おはづかしい事ながら、當年私は午の歳で六十五才になりますが、まだ芝居と申すものを、見ましたことがありませぬ故、狂言の儀はたつて御免を願ひましたれども、外お出入の衆が殘らずお受をいたしましたに、私ばかりいなやを申しましては斯様にお目出たい御祝儀のこと、又二ツにはお上の思召をそむく同前と、お役人方からくれぐれ御内意もござりますゆゑ、家内の者打寄りまして、一同當惑致しまして、寔にはや、どうもはや實に」眼「エヽ引茶番かへ。なんの其様に苦勞なさる事アねへ。爲さいやしナ」賀「イエサ爲されます程なら、此やうに苦勞もいたしませんが」左次「それでは何か題が參りましたらうネ」

早く」ト、皆々それ〴〵に酒道具を持つて二階へ上る。 賀「チト折入りまして、御相談申したい儀がございまして、わざ〳〵、アツハヽヽヽ」左次「ヘエヽ何御用か。マヅこちらへお上りなさいまし」賀「ヘイ〳〵、左樣なら眞平ごめん下さりまし」ト、つゞいて座敷へ通る。 左次「眼公お茶を上げてくだつし」賀「イエ〳〵決しておかまひ下さりますナ。アツハヽヽヽ。扨はやけしかりません暑でござります。しかしながら、暑い時節はやはり暑いがよろしうござります。又寒い時節は寒いがよいさうでござります。アヽ當年などは出來ましたさうで、マヅ七十年來の豐作と申す事でござりますナ」左次「ヘエ、それはけつこうな事でござります」賀「イエサ何程澤山出來ましたと申して、別段餘計にも食べられぬものなれども、豐作と承ると、なにか安心でござりますテ。ハヽヽヽ。扨はや御近所ではござりますが、渡世にかまけまして、とんと御不沙汰ばかり、何か用事がなければ上りません。ハヽヽヽ」左次「それはお互でござります。ほんにおめづらしいお出でだ」此賀兵衞はたゞ商賣一三昧、外事は一向なにも知らぬ文盲おやぢなれど、そのくせ何かかたくろしくものを言ひたがり、間違ばかりならべ、何事もわるくどく言ふくせなり。 賀「時にお見かけ申して、是非々々御頼み申さねば相なりません儀が不斗出來いたしまして、それ故わざ〳〵」ト、兎角おもしろくもない事をくど〳〵ならべ立てられ、よわりきつて、 左次「ヘエ何御用かマア早くおつしやりまし」賀「ヘイ、いへサ、それを申しに參りました故、申すなとおつしやつても申さねば、相なりませぬ儀、イエサ外の儀でもござりませぬが、よい年を致してト

花暦八笑人 四編下巻

かゝる折ふし庭口の、枝折戸明けて入りくる人は、勢州屋質兵衛とて、近所名うてのかた親父、平日は左次郎はじめ一座の能楽者などは、風上にも恐れ、又左次郎方にては、風下に居るさへきらふ釜違ひの人なるが、何思ひけんいそ〳〵にこ〳〵入來り、質兵衛「左次郎さまは御在宿かな」眼七のぞいて見て、眼「ヲヤ〳〵とんだ獸が來た」左次「だれだ〳〵」眼「勢州屋のトンチキヨ」左次「こりやア妙だ。何に來たらう」眼「さればサ待ちねへヨ。かうだによつて」質「おるすかな」左次「イエ居りますく〳〵。是サ眼公何を考へて居るのだ。なんとか言はつせへナ」眼「ムヽさうだつけ、あんまり思ひがけねへ人が來たから、ツイ」左次「エヽぢれつてへ」ト、左次郎たつて、左次「イヤこれはお珍しい。何と思召してお出でなさつた。マア〳〵こちらへ」質「アツハヽヽ」座敷にて、出目「なんだかむしやうに、アハ〳〵笑ふぜ。上口を齒くそだらけにするだらう。サア〳〵上るは、是はたまらねへ〳〵」ァバ「マヅしばらく陶器類を待つて、昇天することだ」武圖「ムヽそれがいゝ〳〵。二階呑靜とやらかせ。野呂公廣ぶたを持つて來さつし。早く

今夜中かよつて責めたら、ちつとは口がほぐれるだらうし、兎角口数をきかぬやうにすればい
い。それはまア偖置として、なんにしろ腹の内が酒切れだ。ちよッぴり小酒としよう」アバ「へ
ンさつきからてん〴〵茶碗で、やつて居るのよ」左次「如才のねへやつらだ。だうりで靜だと思
つた。サアさう聞いたら、たまらなくなつて來た。眼公々々、ちよいと何ぞのめるものをナ」
眼七「前歯のかけた下駄はどうだ」左次「エヽ古い〳〵。しやべらずと早くさつせへ。其内蝿帳
のもので、虫を押へてゐるよ」ト、是より例の大酒となり、暫は雑談に時をうつしぬ。

ム、二十五才ではモウ厄は濟んだナ」圖武「イヱまだ三十三と申すがござります」眼七「ナニ三十三がある、それは丸か半札か」圖武「ヘイ丸でござりました」眼七「フウ、それを貳朱と貳百に買をう」圖武「どういたしまして、揃目は中間でもさうは買へません」眼七「ヱヽモウ百遣れ」圖武「チヨツ口あけだ上げませう。三百では寔に買直でござりますが、其かはりお當りの節御祝儀をどうぞ」眼七「コウ〳〵そりやアいゝが、きのふは何が出た」圖武「おれもまだ出番を見ねへが、昨日はおれが〆た氣だが」眼七「おれもしめた氣だヨ。出番を見ねへうちが樂だよノウ」圖武「ちげへねへ。しかし出番を見ると、いつでもがツかりにはおそれるテ。コウこれは地金だが、實に一ツとらねへでは、モウたちきれねへぜ」左次「コレこいつらアどうしたのだ」出目「さうよ、稽古だといふから、噺もせずに聞いてゐるのに、うぬらが勝手な咄をしてゐるぜ」ト、いはれて兩人心付き、うろたへながらぬからぬ顔にて、圖武「コリヤ〳〵亭主」眼七「ヘイ〳〵」圖武「汝が心立のよきゆゑ、福徳をさづけてつかはす」眼七「ヘイ〳〵、それははや、ありがたい儀」左次「コレサ眼七の方が狐ではねへか」眼七「ヲヽほんに左樣でござります。まことに麁相仕りま」左次「ヱヽなんだか、むちやくちやになつたは。大きなべらぼうだ」出目「ほんに、其樣どぢ〳〵した事では、此役はむづかしからう」左次「さうだが、かなりに筋が立つてゐるから、むづかしいのは亭主と應對ばかりだ。それも

それがいゝ。おれが亭主に成つて受けよう」眼七「サア皆まぜつけへしなしだよ」左次「しれた事よ。そつちよりこつちが、安心してへから見るのだ。サアまじめでやらッし」圖武「よし〳〵。サア亭主に逢はうと、呼ばれて出てからだよ」眼七「よし〳〵。サアこい」圖武「へイお呼になりましたか」眼七「ヲヽ其方此家の亭主か」左次「亭主といふがいゝは、あんまり御叮嚀過ぎる」眼七「亭主か」圖武「ハイ左樣でござります」眼七「フン名は何と申す」圖武「圖武六と申します」眼七「年はいくつに成る」圖武「へイ三拾五歳でござります」眼七「宗旨は何宗だ」圖武「へイ宗旨は、エヽ引淨土宗でござります」眼七「寺はどこだ」圖武「淺草でござります」眼七「葬禮は何時だ」圖武「へイ葬禮、イヤ此べらぼう、うぬがまぜつけへしやァがる」眼七「アヽあやまり〳〵。エヽ女房はいくつだ」圖武「あんまりしつッこいぢやァねへか」眼七「マア何でもおれがいふ通り受けさつしな」圖武「チイ〳〵。エヽ引二十五でござります」眼七「ムヽ厄年だナ」圖武「へエ、イエ女は厄年ではござりますまい」眼七「ハアさうかナ」圖武「へイ男が二十五、女が十九と申すことでござります」眼七「アッア不便な事を致したナ」圖武「なぜでござります」眼七「おれは又心中かと思つた」圖武「太神樂の神主さんをやりやァがるは。べらぼうめへ」眼七「モウ〳〵まじめだまじめだ。ムヽ二十五才では」圖武「結構なお料理でござりますな」眼七「是サまじめだといふのに。

ひねるナ」左次「ムヽよし〳〵」眼七「そこで色言葉の切れるまで、少しづつ思入の振があつて、「煩惱のきづなをかけ」と言ふをきつかけに、皆一時に、高田の馬場の狐をつろな。テン〳〵トッツン、テントッツンと、三味線茶碗皿丼其外見合がかり、手當り次第に、たゝきたッて囃す。わたしは大はだぬぎ、向鉢巻のやけ踊となるといふのだ」卒八「是は眼公にしては出來た」眼七「何眼公にしては、コレ己を何だと思ふ」卒八「左次郎方に居候と思ふのサ」左次「エヱやくたいもねへ事をごたつくな〳〵。エヽ引ト成程螢狩の題ではそこだらう。隨分よからうよからう。本當に踊らうといふかと思つて大に案じた。色言葉の中、少しの思入がありさへすればよし、其思入れも夜の事だから、おも入れでも輕入れでもよしと」アバ「そのあんばいでは、何も稽古がましい事もいらず、すぐにやつてもいゝノ」左次「イヤ〳〵さうでねへテ。獨舞臺のうちが、眼公にはチト大役だよ」眼七「ヘン案じなさんな、腹がなくッて正本をたてるものかナ」左次「女島の雪隱を見るやうに、其くそずましが、不案心でならねへ」眼七「是程の事を書く腹だから、安心しさうなもんだが」圖武「ごたいそうにいふな。何もそれしきに腹も尻もいるものか」卒八「さうよ。はら所か、少し明地があれば出來る事だ」アバ「ヘン洗張屋が見世を出すやうだ」眼七「それ程不安心なら、誰ぞ亭主になつて見ねへ、一番うまくやつて見せよう」圖武「ムヽ

ひつけ通りにいふ氣だからョ」眼七「ちつとぐらゐの言ひそこなひをば、大概に推量するがいゝは。こぢれッてヱ」ァバ「ハヽヽヽ、ぢれ込みやァがるは」眼七「それから皆が螢を追ひまはして、取るふりをしながら、花火を遣ふのだ。いゝ程にとつて、籠へ入れたふりで兼て持參の螢を持ッて、元の家へかへる」出目「内のものも同じく取りに出たらどうする」眼七「そりやァおれが」圖武「胸か」眼七「むねの者どもは、ヱヽどうもまぜつけへしに、引ずりこまれて、のぼせッけへるは」呑七「ハヽヽ、甘口な野郎だ。サァこれからおれがまじめに受けるから、おれに計り噺す氣でやらッし。フウそこで、内の奴等も出ようとするを」眼七「コリヤ〳〵、内の者どもは、決して出でる事無用と留めて見ねへ。ドロン〳〵で螢をあらはすもんだから、内の奴等はおそれいつて、なんとでも、おれがいふ通りになるだらう」左次「さううまくさへいけば、眼七大もてだらう」眼七「所へ野呂公が獵人の拵にて狐罠を持つて來て、其庭へおき、少し思入ありて、ずつと小蔭へ這入る。それからわたしが、鼻をひこつかせて、そろ〳〵亂れかゝつて、つる〳〵と庭へ飛下りる。内の奴等はあはやと驚くをかまはず、罠のそば迄つか〳〵と行き、すツくと立つをきッかけに、「爰に獵人の、いつも掛けおく狐罠、さま〴〵整へ懸置きたり」と一中節の信田妻を、左次さん一口おたのみだ」目出「ヘン素人が呑口を拔くように、大層

へ、なぞと、わたしが方へ聞える様にいふを聞いて、亭主に向つて、隣座敷のものどもは、螢狩に來たやからと見ゆるが、其螢が所になくては、かれら歸朝のうへ」左次「唐へ行きアしめへし、歸朝といふがあるものか。ハヽヽヽ」眼七「歸國か」左次「歸宅さ」眼七「マアちつとぐらゐな事はいゝわな」呑七「唐と高田だからきつい違はねへ」眼七「エヽ又のたり出るよ」トにらみつけ、「エヽ歸宅のうへ、近所合壁の友子友達へ」野呂「アヽまづい言草ナ。稲荷さまだらうナ」眼七「申しきかせるで有らう。さすれば當所、不繁昌の元手なるべし」左次「基だらう」眼七「ムヽ基なるべし。我通力をもつて、少々螢を取集めてやるべし、といひながら、勝手の宜い方をむいて、チヽンプイ〳〵御代の御寳と、何か呪文をとなへると、向の方へ螢があらはれる」アバ「どうしてあらはれる」左次「それは遠くで見せるのだから、花火でもよからうが、だれぞ向へ廻ツて居るのか」眼七「さうよ、野呂公が役だ」野呂「ヘンありがてへ、蚊に喫はれながら螢花火をボタリ〳〵やつて居るのだナ。知恵のねへ」呑七「其役をしねへ所が、智恵のある方でもねへから、役不足をいふ事はねへ」眼七「何サまだほかに大役があるよ。そこで皆が、ソリヤ花火があがるといつて駈出して、螢籠へ入れるふり」卒八「やつぱり花火があがると言つていゝのか」眼七「エヽ何サ螢が」卒八「あがるといふのか」眼七「螢のあがるといふ事が有るものか、知れた事だは」卒八「作者のい

呼止め、其油揚は女の手にかけずに、よく切火を打かけて燒かずに生でよし。女アイ〳〵と下座へ這入る。此鳴物にて向より」卒八「どんな鳴物だか前にはなかつたぜ」眼七「エヽそんならテンツヽでいゝ。向より左次郎、アバ太郎、圖武六、出目助、呑七、卒八、何れも町人の拵、螢籠、大團扇などをもち出來り、同じく此酒店へくる。下女出迎ひ、それ〴〵に挨拶よろしく有ツて、みな〳〵捨臺詞にて、上の方障子家體へ這入る」野呂「ムヽンやうかん色にいふナ」眼七「ナゼ〳〵」野呂「黑いやうにごまかした事をいふから、やうかん色よ」眼七「かまはねへ〳〵」本讀「このあたりより眼七は亭主を呼び、何か詫宣めきたる事、都て所繁昌、家繁昌其外うれしがらせ、受のよき事計りいひならべ」圖武「をかしな作者だナア。うれしがらせる事をいひならべッ。臺詞もつけねへ本讀もをかしい」出目「大方それも胸か腹だらう」眼七「うッちやッて置けエ。おれが役だから、どうでもいゝは」左次「ヲットしばらく〳〵。イヤなか〳〵おつりきな筋だ。マヅ本讀をばあづからう、かいくッて聞いて居られねへ。まじめな相談にしよう」眼七「ヘンどうでごぜへす、それだからあんまり人を見くびらねへもんだ」左次「いゝさ〳〵、廣言は跡の事。それからおいら達は脇の小座敷に居てどうするのだ」眼七「おめへ方のはうでは呑みながら渡臺詞の雜談。そのうちに、せつかく螢を取りに來て、一疋もとらねへ、これで歸つてはいゝわけがね

たつた今腹にあつたのが、モウ胸へ來たから、程なく口元か、鼻の先へきさうな趣向だ」眼七「マヅサ、だまつて聞かッし。跡でもし惡くば、なんとでもいふがいゝ。どうも惡いくせだ」出目「ヘンもし惡くばもいゝ、もしよくばほめてやらう」眼七「左次さんちつとどうかしてくんなせへ、わたしには口をきかせねへ」左次「ハヽヽヽ東西々々」眼七「其くらゐな事でだまるやつらか」左次「そんなら南北々々」眼七「ムヽよし〳〵、みんながさう向面へまはるなら、おれも男だ、仕掛けた本讀をやめはしねへ。合手はいらねへ獨りでやるぞ。へッぴりども、なんとでもまぜッけへせエヘン。まづ本舞臺三間の間」出目「まづ本舞臺でいゝ、ハヽヽヽ」アバ「先だらうヨ。どうせうまくはねへはサ」眼七は狂言方、本讀のまね横ぐはへにいふ。「都て高田馬場の體、上の方に料理茶屋一軒」卒八「だいぶ荒ッぽい書きやうだネ」野呂「さうさ、筋書の方を間違へて持つて來たらう」眼七「やかましいわへ、餝附から小道具は、みんな胸の内にならべて置くは」本讀「ヲイ女中鯨があらば、天麩羅にして貰ひてへもんだ。下女ハイ承つて見ませうト立つて行く。跡にて臺所より見ゆるやうに、何かきよろ〳〵として、羽織の裾より尻尾など少し見せ、思入有るべし。此内さいぜんの下女來り、ハイどうも鯨の天麩羅は出來かねます」おのれが名も役者めかしていふ。「眼七、ハアそんならただの油揚でもいゝから、二三十枚出してくれ。女アイ〳〵引と立つて行く。眼七、コレ〳〵ト

いゝ、難題でも人にこそよろべしサ、其時眼七すこしも騒がずサ。出ねへ人を無理に出したがる事もなし、時候はづれの螢をつかめへて、グチ〳〵して居てもはじまらねへから、それは狂言名題として置いて、其うそ淋しい所へ付け込んで趣向を付けるが、茶番師といふものだ」左次「何だかた のみすくない奴等が、むせうに氣計りたかぶつてるから心元ねへテ」眼七「ナニサ心元有るヨ」卒八「マアどんな事をいふか聞いてみるがいゝ。サア存念を不殘申上げろ」眼七「ヘン聞いてびつくりするなよ」野呂、卒八「三盃呑んだ、さかづ、ヲツト合こう〳〵」ァバ「アヽうるせへ。ふたアりで對々の對に地ぐるのだ」眼七「どうもならねへ、まアちつとだまらねへか。其樣幕なしに地口つゞけで、どうして本讀がはじめられるものか」左次「サア〳〵眼公、よけいな口をきかずに、ざつと筋計聞かう」眼七「マヅわたし獨り、晝の内さきへ行くのだ。しかし高田にちよいと一盃呑まうといふ家が有るかノ」左次「それは有るのサ」眼七「其酒店へ上つて、ひとりポツ〳〵呑みながら、始終狐と見られるのだ」圖武「どうして狐と見せる」眼七「そりやア腹に有るのサ」左次「其腹が安心ならねへテ」卒八「さうサ狼とは思はれさうだが、狐の方はどうだか」眼七「何サ、鯉丈が出した和合人といふ中本のやうに、狐の尻尾をちらと遣ッて、後は思入れいろ〳〵、仕打たつぷりサ。そこは決して案じなさんな。萬事は胸にあるから」出目「そりやこそ、

らう。所で卒公が怪我の直るうちに、モウ螢も末になるし、殊に場所は高田だはサ。今時ゐつちらおつちらあそこ迄、螢を取りに行く人もすくなし、人が出ねへで、こつち計りいつた所が、はじまるめへぢやアねへか」出目「ムヽ成程それではやめか」左次「イヤ最初の規定だから、途中で立消しては、今まで磨いた男がよごれるから」圖武「ハアいつみがいたか、氣がつかなんだ」野呂「さうよ、ついぞ見た事もねへが、大かた天窓の事でもあらうヨ。さういはれて見れば、日増にいゝつやが出るやうすだ」眼七「エヽやかましいわへ。ちつとは言葉の花といふ事があるものだは。それをいち〳〵咎められてたまるものか。マアだまツて聞かツし。今いふ通り、かんじんの螢といふ景物はおくれるし、場所がらはわるし、座頭は眼七と、かう三拍子揃ツたなアねへ」圖武「此芝居は、チロシヤへでも賣るがいゝ」眼七「おめへ達は、とかくおれを唯の人のやうに取扱ふが、チト御了簡違へかと存じられるテ。今迄の鼻元思案とちがつて、まづ筋はかうだ。エヘン」左次「エヘンも異變もいらねへが、足下の事だから、定めて趣向はよからうが、夜夜中高田まで行つても、荷負といふ見物もなくつて、何を當に茶番をする氣だ」出目「ハア人は出ねへかノ」左次「二三十年も以前は、風流がる奴がたまに行つたさうだが、今はあんまり出ねへさうだテ」出目「それ程知ツてるくらゐなら、こんな題を出す事もねへ」眼七「何サ案じねへが

しくもねへ」野呂「コレじやうだんより、さうだんに身を入れるがいゝぜ。だれいふとなく春中からの事も、こつちの連だといふ噂だから、仕くじツちやア、おいら迄の面がよごれらア」呑七「さうよおめへなんぞが、うまくやつたあとだから」野呂「アツァあやまりあんどん油さし、ヨヲヲイ、サアひつこみだ。コレ送りはどうしたのだ」圖武「ヘンどんな狼でも、こんなものにはつくまい」卒八「コウ〳〵荒增世界の定るうちは、閑話休題として、ヘン唯かういつた計りでは解しがたからう、閑話休題とは、むだばなしはさて置きといふことだぜ」アバ「ムン閑話休題の講釋、もんで張ツて十六文か。ヘン讀本を學書と心得て、六冊物の二三部も見ると、學者になつたつもりだ」出目「ムヽちげへねへ、よゝと泣いたり、かや〳〵と笑ツたり、泥みたる聲音して、ほこりかに話すやつか。ヘンよく出來た猿だゾ」呑七「サア〳〵とかく相談を極めようといふと、稲荷町からまぜつけへして、くだらなく引ツぱつて居るも、久しいもんだ。てへげへにしやべツたら、なんとまじめな相談はどうだらう」左次「さうよ、今野呂がいふ通り、此催の事はうす〳〵人も知ツて居るから、番每仕くじツて計り居ても、見ツとむ有りもしねへから、今度は一番氣をぬいてはどうだらう」圖武「氣をぬくとはどうするのだ」眼七「さうサ此上へ氣をぬいたら、人間に似た獸が、八疋出來る計りだらう」左次「いやサ今度の名代は高田の螢狩だ

ヤ猿わざだらうテ」圖武「それだから、爰は一番順をくりけへて、おれが座直しをして、味方の英氣をひつたてようといふ氣だ」野呂「ヘン今の痰咳のあんばいでは、やつぱり味方の英氣が、ひッ居るだらう」眼七「ちげへねへ。ヘンおめへはマア當分出かけねへがいゝ」圖武「ナゼ、ぶッさうか」眼七「マア痰咳のきえねへ内は通りはわりい」圖武「チヨッいまへましい。乾生姜でも呑むべエ」眼七「サア今度は人の番でもさしくつて、おれが自身に玉手を勞して、座を直さうと思つて居る所だ。今迄と違つて大事の場だ」出目「さういつて見ると、足下にもさせられさうもねへから、大儀ながら出目助、出馬とくるテ」左次「東西々々、皆があらそふも尤のやうだが、さうして見ると、又外のてゐゝも、今度はおれが〳〵と、いつ迄も論がひねへから、是は斯うするがよからう」眼七「いんにや、さうしまい。なんでもおれが番だから」左次「エヽおれがいふ事をマア聞かッし、カラ素とんちきのくせに、强情でならねへ」眼七「ヘン卽功紙を張ッたきん玉を見るやうに、ひどくひッかじめるぜ。どうも仕方がねへ、置候のいふ事だ。マアだまつて、聽聞いたしやせう」左次「ムヽンうらみッぽくいやアがる、すかねへべらほうだ。ハヽヽヽ。しかし是でもいつぱし、一方は拙者承るといふ了簡でゐるから、まんざら豆にしても承知しめへ。斯うやつたらどうだらう」眼七「ムヽさうやらう」左次「エヽ豆藏の樣な事をいふなへ、をか

「ア、あやまり〳〵、サアまじめで〳〵」圖武「何もむづかしい事ではねへ、田舍風といふ事サノ」卒八「ハテナそれでは都の方で、今の樣な時痰咳をすらば、ひなびとかいふ、田舍の方では屁でもひるか」圖武「アツア、どうもならねへゾ。嘆息といへば、病とばかり心得て居るから、田舍もんだといふ事よ。コレよく聞いて置きナ。ごほり〳〵といふ計りが、たんせきぢやアねへ、今お前のやうに、アヽ、趣向も假成に出來たけれど、運がわるくツて、しそこなつて計居る、何事も勞して功なし、アツア是非もなき浮世ぢやナア、なんぞといふのを、歎息するといふは」左次「ヘンべらぼうめ、それは歎息といふものだ」圖武「ハア歎息か。ちつとの違ひだ」眠七「カラ人非人ちやく、ちや〳〵むちやくちやのくせに、イケ利いた風に、耳學問のこうぜへた口を、たゝきたがるから仕くじるのだ。ハヽヽヽ」圖武「なんの知つて居るくらゐなら、何も人にいきせへひつぱらせる事はねへ。ばか〳〵しい。エヽ出目助よせへ。ナゼ人の天窓を押すのだ」出目「此くらゐひやかされたら、もう少しやはらかくなりさうなもんだが」アバ「しかししなびた〳〵といふから、ちつとひやかすもよからうヨ。ハヽヽヽ」出目「時に痰咳が留つたら、世界を定めようではねへか」呑七「よからう〳〵。先左次さんに、野呂松、卒八と、何れも立派に仕損つたが、偖また次の輕業は、眼公が番だノ」左次「さうよ、アヽサゾ重わざだらう」卒八「イ

やァねへか」圖武六「なんの其様に歎息する事があるものか、おれが一番、座直をしてやるから、しつかりして居ネヱ」左次「ナニおらァ咳は出やァしねへゼ」圖武「アツア是非もない事だ。みやびた言葉を遣ふと、ひなびた輩には、解しがたいテ、なげかはしい事だゾ」呑七「ナニおいら達がしなびるものか」左次「マア〳〵だまつて聞かッし、圖武公もでへぶきつくなつたテ。フンそこでまづみやびた言葉といふは、どういふ人の遣ふのだ」圖武「みやびといふは、マア都ぶりといふ心サノ」野呂「ハア一中節の言葉で、たんせきといふのは何の事だ」アバ「大かた夕霞の中に咳も出ぬのに重夜著、といふがあるから其事だらう」圖武「じれッたくわからねへ手合だゾ。みやびたのひなびたのと云ふは、都ぶり鄙ぶりといふ事で、まづ都ぶりとは、きんりんさまのお出遊ばす土地は、下々迄が、おのづから雲上で、言葉づかひも、まちがつた事や、ぞんざいな事は、いはねへはサ。そこで叉ひなぶりといふは、まづ早くいへば」左次「いんにや靜にいつてくだッし、かういふ事はよく聞いて置きてへ。フン引、ハテナ、ひなぶりといふのは」眼七「きん玉の黑いものだらう。ソレ色の黑い事を、ひなぶりのきん玉のやうだといふゼ」左次「是サ、マアまぜつけへしちやァ惡い。まじめな噺だは。フン其ひなぶりといふは」圖武「マア俗に云へば」左次「いんにや坊様でもいゝから、本とうの事がいゝ」圖武「チヨツまぜッけへすならよさう」左次

花暦八笑人 四編上卷

一切衆生の薄地、凡夫心に八葉の蓮華あつて、取も直さず出來合の、如來なりとはさる說法場の耳學問、其八葉の潔き、數にはあへど世の垢に、よごれた顏の八笑人、女を見る目と喰物に、グビ付く咽の其外は、無能短才何事も、知らぬが佛骸中へ、箔のついたるなまけもの、人のそしりも不忍の、池の蓮の花盛り、折こそよけれと左次郎が、例の庵へ寄り集ひ、又もめぐらす茶番の趣向、舌を卷葉の橫ぐはへ、直に立葉の早合點、仕損ッては二度三度、惣身に流す汗の露、玉とあざむく一工夫、今度は是非にと無い知惠を、磨く光もとぼ〳〵と、闇き高田の螢狩、團扇はもてど取りとめた、趣向なければ主の左次郎、左次「時に如斯八人りつぱに揃ッては居るが、每度出かさねへにはこまるノ」野呂松「さうよ、きりやうばかりよくッても、運のわりいのだから仕方がねへ」アバ太郎「ヘンお目かけのやうにいやアがる。ハヽヽヽ」左次「なるほど野呂松がいふ通り、都て案事は假成だが、兎角悲運にして、かんじんの所へ行くと、仕くじりが出來る。どうも思ひきやといふ事が出來るのだから、最初の趣向の惡いといふでもなし、這にこまるぢ

流を引かへて、不至作者の其一個。

東船笑登滿人誌

序

這八笑人といへる小册、先年珍しく發きそめたる脣の、花暦なる櫻木に、いよ〳〵登る瀧亭主人は、吾師狂訓亭の兄にして、彼惣領の童戯人、六々三十六鱗の、丈ある鯉の味噌粪は、美味を知らする可笑に、一家の風味を現して、腮のかきがね是が爲に、はづさせんと要すなる、滑稽の妙臻れり竭せり。然るに杣人は篤實く、專ら世の人情を、ありのまにまに綴りなして、假にも勸善ならざれば、毫を耕らず、懲惡ならねば、書錄さずと四角ばりて、珍文漢語の遠說く、走るを止むる駒木履の、音のから〳〵渡つたやうな、所を約して皇國風、しかも東都に流行す、人情史は著はせど、旨とせざる處なりと、自慢のすましで喰せる。比するに方函圓蓋の、たがひの中に小子は、右へよつたり左へよつたり、合せて不意叶八笑人の、中へ漕出す東の船、雪とすみだの川風に、吹かるゝ春の山出男、笑ふばかりを用處にて、不屬一方の放蕩もの、此序を書けと命るゝまゝに、漸毫をとりが啼く、冠辭も久しいものにて、欺癡漢せず出題傍に、智惠の袋のふるうはござれど、這書の餘紙の塡詞に、する事しかりといふものは、綠橋西岸市隱の食客、原の狂名瀧亭糸丈、今は

し」ト、例のだじやれの數ものを渡りぜりふに並立て、はては大笑ひとなり、卒八も思ひのほかすこやかになり、さしてうろたへ療治する程にもあらざれば、一先住吉屋にて大酒となり、それよりも涼みながらの歸りがけ、かの齋藤が名術にて一療治にてさらりと全快、歸るとすぐにしやうこりもなく、夏の趣向の跡がまをかけてそばから焚きつけられ、たちぎえなきはかねての謀定と、遊戯に倦まぬ能樂人、なほ池の端の參會に、今度はいちばん氣をかへた趣向をつゞる八笑人、第四編目に差入御覧候。

れわたしが禮に行きやす。アヽ是、大きにとんでもねへ。ハヽヽヽアイ。そんなら」ト、みな〳〵も相應の挨拶にて引分れ、やう〳〵舟宿まで立戻りけれど、いつになく卒八は元氣もなくふさぎゐる故、皆々大に案じ、左次「次郎さんとてもの世話ついでに、おめへの心安い醫者さまを頼んでくんなせへ。先爰で見てもらひてへもんだ」次郎「アイずるぶん醫者も有りやすが、こんな怪我には、彌次兵衞さまがようございやせう」出目「ちげへねへ。千住なら大丈夫だ。アヽしかし道法が大變だナ」圖武「いやいや近くていゝのが有るは。駒形の榮順さんに頼むがいい。あれは河童相傳で、打身の療治は名人だ」呑「ほんにさうだッけ。駒形なら舟で行けばざうさはねへ。それがいゝ〳〵」次郎「それとも彌次兵衞さまになさりたくば、お玉が池の若旦那の出張へいけば近いネ」卒「おらア駒形の方にしよう、おたまがいけヱばかりではねへ、尻が痛へから河童相傳がよささうだ。アヽ是天窓が痛へといふ地口だが、おめへ達にやア聞けめへ」左次「ヱヽべらぼうめヱ、しやれが出るやうか。おれには大きにうたせたぜ、いま〳〵しい」卒「そして榮順さんが容體を聞いたら、駒がた船中落ちやしたといふ氣だが」左次「アヽうるせへぞ。氣儘にしておけば、あんまり不景氣な洒落ばかりならべたてる。モウ〳〵しかし此洒落が出るやうでは、案じる事アねへ」卒「此しやれがよかア魚でんにするがいゝ」アバ「ヱヽうつたうしく、下物ばかりならべたてるゾ。いゝサ此節の事だから、こはだ好しなことを何とでも鰯ツし鰯ツ

んによ。狐にノウソレ、エ、引「マア是間違へされたと思つて、何にしろおれにあづけてくんねへ」商「ハア次郎さん、おめへん所のお客かへ。やれ／＼それはマアいゝ。どうもソレ、さつきから此方にも色々所を聞きやすけれど、ヤレ龍宮から迎がくるの、なんのと、わからねへ事ばかりいつて居さつしやるから、今も船助や瓜吉と相談して、橋番へでも連れて行かうかと思つた所ヨ」ト、殊の外もてあましたるくちぶりに、左次郎はじめ皆々も安堵し、左次「イヤモウひよんな事で大きにお世話になりやした。お氣の毒ナ」商「お前さんがたのお連れかへ。どうやらチト、まちがつて居なさるやうすだが、危へことをしやした。まア／＼おまへがたにわたせば安堵だ。次郎兵衛さん、そんならお世話ながらつれ申して行つておくんなせへ」ト、却つて先よりたのまれて、思ひの外に風なみよければ、左次「サア次郎さん、そんなら斯うしてゐては御商賣のおじやまだから、ちつとも早くこつちの舟へ引取りやせう」商「左樣サ、どうぞ早くさうしておくんなせへ。又飛込まれようかと思つて、此通り褌の三ツを押へづめだア。サアもしおめへの心安い衆が來なすつたから、あつちの舟へ乘りかへなせへ。そしてかならず馬鹿な了簡を出しなさらねへがいゝ。ほんによ、死んで何がおもしれへものか。サア／＼立ちなせへ／＼」ト、引立つれど、腰をつよくうちし故、急に立つ事かなはず、さすがの卒八もしをれきつて洒落も出でず。さりながら始終亂心のあつかひ故、まだしもそれにまぎらして、樣々のたはことをならべたて皆々にたすけられ、やう／＼舟へ乘りかゆる。又母はさいぜんより、船中にて茶番の始終くはしく聞いて安心はしたれども、腰の立たぬにいづれも當惑しけれど、まづ商人舟へはそれ／＼に禮をのべて立別れる。次郎「そんなら菓兵衛さん、いづ

うぞまア了簡しておくんなせへ」商人「何サ了簡するもなにもいらねへが、まづおめへの身分の事だが、どういふすまねへ事があつて、死なうと迄思ひ詰めなさつた。なんにしろ悪い了簡だ。殊に狂言でも仕ようといふくらゐだから、何も深しくもよほしたことでもあるめへ。定めて何かふつとした出來心で、死ぬ氣になつたもんだらう。なんにしろ不了簡なことだ。そしてまア、お前のうちはどこだヱ」卒「ヱヽ何サ連のものもありますし、そして龍宮のやつらでも、來さうなもんだ。おれが飛込んだのを見てゐたらうに」商「なんだ龍宮の奴等とは。そりやアおめへ心安いのか」卒「さやうサわたしが飛込むのを見ると、すぐに出る筈にしておきやしたが、大方此舟へ落ちたもんだから、何かわからぬくりごとをいひつゝ、川の面をうろ〱見廻すを見て、そこで皆はづしやしたらう、ばか〱しい。あんまりたのもしくねへ奴等だ」ト、商「是おめへはでへぶ取のぼせて居る様子だが、まアまア落付きなせへ。おれが呑込んでゐるから、龍宮へでも極樂へでも、すきな所へやつてやるから。まアお前のうちはどこだヱ。これサ其様に手をついて居ずと、まア顔をあげなせヱ」ト、打寄りてだましすかして尋ねられ、さすがの卒八もせんかた盡きたる所へ、彼の住吉屋の舟やう〱尋ねあたり、次郎兵衛は商人を見れば、さいはひ知る人なれば、次郎「チイ菓兵衛さん、おめへの船か、イヤとんだ目にあつたノウ。しかし其お人はおらがうちのお客だが、ヱヽ引、チト間違への事があつて、マアコレとんでもねへ、是まアなんにしろお前が氣の毒だが、それもマア、ほ

なさんな。ヲイ呑公眼公、二人はおッかァと一所に待つてゐさつし」眼七「行きたくッても此通り、押へて居てはなさねへから仕方がねへ」左次「ハヽヽヽ、ヲイ内のおッかァ、何ぞちよつぴりしたもので、此おばさんに一口上げてくんなせへな」母「イエ〳〵どういたして、酒どころか、ひとりの伜が死んだか生きたかといふ所で、なんならわたしも御一所にめへりませう」呑七「なるほどそれもよからう、ノウ左次さん」左次「ウヽずゐぶんいゝ事はいゝが、あのなりを見たら又」母「ハヽァそれではモウ、水ぶくれになつて」左次「何サ〳〵、さうではねへが」次郎「モシやつぱり乗せ申しておいでなせへ、かまふ事アねへ」アバ「そんならさうよ、サァ一所に」母「ハイ」ト、返事はしながらも、氣をつりあげて腰たゝずあせりまはるを、呑七眼七右の腕をもちそへて、やう〳〵舟へたすけ乗せ、みな〳〵一度に乗りうつる。扨最前の商人舟には身投と見えて、異形の人物船中にたふれ居るゆゑ、大に驚きうろたへさわぎ、打寄りさま〴〵介抱すれば、やうやう息を吹かへす。されどもあまり見物の舟おひ〳〵に集りしかば、先片蔭へよけんとて、本柳橋の横堀へ舟を入れ、爰にて藥など買寄せ、猶々介抱するゆゑ、いよ〳〵生氣になりたるを見て、商人「是おめへはまァ女の褌を〆めて、天窓へはかづらをかけて、まづ茶番狂言でもして居たといふ様子だが、マァどういふすまねへ事があつて身を投げたのだ」ト、問れてさすがの卒八も、船中のやうすを見れば、殊のほかふみあらし、それのみならず介抱にあづかりしかば、さながら思ひ付の茶番ともいひかね、卒八「イヤモウ何といはれても、一言の申譯もござりやせん。ど

たぜ」左次「おや／＼ほんに、おつかァおめへどうして爰へ來なさつた」母「イヱサおまへさん、どうして來たか、斯うしてきたか、はゞかりながら足は地につきません。マァあの野郎どのは、どこへ參りました」左次「アイサ、今其事でちよつと爰へ來やした。ちイッとまちげへの事があつて、コウ／＼アバ公みんなも奥へ早くいつて、爰の亭主にくはしく噺して頼んでくだつし。ヲイ内のおツかァ、次郎さんは内だらうネ」女房「ハイ奥の二階に、晝寐をしてをります」左次「サアサア出目公、おれも今行くから、亭主をはやく起してくだつし。手のびになつてはわりい」出目「ヲイ、さア／＼アバ公」ト、みな／＼奥の二階へ行く。左次郎はじめ何かそは／＼する様子に、母はまた／＼泣聲いだし、眼七吞七をさへ、母「ヘン皆さんが、なんぼ氣やすめをいつても、モウはやあの野郎は、こつちもんぢァねへ。サァなぜおれが手を二人で引放したのだ。左次郎さん、一體今日はおまへさんにおかし申した野郎でござりますから、おまへもかゝり合はのがれますまいから」左次「ナニサおツかァ、其樣にあんじる程の事はねへ。今に爰へつれて來るから、落付いて居なせへ。どうしてまた吞七や眼七を其樣にハ、、、、マアマア今にみんなわかる事だ」ト、奥へ行き、皆々と一同にたのめば、次郎兵衛もめいわくながら是非なく受込み、次郎兵衛「サアそんならおめへがたも、四五人わしと一所においでなせへ」左次「そりやァ有難へ。サア／＼ちつとも早いがいゝ」ト、みな／＼見世へ出て、左次「ヲイおつかァ、今むけへに行つて連れてくるから、モウ其やうに氣をもんで案じ

たのまれて引取にいつた事も、いくらも有りやすけれど、此一件はどうもナア八、あんまり人は集つてゐやすし、アレ見や七、錢の出ねへもんだと思つて、すてきに見てゐやアがるぜ。あれだからねモシ、わつちらアどうも此仲人にやア、どうもナア七、外聞不宜やうでナア六」六「さうさなア、ついぞまアあんなものを」若助「べらんめへ市に張形を賣アしめへし、あんなもんだのこんなもんだのと、ヘンわからねへ事をいふなエ」六「なんのべらんめへ、てめへこそわからねへことを言はア、人が集つてゐるから、行きにくいといふから、むねッくそが惡いのだア。おいらア弱へけれども、相手は大勢ほどがいゝ」若助「ヤイ〳〵、是へつまらねことをいふなへ。モシ斷うしやせう。早く金がうちへ行つて、親父をたのみませう。こんなことアどうも、若へものはどうもそれ、なんだかいやがります」七「ちげへねへあれ見や、あすこの舟に、お鶴やお琴も見てゐらア。外聞不宜〳〵。どうしてあすこへ出られるものか」ト、とてもかくり合ふ氣色なければ、左次郎はじめ皆々も心いらだち、左次「なるほどおめへがたも氣がなからう。かうしやせう、ちつとも早く住吉へいつて、次郎さんをたのみやせう」みな〳〵「それがよう御座りやす。サア〳〵、ヲイだれでも櫓を押しやな、早くしろエ〳〵」ト、是より若い衆二人櫓をおして神田川へ引返し、住吉屋の棧橋を上るを見て内より、眼七「そりや〳〵おばさん歸つてきた。ヲイ卒公はどうした、早くこゝへ來て、かゝさんに顏を見せてくんねへ。おらアモウ責められぬい

ヘン爰から見ると松の木へ冬瓜がなつて居るやうだ」左次「ちげへねへおれも裸になる事に、ツイ氣がつかなんだ」野呂「しかし塗らねへはうが綺麗だらうヨ。塗つた所が難船物のころ柿か、駄菓子屋の牛皮だらう」圖武「汗をかいた二の腕は、丸揚のお薩とも見えよう」アバ「はぎの白きを見ると、仙人が落ちるから、はぎの黒きを見たら、川童が天昇でもしねへければいゝが」およぎ人の若イ衆「モシむだつ口アいゝが、あゝしてゐたら、橋番から出てつかめへられるだらう。早く飛込めばいゝネエ」左次「左様サばか〳〵しい。何をして」ト、言葉もいまだ終らぬに、ひらりと手摺ををどりこえ、ポンと飛びこむ橋杭の、間かずも多き其中に、いつもかはらぬ間のわるさ。うろ〳〵舟が大間より、何心なく乗出す。途端にどうと胴の間に、積みかさねたる瓜西瓜の上へどつさり異形の人物落ちて、そのまゝ倒れる。商人みな〳〵仰天し、おなじく尻居にどつさりと顔見合せてゐたりしが、あたりの舟にもたちさわぎ、そりや身投ぢやといふよりも、われも〳〵と漕寄せる。橋の上には口々に、「のろまやアイ」「とんちきやアイ」トどつと一度にわらふ聲、又踏みちらしたる水菓子の、潮にならうて流れるにやう〳〵と心付き、商「ヤレ船助ソレ西瓜を早くかきよせろ」ト、兼て心得あるものにや、手許にありしもやひ棹を水下へなげいれる。棹は橋間によこたはり、流れかゝりし瓜西瓜、しばらく是にためらふ内、大半集めひろひとる。今一人は卒八が大の字なりに倒れゐる顔へ、さそくに川水を吹きかけ〳〵、商「ヲヽイ女ち、ヤア〳〵此女アきんた、ヲヽ〳〵毛だらけなからだ。コリヤア何だらう。コレ瓜吉や、ヲイ船助もはやく來て見てくれ」ト、うろたへる。また近邊にもやひし舟もみな集りて見物する。最前より左次郎はすぐに漕付け引取りたく思へども、知らぬ顔にては事むづかし、幸たのみし所の人々、彼のあらしたる商人舟に、わけをつけるに便よしと、右の譯をたのめども、若助「おめへさん方のおたのみだがネ、私等アさういつちやアをかしいけれど、いれんな馬鹿もして歩行いて、人の世話厄介にもなつたり、又およばずながら人のことも、ナア金本たうにコ、そつ首が半分かけて、半死半生になつたもんでも、

びこんだは、うぬがおかげでかゝりッ子をしなじねへ死をさせたゾ。何でもうぬが解死人だ。ホヲイ〳〵。サア卒八をいかして返せ」眼七「ムヽヨ、いかして返すから、まア柳橋まであゆびなせへ。ちつとも早く引上げて、水でもはかせよう」此言葉にすこしは母が氣もゆるみ、げにもと思ひし様子にて、母「ムヽそんなら早く舟をかりて尋ねよう。まだ間に合はうかね」眼七「合ふとも、人水中に死して廿四時が内は蘇生すと、論語に出てゐるはサ」ト、眼七は苦しきまぎれの出たらめに、だまし〳〵橋の袂の方へつれて行く。又最前卒八が橋より飛込みし時は、そりや身投といふよりも、われも〳〵と川中をのぞきみてどつといちどに大わらひ、混雜のうちにも眼七は、卒八が趣向すつぱりいつたと心でわらひ、はやく母をこかげへ引廻し、くはしく話し聞せんとのみおもひ居て、母に川中を見せ、龍宮玉取のまなびを見せなば、母も安堵すべきに、ひたすら見せてはあしきやうに思ひしは、ふつてわいたる母の邪魔もの出來しゆゑ、うろたへてのみ居たると見えたり。見物の人川をのぞき、「ワアイぼくねんじんヤアイ」「のろまヤアイ」「まぬけヤアイハヽヽハヽヽヽ」それはさておき舟手の人は、かねて用意の家根舟に、たのみし游の人々へ魚盡しをかむらせて、橋間に近く舟こぎ寄せ、橋の上を見上れば、何かはしらず人集り、混雜をする其中より、手揩へのぼる人物は、まがふかたなき卒八が丈なる髪をふりみだし、今ぞ川へ飛入る氣色、そりやこそ相圖と身がまへして、待てども〳〵卒八が、飛入もせず手間どれば、期にのぞみ氣おくれせしにや、合點ゆかずと、左次「コウなぜあんな眞似をして居るだらう」アバ「さうさ手間どつて居るうち、化があらはれちやアつまらねへもんだ」出目「左次さんおめへまた、手足やからだも塗つてやればよかつた。アレ見ねへ、首計り眞白で、惣身は栗色だせ。

前のやうに、やかましくいはれては、わたしも此世に生きて居るかひがねへから、私アもうかくごを極めた。おめへは隨分達者で、たんと小言をいつて居なさい。モウおさらばだよ。南無あみだぶつ〳〵」ト、いひさままづはだかになり欄干へのぼれば、母はうろたへ呑七が手をふりはなし、卒八が足へしがみ付き、母「ヤアコレ、卒八よ氣がちがつたか、あんまり短氣だ。これさ危ねへはヨウ。ヤア呑七さん衣物はまア、うつちやツて置いて、是サ早く、エヽ眼七さんや。エヽおめへ方アナゼ見てゐるのだ。ヤアイ、人ごろ。エヽ、たすけぶ。エヽ何でもいゝから、早く來てとめてくれねへのか」ト、泣聲を出してあせる故、人立のうちより止めさうなる人見える故、眼七はそばへ行き、眼七「コレおつかア、まアおれがのみこんで居るから、手をはなしなせへ」母「エヽおめへがいくら呑込んでも、此奴が飛込んではしやうがねへ。なんでもまア引下してくんなせへよ」眼七「イヽヤサ、おれが飛込んでゐるから大丈夫」母「おめへは飛込むともどうともかつてにしなせへ」ト、狂氣のごとく泣きわめく。酒狂とはいひながら母のなげきに氣もたゆまず、卒八は欄干へ抱付き、足をふりはなさんと互にあらそひはてしなく、他人の手出ありては邪魔と、眼七呑七兩人にて母の手をむたいに引離せば、しめたと手すりへよぢのぼり、なんなく川へ飛込めば、母は身も世もあらけなく眼七にしがみ付き、ワッと一聲泣出し、物ぐるはしく眼七をこづき廻しにしりする、物いはんにも聲いでず。母「ナヽなぜおれがてて手を、ウヽうぬが敵だ〳〵」眼七はもてあまし、呑七をたづぬれども、呑七は卒八が飛込むを見ると爰に用なしと、ぬぎ捨てし衣類を用意の風呂敷へぐる〳〵と包み、人立にまぎれ舟宿までかへりける。それとは知らず、眼七「ヲイ呑公〳〵、どこに居る。まア來てくれねへか。こまりきるは」母の耳へ口をつけ、「これかゝさん、案じなさんな。ほんとうに身を投げはしねへヨ。是が今日の茶番だよ」母「エヽ小甘口な子供をだますやうな事、現在今爰から飛

と、マアどうでもいゝから爰をはなしなせへヨ」母「イヽヤはなさねへ。何でも左次郎さんの胸を聞いて了簡が有る」ト金剛力に卒八が腕首を押へて放さねば、さすがの卒八も持てあまし、眼七が呑七を押ゑるやうす。さいぜんよりかくれ居たりし兩人も、見物黒山の如く集りしかば、もはや化の皮のあらはれぬうち、時分はよしと顔を出せば、卒八「コウ〳〵おへねへ〳〵、呑七さん早く來て、どうぞしておくれよ」呑七「ヲヤおッかア、おめへどけへ行きなさつたのだ。そしてまアどういふ譯か知らねへが、この子もわかい身そらで、此樣に人立のする中に居るもつらからうから、まづ私にあづけて、手を放しなせへ。第一外聞がわりいわな」母「イヽエサ、まア聞いておくんなせへ。さつき左次郎さんがお頼みなさるから、親父どんにもいゝやうに取なしをいつて置いてネ、親は親と思つて、どうぞいゝ上へもよくさせてへから、此暑いのにゑつちらおつちら、ちつとも手助にならうと思つて、出て來ましたのに、ほんに〳〵つやもなく歸れと申しますのサ。それもマアよう御座いやすけれど、ほんにほんに三千みろく、わたしに苦勞ばかりさせておいて、兎角わたしを邪魔にいたしやす。よくまア考へてごらうじやし。年をとつて邪魔にされようとつて、艱難苦勞して育ッてはおきません。ほんに〳〵あんまりといへばほんに〳〵、腹がたつてほんに〳〵」眼七「尤もだよ〳〵。それだがノ、おつかア。今呑公もいふ通り、人立がするので外聞がわりいから、まア〳〵私等にあづけなせへ」ト、やう〳〵引分け、母をおさへて卒八に目くばせすれば、卒八も心得、とても母をはぶきては面倒と此人立をさいはひと、そろ〳〵帶などゆるめ身づくろひし、兩人に目くばせして、卒八「コウかゝさんお

お開帳へも參りたし。又跡でやうすを聞けば、今日の茶番は外でするのださうだから、何も人さまの家へ行くではなし。しらぬ顏で見物しようと思つて、さつきから橋の袂にまつて居たのよ」卒八「エヽお前もつまらねへもんだ。なんの見ずともいゝ事だ。こんな事に親が付いて歩行いては、友達の前へ外聞がわりいわな。お開帳へめへッて、早く歸へんなせへ」母「エヽ引、よウく親を邪魔にする。宜いは、見て居ても」卒八「イヤサよくねへよ」母「己ばちの當つた野郎だ。とかくおれをば目の敵に」卒八「エヽ引じれつてへ。どうでもいゝから歸んなせへよ」母「うんにや歸るめへ。われが見せば、左次郎さんに言込んで見せて貰うは。それもならぬと言はつしやれば、われを引ずつて歸る。おれが子をおれが連れてけへるに、誰がなんといふものか。サア左次郎さんはどこにござる。一所にあゆべ」ト、卒八が手を押へてひつぱれば、たゞさへ物見高き往來の人、何かあやしき女と婆々と爭ひ居るゆゑ、さま〴〵に評して、立留りて見物する。呑七眼七の兩人もさいぜんより見物にまじり、卒八がくるしむを見てをかしさをこらへゐる。卒八「コウかゝさん、おめへもはや、むく犬の尻尾、宿なしの髮の毛、菅糸のこぐらかりともなんとも、名の付けようのねへ、わからねへもんだ。早い事をいつて聞せようが、年寄は邪魔になるから歸んなせへよ」母「なんだ年寄は邪魔になると、へン是此廣い兩國でナ」卒八「住む所さへ長橋のが、聞いてあきれらア」母「おれが五人や十人居たとつて、どこに邪魔になるものか。夫とも兩國中の年寄を狩つて仕舞ふか」卒八「エヽ引どういへばかういふ

まで、さうふざけてはいけねへ。もうまじめでやらッしナ」卒「ヲヤ〳〵、又呑さんがおしかりだヨ。そんなら眼さん、おまはんと」眼七「アヽ〳〵御生だ〳〵をがむ〳〵。おらアすぐに爰から出奔だ」呑「ちげへね〳〵。おいらも跡で連中をはぶかれても仕方がねへ。ソレ見さつし。ちらちら人立がするは」卒「そんなら私ばかり」呑「エヽわたいも何もいらねへ。はやく先へ行かッしといふのに」ト、両人はまじめになつてやう〳〵追立て、跡より卒八が歩行く姿を見ながら、呑七「なんと眼公、今度の大役といふは足下とおれだぜ。この氣狂の守を、誰が仕人があるものか、馬鹿々々しい」眼七「ちげへねへ。おいらア今、住吉屋で呑んだのは、からりと醒めてしまつたが、卒八めはだん〳〵醉が出ると見えて、わるくふざけやアがる」呑七「イヤ醉もしさうなもんだ。今日は取わけ食ッたよ。左次さんにとめられてから、又内證で茶碗でグイ〳〵ひつかけたヨ」眼七「しかししらふで、アノざまをして両國までくれば座敷牢ものだハヽヽ」呑七「アレ〳〵あのざまを見さつし。ぐにや〳〵とよつぽど氣取ッて歩きやアがる。いま〳〵しいべらぼうだ」ト、二人は手に汗をにぎりつめ、遠見に跡より付いてゆく。卒八はやがて橋へさしかゝり、中頃まで渡りしが、爰ぞよきほどなるらんと立留り、跡を振返り二人が來るを待合す。眼七呑七は卒八がわが身を見るがくるしき故、あとへ跡へと引下り、いまだ橋の袂までも來らず、影だに見えねばしばし欄干へもたれ、川中を詠居る。うしろより袖を引いて、「コレナゼ立つて居るのだ。左次郎さんや皆はどうした。手めへ又醉過ぎで、はぐれはしねへか」ト、いふに後をふりかへり、たれかと見れば母ゆゑびつくりして、卒八「かゝさんおめへどこへ行くのだ」母はにこにこして 母「うんにやよ。おれも今日はお天氣はよし、

花暦八笑人　三編追加下

何人の口すさみにや、
　兩國へ夏の夕暮來て見れば入相の鐘に花ぞ咲きけり

とは、こじ付ながらもむべなるや。晝夜をわかたぬ種々の見物茶見世諸商人、あげつらふにいとまはあらねど、お振舞申す枇杷葉湯は、陰徳者の婦人耳をいため、七味唐辛子の匕は五齡湯の調合に替り、わづか四文の白玉水も、ギヤマンの鉢にいれて、生醉客のよろめくに、一しほひやつこく、涼しく見せる水からくりは、上晒の心太、突出茶屋に翻る大花火のビラは、娘とともに客をまねき、吹けよ川風上れよ簾、中の小唄や聲色淨瑠璃、今を盛りの涼時、折こそよけれと八笑人、船宿にて手筈をさゞめ、彼の卒八はおしつよくも、女の形にさまをかへ、姿にあらぬ柳橋を、虛無僧下駄に踏みならし、左褄のちよこちよこ歩行。さすがの呑七眼七も、見るにしのびずおのづから、跡へ〳〵と引下れば、卒八は立ちもどり呑七が手をとり、卒八「呑七さん、お前様寔におそい足だヨ。さア一所においでと申すに」呑七はちよぶみあがり小聲にて、呑七「コレサ卒公、爰へ來て

景色、辻打にて
道具とまる。

産におめし下されまし。跡はすぐさま二本綱、一本竹の輕業ぢやア」アバ「ハヽヽヽ齒のむき出し鹽梅といひ、何一つ不足のねへ猿芝居だ」出目「此氣ちげへを連れて歩行くのは、たれもいやがる筈だ」左次「さうよ。すこし内端にでもすればいゝが、あんまり外端過ぎるからこまりきるぞ。寔にはや世話のやけたことだ。どうも仕方がねへ。二度手間だけれど、船宿でまた塗直さうから、マア面をひつぶいて仕舞ツし。それとも獨り先へ行くか」卒「どうしてマア、私は、イヤ、ついぞ供を連れずに他所へ」左次「エヽ胸がわるくならア、いめへましい。ヲイ眼公おだるさん所へでも行つて、すき油をちつと貰つて來て、此面をひつぶいてやつてくだツし。そしてモウ片日蔭がついたから、早く出かけようぜ。おらア二三人で先へいつて、船宿で游ぎ人足を拵へて置くから、みんながずるけなしに早く來さつしョ」アバ、野呂、圖武、出目「おいらも船手の人足だから、左次さんといつしよに出かけよう」、左次「それがいゝ〳〵」ト、そこ〳〵に支度とゝのへ、左次表へ出る。左次郎は立止り左次「眼公跡の〆りをしつかりして出さつしョ」眼「のみこんだ。こゝかまはずと」アバ「がつてんだと尻をはしよれば」呑「トンチキチン〳〵〳〵チン引、トンチキ、チン〳〵〳〵チンチン、トンチキ〳〵〳〵、ドジ〳〵〳〵〳〵〳〵」ト、口三味線の三重に、うかれて五人は出て行く。あと三人もそれ〳〵に支度とゝのへ、眼七は勝手おぼえし入口へ戸をひきたて〆りをし、かねて約せし神田川の、舟宿さして出て行く。これより兩國までのくさ〳〵は相もかはらぬごたつき故、御見物のあくびを恐れ、軸をみじかく切りあげて、まはらぬ筆をブン廻しへはめてきりゝとひんまはし、すぐに兩國廣小路の

んの仰山な、下地もなにもいるものか。髷をおッつぶして、かづらをかけさつし。合引さへしつかり〆めればいゝは。どうせぐる〳〵と結んで置くから、ちよいと米屋冠りでもするだらう。サア〳〵天窓を爰へもつて來さつし。おッぱめてやらう」卒「ヘン床山の方へ呼付けられる立お山もねへもんだ。あんまり下直に取あつかやアがる、いま〳〵しい」これより皆々惣掛にて、衣裳かづらをつけ、左次「サアサア出來た〳〵。そこで後見をつれて、さきへ出かけさつし。みんな一所にぞろ〳〵出てはわりい。そして船宿で待合せるがいゝ」卒「チット承知々々。サア眼公呑公、出かけよう〳〵」呑「ムヽ、しかしおらア先へいつての後見は勤めようが、途中を一所に行く事はまつぴらだ。眼公獨りで澤山だらう」眼七「澤山でもあらうが、おれも一所に歩行く事はなんぎだ」卒「おまはんがた、なんぼ私等が樣なもんだとつて、其樣にいやがつて呉れさつしやる事ア、あらッしやりさうもなからツしやりさうなもんだ。エヽ引モウ、いつそ腹が立つ。ヨウすかねへ」眼七「エヽ、桑原々々、萬歲樂々々々。己アモウ〳〵、身がちゞむ程不好なくなつてならねへのに、おまけにこんなわる身や何かされて、たちきれるものか」呑「ちげへねへ〳〵。途中でどんな難儀をしやうもしれねへ。どうぞひとり先へいつてくだせへ」卒「コレまうし呑七さん、爰からひとり參れとは、浮るり「それヱがアをとヲこヲのヲヽ」圖武六「猿之助に花やると思しめし、番附一枚づつお土

でも、今日は左次さんが、まじめで美味く受けてくれたからたすかつたぜ」左次「ヘン親といふものは、べらぼうなものだナ。この面が菊之丞に見えるといつたら、眞受にしてにこ〳〵して嬉しがつたぜ。夫はよかつたが、お袋もふしぎとは思つたと見えて、見屆けたくなつたかして、御一所にめへりたいには、ちとおそれたテ」卒「イヤモウ今日はおめへのまじめでたすかつた。南無俗名左次郎大明神さま〳〵」圖武「コウ〳〵そりやアいゝが、お袋は美味くはかつても、親父が承知しねへとでもいつて、又迎へでも來るといけねへから、ちつとも早く發足する工面にしようではねへか」アバ「ちげへねへ〳〵、こんな南瓜でも今日ばかりは立お山といふもんだから、今ぬけられては芝居が出來ねへ」野呂「ほんにさうだ〳〵。サア〳〵ちつとも早く出かけよう〳〵」卒「ムヽ出かけようはいゝが、この面で出かけようか」香「知れた事だナゼ」卒「先へいつてはいゝが、爰から兩國迄の道中が難澁だテ」香「何のそんなひるんだ事でいけるものか。」「そして左次さんが大骨を折つて塗上げたものを、お袋に見せた計りでおとす事はねへ。サア〳〵著物を著替へて早く出さつし」卒「何サひるみはしねへけれど、なんだか近所が。チヨツ、どうするものか、乘掛ツた船だ。出かけよう〳〵。ヲイ野呂公、衣裳を爰へ下ツし。イヤまづ床山が先だ。ヲイアバ公、ちよつと下地に結直してくんねへ」アバ「な

へ、くるしいめに逢つた」ト、眼七を見て、「此野郎覺えてゐろ」眼七「ナゼ〳〵」卒八「ナゼ〳〵。ヘン氣障な潮來ぢやァあるめへし」眼七「いんにやヨ、何を覺えてゐるのだ」卒「エヽとぼけやァがるナ。此面でお袋に逢せてくるしませやァがつた、むね氣な野郎だ」眼七「なにおれが此面をごらうじましと、いひはしめへし」卒「さうこそいはねへが、爰へ呼出してくれる事はねへは」眼七「それだとつて、奥に居ますが逢はれませんといはれるものか」卒八「それだから留守だと言つてくれろと、頼んだではねへか」眼七「さういつたノサ。今日は留守でござりますと言つたら、おふくろのいふには、留守でござりますから、尋に歩行きますツ。こりやァ理屈だから仕方がねへはサ」卒八「エヽ居ねへといつてくれと頼んだのだは」眼七「さうもいつたノサ。さういつたら、居ねへから尋ねて歩行きますといふから」卒「エヽ爰には居ねへといふ事だは。こじれツてへ」左次「ハヽヽヽ、もういゝ〳〵。いつ迄わからねへ事をいつてゐるのだ。おれが折角丹精して拵へた顏で、其樣に理屈をいふと、容顏がくづれて愛敬がおちてわりい。マア〳〵奥へ歩行ばつし」ト、三人は奥へ引込みながら、眼七「ヘン容顏にしてはまづいな。此容顏のくづれるよりは、冬瓜の葛煮の方が氣がきいてゐらァ」卒「いゝヨ、うつちやッて置かッし」野呂「イヤさすが厚皮鐵面皮と呼れたる卒八も、今日は大ひるみの命だナ」卒「どうも親といふひようきんものには叶はねへ。それ

母「ヘヱ丶晝間なら、どうぞサ久しぶりで、わたくしもサ、見物いたしたいものだが、御一所にまゐつてサ、お座敷の隅にても、おじやまにならぬ所で」卒「ヱ丶かゝさんなんだナ、年寄のくせに。どうして一所にいかれるものか」母「茶番に馳付けるのではあるまいし。年寄だとつて、一所にいかれぬといふがあるものか」卒「イヤサさうだけれど、若いもののなかへ婆アさまが獨りまじッて見つとむねへからヨ」母「なんだ見ッとむねへ、其若いものには誰がして呉れたのだ。ヱ丶引きいた風ナ。うぬひとりで育ッたやうに」左次「何サ、御嬶ア、さう思つてはわりい。何もおめへを邪魔にする譯でもあるめへが、マア考へて見なせへ。成程おめへが向に見て居るとおもつたら、狂言も仕惡くからうヨ。ことに女方といふもんだから、何か氣はづかしい樣でわりいのサ」ト、小聲になり「斯うしなせへ、二三日の内に、わたしが所に月並の茶番が有るから、其時そつと知らせてあげるから、卒公の氣のつかねへやうに、來て見物しなせへ。そりやアほんによ。おめへに見せてへぜ」母「ハ丶丶成程それもさうでござりますネ。左樣ならば私はもう參じませう」左次「マア〱お茶でも入れやせう」母「イヱ〱どういたしまして、モウ〱おかまひなされますな。是は大におやかましう御座りました」眼七「マアお婆さんいゝではねへかへ」母「ハイ〱どなたも是においでなさいまし。ヘイ左樣なら」ト、母はやう〱歸り行く。卒「ヤレ〱近年にね

對句にならねへ」母「もう〳〵口から先へ產れたさうで」卒「おめへ產む時氣がつかなんだか」母「エヽやかましいわへ。いゝ年をしたものを、小馬鹿廻しにして、ほんに〳〵もう〳〵」

ト、何かわけもなきおし合ひはてしなく、殊にいひつのり卒八を連行かれては、折角仕組みし茶番も今日の間に合はずと思ひ、左次郎はまじめな顏にて奥より出て、「ヲヤおつかアよくお出なすつた。時に卒公此頃またづるけかへ、困つたもんだ。さうとは知ず、今日はわたしが餘所へ茶番があつて行きやす所が、相手に女形が入用だゆゑ、だれを頼まうかと考へて見るに、おめへも知つての通り、わたしが內へ來る男に女形を勤めようといふ首が壹ツもねへから、こまりきつて居たとこへ、久しぶりで夕ちよいとこつちへ卒公が見えたから、取敢へず頼みやしたが、さしたる用事でもなくば、親父さんにいゝように言つて置いて、わたしに今日一日かしてくんなさらねへかへ」母「エヽ左樣で御座りますかへ。實はこんな奴でござりますから、親父もあてには致しませんけれど、あんまり每日〳〵夜泊日泊に、宿へも寄付きませんと、年寄は思ひ過しをいたして案じますから、ツイ尋步行もいたしますが、さういふ譯でお役に立ちます事が有るなら、お心置なくおつかひなさりまし。殊にあなたにさへ居りますれば、案じもいたしません」左次「左樣かへ、それはマヅありがてへ。マアこつちへお上んなせへナ」母「ハイ〳〵、何サおかまひなさりますな。フウ、それでは其狂言は今日でござりますかネ」左次「左樣サ」母「へイどこでござりますへ」左次「兩國邊サ」

いつて居るは。ほんに〳〵手前の事では、おれがいくら叱られるかしれねへぞ」眼七「それ見なせへ、おとつさんが、眞黒になつて居なさるのに、おめへが其通り眞白になつて居てはすまねへ理窟だ」卒八「又口を出しやアがる。うつちやッて置けヱ」母「何うつちやッて置けるものか、サア〳〵一所にあゆべ」卒「あゆべといつて、こんな面をして行かれるものか。マア先へ行きなせへ」母「イヤ〳〵なんでも一所にあゆべ。其面でも大事ねへ、親は人並に產付けて置いたのに、我がすきで外へも出られぬやうな顏にしたのだは。おれが知つた事か」卒「イヤサ、そんなつまらねへ事をいつたとつてはじまらねへワナ」母「何つまらねへ事があるものか。おれはちつとも曲つた事はいはぬ」眼七「ちげへねへ、おばさんのいひなさる事は理窟だ。それだによつて、夕も早く歸んなせへといつたのに」母「イエサ、もう〳〵人様のおつしやる事も親のいふ事も、ちつとでもきく奴では厶りませぬ。此間もマアお聞きなすつて下さりまし。わたくしの申し升には」卒「エヽもういゝわな」母「親父殿もだん〳〵とる年だによつて」卒「アヽ引、ひつッこい。マア先へ行きなせへといふのに」母「イヽワ。只噺だは」卒「ハアテ、ようごぜへさア」母「あれ御覽じまし、わたくしにはちつとも口はあかせません」卒「ハアテ、ようごぜへすといふのに」母「ヘンあの通り何を申しても風の耳へ、む」卒「チット間違ッた。風の耳なら、德利に口とこねへでは

面は相叶はぬとでもいはうか」卒八「是サ〳〵、無陀ッ口をきかずと、早くあそこへ行つてくだつし」眼七「ハヽヽ、そんなら物忌の方にしよう。どうも立派でいゝやうだ」ト、さん〴〵卒八に氣をもませ、おもての方へ出て、眼七「ハイおばさんお出なさいまし。だいぶお暑い事でござります」母「ハイ〳〵、イエわたくしどもの野郎殿がをりますなら、どうぞ」眼七「エヽ引、卒八さんかへ」ト、奥の方をむいて、「ヲイ卒八さん、おつかさんが何か御用が有るさうだ、一寸爰へ」卒八「エヽむね氣なやらうだ。サア大變だ。どうしようしようとつて、あゝいつて仕舞つてはモウ仕方がねへ、出てあはつせへナ」卒八「それだとつて此面が見せられるものかナ」眼七「なんの美しくなつた所を、見せてみさつし、大體よろこぶ事ではねへ」ト、押合つてゐるうち、また眼七、眼七「ヲイ卒八さん、おつかさんが待遠だ。モシこちらへお上んなさいまし」卒八「エヽ〳〵、大變な事計りぬかすは、成程どいつも〳〵むね氣なやつらだ。チヨッどうするものか仕方がねへ」ト、しぶ〳〵表座敷へ出て、眼七をにらみ付け、卒八「ヲイかゝさん何の用だエ」母「ハイ何もさしたる用事でもござりませぬが、夕で三四晩歸りませぬから、親父殿がやかましく申しますゆゑ、ちよつと内證で尋ねに出ましたが、あれは何をいたして居ります」眼七「何サおばさん、それが卒八さんだヨ」母「エ、「おやッかな、ほんに〳〵イヤあきれるは。其面はなんのざまだ、エヽ引小いやらしい。みたくでもねへ野郎だ。是親父殿は昨日から、眞黒になつて小言を

ボカさうか」圖武「イヤ〳〵左樣したら、やつぱり狂言の作りになるだらう」卒八「それでも路考なんぞは」左次「エヽ此男も、なんぞといふと路考々々といふが、さういふ根性だから氣が折れねへのだ。路考のひきべつすれば、第一こんな首は澤庵の押にしかならねへは。どうして首の通用がするものか」卒八「ヘン出る杭うたれるとは、よくいつたものだ。蔭で聞くとおれ獨り妙な面で、外の者は相應な面の樣に思はれるは。いまいましい」ト、いふ所へ表を明けて卒八が母、「ハイ御めんなさいまし。あなたに私どもの卒八は居りませんか」ト、いふ聲を聞いて、卒八「ヤア〳〵お袋が來た。大變々々。左次さんおめへいゝやうにいつて歸してくんねへ。はやく〳〵」左次「此男もいゝ樣にといつて、どうして己にしれるものか。自分の親の事だア、勝手をしつた樣に、挨拶さつせへナ」卒八「それだとつて、此面でどうしてあはれるものかナ」母「ハイお留守かネ」野呂「ハイ〳〵留守ではござりません今」母「左樣なら卒八が居りますならどうぞ一寸」卒八「眼公々々後生だ、ちよつと出てなんとでもいつて歸してくんねへ」眼七「そんならば晦日までともいつて置かうか」卒八「是サ、洒落所ではねへ一生懸命だ。をがむ〳〵」ト、卒八がしきりにあせり氣をもむを、皆皆わざとまぬけの挨拶をして苦しませる、眼七「ムヽそれでは居ねへとでもいはう。まんざら居りますが、遇はれませんとも言へめへ」卒八「ちげへねへ〳〵。はやく言つてくだつし」眼七「それとも譯あつて、一七日が間物忌の内は、たとへ親類たりとも對

面の事はいゝかげんに了簡してくだツし。どうも是までにしてやめられもせず、首をすげかへるもおつくう、どうも仕方がねへ。そばからさう口やかましくいはれると、氣が引けて舞臺がつとめにくい」呑七「ちげへねへ〳〵。是からちつとづつい所を見出して、ほめてやるべエ」
岡武「イヨ〳〵、ヤンヤ〳〵のお聲がたよりぢやア。是はカンカラ太鼓をかりて行かうか」卒八「いんにやョ、笑談ではねへ。たとへ濱の大夫だとつて、切幕を出るとはま〳〵、大明神、さま〳〵と譽められるから、ぐつと氣がひつたつて、狂言も格別よく出來るは。さういはずにそこへ出ると、ヲャ〳〵妙な面だ、ヤレ大層な反歯だのといはれて見ねへ。サアひるんで狂言がすつぱり出來る事ではねへ」出目「それでも路考は妙な面でも、反歯でもねへから、だれも云人はねへのだ」卒八「それは知れた事だが、マヅ道理が、サ」左次「イヽサ道理も、下駄もいらねへから、マアちつとだまらッし。口の端へ泡がはみだすから、塗にくゝッてならねへ。エヽ氣味のわりい。ナゼ人の手をなめるのだ」卒八「口の端へ泡が出たといふから、取りこまうと思つて。アヽ引、顏がくたびれきつた。ひと息つかせてくれねへか」左次「ムヽそんならマア一服のまつし、大てい此くらゐにして置かう。是で目尻の上へちよいと紅をいれると、ちつとは目尻が上るけれど、さうすると又、只の女のようでねへからわりい。しかし目の廻りはうッすらと

ウびつくりは御免だ。夕でこり〳〵した」左次「サア〳〵爰へ面をもつて來さつし。やつて見よう」卒八「ヲイちつとお待ち、鏡をひとつ」左次「なんの人に塗らせながら鏡がいるものか、早く來さつし」卒八「ヲイ〳〵、サアやつておくれ」ト、向合ひてゐる顔をつく〴〵と見て、左次「ア成程ハヤつまらねへ面だゾ。これでまた女形を思ひ付くといふはふかくだ。ばか〳〵しい」卒八「何の事だナ、今更そんな氣のひけた事をいつてくれる事はねへワナ。そして斯うそばでしげ〴〵見れば、路考だとつてちつとの荒は見えるだらう」出目「其サ、路考のあらぐらゐな所が、せめて一ケ所あれば安心だけれど、如何にしてもあんまり取得のねへ顔だゾ」卒八「ヘン顔に鳥居の有るのは辨天樣計りだア。マア〳〵たいがいにけなして置いて、先早く塗つて見てくんねへ。これでも帽子の下〆でぐつと〆めると美しくなるよ」左次「イヤサ手前計りしつた樣に、むしやうに下〆々々といふけれど、下〆で〆めるひには、紫帽子をかけにやアならねへ。さうすると、ヘイ歌右衛門のお笑草とは見えるが、唯の女とは見えねへゼ」卒八「ほんにさうだッケ、それでは舞臺の作になるノ」野呂「なんの舞臺の作りも大笑だ。むてへな面をして居ながら、いけッ小しやくな事をいはねへで、どうでもいゝ樣に拵へてもらはッし。とても目がつり上ッたとつて、つり下ッたとつて、何ツぱちの面が出來るものか」圖武「やつぱり卒八の面にしかなるめへノ」卒八「アヽもう〳〵、

花暦 八笑人 三編追加上

古き漢書にも、書は言葉を不盡、言葉は意を不盡とやらん。況や空氣の八笑人、心の不足趣向を設け、月花雪の苦世界を、そげたつもりでもろ人を、一番はめて樂まんと、人をのろはゞ穴二つ、兩國川の涼みのもよほし、彼の頭取の左次郎が、池の端の隱宅にて、宵に仕組みし手筈の通り、衣裳かづらも借集め、其ほか調度そろひしかば」左次「サアたいがい是でよからうが」アバ太郎「むづかしいのは首ばかりだ。なんと白上りの浴衣に、黑繻子の帶へ、此首をすげてもうつらうか」左次「さればサ、そこはちつとおぼつかねへもんだテ」卒八「何サずゐぶんおぼつくよ。何にしろ一ツやつて見てくんねへ。ついぞねへ事、夕は白粉が乘りかねたようだツケ」呑七「しれた事よ。ついぞ有つた事もなくッて、ヘン賽の河原四三ぼさつではおそれるぜ」卒八「ヲヤさういふけれど春中呑公が所の茶番に、おかるをした時は、すつぱり仙女香がのつたぜ」野呂松「ムムそりやアちげへねへ。白粉が乘つたに、齒が反つているから、見物がのつたりそつたりして笑つたツケ」卒八「ヘンそねめ〳〵。今にすつかりこしらへて見せたら、ほんの事だが」眼七「モ

ふじつくばかざす扇もふた國の橋にたゝめる風の涼しさ

琴通舎英賀

三編追加序

稚女の唄に曰く、兩國橋長い〳〵御馬でやろ歟、お駕籠の中より一寸覗のからくりのかたはらに、紙代板木價と呼ぶ者あり。是何柱に張置く花暦追加の三編閏あつて十三月の御調法、年徳明の方に向ひて涼みの舟の乘始よしと、たひらにはしる艜の舟足も、水面滔々として、瀧亭鯉丈ぬしの滑稽爰に百艘のふなばたをつらねたるも、誠に大江都の繁榮、其名高雄丸の屋形の邊には、花火の光もみぢを照し、吉野屋が屋根舟には、櫻の紋付きたる嬖妓に花あり、拳酒の一調子高くはりあげたる淺間ヶ嶽の投節にて、イヨ柳橋々々の聲諸共に、船宿の妻舟か〳〵と呼びかくる川端歩行野幇間の岡釣は、うろ〳〵舟の火かげより、客を見つけて飛乘の二人船頭、脇櫓もおして、するさんの立賣と古き地口も折にふれては、一ツめづらし、二ツ目に棹竪川のもやひ綱、解いて流して涼風を、橋間に繋ぐ首尾の松、陰芝居の聲色は、三座も爰に浮ぶかと、當りは舟の拍子幕、しばらく時をうつしたる、水鏡のめりやすにて、八笑人もせうらんあれと、ホヽ敬白、

ト扇をかざして橋上にたゞずみて

アうらめしや、トロ〱〱」野呂「卒八だ〱。エ、びつくりさせたなんだ。マア其面ア」眼七はやうやう起上り。眼七「コウわりい洒落だ。おらア實に氣がとほくなつた。ばか〱しい」左次「さうよ。おいらもまじめで驚いた。わりい洒落だ。そして智惠のねへ、ワアとは何の事だ、ふけいきな」卒「何サおどす氣ではけしてねへが、實はおれもチト安心ならねへから、さつきおだるさんの所へいつて、化粧道具をかりて來て、ちよつトやつて見た所だが、隨分うつくしかろう」左次「大きなべらぼうだぞ。駄菓子屋の牛皮のような面が、どこへ持出されるものか。翌日はおれが塗つてやるから、うつちやつて置かッせへ」眼七「成程面を拵へたらびつくりするだらう〱ト言つたがちげへねへ。がうせへびつくりしたぜ、まじめに目を廻しそこなつたア。いま〱しい」ト、眼七が小言をいふもをかしく、はては皆々大笑ひ、あすの手習を約しつゝやがてふしどに入りにける。

はや夏の夜の明けやすく、早朝より支度をとゝのへ、今夜は一番卒八が思ふ笑壺に入相頃、ふねと岡との兩國川、人の山なす滑稽笑話、草稿のこらず出來あれど、丁數延々故三編の追加一冊引續き賣り出し申候。

迄こじつけるのだ。おらアモウ寐る〳〵、イヤどつこいナ」ト、蚊帳へはいり、「ヤレ〳〵裾も廣げねへである。いけぞんざいな釣ざまだ。サア皆がはいらねへか。蚊を入れられては恐れるから、おれが木戸番をしてやらう」のろ「うつちやつて置きねへ。はじめて蚊屋へ這入りはしめへし」左次「さういふけれど、おらが内のは萠黃の窓ではねへ、無垢の萠黃だぜ」のろ「ヘンもえぎの窓というがあるものか、紙帳馬鹿にした」左次「サア〳〵笑談ではねへ、キリ〳〵這入ねへか。じれつてへ」のろ「ヲイ〳〵サア眼公、一所に來さつし。モウ三度目の知らせが鳴つたから、小便なら樂屋口へ早く出さつし」左次「エヽむだッ口より、蚊屋が帶へひつかゝつて居るは、いくぢのねへ。卒八はどうした。天昇したかの」眼七「ナアニ今方二疊へ這入つたッケ」左次「何小座敷に居る。そりやア又何か搜ッ事をしてゐるだらう。いめへましいべらぼうだ。眼公見て來さつし」眼七「ヲイ卒公來て寐ねへか。ヲイ〳〵卒公〳〵。ヲヤ今小便して來て、あすこへはいつた筈だが、蚊の喰ふのに寐てもゐるめへ」左次「何寐るものか、又何かいたづらをして居やアがるだらう。あすこを取ちらされてはおそれる。眼公いつて引きずりだして來さつし」眼七「アヽ引世話のやけた、寐るにも直すなほには寐やアがらねへ」ト、小言をいひながら彼小座敷の口をあける、とたんに内より眞白なくびを出し、卒「ワア」眼「キヤア」ト、うしろへたふれる音何事にやと、左次郎野呂松蚊帳の内より飛出し、かけくるふたりが鼻のさきへ障子のかげより、卒「ワア」ト二人も同じくぎよつとして、兩人「エヽ引誰だ〳〵」卒「ア

の替りよつぽど早く起きねへではならねへ。今夜は呑散として置かう」アバ「サアみんな二階へ來さつし。左次」コウ／＼さう皆天升されてはおれが淋しい。二三人下の蚊屋へも寐てくだつし。そして翌日の朝は酒法度として、朝食は廣小路へ申付けやう。サア／＼下住居の人足手合、蚊屋を引張てくだッし。ヲヤ卒公はどこへ行つた」眼七「小便にでもいつたらう。左次「べらぼうナ内に小便所の有るのに。サアお床をのべよう」ト、打寄り蚊屋をつり寐じたくもでき、左次「卒八はどうしたらう。長へ小便だ、牛のやうだぜ」眼七「小便は牛だが」左次「ヲツト馬だトいふのか。おれが種を蒔いて、そつちに酒落られてたまるものか」ト、いふ所へ、卒八裏口より入來る。のろ「どけへいつたのダ」卒「小便に出たらあんまりいゝ風が來るから涼んでゐたのよ」左次「ナゼまた外へたれるのだ。地犬といふものは仕方のねへもんだ」卒「小便は外へたれねへと長くなるから」左次「ヲヤナゼ」卒「内の小便十八町といふから」左次「チヨツいめへましい不意を打れた。サア／＼寐るぞ寐るぞ。二階ではモウいきついたト見えて、でへぶしづかになつた」のろ「ム、二階が靜になつたら、下では酒をはじめて、モウ肴がねへから、たゞ呑むとしようか」左次「ヤレ／＼大骨を折つて、たゞ飲む迄こじつけたナ。モウそれからすれば狐拳だ」卒「イヤイヤ是から又呑んだら、あした天窓が病めて鼓がする。ア、初音エ／＼トいふだらうぜ」左次「エ、いけひつゝこい。どこ

らのもんちやくも、てへげへにおつゝけて置くがいゝ、なにも卒公にかぎつた事でもねへ。おれをのけて見ると、跡に首らしいものは一ッもねへはサ。さうして見るとみけんじやくの花火のやうに、首の共喰だは」卒「ヘン何もおめへの首を一ッのけるわけもねへ。おなじ陣笠首の事だから、一所にじつけんさせるがいゝ」出目「それにしてはもうちつと大きいもので、二三盃やらかして二階へいつて御寐ならう。眼公勝手をしつたやうに、ちよつと蚊屋をひつぱつて置いてくだッし」眼七「蚊屋は毎年四月上旬より八月下旬まで、たいら一めん晝夜つりばなしでおふるまひ申す」出目「ヤレ〳〵それでは、サゾ蚊がはへつて居るだらう」眼七「アヽもうよつぽど追込んだらう。あすの晩あたりからは、モウ外へ寐る方が樂だらう」左次「是さ寐るなら、みんながはやく寐て、あしたは早く起きねへと、買物が間に合はねへぜ。そこで相手はいよ〳〵眼公か」眼七「どうも仕方がねへ。見こまれたが不運だ、やらかすべヱ。しかし獨りでは何分たちきれさうもねへ。呑公もがまんしてやつてくだッし」呑七「チヨッ、とんだ目に合ふもんだ。きやうに生れるト、何事によらず一鼻がけに、憑まれるからおそれるテ。そんならマヅ太神樂のお龜が濟んでから止、褌一ッになつて飛込む跡の、著物のしまつをしてやればいゝのだナ。眼公呑込んだらうノ。よし〳〵。サア其つもりにして寐よう〳〵」眼七「褌も翌日の朝の事ヨ。そ

モシ姉さん。なんだかお前はあやしいそぶりだが、若氣の至りで何かいちづにさし詰めた心から、不了簡でも出しはしねへかといふをきつかけに、おれは帶をゆるめてポイとぬける計りに、身づくろひをしながら、ハイ〳〵御深切はお嬉しうござりますが、どうあつても死なねばならぬ身のうへ、必ずおとめなさつて下さりますなんぞと、それからは人の集るまで、出たらめにおしやつて居るのだから、よつぽどむづかしい役だぜ」眼七「ムヽなんのことはねへ、太神樂の神主さんでしてゐるのだナ」卒「とん屋事をいひねへ大ちげへだ。おやまが本性でしつかりして居るのだから、道外ではいかねへ」眼七「それだけ尙くるしい。大方其つらで、はなして殺してくださんせなんぞと、いふ氣だらうおそろしい」卒「ヘンその面〳〵と安ッぽくいふけれど、是でも合引をかけて、拵て見せてへほんにヨ。よつぽどこせへばえのする顏だぜ」野呂「拵へばえだとつて、ばえねへとつて、其面が何程のばえ様がするものか」圖武「しかし出來ばえはしめへが、鳥羽畫のやうにはならうヨ」卒「チョツいめへましい。ヨシ〳〵今夜、一寸拵へて見せべヱ。おだるさんの所で白粉をもらつて來て」アバ「イヤ〳〵、そりやアごめんだ。晝間ならがまんもしようが、夜よなかそんな事をされるト、おらアたちまち驚風の蟲が出らア。其ひまにもうちつト、蚊いぶしでもしかけさつし。おそろしく出てきたぜ」左次「さう〳〵。そしてつ

もいらず、たゞ橋の上に後見がひとりあればいゝ」左次「成程さうだ〳〵。壹人といふ事はねへ。ある人だから、三四人もつれて行くがいゝ」卒「何サ、不器用な手合が、なま中大勢では足手まどひぢやまだ。エヽト呑公ひとりで澤山だ、やつて下ッし」呑七「ヘンそんな病人役なら、外のものにさつし。おれが自身に手をおろす程の事もあるめへ」卒「何サ役不足をいふ事はねへ。とてもお下に勉める役ではねへから、足下にたのむのダ。いはゞ所作楯の相手といふやうなもんで、よつぽど骨の有る役だせ」呑七「ハア橋の上で楯でもするのか」卒「いんにや楯なら仕いゝが、仕打でいくやつだからむづかしい」呑七「ハアそれではと思入といふ所があるのか」卒「ある所か大思入だ。なぜといつて見な、序題が身投に出た女だらう。それだからおれは始終内心にうれひをもつて、だんまりで往來の人にもあやしめられる程に、面と仕打で愁歎だから、其相手は甘口ぢやアつとまらねへ」呑七「イヤ〳〵其面で愁歎をされて、どうしてそばに居られるものか。おそろしい事だ。マヅ〳〵餘人へお見せなせへ。わたくしはお斷だ」卒「さういつてくれることはねへ。チヨツいゝは。そんなら眼公やつてくだッし。今いふ通りのすぢだ」眼七「なんにしろわりい筋だ。辻燒にしかなるめへ」卒「いやサ交ぜてはいかねへ。マア聞かッし。そこでうつくしい娘が欄干へ寄りかゝつて、うれひにしづんでゐる樣子だから、足下がいふには、

を天のしからしむる所だ」左次「イヤサ、川へおつこちたから、濡事師だといふ事よ。さもなくつて濡れさうな所はちつともねへはサ」野呂「イヽヨ、うつちやツて置いてくれヨ」左次「うつちやツておかねへとつて、今更その面がどうなるものか」呑七「ちげへねへ、野呂松が面もつかひ道のねへ不自由なつらだよノウ。敵にも眼が細くつり下ツて、色は白と青と黄を交ぜて、何だかいやみッたらしいとぼけ面で、なんでも本役は、半道やつしといふのだらう」卒「ヘン半道やつし、九のヤじや、十ウが聞いてあきれらア。兎に角婦人方へ向く器量は、殿達の氣にはいらねへもんだ」アバ「器量もすさまじい。飛龍に似たつらだア」卒「飛龍でも五兩でも、女中方のお眼が曇らぬ鏡だア。今度はおらが面も、さして入用でもねへ様子だから、マヅ犬の屎のねへ所へ、そつと置いて下ッし。それより、押出すさんだんを、よくきめるがいゝ」左次「ム、是ばつかりはちげへねへ。しかし今度は衣裳がおだるさんのですむから、かづらを一ツ借りればいゝよ。褌は松坂屋で中巾を六尺。ヲイ眼公今夜一寸買つて來て、裏のおつかァにたのんで置かッし」眼七「ヲットそれは承知の濱だが、魚盡しの冠ものはどうしよう」左次「それは翌日の朝、中見世へいつて買集めればいゝが、船宿へいつて、人足を憑まずばなるめへ」左次「イヤ〳〵それも次郎兵衛が所へいつて憑めば、さしかゝつても、間に合ふにちげへねへ」卒「そんなれば、外に稽古

み合ふのだ。それよりマア斯うしたらどうだらう。せつかく卒公も一生の智慧を出して趣向をつけて、押しだされへでもくやしからう。そしてまんざらでもねへ案じだから、やつつけるがいい」圖武「ハア卒公ひとり飛込んで、むやみと川の中を游いでゐるのか。ヘンよからう〳〵。氣ちげへじみて」左次「なにさ、とても獨ではつまらねへが、今度の合番匠は、連中でなくつても、外に仕打がねへから、游を知つた人をたのんで、相圖のきつかけを、こつちで差鐵をつかへば出來る事だから、かうしやせう。柳橋の住吉屋の船をかりて、亭主の次郎兵衛に吞込せて、近所の若へ衆を頼んで、飛込んで貰ふ工面にしやう」卒「ム、それがいゝ〳〵。何こんな不器用なあひてをとつては、狂言がしにくい。相手がしつかりだと、ぐつと乘つかゝつてするから、大きに仕いい」出目「なんだ、ごたいそうな、橋の上から川へ飛込むとつて、狂言も大わらひだ。相手がいゝとつて悪いとつて、どこに仕打があるものか」卒「それでも手前たちには勉まらねへではねへか」出目「しれた事ヨ。川へ飛込むなんぞといふやうな事は、やつし方の本役ではねへは」野呂「ヘンこんなやつしがた計りあるから、芝居が六ケしいのだ」左次「さう言はツしやんな。春の隅田川の狂亂は大やつしだつけ」眼七「所が、ぢょむせへ氣狂のうちは、かなりだツけが、引拔でグツトきれい事にならうとすると、たちまち川のなかへすぽんとおつこちてチャン〳〵ヨ。是則ち身に應ぜぬ事

それでまた此くはだてに連判をする事もねへ。ばか〳〵しい」眼七「さうよ。それでは呑公、出目公、野呂公トたつた三人だノ」出目、呑、野「所が同じく、水にかけては鐵砲玉ダヨ」卒八「イヤハヤ、不器用な手合だナア。眼公はどうだ」眼七「ムヽおらアまア、板子が一枚あれば三尺や四尺は浮いてゐられようとは思ふが、久しくやらねへからどうだらうかサ」アバ「ハヽヽヽヽこいつアつまらねへ。此様子では卒公迄おぼつかねへやうだ」卒八「なんのおらアおぼつくけれど」左次「そつちはおぼつくにもしろ、人の游ぐのを見ても、こつちはおどつくは。なんでもわりい案事だ。およぎを知らねへでは、勤まらねへトいふ舞臺もねへもんだ」卒「なくつてサ、水仕合といふ事もありまアす。全體いけ不器用な手合だ。ヘン江戸ッ子のつらよごし、以來あんまりりきんだ口をきかねへがいゝ」呑七「べらぼうめへ、江戸ッ子だから知らねへのだは。銚子の濱で鰯をとつてた人ぢやアねへハヱ」左次「イヽサ〳〵、己をはじめ早呑込の輕はずみ計りやるから、番毎しくじるのだ。最初に游も知らねへで、この相談にかゝるといふがあるものか。こりやアみんなの麁相だ」アバ「さうだけれど、うぬひとり游げるとつて、人の心も知らずに、こんな趣向をつけるといふがあるものか」卒「そんならナゼいゝ〳〵といつて、相談にかゝつたヨ」アバ「その時はよかつた様だツケが、今おもへば」左次「エヽ何をくだらねへ事を、ぐづ〳〵いが

れに稲荷新道の仙女香が十袋、アヽしかし十袋で足りようかノ」香七「へん十袋では五百だが、もうちつと出すくらゐなら、此樣な首はすげ替へる方が、安くあがるだらうぜ」圖武「何下塗は胡粉のつけたてにせずば、凸凹が直るめへから、上塗計りは十袋もあつたらよからう」卒「ヱヽつらの事は手めへッちの知つた事ではねへからかまふなへ。それよりきつかけを、間違げへねへやうに氣をつけさつし。時に左次さん、お下の拵へは、魚盡しの張子計りだがどうせう」左次「そりやア、車の付いた臺をひつぺがしたり、また鰹蛸の類、その外なんでも見計ひに、淺草の中見店へいつて、見繕つてくればいゝはサ」アバ「そこで切ッかけトいふは」卒「七むづかしい事はねへ、おれが橋から飛込んで游ぎ出すが相圖ダ」アバ「ムヽよしよし、しばらく身投とおもはせて、一度もぐるだらう。それからうかみ出た所へ、舟からボンボンと、イヤ待ちねへヨ。おらア游を知らねへがよからうか」左次「ナニ游を知らねへ。そりやアとんだ事だ。それでどうして大川へボンボン所か、つまらねへ男だゾ」アバ「おめへはどうだ」左次「ヱおれか、おれもサ、チトむづかしいテ」卒「何サ見事にやりたがらずとも、ちつと水心さへあればいゝはナ」左次「鯛や鰹をかぶれば、魚心はあるけれど、水心はちつともねへテ」圖武「ヲヤ左次さんも知らねへのか」左次「今いふ通りヨ」圖武「ソリヤアつまらねへ。實はおいらも不得手だぜ」のろ「何の事た、

物あんじ姿で、あちこちうろ〳〵して居やす」圖武「フンア首尾よく姿と見えればいゝが」のろ「さうよ太おもてで、ふッとりとした、色の淺白い女だからノ」左次「イ、サ、まづものあんじ姿で、それから」卒「なりたけ人にあやしめられるやうに、欄干へ寄りかゝッたり何かして居て、いゝ時分に、ボイと引きぬきで、まつぱだか、緋褌一ッに成つて、其時後見が、著物の始末さへしてくれればいゝのだ。さらりと髮をみだしてポンと川へ飛込むのだが、ソリヤ身投だといつて、橋も川も大騒になるだらう」圖武「ちげへねへ、是はおどろくだらう」卒「そこでしばらくして、ずいとうき出て、およぎ始めるとたんに、船の中からは、連中かねて用意の、いろ〳〵の魚盡しを張子でこせへたやつをかぶつて、ポン〳〵〳〵飛込み〳〵おつかける。都て龍宮、玉取のまねびとなる、トいふはどうだ」左次「ヤこれはよからう妙だ〳〵。皆々はどうだ」アバ「いゝいい。こりやアやつて見てへ」出目「それだから、どうも人は見くびられねへもんだ。卒公是計りは一生の出來だぜ」卒「ヘン是が氣にいらずは、まだいくらも案じはあるぜ」のろ「またほめると、ぢき登るからどうもならねへ」左次「サアそれにするには入用はなんだ。たいてへは今夜の中そろへて置くようにしてへもんだノ」卒「まづ今いつた、さら毛のかづらに女の衣裳、これはおだるさんのを借りても間に合ふが、緋褌は一筋奢らずばなるめへ。濡すから」のろ「さう〳〵、そ

らねへ」卒「いんにや、是はきつと氣にいる。よつぽどいゝ筋だ」左次「ア、又うなぎのしやれが出さうで、けんのんだ。サア〳〵其筋を早く聞かう〳〵」卒「役廻りはおれがもちめへのおやまダ」アバ「ハア是もまづ、破談話らしいノ」左次「ム、しかし筋によつて能くさへあれば、ちつと面不足だけれど、おやまにしめへものでもねへ」卒「あんまりけなしなさんナ。これでも合引で、ぐつと目をつりあげて、かづらをかけて見せたら、びツくりするだらう」のろ「こりやア、びツくりするにはちげへねへ、氣の弱いものは、ぶちけへるだらう」出目「さうよ、其目はやつぱり、つり下ッた形で置くがよからう。とてもつり上げたくらるナ事では、女の顔とは見えまい」眼七「へンな顔にはなるだらうけれど」左次「イヽサ〳〵。そこでこそ南傳馬町の、仙女香の十袋も買つて、二三日かゝッて地を塗りつぶしでもしたら、ちつとは顔らしくもなりもしやうが、さうしてまアどうするのだ」卒「かづらはさら毛にして、ぐる〳〵むすび髪にいつて、止ざつと、みだれにならうといふ誂へだ」左次「よヲし、それも呑込んだ、そして」卒「そこでおらが方には後見がひとり、それは雁ッ人でもいゝから、舟に居るものがなりたけ多いがいゝ。トいふわけは、先本舞臺三間のあひだ、兩國橋の景色、下の方よき所に、屋根舟一艘」出目「ハア又屋根舟か」卒「其内に連中殘らず合圖をまつて居やす。そこでおれはその美しいなりで、橋のうへをしほ〳〵と、

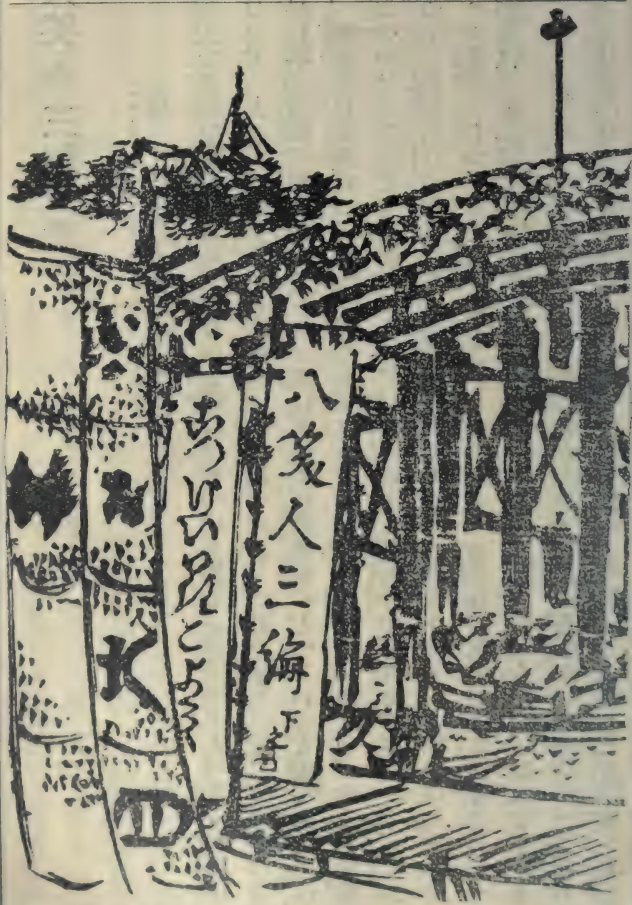
に譽めテ、今に喧嘩になるだらうト、ひや〳〵させるうちが山だ」左次「ハテナ」卒「そこで、家根舟でもこらへ兼ねてあくたいをつく。サア兩方まけずおとらず、あくたいをついて、片々でくそでも食へトいふが種だ」左次「ハアへんなたねだの」卒「サア兩方でくそをくらへ、イヤうぬくらへ、われくらへと、言ひつのつてゐる中へ、おれが糞船を憑んで、上乘をして、グツと中へのり込んで、サア汲みたてあがらんか〳〵といふが、おちだがどうだらう」みな〳〵「ハヽヽハハヽヽ」左次「まるで落話だナ」眼七「へンなんぼ下主だといつて、兎角下へまはる事計り案じるス」吾七「さうヨ。そして獨り狂言も大さうだア。ソノ三津五郎のつもりといふのが、糞船の上乘をして、たゞ汲みたてあがらんかといふ計りか」卒「をかしくつていゝぜ」アバ「それだとつて、あんまり惡落だらうぜ」吾七「そして案事に事をかいたやうに、くそ船まで持出す程の事もあるめへではねへか」眼七「さうよ。此分なら床をかいて居て、まツこと叶はずは、筏を組んでにげよう」左次「あんまりたいそうをいふから、大方こんな事だらうとおもつたヨ」卒「それでは不承知か」の呂「あんまりぢよむせへではねへか」卒「チヨツそんなら、餘所行をださずばなるめへ」左次「ム、餘所行をだすもいゝが、モウ枕なしにすぐに本讀にかゝツてもらひてへ。どうも賣藥屋の見世を見るやうに、前置計りりつぱで、かんじんの趣向が、すこたんだから安心な

事より今度はどうするのだ。早くいはつせへナ」卒「カウびつくりしなさんナ、よつぽどいゝぜ。先斯うだ」岡武「ムヽこいつァよからう」アバ「何がいゝのだ」岡武「いはねへ内がよからうと思ふのヨ。今ほめねへと、言出してからはほめる所は有るめへと思つてよ」左次「是サ折角本讀が、始りさうにするとまぜつけへすから、どうもならねへ。マアちつとのうち辛抱してくだせへ」卒「そこで筋は二ッあるがの」呑七「ハア子持筋か」卒「まづ子持、ヱヽどうもまぜつけへしに、つりこまれてならねへ」左次「ヲイ眼公一ッ盃燗をつけさつし。みんな口が隙だからやかましい。マヅお下の衆に、そつちで一ッぺい飲ませてくだせへ」ト、是より酒をはじめみなみな飲みながらきいてゐる。卒「まづ一ッは斯ういふ趣向だ。よつぽどをかしいぜ」左次「ハア」卒「第一おめへたちに、切ッかけも稽古もいらねへから、まちげへがなくつていゝ、おれひとり狂言だ。道具といつた處が、家根が一艘に小舟が三挺を一ぱい借りる計り、そこで家根と小舟とへ連中を分けておいて、家根の方では彈いたり唄ッたりぶら〳〵流して、兩國の洲か橋間の、船込のなかへ付けて居て、そこでいゝ時分聲色をつかひ始めやす」左次「ムンそして足下はどこに居るのだ」卒「おいらは又、別に妙な船をたのんで、獨り別にゐるのサ」アバ「ハァそして聲色をつかつてどうする」卒「所へ、今の小船モ二三間はなれて聞いて居て、しきりにどくを言つたりなにかして、喧嘩をしかけるやうす、あくたいまじり

んにヨ。卒公しつかりさつし」アバ「春中のも隨分出來はいゝけれど、かんじんの所、爰でひつかつかうといふと、しくじるからどうもならねへ」岡武「なんでも糞桶の荷繩ぢやァねへが、大丈夫にしておかねへと、始末のわりい事が出來るテ」のろ「ちげへねへちげへねへ、卒公マア案事はついてゐるか」卒八「ヘンなくつてサ」左次「コレサさう糞落付があぶねへの親玉ヨ」眼七「サレバサ雪隱の上水を見る樣に、氣ざにすまして居て、大變な事を仕でかすめへぜ」卒「カウおめへたちは何のこつたナ。ャ糞桶だの、くそ落付だの、ヤレ雪隱の上水だの、じゝむせへたとへ計りいふ手ゐゝだ。それがほんのしやらツくさいといふのだ。ほんのこつたが、おらがたツた筋へ點の打人があるものか」左次「いゝサ／＼、其廣言は跡へ廻してマア早く筋を聞きてへ」アバ「さうよ今日のやうにてん／″＼懷でやつては居られねへ。なんでも惣座中大承知の入道へ、木賊とむくの葉をかけて磨上た所で押出すがいゝ」卒「さうす／＼。なんぼおれが番だとつて、大丈夫といふ譯にはいかねへ。丁度三津五郎壹枚では、狂言が出來ねへやうなもので、外が何分若い衆大勢といふもんだから。萬一又、仕損ふめへもんでもねへが、どうでもかうでも八日目までは、叩かねへではならねへぜ。卒八さへあの通りだから、とてもおらァなんぞとひるんでたちぎえはならねへぜ」のろ「アレ／＼、もういたゞく枕をならべるぜ。こいつァ險難な狂言方だ」左次「サア／＼跡の

花暦八笑人 三編下册

催涼蓮池之會合 其二

偖も八人の役割を鬮にて定め、鴨居へ立派にはりつけて置き、左次郎「サアまづ斯う外題は付けて置くけれど、是はたゞ順番を定めた許り、場所はてんぐ〳〵の好み通り、案じのついた事がいゝぜ。早い事が兩國の涼の題でも、モシ腹にあはずば隅田川へもつていくとも、利根川へ飛込むとも、勝手のいゝ所がいゝぜ」ァバ「そりやァちげへねへ、内輪の茶番こそ、すこし意地惡をしてまごつかせるなんぞも、をかしくつていゝけれど、他人の中へ押出す事だから、てんぐ〳〵に磨合つて、岡目八目の助言をくはへて、なんでもしくじらねへやうに、すつぱりやッつけべエ。コレ卒公、しつかりと褌を〆てかゝらッしョ」卒八「ヘン何是しきに褌どころか」ト、卒八がすましてゐる顔を見て、松王丸のせりふ、眼「今じやうッはりの手なみにかけて、拙作かいゝ作か、至極ごくらうの世界ッ」のろ「ナンダ〳〵、まだこじつけたらねへのか。いゝ加減に愚痴もいふもんだ」呑七「イヤじようだんではねへぜ。春のやうにしくじつてはおそれる。今度はしつかりまうけてへもんだ。ほ

八笑人三編 下巻

れてから讀みやせう」卒八「ム、それがいゝ〳〵。飛鳥山の花の雲、相勤めまする役人かい名をひッくじきか」出目「エ、やかましいわへ。サア〳〵鬮を出しな、引かう〳〵」ト六人われも〳〵引くくじの名前、くはしく書きそへたるはりだしの役割左の通り。

初編之目次

遊行日之通認める

飛鳥山	左次郎
隅田川	野呂松
兩國	卒八
高田	眼七
花屋敷	アバ太郎
海晏寺	圖武六
吉原	呑七
淺草市	出目介

のしやうだぞ。まぜつけへせといはねへ計りないひ様をするものだから、こたへては居られねへ筈だ」左次「それだといつて、おいらがする相談に、只の人らしく、扨如様々な儀で、左様致しますれば、此様相成りますなんぞと、不風雅にもいはれめへぢやねへか」卒八「イヤ〱やつぱり不風流がいゝ。おめへは常の人でねへつもりでも、あんまり錢の出た人とも見えずサ。なんでも相談事は、どこまでも野暮にいく方がいゝ。そして何だかむだないひぐさが、馬鹿長イに、をかアしく、節付をして云ふもんだから、ツイ南無阿彌といふへんじをするも無理はねへ。マア〱つまんでいへば、春の花見茶番の殘りを、六人で一狂言づつやらうといふ事だらう」左次「さうよ、さうだけれど、八人のうち春二人濟んで、跡が夏までのびたから、いつその事今年中のたのしみとしてサ、夏二日、秋二日、冬二日と割付けようといふ注文だがどうだへ」呑七「ムヽそれも能からう」左次「先陣の爭ひが面倒だから、ずいト八日目までの名題を拵へて書いて置いたから、是を鬮にして順を究めて置かうぢやアねへか」眼七「ヲツト鬮も名題もちやんと出來てるやす」ト、眼七ふくろ戸より丈け長く書いた名題と鬮をうや〱しく三寳へのせて出す。野呂「イヨ〱是はりつぱりつぱ。グツト是で頭取めいてきた。序に狂言名題を、御披口々々〱」閻武「匂線香、清明香」アバ「また交るよ。漸々すこし舞臺がしまりかゝつた所だ。東西々々〱」左次「イヤ披口は鬮を引いて、皆役割を書入

れがいたゞいて、其次に野呂まがしくじつたもんだから、さすがのこじつけ連中も、その次ウぎの羅漢はと、すゞみ人がなかつたから、ずる〳〵べッたりとつぶれて居たが、なんとれッきとし、ヘンあんまりれつきともしねへけれどサ、八人男が歯を合せた事を、反古にはされめへではねへか。それともしくじるまでにも、趣向がつかねへのか」卒八「ヘン仰にや候サ。いふにやおよぶサ。趣向も案じも、山々だけれど、みんながひるんで居る様子だから、おれ一人すゞんでもはじまらねへから」アバ「何の〳〵、ひるむの夜むのといふけちな事があるものか。案じはその時つけて置たが、誰もなんともいはず、殊に毎晩のやうに茶番は引續くし」出目「そりやア、おれも同じ事だけれど、それにおらア女の方だけ、格別用が多いからツイ」左次「エヽ引又びち〳〵始めるよ。マア相談の極るまでは、尻へかゝとでも押つけて置かッし。そこでマヅ斯うしやうといふ注文だ」圖武「そいつア妙だ」呑七「まだ何ともいはねへは」圖武「どうりできこえなんだ」左次「ムヽ引古風な豆藏だ」アバ「是ヲマヅ、まぜつかへさずに荒増の相談を聞かッしな。どうも悪イくせだゾ。フンそこで」左次「マヅこの趣向の初一念といふものは、毎日々々八日續けるつもりの所が、隙行く駒のあし早く、光陰に關守なく、木梢の花も青葉と變じ、昨日まで片言をいひし鶯も、今は繻子をさへ育て上げ」圖武「なむあみ」卒八「イヤハヤ奇妙な相談

劣らぬこじつけ人でござりますナ」卒八「さやうでござります。前置の枕ばかり長くて、へんてつもない事計り申します」眼七「ヘイ左樣なら枕なしに、圖武六さん一寸お目にかゝりたい」圖武「ヘイ〳〵何御用でござりますナ」眼七「ヘイ此人の顏がじょむの髯たゞで、小鬢先には兀淸もござります」圖武「チョッいめへましい、また面の店おろしだ」眼七「そこでどなたでも、お鼻紙を一枚いたゞきたいネ」アバ「ハイ〳〵是でよしかネ」眼七「これは有難うござります。ヘイこれがすぐに景物でござります」卒八「御趣向はナ」眼七「ヘイ無錢の算段、小半紙の安いのでござります」出目「イヤハヤたま〳〵景物が出たとおもへば、人の鼻紙をつかひ、餘り無體なけんやくでござりますな」眼七「それが則ち、曾我の發端でござりますテ」アバ「とは又どういふ譯で」眼七「ヘイ景物は買はずでござります」卒八「ヤレモ〳〵、くるしいこじ付でござりますな」左次「モウ〳〵、いゝかげんに切上げたく〳〵。拍子にかゝつて、こじつけるはをかしくもねへ。サア〳〵酒にしよう〳〵。そのマア宮戸川をぶちあけよう」眼七「ヲツト〆たり、サアこつちの世の中だぞ。ヲイ出目公此片口へ出してくんな。其うちこつちは肴を出すのだ」ト、是より例のとほり飲みはじめる。左次「サア あんまり醉はねへうち、相談をきめて置かう。廻狀にも一寸書いては出したが、今夜の寄合は、春の花見茶番の事だが、おれがだまつて居ると、誰もかまはねへが、先第一番にお

虎の皮で致しさうなものでござりますナ」左次「是はごもつともでござりますが、何分急案ゆゑ行屆きませぬこともござりますが、そこが兄弟同様の中ゆゑ、あなたがたはじめ同じ様な事をいく度かくどう致します所が、矢張お肴一種でござります」アバ「へエヽそれは又どういふお肴になります」左次「へイ兄弟の集りました所へ、趣向が工藤出ますれば、これが則ち鯛麺でござります。扨おのぞみなら、まだいか程もお肴は出來まするが、如何致しませう」野呂「イヤ〳〵もう澤山でござります」アバ「さやう〳〵、此うへまだどのやうなこじ付け料理が出ますもしれません、おそろしい事でござります」左次「イヤ御遠慮なさりますな」卒八「イエ〳〵どう致して決しておじぎはいたしません。もう〳〵眞平御免なさりまし」出目「しかしながら眼七殿の御趣向を、なんぞお願ひ申したいナ」眼七「へイわたくしははや、ごぞんじの通り居候の身分ゆゑ、何も御馳走のいたし様もござりませんが、唯今主人がたいめんをこじ付けました尻について、貧乏人想應に、曾我の役割を、一兩人御覽にいれませう」圓武「これは又氣がかはつて面白うござりませう」眼七「さて先私が鬼王貧左衛門でござります、所が此節二役勤めまするやうになりました。其譯は一向御酒が呑めなくなりまして、此頃は猪口に四ツ五ツもたべますと、足元も定まらぬやうになります。是を名付けて弱い酒のひよろ〳〵と申します」出目「ヤレ〳〵主に

「あなた方もないうそトは申しながら、アバ太郎殿がアノ顔で、戀が出來たト云はれた時は、寔に腹の皮がいたい程をかしうござりました。あなた方はいかゞでござります」卒「イヤはやをかしいだんか、此顔色でいろ事三昧、イヤ大笑でござります」左次「ヘイそれが則ち笑ひ戀でござります」野呂「ヤレ〳〵御鮑丁のこじ付けあんばい、かんしん致しました」左次「扨又重平かなんぞ吸ふ物を一ツ上げませう」ト、又文がらをとりちらし、「ヘイ、是は噓屑でござります。ヲイ眼公ちよと立つてもらひてへ」眼七「ハイ〳〵イヤどつこい。ハイたちました」左次「帯を解かつし」眼七「ヘイなぜでござります」左次「ハテサ、なぜでもいひから、きり〳〵解かつせへ。皆様へ御馳走するのだは」眼七「ヘヱヽをかしな御馳走だゾ」ト、眼七は不承不承に帯をとき、「ハイ解きました」左次「といたら單物をぬいで爰へ出さツし」眼七「ヤレモ〳〵漸々昨日買つた單物を、モウぬぐのか、なさけねへ事だ」左次「それだから入用だは」眼七「ハイ〳〵サアそれへあげます。どうぞ命ばかりはおたすけ下さりまし」左次「偖此眼七が單物は、昨日富澤町で買つてさんじました故、是が三つものでござります。又跡でお茶漬でもお上りなさる手當には」ト、眼七が褌へゆびをさし、「これに煮染がござります」圖武「是は〳〵跡のお茶漬までお手厚な事、成程此お煮染はよく鹽がしみたやうで、見たばかりでのどがピリ〳〵かわきます」呑「しかし鬼〆なら

す。宿を出ますは、ふいと出ましたから売手でござります。しかし途中で此繪を見當りましたが、餘りいせいのよい畫ゆゑ、うつかり買つてさんじました。是御らうじまし、四天王が蝦を退治致す所でござります。是でもお土産に獻じませう」左次「それははや思し召は有難うござりますが、私はたちもので蝦は決してたべませんテ。そこでその跡がどういふ御趣向だネ」出目「へイ唯今申すとほり外に趣向がましい事は決してござりません」眼七「ソレでも繪を出した計りでは、疱瘡見舞のやうで、餘り手の無い事でござりますネ」出目「さやうなら正直に申しませうが、此蝦を持つて參ッたのは、なんにもせずに天窓から呑まうといふ心いきでござります」眼七「ヤレモ／＼無造作な事だぞ」左次「蝦だから大方そんな事だらうと思ひましたテ。イヤ皆様御趣向かんしん／＼」アバ「偖わたくしども此樣に、少々づつも土産を持參致しましたからは、こなたからも何ぞ御馳走がありさうなものでござりますナ」呑七「いかさま、しかしそれは定めて御承知でござりませうナ。眼七殿」眼七「へイ／＼かしこまりました。ア丶しかし今日はあやにく仕込がござりませんで」出目「イヤそのお仕込のない所で、何ぞ一二種ちよツぴりとナ」左次「さやうおつしやる事なら是非がない。勿論料理番もをり合せませぬゆゑ、わたくしが抓み料理をさし上げませう」野呂「これはいちだんの事でござりませう」左次「へイ、さつそくなが

くは」ト、硯墨一丁出し「よく摺つてお書きなさい」眼七「ヲヤ是は紙が違ッて居るが、フン一ッ百六拾四文酒五合三拾貳文味噌二十八文みりん一合。ヲヤ〳〵こりやァ酒屋の書出しだぜ」アバ「ハヽア成程内田の書出しだ。なんでも摑合つて、嚊ァに半分より餘けい取上げられましたを、漸々殘りを集めて參りましたから、中へまぎれ込みましたと見える。是はおはづかしいものを、お目に掛けました」眼七「モシこれには受賃なしかネ」アバ「へイこれはチト受賃を出す程の事もござりませんがエエまゝよ、たしか〆は三百五六十でござりましたが」ト、をさめ太刀をいだし、「一本あげるから、すつぱり拂つておくんなせへ」左次「ハヽヽヽ奇妙〳〵。サア是はなんだ。わらぬ筆と、ハヽアまの字が破れたやつだ。ムヽまはらぬふでゆゑ、よしなに御よみわけだ」アバ「チット廻らぬ筆なら、此ぶん廻しへおはめなさい。自由に廻ります。そこでもうなしかね」眼七「イヤまだ爰に一切ありやす。呉々御たがへなう御いでの程、ひとへに〳〵」アバ「くれ〳〵相違なく御出なれば」ト、手あそびの行燈をいだし、「先こいらでござりませう。しかしたまさか晝中に、出ます事もござりますが、それは灸の用事でござります」眼七「イヨ受賃の御趣向、請けましたはへ。サア出目助樣、おまへの番だ、早く御趣向うけたまはりたいネ」出目「どう致して御ぞんじの愚案の私、とても趣向も五かうもござりませぬ。寔に一ッこなもので、唯人さまのを二こ〳〵と致して、見るばかりでござりま

りまして、未だ封も切りませぬ文を、此やうにづだ〳〵に破られましたが、彼心底も折角人目をしのんで、丹誠いたし認めましたものを、むざと捨てるも餘り不便でござります故、引きちらしましたを、少々拾ひ集めてさんじましたが、どうぞ皆樣、御工風なさつてお讀みわけ下さりますやうに相願ひます」眼七「イヤ是は珍らしい事が出來致しました。成程あなた抔へ女の文の參る事はない事ゆゑ御不得手だらう。どうも馴れぬ事は、よめ兼ねるものでござりますテ。隨分事慣れました私ども故、讀んでは上げませうが、餘り手ひどいおたれなさり方でござれば、何ぞ受賃がなければどうも」アバ「それは勿論の事、いづれ濡事師は、水金は遣ひうちの事、頓といひはござりませぬ。文言さへわかりますれば、受賃は上げます」左次「左樣なら是へ遣はされ」アバ「へイ〳〵コレごらうじまし、なさけなく引裂きましてテ。分明りますれば宜うござりますが。先それへおわたし申しませう」左次「ドレ〳〵ハヽア成程、天地紅で、イヤどうも艶なるものでござりますナ。フンなんだ、神かけねがひあげか」アバ「へイわかりました、神かけねがふと申すには、絞りばなしの切でもござりますまいから、あつさりと稻元結になさりまし」ト、稻元結を出す。左次「扨と、なんだハヽアこがれをり〳〵」アバ「へイこがれをりと申すお禮には、淺妻船の畫をさし上げませう」左次「イヨおもしろし〳〵。サア是はしみ〴〵じれッたくか、へンうまいナ」アバ「しみ〴〵じれッた

こだアエ丶、ウ丶〳〵ハイ是へ揚げて置きます。チイこの宮戸川の樽は、左次郎様までかネ。ハイ〳〵かしこまりました。イヤどつこいナ。ア丶ム丶だア〳〵、そこだア〳〵、うんたア〳〵。ヘイ駒形の内田からさんじました。判取は歸りにお寄申しますから付けて置いてくださりまし。ア丶いそがしいぞ〳〵。アイ此おいらんは深川へくら替かネ。ハア身請かへ。そりやア妙だ。酒手はしつかりだらう。ア丶ウ丶だアそこだア〳〵」呑七「イヤ是はけしからん、さう〴〵しい事だぞ」眼七「しかし能くお似合なさりました。アイ番頭さん車力を壹貫壹文下さいやしといふ身だネ」左次「東西々々〳〵」卒八「チイ此鐘は西村から道成寺さままでかネ。ホイ小附に小田原提灯か、これは通りみちだから、與一兵衞さんの所へとゞけるのかへ。かしこまりやした。ハアムムだア〳〵、そこだア〳〵。ヤレ〳〵草臥た〳〵。是でまづみんな片付けた」ト座になり、「ヘイ左様なら、おやくそくの鉢肴をさし上げます」ト、今の車をいだし「ヘイ是が方々の煮つけでござります」アバ「ヤレモ〳〵さう〴〵しい、につけだつけ。扨はやわたくしは、チト餘り手前勝手のやうではござりますれど、無據皆様へ、お憑み申したい事がござりますが、今日是へ出ます節、衣類を著換へやうとぞんじたところが、彼吉原の心底方より、まへッた玉章をツィ取落しまして、山の神に取上げられました。サア八里半だと、二ツ割にいたさうとまうす角を、二本揃へてはやし、大嫉妬トな

し、「これは宮戸川より出現ましましたる所の酒無理如來の尊像、生得大酒の御酒にして、一樽愛する輩は、博奕賽難けんのんを、のがれ苦勞不知、又辨當兩役を守らせ給ふとの御誓願なれば、いかう醉つて五盃上りませう」眼七「イヨ〳〵とんだ靈寶奇妙々々」圖武六入かはつて圖武「へイ私は五蠅帳をお買ひなされたと聞違ひましたゆゑ、その中へおたくはへの品を、少々さし上げやうとぞんじて、則ちこれへ持參致しました」ト、女達摩の畫を一枚出し、「へイ是がまづ、座禪〇豆でござります」又茶見世の女繪を一枚出し、「是は納豆でござります。ト申す譯は去るお寺さまの、嘗ものだト申す事でござります」左次「是はよく慣れた樣子で味さうに見えます」圖武「さて此繪はチト麁相な出來ではござりまするが、田舍狂言の無間の鐘の圖でござります。是が則ち梅がえ田夫でござります」左次「ハヽア是は御自畫と見えます。一しほ賞翫いたします」圖武「そこでこれは、ちと時代な繪で、淸盛の妾で、貞女を捨てて貞女を立てたを自慢の常磐味噌、そばに今若、乙若、牛若の數の子もそへてあげます」左次「是は〳〵いろ〳〵の好物、有難うござります」又卒八入かはり手あそびの車を持出し、卒「へイ私は又なんの了簡もなく、唯こなたで一ッ食べようとぞんじまして、煮肴を一種、持參致しましたが、ちと荷が張りましたゆゑ、車を一輛雇つて參じました。先車つい手にこゝらをチト片附けませう」ト、車力の思ひ入にて鉢巻もろはだぬぎになり、「ハイ此繪は圖武六さんから、池の端までかネ」ト、彼の景物の畫を車へのせて、「おふだアソウ、そ

の仕事で、サゾおよかんましうござりませう」のろ「さやう〳〵、最早用談を申しましても餘寒らうとぞんじます故、先わたくしから發言致しませう。扨今朝は御使、御廻狀の趣、委細承知仕り、今晩わざ〳〵參上のしるし、交魚少々お目に掛けます。先是は鰺でござります」ト、おゐらんの人形を出し「殊のほかあぢはよいト、申す事でござりますが、又中には蛸だとも申します」左次「ハヽア成程、これは一しほ賞翫いたします」野呂「そこで鱸を一本さし上げませうとぞんじて、今朝取寄せまして生洲へ活けておきました所が、あまり生洲を掃除致して、水をかへましたら、濁りがなくなりまして」ト、花かんざしのすゝきを出して、「すゝきに成つて仕舞ひました」左次「ハヽヽヽ是は〳〵、いろ〳〵御叮嚀に」野呂「さてあはびを一杯差上げます」ト、手あそびのつりがねト同じく小田原提灯を、天秤にかけて出し、「此提灯に鐘を蚫と申しまする譯は、片重イと申す事でござります」左次「イヤ何よりの好物、さいはひ今日は精進日ゆゑ、早速鉋丁致しませう」又呑七入かはり同じくしかつべらしく、呑七「へイわたくしは今朝よん所なき遊用で他行致したゆゑ、さすがの私も宿にも居ず、在宿もいたしません所へ、御使だと申す事で、歸り〳〵宿で申しますには、池の端さまで開帳が始りますさうだと申しますゆゑ、廻狀の間違とは心づかず、それはさいはひ「私家に先祖大食亂、小もたれの代より、つたはりましたありがたい寶物がござりますゆゑ、靈寶場へお貸し申しませうとぞんじて持參致しました」ト、駒形の内田のたるを出

み合ふやうでございますテ」圓武六「成程、あなたはよくお心づかれた。わたくしは又何のにほひかと存じた。胸がむかく〳〵致して、是へ參ッた計でむかひ氣が參ッて、歸らうとぞんじました」左次郎きかね、「コレ眼七、でへぶへこんで居るがどうしたのだ」眼七「へこむ氣はございませんが、あなた方の狐臭が目口へ染みて、ぐうともすうとも言はれません。わたくしはモウ引込みませう」卒八「ヤレ〳〵嬉しや。取次の者があちらを向きましたから、此うち早くお上りなさい。とても筒先へはむかはれません」アバ「マヅ〳〵あなた」卒八「サヽおかまひなく」アバ「しからば」ト、何かしかつべらしく奥へ通り座に付く、のろ「偖はや其後は、うち絶えまして、ま事に御無音、何か當年は格別の大暑にて、嘸嘸御心配の段恐入り奉ります」左次「これは〳〵ようこその御入來。仰の通り舊冬から見ますれば、殊の外おあつうございます」アバ「わたくし事も、御無沙汰致しましたが、御存のとほり婦人の儀に付まして、毎度寸暇を得ませず、ぞんじながら、ハヽヽヽ、偖殊の外、きびしい餘寒でございますナ」左次「左樣でございます。寔に蒸むしと寒じます」圓武六「この餘寒にはよほど水が這入りませう」出目「いかさまイヤ近年は餘寒になりまして、しのぎ兼ますテ」呑七「なる程あなたなぞのおつむりは、蠅が止ッて辷り墮ちますほどの、よかんでございますから、サヅひえますでございませう」アバ「イヤ時に用事も申さずに、此樣な事ばかり申しますも、ほんの餘寒

たまづ〳〵は、文字には味くないと申す心の、まづ〳〵を書きます樣にござります。その思召であれへお通り下されまし」あば「これは〳〵御丁寧の御挨拶で痒み出でます。斯樣申したばかりでは、ぼんくら樣方には分り兼ませうが、かゆみ出でるとは痛み入るの裏がへしたのでごさります」眼「へイ〳〵なる程いはれを聞けば股くどります。これもかんしんと申すことでござりますが、チト古いから土用じん仕ります。是も則ちかんしんのかはりでござります」あば「イヤもういゝかげんに致しませう。面倒に相成りました。サアどなたも上りませう」卒八「さやう〳〵かやうなとんちきは、いつまでも負けぬ氣になつて、こじつけますものでござります。サアあなたお先へ」のろ松「イヱまづ〳〵あなた」卒八「いかさまあまりおじぎ致すはかへつて無禮、しからばお先へ」呑七「イヱだれもしかりはいたしませぬが」などと互にしやべるむだくちの、わからぬことをならべたて、這入口にてやゝ暫くがん七一人を六人が互にこじつけ居るをりから、やう〳〵聞きつけ左次郎は奥の方より聲をかける。左次「これ〳〵眼七、くわん化ごとならお斷申さつせへ。ア、ひつツこい俗願人だ。物もらひもあんまりひつツこいと、猶やる氣がねへ」眼七「トいつて、ひつツこくねへとやらずに仕まふし、どつちしても、遣るのはおきらひでござりませう」あば「イヤ主御在宿さうな、皆樣直にあれへ參じませう」卒八「いかさま取次の顔色が餘りきたない面でござりますゆゑ」のろ「左樣〳〵、それに口中がわるくさい故、應對いたすが甚だ難澁、とんと糞取とつか

花暦八笑人　三編上冊

初編目次兩國川催涼蓮池之會合

春過ぎて夏來にけらしきのふまで、笑ひし山の時鳥、四季節々の季違は、彼本丁菴の戯に、

〓　〓　〓　〓　〓（はるうはき　なつはげんきで　あきふさぎ　ふゆいんきで　くれはまごつき）

と謔字盡のうそならずとは知りつゝも、呑明し遊續けし八笑人、かの座頭の佐次郎は、世間晴れたる樂隱居、元より人目忍ばずの、池の邊の呑會所、青葉涼しき夏木立、朝貌さへも我儘に、這ひわたりたる庵の戶、表の方より足音は、序文に記せし廻狀の、招きに集るなまけ連中、打揃うたる六人連、先に立つたる安波太郎、あば「ハイお賴み申します、佐次郎樣は御在宿でござりますか。先刻はお使を下さりましたが、それに付安波太郎、卒八、圖武六、呑七、出目助、野呂松、打揃ひまして參上仕りました。此段宜しくお取次お願ひ申します」ト、あんないすれば、庵のうち、初編よりしていてつきの居候やら御主人やら、とりきまりなきがん七が、えてにほかけて走り出て、眼「ヘイ／＼これは／＼お見ぐるしいお顏ばかり、お揃ひなされまして惡うこそ御入來、まづ／＼あれへお通りなされまし。イヤ一寸お斷り申上げますが、只今申し

萬歳の才若がとのさまもお好、おくさまもおすきと云つて腹を抱へさせしは、いにしへより初春のをかしき限りなりとて、佐保姫も雪解に山の笑ひしとか。夫はともあれ滑稽は世におこなはれてどなたもおすき、人面樹の花もわらへばこそ落をとらせし姿見が古人大谷徳次が事道外に妙を得手ものは瀧亭が口癖なり。かの八笑人が花見の趣向も煙草休の三編目、また相かはらず石部金吉頤をはづしてにこはこと笑ふ門には福來る、さし合のなき洒落まじりをおや子笑ひましよ作如し。

二代目そま人門人　駒人誌

安波太郎様
卒八郎様
圖武六様
呑七様
出目助様
野呂松様
もし御不參の御方は今日到來致候宮戸川五
升呑そこなひ被申べく候いぢきたな御連の
御事ゆゑ後日御恨不被成候樣爲念申入候
眼七

廻状

益御機嫌能御揃御なまけ被成珍重御儀に奉存候しかれば此程相續きしくぢり申候花見茶番の一件おしのつよき連中故恥しくは思ひ不申候へ共此度は是非々々首尾能いたさずしては作者も迷惑に御座候間何分一ト當あて申度候右に付今日拙亭において御相談致度尤小田原にては無御座候御失念なく被仰合御來駕奉待候以上

中夏十五日　佐次郎

眼七

ろ／＼する故、船へ呼入れ、一先沖へこぎ出す。　左次「どうだのろ公氣は慥か」のろ「みんなが案じなさんな。なんともねへ／＼」左次「なんともねへ事も有るめへ。水もよつぽど吞んだらう。反魂丹でもやらうか」のろ「ヘン水をのんだに反魂丹でも有るめへ。是と知ッたらこせうをもつておちればよかつた」出目「ハヽヽハヽイヽ／＼。しやれが出る樣ではきつい事アねへ」左次「そしておつな物だ、どつさり著込んで居たせへか、からだはちつとも濡れねへからおつだ」呑「其かはりかりた衣裳はらりにしたらう」出目「そこでおれが一首うかんだ。チト中通りの引込めぐが、

船へ飛びかづらはとれる其中にナゼのろ松は濡れなかるらん」

アバ「㭨帽よろこべ下著はお役に立ちさうだはヤイ」みな／＼「ハヽハヽヽイヽ／＼出來た／＼」

ト、はては大わらひとなり、是より氣をかへて土手の櫻を船より詠め、終日吞暮し後の趣向を約しつゝ、酒狂亭へぞかへりける。

どくむくつて刀へ手をかけたから、こいつたまらぬと逃げ出すと、聞きねへ。奥方はるかに御覽有つて、ひかへ／＼とお差留遊して、アヽ綺麗ナ男ぢやが亂心と見える、不便な事ぢや。隨分いたはつて遣はせといはれた時は、有難くつてうれしくつて、ちりけ元からぢは／＼と惣身がとけるかと思つた」呑「さうすると縛られたのだナ、ごふさらしナ。そして亂心と見えるとは言つたらうが、何きれいな男だといふものか。おほかたきらひな男といつたのだらう」出目「何といつたとつてはじまらねへ詮議だ。サア／＼おそくなつた。いゝ鹽梅に人がついたから早く行かッし。船は今川丸ダヨ。間違めへぜ」のろ「合點だ／＼」ト、是より出目助呑七は少し引下り、のろ松はさまざまのそらごとをしやべりちらし、早足に堤へ上り、三めぐりの上り場へ心ざして來る。船中よりはるかに見て、手ぐすね引いて待ちゐたるアバ太郎も、土手の眞中に立出て、來るをおそしと待ちかける。出目助呑七は最早岡には用なしとかけぬけ、船へ來つて相圖をする。往來の人はそりや氣違ぢやと集り寄る。のろ「蝶しづかに差こめ差こめア、だんぼさんや／＼」ト、程よき場所へ來り、腰につけたる古草鞋をアバ太郎に打付けんと、うか／＼きよろ／＼見廻せど、數多の人故早速それとわかられば、紐をもつてくる／＼とふり廻す。後へ黄八丈に七ツ襟の小袖緋ごろうの帶を〆め、朱の二重緒の雪駄をはき 耳にタコのある大若衆うつかり來かゝる横顔へ、彼古草鞋をポント當てれば、大若衆「イヤこの野郎めが」トいひさまのろ松が天窓をこぶしを固めてはりとばせば、打れてハツト目もくらみ、天窓をかゝへてよく見れば、雲つく計の大若衆、コリヤたまらぬと逃げいだす。船にはすはと待ちかける、兼て相圖に船頭ども、もやひをといて水馴棹、岸のかたへつきたてゝ 身構したる其所へ、天窓をかゝへてのろ松は船を目あてにかけ下りる。がんぎもしどろもどろにて、こけつまろびつかけ來り飛乗る途端に、船頭は待ちかまへたる力足一度にグイと押出せば、まだ踏〆めぬ足元のよろつく所もみよし際、廻る小縁になぎたふされ、川へさかさに倒れこむ。すかさず船頭手をのばし髻を取ッて引上げれば、髻はぬけて又ブク／＼。船頭はびつくりおどろき、船頭「ヤア是首がぬけた」ト、手をふるはせてはふり出す。「エヽ其は鬘だヨ。それ／＼本當の首を出したは、はやくつかめへて下せへ、早く／＼」ト、あせり廻り、船中殘らずさうに立ち、やろう／＼のろ松を引上げ、いろ／＼介抱する。アバ太郎は岸に立ちて

琴通舎
英賀

きけ〳〵と
まくらなる
人ハま〳〵川
花見の友ハ
縄乃まえ樽

シモシ、此者は私共見知りましたものでござりますが、どういふ事で此様にしばつて置くのでござります」侍「貴様達此者のつれか」斉「イヱ連と申すでもござりませんが、一體亂心致してをります故、なんぞ御慮外でも致しましたなら、幾重にも御了簡なさつて遣はさりまし」侍「成程亂心の體ぢやらう」斉「左様でござります。面にも似合はぬ色氣違で」侍「成程色氣違でも有らう。見らるゝ通り御前様のお供先で、お附の女中達へすりついたり追廻したり、いやはや以ての外尾籠がましき狼藉に及び、すでに切捨にもなるべき所、御前様のお詞がかゝッて、追はらへども、お言葉にあまへて猶々この邊へ立さはり、甚だ御遊山のさまたげに相成る故、お慈悲を以て此通り、しばり上げて置くぢや」出目「へヱ、それはや不埒千萬な奴でござります。さりながら氣違の事故、どうぞお許しなさつて遣はさりまし」侍「イヤサ此方ゆるす心なれども、繩をとくと又女中方へ狼藉に及ぶ故、是非なくお歸り迄は番をいたしてをる。此方も迷惑至極ぢや」斉「御尤でござります。しかし是からは私共が引取りますからは、けしておじやまはさせませぬ故、どうぞ御許し下さいまし」ト、兩人ひたすら詫びければ、餅についたるやつかいもの、引取人こそ幸と繩をとき兩人へわたせば、そこ／＼に挨拶してわかれる。斉七は小聲にて、斉「ナゼ又わるひつこくふざけたらう」のろ「あんまり美しいやつが、わや／＼とそやしたてやアがつたから、そこは好の道、畜生の淺間しさには、ツイひつツこくなるのよ。それに又親父の侍めがひ

なせへ。アヽひつッこい人達だ」ト、又立ちかゝッて押出せば、往來繁き隅田堤、たちまち數多人立しければ、今更しやれにもしにくゝなり、小言たら〳〵わかれ行く。呑「いめへましい婆アだナア。そしてあの野郎奴へ風並のいゝ事だから、やみとりきみちらして、とう〳〵まじめに仕通しやアがつた」出目「ハヽヽヽ洒落がかうじた物狂といふめに逢つたなア。しかし仕組んだ事よりうまく出來たぜ。おらが番にはかういふ筋に書くべヱ。手輕くつてとんだいゝ」呑「さうよ此位ひッかつけば澤山だ。是へちよいとした落をつければやんやだ。なんと追出さればなしもあんまりくやしい。船へ行つて一陶下げて來て、二人で隣の茶屋へ這入つてぐい〳〵呑んで、アバのやらうに氣を惡くさせてやらうではねへか」出目「イヤ〳〵そんな事をいふと、左次さんが又小言だ。それよりのろ松はどこをうろついて居るだらう。もう出てくればいゝ、はじめてもいゝ時分だに、秋葉の方へ行つて尋ねて見よう」ト、兩人は秋葉道へ心ざし境内に至り見れば、玉垣の邊大勢人立して集りゐる故、もしやと立寄り人押分けたちいり見れば、こはいかに、のろ松は高手小手にいましめられ、そばに侍中間付添ひてゐるを見て、目出「ヤア〳〵ひどい目に逢つてゐるぜ」呑「さうよ、どういふ理窟か知らねへが、よもや盗人もしはしめへ。何もあんねへに繩をかけることはねへ。なんのダ折助どもたゝきなぐつて連れて行くべヱ」出目「とんだ事をいふ。先は武家方だア。めつたな事をしてこつち迄、天井見ちやアつまらねへ。慥にわるふざけでもしたらう。慮外者なら手打にされても仕方がねへ。アバ公の侍とはちがふは。マヅ譯を聞いて見よう」ト、人をわけてそばへ至り、出目「モ

ねへか、じようだんも事による。腹をたつてござる所へ、又いも顔の旦那へ向つて、アバこなんぞと言つてたまるものか。そらほど喧嘩がしたくば、脇へ行つてして貰ひませう。爰ではめいわくだ」ト、吞七を突飛し、又立戻りて出目助を引ずりだす。出目「是サばアさんや、じようだんだヨ。洒落だといふに」婆「イヤイヤわるいしやれだ。なんにしろ爰ではけんのんだ。わきへ行つて休みなせへ」卒「こりやアどうもならねへぞ、コレアバ公いゝかげんに解けねへか。いつまでりきんで居るのだ。困りきるはナ」アバ「コリヤ〱婆アかまふな〱。兩人とも覺悟しやれ」ト、立上れば、ばアは眞青になり、婆「モシ〱旦那さま、六十になります婆アが、是手を合せて拜みます。どうぞ御了簡遊して下さりまし。爰でもしもの事が有りますと、今日から商賣を休まねばなりません。ハイ一年に一度の花の三月でございます」アバ「いかさまナ、アヽ了簡のならぬ奴なれど、血をあやなさば社參のけがれ、助けにくい奴なれど、茶屋の婆アが忠義に免じ、命計りはたすけてくれう。アヽ命冥加なうづ虫めら、以後急度愼み居れ」吞「ムヽンあの面を見さつし、しかし時平氣どりにはいゝ面だナア。しかしばゝアが忠義とはなんの事だらう、あんまり文盲でをかしい。此茶屋が松ノ尾とでも云ふとうめへナ」出目「ムヽそして此ばアさんが、中氣病だと猶いゝは。松ノ尾が中氣に免じとじぐるは」婆「イヽサ何でもうつちやつて置きなせへ。おれが命乞をしたから、早くそつちへ迯げ

つたら、奥様にあはれる事も有らう」呑「何の見た所がギヤマンの船だ、ばか〳〵しい。歸つてアバ公と一所に茶でも呑まう」ト、又みめぐりへ立戻り、アバ太郎が休み居る茶屋へはいり、呑「イヤ是は、アバ之進さましばらく」アバ「ム、呑七か、ハア出目助も同道ぢやナ。コリヤア手前達も花見か」出目「ヘイ左樣でござります。あなた樣もお花見にいらッしやりましたか。成程此節は、虱さへぞろ〳〵這出しますから、御尤でござります」アバ「コリヤわいら武士を嘲弄しをるな」呑「イヱどういたしまして、武士はてうろうにはなりません。どうか致すと禪宗の坊主などがなるさうでございます。勿論昔軍の有つた時分、ひやうらうは遣ひましたさうだが」出目「しかし只今でも、あなたがおしくじり遊ばしますと、浪々にはなりますが、兎角勞の字が付いてはむづかしいと醫者も申しました」アバ「イヤこいつらは重々の過言、最早聞捨ならん」ト、刀へそりを打立ちあがれば茶屋の婆は大きにおどろき、アバ太郎を押へ、婆「マア〳〵御了簡なさつて下さりまし。コレおまへ方とんだ人だ。お侍樣に向ッてぶしつけな事許いはッしやる。そんな人は爰へは置かれねへ。はやく出てゆかッせへ」呑「行かッせへたアなんだ。此ばゞアめへ。お客樣だぞ」婆「ホンニ其樣なお客はいりましねへ。商賣の邪魔になる。早くそッちへ行かつせへ〳〵」ト、外の方へつき出す。出目「ハヽヽヽコレサばアさんこはがる事はねへ。じようだんだよ〳〵。是いゝ加減にりきまつしなアバ公」ばゞアはうろたへて卒八が口を押へ、金郎力を出して引摺出す。婆「是お前方氣でも違ひはし

人は武士なぜ傾城にいやがられ

といふ川柳があるけれど、女は武家方の事だ。どうもさつぱりしていゝ」吾「そのさつぱりとい

ふやつが、やつぱりこつちがさつぱりしねへからの事だョ。奥女中といふと、何か不自由らし

いから格別しんかうがあるのだ。アヽどれも〳〵中肉で、しろ澤山らしい代物だ」眼七「さうよ

此椎茸からは、さぞいゝだしの出る事だらう。サア〳〵あとの方はチトむづかしいぜ。こりや

ア突こみに買ふと損をするぜへ。だいぶ落が見えて來た。チヤ〳〵、これ〳〵申し尾上樣、あ

のいぢわるいお局のトいふ形だ」吾「うさアねへ、右と左で二人づつ遣ふといふ人形だナ。ハヽ

ア秋葉がお小休と見えるわへ。イヤそれはさうト、アバ公はどつちへ行つた」眼「今みめぐりの

茶屋に見えたが、野呂松はどこをうろついて居だらう。ぜんてへこゝら迄一所に來ようといつ

たに、先へ來てしまつた」吾「何サのろ公もあの形で、道々なぶられるをせつながつてよ」眼「さ

うさ淺草の通りから、氣違にされてもつらからうナア」吾「イヤ今日の催はきつとはねるだらう。

のろまめへうまく案じたョ」眼「さうよ、アヽしかし氣狂のうちがよつぽどつらいぜ。あんまり

色氣がねへナア」吾「どつちしてもねへ色氣だからやけでいゝ。イヤほんに此樣に來てはあんま

り來過ぎるだらう。奥樣にひかれてツイ、うか〳〵來た」眼「マダ〳〵早い。もう少しついて行

う」のろ「アバ公との立廻はどうだらう」左次「イマ〳〵これはモウなしがよからう。なま中岡で立廻らしい事があつては、見物にかんが付いてわるからう」ツブ「其のタテが貰ひになつては、己がほね折がむだになるゆナ。いま〳〵敷イ。舌をくつたも犬死だ」左次「ハヽヽヽヽ違へねへ〳〵。サア〳〵船宿へ行くものは早く出ねへか。眼公おだるさんを頼んで來さつし」ト、それ〳〵に手配をさだめ、やゝあつて支度とゝのひければ、皆々ぬけ〳〵に出てゆく。

大江戸の名所多きその中に、月雪花の絶景を兼備へたる隅田川、實にや賑ふ花見月、歌人雅人はいふもさら、親の代より仕出したる、伊勢屋の亭主出ぎらひの、内田の女房かしこの嫁、鬼を留守居に命のせんたく、かせぎ男も繰女も、花にうかるゝ其人に、またうかされて出る人と、群れつどひたる隅田堤、崩るゝ許りの人足は、蟻の往來にことならず。彼の催の人々は、かねて期したる手分の通り、アバ太郎は侍のこしらへ、呑七出目助兩人は後見の心にて、そこ爰とぶらついて居る。出目「チイ〳〵呑公見さつし、うつくしい〳〵。ハヽア奥樣はおひろひだナ」呑「ほんにこりやア綺麗だ。イヤ大相な女中だナア。奥樣は日傘でかこつてさつぱり見せねへは。おだいじのものだが、御無心ながらちつと見せて下されば、いゝナ」眼「取巻てるのは、どれも一粒えりだ。アッア、りゝしいもんだ。なるほど、

うはおれがたらしこんだけれど、夫より卒公は、又雪隠へ行つて手を洗ッた雫をたらしこんだから、實にきたねへ事はきたねへのよ」左次「ヤア〳〵大變な事をいふ。道理でうぬらは喰はねへ、いま〳〵しいやつらだ。ヲヽきたねへぞ。ゲッ〳〵」アベ「聞けばきくほど胸が。アヽゲエイムヽペッ〳〵」呑「なる程だうりで、鹽がちと辛くつて、おつな匂がすると思つた。ゲッ〳〵」卒「ハヽァその匂は眼公が鼻紙の匂だ。すきげへしだからくせへ筈だ」左次「エヽ〳〵はなつかみまで入れたか、そりやァ又どうして入れた。イヤ〳〵聞くめへ〳〵。もう〳〵なんにも言はずに居てくれろ。聞けばきく程、ゲッ。胸がァヽヽム、ゲロ〳〵〳〵」是につゞいて惣座中小間物の出見世にて大さわぎとなる。此うちいろ〳〵をかしき思入草稿あれども、丁數かぎりあればぐつとはしをる。暫くあつてやう〳〵靜り、腹直の酒にてみな〳〵氣色を直し、左次「サアだれぞ駒形へ行つて、船を拵ておくがよからう」出目「さう〳〵しゆんはづれだから、すぐにといふ譯には行くめへ」アベ「さうよ役者の外は先へ行くがいゝ。そして船宿もその味ひを知らずではいかねへから、船頭にすつぱり相圖をのみこませて置くがいゝ。サア〳〵早く行つたり〳〵」左次「のろ公は此袷を裏のおばさんの處へ持ッていつて、引拔のあんばいをよく敎へて頼まつし。そして船には婦人がなくつてはつまらねへから、おだるさんを頼んで連れて行かう。今日はおれも假成に彈けさうだけれど、二挺だと直いゝ」卒「所作の方はたいがい夕きまつたから、もう稽古はいゝとして、はやく出かけよ

さう、さめてはいかねへやつだ。「アノ手ぎはではどんなこせへやうをしたかと、蓋をとりやア、水雜炊とやつたナ。出來た〳〵」アバ「そいつはおつに氣どつたわへ、妙々。中へなにを入れた」眼七「ヱ、中へか。ヱヽ、菜とヱヽ」卒八と顔を見合せ、「菜計りだつけノ」卒「さうサ、マア菜計のやうなものサ」左次「なんのこつた、樣なものがをかしい。サア〳〵眼公盛り出さねへか。ヱヽ七めんどうだ。てん〴〵に手盛とやれ〳〵」アバ「アヽ妙々妙鹽梅だ。うめへ〳〵」ツブ「おやア、舌へ染みて熱いものは少々難儀だ」卒「どうだ、皆がうめへか。ヤレ〳〵ゲヱイ。鹽加減はどうだ。ゲツ〳〵」左次「何だ。人の物を喰ふそばで、ゲイ〳〵と小ぎたねへ男だ」卒「ヘン、ゲイぐらゐがきたなくつて、よく雜水を喰ふぞ」左次「ざふするが何できたねへものか。眼公も卒公もナゼくはねへ」眼七「イヤ〳〵大嫌だ。人の喰ふのを見ても胸がわりい」のろ「ナゼ又そのやうにきたながるだらう。をかしいノウ」アバ「ナニサこしらへながら、みづッ鼻をたらし込ンだとよ」眼七「コウコウだれか見て居たさうだ」ト、卒八が顔を見る。アバ「これほんとうに水ツ鼻を落したか。おらアじようだんにいつたら、チキ白狀におよんだ。ヤア〳〵とんだ物を食はせた。ゲヱイ〳〵」のろ「いやはやとんだやつらだ、是はたまらねへ。ゲア〳〵胸が、アヽどうもペッ〳〵。だれだ眼公か卒八か」出め「どつちにしてもきたねへにちげへねへ。ゲツ、アヽたまらねへ〳〵」眼七「有や

つて食物の上へ濡手を出す事もねへ」卒「こつちは食物とは思はねへ。くへねへ物だと思つたからヨ。是がほんの手水の手から水がもつたのだ」眼七「イヤ水ツぱなのうちは俺も食ふ氣でおつたが、跡二味の調合で、ぐつと食がすゝまなくなつた」卒「おまけに鼻紙も、三四度もお役をつとめたやつだ。ならびに袂くそなぞも、少々是をくへば、がうぎなきほひだ」眼七「むかし幡隨院長兵衛なぞは食つたさうだ」卒「幡隨院長兵衛でも、誓願寺半兵衛でも、是計りは食へめへ。アヽゲツ〳〵」眼七「おれもをかしくゲエイ。モウ〳〵二人は喰ひッこなしときめよう。アヽ引ゲエゲヱ」ヘ、ト、兩人は胸をわるくしてゐる處みな〳〵湯上りにてかへる。のろ「アヽ引いゝ湯であつた。コレ〳〵お茶をくまねへか。氣のきかねへ三助どもだ」眼七「まだ茶が出來るものか」左次「ナンダまだ茶も拵へねへのか、ばか〳〵しい。なにをして居たのだ」眼七「何をしてゐるものか、雜水をこせへてゐたのよ。さういちどに兩方出來るものか」出目「兩方だとつて、別に手間のいる事では有るめへし、茶釜と兩方火を焚けばいゝに。イヤモウいつかうなトンチキだゾ」眼七「夫に眞木が生で、一處さへいぶつて計ゐて、やう〳〵焚いたものを、いゝわさちつと待たつし。ぢきに涌く」ト、又火を焚付ける。ツブ「いやはや不始末な事だゾ。二人が〳〵ナゼさう氣が利かねへノウ」左次「アノわくうち待つてゐると、雜炊がかたまつて仕舞ふだらう。マアやつつけよう。其うちすこしは湯もぬるむだらう」呑「さう

もきたなしにちげへねへ」眼七「ナニその氣で脇の方を食はつしナ。そつと盛ればいゝ」卒「わきがいゝか中が能いか知れるものか」眼七「それもさうさノ。かういふ時は青ツぱなだと、かたまつてるから、有家が知れていゝけれど」卒「ゲエイ〳〵。おらア食はねへヅ〳〵。ゲツ〳〵」眼七「そんねへに、きたながつてくれる事アねへ、頼母しくねへ男だ」卒「ばかな事をいふ、頼母しいの頼母しく無へのといふ譯ぢやアねへ、虫がきらふのだから仕方がねへ。無盡の断でも云ヤアしめへし」眼七「それでも飯をみんな入れて仕まつたから茶漬とはいかねへぞ」卒「どうするものか仕方がねへ。干死ねばとつて夫りやア食へねへ」眼七「足下は食はずはいゝけれど、みんなには沙汰なしだよ」卒「知れた事よ。そりやアいゝが、眼公紙を一枚くだつし。お下屋敷へ御幸がある」眼七「落しがみなら火鉢のひきだしダ」卒「ヲツト有馬山」ト、雪隠へかけこみ、しばらく有つて出てきたり、手水鉢にて手をあらひながら、卒「チヤ爰のうちのは手拭かけずだの、眼公ちよつと借してくだツし」眼七「ヲイ袂に有る。ソレだしな」卒「鍋をおろしたの、何だ又中をのぞいて居るの」ト、いひながら、眼七が袂へ手を入れる時、手をあらひし雫を鍋の中へポタリ。眼七「エヽコレサ手水の雫が這入るは」卒八はうろたへ、眼七が袂より古き鼻紙とともに手拭を引出し、同じく鍋の中へはながみを落す。眼七「ヤア〳〵モウ〳〵かなはぬ〳〵」卒「なんの蓋を取つて置くから悪りい。中を見て居たとつてはじまらねへ事だのに、段々つみをおもくしたア。どうせこつちは食はねへ氣だからかまひはしねへが」眼七「それだと

奇妙だ、あつさりしていゝもんた。それとも悪いといふやつは、食はせねへ計りだ」がん「ちけへねへ。そこで、鰹節をどつさりかいてくだつし。したぢは此位でよからうノ」卒「ドレもうちつとたんとでもいゝ。雑水はうすいのがいゝ。ヲツトよからう〳〵」がん七「イヤモウ此眞木にはこまるぞ。又いぶりだしたは。此又火吹竹はなんだらう。さつぱり役にたゝねへ。大家様と違つて、吹竹の尻の穴は、なりたけ小いがいゝもんだ。ヲ、ウいぶるぞ〳〵」卒「菜をきるべヱ。こりやア洗ツて有るノ、よし〳〵。アツア手鍋さげたり水仕業、ア浮世ぢやナア。此うしろはおつな合方へ碪を入れて貰ひてへ」眼七「このうしろなら惣雪隠が有る計だ。それにしても大相いぶる事だぞ。もう飯を入れてもよからう。ヲ、いぶい〳〵」ト、顔をしかめながら鍋蓋をとり、飯を入れてかきまはし、眼七「卒公此くれへなゆるさでよからうか」眼「ムヽよからう〳〵。アヽソレ〳〵水ツ鼻が、アヽあぶねへあぶねへ」チツト眼七はすゝりこめども間にあはず、ポタリ〳〵と二雫ほど鍋の中へおとす。卒「ヤア大變々々事こはしをやつたぜ」眼七「己もすゝつたけれど間に合はなんだ」卒「すゝらずと手のかゝとで撫上げればいゝに」眼「さうやればよかつたが、其期に及んでは、どうも當意卽妙とはいかねへもんだ。おれもまだ水ツぱなの方は素人だ。イヽどうする物か仕方がねへ。見ぬ事淸しだア。折角こせへて、是しきの事で捨てられもしねへ」卒「あんまり是しきな事もねへぜ。そして見ぬことなら淸しにもせうが、見た事はどうして

敵兼帯でござる」左次「どいつも〳〵火がたかぶつて居るから、いけるもんぢやアねへ。そんなら拳でやるがいゝ」出目「よからう〳〵。狐でいくべヱ。みんな一所がいゝ。一人勝ひとり負は抜けて、残つた者を三助としよう。しかしひとりでは誰にしても、あんまり可愛さうだから、三助役を二人こせへよう」卒「よし〳〵サア三打だよ」のろ「夫きたシヤン〳〵。ヲヤ左次さんナぜ見てゐる」左次「なんのおれはせずといゝは。此家の主だものを」のろ「何々あるじでも内痔でも用捨はねへ。ひつ遣ウ〳〵」左次「ヘンかげまの夜鷹ぢやアあるめへし」眼七「あんまりあるじあるじと内びらをきると、居候に居てやられねへからイヽ」呑「サア手を上げた〳〵」左次「なさけねへやつらだなア。よし〳〵サアこい。アヨイ〳〵ヨンヤサ。まて〳〵、ヤア〳〵卒八眼七が鐵砲で、あとはのこらず名主。ヤ奇妙々々」アバ「御苦勞ながらふたり〆六助どん、早く頼むヨ」のろ「サア〳〵こつちはお風呂へ召して來ようナア呑公」出目「みんなが行つてくるうちこせへておかつし。一人は爰へ來てお床をあげろヨ。ヘンいゝ心持だナ」こよりみな〳〵すてぜりふにて楊枝をくはへ、湯へ出て行く。跡は卒八眼七さしむかひにて、眼七「いま〳〵しいめに逢ふナア」卒「コレ見さつし、床もあげずに行きやアがつた」ト、小言たらだら手水をつかひ、卒八は床をあげてさうぢをする。眼七はへつつひを焚付ける。眼七「ふけへ氣ナもえねへ眞木だぞ。ヅブ生木ださうで烟ツて計り居るは。なんと味噌をするも面倒だから、醤油で水雑炊とやらかさう。菜も少しあるし」卒「猶

らいゝ馬鹿どもだぞ」眼七「湯へ這入ッたとつて、金時にかなふものか」左次「エヽいゝかげんにしろへ。イヤハヤどいつも〳〵、床放れのわりい事だ。夜著を脊負つて起きかへつたざまは、お菰が蒲鉾小屋にゐるやうだア」呑七歌右衛門のこわいろにて、呑「葵下坂二ツ胴。パッタリ」左次「どうしてさう味くは見えねへ。伊賀越の般若坂でして居らア。サア〳〵みんな一所に巣立だ〳〵。ヤレ〳〵ふびんや、今朝は圖武州チウの音も出ねへナ。舌はどうだ。ちつとはいゝか。しかしひとりづつも口のへるもよからう」圖武「チウ〳〵夫へその位なことは手輕いもんだ」呑「ハヽヽヽハとんだあどけなくつていゝ。よつぽどおもしれへ〳〵」ヅブ「餘い面白もくもねへ。ぢゐッてへ」アバ「ハヽヽヽいゝ〳〵。有難へ〳〵」ヅブ「なんの有がてへ事が有ゆものか。なんでも人の悪い事といふと、噎がやつがゆ」出目「イヽサ〳〵坊はいゝ子ダヨ、かんにしろかんにしろ」左次「イヤそれはさておき、なんと二三日飯をくはねへやうな心持だが、腹直しに今朝は雑水としようではねへか」眼七「よからう〳〵。ろくに飯といふものを食はねへから、お冷がどんと有るからちやうどいゝ」呑七「奇妙々々、眼公早くやらつし」眼七「やらしも能く出來たア、おれにこせへさせて食ふ氣か、押のつゐゝ。呑公やつて下ッし」呑「へンこつちは座頭かぶだゾ。平日は兎も角も今日は大切な身分だ。アバ公やらつし」アバ「此方迚も其通り、立唄立

つてどうしたよ」呑「そこでお袋めが、いゝ鹽梅に、呑さんごめんなせへ、ちよつと湯へ這入つてまへります、ゆるりとおあそびと、ずつと出て行き、あとは差向となつたから、是ぞ天のあたへと、段々噺をたぐりよせて來た所が、とんだ受がいゝから、彼の息子の事をいひ出すと、ヲヤあのヤシヤブシとやらの事かへ。わたしは又、トいつて、につこり笑つてゐるから、おめへ誰がことだと思つたといつたら、わたしやアおまへかと思つたとおつになつて來たから、おれなら又どうする氣だといふと、おまへならどうともと、パツト顔を赤くしたから、さすがのおれも、顔が少しほか／＼としてきた所を、手で撫でると、吹殼をたゝきつぶした物を、びつくりしめへ事か、腹が立つめへ事か」の呂「コレ今までのは夢のはなしか、べらぼうめへ。人にはまじめに挨拶をさせやアがつて、いめへましい」呑「イヤサゆめとは思はれねへ。あんまり殘りをしい」左次「こつちはまた寔とは思はれねへ。夢ならばずゐぶんありさうな事だ。しかしあんまりたわいのねへことを、馬鹿長くひつぱつたぞ。おもしろくもねへ」アバ「さうサ、それにしては何といゝ天氣ぢやアねへか」の呂「さればサ是程の日和に、夕部圖武公が舌を喰ふといふもふしぎサノ」出目「そりやア舌を喰ふ筈だ。今年は江ノ島に開帳が有るものヲ」卒「どうりで犬がとほぼえをすると思つた」左次「コレてへけへにして湯にでも行つこねへか、朝ツぱらか

ウ」吞五「仇名だはナ、アノつらを見ねへ、紺屋で遣ふヤシヤブシのやうだぜ。アバ公より九石もつよからう。おまけに所々玉子トヂが有つて、けんぽ梨子のおかげで、鼻の穴はちつと計りたすかつたが、上唇と鼻の先ととぢ付いて、なんでも犀角と角兵衛獅々で、半身上ふるつたといふ面で」ツブ「面のいゝたてはてへげへにさつし。おれがつらまで引ごとにならべ立つて、おもしろくもねへ。そして其面が、イヤつらぢやアねへ。其息子がどうしたといふのだ」吞五「イヤサその野郎が、つらにも似合はねへやつし形で、馬鹿にのろいやつヨ。丸でアバ公さノ。横町の文字焼といふ豊後の師匠にひどくのろけて、おれに取持つてくれろといふ譯だらう。所でおれが事だから、何でも四文と呑込みやした。なれども男はわりいが、アバ公と違つて金満と云ふもんだから、ひよつと慾心で出來ようかと」アバ「コレ番毎アバ公〳〵とあんまり安ッぽく引きだすなへ、いめましい」の五「ハヽヽヽ、イヤそりやアいゝが」アバ「ムンニヤよくねへ〳〵」の五「その事ぢやアねへは、呑公なんト其一件はおもしれへぜ。思入れ煽り付けて、おごらせてやらうではねへか」吞五「そこで聞きねへ。おれも其氣だから、文字焼が所へずつとしかけた所が、ついぞ行きもしねへうちだから、何だか間がわるさうなものだが、さうでねへノ」卒五「ソリヤア其筈だアお袋が古狸に、娘が九尾の狐だものを」吞五「狐でもいゝ、うつちやッて置かッし」の五「それから行

ア眼の中に何か這入つた。コリアたまらねへ。ア、いてへチ、熱イ」左次「ハ、、、、、堪忍堪忍、こりや熱かつたらう」卒「寐耳に水でさへおどろくさうだに、寐顔に火ではたまらねへ筈だ。ハ、、、、」左次「あやまちの功名、今朝計は床ばなれがよかつた。こきみよく飛起きたぞ。ハ、、、、」吞「わらひごとぢやアねへ、てひどいことをする。だれだ、アバ公か」アバ「なんだか今のさわぎで目をさましたものを、どうして知るものか」吞「野呂松ダナ」のろ「可愛さうに、びつくりして虫がおどろいたから、胸をさすつて居る處だ」吞「イヤ／＼卒八だナ卒八だナ。此べらぼうめへ、今まで口をきいて此せんぎにかゝつたら、鼾をかきやアがるは。コレナゼあんないたづらをした」ト、馬乗に乗りのどをしめる。卒「ア、あやまつた／＼、わざとしたのではねへ、麁相だヨ／＼」のろ「麁相だとつてしかみ火鉢と間違はしめへし。イヤしかしよく似ては居るノ」吞「そばからあんな事をいふから、直々ゆるせねへゾ」左次「イヤ有やうはおれが吸付けて貰うト云つて、ツイ火皿から抜けたのだヨ。わる氣ではねへから、堪忍してやらつし」吞「ム、さうか、そんなら了簡してつかはさう。ソウ事がわかればいゝ。しかし事は分つたが顔はやつぱり熱い」出具「そのうへ厚くなつたら、面だか踵だか知れめへ」吞「イヤ面の皮が厚いといへば、菊石屋のヤシャブシの」眼七「ヤシヤブシとはなんだ」吞「ソレ菊石屋の息子よ」眼七「フンあれか、をかしな名だノ

花暦八笑人 二編下之巻

夢ばかりなると詠じたる春の夜のみじかきも、悠人の常暁をおぼえず。夜に日を繼いで高鼾、明けつぱなしたる引窓より、光々たる日ざしに有明くらく、晝豆腐の聲まくらにひゞき、眼七漸目をさまし、枕元のきせるにて、なげちらしたる烟草入をかきよせ、尻から煙の出るほどたばこも呑み、灰吹のこぼれる程唾をはきため、少し人心付きしにや、眼七「サア〳〵おそいぜおそいぜ、起きたり〳〵」卒八「眼公一服付けて下ッし、さつぱり目がさめねへ。眼公の早起計りはかんしんダヨ。サア〳〵今日は大事の日だ。みんなが起きたり〳〵」左次「まだあんまり早からう。アヽやかましいやつらだぞ。チイそこから一服吸ひ付けて下ッし。どうも目が明かねへ」卒「ナニうつちやッて置いても、二十日たつと明くもんだ。ソレたばこ。モウちつと手を延したり」左次「チツト來た。アヽもつと手をのばさつしナ」卒「無理ナ事計りいふぞ、猿猴ぢやアあるめへし。モウ是で右の手は一ツぱいだア。おめへモウちつと」ト、いふうち、雁首をさかさに持ちふりまはす故、ふきがらぬけて、仰向に寐て居りし呑七がひたひ口へポツタリおち、コロ〳〵と鼻のわきへころげるゆゑ、うつゝ心に手を出してたゝきつぶせば、顔中火だらけとなる。びつくりして飛起る。呑「アツヽヽヽなんだ〳〵、どうする〳〵。ア

郎の誠と、トいふ玄關付で、アバ公の舌ア喰ウあれエバア」左次「モウいゝは、ア、ひつッこい。コレ怪我人が何かをかしな手ッ付をするぜ。ナンダアバ公眞似をすらア。硯と筆をよこせといふのだ。何か遺言でもするのだらう」のろ「ソレ筆ヨ、ソレ紙。ナンダト、こつちはしやれどころではねへ、舌、喰つて、こてへられねへ。やつぱりしやれやアがる。ハヽヽヽ」くるしきツブ六がしやれにて大笑となり、是よりツブ六に藥など付けさせ、皆々も茶番をふくみでやすみける。

アないよ」眼「こつちの内をばよく／＼見くびつてゐると見えるノ。アツア、かうも武運につきはてたかチエ、」左次「コレサむだツ口をたゝかずと、早く坊を連れて行かツし。おだるさん大きに、そんならあした又チヨイトやつておくれ」おだる「さやうなら、あしたははやアくやりませうネ」のろ「ぐつと早く四ツ起だよ」おだる「チホヽヽヽ、ハイどなたも明日、ヲヽやかましい子だノウ」ト、おだるも早々かへり行く。左次「坊は怪我でもしはしねへか」呑「何々よつぽどはなれて居たから、怪我はしねへが、吃驚したのさ」卒八「イヤ坊より圖武公がどうかしたぜ。チイ圖武公々々々、何、何だと、何をいふかさつぱりわからねへ」のろ「ホンにわからねへ事をいふは。中氣にでもなりはしねへか」卒「アレかむりをふらア、中氣ではねへとよ」左次「ドレ蠟燭をもつて來さつし。アヽ口をどうかしたのダ」アバ「ムヽわかつた／＼。顎をひつかついで、放り出したから、舌でもくつたらう」呑「アヽさうだ／＼。竪にかむりをふるは。ハヽヽヽ、こいツアをかしい」のろ「そんなら寒の紅がいゝ、はやく付けてやらつし。内にはねへか」左次「どんな頭取でも、寒の紅まではわたすめへ。馬鹿々々しい役者だ」アバ「紅ぐらゐでは直るめへ。なんぞ藥を買つてこよう」呑「あしたの花見は喰ふことが出來ねへで、いゝ氣味だナ」のろ「そしておしやべりも出來ず、アヽかわへさうだナ。是がほんの舌喰みじめといふのだ」呑「アバ公だといゝ洒落があるけれど、女

おれがあごへ、さうだ〳〵。ソレヒヨイ、ア丶わりい。ソウ頓馬ぢやアいかねへ。雙方とたんにはずんでヨ」アバ「よし〳〵そんならあごへ手のかよるが相圖、グットやるぜ」ツブ「思ひきつてやらつし。あぶなくもなんともねへ」アバ「がつてんだ〳〵」ツブ「ソレ背中があたッた」アバ「〆めた、アヨ、イ、ヤサ」ト、力まかせに背負上げる圖武六もはねかへるはずみに、掛行燈をけおとしながら、アバ太郎が前へ地響させてどつさりたふれる。巨燵に寢入りゐし子、この音におどろき、ワツト泣出す。呑七「ヤア〳〵大變々々、〳〵大方こんな事だらうと思つた」アバ「どうしてアノ行燈が落ちたらう。チイ〳〵二階からあかりを持つて來てくれねへか。いけねへ〳〵」このさわぎゆゑ、皆々のぞき見れば、下は眞暗闇、卒八は三味線を取り、わるいカン所にて、チ、、、チ、テ、、、、ボチン　左次「エ、古いは〳〵、そんなことより早く明りをやらつし。そしてモウこつちはたいてへ筋は通ッたから、跡は翌日の事としよう。みんなが下へあゆみねへ。おだるさん早く行きナ。坊がどうかしたさうだ」ト、燭臺をもち皆々おりてくる。左次「どうした〳〵、またとちぐるつたらう。久しいもんだ」のろ「チヤ〳〵油だらけだ。コリヤア大變な始末だ。ソレ〳〵左次さん、そこは油だヨ。エ丶裾を引きはしねへか」左次「ホイ〳〵、いやはや不始末計りするにはこまるぞ。マア坊をおこしてやらう。オヽいゝサ〳〵、堪忍しな〳〵。馬鹿おぢイどもには困るノウ。サア〳〵こりやア素人では直りさうもねへ。おつかアへ連れて行くがよからう。そしておだるさんも、あんまりおそくなつたらう。眼公おくつて行かッし」おだる「ナアニこッちに居てはあんじる事ぢや

負はせてよこすよ」また二階より、眼七「左次さん〳〵、早く來てくれねへか。モウ少しでまとまる所だ」左次「チイ〳〵、今いくよ。そんなら出目公頼んだよ。アバ公も圖武州も車輪でやらつしョ」ト、いひすて二階へかけ上る。出目助も損料屋へ出てゆく。ツブ「サアやるべヱ」アバ「ムヽやるべヱはいゝが、圖武公タテはチヨイ〳〵と手先をさはる計りで行きてへもんだ。どうも足下のやうに、むやみに腕を引掴んだり、ひつぱらつたりしては、あんまり白ツポイ。相手になる者が怪我をするは。そして大相な爪のはえやうだゾ。七種の儘か、じよむせへ」ツブ「イヽワサ、それだとつて、夜夜中爪もとれねへは。其心持でおめへの方で氣を付けてくんねへ」アバ「へン熊と角力を取りはしめへし」ツブ「ときに斯ういふ手を付けて、野呂松を一番よわらせてやりてへ」アバ「どういふ手だ」ツブ「マヅどうかいふ手續から、雙方行違つてよろ〳〵と跡ずさりをして、背中と背中が當ると、マア爰へ來さつし。後合に、ソレかういふ身に、首が打違へになるだらう」アバ「ムヽ」ツブ「ソレうしろへ手を出して、おれがあごへ兩手を掛けて、グイト前へこゞむはずみに、おれがヒヨイト足を上げて、後返をして、向ひ合ふといふ手だ」アバ「ムヽ、コリヤアよからう。しかしさう美味くいくか」ツブ「おれがすればいくが、野呂松にはおぼつかねへ。そこであいつをいじめてやりてへ」アバ「ムムいゝわへ〳〵。ドレ一ツやつて見よう」ツブ「サア、ソレかう背中が當つた。ソレ手を上げて

出目「圖武公もまたなんだらう。そして少し登つたようだッケ」ツブ「ナニあつくもならねへがノ」どん「ぬるくもなかつたさうで、天窓から湯氣が立つは」ツブ「はなさねへでは男がたゝねへ樣な心持になつたからヨ。アヽ息がはづむは。呑公湯でも水でもくれねへか。氣のきかねへ後見だぞ」どん「ヘン腕の捻りッくらに、後見もさるぼうもいるものか」左次「なんとふざけッこなしとして拵へてくれねへか、野呂公は中々出來るぜ。それともそつちで出來さうもなくば、たのむめへ」アバ「ヘン是しきの立廻を、出來るも出來ねへもいるものか、ナア圖武公」ツブ「さうス、ずんどさゝいな内證ごとだ。おかまひなくとまづ〳〵二階へ」左次「どいつらも屁ッぴりのくせに、口計りわる達者だ」ト、いふ處へ二階より、卒八「ヲイ左次さん〳〵、チヨット來てくんねへ。稻荷町に何をしてゐるのだ。そつちはどうでもいゝわナ、こつちが肝心だア」ツブ「ナンダト、がうせへ安く取りあつかうナ。コレ金箔のついた」左次「イヽサ〳〵、アヽ世話のやけたやつらだゾ。そこで衣裝だが、翌日では間に合はねへとつまらねへ。上の引拔衣裝は、こつちで袷を一枚引ッぼどいてこせへずばなるめへ。それは翌日でもいゝが、下の狂亂の形は今夜かりて置くがよからう。出目公今度の隱居役に一走いつて來てくだつし。先で寐てはいかねへぜ」でめ「チイ〳〵いつて來べヱ。こつちから來たといつたら、よこすだらうノ」左次「註文さへわかると、小僧に背

左次「此手合は何をしてゐるのだ。アバ公どうするのだ」アバ「よわい野郎だ。くひつくナ」左次「コレサいよ加減にとちぐるはねへか、ばか〳〵しい。そして立廻は出來たか」出目「その立廻があの通りだ」左次「イヤあの通りぢやァねへ。足下も又見てゐる事もねへは。てん〴〵にちつと身にしみさつし」出目「さうだけれどタテを付けるに、とりさへ人もいるめへと思つて見てゐた」左次「コレアバ公もマアはなさねへか」アバ「おれもはなす氣だが、放したらむしり付きさうでめつたにはなせねへ」左次「イヤハヤ呆れきつたもんだ。コレサ圖武公、ヲヤ〳〵まつかになつ居ア。いよべらぼうだ」どん「あんまりはなれずば、水でもぶつかけようか」ツブ「どうだ、サアあやまつたか」アバ「胸倉をとられて、はなすことも出來ネへくせに、あやまつたかもをかしい」ツブ「あやまらずば」左次「エヽいよ加減にしねへかといふに、呑公笑つて居ずと、來てひつぱなして下ッし」ト、やう〳〵引きわけける。どん「なるほどハヤつまらねへ所で、惡意地のはつたやつらだ。ヲヤ〳〵圖武公は二ッの鼻の穴では息がしたりねへやうだ。弱い男だ」ツブ「本氣になれば、直にひつぱなすけれど」出目「ナンノ本氣にならずとものことよ」アバ「ヲヤ〳〵コレ見てくんナ、手をばらがきにされた。アヽいてへ〳〵」左次「それまで我慢して居ることもねへ、馬鹿々々しい」アバ「あんまり圖武州のけんまくが恐しくなつたから、だん〳〵氣味がわるくなつて、はなせなんだ」

て引戻すは」ツブ「それで鼻血の難はのがれた」アバ「コレサしやれて居てはいかネへ。そして其様跡ずさりをせずと、たゞ腰で少しこたへる思入をさつしナ」ツブ「チツトかうか」どん七「ア、アいやな尻をするぞ」アバ「何を其様尻をふらずといゝはサ」ツブ「それでも堪へる身をしろといふからヨ」でめ「さう尻をふつては、もりさうなのを堪へるようだア」アバ「ソラ左の手で、おれが手を拂ふ、ア、いてへぞ。ナゼそんねへにひどくするヨ」ツブ「堪忍しねへ、どうも乗がくるとツイ」アバ「ナンノ乗所か、マダ立ツた計だ。ソレ腰の手を拂はれたから、左の手を肩へかけて引く。今度はグツト引かへされた心持ですこし反るだ」ツブ「斯うか」アバ「マアさうヨ。そこでト、ム、、そこで胸倉だ。ソレ後から斯う取るは、とりながらキリ／＼と引廻す。こつちへむくダ。エ、、さう廻れるものか。こつちへヨ。ヤ、さうむいた。そこで兩手で拜打に、胸倉をうちおとすだ」ツブ「どう」デメ「かうヨ」ツブ「ム、それよりは、かう手をかけて、ヤ、かうねぢるとぢき離れらア」アバ「アタ、、アタ此べらぼう、ほんとうに力を出しやアがるナ。はなすめへと思へばこつちも又斯う取るは」ツブ「さう取つてもかまふものか。やつぱりこつちは、ヤ、かうして」アバ「ヘン其くれへナ事ではなすものか」ツブ「はなさずば又かうやつてはな」アバ「爪をたつてもいたくねへぞ」ツブ「そんなら拳固でソレ／＼」アバ「なんとして雷が鳴つてもはなさねへゾ」ト、互に金剛力を出していどみあふ。左次郎は何心なく小用におり、此體を見て、

度の催には人に氣をもませる事はねへ。自分の茶番ぢやァねへか」のろ「ヲツト承知〳〵、サァ行きやせう。圖武公立廻を美味く頼むぜ」ツブ「へンだまつて行かッし。箸を持つて喰ふ計りにこせへてわたサァ」のろ「ハイ〳〵善好さん宜くおたのみ申しやす」〔ト、のろ松は二階へゆく。〕ツブ「アバ公何でもすつぱり拵へて、びつくりさせようぜ」アバ「ムヽそしておれが役廻は此タテ計だから、所作よりタテでぶツ〆てくれべヱ」ツブ「おもくれへ〳〵。マヅ荒まし筋を立てゝネヱ、それから小枝はおれがふりを付けよう」出目「よからう〳〵。兎角タテは氣どりが肝心だぜ」どん七「ちげへねへ。しかし氣どりよりは、葉どりが下手だと呑がわりイヨ。どうも素切といつても、とかく山を入れて」アバ「イヽサ〳〵、わかつたヨ。隨分洒落るもいゝが、あんまりかんで含められるからうるせへぞ。所でマアたつて見よう。どうも素人細工では、胸でこせへて、チヨイトおつ建てると云ふ譯にはいかねへ。なんでも最初から立つて、押合つて見るが一番早いヨ。そこから二人で手續をおぼえて下ッし。サァ圖武公」ツブ「ヲツトそれきた。先胸倉へくるか」アバ「ムヽしかし、てんから胸倉でもあるめへ。かうだからトマア向へヅカ〳〵と行きナ」ツブ「ヲイづかづか」出目「口でいはずトいゝは」ツブ「それでもほんとうにヅカ〳〵と行くと、壁に鼻づらをぶつからヨ。ソレ只ヅカ計でせへモウ此くれへだ」アバ「よく言葉質計り取るぞ。それ帯へ手を掛け

へ。マヅ卒公と眼印がよからう。ナア野呂公」のろ「さうよ、とてもおれの氣に入ッたしろものはなし、仕方がねへ」眼七「ハイ〳〵お氣にはいりますまいが、御不承なさつておつかひ下さりまし」左次「イヽサうらみッポイ事をいはずと、二人で立廻でも案じさつし。そこでこつちは二階にしよう。爰で踊つたら又口がやかましからう。おれが見とゞければいゝ。卒公と眼公計り來さつし。見物にまじつて居る侍はアバ公がよからう」アバ「またおれが侍か、チヨッ。兎角にくまれ役だナ」左次「さうだけれど仕舞のおちへ來て船へぴよいト飛込む、其形で鼓唄とくると奇妙だぜ。しかしちつとでも立廻の跡で船へ飛込んだら、息が切れてこたへさうもねへぜ」左次「そりやアいきをつく內は、大小でかけりを小長く打つて居たら、ゆるりと息はつけるだらう」アバ「ム、いよ〳〵、どうかかうかやッつけべヱ。出目公も一口やつてくれるだらう」出目「折角の賴だけれど、此節ははなはだ都合がわりいから、氣の毒だが半口と思つてくんねへ」左次「ムヽンろくな洒落は出ねへ、えんぎでもねへ。チイ圖武州、野呂公が所作ッて居るうち、のろ公が替りに、アバ公とちよつとした立廻を、つけて見てくだつし。サアおだるさん、こつちは二階としやせう。坊は寐たら、そつと炬燵へころばして置くがいゝ。卒公眼公サア〳〵、野呂公何をして居るョ」のろ「チヨツト一口元氣を付けていから」左次「ヱヽ久しいもんだ、いぢのきたねへ。今

さうでもねへノヨ。そこで今夜下見分をしようといふりくつだ。イヤかうしやせう。迚も長い事はごたいくつだから、まづ、鼓唄から「定家かづら」をずいとやつて、「いたいけざかり」トきたら、ずつとひツこ抜いて、「ふりにしことを聞くからに、ひよく連理のちぎりさへ」といふ所へ飛んで、あんまり扇々といふから、虫押に、「色にぞ出でし」ヤ、ポヽ、ポウ、チリカラ、ハア「我がうらみ」といふ所で、扇をぱつトひらいて、一ツギツクリやつて、もうけさつし、扇をば遣ひツコなしがよからう」どん「なる程それがいゝ〱。あぶねへ事はいらんもんだ」のろ「そんならさうよ」左次「そこで、ひとりではどうも淋しさうだから、「千草も冬枯れて」からは、奴をふり出して所作だてと、やらかすがよからう、花やかでいゝぜ」アバ「こりやアいゝ〱。第一ひとりでは、荒がかくせねへ」のろ「勿論荒はねへ積りだがノ」出目「所が種切の潮といふ所作で、見どころはちつと計りだらう」左次「やかましい〱。そこで二人の奴はだれにしよう」がん「これはこぎれいなものでなければなるめへ。マヅおれと、もう一人はかう見た所がト、扨扨見ぐるしい首計りだゾ」左次「イヤサとても首えらみをしては、八ツ寄せても菅秀才の一ツぶりには受けとれねへから、たゞ小氣轉のきいた、身の輕い者がいゝ」どん「小氣轉のきいたのならマヅおれだが」左次「イヤきいては居るだらうが、何分さうドタ〱したからだではいけね

いたします。御壹錢」どん「アヽ引鶴龜々々。なんでもわりイ事といふとおれに計りなすりつけやアがる。いめへましい」卒「そりやアいゝがまづ」どん「何いゝ事が有るものか」おだる「ヲホヽヽホヽ是が敵打の發端になりさうだねへ」眼七「サア〳〵坊もペン〳〵を彈きに來ました」おだる「ヲヤヲヤナゼ連れておいでだ、又邪魔をしていけないよ」左次「いゝわナ〳〵。サア坊爰へ來な。よく眠がらねへノウ」おだる「ナニサ宵ッ張でなりませんヨ」のろ「ヲヤ〳〵よくふとつとるのう。おらアモウこんな子を見ると、まことにへんな心持になつて、ふさいでくるぜ」おだる「ヲヤ子供はきらひかへ」のろ「ナアニ其くせ好きだけれど、マヅアヽいゝ子だが、此子は元だてが、どういふ譯で出來たしらんと、深くかんげへて見ると、モウ〳〵たちきれなくなるは」おだる「ヲホヽホヽヽいかナいやナ野呂さんだヨ」眼「この子をサ柏戸が、ひどくほしがつたッけ」イふ「ハア始終つよくならうといふ、見所があると見えるノ」眼七「ナアニ角力にする氣ではねへ」イふ「どうする氣だ」眼「屎をたれずば、根付にしたいとつてよ」左次「アヽ引やかましい口だぞ、をかしくもなんともねへ。時におだるさん、ちよつと、狂亂を一番彈いてやつてくんねへ」おだる「なぜへ」左次「かういふ譯だ。ちよいとした茶番が有りやす。所で野呂公が一番所作らうといふ存心だ。なんと恐しいたくらみだらう」おだる「ヲヤ〳〵それはサゾよからうねへ」左次「あんまりよさ

からふざけるのだ。今におだるさんが來ると、だつこして寝ンねしようとぬかすだらう」のろ「何もさう口ぎたなく言ふことアねへ。マヅ今度の狂言ではおれが巻軸だぜ」卒「かんちくだか、亂ちくだか知らねへが、おだるさんにだつこさせるものか」アバ「いゝはサ、此男も其様に氣をもむ譯もねへ。先で承知なら、だつこでもなんでも、いけみ出すがいゝぢやアねへか」のろ「ヘン女めづらしさうに、がや〳〵さう〴〵しい事だぞ。ほんに素人衆は、ナゼあんねへにびりつくしらん。こちとらアあのくれへナをん」裏口より、ト、いふ所へおだる「左次郎さん何御用ダエ」のろ「女ぼきやアべエるしやのうツ」卒「何だ〳〵、あのくれへな女ぼきやア、べエるしやのうとは、なんのこつた」のろ松は少し赤面して卒をにらめる、卒「ナゼそんねへににらめるのだ」左次「エヽ引やかましいやつらだゾ。サア〳〵おだるさん、こゝへ來給へ〳〵。時によんどころねへ譯で、ちよつとおめへの三絃をねがはうといふ存心だ」おだる「おやすい御用だけれど、おまへナゼお彈きでない」左次「所がこの通りの手だ」おだる「ヲヤ〳〵どうなさつたへ、けしからねへ」アバ「鈍公なんぞが、あの手を持つてゐると、安樂だノ」どん「アヽおらアあの手が有れば、芝居へ出てぶつ付二枚目。又腹が有るから拵物はよし、あくる歳は立三味線おかしらだア」アバ「ナアニさううまくはいかねへ。アノ膏薬をはがさずに置いて」どん「そしてどうする」アバ「荒打の足場からおちまして難澁

圖武「なる程かんしんだ、さう思ひきつては落せねへものだ」のろ「ナニ是は久しくやらねへからダ。ちつと手馴れてくると大丈夫だ。其證據にはきせるなんぞは始終手なれてゐるから、百發百中まちげへなしだ。アレ、ソレ、ソレ、ぐる〳〵〳〵アイヨイトナ」卒「ヤンヤ〳〵。奇妙々々。イヤ扇よりきせるにするがいゝ、狂亂の所作喜世留の手いゝぜ」左次「扇は落したら落しッきりにして、穴のあかねへやうに、ごたついても仕舞ふが、丸で所作を久しくやらねへから、ちつとも動けねへのではねへか」のろ「ナニ〳〵そりやァ大丈夫だ」どん「イヤそれが不丈夫だヨ」のろ「そんならちよッと當つて見てくんな。アバ公たちかたが、しつかりだと思つて呑れてとつちめへヨ」左次「大相計りいふから、猶安心ならねへぞ。時におらァ左の指が此通り、右の手ッ首はひつくじく、今夜は迚も彈けねへ。眼公裏のおだるさんを、ちよつと頼んで來さつし」眼七「アヽ地彈がたほでは、ちぼけて猶うごきゐゝめへ」左次「うごけずば、いつそ今の内がいゝ。押出してからは連中のはぢだ」のろ「ヘンびつくりしようと思つて、眼公はやく連れて來ねへか。いけ埒の明かねへ。そして左次さん、蠟燭を二三挺氣めへを見せねへ。どうも行燈の火ではうつりの悪いもんだ」左次「イヤハヤすさまじい劒幕だぞ。今眼公がけへると、燭臺を出させようはサ。マア〳〵笹湯がすむまでは、氣まかせにするがいゝ」卒「あんまり甘口にする

抜にしてすげかへるのだらう」のろ「やかましいわへ。そこで船の簾をぐる〳〵と巻くと、唄三線はやしまでちやんと竝んで居る。大鼓でヤア、引とかけると、唄「いざさらば、有りし雲井の花の袖、思へばかゝる執著の」とアバ公が鼓唄で、仲藏の狂亂を、丸で一番やる積りだ。ヘン兼て手練の扇が山だ」左次「ムヽいゝわへ。こいつは一番〆めるだらうナアアバ公」アバ「ムヽ本讀ではなか〳〵おつりきだが、どうも安心ならねへもんだ」のろ「なぜ〳〵」アバ「マヅ第一山だといふ扇からしてうろんなものだ。さかさにして、富士山なんぞはどでごんすといふ山だも知れねへ」のろ「ヱヽおいてくれヱ、べらぼうめへ。心得のねへ事をするものか。ヘンちよいとした所を一番見るか。ヲイ圖武公その扇を取つてくんな。來た〳〵マズ、チヤントひらく。ヱヽこんなぐわさ〳〵扇ぢやァ出來ねへ。もうちッとしまつたのはねへか」左次「そら〳〵道具えらみが始つた。ヲイ眼公、そこの袋戸をあけると、封のきらねへのが有る筈だ。一本出してやらつし」眼七「おい來た。それなげるよ」のろ「ヲット妙々〳〵、マヅふうを切つて、そこでチヤ〳〵、イヤ、是は又さつぱりひらかねへ。あんまりしまり過ぎた扇だ」左次「ヱヽよく七めんだうな事計りいふぞ。マヅ兩方の手であけさつしナ。これからが見所だ」のろ「そんなら、マヅ、チヤン、よしか、それ、それ、それ〳〵、アよんや。ホイ是はしたり一落せばひらふハリトウ」

こでそれ計りぢやア有るめへ」のろ「どうして〳〵、是からが山だ。先其形で、牛の御前から秋葉近邊、足まかせにほッつき歩くもんだから、定めて人はどろ〳〵付いて來るだらう」左次「ムムヽ」のろ「それは扨置きこゝにまたサ、三圍のがんぎに、しるこぼしが一艘付いて居やす。所へこつちからをどり狂ッて行く。そこで又見物のうちへ、樂屋から二三人まじつて居て、始終程よくからかひながらついて歩行き、馬のくつか何か、おれにぶつッつけるやつだ。さうするとおれが又其くつを投げけへすと、眼公が侍のこしらへで、見物してゐる顏へ、ボンと當ると、やほにあつくなつて、するさんとか茶山花とかきッとなつてかゝる。こつちは茶にして、げらげら笑つて居る。こらへ兼ねて、すらりひッこぬいて切つてかゝる。爰へ少し立廻りを付けてもいゝ。とゞあしらひかねて、がんぎへ逃げ下りる、つゞいて追つてくる。追詰められて見物どもに、手に汗を握らせ、あはやと見る間に、彼の小屋形へひらりと飛乘る。侍も同じく飛びこむと、船をついと押出すとたんに、おれは又家根へ迯上り、眞中ごろへしやんと立つと、爰が山だ。引拔きで上の綴がぱらりと落ちる。手拭をひよいと取つて、後へ放ると糸毛のみだしで、保名の物狂といふこしらへだが、なんと初手がきたなくつて、ぐつときれい事になると云ふもんだから、だんどりはびつくりだらう」アバ「首はやつぱりその首か」卒「それもぐつと引

れへ〳〵。なんでもたれた〳〵」ツブ「めんだうな、尻をひんまくつて改めさつし」どん「それよの
り腰の錢入をひつぱづせ」のろ「アヽ〳〵あやまつた〳〵。出すよ〳〵。うるせへ取附くなへ。
どうも男の肌ざはりは氣味がわりい。きついきれへだア。チョツいめへましい。それ百、ヘン、
とんだ災難だ」どん「あんまり人の事ばかり、わるくいふからいゝ氣味だ」アバ「笑つてやれエア
ハヽヽヽ」のろ「ムヽン智恵のねへ笑ざまだア。サア是から本讀におかゝりなさるが、どいつ
でもぐつとでもぬかすと百ふんだくるぞ」出目「がうせへむづかしいナ。ぐつと言つてもわりい
か」のろ「わりい〳〵」出目「それではおくびもされねへナ」のろ「ムヽならねへ〳〵」そつ「くしや
みは」のろ「ならねへ〳〵」どん「屁は」のろ「もちろん」左次「イヤハヤあきれた馬鹿どもだぞ。サ
アそれでいゝとして置いて、話合はどうだ」どん「おれが手拭を借りてかぶせればどうするのだ」
のろ「そこで土手通りをぶら〳〵、草履の古いのをひろつて腰へぶらさげたり、そら笑をしてを
どつたり、何でも出たらめにしやべつて歩行くだ」どん「こいつは大當りだらう」そつ「なんのあ
んなざまで歩いたとつて、大當りな事があるものか。こぎたねへ」どん「それだからよからうと
いふのよ。此又面で、なり計り立派ではうつらねへはサ」のろ「チョツ又つらを持出しやアがる。
うつちやツておけへ」どん「ほめるのだア」のろ「ほめられて嬉しくねへは」左次「いゝサ〳〵、そ

じよむせへ布子の、あちこち綻などが有つて、泥が付いたり綿がぶらさがつたり、帯は繩か何かゞめて、冷飯草履と中貫と、かた〳〵ちんばにはいて、川越の辨當のさいといふ、手拭をくるくると、米屋かむりといふ拵だ」左次「なぜそんなむづかしい手拭を冠るのだ」のろ「めんだうな理窟はねへ、鈍公のをかりてかぶるのサ」左次「鈍公足下の手拭はどんなだ見せな」どん「これよ」左「ヲヤ〳〵是が川越の辨當とやらか」のろ「おめへもやぼにくどく聞くぜ。醬油でひどく煮染た樣だといふ事よ。なんと、見てものどがかわくだらう。いつ買つたかしらねへが、ちつと洗濯でもすればいゝ」どん「大きにお世話お茶でも」のろ「飲まねへでこてへられるものか。手拭を見たら、のどがひり〳〵すらア。是を思ふとおらアほんにもつてへねへぜ。マヅ手拭、小遣、小菊、こくぶは、小娘共から仕送る。衣類持物等は歳増分後家のたぐひ」左次「このべらぼう、尻ツくせのわりい、又いびつたれをしやアがる」アバ「サア〳〵百出せ〳〵、己が手にまぜつけへしやアがる。以後外の物の見せしめだ」のろ「何々是は狂言につゞいての咄だから、まぜつけへしぢやアねへ」アバ「向島の趣向に小娘や歳増だの後家だのと入用か」のろ「入用ではねへけれど、向島だから其樣ものも出ようではねへか」卒「そんなら小菊や、こくぶや、小遣がいるか」のろ「それも壹文なしではいかれめへし。烟草も吞むだらう鼻もかまざらに」アバ「何々言譯はこ

のろ「はうすんに有りす。鶴屋南北櫻田治郎、〆めて鶴田南助と云ふたて作りだ。まづずつと」卒「大そうなはうだが、すべてずつと云出す噺に、おもしれへのはねへもんだ」のろ「エヽやかましいはへ。モウまぜつけへしやァがる。マァだまつて本讀を聽聞仕れ。エヘンそこでずつ。又顏を見やァがる」左次「コレサどうしたのだ。いがみやつて計り居ちやァわけがわからねへ。ずつとでも、すつとでもいゝとして、其先はどうだ」どん七「こうかのふみ板はづすが」眼七「いいさ／＼わかつたよ／＼」左次「イヤわかつたぢやァねへ。マァみんながちつと洒落ッこなしと極めて、しつくりと稽古するがいゝぜ」ァバ「是からかうするがいゝ。一洒落百づつ、過料を取るとするがよからう」出目「こりやァいゝ、ぶちのめすより痛へからきくだらう、しめ／＼。野呂公心置なくはなしねへ」のろ「よし／＼。サア洒落らばしやれろ、翌日の小遣だぞ。そこでまづ、大びらにずつと向島に」卒「フン引それから」のろ「それにどうした」そつ「どうもしねへこつちの事だは」のろ「エヽ引コレ五十が物は有るが、チヨツゆるしてやれ。そこで先」そつ「ず」のろ「何だと」左次「痛がするやうだ」左次「エヽ此男も、むづかしい事計りいふは。マヅ荒増正本をはなさつせへナ。向島でどうするのだ」のろ「かう云ふ譯だ。マヅ隅田川花の、エヽ引しがらみといふ名代で」左次「ムヽン大相な驚かしだの」のろ「トりつぱに聞かせて置いて、おれが形がいゝよ。

花暦八笑人　二編上之巻

久かたの光のどけきと詠じたる、春の日のうらゝかさは、かせたる野邊に若草の、もゆる烟が立つ霞、山懐に早蕨の、にぎりこぶしを開くより、盛りたがへぬ花暦、年々歳々相似ても、日々夜々の花の形、同じからざる詠には、心の花も櫻比、うき立つ空に陽火の、ちら〱見ゆるほろ酔に、樽を荷うて行く娘、花をかざして歸る老父、賢愚貧福押なべて、うかれ遊行の時なれや。彼八笑の遊人は、花見につれて催の、茶番も昨日飛鳥山、其仇打も仇事にて、打つは遠寺の入相比、花ならなくに散々に、追散されて漸々と、八人揃ふ池の端、酒狂亭へつどひ寄る。取わけ左次郎出目助は、疲れしのみかそこ爰と、擂剝疵や打疵へ、一心不足萬能膏、酒にて用ゆ無名圓、此人物へ合藥か、即刻廻る酒氣に連れ、なほこりずまの後日の趣向。左次「コレみんなが呑んで計り居てははじまらねへぜ。あしたはたれがする」アバ「ほんにさうよ。アヽしかし初日をいたゞいたから、すこしおくれが來た樣だ」のろ「何のそんなけちな根性でいけるものか。それならおれが一番座直しとしてやるべヱ」左次「ムヽおもしれへ〱。筋は出來てるか」

たものをかくのごとし。

文政四辛巳春

瀧亭主人鯉丈誌

そも八笑人のらんしやうといつぱ、僕生質家事にうみて遊戯にあくことを知らず、謂曰不食貧樂とやいはん。されど淸貧をたのしむ器にあらねば、ひぢを枕の樂その宅に居る事をきらひ、花と月とに心を移せど、孔伯といふひやうきんものを連れざれば今に其たる事を不知、故にかくありたらんにはと思ふ程を、春の日秋の寢覺々々にうつゝ心のうつけの數々、書きちらしたる其反古を、八笑人とはなづけし也。或人予に問うて曰く、彼小册何の爲に著述する哉。予エヘントせきばらひをしながら答へんとして行きつまる。嗚呼いかにせん勸善懲惡の趣なく、益の有無を辨へず、サアそれはエヽトロ塞るを見て、彼人は高わらひしてそしりて曰く、いかに犬先生、舞益の業を今こそ知るらめ。看者は滑稽にうみて拙著の愚なるを笑ふ。さすれば不及下根つひやすのみか、廣く愚智短才を引札するにひとしからずや。はづかしいかな作者ぶり、いたい哉かた腹、冷いかな掌中の汗と、ならべたてたる惡口にこたへ兼ねたる門首、幸來るは板元の文永堂が使なり。八笑人の後編はと催促されて鼻高く、エヘン〳〵とせきばらひ、そしりし人をしりめにかけて、序に似

儒者教以解惑。富家施以救貧。難矣。解且救。鯉丈先難而後獲。欲惠惑者貧者。而非儒非富。無所苟而已矣。仰觀世俯察情。作世話之書。名曰八笑人。讀者必悅且娛。破眠除欠忘倦忘憂。冬夜夏日爲短。豈不近解者救者乎。

文政四年辛巳正月　　大八海老人稿

箱をけちらすやら、吸筒をふみくだき、毛氈をかむり逃げまどふもあり。たゞ鼎のわくにひとし。こなたははや抜合せ、仕組みし通り十分に切結び、最早圖武六來れかしと思へど、山の下通にてチャン〳〵と、鉦の聞ゆるのみ。來らざるも理り、此鉦の音は三さき幡随院勸化の、ぢゝばゝの集りしなり。三人はタテの仕組種切となりたれど、一向圖武六見えざれば、せん方なくへしなぐりになぎちらし、たがひにいきもきれ、つかれきつたるその所へ、いづくにか呑みゐたりけん、最前道灌山にて出合ひたる、かの侍二人さげ緒たすきに後鉢巻、かひ〴〵しく出立ち、「ヤレじゆんりやアたち助太刀申す」ト、いひさま兩人一度に、氷のごときだんびらを眞向にかざし、三人が中へをどり込む。左次郎、出目助びつくり仰天、左次「ソレ安波公早く迯げさつし」トいひながら、あわてふためき迯出せば、アバ太郎も何かはしらず、持ちたる刀もはふり出し、一目散に迯出せば、「ヤアひきやうなり、おどれ逃ぐるとてにがさうか。ヤレ順禮間近になじか切付けぬ。後袈裟に打掛けぬか、エヽ埒の明かぬ」ト、齒がみをなし、刀をふつて追ひかくれど、是もよほど呑過ぎしと見え、歩行も自由なりかねる樣子。三人はたゞ夢路をたどる心地して、右へ左へにげ廻り、はては山の端におひ詰められ、最早一生懸命と下道の方へ飛下るれば、木の根茨に突懸り、衣類手足のわかちもなく、ばらがきになり、のたり廻ッてやう〳〵と、下道通へおりければ、彼の侍も見えざれども、今にも跡より切付けられる心地にて、三人ばら〳〵我先にと、根岸通りをやう〳〵と命から〴〵迯歸る。跡に四人のものどもは、なげちらしたる諸道具取集め、すご〳〵と立歸り、互につゝがなきを喜び、又圖武六も夜に入りて、漸家内をさがし出來り、途中にて店受に引返されし始末など物語り、はては大笑とぞなりにけり。

ふぜ」呑「さうよ先の所意はねへ、ぜんたいこつちの己惚からおこつた事だ。アノ手合は男をひやかす事はなんとも思ふのぢやねへ」野呂「ハ、、、、すつぱり釣られたナ、おもしろい〳〵」呑七「見し玉だれを、武士鼻たれはいゝ〳〵」安「あんまりげら〳〵するナ。人のいゝ時にはてんぐに不承々々な面をして居て、ちつと落目になつてくると、アハ、〳〵笑ふぜ、いめへましい。どうかして意趣げへしをしてへもんだ」卒「コウ〳〵其意趣げへしはいゝ事が有りやす、今に役者がそろッたら、アノ幕のそばでおつぱじめるがいゝ。なんぼ屋敷育でも、鼻の先で切たりはつたりを、じつとして見てはゐられめへ。さうして追ひ散してやるがいゝ」呑「それがいゝ〳〵。左次さんや出目公はどうしたらう。モウ來さうなもんだ。圖武六はさつきから來てゐる様子だ」トいふ所へ、向の方にて、「ふウだアらア、くウ、やア引」卒「アレ〳〵來たぞ〳〵、呑公早くいつて場所をのみこませてきさつし、そつとダゼ」呑「チット承知だ」ト、はしり行き兩人にしめし合せる。卒「アバ公しつかりさつしョ。かんじんの所だぜ」安「ヘン美味やつて見せよう」ト、帶などゞ直ししづ〳〵と歩行く。左次、出目助も、つどつき合はぬ順禮唄を、そこ爰うたひながら程よき所にて行合ひ、安「コリヤ〳〵順禮火を一ッかしやれ」左次郎はいまだたばこも呑まぬ所ゆゑ、エ、氣のきかぬと思ひながら、うろたへ火打を取出したばこを吸付け、左次「へイ〳〵サアお付け遊しまし」ト、編笠を覗いて、「ヤア めづらしや鳥目百味、年來尋ぬる親の敵」出目「じんじやうに勝負々々」ト、是より廻りぜりふあらましたし付け、トヾ互ひに笠をかなぐりすて、刀に手をかけ詰寄せれば、ソレけんくわ、イヤ敵討と、所せきまで居ならびし野遊の人々、上を下へと騒動し、重箱からへ断出す有り、辨當

らア」卒「アレ〳〵中年増が短冊を取つて引込んだゼ」安「ヤア〳〵ほんになア大願成就、コウ
コウ奢るぜ〳〵」ト、いそ〳〵夢中になつて居る所に、はるか山の裾にてチヤン〳〵と鉦の音聞ゆれば、卒「サア〳〵圖武州が來たぜ、マヅ色事師はしば
らく預り〳〵」安「何サマダ遅くはねへ。そして左次さんや出目公も見えねへ物ヲ」ト、うつゝをぬかして彼の方を白眼みつめて居たりしが、安「ヤア〳〵出たぞ〳〵ヨ、短冊をつけるぞ」眼七「成程うめへ〳〵。安波公早くいつて取
つて來さつし、返歌が見てへ〳〵」安「あんまり度々だから行きにくい様だ」卒「馬鹿なつらな。
今になつてちぼけていけるものか、爰がかんじんの所だに、返歌の様子で直に向へ言葉を懸け
ようといふ場だ。早く行かッし」ト、せきたてられ、又しづ〳〵とかしこに至り、彼のたんざくを見てしばらく考へ、何か不興げに立歸るゆゑ、みな〳〵「どうした〳〵、ナゼ
すぐに歸つて來た」卒「首尾はどうだ〳〵」安「どうかよさゝうもねへから、何ともいはずに持つ
てきた、見てくんねへ」「どれ〳〵」ト、みな〳〵打寄り短冊をよんで見る。呑七「ナンダ武士鼻たれの愚智ぞをかしき。ム、
ぢよせへなく地ぐッたナ」安「何だか悪態の様だぜ」卒「さうサ鼻ッたらしめへ。ぐちをいふなと
いふ事だらう。ハ、、、、」眼七「そんナものだ。しかし女の口調にしては味く地口ッタ。そして
サソクだから有難い」安「ナンノ有難い事があるものだ、おもしろくもねへ。あんまり人を喰ッ
たやつらだ。よし〳〵是から古法科でぐつとしけ込んで、おもいれかッくらつてふざけぬいて
くれべエ」卒「コレ〳〵とんだ事をいふ、先は大家の奥女中、めつたな事をすると大變な目に逢

ゐ思ひ詰めたもんだから、何ぞ考へて見ようぢやァねへか」卒「さうよ、おれもどうぞこじ付けてへと思ふけれど、地口腹だから樂首になつてこまる」安「ナニ〳〵逆修でもいゝ、ホンノ手引の爲計りだ」卒「そんなら待ちねへよ、七小町といふ櫻の下に居るから、カウト、ムヽこつちは浪人と、フウ、先はマヅあがめていへば雲の上人ともいふ心持でと、フウ」安「ムヽいよ〳〵、成程向ふを高い人と見るから雲のうへ」卒「コレサ考へてゐるのに、ちツとだまつて居さつしナ」安「チツト無言〳〵」（卒八はしばらくかんがへ、）卒「アヽやつとこじ付けた」（アバ太郎は飛上りをどり上り、）安「有難し出來たか〳〵」卒「エヽびつくりさせタア、丸で氣違だ。ハヽヽヽ。かういふわけだ、鸚鵡小町を向づけにこじ付けた樂首ダゼ」安「ムヽ逆修か、いよ〳〵」

雲の上は有りし昔にかはらねど見し玉だれの內ぞゆかしき

といふ歌を地ぐつたのだ。芝の上は借りし莚にかはらねどサ、見し玉揃の內ぞゆかしき。どうだ〳〵」安「アヽ引いゝうまくやるナア。玉ぞろひの內ぞゆかしき。有がてへ早く書いてくんねへ」（ト鼻紙を出して野呂松にかゝせ、）「サア付けて來よう。なんでも此書付を先で取りさへすれば、モウそれが緣のはしだァ。どうか氣が改まつたら恥かしいやうで行きにくい。ヘン思ひ切つてやらかせ」（ト、一人いそ〳〵彼の木の元へ至り、下枝へ締付けしづしづと立戻り、目もはなさず見てゐる。）「サゾ今比は評議まち〳〵だらう」卒「ヘン扇パチ〳〵が聞いてあきれ

ものか」安「それだとつておれには出來ねへものを、仕形がねへ、呑公考へてくだツし」呑七「どうしてそんナぶ人がらな事を知るものか」安「是迄にして腰がをれてはくやしい。卒公、眼公、野呂松、コレ拜む〳〵」卒八「それだといつてむりな事計りいつたもんだ。ついぞたべた事もねへものを」野呂「何とでも自作でこじつけねへナ」安「なんのおれに出來るくらゐなら、氣をもみはしねへはサ。なんの卒公なんぞは、初午ダノ天王樣ダノにはやりながら、いぢのわりい友達づくといふものはさうしたもんぢやアねへ」卒八「それは地口や川柳點だは」安「それでもいゝはナ」卒「馬鹿々々しい〳〵、地口で色事が出來るものか。せめて狂歌ならいゝけれど」安「ム、其狂歌がいい〳〵」卒「イヤサ其狂歌が出來ねへといふ事ヨ」安「ナンノおつくうな事計りいふからはじまらねへ。イヽどうするものか、ねへ昔とあきらめよう、やつぱり緣のねへのだ。其替り此末おめへたちにどんな事が有ッても、おらアしらねへといふから、其時腹をたちなさんなヨ」呑七「イヤハヤわけのわからねへ男ダゾ」安「さうヨおらア譯がわからねへ男よ、わかつてゐれば歌の十や二十ナニ差支へるものか」ト、大きにふさぐ。眼七は野呂松をかたかげへ引廻し、眼七「コウあの樣子では、今に左次さんや出目公が來てもかんじんの趣向は身にしみてする事ではねへぜ」野呂「さうよ困つたもんだ。よし〳〵皆と相談して、何とでも歌らしくこじ付けてやるべい」ト、いひさまこなたへきたり、眼「卒公、安波さんもあのくら

に手ひどくいはずといゝはサ。おれだとつてちつとは切掛もあると思ふから相談するのだ」野呂「ハアそれぢやア少しは出來勝手ナ當りでも有るのか」安「さうよ」呑七「なる程、イヤ待ちねへヨ、こつちが十分見くだして計り居るからしんかうがねへけれど、惚れる心持に成つて見た所が、カウト、先が武家育に、こつちが武士の忍出立、著付は黒羽二重の紋付、萌黄博多の挾帶、ぐツとはでに朱鞘の大小と、ムヽいゝわへ。御面相は編笠で見えず、下から覗いて見た所が、鬼髭だがマア、是も青髭と見るサ。ムヽいゝわへ。こいつはどうか取結び樣が有りさうなもんだ」卒八「さうよ、首尾よく成就した所で笠を取ると、手付損にしておことわりヨ。こいつはおもしろい〱」安「ヘンそれ迄にこぎ付ければ面にはかまはねへ、手管で殺して見せべヱ。何にしろアノ幕へ入込む手段にこまる」呑七「マア花見の場で心安くなるのは歌だナ。チヨイと梢へ付けた短册を先で讀んで、又返歌の心持で、短冊を付けるなんぞといふ樣ナ事が、マア早手廻しだナ」安「イヨ〱作者々々〱、妙案々々〱、こいつはきつといゝ。しかし短冊に困るナ」卒八「ナニそれは鼻紙の端をさきかけて、チヨイとよりかけにしていゝのサ」安「ムヽ成程是以テさそくだナ」呑七「なんの是もたずともの事だ、ひどくかたく褒めるぜ。それはいゝが歌は出來るか」安「どうして出來るものか、おめへたち考へてくんねへ」野呂「そんナつまらねへ色事師が有る

か」安「ナアニマダそこ所ぢやアねへ、マア聞かッし。凡江戸廣しといへど飛鳥山の花にしかずサ。飛鳥山廣しといへどサ」ト、向の方へ指を差し、「アレあの櫻ノ、あれは一昨歳植ッたぜ、七小町といふ名札の立ッて居る、アノ木の元に纒居したる一群、なんでも御大家の奥方と見えるが、上下ひッくるめて甲乙なしのドロビイ」卒八「ナニあれが盗人の女房か」安「エヽわからずばひッ込んで居ろ。是ドロビイとは硝子を逆といふ事だは」卒「アハヽヽうぬ計り呑込んで居てさつぱりわからねへ」野呂「それがマアどうしたといふのだ」安「イヤサ何も取しきつてかうといふこともねへが、先刻からおれが行廻りかん廻り、三四度もアノ櫻を見て居たらう。さうするとそれ迄何か高笑をして居ても、しんとなつてコソ／＼噺ヨ。何か聞きとれはしねへが、目引き袖ひきいそいそする樣子、イヤモウ咄しても惣身がぞく／＼してだるい樣だが、どうも言寄るてだてがねへ。いよ智惠が有るなら借して下ッし、友達のよしみだ」みな／＼「アハヽヽヽイヤはやあきれた代物だ。足下も鏡のねへ國の人ではあるめへし、女三昧もてへげへにさつし。今日の形は拵がおつりきだから、先でも不氣味に思つてじろ／＼見るのだらう。そりやア茶人の女でも有るなら、間拔でいよとか、ぢよむさくつてもおもしろいとか、名を付けて惚れめへものでもねへが、氣心も知れねへ初對面から、ほれられようといふ、面でも有るめへぢやアねへか」安「何も其樣

り道を早めて行きながらも、往來の花見人をさま〴〵そしりなどして、たゞおのれ等がおこなひのみを通りものと心得たるもをかし・是は扨置安波太郎はとくより飛鳥山にいたり、趣向の場所を定めおかんと、そこ爰とぶらつくうちはや酒氣も覺めうす淋しく思へども、今を盛の花の山、貴賤老若むれ〳〵に、さゝへわりごを散し、さすがに廣き飛鳥山所せきまで居並びて、謡ひつ舞ひつ餘念もなき有樣を見て、安波太郎は猿狂言の役者の如く茶番の事も打忘れ、浦山しげにのさり〳〵と見歩くを、花見の人々うろんに思ひ、殊に女中はうそ氣味悪くじろり〳〵と目を付ければ、例の己惚たつぷりにて心いそ〳〵勇め共、何といひよるよすがもなく、あちこちうろ〳〵する所へ、宿に殘りし四人の者にはしなく行合ひ、卒八は小聲にて、卒「ヲイ安波公まだか〳〵」アバ太郎は有頂天にて、安「ヲイみんな早かつたナ。イヤきてれツ〳〵、安波さん有卦に入り、敵役替ツて色事師となる。シヤン〳〵。編笠をほうり出してちうけへりがしてへ」卒「コレどうした、狐にでも化されはしねへか」野呂松香七「マア向の茶屋へでもちつと休まウ。安波公も一ツ所に歩行みねへ。連のふりせへしねへければいゝ」安「ムヽさうしよう。おれもチツトうけて貰ひてへ事が有る」みな〳〵「何だか無性にたれかゝりさうで氣味がわりい。おかわでも買つて來ようか」ト、いひさま茶屋が邊に腰をかけながら、安「コレ〳〵早速ながらだが、今日ほど女に目を付けられた日はねへぜ、みんな編笠の内をのぞき込んだり、又見る樣で見ねへ樣で、イヤ成程色事は花見の事ダゼ。ナゼといつて見ねへ、女は一體陰氣なもの、それだによつて物事が都てうちばだから、女が男をくどくといふことはめつたにねへもんだ。所が花見といふやつは、どの樣な陰氣な人も陽氣になる場所だから、男増りに女の方から持懸ける樣に成ると思ふ」卒八「コレサマアどうしたのだヨ。ほんに氣味の悪イ、狐でもつきはしねへか。マア氣をしづめさつし」野呂「そして左次さんや目出公は來て居る樣子

つて置くといふぢやァねへか、あがめ仕るともあがめ致すともいふ人はねへ」左次「ヱヽ口のへらねへべらぼうだ、なんとでもぬかせ。そりやァさうと大きにおそくなつた。安波公がサゾうろうろして待つて居るだらう」出目「さうヨ、ちつときり出さう。圖武六や外の奴等はどうしたらう」左次「ナニ是も先に成つたノサ。アレ〳〵向から來るのは、モウから樽にして歸つてくるぜ」出目「ホンニナア、いゝ歲增が見えるナ。チヽ〳〵醉つたは〳〵、どうも女はよろける程醉つては中ダヨ。何でも櫻色で、目のふちがすこし、トロリと來たくらゐの所が千兩だ」左次「跡の新造は足下の諷通ダゼ」出目「ムヽ〳〵こりやァたまらねへ〳〵」左次「ナンダ〳〵見えばるナヱ。いくら衣紋を直したとつて、笈摺に柄杓ではをさまらねへ。よせ〳〵」出目「チヨツいめへましいナア。モウ〳〵こんナくはだてには一味しねへゾ。馬鹿〳〵しい。人は花見に出るには、借著をしても見えばるのに、此ざまは何事だらう」左次「なんのふさぐ事はねへ。著物はどのようにも立派にも出來ようが、頰の皮まで著替られやァしねへは」出目「さういひなさんな。馬士にも衣裳だァ」我が形を見て、「へン公家にも綴では、をさまらねへ」左次「所を馬士にも綴だものを、何分納め奉られめへ、ハヽヽヽ」出目「ナンのをかしくもねへ事を笑うぜ」ト、かほをふくらす。左次「剛氣とふさぐナ。コレ途中で見えばりに來はしねへ、飛鳥山がかんじんだ。サア〳〵いそがう〳〵」ト、是よ

挨拶をして見ねへ。そりやァ手ばなしに涙の一升や一升五合出すぶんは、十五夜に糸瓜の水を取るより心安イ」左次「アハヽヽヽおほ方其くらゐな事だらうと思ッた」出目「ナゼ〳〵」左次「ナゼといつて馬鹿々々しい。そりやァ成程女郎なんぞは其くらゐな事も有らうが、よくつもつて見さつし、足下なんぞが親の死んだ時の事を思ひ出したぐらゐで、涙を出す風か。コレ一昨歳親父が死んで葬禮の時、其面にもはぢず、三津五郎の身振で燒香して、始終裃のヒダを内から手を入れて崩してすわつたり、かたをギス〳〵しながら膝で步行いたり、いやはやおらァ冷汗を流して見て居たぜ。死にたてのほや〳〵でせへ、其くらゐのべらぼうだものを、今時分思ひ出したとつて、そりやァ手めへが出す氣でも涙が不承知だァ。なんでも今こぼした涙は地金だ〳〵、がまんを言ふな〳〵。ハヽヽヽ。それはいゝが、物云はちつと氣を付けさつし、むだッ口やへらず口はわる達者だが、少しまじめな事は無體なもんだぜ。何だらう、ヘイ左樣奉りまして此樣奉ります、お腹立を納め奉りますッ。ヘン大山へ參る山伏の樣だ」出目「さういひなさんナ。あゝいふこけは、崇めさへすれば嬉しがる物だ」左次「いかに崇めるとッて、どう致しましてと云ふ所へ、ぬしがいふのは、どう奉りましてと言ふからわけがわからねへのだ。せめて仕りますならいゝに」出目「崇めるから奉ると云ふのよ。チヨツトいふにも、崇め奉

でなければ眞受にはしねへ。今時は手ばなしで泣いて見せねへでは得心しねへワナ」左次「それだといつてうそに涙が出るものか」出目「そこに祕傳が有るのサ」左次「ハテナ本とうか」出目「空言も眞言もいるものか、現に今おれがのを見たぢやァねへか」左次「ハァそんなら今泣いたのはうそか」出目「知れし御事サ」左次「イヤそりやァ妙術だ、さつそくお弟子入」出目「ヘンそれだから人を破家に計りしなさんなよ。何かしらちつとは能の有る物だ。今三津五郎でも幸四郎でも、愁歎に本とうに涙をこぼすのはみんナおれが傳授だ」左次「イヤ又人がちつと受けると、御大相なほらを吹くからどうもならねへ」出目「ソレさう思ふからどうもならねへ。法事といふものは理詰な物で、第一信仰がなくッては教へてもやくにたゝねへ」左次「フウ成程さういふ譯も有るだらう。そんならまじめにどうぞ教へて下ッし」出目「ムヽそんなら教へようが、何も別にむづかしい事はねへ。マア女郎でいつて見ようなら、今夜此客に腹をたゝせて歸しては、約束の夜具も間違ふとかいふ時、是非々々一番ぐんにやりとさせようと思ふと、マヅぐつと氣を落し付け、うつむいてふさいで居ながら、我が親か兄弟の死んだ時の事、又遺言なぞを思ひ出したり、お袋の病氣で人參の代に賣られた時の事なんぞしんに思ひめぐらし、十分愁をもつて相手が腹を立ッてゐるを、エヽうらめしいお心ダ、なんぞと胸の内でいろ〳〵考へながら、よわ〳〵と

サウ手輕く濟むものか。こつちにも荒神様も大家様もあらア。又急度さういふ筋のものなら、屋敷方へ出入の職人商人、其外武士を相手にする商賣は皆馬鹿もの、往來をするにも向から侍が來ると、通り過ぎるうち軒下へかゞんで、待つていねへければならねへ。どういふ間違で麁相しめへ物ぢやアねへ。ばか〳〵しい」左次「ナンノ今になつて、其様にりきむ事はねへ。さつき其通りいへばよかつた。漸々舌が廻ツて來たナ」出目「ナニサいつもだと、足でもすくつてはふり出して、ぶち放しといふ所だけれど、何分茶番の事が氣にかゝつて、今爰で騷動おこすと、モウ飛鳥山もヂャン〳〵に成ると思つたから、胸をさすつてこらへて居たのダ」左次「このべらぼう段々つよくなるナ。そんならナゼさつき大粒の涙をこぼして泣いた」出目「おめへもベソベソ泣いタア」左次「おらがのは傾城泣といふので、目へ袖を押付けてこすりちらすと、目淵が赤くうるんでくるは。そこで又せりふ廻しでぐつとうれひがきいて、あれから侍の氣がをれて來たらう。足下は又手ばなしでホタリ〳〵、一ッ粒十六文位な涙を落したり、鼻の先へ綱渡をさせて、鼻の中ばへしばらくたもつ、名付けて野田の下り藤といふ涙をどうしてこぼした」出目「ヘンおれも傾城泣きョ。おめへの様にするのは昔の傾城泣で、目のふちへつばを付けたり、のみかけて有る茶を付けたりして、袖でこするなんぞは、腮で褌をしめた時分の客人

もあらば重ねて貴顔の得ませう」ト、残り多氣に見返り〳〵わかれ行く。げにいぢ強きは武の表、裏のなさけぞ深かりし。跡にふたりはぬくめ鳥の、暁を待得し心地して、五色のためいきをホッとつき、出目「ヤレ〳〵とんださいなんに逢つたノウ」左次「災難どころか命を拾ッたア。コレちつと氣を付けさつし。どうも麁相ッかしいから此様な目に逢ふノダ。どうしてまたアノ侍の鼻面へ、丁度杖を突懸けたらう。おらア向をむいて居たから、後から人の來るのも知れねへ筈だけれど、足下はアノ時こつちをむいて居ながら、侍の來るのが知れねへ事も有るめへに、ばか〳〵しい」出目「さうサどうして見付けなんだかサ、どうもおらア藝事にかゝると、夢中に成つてならねへ」左次「ナンの藝も大相ダア、まだしも顔へ突かけて、疵でも付けねへで仕合、アノいきほひで疵でもついて見たがいゝ、物いはずひつこ抜いて、やられる所だ、ヲヽ、おそろしい、思ッてもぞつとするは」出目「ホンニおそろしい事よノウ。しかしアノ侍もあんまり短氣な手合だ。こつちもわるさは悪いけれど、殺すほどの事も有るめへぢやアねへか。なんぼ此方連だといつて、犬を切ッた様にもいくめへす。こつちが死ねば先も解死人に出るだらう」左次「とんだ事をいふ。そこは武士の威光だは。こつちがダアといつて仕舞ふと、死人に口なしよ。いゝやうに理を付けて、慮外者故手打に致した、此段御届申す、ハイ左様ならぐらゐで濟で仕舞ふハサ。それだから町人は割が悪いハ」出目「馬鹿ア言ひねへ、町人だとつて、茄子や大根を切る様に、

くれますかとぞんじられます」ト、そら涙をこぼし顔へ袖をあて、「何時を限りと定めもなきうきかんなん、其上めぐり逢ひましても、萬一返打になりませうかも知れません」ト、しほ〳〵とする。兩人の侍も、しきりにうれひをもよほし、筑四「何サ何サ左樣の不吉を申すものでねへ。孝子には天の助ちうが有る。しかし其相手ちうは手強いやつか」左次「左樣で御座ります。同じ家中に名を得たる劍術師範の、ヘイ名はまうしにくう御座ります」筑四「成程〳〵尤した事ぢや。承はるにも及ばぬが、ア丶何にもいたせ、萬端何角深勞の段察しをる。思はずも眼水の催した。ハ丶丶サ丶手を上げられい。本望とげられた其上は、尚又いつかどの御出世でござらう。我々とても同じ仕官の身、斯く承る上は高下はござらぬ。サ丶平に〳〵」ト、言葉も直りていねいの挨拶に、出目助はづにのり又さし出る。出目「ヘイ〳〵、何、是が勝手でござります。モウ身を落しますからは、昔の氣を出しては行けません。たとへ内に金の茶釜が有ると申しました所がはじまらねへ理屈でござります」左次郎は出目助が口をだすたびにひや〳〵して、又にらみつけ、長居をしては化の皮があらはれんと、しきりにけんのんに思ひ、左次「是は大きに御遊山の、お邪魔を致しました。最早おわかれ申しませう」筑四「成るほど、此方はともかくも、人目しのばるゝおの〳〵方、人立致しをるで、さぞ心配でござらう。ア丶名殘のをしまるれども、是非に及ばぬおわかれ申さう」筑五「武道を磨く我々不計もかやうなる孝子に行逢ふも武門のみやうが、今日は吉辰ばいの、イヤ隨分とも、身を大切に本懷のたッしめされ。御緣

るすこと罷いならん。さすれば勝負は時の運次第、仕勝をッていさぎよく、のがるゝが能でにやアか。彼是日間取る内往來の人立がしをるは」筑五「エヽ早々立合をらぬか」ト、出目助が杖を取ッて、具の先へ突付ける拍子に、杖に仕込みし金貝張、貳三寸すらりと拔れば、左次郎はハツトおどろき、是を見せてはなほ〳〵ねじくり、むづかしからんと手早くしつくり納むるを、筑四郎は目早く見付け、筑四「ヤレ筑五々々、ざんじ控さつしやれ。先刻より此奴等の爲體がてんゆかぬ事ども多き中にも、只今忍劒の所持をいたすを見受けましたが、何さま倶不戴天の族かと存ずるが、貴公如何思はるゝ」筑五「なるほど貴所の賢察の通り左樣に存ずる」少し小聲になり、「コリヤ順禮敵ども尋ねをる身の上か」ト、いはれて左次郎しすましたりと心によろこび、綴の錦土手場の思入になり、左次「ハかく御見咎に相成りましたる上は是非も御座りませぬ。御推量の通り大望の有る者どもで御座ります、それ故命がをしうござります。どうぞこのまゝおゆるしなされて下さりまし」出目「へイ私も左樣で御座ります」筑四郎は横手を打ち、筑四「テモ扨も左樣とも不存纔の怒を根にいたし、最前よりの過言ゆるさつしやい」筑五「いかさま大功は、細瑕の顧見ずと、大望有る身は堪忍が大事ヂヤ。先刻よりの過言今さら後悔いたす」ト、風なみ直れば、兩人は蘇生した心持して、出目「へイ私共は生れ付いて人に負ける事がきらいで、今迄五分でも引をとつた事はござりませんけれど、どうも敵を打ちますには、成丈あやまつてをりませんと、どうもそこが」ト、くだらぬことをならべ立てるを、左次郎は打消し、目くばせにて出目助をにらみつけ、左次「イヤモウ先程の慮外をおゆるし下されますも、矢張親共のかげみに付添ひ、助け

打勝つにおいては、元より眞劍たゞみかけて新身のためし、筑五殿、此儀はいかゞでござらう」筑五「宜こそ思付かれた、成程只今までためしをつたは死骸計りで、張合のなか事なれ共、此奴等が飛はねをる所を、見事すつぱ〳〵切下ぐるは、ゑゝ手定めたい。然らば、支度致さう」と、下緒をはづし早だすき、こひ口くつろげ左右よりつめかけ、筑四「サヽ早々立上りをらぬか。兵術の心がけをると見た故、乞喰なれども心根を不便に存じ、武士が相手に成ツて遣はさうちうに如何立合をらぬ」筑五「たゞし此まゝ打掛樣か」ト、雙方よりつめよせられ、左次郎も出目助も魂は中天へ飛上り、死人のごとく口びるまでつちけ色に成り、酒氣は一向覺めて仕舞ひガタ〳〵ふるひ、引ツはづして迯げんにも、あしこしなえて立上ることさへ出來ずはひずりながら、左次郎「モシ〳〵失禮ながら、それは大きにお目鏡違でござります。どういたしまして私どもが、劍術なんぞ存じます者では御座りませぬ。又有樣は寔の順禮でもござりませぬ。よん所ないことで、身をやつしましてをるので御座ります。それもたつてお尋ねなら申上げませうが、とてもまことは思し召しますまい。只御慈悲に命をおたすけ下さりまし」出目助は大粒なる涙をはろはろ落し歯の根もあはず、出目「ハイ此者が、申通り、どう奉りまして、お武士樣に、手むかひ、奉ります、ものか。わゝ私は、し舌が、ちゞんで物が、いはれ、ません。ハイ拜の、御生樣で御座ります。どうぞ、命計りは御たすけ遊ばさせられ、下さるびよう、エヽぞんじ奉ります」N筑五「ヤア今さら腑甲斐ねへたは言いはずと勝負いたせ。此方覺悟極めてをるは」筑四「おのれらわりい了簡也、譬 勝負不致共、此儘ゆ

樣なる奴原生置いては、のち〳〵何事を仕出づるもはかられぬ。幸此頃求めし此新身、筑五郎殿壹人づつ試みませう、後日御咎の受るばつてん、慮外者を手討に致すは武士の常、別に六かしい事はござらぬ」ト、いはれて兩人彼の侍を見れば、大あばたの鬼髭はえたる大奴、鐵砲の如き差添に鮫鞘巻の無ぞりのだんびら、眞田巻の柄に手をかけ、するどき眼に角立てて白眼付けられ、兩人は死人のごとく眞つ青になり、土へ天窓をすり付けし〳〵、左次郎「イヤ御立腹は御尤至極でござりますが、全く是は間違で、あなた樣方の御氣にさはりましたのでござります。私ども連の内に、安波太郎と申すものが御座りますゆゑ、其ものと少し稽古のことがござりまして、只今私とその仕形噺をいたします所、餘りはなしに實が入りまして、あなた樣方の御通行とも心付きませず、麁相仕りましてござります。へイ何分御慈悲に御ゆるし下さります樣にお願申上げます」出「左樣々々どう奉りまして、お武士樣方へ向ひ奉りまして、嘲弄仕ります樣ナ心はけつして御ざりません。ハイ實に間違で御ざりますから、どうぞおはら立を納め奉りますやうに願ひ奉ります」筑四郎は兩人が申すこと聞きゐたりしが、筑四「イヤ筑五郎殿、先刻より此奴等が言葉のはしに、稽古の事ども有りをると申せば、察する所物ごし關東ものと見ゆる所、棒を心がくるを見れば、總州香取邊の者可有、我等等は今劒法を磨く身分なれば、幸の事、少したりとも兵術の心得ある者を、やみ〳〵手討に致すもふびんなれば、爰元にて仕合致して遣はさう。萬一我等等未熟にて打負けば、最前の慮外のゆるして遣はさう。又

助、左次郎は引下つて、ぶらり〳〵と日暮をぶら付き、道灌山をたどりながら、左次郎「ヲイ出目州何ダかをかしな足取だが、あんまり呑過ぎたやうだぜ、例のタテはおぼつかねへもんだノ」出め「ナンのおれが歩行形よりおめへがむづかしさうだア」左「馬鹿をいはつし、おれに間違が有る物か。アノたて計りは、安波公がよく呑込んで居るヨ。どうも足下がけんのんでならねへ」出め「ナニサ案じなさんな。美味やつて見せよう。しかしャどつこいと見えに成ツて、後の鳴物がかはらうといふ所からが、少とつちる所が有る様だ」左「ウヽ雙方から打込むと、眞が兩刀で請ける」ト少々のり氣になり杖にてあしらふ。出め「ソラ此方の刀を引く」左「おれも引ツぱづして又打込む」ト同じく杖にて眞似をする。出め「アバ公がおれが方へたゝみかけて來る。トントン〳〵ト三足さがつて平居て受ける」左「所をおれが後から打込むを、安波公が左の刀を逆手にうしろで受留める」ト、だん〳〵はずみになりたる所へ、西國邊の御家中と見え、二人連いか物作の侍、此後へ來掛る。こちらは一向心づかず。出「そこでアバ公が鼻の先へひらり」ト、かの侍の鼻先へによいと杖をつき出せば、侍はびつくりしながら、杖をしつかりおさへ、筑五郎「コリヤ何しをる、慮外千萬な奴」筑四郎「此奴、乞食の身分の以て、武士を嘲弄いたしをる」出「エヽ是は御免なせへ。大きに麁相いたしました」筑五「ヤア此奴、今さら麁相ちうて尻込するとて、其ぶんに致さうか。最初此棒を突付けをる砌、アバこが鼻面へちうて、我等が面へ突きかけ居つたでねへか。アバこなぞと、秀句の如云ひをつても、矢張我等が面のミツチャのことは承知してをるは」筑四「思へば〳〵大膽なる不敵奴、箇

ナンダ歯、四文。ムヽ橋本町へ這入ッて此笈で喰ふ氣だ。いやはやこなたも生若いざまをして、ふがひねへ男ダゾ。コレ親にゆづられた家業でさへ、なまけ廻ッて喰へねへものが、壹文貰で親や女房が喰はせられるものか」ツブ「エヽこぢれッてへ、さうでもねへは。そんならモウ仕形がねへ、此内を明けて見せよう」ト、眼七に受取りし笈の鍵を尋ぬれども、チヨッと袂へ入置きしが、いつかふり落せしと見え一向知れず、いかゞはせんとうろたへながら、きせるの吸口にて錠をこじ廻して居る。此押合の内往來の人ひとりふたり立聞せしが、だん／＼集り、何かは知らず六部と親父と問答をすると言ひふらせば、近隣の人我も／＼とはせ集り、暫時の間に黒山のごとく人立せしかば、判「コレ此通り人立がして外聞がわりい。マア／＼おれと一所に内へけへらッせへ。ゐ何も彼もうちへ行つて、わけを付けるがいゝ」圖武六も尤とは思へど、此ざまにて宿へも歸りにくゝ、又飛鳥山の手客も相違する事故、何とかして引ばづさんと、ツブ「先へ行きなせへ。跡からすぐ行く」ト、手まねをすれば、判「イヤ／＼さうはならぬ。貴樣先へたゝッせへ、おれが跡からついて行く」と、いきまき荒く中々合點するけしきなければ、彼是長居するほど外聞あしく、心ならずも元來し道へ立歸る。判八はうしろより笈のすみへ手をかけながら、跡へつゞいてあゆみくる。是より圖武六が宿へ歸れば、母女房はいふもさらなり、隣家の人且家主まで集り來り、異なるさまに大きにおどろき、家内大もんちやくとなりけれど、圖武六は茶番の手客相違せんと、兎角いひくろめ此まゝ出行かんと、花見の趣向をあらまし言譯すれど、多勢にいひすくめられ取押へてうごかされば、笈の扉を引放し中の仕込を見せ、くはしく咄し聞かせ、やう／＼みな／＼得心の色見えければ、はや春の日の長しといへど、店受の擬勢、家主の理屈、隣家の異見、女房の愁歎、とゞ大わらひと成るころは、茶番は寂滅入相に、飛鳥の花はいかになりけん、圖武六も御輿を居ゑて、有合ふ酒肴とり出して、皆それ／＼に禮をのべ、心ならずも酒汲みかはす。斯くとも知らず彼三人は日暮邊のうらみちにて、それ／＼に支度を直し、左次郎「アバ公爰からわかれて先へ行かッし。そして美しさうな幕張を見て置きねへ。なんでも勝負の場所は、女澤山の所と究よう」アバ「承知々々、女の目利ならヘン外の者には出來めへ」出め「ヨシ／＼いゝサ／＼、轉ばねへやうに早く行かッし」ト、是よりわかれて出目

ん彼といはんと、目をねむり口計りむぐ〳〵して、むしやうに鉦をチヤン〳〵〳〵〳〵、暫くしてやう〳〵心當りの出來しにや、ツブ「エヘン如是畜生ほつぼだいしん、往生安樂國なアまアだア〳〵」ト、暫くして目を開いて見れば、ばアさまは見えず。ほつとひといき、ツブ「ヤレ〳〵怖しいめに逢うた。モウ〳〵念佛は申さねへ」ト、つぶやきつぶやき急ぎ行く後より、「ヲイ〳〵六部どん進ぜませう」圖武六ぎよつとせしが、聞付けぬふりにて足早に行きすぎるを、うしろより笈をしつかり押へてうごかさず。ツブ「だれだ〳〵、コレ倒れるわへ。卒公か野ろ松かふざけるナ〳〵」ト、しばらく引合ひしが、殊の外せき込みし聲にて、判八「おれが見附けては一寸も先へはやらねへぞ。いやはや〳〵貴様はこなたは、おのれは〳〵〳〵」此聲におどろきよく〳〵見れば、店受の判八といふ親父なり。今日上野へ參詣し、ついでながら圖武六が宿へ立寄りし所、母女房圖武六が身持不始末のわけ、又此程四五日も呑みつゞけ、宿へはより付かぬなど、よき折から意見いたしくれよと頼まれ、其歸るさ異なるなりを見るよりも、正直強情のかたおやぢ、何かは少しもこちゆべき、かなつんぼのどう聲をふりたて、判「コレ、何がすまぬ事が有ツて、お袋や女房を捨てて六部に出るのだ。それもよん所ねへ事なら、ナゼ相談づくで出ねへのだ。役にたゝずながらも、こなたが居ねへ日には、おれひとり厄介を背負込みダは」圖武六はいひわけせんと思へど、判八はかなつんぼなれば、大きにてこずり、いつも仕形にて噺をする故、笈佛へ指をさしかぶりをふり、是はむやうだんだ、花見に行くといふ思入にて、鼻と目へ指さしする。判「ナンダ六部に出るもいやだが、フウ鼻と目が役にたゝねへ。コレそれもいはねへ事か、一昨年のよこねの時しつかりと療治をして、一歳も毒だてをしろと、口のすくなるほどに言つても、廿日もたゝぬ内にモウ大酒をくらつて惡物喰、たツたひとりのお袋が、泣いたり笑つたり苦勞するを、屁とも思はぬみんナ罰だは」ツブ「ナニサさうではねへは」ト、又くふうして齒をむきだして、指にてつゝきて見せ、又四文錢壹文出し、うらの波へゆびさし、齒波に行くとをしへ、笈の中は酒や辨當だといふ氣どりにて、笈へゆびさし呑喰するまねをして見せる。判「ム、

花暦八笑人　二之巻

踏めば惜し踏まねば行かんかたもなし心づくしの山櫻かな

と赤染右衛門は詠まれけん、花の山里多かる中に、わけて江都の飛鳥山、植人もうゑ人花盛、吉野初瀬もおよびなき、その山ふみも遠近より、あらそひ競ふ道草の花見連中、霞とともに引きつゞく、春の日あしや足元も、よろめく山のつゞらをり、酒のとがとも岩根ふみ、たどるかたへの出茶屋には、きせんをえらばぬよしず圍、花より團子の下戸上戸、かの醉狂の圖武六は、六部の姿に出立ち左次郎が宿を出で、池の端を谷中の方へいそぎ行く。最早隣家も程すぎしと心落づき、少し稽古の心にて殊勝氣に鉦打鳴し、ツブ「なまアだアぶウ、なアまアだアぶウ〳〵〳〵」六十餘のばア樣、「アイ六部さん進ぜませう」ト、いはれて圖武六びつくりせしが、爰ぞ大事ととはくより腰をかゞめ、「へイ〳〵是ははや有がたうございます。へイ〳〵是ははやへイ〳〵」ト、わるていねいに鐘をいたゞき行きすぎるを、ばアさま聲かけ、ばゞ「コレ六部さん、報謝返の回向をナゼしなさらねへ」ト、とがめられて又びつくり、ハッと思へど例の押づよ、ぬからぬ顔にて、ツブ「今いたす所でございます」ト、口にはいへど何といは

う」興「いんやたのむめへ。モウ〳〵ぶつさうだ、早く笈の中へ納めよう。サア〳〵地藏さま、御窮窟ながらひろい所に寝ておいでなさい」ト、笈佛を引出し、三味線酒肴諸色を詰込み、鍛錠をぴんとおろし、がん「サア是で安心だ。ヅブさんかぎをわたすぜ」ヅブ「ヲイよし〳〵。アヽしかしおれが一ばん難儀な役だナ、行きつくまでの道中がつまらねへざまだ。なんでも酒の氣をはなれては出來ねへ。モウ二三盃やりつけようか」興「エヽうるさく呑みたがるぞ。マア草鞋でもはきねへ。其内かんを直してやるから」ヅブ「ムヽそんなら爰へもつてきて下ッし」ト、上り端へ出て草鞋をはく。どん七「ソレ笈ヨ、ちつと重いぜ」卒「サアサアかんが出來た。呑まッし〳〵」ヅブ「ハイ〳〵是は御報謝でござります。どうぞもちつと大きい物でお願ひ申します」野呂「コレサ〳〵いゝかげんに呑んで出かけねへか。先へ行つたてあひが待遠だらう」興「さうよ〳〵おいらたちも跡を片付けて出かけよう〳〵」ト、追ひたてられて圖武六はことなる形もことともせず、酒氣に乘じて出て行く。

州は一足跡から出かけさつし。おらア茶碗で二三盃ひつかけて先へ出よう、ナア出目公」出「ムムそれがいゝ〳〵、マアおれから始めよう。モウぐびがのど〳〵する」アバ「ヤレ〳〵いぢのきたねへ男だぞ、そんならてんぐ〳〵にしよう待ちどほだ。サア是へついでくんナ」左「そりやアいゝが順禮唄を承知か」出「チツト氣づかひ給ふナ。例の美音で女どもをまよはせてくれべヱ。ふだらくやきし打波のおのれのみ」ト アバ「ムヽくだけて今朝は物をこそ思へか、ヘン紋切形だの」左「サアサアアバ公出かけねへか」アバ「チイ〳〵モウ一ツついでくんナ」出「いやモウあきれたいぢきたなダゾ。そんならおれもモウ一盃やらう」ト、まけずおとらぬ底ぬけ上戸、左次郎はやう〳〵たち出て、左次「サア〳〵遅いぜ〳〵、今からさう呑んでつまる物か。是からが大役だばか〳〵しい」ト、小言たら〳〵手を取つて引出され、アバ太郎は編笠ふかく打かむり、出目介左次郎もおひずるをふところに入れ、菅笠に顔をかくし、隣家をしのび出て行く。引違へて眼七歸り來り、眼「サア肴もりつぱに出來た、ナント重詰はきれいだらう」卒八野呂松「ドレ〳〵」眼「チツトそれからごらうじろ」卒「ナンダナまだ見えもしねへ。喰はうといやアしめへし、がうぎと用心をするぜ」野呂「すみの所に有る黄いろな物はなんだ」眼「ドレ」野「是ヨ」がん「チツト其手はくはねへト」どん「その手をくはずば此足を喰はう」トさくら煮をしてやられ、がん「エヽぶじやれるナヱ。きたねへ笈から出すのだから、きれい事でなくつてはいけねへから、折角骨を折つて詰めさせたに、チヨツだいなしにした」卒「ドレ〳〵ほんにナア、おれが直してやら

を背はせて、町内を一邊まはらせるがいゝ」卒「寢小便も此とし迄やまねへから、モウ直るめへよ」アバ「アヽ引いてへぞ〳〵、まことに目がくらんだ。なんと左次さん、もうちつといたくねへ趣向は有るめへか」左「ハヽヽヽ、何サ飛鳥山には箱火鉢がねへからいゝ」ト、みな〳〵大笑になり、此時眼七も諸色取そろへ歸り、眼「サア〳〵道具はそろつた。コウ今道で八ツを聞いたぜ。仕組がよくば出かけねへか。人の出さかりでなくつてはをかしくねへぜ」左「サウ〳〵稽古もあらましすぢが通ッたらいゝとして、出掛ける仕度にせう。ドレ眼公衣裳を見せナ。ムヽいゝ奇妙〳〵。黑羽二重朱鞘の大小編笠ト、サアアバ公渡すぜ。こつちは杖計りだ。サア〳〵著替へたく〳〵」是より役がかりのもの思ひ思ひのこしらへ出來て、左「先是で支度はいゝが、チト腹がわりイナ」眼「さうさ今日は珍しくマダ始めねへから、物わすれをしたやうだ。なんぞ肴をこしらへようか」左「何々そんなことをしては居られねへ。イヤしかし辨當がいるナ、眼公そこらへ行つて見つくろッて來てくれねへか、兩もちひに鮓なんぞもいゝぜ」アバ「アヽまづい物屋のにしめもおそれるス。そして鮓もこひねがはくは長門といきてへナ」眼「長門鮓とはどこだ」アバ「馬喰町ヨ。此男もアノすしやを知らねへか」眼「なんぼおれが物知りだとつて、どうして爰いらまで知れるものか。コレすしの評判十八丁といふハサ」左「わるくごたつくぜ。何でもいゝから早くはたらいて來さつし。そして笈の中へみんナ詰めて、圖武

んびにいたゞく筈だァ。いよ〳〵、てへげへにして置ッし。おれがいよ様にごたついて仕舞うから、あんまり口數のすぎねへようにしさつし。そこで又、タテだが、それもバタ〳〵〳〵ヤどつこいト、見えになつてはよくねへぜ。筋はせんどの通りで、間のギックリ〳〵なしだよ」アバ出目「ヲイよし〳〵」左「ヅブ公、その采配と、しんばり棒をもつて來てくんナ。アバ公は兩刀ダゼ」アバ「承知々々、おれには采配を下ッし。ヲットきた〳〵サアやるべい」左「出目公は左へ廻んナ」出「ヘン御開帳の樣だ」左「しやれるナしやれるナ。サア尋常に勝負々々」アバ「心得たりと」アバ「たりとはいらねへ、たゞ心得たサ。ソレぬき合せた。さうきた、さう、さう、さう〳〵くる、味い〳〵。それ裾をはらつた、一ッとんで後へ、ソレとん〳〵〳〵〳〵」ト、跡ずさりするはづみに、箱火鉢へつかへしりもちをつけば、懸けて在りし土瓶をこはし、ジエウジユウ〳〵プウ〳〵〳〵ト、一面に灰をふき立てる。アバ太郎は五德にて鶏の尾のはねをつよくいため、急に立上る事も出來ず、火鉢へ腰を懸けたるまゝ、灰まぶれまつしろになり、アバ「アタヽヽヽヽ」此時卒八は笈を背負ひかへりしが、此體を見てきもをつぶし、卒「ヲヤ〳〵こりやァどうしたのだ大へん〳〵。行暮したる旅の修行者、此大雪になんぎしごく」左「エヽしやれ所ではねへ、マア早く來てくだつし」みな〳〵「アバ公尻が燒るは、早くわきへのかねへか」ト、引立てられ顔をしかめながら、やう〳〵緣端へ出る。のろ「そこへ坐らッし。ヲイその采配を爰へくんナ。サア目をしつかりとねむつて居たり」どん「ヤレ〳〵目も鼻も知れなくなつた。サアいよいよこつちへ來さつし」左次「マア著物を著替へさつし。尻はびしよぬれだ」どん「ナニサ此著物

らぼうが、何だいやみナざまをしやアがるは、マアちつと邪魔をせずに下ッし。それでなくつてせへしやれたがッていけねへ。マア〱てへげへにして置かう。サアアバ公、ちつとやッて見さつし」アバ「ヘンおれか〱ヨシ、かうなるからは名乘りて聞かさんよつく聞け、われこそは桓武天皇無體の強陰」左「コレサ〱さう時代ではわりい。そして狂言の氣をはなれていかねへと、まじめらしくねへ。ムヽかうするがいゝ、あらたまると角が立つから、やつぱり不斷喧嘩をする心もちでやつて見さつし。おれはマア見物になるから二人でやんな」出「ムヽそれだと大きに仕いゝ。そんならアバ公やるぜ」アバ「チイよし〱。順禮殿火を一ッかしてくだせへ」出「ハイ〱ト、笠の內をのぞいたは、ト思入有ッて、チヤ手前は鳥目百味だナ、七年以前におれが親を打つて欠落をして、行衛が知れなんだがいゝ所で逢つた。モウこちとらが目にかゝッては、貧乏ゆすりもさせねへぞ。かくごをして勝負をしろ」アバ「ナンノ此野郞めへ、うぬらが二人や三人來たとつて屁とも思ふものか。そして己等が親父が、ずるい事計りしやアがつたから、殺したのだわへ。それがわりイか」て「ムヽわりイはエコレエヽ、親をころされてだまつてゐちやア外聞わりいわへ。なんでもうぬを殺さねへぢやア、面がよごれらア馬鹿面あづまつ子」左「コウコウどういへばかういふと、それでも又あんまりだ。扨々じれッてへ事だぞ。だうりで茶番のた

來る」アバ「ムヽよし〳〵」左次「ヱヽよし〳〵ぢやアねへ。爰へ來さつしナいけづるい」どん「たば公がアバこを呑ぢやア、たばるときせこ入れがいるの」左「ヱヽしやれるなへ邪魔になるは。サアたば公たゝねへか」のろ「ハヽヽヽやつぱりたば公だア」アバ「チイ〳〵。コリヤ〳〵順禮びろうながら火をひとつおかしやれ」めて「ナニそれにびろうがいるものか」左「イヽサ〳〵そこで、トすひ付ける笠の內をのぞいて、ヤアめづらしや烏目百味、汝を尋ぬる其爲に、いく歲月の艱難苦勞、倶不戴天の父のあだ、サアじんじやうに勝負々々、サア出目公もなんとかいはつし」出「チイヱヽ引、辨財天の御由來、くはしくたづぬる母の敵」ニ左「コレサどうも、さうしやれて計居てはいけねへは。身にしみさつしナ。そしておれが父の仇といふのに、母の敵といふ事もねへ」出「おめへが父といふから、同じいひ草も智惠がねへから、そげてやる氣だ」左「イヤ〳〵そんな智惠は出さねへがいゝ。そしてむづかしい事をいはずと、あたりめへ、うききの龜うどんげの花、爰で逢うたは天のあたへとかなんとか、紋切形でいゝハサ」出「ムヽ、うどんげの花の山とやつてはどうだらう」左「何々しやれたがつちやア惡い〳〵」て「チイ〳〵そんなら、うどんげの花うききの龜、爰で逢うのが百年目」のろ「どうでこつちは夜ばたらき、二世より先へ命がけ」どん「戀の盜とたれしら波、ばんにやいのと合言葉」左「イヤモウどうもならねへぞ。此又べ

り、しばらく〳〵と惣方引分けて笈を下し、中から酒肴三味線を出しておれに渡すと、ギヤチヤチヤン〳〵ト彈出すから、出目公と圖武公が、エヽ引山できつころがした松の木根ッ子の樣でもと唄ふ。安波公が例の踊、跡の者も見物に交つて居て、直にそこへ踊込んで大酒盛となるといふやつだ」野呂「やきてれつ〳〵妙計々々。サア〳〵ちつとも早く押しださう」アバ「そんならマア衣裳や道具を早くくめんしよう」左「眼公てへぎながら例の所へ行つて借りて來て下ッし。是は茶番一式の損料屋なり。入用は今いふ通りだ。順禮の杖のも大小も金貝がいゝぜ。しかし笈摺の背中に、千秋萬歲や大入叶では中だノ。正うつしで行きてへもんだ」卒「それにはいゝさんだんが有りやす。どうせ六部の笈も、本ものでなければ諸色が這入るめへから、山崎町へいつて、六部の形とおひずるは借りてこよう」是も又かの地に出來合の順禮六部の損料有り。左「そんならさうしてくんねへ。アヽしかしじよむだらうナ」卒「じよむも坂東も一所に書いて有るぜ」左「エヽわるくしやれずと、千手觀音の居さうもねへのを、早く借りて來さつし」ト卒八、眼七をせき立ておひ出し、左「サアそれできまつたが、なんぼ出たらめでも、ちつとはきつかけを付けて置かう」ト是より稽古にかゝる。左「サア出目公とおれは、程のいゝ所に居る。そこでアバ公も同じく、是サマア立たッせへナ。さう〳〵、そこいらがいゝ。そこでキッカケは圖武が山の下で鉦を叩く音を合圖に、たば公がアバ公をついて、順禮殿火を一ッ、トそばへ

深編笠といふこしらへだ」ァバ「ムヽいよ〳〵」左「おれと出目助が順禮のすがたで、そこ爰と花を見ながらたばこを呑んで居る所へ、安波公がのさり〳〵と出かけて來る。これも同じくあちこちと見あるき、成丈人の目にかゝるやうにして、程能き所で順禮にたばこの火をかりようと、すひつけにかゝる笠の中を覗いて、ヤアめづらしや鳥目百見、年來尋ぬる親の敵、ト是から浮木の龜や優曇華のはな、なんでも彦兵衛で、（彦兵衛とは御ぞんじの通言かけあひの事。）おもいれならべ立てよう。安波公も出たらめのせりふで、トヾ不便ながらも反討だと、編笠をとつて捨て、金貝張をスラリトぬく。おれと出目公は杖に仕込んだやつをぬいて、先達茶ばんに仕組んだ立合になりはどうだ」卒「コリヤアがうせへだ。飛鳥山は此友達ばかりで、花見をする樣だらう。いよわへ〳〵」左「そこで亦眼のしよぼ〳〵した鼻のひらつたい、齒の黄ろい、水ツぱなが鼻のまんなかに絶えずぶらついてるといふ面がほしいな。ヲイ〳〵圖武六、ちよつとおめにかゝらう」ツブ「ハイ〳〵大體は私が似よりかネ」卒八「似寄どころか南瓜を二ツに割らずに其儘だ」ツブ「チヨツいめへましい、爲方がねへ此節だ、この首で間に合ひさうなら、お大事のものだが心置なく遣ひねえ」左次「其樣に力を落すことはねへ。役廻は助高屋だぜ。六部の出立でチヤアン〳〵と鉦鉦をならして來かゝり、切結ぶ中へ割つて入り、しばらく錫杖であしらひながら、某一言いふことあ

り、しばらく〳〵と惣方引分けて笈を下し、中から酒肴三味線を出しておれに渡すと、ギヤチヤヂヤン〳〵ト彈出すから、出目公と圖武公が、ヱヽ引山できつころがした松の木根ツ子の樣でもと唄ふ。安波公が例の踊、跡の者も見物に交つて居て、直にそこへ踊込んで大酒盛となるといふやつだ」野呂「やきてれつ〳〵妙計々々。サア〳〵ちつとも早く押しださう」アバ「そんならマア衣裳や道具を早くくめんしよう」左「眼公てへぎながら例の所へ行つて借りて來て下ッし。是は茶番一式の損料屋なり。入用は今いふ通りだ。順禮の杖のも大小も金貝がいゝぜ。しかし笈摺の背中に、千秋萬歲や大入叶では中だノ。正うつしで行きてへもんだ」卒「それにはいゝさんだんが有りやす。どうせ六部の笈も、本ものでなければ諸色が這入るめへから、山崎町へいつて、六部の形とおひずるは借りてこよう」是も又かの地に出來合の順禮六部の損料有り。左「そんならさうしてくんねへ。アヽしかしじよむだらうナ」卒「じよむも坂東も一所に書いて有るぜ」左「ヱヽわるくしやれずと、千手觀音の居さうもねへのを、早く借りて來さつし」ト卒八、眼七をせき立ておひ出し、左「サアそれできまつたが、なんぼ出たらめでも、ちつとはきつかけを付けて置かう」ト是より稽古にかゝる。左「サア出目公とおれは、程のいゝ所に居る。そこでアバ公も同じく、是サマア立たッせへナ。さう〳〵、そこいらがいゝ。そこでキッカケは圖武が山の下で鉦を叩く音を合圖に、たば公がアバ公をついて、順禮殿火を一ッ、トそばへ

深編笠といふこしらへだ」アバ「ムヽいよ〳〵」左「おれと出目助が順禮のすがたで、そこ爰と花を見ながらたばこを呑んで居る所へ、安波公がのさり〳〵と出かけて來る。これも同じくあちこちと見あるき、成丈人の目にかゝるやうにして、程能き所で順禮にたばこの火をかりようと、すひつけにかゝる笠の中を覗いて、ヤアめづらしや鳥目百見、年來尋ぬる親の敵、ト是から浮木の龜や優曇華のはな、なんでも彥兵衛で、（彥兵衛とは御ぞんじの通言かけあひの事）おもいれならべ立てよう。安波公も出たらめのせりふで、トヾ不便ながらも反討だと、編笠をとつて捨て、金貝張をスラリトぬく。おれと出目公は杖に仕込んだやつをぬいて、先達茶ばんに仕組んだ立合になりはどうだ」卒「コリヤアがうせへだ。飛鳥山は此友達ばかりで、花見をする樣だらう。いよわへ〳〵」左「そこで亦眼のしよぼ〳〵した鼻のひらつたい、齒の黃ろい、水ッぱなが鼻のまんなかに絕えずぶらついてるといふ面がほしいな。ヲイ〳〵圖武六、ちよつとおめにかゝらう」ヅブ「ハイ〳〵大體は私が似よりかネ」卒八「似寄どころか南瓜を二ッに割らずに其儘だ」ヅブ「チヨツいめへましい、爲方がねへ此節だ、この首で間に合ひさうなら、お大事のものだが心置なく遣ひねえ」左次「其樣に力を落すことはねへ。役廻は助高屋だぜ。六部の出立でチヤアン〳〵と鉦鉦をならして來かゝり、切結ぶ中へ割つて入り、しばらく錫杖であしらひながら、某一言いふことあ

イ引。ヒイヒイテン〱ツク〱〱〱〱ツヽテン〱」左「ハヽヽヽ奇妙々々。これで群勢の著到はすんだ。コウ寝ぼけ手合は、早く顔でも洗つて飯でも食つし。そこで圖武六かういふ案だ」ヲ「ヲツト承知々々。先刻此所へ來かゝつてずつと這入るも智恵がねへから、何ぞいち番かつがうと思つて、そつと障子の蔭に身をひそめ、工夫の始終不殘聞き、直に案は定けておいた」アバ「イヤハヤどいつもす早い奴等だ。サア〱此方は大變だ。さつぱり心當りはねへぜ」左「何サさううろたへることもねへ。今日ツから始めて一日に一幕づつだから、その中出來た者から先へやらかすがいゝ。マア今日の初日はだれがする」どん「ものごとすべて手始が大事だ。庸意なものにはさせられめへ。まづさしづめおれだらう」のろ「ナンノまたさし出るヨ。先日の茶番の手なみでどうして初日が勤るものか。マア〱初日はおれだ〱」左「熊谷平山待給へ。爭ふうちに日がたける、中をとつて亭主役におれが始めよう」出め「それがいゝ〱」どん「シテ其趣向はなんと〱」左「マヅ筋は敵討だが、コウト役割は色の黒いでく〱と肥滿つた、眼の大イ髭むしやくしやの悪々しいといふ面がほしい。ムヽ安波公やつてくだつし立敵だぜ」アバ「立敵はいゝが、顔の容色があつらへ通ぢやアうれしくもねへ」ガン「ヲツト狂言方の割つけだ、面不足をいふめヱ」左「ソコデ著つけは黒羽二重の紋付に、萠黄博多の帶、朱鞘の大小、中ぬき草履、

左「そんならかうしよう。他の仕た通もされめへから、身分々々に茶番の心もちで、一趣向づつ案けて、自分の書いた正本なら、其狂言のたてものにするがいゝ」アバ「ムヽそれで役不足がなくつていゝ。それにしても此顔ばかりではさびしい。野呂松や出目助はどうしたらう」卒「さうよ、けふは大分遅い出仕だの」「なァにみんな昨夜から二階に行きだふれだ。ホンニ眼公モウおこさつし午刻過だ」ガン「さうだつけ。一ばんおびやかしてくれべヱ」トしゆろぼうきの柄にて二階をとん〳〵とつきながら、「ヲイみんなが蘇生らねへか、最う日が暮れるは」二階にて八人藝の三すけが聲色で、どん七「ハイ〳〵どうもハア病氣あんべヱで、疝氣のせへかどたまがやめて起きられましねへ」左「其筈だァ昨夜はひどく食つたぜ。ヲイ他の倒者はどうだ」二階にていまひとりののろ松といふ男、是も八人藝の小僧の聲色、のろ「ハイ私はヱヽ引疝氣のやうな色氣のない病はおこりませんが、ヱヽ引血の道のせへかヱヽどうもヱヽ眼が覺めませんでこまります」卒「コウコウ馬鹿ァいはずと早くおきさつし。急に相談が出來た」ガン「ナニそんなあま口でいくのぢやアねへ。皆々歩行ねへひつぱがう」ト眼七、卒八、安波太郎三人二階へかけあがり、夜具を殘らず引きまくれば、漸起きて下へ來る。左「トキニ斯う言ふ相談だ。此連中で花見茶番と號して」出目助は半分聞かず、出め「ヲツと皆迄宣ふな。最前より二階において、やうすは不殘承り」今一人どん七、どん「とくより趣向致してござる」のろ「いで鎌倉へといふときに、われらが智計をほどこさば」どん「せかいの女はみなごろし」表のかたより頭武六ト云ふ男、ツブ六「呑友公御入

黒山のやうに集つて見て居るけれど、誰一人取支ゆる者もねへ。おれもあんまりかはいさうだから、中へはいつてやう〳〵兩方へ引分けてやつたら、ぶつた奴等はとなりの茶見世へはいる。色男は其娘の所へ這入る。其處で娘も氣の毒がつて、いろ〳〵介抱して、お髪をマアかりにわたくしでも結うて上げませうと、鏡臺を出して結にかゝると、聞きねへ。隣に居るぶつたやつらがいつの間にか調子をあはせてチヤン。歌 櫛笥鏡臺取揃へ、ト長五郎髪すきのめりやすよ。そこで合方になると、聞きねへ。その野郎が梅幸の身振聲色で、娘をあいてにいろ〳〵思入ありよ。日暮里中の人をすつぱりひつかつついだが、何とおもしろくかついだぢやアねへか」アバ「しかし重かつたらう、山ぐるみかついぢやア」卒「いんにやヨ、うまくかいたぢやアねへか」左「ムヽこりやアいゝ。それとも古いか知らねへがおもしれへ〳〵」ガン「コウ〳〵なんと此連中で出かけやうぢやアねへか。御前達がぶちのめし人で、おれが髪すきよ。おらア亦成田屋で遣るべヱ」ト團十郎のこわ色になり、「不思議なえんでいかいおせわに」左「ヱヽよしてくれヱ。さう思つたばかりで胸がわるくなつた」卒「其顔で髪梳どころかかみつきさうだア。馬士唄のうしろで瀧返のかみすきがいゝよ」ガン「ヘンそねめ〳〵。ノウ安波公催さうぢやアねへか」アバ「その瀧返の方なら御多分には洩れますめヱ」ガン「チヨツいめへましい奴等だ。とかくおれがいふ事は取用ひねへ」

へ、まじめだと思つた」アバ「ナニさすがのおれ、ヘン小刀のまがりが聞いて呆れらア」左「東西東西、フウどういふ趣向だ」卒「聞きねへ、うまくすぢを書アがつた」左「はてな」卒「聞きねへ。すつぱりとかつがれたぜ。寔ににくゝしやアがつた、聞きねへ」左「フウはてな」卒「ヤこてヱられねへ」アバ「ヱヽこぢれつてヱどうしたのだ。手前ばかりのみこんで、何だかわけがわからねへ」卒「いんにやヨ聞きねへ」アバ「聞いて居るヨ。ひとつの咄に聞きねへ〱が百五六十出らア、はやく申しあげろ」卒「そんならかいつまんで噺さう。まづ本舞臺三間の間いちめんに櫻の立木、上の方に葭簀ばりの茶見勢』「コレサつまんで咄すに其樣なことはいらねへはな」卒「イヤサ聞きねへ。其出茶屋がすぢだはな。そこの娘が十七ばかりで岩井の半四郎、瀬川の菊之丞、げいは大吉粂三のおちやつぴいに、生姜二片入煎方つねのごとしといふ美女だらう。聞きねへ。その亦腰かけに居た野郎が二十才ばかりで、いづれ金滿の息子株、色のしろいいやみなしの梅幸、團十郎、持物衣裳つきは御推量ス」ガン「モシ是には生姜ははいりませんか」左「マタ〱ひかへろ〱」卒「ソコでその客が暫く休んで、茶代を置いて表へ出合がしら、でんぼうらしいやつが二人、門口で突當つたトいふがいひがかりで喧嘩よ。それから聞きねへ、其色男をノ聞きねへ、むごくぶちのめすもんだから、きゝねへ」アバ「イヽサ聞いてるヨ」卒「あすこのことだから人は

言出づるや、つぎの段に分説くるをまつて知れ」ァバ「こやつ何事をかいふ、ト首をかたぶけ手をこまぬき、やをら左右の耳をすまして、聞いた所が河童の屁だらう」卒「フン引かたことをならべ立てるは。コウそして、利多ふうにしやべるが、河童の屁といふはどういふわけか知りはしめへ。あんまり文盲で不便だから、友達のなさけに教へてつかはさう。マヅ河童といふやつは河にすむものだが、水の中で屁をひつたら、ぶく〳〵と音のするはずだぜ。ソレ柳樽に、

すかしても音のするのは河童の屁

といふ句があるは。それを亦たはいのない譬にいふわけがわかるめへ。これ則ちいひあやまつて居るからのことだ。子曰く、こつぱの火と論語にもあるは。夫でたはいのない筋がわかるだらう。アヽ歎かはしいことだ、チツト學問をするがいゝ。一六の日には在宿いたすから、きけんを聞きながら來さつし」ァバ「ムヽ二七、三八、四九、五十、日濟貸で押分けられめヱ。アヽなる程屁の講釋は感心だ。おめへは博識ではねへ物ひりだらう」左次郎「コウ〳〵そりやアいゝが、卒公日ぐらしはどうしたのだ」ァバ「ナニ屁でまぎらしたから屁ぐらしだらう」左「どうも此奴が此通こしををるから噺ができねへ」卒「安波公チツトだまらッせへ。ア、やかましい口だ」卒「イヤサ聞きねへ、奇妙な趣向で花見に來たが、皆一ぱいかつがれたのよ。さすがのおれせ

た」あるじ左次郎「ハヽヽ、べらぼうめヱ、誰も來ヤアしねへ、返討をくらつたナ」眼七傍より口を出す、ガン「なんぢ等ごとき不才をもつて孔明を計ふとは、コレよく聞かッし、天へ向つてつばを吐けばかへつて我身へかゝる道理だ」アバ「イヤごたいそうなことを申上げるハ。おれがあんまり聲を拵過ぎたからわるかつた」トいふうち、また表のかたより卒八といふ友達、此家をのぞきながら、卒「ヲイ安波公居るか〳〵、ちよつと來て見さつし、美女々々」アバ「女か〳〵」ト、うろたへてかけ出すひやうしに、くつぬぎの下駄をふみかへし、足をいため、顔をしかめながら障子をあけて、「どれ〳〵」卒八ずつとはいつて上へあがり、卒「あとを引寄せてくだつし」アバ「女はどこへ來た」卒「あけて這入るが面倒だから、足下にちよつと木戸番を賴んだのよ。モウいゝから表をしめて此方へ來さつし」アバ「このべらばア」トまへおひ來りじきくちはせる、卒「コレよせヱ〳〵。あんまりこすりつくな、木虱がたからア」アバ「チヤなほ〳〵不屆なことを言上するナ」卒「ナンノ又その顏で、女ざんまいをするからのこつたア」左次郎「それ見さつし、他を呪はゞ穴二ツといふは。最初おれをかつがうとして眼公にかつがれて、卒八先生にたてつけられるも、智惠のねへ理窟だハヽヽ、」ガン「ナニ安波公なんぞが呪ふには穴一ッで澤山だ。自分而已おちるばかりだ」アバ「いめヱましい、足をひどくぶつた、アヽ痛へ〳〵」卒「イヤかつぐといへば昨日日暮里へ行きやした。ところが聞きねへ」アバ「ナゼかつぐといへばひぐらしへ行くのだらう」卒「ナンノ又のたり出るヨ。燕雀なんぞ大鵬の心をしらん。此一回何等のことを

花暦八笑人

江戸　瀧亭鯉丈作

春の部　壹之巻

福壽草の咲初めしより、四季の花、盛たがへぬ時津風、靜けき御代の春なれや。遲日をおくる日暮里も、けふに飛鳥の人の山、茶瓶の行列三重も、壹升德利のテンツヽも、彈けや謠への芝疊、浮世の塵の玉はゞき、はらふ片手はをりづめの、勝負あらそふ拳角力、幕の內外の合せもの、疎き親しきへだてなく、チョットおあひのお手もとも、はゞかりながら櫻哉、梢にむすぶ短尺も、思ひ〳〵の花見月、爰に下谷のかたほとり、何屋某が總領に、甚六ならで左次郎とて、生れついての呑太郎、年中續く夕部けに、うくる家業もうるさしと、弟右之助に相續させ、おのれは隱居の身となりて、心のまゝに不忍の、池のほとりに寓居、同氣もとむる呑會所。（おもての方よりしわがれたる聲で、）「チト御めん下りまし。あなたに安波太郎樣はお出なさりませんか」（此家にいてつきの居候眼七、）眼「ハイ今も內から呼に來ましたが、まだこちらへは見えません」（安波太郎は表を明けてずつとはいり、）アバ「コウ〳〵內から誰が來

春夏秋冬
八笑人遊行日
庚辰年ハ 飛鳥山の花の雲
辛巳年ハ 角田川のまつ花
壬午年ハ 高田の里の螢かり
癸未年ハ 両國川の涼ふね
甲申年ハ 百花園の秋七草
乙酉年ハ 海晏寺の楓かり
戊戌年ハ 青樓の夜の雪
己亥年ハ 浅草寺の年の市
右追々出版

伊都茂鹿文之滑稽　瀧亭鯉丈編

文政三年かのえたつ乃新編目録　嘉様加喜評　凡二冊五十九丁

大せいりけのちこと

大そうだんうちの方

大らんおやのあご

としぐあとのるす

たつミのろのこうずやス　全部

とけうりゝねるす

にいむふしのこと

たいへんぐけのちこと

ぞうろうんこちりのちこと

ぐうきこひとのおやまよ

出法　春八ツ　秋八月

八ツ山の
狸ならねど
きつねにはまる
花のかげ歩行し
日ぐらしの里

橋蘆文

日ぐらしの
里より来るは
たんぽゝ菜や
花より外よ
旅ばかりなし

一抔堂
鳴保

日暮の里の花見の帰るさは
なかしこして生をなをるかはりぬ

琴通舎

花暦八笑人序

暦を披いて八將神を見るは、吉方を知つて萬事を行はんが爲なり。八笑人を開いて花暦をしるは、阿房を見て戯作に笑はんが爲なり。夫は惠方の年德神、是は阿房の八笑人、惠方果報は寢て待つとも、ねにはかへらぬ花の下臥、まづひらきたる吸筒の、口に出るまゝ洒落を吐きたる花見の連の一群が、現ぬかして戯るゝさまを觀るが如くに書綴りしは、友人瀧亭鯉丈なり。そもそも根岸の里の根なしごとをとり出して、谷中の谷の底をも穿つ歟。瀧の川には瀧飲の盃を傾け、不忍の池には高聲の調子をも忍ばず。飛鳥の山に今日を忘れて、日暮の里に晩鐘を恨む。何がし山に昔をしのびては、道灌山吹破れた衣など、實のなき地口を囀るたぐひも、皆是酒に戯れ花にうかるゝ人心にして、實にも愛たき春の夕暮、櫻は花の王子の神社、此方に向ひて畜類のむだ口をもとめず。小便無用花の山、萬よし野も小初瀨も、此大江戸の華にはしかず。またおほ江戸の花見の日記は、四季の名所の春にはしかずと、千社參りの豊丸正、矢立の筆を繼足して、櫻戸の端に記すことしかり。

琴通舍英賀

妙竹林話 七偏人 四四九——六六四

目録

花暦 八笑人 一——二五六

滑稽 和合人 二五七——四四八

破綻失策滑稽地口の類を反覆せるに過ぎざれども、これ實に燭火の將に滅せんとして暫く煌々たる光輝を擧ぐるが如く、德川滑稽文學の最後を飾れりし一個の美華として、之を後昆に傳ふるの價値なしとせず。金鵞は明治の初年に最も有名なりし滑稽雜誌團々珍聞の主要なる記者として、明治文學の開析に亦一臂の力を致せる文人也。

以上三種共に流布の版本に基き、會話に鉤識を施し、往々假名を漢字に改め、假名遣送假名を統一したる外、原本插畫の若干を併せて覆刻し、原本の細書を割註と爲す等、努めて原本の面影を失はざらん事を期したり。

本書の校訂には椿强祐氏の手を煩はしたる事最も多し。記して謝意を表す。

大正四年一月

校訂者　塚本哲三

諦を窺ひ、撃壌鼓腹の太平樂を聞かば、讀者思はず破顔一笑すると共に、言ひ難き興味の津々として句々の間に湧起するの概あるを覺えん。

物之本江戸作者部類、鯉丈を評して曰く、

此作者は何がし町の縫箔屋なりとぞ。實名未だ詳ならず。近頃多く中本を作るに、評判春水にまされりといへり。七八年前なりけん、全本一卷（八笑人といふもの）借覽せしに、又例の茶番狂言に似たるものにて新奇の趣向はなかりき。其が中に浮薄人二名、飛鳥山にてかたき討のまねをして人を驚かさんと示し合せて往きたる折、お國侍、其を實事と思ひて助太刀せんと云ふに困じたる打渾場（ちやりば）ありしのみ覺えたり。かばかりの才子にだに匱しきは戯作者は今船間にやあらんずらむ。

といへり。中らずといへども遠からざる言と稱すべく、到底鯉丈は滑稽作者として一九三馬の下風に立つを甘んずべきもの、其滑稽の仕組は多く「茶番狂言」の圏外に逸する能はず、趣向窮しては强ひて看客の笑を招かんとする執拗の態度に出づるもの、亦往々にしてこれあるを見る。

七偏人十五卷は梅亭金鵞の作、安政四年の上梓に係るものにして、其筋亦先人の結構せる

緒言

花暦八笑人、滑稽和合人、妙竹林話七偏人の三種を萃めて本集一卷を爲す。此三種は共に德川文學中、滑稽的中本の掉尾の代表作とも稱すべきもの也。

八笑人と和合人とは共に瀧亭鯉丈の作に係る。但八笑人の五編上は一筆菴主人、同中下の二卷は輿鳳亭枝成の補作する所、又和合人四編上中下の三卷は爲永春水の補ふ所也。鯉丈は下谷稻荷町に住して通稱を八藏といひ、櫛小間物の細工又は三味線引等を本業とせりしものといふ。大山道中栗毛駿馬(しりうま)を著して一九に模倣し、浮世床三篇又は人間萬事嘘計の後編を作りて三馬をも學びたれど、其特色の認むべきは元より本集收むる所の二編に在りて存せり。一九の膝栗毛と、三馬の浮世風呂浮世床と、而して鯉丈の此二篇とは、實に德川滑稽文學中の粹と稱すべく、その描く所の人物と事態と三者甚だしく相異るものあり、文に優劣の差ある事、又元より免かれざる所なりと雖も、而も其治平三百年の側面史たるに至りては卽ち一也。共に收めて本文庫中の一編をなせり。彼此相參看して我滑稽文學の妙

花暦八笑人　全

滑稽和合人　全

妙竹林話七偏人　全